中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書７

―松本市内　その４―

南　栗　遺　跡

本　文　編

１９９０

日本道路公団名古屋建設局
長　野　県　教　育　委　員　会
㈶長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書７

―松本市内　その４―

南　栗　遺　跡

本　文　編

１９９０

日本道路公団名古屋建設局
長　野　県　教　育　委　員　会
㈶長野県埋蔵文化財センター

遺跡遠景（東上空より）

瑞花双鳥八稜鏡（SK176出土）

白　磁

序

中央自動車道長野線塩尻北インターチェンジから豊科インターチェンジまでの約15.5kmが松本市内と南安曇郡豊科町内にかかり、12遺跡の発掘調査が昭和59年度から同62年度にかけて行なわれました。

この間の調査成果の概要については、現地説明会、出土遺物展示会、㈶長野県埋蔵文化財センター年報、埋文ニュース等によって公開してまいりましたが、その後の整理によって松本平の沖積地に広範にわたって立地した古代・中世集落の存在が明らかになってきております。この状況は12の遺跡に共通しており、一連のものとしてとらえようと意を注ぎました。

その中で、松本平を東西に分けて北流する奈良井川が、鎖川と合流する地点の北に位置する南栗遺跡は、７世紀末から中世にわたり、長期間居住域として利用された遺跡として注目されます。

検出された竪穴住居址322軒、掘立柱建物址103棟等多くの遺構の内、特に８世紀初の本遺跡開発初期に属する大型の掘立柱建物址が軒を連ねて建つ様相は周辺地域には認められず、有力な集団により占地されていたことを物語っており、南栗遺跡のみならず松本平における古代集落のありかたを知る上で貴重な事実が提示されました。それを裏付けるように、本県では二例目の『美濃国』刻印のある美濃須衛窯産須恵器杯蓋も検出され、多くの遺物からもそのことは立証されております。

最近は、大規模開発にかかわる遺跡の調査面積も増大し、今まで知り得なかった事実が次々と明らかにされつつありますが、そのような中で、集落内での竪穴住居址と掘立柱建物址の構成や、時期による変遷もとらえられており、古代集落の変遷や集落構造を知る上での貴重な遺跡として、この調査が果たした役割は大きいものといえます。

おわりに、本遺跡の調査開始より本書発刊に至るまで、記録保存の遂行に深いご理解とご協力をいただきました、日本道路公団名古屋建設局、同松本工事事務所、長野県高速道局、同松本高速道事務所、松本市、同教育委員会、松本平農業協同組合、地区被買収（者）組合等の関係諸機関、発掘現場や記録整理作業に従事された多くの皆さん、直接のご指導・ご助言を賜った、長野県教育委員会文化課、多くの研究者の方々、発掘調査を実施した(財)長野県埋蔵文化財センター職員に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成２年３月20日

㈶長野県埋蔵文化財センター
理事長　樋口　太郎

例　言

1　本書は、中央道長野線建設工事に係わる、松本市内・豊科町内12遺跡の内、南栗（みなみくり）遺跡（ＥＭＫ）の発掘調査報告書である。

2　本書は、松本市内に係る遺跡を、古代から中・近世にかけての一連の遺跡群としてとらえ発掘調査を実施した関係から、全遺跡に係わる内容と考察編を１冊に、各遺跡編を６冊に分けて編集し、以下の構成をとる。松本市内その１―総論、松本市内その２―神戸遺跡・上二子遺跡・中二子遺跡、松本市内その３―下神遺跡、松本市内その４―南栗遺跡、松本市内その５―北栗遺跡、松本市内その６―三の宮遺跡、松本市内その７・豊科町内―南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上手木戸遺跡。

3　本書で使用した航空写真は、建設省国土地理院の許可を得て複製したものである。

4　本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図（１：1000）、松本市発行の松本市都市計画図（１：2500）をもとに作成したほか、建設省国土地理院の許可を得て同院発行の２万５千分の１、５万分の１地形図を複製した。

5　本書及び松本市内・豊科町内遺跡報告書に掲載した、実測図の縮尺・表現方法、時代・時期区分、遺物写真縮尺、遺構・遺物の分類基準等は全分冊で統一してあり、その要点は凡例に示してある。

6　本書および松本市内・豊科町内遺跡報告書では、以下の遺構記号を使用している。竪穴住居址―SB、掘立柱建物址―ST、柵址―SA、溝址―SD、土坑―SK、井戸址―SE、鍛冶址―SI、水田址―SL、畑・畠址―SN、自然流路―NR、不明遺構―SX。

7　本書で報告する南栗遺跡については、既に、当埋文センター発行の『長野県埋蔵文化財ニュース』、『長野県埋蔵文化財センター年報』２・３に調査概要を報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本報告をもって最終的な報告とする。

8　発掘調査、報告書作成にあたり、次の各項目について、各氏に終始ご指導いただいた。
古代集落関係―小笠原好彦、中世集落関係―石井進、竪穴住居址・掘立柱建物址―宮本長二郎、プラントオパール分析―藤原宏志、水田土壌―梅村弘、古代集落・土器―吉岡康暢・桐原健、人骨・獣骨鑑定―西沢寿晃、地形形成―小林詢、炭化材鑑定・同定―中島豊志、灰釉陶器―斎藤孝正、美濃須衛窯産須恵器―渡辺博人、条里遺構―井原今朝男・小穴芳実・小穴喜一、輸入陶磁器―森田勉、古瀬戸系陶器―藤澤良祐、近世陶磁器―仲野泰裕、墨書土器・文字資料―平川南、漆・赤彩土器―永嶋正春、協力機関―松本市教育委員会・遺跡調査指導委員会（順不同、敬称略）。

9　発掘調査及び文責等本書刊行に関する分担は巻末に一括掲載してある。

10　参考文献は巻末に一括した。

11　本書で報告した各遺跡の記録及び出土遺物は（財）長野県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は、特に断りのある場合を除いて下記のように統一してある。

(1)　遺構実測図

本文挿図　竪穴住居址・掘立柱建物址　1:60　住居址内施設・墓址・土坑　1:40

図　　版　遺構図　1：120

(2)　遺物実測図等

土器・陶磁器　1：4　文字関係資料　1：3　墨書文字　1：2　土器拓影　1：3

金属製品　1：2　石器・石製品　1：4～2：3　銭貨拓影　2：3

(3)　遺物写真

土器・陶磁器　2：5　内耳鍋・常滑系甕　1：4　中世土器・陶磁器破片　1：2

鉄製品　1：2　銅製品・銭貨　1：1　石器･石製品　1：4～2：3

2　遺物実測図の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。

(1)　縄文・弥生土器、石器……1から通し番号

(2)　古代土器……各遺構毎の通し番号

(3)　中・近世土器・陶磁器……それぞれ1から通し番号

(4)　文字関係資料……1から通し番号

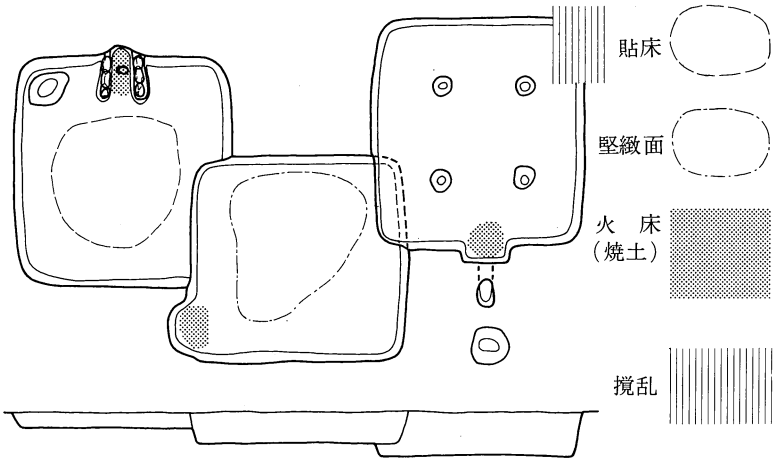
(5)　金属製品……1から通し番号

(6)　古代以降の石製品……1から通し番号

3　実測図中のスクリントーン等は以下の事項を表わしている。

(1)　遺構

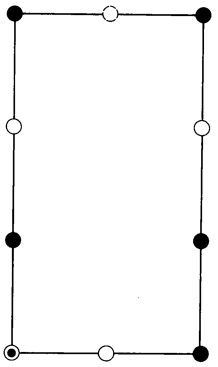
ア　竪穴住居址



イ　掘立柱建物址

本文中の掘立柱建物址模式図は、

約1：200で以下の事項を表わしている。



○ 柱穴のみ
● 柱痕跡
◉ 柱　根
○ 推　定

(2)　遺物

ア　古代土器

①　実測図の断面は、黒色土器・赤彩土器を含む土師器―白抜き、須恵器・施釉陶磁器―黒塗り、輸入陶磁器―スクリントーン　によって区別した。黒色処理・赤彩を施したものはその処理された器面の範囲に、漆・炭化物の付着については以下のスクリントーンにより表現してある。

黒色処理　赤　彩　漆　炭化物

②　施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

イ　中・近世土器・陶磁器

①　実測図の断面は、土器―白抜き、陶器―黒塗り、輸入陶磁器―スクリントーン　により区別してある。

②　国産陶磁器の釉の種類は以下の網目により区別してある。但し、灰釉は白抜きにした。

鉄釉　錆釉　呉須釉　長石釉

③　施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

ウ　金属製品

①　金属製品の形状はＸ線等の観察にもとづいており、錆・付着物によるふくらみは線の太さをとして表現してある。

②　断面図は、平面形状観察にさしさわりのない範囲で平面図に組み入れてある。

③　鉄製品、銅製品の断面図と、漆・炭化物の付着及び木質部を以下のスクリントーンで表現してある。

鉄製品　銅製品　漆　炭化物・木質部

エ　石器・石製品

①　打製石斧・磨製石斧等の磨耗範囲は　で示し、砥石の使用面は、断面図に|←　→|で示した。

オ　土製品

①　羽口のタール付着・ガラス状発泡範囲を　、被熱により変色した範囲を　で示した。

4　本書を含む松本市内・豊科町内遺跡報告書における遺構・遺物の分類、時期区分の要点は以下のように統一してあり、ここで扱っていないものについては、各報文中で説明してある。詳細は「松本市内その１」第３章に記述してある。

(1)　時代・時期区分

時代区分は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世、近・現代とし、古代を１～15期、中世を１期～２期に時期区分した。

(2)　遺構

ア　竪穴住居址

①　主軸は、カマドの中心を通る竪穴住居址の中軸線をあて、それと直交する中軸線を直交軸とした。但し、住居址の隅にカマドを有するものや、カマドの見られない住居址については、東西方向の中軸線を主軸とした。住居址の規模は主軸と直交軸方向での床面の差渡しで測り、床面積はその二者の積をあてた。

②　平面形は「方形」「隅丸方形」「長方形１」「隅丸長方形１」「長方形２」「隅丸長方形２」及び「不整形」に分けた。(隅丸)方形は主軸と直交軸方向の長さの差が10パーセント未満のもの、その差が10パーセント以上15パーセント未満のもの（隅丸）長方形１、15パーセント以上のもの（隅丸）長方形２とした。

③　古代住居址の規模については、時期別に、一辺の長さで以下のような６つの種類に分けた。

型 時期	小型	中型１	中型２	大型１	大型２	超大型
１～４期	３ｍ強	４ｍ強	５ｍ位	６ｍ位	７ｍ位	８ｍ以上
５～15期	３ｍ以下	３ｍ～４ｍ弱	４ｍ～５ｍ弱	５ｍ強	６ｍ位	７ｍ～８ｍ以上

イ　掘立柱建物址

①　棟方向は、南北棟、東西棟と記してあるが、不明なものについては南北棟として記した。

②　規模は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を基本として推定復元し、面積は両者の積により求めた。

③　柱間寸法は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を求め、最大と最小値について表示した。

④　掘り方では、平面形については方形、円形に分類し、「方」「円」と表記し、両者の混在するものは「方・円」とした。規模については、長軸の最大値と最小値を表示した。

(3)　遺物

ア　古代土器の器種分類について

①　次ページに示す古代土器器種分類表は、本報告書における土器の器種の呼称を示したものである。報告をおこなう土器のうち、土器の器種分類に当たって出土例が少なく、将来、周辺遺跡の資料をも含め、資料の増加を待って細別名を決定すべきと判断したものについては、ここではあえて細別を行わず、通例の呼称に従っている。

②　器種分類の詳細、器種内の法量等による細別については、松本市内その１、第３章で明らかにしている。

食器

土師器

杯D
杯E
杯F
椀
高杯
鉢
椀

杯A
杯C
椀
盤B
皿A
耳皿
鉢A

灰釉陶器

皿
段皿

黒色土器A

杯A
椀
皿B
蓋
鉢A
盤A
耳皿
稜皿

黒色土器B

椀
皿B
耳皿

赤彩土器

皿B

軟質須恵器

杯A

須恵器

杯蓋A
杯A
杯C
杯D
椀A
高杯
鉢A

椀蓋
杯蓋B
杯B
盤
皿B
皿A
鉢B
鉢C

煮炊具

土師器

甕A
甕C
甕F

甕B
甕D
甕G

小型甕A
小型甕B
小型甕C
小型甕D
甑A
甑B
甑C

羽釜A
羽釜B
甑D

須恵器

甑

0 40cm

貯蔵具

須恵器

長頸壺A

長頸壺B

長頸壺C

壺蓋A

短頸壺A

短頸壺B

短頸壺C

短頸壺D

水瓶

甕A

瑯

平瓶

甕C

甕D

甕B

甕E

横瓶

灰釉陶器

小瓶

平瓶

広口瓶

長頸壺

短頸壺

黒色土器B

長頸壺

短頸壺

0 40cm

	土師器		須恵器		黒色土嫉A	土師器	南栗遺跡の代表的遺構
	杯 F	杯D・E	杯 A	杯 A	杯 A	杯 A	
1							SB129 SB155
2		○					SB523 SB626
3							SB 37
4					○		SB175 SB184
5							SB 71 SB131
6							SB571
7							SB598 SB116
8							SB529 SB555
9							SB591 SB595
10							SB578 SB579
11							SB 92 SB199
12							SB192 SB209
13							SB117 SB168
14							SB 1 SB 2
15	0 20cm						SB136
備考	非ロクロ調整有稜杯	非ロクロ調整	ロクロ調整回転ヘラ切り	ロクロ調整回転糸切り 8期は軟質須恵器	ロクロ調整回転糸切り	ロクロ調整回転糸切り	縮尺 1：10

700
800
900
1000
1100

古代土器時期区分の大略

イ　中世土器・陶磁器の分類

神戸遺跡から上手木戸遺跡を通して、出土した土器・陶磁器の主な器種内の分類と消長表を以下に示した。詳細は総論編で明らかにしている。

①　土師器皿

〈手捏ね成形＝Ⅰ類〉

１Ａ１―口径約12.5cm以上、器高約2.5～3.5cmのもの。

２―口径約11.0～12.5cm未満、器高約2.0～3.5cmのもの。

３―口径約10.0～11.0cm未満、器高約2.5～3.5cmのもの。

Ｂ１―口径約9.0～11.0cm、器高約1.5～2.5cm未満のもの。

２―口径約9.0cm以下、器高約1.0～2.0cmのもの。

〈ロクロ成形＝Ⅱ類〉

ⅡＡ―法量が口径約10.0～12.0cm、器高約2.0cm以上のもの。

Ｂ―法量が口径約7.0～10.0cm未満、器高約1.0～2.5cmのもの。

②　内耳鍋

Ⅰ　―口縁部を強く「く」状に外反させるもの。

ⅡＡ―口縁部内面に明瞭な１条の工具痕を残すもの。

ⅡＢ―口縁部内面に明瞭な２条の工具痕を残すもの。

ⅡＣ―口縁部内面に明瞭な３条の工具痕を残すもの。

Ⅲ　―口縁部の断面がクランク状に外へ張り出すもの。

③　常滑系の壺・甕類

Ⅰ―頸部を緩く「く」状に反らせ、口縁端部を丸くおさめるもの。

Ⅱ―口縁部断面が「Ｌ」状の受口状を呈するもの。

Ⅲ―口縁部断面を「―」状あるいは「Ｎ」状をなし、縁帯が頸部に接着しないもの。

Ⅳ―口縁部断面を「Ｎ」状をなし、縁帯を頸部に接着させようとしているもの。

Ⅴ―口縁部断面を「Ｎ」状をなし、縁帯を頸部に完全に接着させているもの。

④　捏　鉢

Ⅰ―口縁端部をやや細く挽き出し、端部を面取りするもの。

Ⅱ―器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部外面を面取りして尖らせるもの。

Ⅲ―器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部を隅丸方形及び丸くまとめるもの。

Ⅳ―口縁端部から１～４cmくらい下をナデて器壁を薄くし、端部は丸くおさめているもの。

Ⅴ―口縁端部から１～４cmくらい下をナデて器壁を薄くし、端部を角状にして端部中央に浅い溝を入れるもの。

Ⅵ―口縁端部から１～４cmくらい下を強くナデて器壁を薄くし、端部を丸くおさめて中央に溝を入れるもの。

⑤　輸入陶磁器

横田賢次郎・森田勉氏の成果（1978）に負うところが大きく、特に青磁碗についてはそれに従って以下のように分類した。

Ａ―同安窯系碗Ⅰ類。　　Ｇ―龍泉窯系碗Ⅰ－６ａ・ｂ類。

Ｂ―同安窯系碗Ⅱ類。　　Ｈ―龍泉窯系碗Ⅲ－２類。

Ｃ―龍泉窯系碗Ⅰ－１・２・３類。　Ⅰ―龍泉窯系碗Ⅰ－１およびⅢ－１類。

Ｄ―龍泉窯系碗Ⅰ－４類。　　Ｊ―明代の所産で、外面上半に雷文施文のもの。

Ｅ―龍泉窯系碗Ⅰ－５ａ類。　　Ｋ―明代の所産で、外面に片切彫りによる細蓮弁文施文のもの。

Ｆ―龍泉窯系碗Ⅰ－５ｂ・ｃ類。　Ｌ―明代の所産で、外面に線刻によっての細蓮弁文を施すもの。

⑥　古瀬戸系陶器と大窯製品の分類は、藤澤良祐氏（1982･1984、1986）に従い、山茶碗の分類は、斎藤孝正氏（1988）・田口昭二氏（1983）による。

各形態　消長表

	古代	中　世　1　期			中　世　2　期		近世
年　代	12　C	13　C		14　C	15　C	16　C	17　C
土師器 皿	ⅠA1·2？ Ⅰ　B1？ ⅠB2	ⅠA3		ⅡA ⅡA		？ ？	
内耳鍋				Ⅰ	ⅡC ⅡB	Ⅲ	
捏　鉢	Ⅰ	Ⅱ Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ Ⅵ			
常滑系 甕	Ⅰ Ⅱ		Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ		

本　文　目　次

巻頭図版　遺跡遠景・ＳＫ176出土瑞花双鳥八稜鏡・白磁
序
例言
凡例

第１章　遺跡の概観と調査の概要……1
第１節　遺跡の概観……1
第２節　調査の概要……2
第３節　調査の方法……4
第４節　調査の経過……4
第５節　基本層序と微地形……5
1　基本層序……5
2　遺構掘り込み面と微地形……8

第２章　遺　　構……9
第１節　縄文時代の遺構……9
第２節　古代の遺構……11
1　竪穴住居址……11
2　掘立柱建物址……115
3　溝址……152
4　柵址……154
5　墓址……157
6　土坑……161
7　自然流路……167
第３節　中世の遺構……169
1　竪穴住居址……169
2　掘立柱建物址……171
3　溝址……175
4　柵址……180
5　墓址……180
6　土坑……183
7　自然流路……193
第４節　近世以降の遺構……194
1　水田址……194

第３章　遺　　物……196
第１節　縄文・弥生時代の遺物……196
1　縄文時代の土器……196
2　縄文時代の石器……196
3　弥生時代の土器……196
4　弥生時代の石器……197
第２節　古代の遺物……197
1　古代の土器……197
(1)　古代土器の概観　(2)　遺構出土の土器　(3)　その他の土器
2　文字関係資料……249

(1) 墨書土器　(2) 刻書土器　(3) 陶硯　(4) 転用硯
3 金属製品 ……253
(1) 鉄製品・鉄滓　(2) 銅製品・銅滓
4 石製品 ……257
5 土製品 ……258
6 漆製品 ……259
7 自然遺体 ……259
第3節 中世の遺物 ……260
1 土器・陶磁器 ……260
(1) 概観　(2) SB631　(3) その他の遺物
2 金属製品・銭貨 ……261
3 石製品 ……262
第4節 近世の遺物 ……262
1 土器・陶磁器 ……262
(1) 概観　(2) 土器　(3) 陶器　(4) 磁器
2 金属製品・銭貨
第4章 成果と課題 ……264
第1節 遺構の分析 ……264
1 竪穴住居址の分析 ……264
(1) 規模（床面積）について ……264
(2) 形状について ……267
(3) 主軸について ……267
(4) 壁高について ……270
(5) カマドについて　ア カマドの位置　イ カマドの形態変化 ……271
(6) 居住空間の利用について ……277
2 掘立柱建物址について ……280
(1) 主軸について ……281
(2) 規模について ……282
(3) 掘り方について ……286
(4) 掘立柱建物址の機能について ……286
第2節 遺物の分析 ……287
1 金属製品の出土状況について ……287
2 石製品について ……290
3 文字関係資料について ……292
(1) 墨書土器 ……292
(2) 硯 ……293
(3) 墨書土器をめぐって ……294
第3節 遺構配置をめぐる二、三の問題について ……295
1 古代の住居小群の抽出とその変遷 ……295
(1) 1期の住居小群 ……295
(2) 2・3期の住居小群 ……297
(3) 4・5期の住居小群 ……300
(4) 7～9期の住居小群 ……303
(5) 11期の住居小群 ……306
2 中世遺構の分布と現景観 ……309
第4節 集落の変遷 ……311
第5章 結　語 ……329
参考文献一覧
発掘調査及び執筆等の分担一覧

付表

挿　図　目　次

第１図　地形及び測量割付図
第２図　地区割付設定図
第３図　地区呼称及び土層概念図
第４図　縄文時代土層柱状図
第５図　縄文時代遺構分布及び遺構図
第６図　SB１・２実測図
第７図　SB７実測図
第８図　SB25実測図
第９図　SB26カマド実測図
第10図　SB31実測図
第11図　SB37実測図
第12図　SB38実測図
第13図　SB49カマド実測図
第14図　SB55実測図
第15図　SB57カマド実測図
第16図　SB58実測図
第17図　SB68実測図
第18図　SB71実測図
第19図　SB72カマド実測図
第20図　SB73カマド実測図
第21図　SB80実測図
第22図　SB90実測図
第23図　SB91実測図・カマド実測図
第24図　SB93カマド実測図
第25図　SB95カマド実測図
第26図　SB98実測図
第27図　SB99カマド実測図
第28図　SB100実測図
第29図　SB114カマド実測図
第30図　SB116実測図
第31図　SB128カマド実測図
第32図　SB129実測図
第33図　SB134カマド実測図
第34図　SB137カマド実測図
第35図　SB142実測図
第36図　SB145実測図
第37図　SB147実測図
第38図　SB149実測図
第39図　SB153実測図・カマド実測図
第40図　SB155実測図・カマド実測図
第41図　SB171実測図
第42図　SB172カマド実測図
第43図　SB175実測図（１）
第44図　SB175実測図（２）
第45図　SB176実測図・カマド実測図
第46図　SB178精錬址実測図
第47図　SB184実測図
第48図　SB187実測図
第49図　SB192実測図
第50図　SB201カマド実測図
第51図　SB216カマド実測図
第52図　SB522・523実測図
第53図　SB526実測図
第54図　SB537実測図
第55図　SB541カマド実測図
第56図　SB544・545カマド実測図
第57図　SB550実測図
第58図　SB551実測図
第59図　SB555実測図（１）
第60図　SB555実測図（２）・カマド実測図
第61図　SB558・559実測図
第62図　SB564カマド実測図
第63図　SB573・574カマド実測図
第64図　SB575実測図
第65図　SB576・577実測図
第66図　SB582実測図
第67図　SB593実測図
第68図　SB597カマド実測図
第69図　SB598実測図
第70図　SB625・626実測図
第71図　SB637実測図
第72図　ST11実測図
第73図　ST13実測図
第74図　ST14・16実測図
第75図　ST19実測図
第76図　ST20実測図
第77図　ST25実測図
第78図　ST29・32実測図
第79図　ST35実測図
第80図　ST42実測図
第81図　ST51実測図
第82図　ST523実測図
第83図　ST525・526実測図
第84図　ST530実測図
第85図　ST534実測図
第86図　ST538実測図

第87図　ST547・548実測図
第88図　ST559実測図
第89図　ST560実測図
第90図　ST561・562実測図
第91図　ST566実測図
第92図　ST575・576実測図
第93図　SD27実測図
第94図　SA８・503実測図
第95図　SA506・508実測図
第96図　SK176・193実測図
第97図　SK194・200実測図
第98図　SK349・514・1069実測図
第99図　古代土坑長軸・短軸関係図
第100図　SK56・332・518・625実測図
第101図　SK339・348・350・522実測図
第102図　SK421・1071実測図
第103図　NR４・５実測図
第104図　SB631実測図
第105図　SB632・632実測図
第106図　ST33実測図
第107図　ST53実測図
第108図　SD６～９・12・13・15・16実測図
第109図　SD31実測図
第110図　SD524実測図
第111図　SK174・175・192・1015実測図
第112図　SK486実測図
第113図　中世土坑長軸・短軸関係図
第114図　SK347・559実測図
第115図　SK51～53・171・308実測図
第116図　SK331・390・392実測図
第117図　SK459・460・463・482・484・492実測図
第118図　SK551・629・652・1308実測図
第119図　SK371・372・552・553・561実測図
第120図　SK559・636実測図
第121図　SL１実測図
第122図　南栗遺跡の竪穴住居址出土土器の構成
第123図　SB２出土土器法量分布図
第124図　SB28出土土器法量分布図
第125図　SB31出土土器法量分布図
第126図　SB37出土土器法量分布図
第127図　SB46出土土器法量分布図
第128図　SB71出土土器法量分布図
第129図　SB92出土土器法量分布図
第130図　SB96出土土器法量分布図
第131図　SB117出土土器法量分布図
第132図　SB129出土土器法量分布図
第133図　SB131出土土器法量分布図
第134図　SB136出土土器法量分布図
第135図　SB143出土土器法量分布図
第136図　SB175出土土器法量分布図
第137図　SB176出土土器法量分布図
第138図　SB184出土土器法量分布図
第139図　SB192出土土器法量分布図
第140図　SB199出土土器法量分布図
第141図　SB209出土土器法量分布図
第142図　SB529出土土器法量分布図
第143図　SB537出土土器法量分布図
第144図　SB583出土土器法量分布図
第145図　SB591出土土器法量分布図
第146図　SB598出土土器法量分布図
第147図　SB616出土土器法量分布図
第148図　SB640出土土器法量分布図
第149図　墨書土器字句集成図
第150図　古代銅製品実測図
第151図　古代・中世遺構出土石錘長幅比グラフ
第152図　竪穴住居址規模時期別分布図
第153図　竪穴住居址形状時期別構成比率図
第154図　竪穴住居址主軸時期別分布図
第155図　竪穴住居址壁高時期別変化図
第156図　カマド位置時期別構成比率図
第157図　カマド形態時期別変遷図（１）
第158図　カマド形態時期別変遷図（２）
第159図　カマド形態時期別構成比率図
第160図　カマド煙道長・口高さ時期別変化図
第161図　竪穴住居址硬度計測定値模式図
第162図　掘立柱建物址主軸時期別分布図
第163図　掘立柱建物址規模別分布図
第164図　掘立柱建物址形態別構成図（１）
第165図　掘立柱建物址形態別構成図（２）
第166図　掘立柱建物址形態別柱間寸法分布図
第167図　鉄製品時期別平均出土数変遷図
第168図　鉄製品出土住居址時期別構成比率図
第169図　砥石時期別出土数変遷図
第170図　石錘出土遺構集成図
第171図　墨書土器出土数時期別変遷図
第172図　文字関係資料分布図
第173図　転用硯出土数時期別変遷図
第174図　１期遺構群分布図
第175図　１期竪穴住居址群別分布図
第176図　１期出土土器群別構成比率図
第177図　２・３期遺構群分布図
第178図　２・３期出土土器群別構成比率図
第179図　４・５期遺構群分布図
第180図　４期出土土器群別構成比率図

第181図　5期出土土器群別構成比率図
第182図　7～9期遺構群分布図
第183図　7～9期墨書土器・鉄製品出土分布図
第184図　8期出土土器群別構成比率図
第185図　11期遺構群分布図
第186図　中世遺構分布と現景観（1）
第187図　中世遺構分布と現景観（2）
第188図　集落景観変遷図（1）
第189図　集落景観変遷図（2）
第190図　集落景観変遷図（3）
第191図　集落景観変遷図（4）
第192図　集落景観変遷図（5）
第193図　集落景観変遷図（6）
第194図　集落景観変遷図（7）
第195図　集落景観変遷図（8）

挿　表　目　次

第1表　遺構番号一覧表
第2表　古代土坑の形態分類
第3表　中世土坑の形態分類
第4表　SB1出土土器の構成
第5表　SB2出土土器の構成
第6表　SB37出土土器の構成
第7表　SB55出土土器の構成
第8表　SB68出土土器の構成
第9表　SB79出土土器の構成
第10表　SB80出土土器の構成
第11表　SB90出土土器の構成
第12表　SB92出土土器の構成
第13表　SB116出土土器の構成
第14表　SB117出土土器の構成
第15表　SB129出土土器の構成
第16表　SB130出土土器の構成
第17表　SB131出土土器の構成
第18表　SB136出土土器の構成
第19表　SB142出土土器の構成
第20表　SB155出土土器の構成
第21表　SB156出土土器の構成
第22表　SB164出土土器の構成
第23表　SB168出土土器の構成
第24表　SB169出土土器の構成
第25表　SB175出土土器の構成
第26表　SB176出土土器の構成
第27表　SB183出土土器の構成
第28表　SB184出土土器の構成
第29表　SB192出土土器の構成
第30表　SB199出土土器の構成
第31表　SB209出土土器の構成
第32表　SB215出土土器の構成
第33表　SB523出土土器の構成
第34表　SB529出土土器の構成
第35表　SB537出土土器の構成
第36表　SB540出土土器の構成
第37表　SB550出土土器の構成
第38表　SB551出土土器の構成
第39表　SB555出土土器の構成
第40表　SB557出土土器の構成
第41表　SB558出土土器の構成
第42表　SB559出土土器の構成
第43表　SB591出土土器の構成
第44表　SB595出土土器の構成
第45表　SB598出土土器の構成
第46表　SB606出土土器の構成
第47表　SB626出土土器の構成
第48表　SB637出土土器の構成
第49表　SK176出土土器の構成
第50表　SK1069出土土器の構成
第51表　墨書土器種類別構成一覧表
第52表　竪穴住居址地区別一覧表
第53表　カマド位置時期別一覧表
第54表　掘立柱建物址地区別一覧表
第55表　掘立柱建物址形態別一覧表
第56表　住居址出土鉄製品・鉄滓時期別一覧表

付　表　目　次

付表1　古代・中世竪穴住居址一覧表
付表2　古代掘立柱建物址一覧表
付表3　中世掘立柱建物址一覧表
付表4　遺構別古代土器一覧表
付表5　文字関係資料一覧表（墨書土器・刻書土器）
付表6　文字関係資料一覧表（陶硯・転用硯）
付表7　金属製品一覧表
付表8　石製品一覧表
付表9　土製品一覧表
付表10　中世土器・陶磁器一覧表
付表11　近世土器・陶磁器一覧表

第１章　遺跡の概観と調査の概要

第１節　　遺跡の概観

南栗遺跡は長野県松本市大字島立字宮原・西原ほかに所在する。鎖川と奈良井川の合流点に近い、自然堤防の後背地に向いた緩斜面に遺跡は展開する。遺跡南端の標高は604.77ｍ、鎖川の河床とは約１ｍの比高差がある。また、遺跡北端の標高は601.60ｍで遺跡南端とは約３ｍの比高差を測り、南から北へ向かって緩やかに傾斜する。

遺跡の範囲は『新村島立条里遺構』と把握されている、南東隅に当たる範囲を通称「南栗遺跡」と呼称している。しかし、遺物の散布範囲は広範囲にわたり、北側に隣接する北栗遺跡へは遺構が切れ目なく展開するため本遺跡の範囲は明瞭でない。近年の調査状況から、奈良井川と鎖川の合流した西側を本遺跡の範囲としてこれに当て、西側の境界は県道高綱７号線付近までは延びると考えられる。

本遺跡は新村島立条里の景観の残る地域の南端に立地することから、かつて古代の条里的な遺構が展開する地域として推定されてきた。一方、耕作の際に栗林神社の西側で須恵器の大甕が三個体並んで出土した記録があるほかに、神社の東側や南東方向の宅地や字薬師堂付近から土師器の杯や須恵器が出土した記録があることから、集落址と関連した遺跡である可能性も指摘されてきていた。（東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会1973）。

近年、中央自動車道の建設に伴う路線周辺のほ場整備事業が開始され、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査が松本市教育委員会により当センターの調査に先立って行われた。以下、その概要を述べる。

調査は昭和58～60年度にかけて実施された。初年度、路線に隣接する西側を中心とした地点が調査され、奈良時代から中世にかけての遺構、遺物が多量に確認され、なかでも完形の佐波理鋺が出土したことから注目をあびた。59年度は奈良井川に近接する堀川と市道高綱線の間を調査し、古墳時代から中世の竪穴住居址、掘立柱建物址、竪穴状遺構、土坑など約700の遺構と帯金具、金環、漆紙の付着した須恵器などの特殊な遺物を含めた多量の遺物が出土した。さらに、堀川右岸、路線と奈良井川の中間に位置する地点約400㎡を対象とした60年度の調査ではやはり古墳時代から中世にかけての竪穴住居址20軒、掘立柱建物址11棟、土坑130基などの遺構と遺物が確認された。特に、この地点では中世の墓域が認められ、新しい知見を得るに至った。（松本市教育委員会1984,85,86）。

以上のように、かつて古代の計画開田がなされたと推定されていた当該地域には古墳時代から中世にかけての集落が存在するといった結果が得られたのである。当センターではこの成果に拠りながら、条里的地割りの残存する状況も鑑み、プラント・オパール分析を宮崎大学の藤原宏志氏に依頼し、昭60年6月21日から29日にかけて実施した。路線の中心杭に沿って100ｍおきにテスト・ピットを設定し、サンプリングを行ったところ、古代の集落遺跡ではないかとの同様の所見を得た。そのため条里との関連性は集落調査のなかから把握するという判断に立って調査課題を設定した。

まず、集落の展開と自然条件との関わりの把握を目的とした。次に集落の変遷を把握する上で、単位となった集団の抽出を試みることとした。これとは別に、個々の遺構についても埋没状況など、それぞれの課題を設けて調査に臨むこととした。

なお、調査前の遺跡周辺は水田地帯であった。

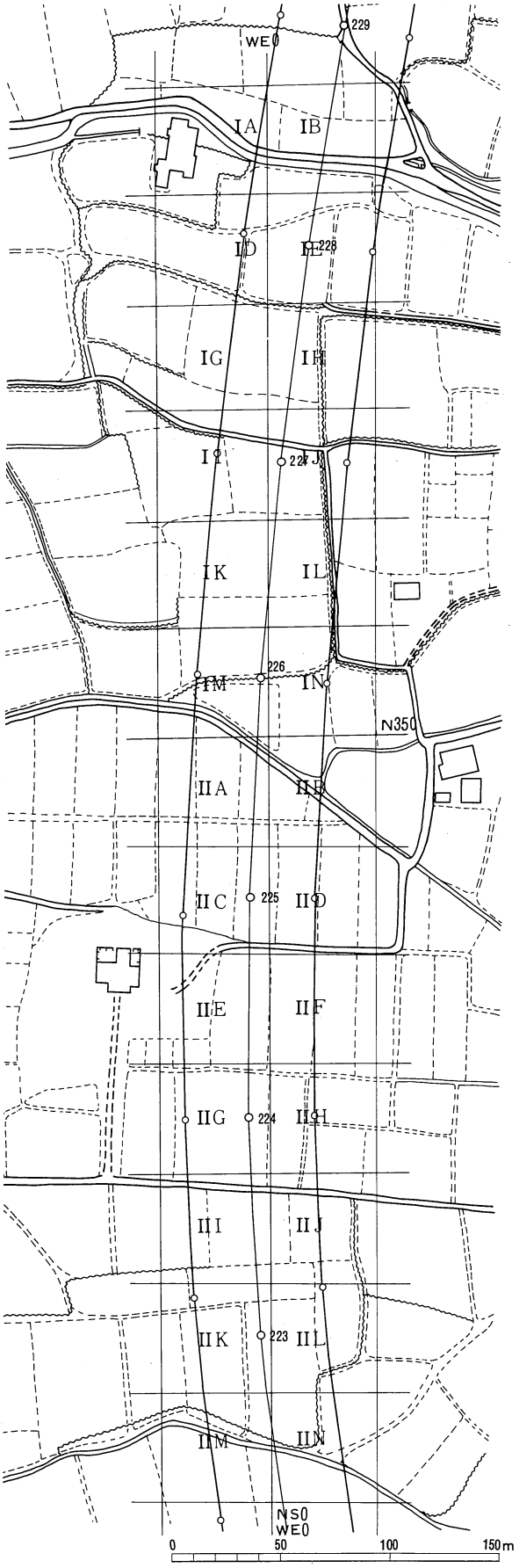
第２節　　調査の概要

中央道長野線は遺跡を南北方向に横切るため、鎖川に近い一部を除いた35,390㎡が調査対象となった。調査は昭和60年７月１日から開始され、冬期間の整理作業を挟んで昭和61年11月25日にかけての二年度にわたった。調査は工事と平行しながら進め、特にカルバート・ボックス設置地点の調査が緊急を要したことや、水路の付け替え、住宅の撤去などのために調査区をかなり細かく区切ることとなった。

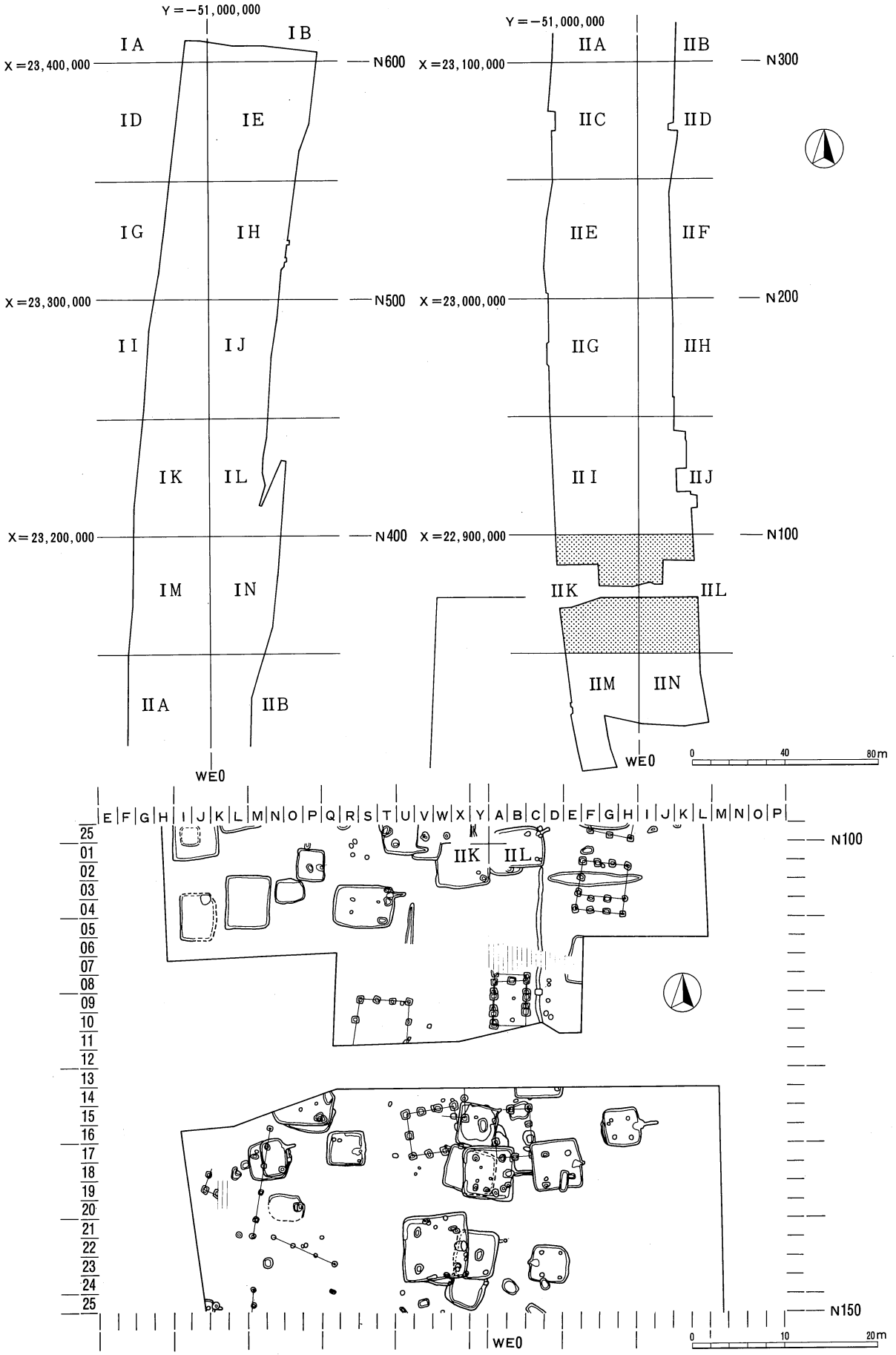
初年度の調査では南部南側、北部中央部、北端のボックスの設置される地点を対象に7月1日から12月27日にかけて行った。最初に南端から調査に入り、重機を導入しながらトレンチ調査を実施したところ、古代の遺構と遺物が確認されたことから全面調査に切り換えた。これ以降の調査も同様の手順で行った。堀川に接する地点は採土や耕作による削平・撹乱が激しく、遺構が一部しか残存していなかったが、そのほかは全面の調査となった。当初、４名の調査研究員で開始した調査は遺構が密に重複する状況から数回に分けて増員し、最終的には23名がこれに当たった。確認された遺構は古代から中世にかけてのもので、住居址136軒、掘立柱建物址25棟、ほかに土坑、溝址などがあり、松本平でも有数の大規模な遺跡になることが判明するに至った。また、縄文時代の遺構も堀川付近で１基確認した。

61年度は４月７日に調査を再開し、工事用道路の工事との関係から10月９日に一旦中断したが、11月17日に再開し、同月25日をもって全ての調査を終了した。６地区に分けた調査には17名の調査研究員が当たり、古代から中世の住居址200軒、掘立柱建物址80棟のほか、溝址、土坑などを確認し、前年度を合わせると当センターが調査した松本平の遺跡のなかでも最大規模の遺構数を有する遺跡となった。

整理作業は昭和61年１月から３月にかけてと同年10月から62年３月まで断続的に行った。遺物の水洗、注記は発掘作業と平行して行ったが、遺物量が多かったことから図面整理、所見整理と合わせて発掘作業終了



第１図　地形及び地区割付図（１：5000）


Y＝−51,000,000
IA
IB
X＝23,400,000
N600
ID
IE
IG
IH
X＝23,300,000
N500
II
IJ
IK
IL
X＝23,200,000
N400
IM
IN
IIA
IIB
WE0
Y＝−51,000,000
IIA
IIB
X＝23,100,000
N300
IIC
IID
IIE
IIF
X＝23,000,000
N200
IIG
IIH
II I
IIJ
X＝22,900,000
N100
IIK
IIL
IIM
IIN
WE0
0
40
80m
E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y A B C D E F G H I J K L M N O P
25 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
N100
IIK
IIL
N150
WE0
0
10
20m

第２図　地区割付設定図

後の冬期間に実施した。また、資料の公開は各年度に一回ずつの遺跡見学会と、松本市・塩尻市で遺物速報展を行い、多数の見学者が訪れた。なお、本報告書の刊行のための本格的な整理作業は昭和63年４月に開始し、本報告に至った。

第３節　　調査の方法

遺跡名称は長野県教育委員会作成の遺跡台帳の名称を冠したが、遺跡の範囲が不明瞭であるため隣接する北栗遺跡との境界は現地形の変化から便宜的に堀川とした。遺跡記号は「EMK」を使用したが、後述する大々地区を設定した関係からEMKⅠ、EMKⅡと付した。

調査は原則として分層発掘をしているが、工事工程による時間の制約から古代から中世にかけて二回、縄文面と合わせて三面の調査を実施した。なお、縄文面の調査は面的に捉えることが困難であったためトレンチ調査を併用して行っている。遺物の取り上げについては原則として中地区あるいは小地区別に取り上げた。遺構内の遺物は層位別に取り上げ、床面やカマドから出土した遺物はできる限り１点ごとに座標と標高を記録した。

測量は国土座標のメッシュを利用した。基準点は座標の分かっている日本道路公団工事用杭のSTA222＋60とSTA223＋20からX＝228,000,000、Y＝－51,000,000を求めそこを基準点とした。また、標高は工事用杭を使用した。地区の設定は当センターの地区割り付けの原則に従い、基準点から50ｍメッシュの大地区を設定し、さらにその中を８ｍメッシュの中地区、２ｍメッシュに区切った小地区(グリッド)に分けた。大地区には北からＡ、Ｂ、Ｃ…の名称を与え、Ａ～Ｙの25地区をまとめた地区を大々地区としているが、本遺跡の場合現地形の変化を重視し、X=23,150,000を境にⅠ、Ⅱ区の２つの大々地区を設定した。遺構番号は２つの大々地区で平行して調査を実施したため下表に掲げたように大々地区単位で通し番号を付けたが、検出時の判断によっているので最終的に変更した場合もあり、それらは欠番とした。

遺構の測量は簡易遣り方を組み、遺構図は20分の１の縮尺で図化したが、遺構内施設や特殊な遺構については10分の１で記録した。全体図の遺構分布図と遺構図の一部は業者委託の写真測量を併用した。

なお、本報告の記述をすすめる上で、地点を示す便宜的な呼称として、南部Ａ・Ｂ・Ｃ区、北部Ｄ・Ｅ区の５つの地区名を使用することにした（第３図上）。南部はEMKⅡ、北部はEMKⅠにあたり、さらに、自然流路の位置から知れる微地形によってそれぞれ区切ることにした。

	ＥＭＫⅠ(北部)	ＥＭＫⅡ(南部)
柵　　址(ＳＡ)	501～	１～
竪穴住居址(ＳＢ)	501～	１～
溝　　址(ＳＤ)	501	１～
火　床　址(ＳＦ)	501～	―
土　　坑(ＳＫ)	1001～	１～
水　田　址(ＳＬ)	―	１～
掘立柱建物址(ＳＴ)	501～	１～

第１表　遺構記号一覧表

第４節　　調査の経過

昭和60年度

６月21日　プラント・オパールの調査を実施する。住居址などの遺構確認。

７月１日　南端より重機による表土除去を開始。

７月９日　本格的な調査開始。

８月７日　南部の墓址から完形の八稜鏡が出土。奈良国立文化財研究所へ保存処理を依頼。

８月30日　南部の水路南側で写真測量を実施。住居址や掘立柱建物址など多数確認される。

９月26日　南部、栗林神社東側の検出作業を開始。

10月14日　堀川南側のカルバート・ボックス付設地点の調査を開始。撹乱が激しく調査難行する。

11月５日　北部中央の字薬師堂地籍のカルバート・ボックス地点の調査を開始。栗林神社東側でも多数の遺構が確認され、この時点で90軒以上の住居址を数える。

11月13日　ＮＨＫによる取材。

11月19日　国学院大学吉田恵二氏来所・指導を受ける。

11月20日　現場に霜柱が立ち始め、遺構を保護しつつ調査を継続する。

12月１日　現地説明会を実施。寒風のなか見学者55名が参加。

12月４日　栗林神社東側の調査終了に向け、調査研究員を増員し、これに20名があたる。

12月13日　薬師堂地籍のカルバート・ボックス地点の調査終了。

12月16日　堀川南側のカルバート・ボックス付設地点の調査終了

12月28日　60年度の現場作業を終了。

１月６日　整理作業開始、遺構図・所見の整理を行う。

２月25日　滋賀大学教授小笠原好彦氏来所。古代集落についての指導を受ける。

３月７日　次年度の調査に向けて準備開始。

昭和61年度

４月１日　表土除去開始。

４月７日　降雪のなか発会式、調査研究員16名、作業員100名の体制で本格的な調査を開始する。

４月21日　北部中央で大型の掘立柱建物址を多数確認。

５月１日　松本市開明小学校４年生160名が見学。

５月14日　飯山市農業試験場梅村弘氏来所、水田土壌についての指導を受ける。

５月21日　南部北側、北部北側地区の写真測量を実施。宮崎大学助教授藤原宏志氏来所。水田のプラント・オパール用資料をサンプリング。

５月31日　南部北側、北部中央の調査終了。

７月４日　北部北側の住居址密集区の調査終了。

７月20日　隣接遺跡とともに遺跡見学会実施、見学者300名が参加。

８月７日　工事用道路、水路下の調査を残し、南・北部境界区の調査終了。

８月12日　テレビ信州による取材。

８月30日　栗林神社北東の調査終了。

９月９日　南・北部境界区の工事用道路下の調査再開。

10月９日　南・北部境界区の水路下の調査を残し、工事用道路下調査終了。本格的な整理作業開始。

11月17日　南・北部境界区の水路下の調査を実施、これをもって本遺跡の調査をすべて終了する。

３月30日　図面・所見の整理終了。

昭和63年度～平成元年度

４月１日　遺物実測など報告書刊行にむけた整理作業開始。

第５節　　基本層序と微地形

１　基本層序

ＩＡ層　にぶい褐色含礫泥層。南栗遺跡でみられる自然堆積層の最上位にあり、全面に分布する。層厚は現耕作土を含めて30～40cmである。小礫および小礫大の風化礫を含み、シルト～細砂の基質から成る。南部では上・下部層が識別でき、下部層の方が含有礫・基質ともに粗粒化の傾向がみられる。北部では深部までの耕土化や削平により上・下部層の境界を明らかにできない。

ＩＣ層　褐色含礫泥層。ＩＤ層またはIIＡ層をおおい、ＩＡ層におおわれる。主として北部で発達し、層厚は20～40cmである。小礫や風化礫をわずかに含み、シルトの基質から成る。北部北側で上部で水田土壌が認められたが、削平などによりその範囲は確認できない。

本層は塊状構造が発達し、塊間に粘土が充塡することを特徴とする。隣接する北栗遺跡南部にも同層位に認められ、粒径組成は下神遺跡のＩＣ層に共通する。したがって、鎖川とその分流に沿う低地を経路に水を飽和した低密度の流体が到来して堆積したものと考えられる。

ＩＤ層　黄褐色～にぶい褐色含礫泥層。IIＡ層をおおい、ＩＣ層またはＩＡ層におおわれる。全体にわ

たって断続的に小分布し、層厚は一般に０～20cm、北部北側で30～40cmである。層相の側方変化が著しく、類似する特徴をもつユニットが小地域ごとに薄く不連続なまとまりをみせるため、いくつかの小規模なユニットから構成されると考えられる。以下、地区ごとに分けて記載する。

南部では褐色で中礫とシルトから成るユニット、黄褐色で小礫～極粗砂と細砂から成るユニット、黄褐色で礫をほとんど含まずシルトから成るユニットが識別され、南部北側を北東流する流路を中心に小凹地でみられる。

北部南側では黄褐色でほとんど礫を含まず、細砂～シルトから成るユニットが北、南側を分ける流路周辺を中心に観察される。

北部北側ではにぶい褐色で少量の小礫とシルトから成り、級化層理が発達するユニットが認められ、北栗遺跡とを分ける堀川に向けて粗粒化する傾向がある。

以上の各ユニットがそれぞれの地区の中小河川に由来するものと判断し、地区ごとのまとまりとして南部、北部南側、北側の本層を順次ＩＤａ層、ＩＤｂ層、ＩＤｃ層とする。

ⅡＡ層　黄褐色シルト層。ⅡＢ層をおおい、ＩＤ層またはＩＣ層・ＩＡ層におおわれる。全面に分布し、層厚は10～60cmで層厚変化の規則性はみられない。

上部は厚薄があるが、ほぼ全面にわたって腐植化している。小凸地が予想される地点や流路に近い地点では認められないが、これは浸食などにより失われたものと解釈する。腐食化のすすんだ上位をⅡA_1層、下位をⅡA_2層とした。

ⅡＢ層　黄褐色極細砂層。ⅡＣ層をおおい、ⅡＡ層におおわれる。全面に分布すると考えられ、層厚は20～40cmである。上限付近の腐食化はほとんどみられない。

いくつかの深堀りした地点での観察結果から推定すると層相の側方変化があり、北縁の堀川や南縁の鎖川に沿う一帯では全体に粗粒化し、ときに大まかなラミナが発達する箇所もみられる。中央には細粒化するが、下部へ粗粒となり、正級化構造を示す。

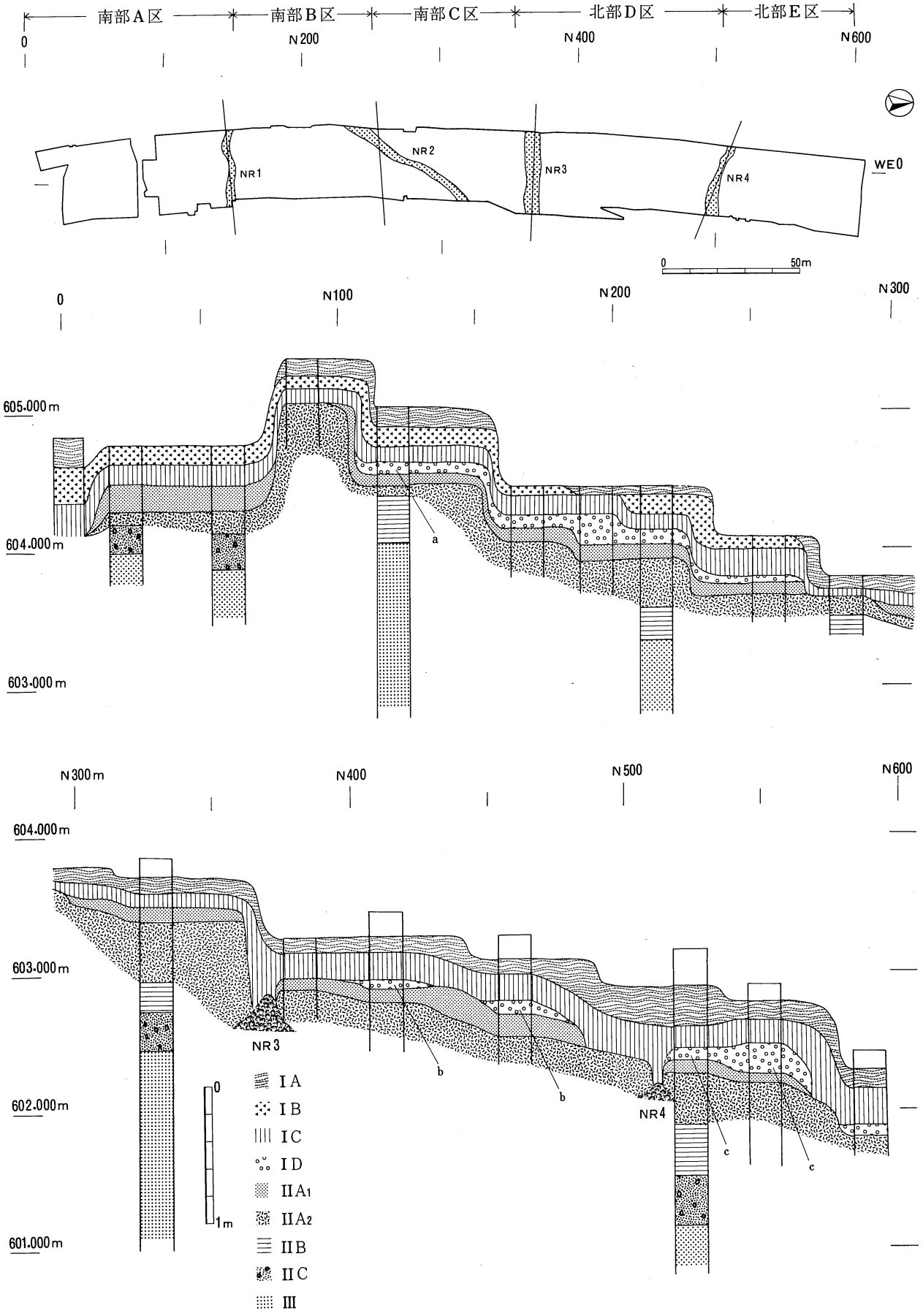
ⅡＣ層　黄褐色シルト層。Ⅲ層をおおい、ⅡＢ層におおわれる。南部北側以北に分布すると考えられ、層厚は20～40cmである。腐食土壌は観察されない。

粗粒なシルトに中央値を持つが淘汰良好（中央値4.4ϕ、集中度0.46）のため、しまりの良い粘土層のように見受けられる。上位のⅡＢ層に比べて層相がきわめて安定しており、全地点を通して同様の相で観察される。また、しばしば下部に20～30cm厚の礫層（ⅡＦ層）をレンズ状に挟むが、これらとの境界はシャープである。

Ⅲ層　オリーブ色または褐色シルト層。Ⅳ層をおおい、ⅡＣ層またはⅡＢ層におおわれるオリーブ色と褐色のシルト層の互層で、本層が観察される神戸・上二子・中二子・下神・南栗・北栗の各遺跡中で最も発達が著しく、層厚は300＋cmである。

最上部は上方から下方へ灰赤色～オリーブ色へ移化し、しばしば風化礫を含む小礫を混入する。以下、河原砂や礫の薄層（ⅢＦ層）をレンズ状に挟みながらやや粗粒の褐色部と細粒のオリーブ色部が２回繰り返す。下位の褐色部の上面より遺物が出土したため、上位より灰赤色～オリーブ色部をⅢＡ層、褐色部をⅢＢ層、オリーブ色部をⅢＣ層、下位の褐色部をⅢＤ層、最下部のオリーブ色部をⅢＥ層とした。

Ⅳ層　礫層。本遺跡の基底を構成し、地表下４～５ｍまたはそれ以深で出現する。部分の観察で礫種・ファブリック・上面の地形など明かではないが、大～中礫から成り分級の程度が悪い層相、Ⅲ層より下位の層準から勘案すると、神戸遺跡から徐々に上面の高度を下げてきた基底礫層と考えて問題はなかろう。とすると、Ⅳ層が奈良井川による扇状地の主体であり、Ⅲ層以上が三角洲堆積物で言う頂置層に当たると考えられる。この奈良井川扇状地の頂置層相当層中に、礫層を中心とした鎖川系と想定されるＦ層が何回かにわたって挟在する事実がきわめて興味深い。



第３図　地区呼称及び土層概念図

2　遺構切込面の微地形

遺構切り込み面は、検出所見からⅡＡ層上面が古墳時代後期～平安時代末期（ＩＤ層が上位にない地点）ＩＤｃ層上面が古墳時代後期～平安時代末期、ＩＤａ層とＩＤｂ層上面は平安時代末期、ＩＡ下部層上面が近世以降とされている。また、ⅢＢ・ⅢＣ層とⅢＡ層最上部より縄文時代中期、ⅡＢ層上面より縄文時代後期の土器片が検出されている。

隣接する下神遺跡と北栗遺跡の資料から、弥生時代にはⅡＡ層の堆積が完了していたと推定される。その後、古墳時代中期までに堀川を中心とした低地にＩＤｃ層が堆積し、以降、平安時代の大半を通して本遺跡付近は南縁で最も高く北東へ緩傾斜する地形が展開していたと推定される。ⅡＡ層の粒径組成は中央値がＢ地区で7.4∅，Ａ地区北側で5.6∅，同中央で4.6∅，同南側で4.0∅と南へ粗粒化し、最高地点が南方の鎖川に沿い、この小凸地が南東（奈良井川・鎖川合流点方向）へ内湾することから、南部、北部南側を自然堤防とその後背湿地と見ることができる。この場合、自然堤防と後背湿地の比高差は約２ｍと推定され、自然堤防と後背湿地の背後には南部・北部堺と北部南側・北側堺を流れる流路、および堀川の４本の中小河川が流れていたことになる。

つまり、遅くとも弥生時代後期には南部南縁の自然堤防と北部南側を中心とした後背湿地の原形が成立し、急速に旧自然堤防化（篭瀬良明1975）されつつあった。古墳時代中期頃までの堀川周辺のＩＤｃ層堆積後は地形が長期にわたって安定し続け、旧自然堤防の背後には数条の小河川がわずかに流れていた姿が予想される。古墳時代後期から平安時代中頃にかけての集落は、これらの小河川が隣接して立地する。平安時代末期に至る間に、小河川に由来する規模の小さい洪水が何回か発生したらしく、これがＩＤａ・ｂ層である。その結果、低地は砂層や低密度の含礫泥層に被覆され、やや平坦な地形が出現した。平安時代末期の住居址群は主に南部や北部北側の小凸地上に展開する。その後、ＩＣ層やＩＡ層上・下部層の堆積を通して低地から埋積され、現地形に見る平坦面が形成された。小河川はこの間に消滅したり用水路に姿を変え、堀川は河床を下げて東方の奈良井川に沿う微高地を穿入している。

第２章　遺　　構

第１節　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構には火床址９がある。いずれも北部Ｅ区に位置し、古代面の調査終了後に行ったトレンチ調査の際に確認した。遺構は土層断面観察でのみ検出でき、面的に捉えることが困難であったために、遺構の層序とその拡がりをつかむことに主眼をおいた。

遺構は掘り方が浅く、地山が焼土化しており焼土粒や炭化物が散在するといった共通の特徴をもつ。検出面の層序は第４図に示すように、すべて同じではないが、土層中に含まれる土器の相対的な在り方から縄文時代に帰属する遺構と判断した。（第４・５図）

SF502・509・513・514

西側トレンチの南端に位置し、509がⅡＢ層上面で観察された以外は、ⅡＣ層上面で検出した。513,514は直径70cmの規模をもち、502はプランの一部を確認していないが、ほぼ同様の規模をもつと思われる。513からは後期の遺物が破片で出土したが、513に帰属するかは不明である。

SF505～508

西側トレンチの北端に位置し、507がⅢＡ層上面で、それ以外はⅡＢ層上面で検出したが、507,508は断面のみで確認した。506は直径90cm、505は160cmと大きい。なお、507からは土器の破片が出土した。

SF503

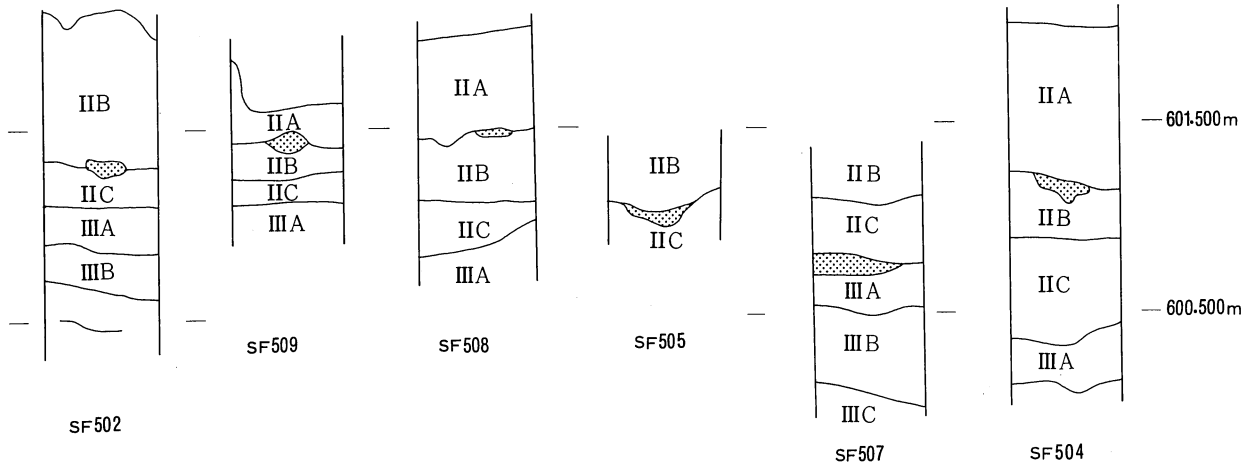
北部のほぼ中央に入れたトレンチで確認した。2.7×1.0ｍの楕円形のプランである。

SF501

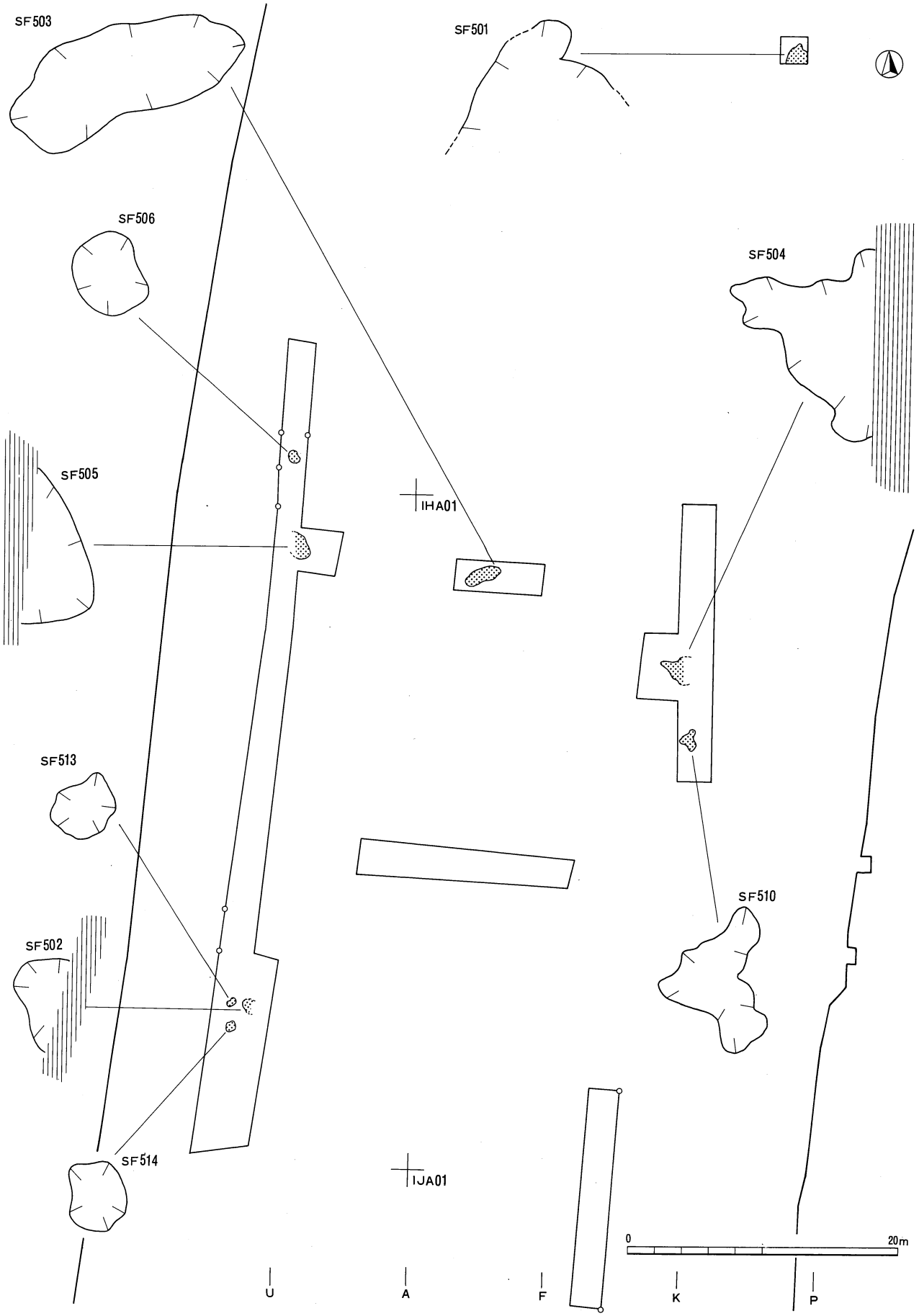
北部北端に位置する。層序はⅡ層中で、プランの一部を確認したにとどまる。径2cmの大きな炭化物が火床面に観察された。

SF504・510

東側トレンチのⅡＢ層上面で検出した。両者とも不整形で、504は直径2ｍを越え、火床址の中でもかなり大きなプランである。510は火床面に多量の炭化物が散在する。



第４図　縄文時代土層柱状図（1:40）



第5図　縄文時代遺構分布図(1:400)及び遺構図(1:60)

第２節　　古代の遺構

１　竪穴住居址

SB１　　位置：南部Ａ区　　図版15、第６図、PL８

検出：IIA_2層で検出する。SB３･37を切る、南北方向に長い隅丸長方形のプランである。新旧関係についてはSB３とは覆土の違いから平面的に、SB37とは断面観察によって決定した。カマド：北東隅に位置する石組カマドで、遺存状態は良好である。左袖の一部と思われる15～25cmの礫が散乱していた。火床ははっきりせず、炭化物が集中していた。煙道は76cmを測り、トンネル状に残存するが、掘り抜いたものではない。床：地山床である。起伏の少ない床で南西が高い。ピット４基がある。埋没：単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、鎌・刀子がある。遺物は床面から出土する例が多く、カマド右側に集中する。遺物のほとんどは残存率が高く、一括遺棄された遺物の可能性を有し、本址に帰属する遺物と推定される。時期：遺物から14期に帰属する。

SB２　　位置：南部Ａ区　　図版17、第６図、PL８

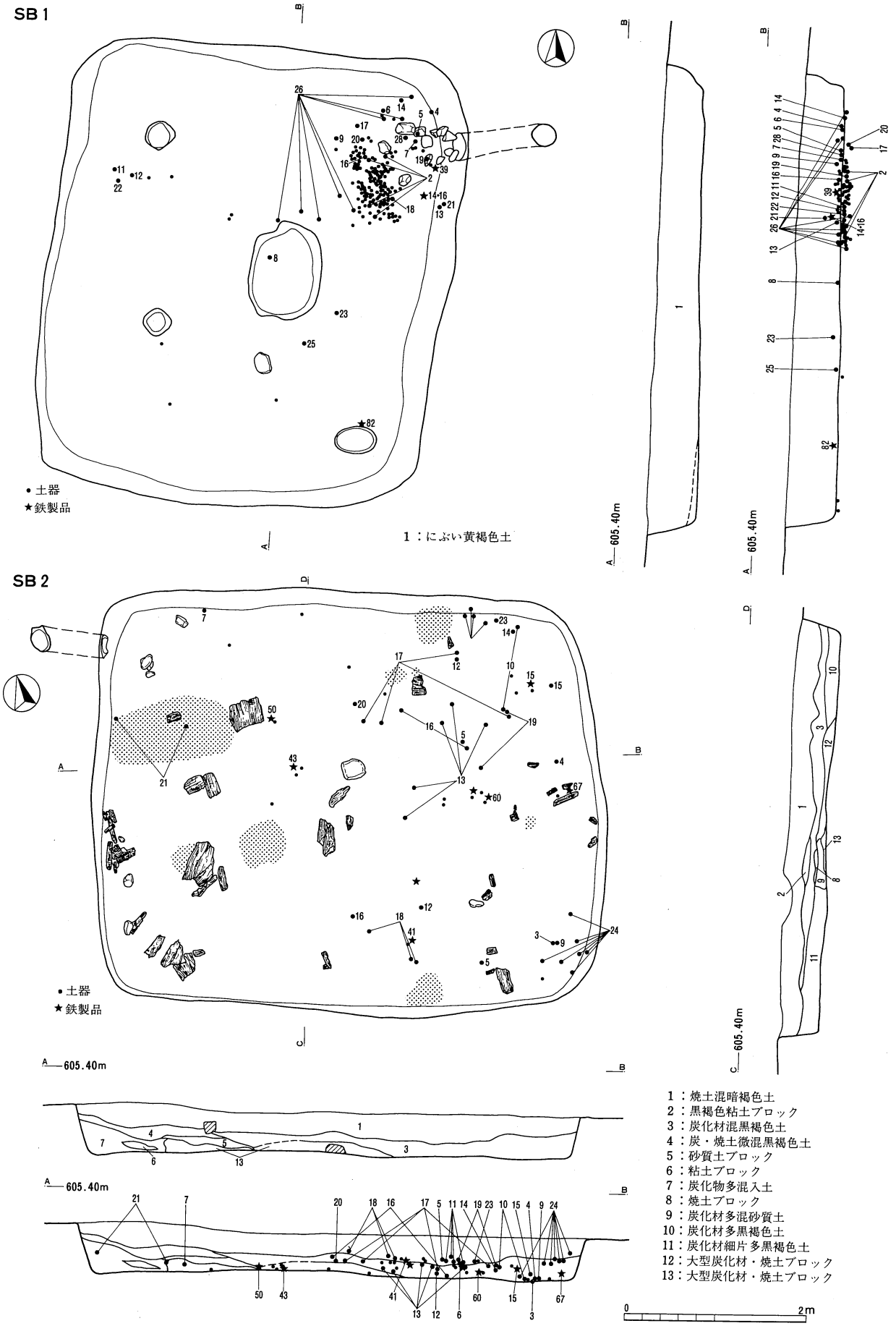
検出：ＩＤ層で検出したが北側のプランが不明瞭であった。プランは焼土と炭化物が帯状にみられ、覆土には焼土や炭化物粒が混在しており、火災と関連した住居址であることが予想された。東側でSB38･ST２・３を切るが、いずれも検出面で確定した。カマド：北西隅に位置し、煙道のみが残っていた。床：中央に貼り床が認められた。炭化材や焼けた箇所が床面全体にみられる。埋没：大きく２層に分層される。下層には焼土、焼けた粘土、炭化材が多量に含まれていた。床面に大形の炭化材が揃い、１層を除き一気に埋没した状況が観察された。遺物の出土状況：土師器杯３点・黒色土器Ａ椀３点・灰釉陶器の椀11点・広口瓶１点が完形で出土したほか、鎌・刀子・紡錘車などの鉄製品11点が出土した。遺物は図示したように北東と南東隅に集中する傾向が認められ、カマド周辺に遺物が集中して出土する当該期の住居址と傾向を異にする。床面から出土する遺物は少なく、３層上面で出土する遺物が多い。遺物は接合しなかった破片が極めて少ないことから一括性が高く、本址に帰属すると推定できるが、カマドが存在するにもかかわらず、煮炊具が全く出土していないことや、遺物が床に平置されていなかった状況と合わせて不満も残る。しかし、本遺跡には人為的に住居を焼失させる例が皆無であることから突発的な火災によるものと判断し、本址に帰属する遺物と考えたい。時期：遺物から14期に帰属する。

SB３　　位置：南部Ａ区　　図版15

検出：ＩＤ層下位で検出する。北側でSB１に切られ、北西隅でSB37を切る。SB１とは断面観察で、37とは面的に切り分けられた。南北方向に長い隅丸方形のプランになると推定できる。カマド：東壁、おそらく北隅寄りに位置すると思われる。火床は不鮮明で、袖も残存しないが、焚口付近には袖に使用したと思われる20cm程の円礫や角礫が散乱していた。床：地山を床としており、全体的に軟らかい平坦な床である。埋没：細粒砂を主体とし白色砂、マンガン粒を混入する単一層で、人為的埋没と思われる。テラス：平坦なテラスではなく、床からいったん垂直に立ち上り、途中から緩やかに立ち上がる。これは部分的でなく、壁全体にわたって観察されたことからテラス状の施設と判断した。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器などがある。カマド周辺と南東隅に集中して出土した。１・６はカマド焚口から、２・５は南東隅の床面からそれぞれ出土した。時期：遺物から13期に帰属する。

SB４　　位置：南部Ａ区　　図版17、PL４

検出：ＩＤ層で検出した。SB38・ST３・SK187・188を切る。カマド：北東隅に位置し、煙道は斜めに


SB 1
1：にぶい黄褐色土
605.40m
SB 2
605.40m
605.40m
605.40m
• 土器
★ 鉄製品
1：焼土混暗褐色土
2：黒褐色粘土ブロック
3：炭化材混黒褐色土
4：炭・焼土微混黒褐色土
5：砂質土ブロック
6：粘土ブロック
7：炭化物多混入土
8：焼土ブロック
9：炭化材多混砂質土
10：炭化材多黒褐色土
11：炭化材細片多黒褐色土
12：大型炭化材・焼土ブロック
13：大型炭化材・焼土ブロック
0
2m

第6図　SB1・2実測図

出る。袖は礫で構築され、左袖に使用されたと思われる礫は壁に食い込んでいた。右袖の右側には50×30cmの付属ピットがみられる。床：中央からカマド焚口にかけて敲き締められていた。西側を深く荒掘し、中央がわずかに高い。埋没：ⅡＡ層を基調とする細粒砂を主体とし、下層には白色砂をわずかに含んでいた。テラス：西壁全体にわたって、床面から高さ30cmの位置に50cmの幅で確認された。黄色の粘土に多量の米粒大、鶏卵大の礫を加え構築されていた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があり、小片での出土が多いが、床面遺物（2・6・9・10）は完形になるものもみられた。カマド焚口に集中する傾向があり、13・15は床面の広い範囲で接合している。このほか、刀子、紡錘車各１点ずつが出土した。時期：14期に帰属する。

SB５　位置：南部Ａ区　図版17

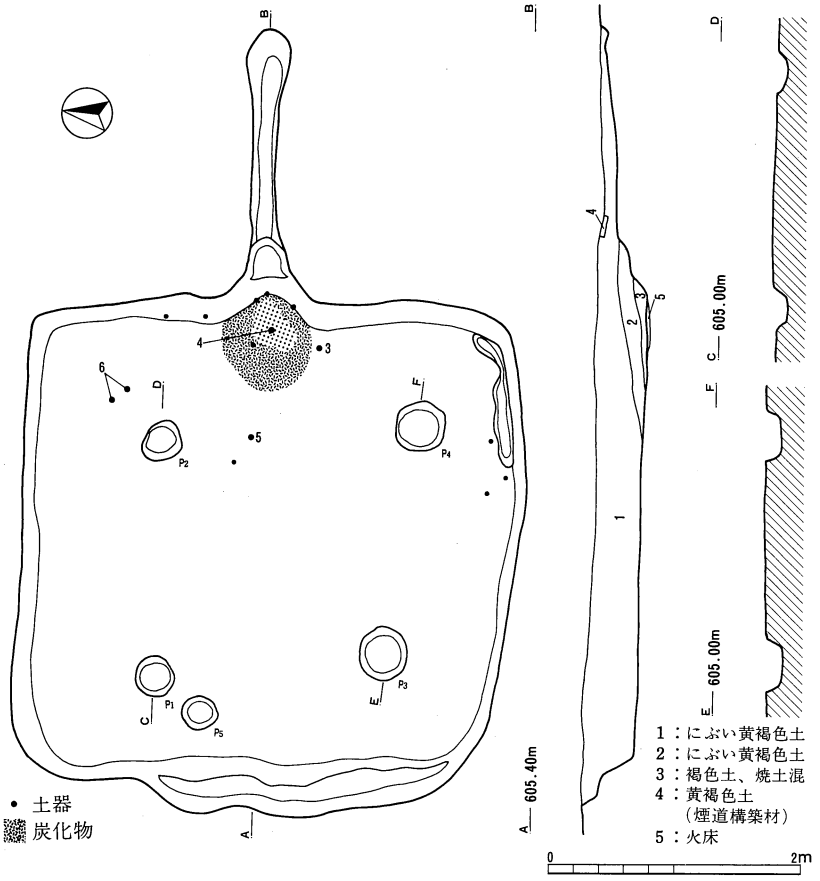
検出：ＩＤ層で検出、北側には用水路があったために、南側の一部のみ調査した。床：ⅡＡ$_2$層質の粘土を２～４cmの厚さで貼っており、中央がわずかに高い。埋没：２層に分層されたが、下層はにぶい黄褐色土を主体に粘土ブロックを含み、人為的に埋没させた状況が観察された。また、床面から数cmの部分は特に砂質である。遺物の出土状況：全体量は少ない。時期：５期に帰属する。

SB６　位置：南部Ａ区　図版16

検出：ⅡＡ層で検出した。SB５と同様に用水のために北側は調査できなかった。東壁でSK182を切る。カマド：東壁中央に位置すると思われるが、袖は残存せず火床に焼土の一部が確認された。床：床下に10cm程の掘り方があり、凹凸のある床面には砂を主体とし粘土を混ぜて貼っている。埋没：２層に分層され、下層には粘土ブロックが混入していることから、人為的な埋没と判断した。その他の施設：南東隅に直径70cm程のピットがある。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器がある。床面遺物は南東隅（5・8）とカマド焚口（2・4・6～9）に集中する傾向がみられた。時期：14期に帰属する。

SB７　位置：南部Ａ区
図版17、第７図

検出：地山が礫層であったため、プランは明瞭に確定できた。検出面はＩＤ層で、西壁の一部が張り出す、隅丸方形の住居址である。カマド：東壁中央に位置する函形のカマドで、石組みは残存していなかった。火床は赤色化し、その周囲には炭化物が広がっていた。煙道は160cmと長く、煙出しはわずかに膨らんでいる。柱穴：主柱穴4基がある。掘り方の直径は30～40cm、深さ15cmと浅く、柱間の間隔は1.8～2.0ｍとほぼ一定である。周溝：南西隅付近に幅10cm、長さ1.2ｍにわたって確認された。床：ほぼ平坦な地山床である。埋没：



第７図　SB７実測図

地山にある鶏卵大の礫を多量に含んだにぶい黄褐色土で、一気に埋没している。遺物の出土状況：土師器、須恵器があり、カマド焚口や火床に遺物は多い（3・5）。また、床面から4・6が、南壁際、北東部からそれぞれ出土した。時期：２期に帰属する。

SB 8　　位置：南部Ａ区　　図版16

検出：ＩＤ層下位で検出した。煙道の存在から住居址と認定したが、プランは不明瞭である。本址は南北方向に長い隅丸長方形プランである。当初、SB11に含めて考えていたが、先行トレンチの土層観察や床面の存在から、本址がSB11を切ると判断した。カマド：北東隅に位置する。袖は残存していないが、長さ120cmの煙道が東に向かって延びていた。床：北側がわずかに高くなり、敲き締めの痕跡が観察された。埋没：ⅡＡ層に由来する暗褐色土を基調に白色砂が混入する単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器がある。床面からの出土が多く、煙道入口から灰釉陶器の段皿（9）が出土した。時期：12期に帰属する。

SB 9　　位置：南部Ａ区　　図版14

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出した隅丸方形のプランである。カマド：東壁中央からやや南寄りに位置する。袖は残存しないが、袖の構築材として利用されたと思われる20cm程の礫がカマド手前に６～７個散乱していた。床：地山を床としており、東側は西側より凹凸がみられ、レベルも高い。埋没：覆土はＩＤ層を基調とし、人頭大の礫や風化礫を含む褐色土で、人為的埋没と思われる。遺物の出土状況：遺物の全体量は少なく、住居の廃棄時に片付けられたとも予想される。時期：３期に帰属する。

SB10　　位置：南部Ａ区　　図版15

検出：ＩＤ層下位で検出し3.8×3.8ｍの隅丸方形の住居址である。東側は壁が崩れているためか、直線的なプランを描けなかった。本址はSK171を切る。カマド：西壁中央に位置する石組カマドである。左袖には礫が残り、焚口前には被熱した礫が散乱しており、人為的に破壊された痕跡と判断できる。奥壁は赤く焼けているが、火床は不鮮明である。柱穴：主柱穴４基がある。柱穴の直径は26～40cm、深さは10～12cmを測る。柱間はほぼ2.0ｍである。床：地山の礫層に粘土がわずかに混入する平坦な床である。埋没：覆土は砂を主体に鶏卵大の礫を含む暗褐色土で一気に埋没した人為的堆積と思われる。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、鉄鏃などが出土している。覆土中は住居址全体に遺物が分布するが、床面遺物はカマド周辺に集中している（9・10・14）。時期：11期に帰属する。

SB11　　位置：南部Ａ区　　図版16

検出：ⅡＡ$_1$層で検出する。SB８に切られるため、北東隅のプランは不明瞭である。カマド：東壁中央に位置するが、SB８による撹乱と廃棄時の人為的な破壊によって火床のみ確認された。その右側には付属すると思われるピットが１基ある。床：地山を床としており、中央付近が敲き締められ、西壁際がわずかに高くなる。埋没：ＩＤ層を基調とするにぶい黄褐色土層で、南側のみ２層に分層された。下層は粘土ブロックを多量に含むことから人為的埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器がある。図示した遺物は床面遺物で、土師器杯（1）、灰釉陶器の椀（5）、羽釜（7）がカマド右側から出土した。時期：12期に帰属する。

SB12　　位置：南部Ａ区　　図版22、PL８

検出：ⅡＡ$_1$層で検出、昭和60・61年の二年次にわたって調査した。北東隅は撹乱を受けている。東側のSB15を切り、西側でSB41、南東隅でSK９に切られる。いずれも覆土の違いから平面的に新旧関係を決定した。カマド：東壁中央に位置するが、袖は残存していない。煙道は1.7ｍと長く、煙道先はピット状に膨らんでいた。床：床面は全体的に凹凸があり中央がわずかに高いが、ほぼ全面に粘土を貼っていた。ピット：中央に70×60cmのかなり大きな落ち込みがある。柱痕跡は認められない。埋没：覆土は砂を主体とす

る単一層で、人為的に一気に埋没した可能性が高い。遺物の出土状況：遺物は覆土中から多数出土するが細片がほとんどで、床面遺物は少ない。須恵器、土師器がある。煙道先ピットからは土師器甕B（8）が、南壁際からは土錘が、また、砥石が床面中央でそれぞれ出土した。時期：４期に帰属する。

SB13　位置：南部Ａ区　図版19

検出：ⅡＡ$_1$層で検出した、東西方向に長い隅丸長方形のプランである。SB14に切られる。新旧関係はSB14の煙道先が本址にのることから明瞭である。カマド：長さ1.2ｍの煙道のみが残存する。煙道先はわずかに窪んでいる。床：壁際を深く荒掘りし、全体にⅡＡ層基質である粘質な土を入れて構築する。その後、中央を敲き締めている。埋没：ＩＤ層を基調とする粗粒砂を主体とし、白色砂を多量に混入する、人為的な堆積状況である。遺物の出土状況：須恵器、土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器がある。遺物はカマド周辺に完形品が集中する傾向があり（3・4・6・8）、７は床面中央からの出土である。なお、９は混入と思われる。時期：14期に帰属する。

SB14　位置：南部Ａ区　図版19

検出：住居址の西側を昭和60年度、東側を61年度の二年次にわたって調査した。ⅡＡ$_1$層で検出している。本址のカマドがSB13にのることから、SB13を切ることを確認した。また、プランの中央で中世のSK357に、北西隅でSK358に切られる。カマド：北東隅に位置する。袖は残存していないが、袖の構築材に使用されたと思われる鶏卵大の礫があり、袖石の抜き取り痕が観察されたことからも石組カマドと思われる。また、焚口の右側には80×60×26㎝の付属ピットが確認された。床：地山を床としているが、壁際よりわずかに低い中央部を固く敲き締めた痕跡が認められた。埋没：粗粒砂を基調に米粒大の礫や風化礫を混入した単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、紡錘車がある。覆土中の遺物は北東部分に多く、床面遺物はカマド右側に集中しており（9・13）、８・11はピットから出土している。時期：13期に帰属する。

SB15　位置：南部Ａ区　図版22

ⅡＡ$_1$層上位で検出するが、プランは不明瞭であった。南北方向に長い長方形の住居址である。SB12・ST５・SK10に切られる。SB12のカマドが本址にのり、ST５の柱穴が煙道を切ることから新旧関係は明確である。カマド：東壁中央に位置し、わずかに壁を掘り込んで構築している。袖は崩れ、火床には焼土が残存していたのみである。その右側には付属ピット（60×52×10㎝）があり、焼土粒や炭化物が混入している。床：全面に貼り床があり、東側が低くなる床で、中央には焼土と炭化物が集中する。埋没：２層に分層される。粗粒砂を主とするが、下層には粘土がブロック状に堆積しており、人為的な埋め戻しがなされたと思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器がある。床面遺物（1・2・3）はカマド周辺に集中する傾向がみられ、土師器ナデ甕（3）須恵器杯（1）が出土した。時期：２期に帰属する。

SB16　位置：南部Ａ区　図版22

検出：ⅡＡ$_1$層上位で検出する。ST５・SB18と重複する。ST５とは覆土の違いから、SB18とは本址のカマドを切ることから本址の方が古いことを平面的に確認した。カマド：東壁中央に位置するが、SB18に撹乱されているために火床だけが認められた。柱穴：主柱穴３基を確認する。柱間の寸法は主軸方向が2.4ｍ、直交軸が３ｍで主軸より長い。柱穴は不整形なプランで深さも20～36㎝と一定でなく、底面は平坦であるが柱根のあたる箇所はわずかに凹んでいた。床：南西隅壁際を除いた全面に貼り床がなされていた。埋没：粗粒砂を中心に白色砂、風化礫を混入する単一層で一気に埋没したものと思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器が出土したが、床面遺物（6）は少なく、ほとんどが覆土中からの出土である。時期：２期に帰属する。

SB18　位置：南部Ａ区　図版21

検出：IIA_1層上位で検出する、主軸方向が直交軸より１ｍ程短い隅丸長方形プランである。北西隅は壁が崩れているため、プランが不明瞭である。ST５・SB16と重複するが、ST５とは断面観察で、また、SB16とは本址の床面がSB16にのることから、本址の方が古いことを確定した。カマド：東壁中央に位置するが、火床と煙道の一部が残存する。煙道は長さ60cmを測り、火床から急に立ち上がり、その後緩い傾斜になる。カマドの右側にはピット（60×46×８cm）があるが、カマドに付属する施設か否か明確でない。床：掘り方にはII A層を基調とする粘質土を入れて整地した後、中央部を固く敲き締めた床で、小さな起伏が観察される。埋没：粗粒砂を主とするが、粘土や炭化物などの混入により４層に分層された。２層以下はブロック状の堆積で人為的埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器がある。床面遺物はカマド焚口とその南側に多いが、完形品はほとんどない。カマド左側のピットからは土師器の杯（1）,羽釜（11）が破片で出土した。時期：13期に帰属する。

SB19　　位置：南部A区　　図版19

検出：IIA_1層上位で検出する、2.9×3.1ｍの小型の住居址である。カマド：東壁中央に位置するが、袖等は遺存せず、火床と思われる箇所に焼土粒が散見されただけである。床：部分的に整地の痕跡がみられるが、地山をそのまま床としており、全体的に軟弱である。埋没：粗粒砂を中心に、白色砂、粘土粒、炭化物が混入した単一層である。遺物の出土状況：覆土中、床面とも遺物は極めて少ない。時期：５期に帰属する。

SB20　　位置：南部A区　　図版19

検出：住居址の東側がプラント・オパールの調査によって撹乱を受ける。IIA_1層上位で検出した。北側のSB21と重複するが、覆土の違いから本址が切ることを平面的に確認した。カマド：明瞭に確定できないが、火床と思われる掘り方を東壁で検出した。柱穴：主柱穴３基を確認する。柱間の寸法は3.0×2.8ｍ、柱穴は円形や楕円形の掘り方をもち、深さは10～28cmと一定でない。床：粘土質の土を入れて整地した後に固く敲き締めた床で、中央がわずかに高い。ピット：西壁中央に120×100×20cmの大きな規模のピットがある。底面は平坦で西壁もわずかに張り出している状況から出入口に係わる施設と思われる。埋没：覆土はにぶい黄褐色土層で大きく２層に分層されるが、下層は人為的な堆積である。遺物の出土状況：須恵器、土師器、灰釉陶器、鉄製品があるが、覆土中からの出土が大半を占める。土師器の小型甕C（9）、須恵器の短頸壷（13）が西壁際のピットから出土している。時期：５期前後と思われるが、時期決定根拠が弱く、限定できない。

SB21　　位置：南部A区　　図版19

検出：住居址の大部分をプラント・オパールの調査とSB20に切られたため、北西隅のみを検出する。床面の状態から住居址と認定した。床：地山を床としている。埋没：粗粒砂を主体とする単一層である。時期：遺物が少なく、時期決定は難しい。

SB22　　位置：南部A区　　図版20

検出：IIA_2層で検出する。プラント・オパール調査のため、住居址の南側大半を失う。本来はSB20・21と重複する。カマド：火床の掘り方を東壁中央で検出した。床：地山を床としていた。埋没：粗粒砂を主とするが、下層には粘土を多く含んでおり、人為的な堆積状況が観察された。遺物の出土状況：遺物は細片で出土量は極めて少ない。時期：時期決定の要素に欠けるため時期の限定は困難である。

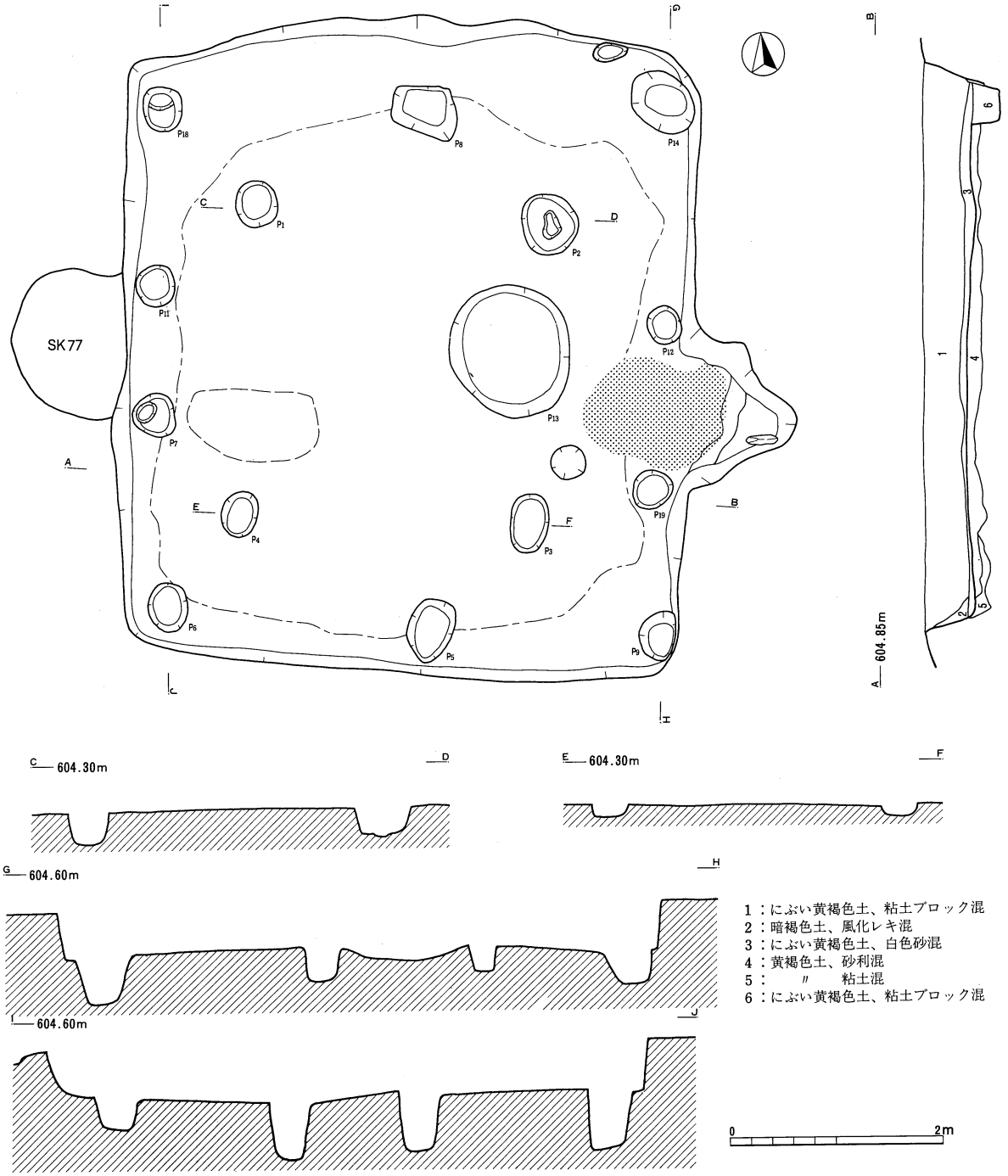
SB23　　位置：南部A区　　図版21

検出：IIA_1層で検出するがプランは明瞭でなかった。主軸方向が長い4.2×3.3ｍの隅丸長方形のプランを呈する。南東隅でSK91に、北西隅でSK95に切られる。カマド：火床、煙道が残存する他は、完全に破壊され、焚口には50cm程の花崗岩が水平に置かれていた。煙道は長さ130cm、住居址の主軸方向から若干北へ

ずれて延びる。床：地山を床としているが、カマド付近が固くなる他は軟弱である。また、北壁から中央にかけて焼痕があり、廃棄時の一連の行為によるものとも思われる。埋没：粗粒砂を主体とする黄褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、、鉄鏃、砥石が出土している。床面遺物（１・２・４～６）はカマド焚口と東壁に集中し、１・４は完形に近い。時期：13期に帰属する。

SB24　位置：南部Ａ区東側　　図版23

検出：重複が多くプランの確定は困難を極めた。ⅡＡ$_1$層で検出する。SB25・69に切られ、SB42を切る。いずれも断面観察と床面の状況から新旧関係を決定した。カマド：東壁中央やや南寄りに位置する。カマドの焚口部はSB25のピットに切られており、長さ50cmの煙道のみが確認された。柱穴：主柱穴3基を確



第８図　SB25実測図

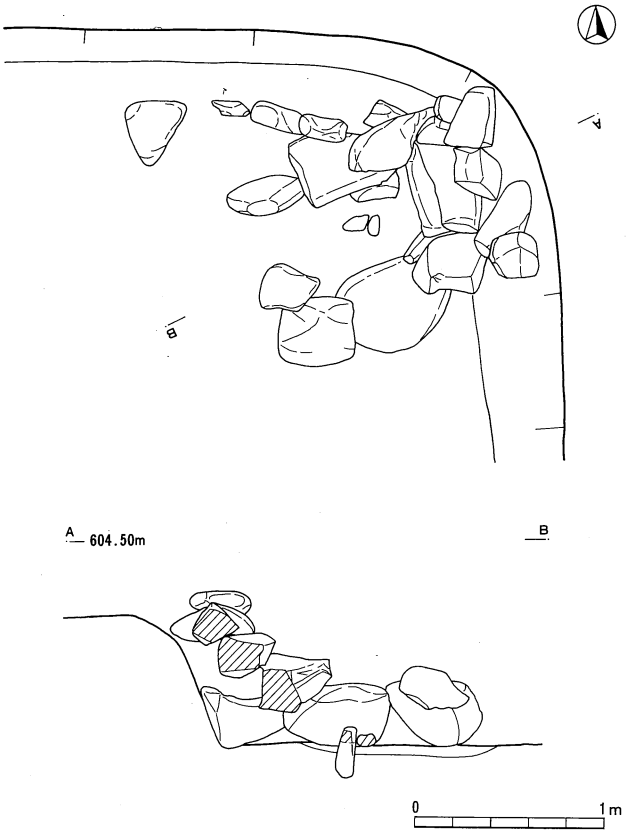
認した。柱間は2.5mと一定である。柱穴の規模は直径約50cm前後で、深さは20～30cm、柱痕は不明である。床：北壁際にわずかな凹凸がみられ、中央を中心に粘土を入れて敲き締めていた。埋没：粗粒砂を主とするにぶい黄褐色土層であるが、下層にはⅡA_1層を基調とする粘土が多量に混入しており、人為的な堆積と思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器があるが、覆土中、床面とも遺物は少ない。土師器甕B（3）のみが床面から出土した。時期：4期に帰属する。

SB25　位置：南部A区東側　図版23、第8図

検出：ⅡA_1層で検出する。当初、プランが明確でなく、西壁中央には張り出しがあった。断面観察によって北側のSB24を切ることを確認し、西壁の落ち込みについても、別な遺構と判断しSK77と命名した。だが、最終的に本址との新旧関係は確かめられなかった。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。右袖の構築材に使用されたと思われる礫が原位置に残る以外はすべて破壊されていた。火床は広い範囲で焼土が観察された。柱穴：主柱穴4基、壁柱穴10基を検出した。主柱穴の柱間は2.8×2.7m、壁柱穴は主軸方向が2.2～2.4mとほぼ一定であるが、直交軸方向のP7とP11、P12とP19の柱間は約1.2mと狭くなっている。特に、前者は出入り口の施設との関連性が考えられる。床：掘り方にはシルトを主とする土を約10cmの厚さで入れ、整地している。中央がわずかに高く、床面全体に酸化した鉄分が集積していた。埋没：粗粒砂を主とするが、下層には粘土がブロック状に堆積しており、人為による埋没であろう。遺物の出土状況：黒色土器A、須恵器、土師器がある。4・7・8は床面遺物で、土師器小型甕B（10）、須恵器甕（13）はカマド焚口から集中して出土しており、住居の廃絶時に投棄されたと思われる。時期：4期に帰属する。

SB26　位置：南部A区　図版23、第9図

検出：ⅡA_1層で検出する。東側の地山は砂礫層で住居址はその層を掘り込んで構築される。カマド：北東隅に位置し、残存状況は良好である。石組というよりはむしろ積石といえるカマドで、左袖の一部が崩れてはいるが、使用時の状態のままで確認できた。破壊されずに残っているカマドは本遺跡では少なく、注目できる。火床は焼土化が全く見られない。煙道は検出できなかったが、主軸方向から斜め45度北の方向へ延びると思われる。床：地山を床とする平坦な床で、東側は礫層が露出する。テラス：南東隅に床面から高さ10cm、最大幅30cmのテラス状の遺構がある。埋没：粗粒砂を主とし、風化礫、炭化物をわずかに含む単一層である。遺物の出土状況：東壁に集中して土師器、黒色土器A、灰釉陶器、砥石、鉄鏃が出土した。図示した遺物は5を除き床面遺物で、完形に近い。時期：13期に帰属する。



第9図　SB26カマド実測図

SB27　位置：南部A区　図版20

検出：南東隅がわずかに張り出す隅丸長方形のプランである。ⅡA_1層で検出する。ST10を切る。カマド：東壁北隅寄りに位置する。火床には焼土がわずかに残るのみで、袖などは残存していなかった。床：全面に整地した痕跡が認められる床で、中央から南東にかけて堅緻な部分がある。埋没：黒褐色を呈した細粒砂を基調とし、大きく2層に分層された。下

層には炭化物、焼土を混入し、人為的な堆積と思われる。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、黒色土器A、砥石、鎌、刀子がある。覆土中は細片が多く、床面全体から破片が出土した。時期：15期に帰属する。

SB28　位置；南部Ａ区　図版20

検出：ⅡＡ$_1$層で検出する。カマドの煙道が北壁と東壁に検出されたことから、当初２軒の住居址があると考えたが、覆土、床面の状況から１軒の住居址と判断した。北西隅がプラント・オパール調査のために撹乱を受ける。SB30を切り、SB31に切られる。本址の東カマドがSB30にのり、SB31に本址の煙道先が切られることから新旧関係は明瞭である。カマド：北壁東寄り（北カマド）と北東隅寄り（東カマド）にある。北カマドの火床の上には張り床がされていることから、北カマドから東カマドへ作り替えが行われたたと思われる。床：西壁際に向かって高くなり、中央から東側にかけて貼り床が認められた。埋没：覆土は粗粒砂の単一層ある。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、床面遺物は東カマド焚口、北東付近に集中し１・９～11など完形に近い遺物が多い。時期：11期に帰属する。

SB30　位置：南部Ａ区　図版20

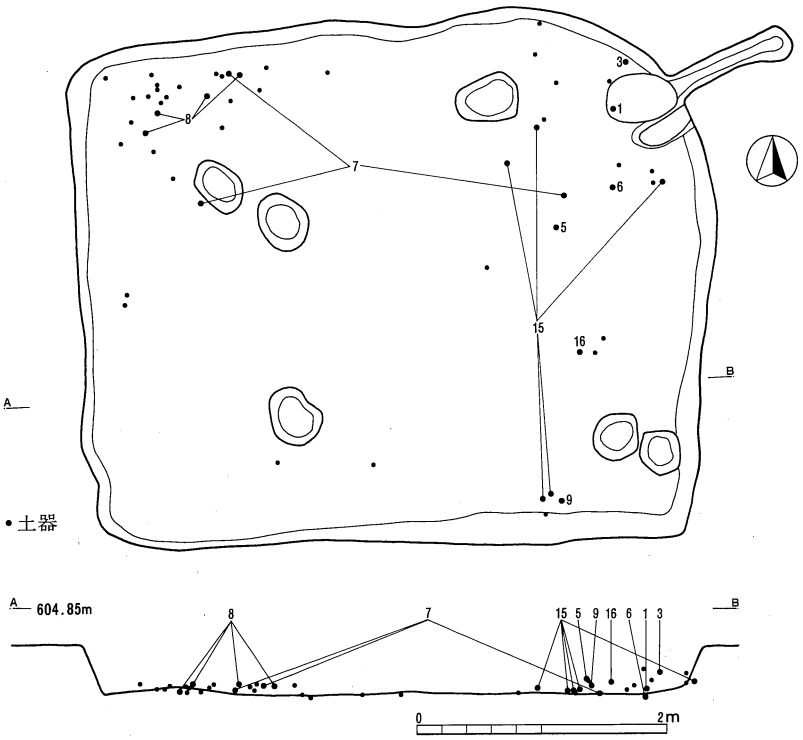
検出：ⅡＡ$_1$層で検出する。住居址の大半をSB28･31に切られる。南壁のプランは不鮮明であったが、最終的に床面の状況から判断できた。床：地山を床としており、壁際が高い。ピット：南東隅、南壁中央に深さ10cmの浅いピットがある。埋没：覆土は粗粒砂に粘土、風化礫が混入する、にぶい黄褐色の単一層である。遺物の出土状況：遺物量は細片で少ない。時期：３期以降になろうが、遺物が少ないため限定は難かしい。

SB31　位置：南部Ａ区　図版20、第10図

検出：西側でSB30を切る、主軸方向が1ｍ長い隅丸長方形の住居址である。ⅡＡ$_1$層で検出する。カマド：北東隅に位置する。袖は破壊されて残存しないが、焚口付近に焼痕の残る花崗岩が散乱している。火床には焼土が残り、煙道は火床から緩やかに立ち上がり、約１ｍ程確認された。床：中央には貼り床があり、その上には焼土、炭化物がわずかに散見された。西壁際がわずかに高い。埋没：２層に分層された。にぶい黄褐色の細粒砂を主とするが、下層には粘土がブロック状に混入することから人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、鎌があり、床面からの出土が多い。特に、カマド周辺、北西隅に集中し、１・６～８は完形に近い。７・15は離れた地点での接合がみられた。時期：13期に帰属する。

SB32　位置：南部Ａ区　図版16

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。一辺3.2ｍの小型の方形プランである。カマド：東壁中央に位置する。袖は粘土で構築され、住居址が埋没する際に崩落したと思われる。火床には焼土が残り、奥壁にも焼痕



第10図　SB31実測図

がある。床：掘り方にⅡA_2質の土を入れた後、敲き締めた床で、カマド焚口付近が高い。埋没：３層に分層された。粗粒砂を主とするが、２層以下は粘土が多量にブロック状に混入し、人為的な堆積を示している。遺物の出土状況：須恵器、土師器があるが、覆土、床面とも遺物は少ない。４のみ床面から出土した。時期：４期に帰属する。

SB33　位置：南部Ａ区　図版17

検出：地山に礫が多量に含まれているため、覆土中にも鶏卵大の礫が観察された。ⅡA_2層で検出する。SB38の煙道を切り、南側でSK176に切られる。一辺4.9ｍの方形プランである。カマド：東壁中央に位置する。袖は完全に破壊され、煙道の一部が残存していただけである。火床は床面からわずかに低く掘り込まれ、焼土と炭化物が集中する。柱穴：主柱穴４基がある。柱穴は南西のそれを除き、掘り方は円形で直径42～70㎝、深さ35㎝前後でほぼ一定である。柱間は主軸、直交軸方向とも2.4～2.6ｍを測る。床：掘り方にはⅡA_2層質の土を入れて整地し、敲き締めた平坦な床である。埋没：おおよそ２層に分層される。下層は粘土がブロック状に堆積する暗褐色土層で人為的な埋没と思われるが、上層は粗粒砂を主とする自然堆積層である。遺物の出土状況：須恵器、土師器がある。遺物の全体量は少なく、床面遺物（1・7・8）はカマド周辺に細片で散乱していた。時期：４期に帰属する。

SB34　位置：南部Ａ区南端　図版13

検出：プラント・オパール調査の際、本址の存在を確認した。南東隅をトレンチによって撹乱されているが、その際、別の住居址の床面（SB40）も確認した。検出面はⅡA_2層である。南北方向が約1ｍ長い、長方形のプランで、SB36・40を切る。カマド：北東隅に位置し、袖構築材の石組が残る。火床は焼土化が進まず、また、明確な掘り込みも確認されなかった。床：地山を床としており、中央には炭化粒が薄く広がる。埋没：粗粒砂を主とする単一層で、白色砂を混入する。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器がある。細片で床面全体に散乱しているが、カマド周辺に集中する傾向がみられる。時期：14期に帰属する。

SB35　位置：南部Ａ区南端　図版13

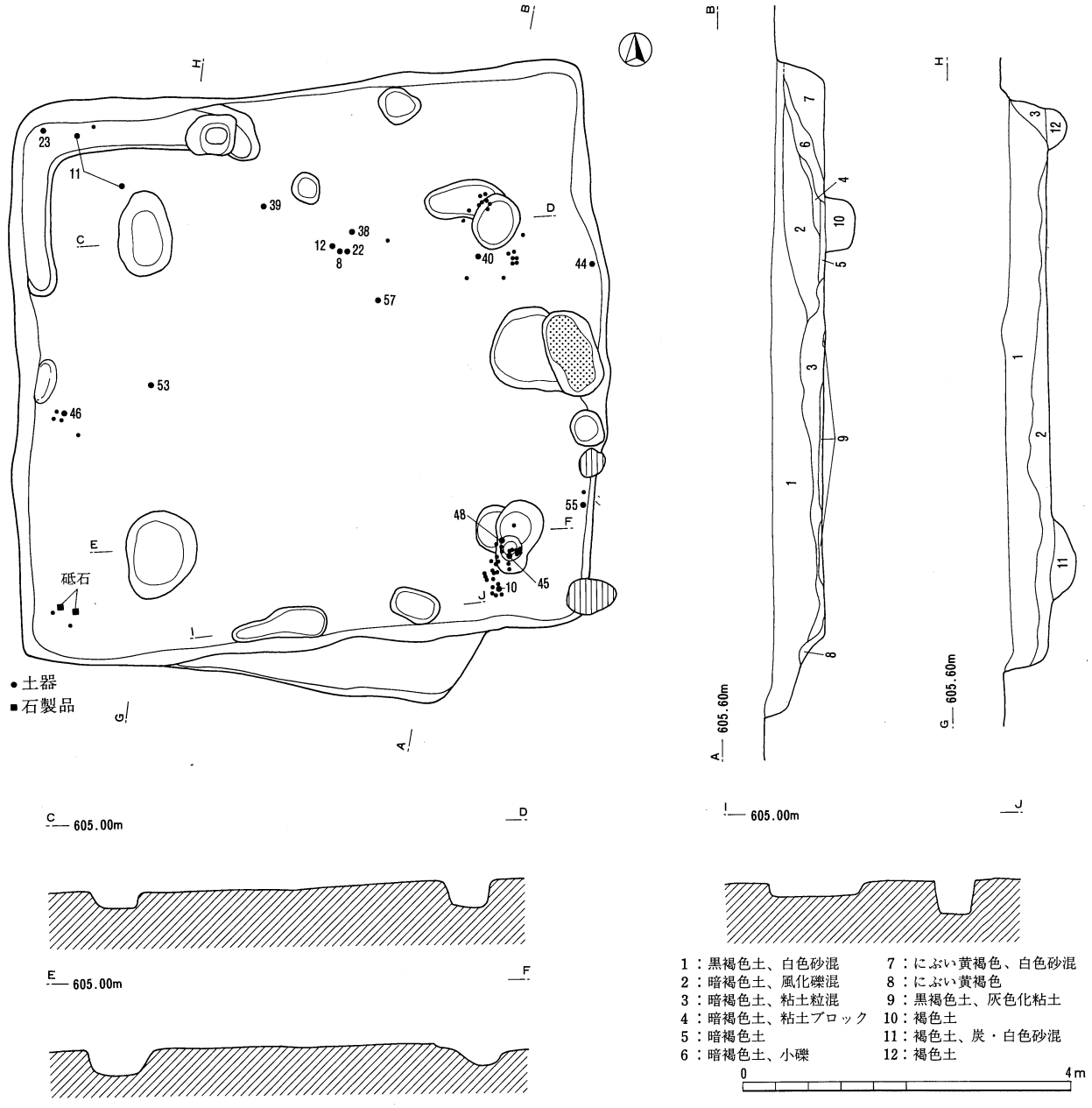
検出：プラント・オパール調査のためのトレンチが本址の中心を通り、北東隅は自然流路によって削平されている。SB39と重複するが、39の床が本址の覆土中に認められたことから新旧関係を決定した。カマド：西壁中央に位置する石組カマドで、礫は破壊によって火床付近に散乱していた。だが、支脚石は原位置を止め、正立した状態で残存する。礫の平な面を下にして埋設され、安定性を高めている。カマド左側には70×42×10㎝の落ち込みがあり、付属施設と思われる。床：地山床で平坦である。埋没：砂を主とし、粘土ブロック、白色砂を混在する暗褐色土層で、人為的な堆積であることを示す。遺物の出土状況：細片で出土するものが大半で、全体量は少ない。カマド左側に多い傾向が認められた。時期：12期に帰属する。

SB36　位置：南部Ａ区南端　図版13

検出：本線と側道部分にかかるため二回に分けて調査した。東側でSB34に切られる。カマド：SB34に切られるため、火床のみ確認した。火床は床面からわずかに掘り込まれ、焼土が残る。柱穴：西側の主柱穴２基を検出した。本来あるはずの東側の柱穴は、二回に分けて調査した際の境界となったため確認できなかった。柱間は2.2ｍ、柱痕は不明である。床：ⅡA_2層基質のシルトに米粒大の礫が混在した土で、整地した痕跡が認められた。埋没：覆土は粗粒砂を主に白色砂や風化礫を混入し、黄褐色を呈する。４層に分層できたが、２層以下は人為的な堆積状況を示していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器がある。覆土中から床面にかけて出土したが、７・８・10・11は火床に集中しており、投棄された遺物と思われる。時期：２期に帰属する。

SB37　位置：南部Ａ区　図版15、第11図、PL９

検出：ⅡA$_2$層で検出する。東壁でSB１・３に切られる。7.8×6.3ｍの大きなプランで、南壁は張り出しており、別の遺構の存在も考えたが、土層観察により本址に含めた。カマド：東壁中央に位置するが、SB1に切られるために、構造は不明である。柱穴：主柱穴4基、壁際に６基の柱穴を確認した。柱間寸法は主軸方向が4.4ｍ、直交軸が4.0～4.2ｍとほぼ同じである。壁柱穴の規模は直径50cm前後であるが、深さは14～42cmと一定ではない。特に、南壁のピットは深く、出入り口施設との関連が強いと思われる。柱の配置についてはSB175と共通する。床：全体的に薄く粘土を入れた貼り床である。南側の張り出し部は、床面から緩やかに立ち上がる。西壁中央には焼痕のある花崗岩が置かれていた。埋没：覆土は粗粒砂を主とする暗褐色土で、おおよそ２層に分層されたが、ブロック状の堆積状況を示すことから人為的埋没と判断した。南壁際の堆積については、壁が崩れた堆積状況は観察されず、施設として使用されていたことを裏づけている。遺物の出土状況：遺物は上層から床面にかけて多量に出土し、須恵器、土師器、刀子、砥石などがある。３・５・８・10～12・19・22～24・35・37～39・44～48・53・55・57が床面から出土したが、カマド

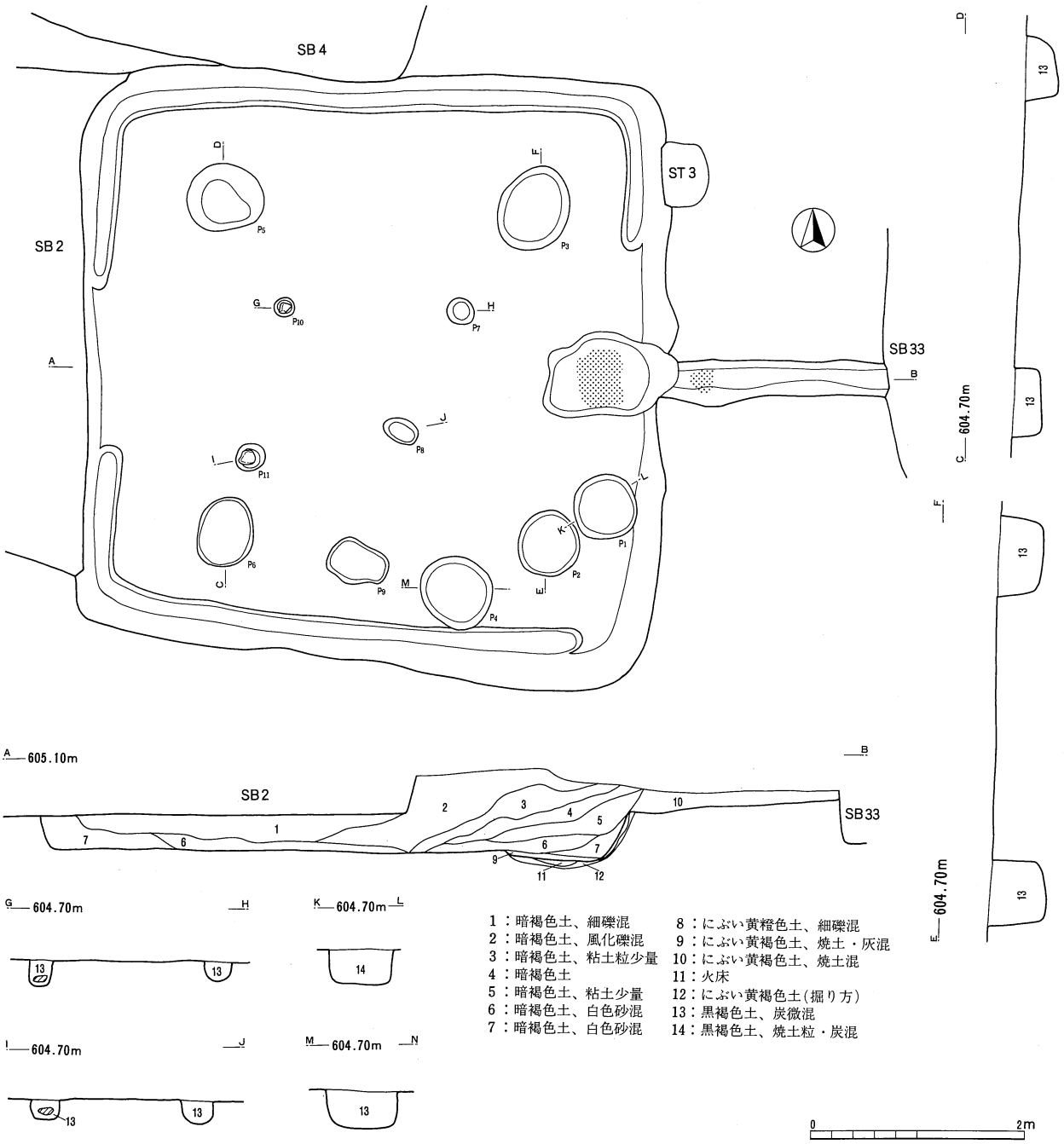


第11図　SB37実測図（1：80）

火床両側に集中する傾向がみられた。時期：３期に帰属する。

SB38　　位置：南部Ａ区　　図版17、第12図

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。西側でSB２に、北壁をSB４・ST３に、煙道先をSB33にそれぞれ切られる。いずれも覆土の質的な差から面的に新旧関係を決定した。カマド：火床には焼土が残存するが、袖は完全に破壊されている。煙道は長さ1.9ｍを測るが、実際は2ｍ以上あったと予想される。カマド右側には、60×60×12cmの落ち込みがあり、付属施設と判断した。柱穴：主柱穴４基がある。柱穴は直径60～80cmの掘り方で、深さは18～42cmの規模をもつ。柱間寸法は3.0ｍで一定である。床：地山を床としており、小さな起伏はみられるものの平坦に近い。周溝：東壁の北東寄りと西壁中央を除き、幅20cm、深さ10cmの周溝がある。西壁の切れている部分は出入り口施設との係わりが推定される。遺物の出土状況：遺物は少量で大半



第12図　SB38実測図

が細片である。須恵器、土師器があり、４・６は床面遺物で、6はカマド火床と付属ピットから出土した。時期：３期に帰属する。

SB39　位置：南部Ａ区南端　図版13

検出：SB35の精査中に本址の床面を確認した。SB35･SK174に切られる。西壁をトレンチに、東側を自然流路によって本址の大半を失う。カマドの位置は不明である。床：貼り床がわずかに観察された。埋没：詳細は不明で、粗粒砂を主に米粒大の礫を含んでいた。遺物の出土状況：全体量は少ない。土師器の杯(1)が床面から出土した。時期：14期に帰属する。

SB40　位置：南部Ａ区南端　図版13

検出：SB39と同様に、トレンチ、流路により調査は西側の一部分に限られた。SB34に切られる。カマドは確認できなかった。床：地山を床とし、部分的に粘土をいれて貼り床をしていた。ピット：ピット７基を確認した。中でも南東隅のピットは直径60cm、深さ14cmで焼土粒や遺物を多量に含んでいた。埋没：細粒砂を主とするにぶい黄褐色土層で、炭化物、焼土を混在していた。人為による埋め戻しと思われる。遺物の出土状況：須恵器、棒状の鉄製品があり、床面からの出土が多い。７・10は北東のピットから、それ以外は南東隅のピットからで、８個体が入っていた。１・２・６は完形に近く、貯蔵穴への一括遺棄か、投棄であろう。時期：５期に帰属する。

SB42　位置：南部Ａ区東側　図版23

検出：IIA_1層で検出するが、遺構の重複関係が錯綜し、プランの決定は困難を極めた。北、西壁のプランは容易に確定できたが、東、南壁についてはSB24に切られるために不鮮明である。北側はSB69に切られる。カマド：東壁中央に位置する。SB24によって撹乱を受け、火床のみ確認した。床：厚さ３～20cmの貼り床が中央に観察された。埋没：覆土はIIＡ層質の粘土ブロックで人為的な埋没状況である。遺物の出土状況：出土量は微量である。時期：遺物の量が少なく、時期決定の根拠が弱く、その限定は難しい。

SB43　位置：南部Ａ区東側　図版23

検出：ＩＤ層で検出する。ST９を切る。カマド：北東隅に位置する石組カマドである。袖は原形を止めないが、構築材の礫８個が火床付近に散乱していた。床：東側で地山の礫層が露出しており、堅緻な部分は認められない。西側がわずかに低い。ピット：北西にピット２基がある。北壁際のピットは38×28×10cmの規模を有し、灰釉陶器の椀２点(12･13)が出土した。埋没：灰赤色の細粒砂に鶏卵大の礫、粘土粒が混入していた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、黒色土器Ａがある。覆土中と床より出土するが、床面に多く（２・６・７・９・10・11・13)、特に、カマド周辺に集中する。時期：14期に帰属する。

SB44　位置：南部Ａ区東側　図版18

検出：IIA_1層上位で検出する。5.8×4.8ｍの隅丸長方形のプランである。カマド：北東隅に位置し、煙道は主軸と同じ方向に延びる。袖は完全に破壊されているが、焚口前には焼痕のある礫が散乱していることから、石組カマドの可能性がある。煙道は長さが1.6ｍで、煙道先には焼土が堆積していた。床：地山を床とし、小さな起伏がみられ、部分的に敲き締めがある。埋没：にぶい黄褐色を呈した細粒砂に白色砂と炭化物粒が混在した単一層である。遺物の出土状況：全体量は少ない。灰釉陶器椀（1）は床面遺物である。他に鉄製紡錘車がある。時期：14期に帰属する。

SB46　位置：南部Ａ区　図版19

検出：IIA_2層中位で検出する。直交軸方向が80cm程長い隅丸長方形のプランである。カマド：火床の痕跡は検出されないので確定はできないが、北東隅に礫が集中することから、北東隅に位置していた可能性が強い。床：部分的に粘土を入れた床で平坦である。南壁際や北西隅に焼土が認められた。埋没：細粒砂を主とするにぶい黄褐色土層で、鶏卵大の礫を含む。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、黒色土器Ａが

ある。床面遺物（2・4・6～13）は礫の集中した箇所と東側に多く、残存率が高い。12は西壁に接して出土した完形品である。時期：13期に帰属する。

SB47　位置：南部A区　図版19

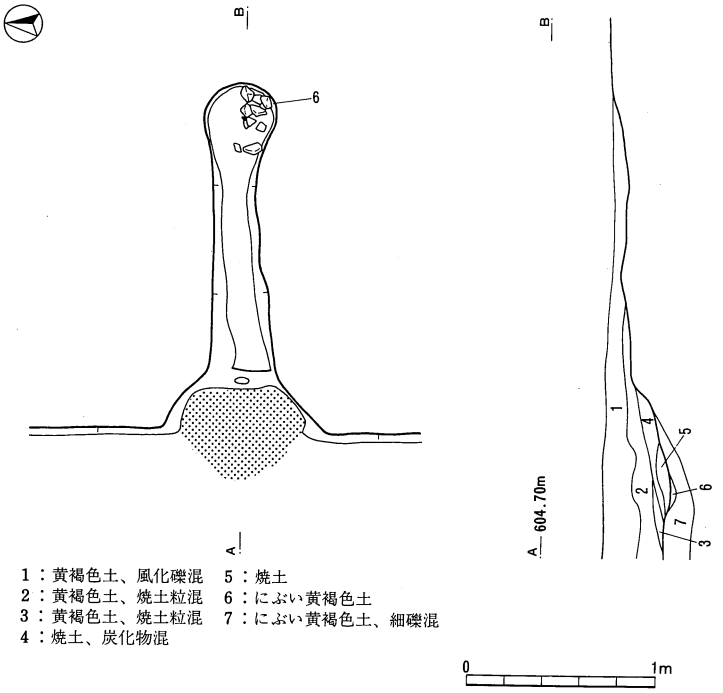
検出：二年次にわたって調査を行う。IIA_2層中位で検出する。本址の床面のレベルは周囲の遺構に比べてかなり高いために、床面のみが確認できた。カマド：北東隅に位置すると思われる。明瞭な火床は捉えられなかったが、焼土粒が散見された。床：地山は礫層で、礫の間に粘土を入れた後、整地した痕跡がある。埋没：細粒砂を主とし、米粒大の礫と炭化粒が混入していた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、いずれも床面遺物である。時期：13期に帰属する。

SB48　位置：南部A区西側　図版22

検出：IIA_2層で検出した。当初、東側はSB49と重複するためにプランの確定は出来なかったが、覆土中の礫の混入量と断面観察によって、本址が切られることを確認した。また、北側をSD５に、北西隅でSK96に切られる。カマド：火床のみが確認された。東壁中央に位置する。柱穴：西側に主柱穴２基がある。円形の掘り方で直径32～40cm、深さは16～22cmで共通する。柱間寸法は2.4ｍである。床：地山の礫層に粘質の土を入れて整地した床で、平坦である。埋没：覆土は黒褐色を呈する細粒砂に焼土粒と白色砂を混入する。薄い粘土層を挟んで、分層されたが、下層は人為的な埋没を示す。遺物の出土状況：須恵器、土師器があり、床面遺物は少ない。遺物は床面から５cm程浮いて、西側に多い傾向がある（3・4）。住居が埋没する過程で一括投棄されたものであろう。時期：遺物の出土量が少ないため、時期の限定は難しいが、SB49に切られる状況から４期以前と判断される。

SB49　位置：南部A区西側　図版22、第13図

検出：西側でSB48を切り、北壁の一部をSD５に切られる。カマド：東壁中央に位置する。完全な函形カマドではないが、わずかに壁を掘り込んで作られていた。袖は残存せず、火床には焼土が観察された。煙道は長さ1.6ｍを測り、煙道先には土師器の甕（6）が潰れた状態で出土した。柱穴：主柱穴４基がある。柱穴の規模は、直径32～52cm、深さ24～50cmで南側のピットでは柱痕跡が確認された。柱間寸法は2.4～2.8ｍとほぼ一定である。床：掘り方に砂質の土を入れて固めた床で、南壁際が高く凹凸が少ない。埋没：礫層を挟んで分層されるが、基調となる土はにぶい黒褐色の細粒砂で混入物も変わらないことから、短時間のうちに埋没したと思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器が出土するが、６を除いて、上層からの出土である。時期：４期に帰属する。



第13図　SB49カマド実測図

SB50　位置：南部A区西側　図版22

検出：二年次にわたって調査をした。IIA_2層上位で検出する。SB51と重複するが本址のカマドがSB51の覆土中に構築されることから新旧関係は明白である。カマド：北東隅に位置する。袖などは原形を止めていない。床：地山を床とし、西側が低い。諸施設：用途不明の落ち込み3基を検出したが、南東隅の落ち

込みは78×58×14cmと規模が大きく、覆土中に焼土、炭化物が含まれていた。埋没：にぶい黒褐色の細粒砂を基調に粘土粒が混入する単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器を出土したが、覆土、床面とも遺物は少ない。時期：14期に帰属する。

SB51　位置：南部Ａ区西側　図版22

検出：南西隅でSB50に切られる。一辺4.7ｍの方形プランである。カマド：東壁中央に位置するが、袖は完全に破壊されている。袖石の抜き取り痕が確認されたことから、石組カマドと思われる。火床には焼土が残り、須恵器の破片が集中して出土した。床：ⅡＡ$_2$層の地山を床としていた。埋没：粗粒砂と粘土粒が混在したにぶい黒褐色土層で、炭化物がわずかに観察された。遺物の出土状況：須恵器などがあるが、全体量は少ない。床面遺物はカマドに集まっており、１・２は火床から出土した。時期：２期に帰属する。

SB52　位置：南部Ａ区西側　図版24

検出：SB51の北隣りにあり、二年次にわたって調査した。カマド：北東隅に位置し、壁外に張り出して構築された石組カマドである。左袖にあたる箇所に焼痕のある花崗岩１個が残存していた。床：全面に薄い貼り床が認められ、小さな起伏がある。南西隅には焼けた礫９個固めて置き、周囲には炭化物や焼土粒が散在しており、住居の廃絶時に何らかの行為が為されたと思われる。諸施設：カマド右側と南東隅にある落ち込みは、規模が一辺66～88cmと大きく、遺物も出土していることから、貯蔵穴と思われる。埋没：暗褐色の細粒砂に米粒大の礫、炭化物、焼土粒が混在する単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子があり、カマド周辺からの出土が多い。カマド右側のピットから土師器杯と椀（1・2・6）灰釉陶器椀（9）が、南東隅のピットから土師器の杯と羽釜（4・11）が破片で出土した。時期：13期に帰属する。

SB53　位置：南部Ａ区　図版21

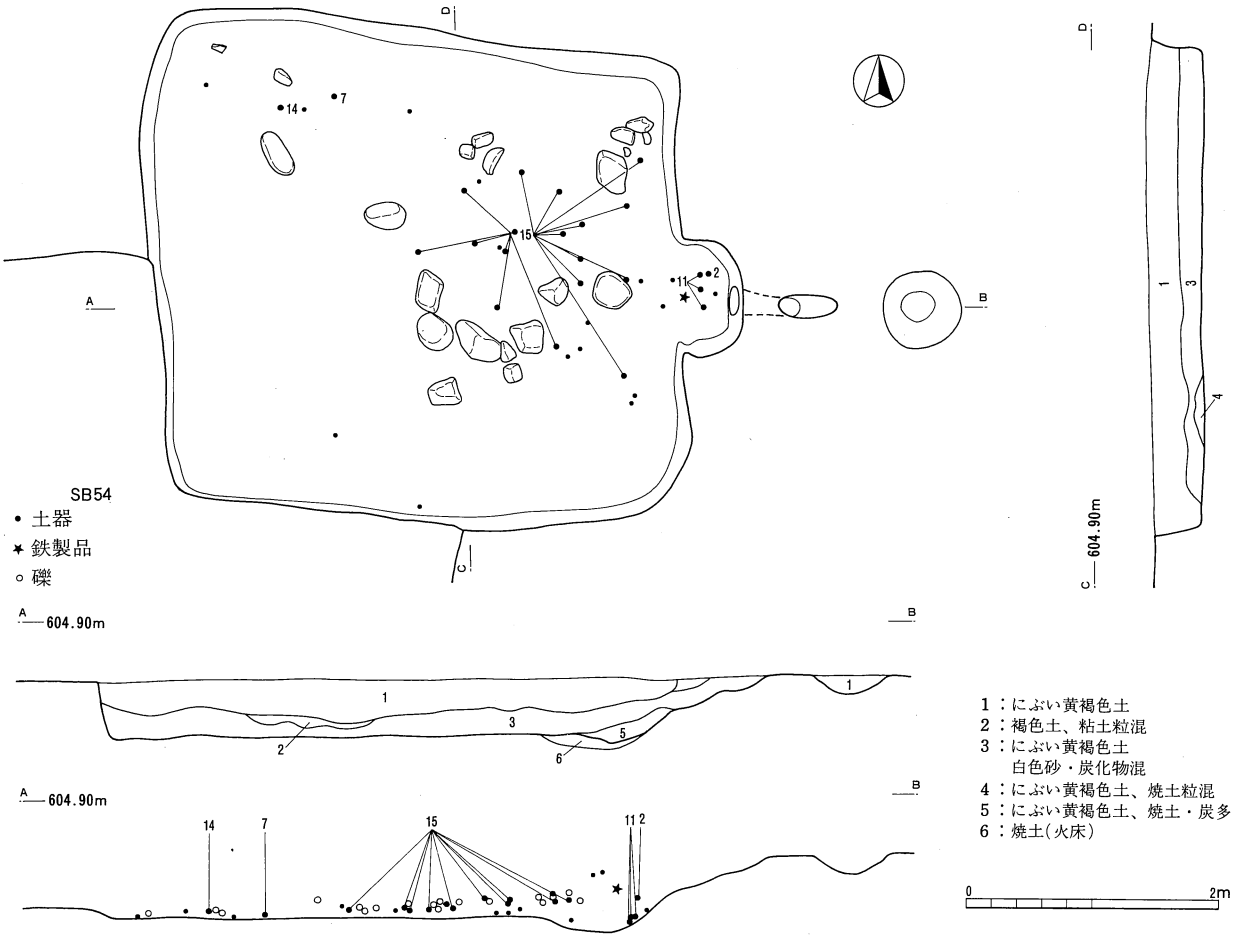
検出：ⅡＡ$_1$層下位で検出する、主軸方向が約80cm短い長方形のプランである。南側でSD５に切られる。カマド：石組カマドで東壁中央からやや北に寄る。袖の芯材は礫は花崗岩と硬砂岩を使用し、原位置を保ち、左右４個ずつ並べていた。袖の礫は床面下には掘り込みを持たず、床面から浮いて、粘土と共に構築されていたと思われる。カマド左側、北東隅には68×54×20cmの付属ピットがある。床：地山を床としていた。埋没：にぶい黄褐色を呈する粗粒砂に鶏卵大の礫、マンガン粒が混入する単一層で、人為による堆積と思われる。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、黒色土器Ａがあるが、全体量は少なく、カマド火床（2）とピット（1・3）から出土した。時期：13期に帰属する。

SB54　位置：南部Ａ区　図版21

検出：ⅡＡ$_1$層上位で検出する。SB55を切る。本址のカマドがSB55の覆土中に構築されることから新旧関係は明瞭である。カマド：東壁北隅寄りに位置する。袖は完全に破壊されていたが、付近には焼けた花崗岩や硬砂岩が８個散乱しており、石組カマドであった可能性が高い。煙道の底面はほぼ水平で、長さ1.2ｍを測る。床：地山を床としているが、わずかに敲き締めた痕跡がみられ、中央部が高い。埋没：細粒砂を主とする黄橙色土層で、白色砂、マンガン粒が混入していた。遺物の出土状況：土師器、白磁などがある。床面遺物はカマド周辺に集中する傾向がある（2・3）。白磁の碗は右袖があったと推定される位置から出土した。また、西壁南西隅寄りには、石錘11点が纏まって出土した。時期：15期に帰属する。

SB55　位置：南部Ａ区　図版21、第14図、PL９

検出：SB54の東隣に位置し、東側にあるSB56を切る。本址のカマドがSB56のプランにのることから、その関係は容易に確定できた。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。袖石の抜き取り痕が確認されたことから、石組カマドと思われる。火床は広い範囲が焼けている。煙道は全長1.8ｍと長く、煙出しは直径60cm、深さ16cmのピット状で検出された。柱穴：主柱穴４基がある。柱穴の掘り方は円形に近く、



第14図　SB55実測図

直径42～66cm、深さは6～24cmとばらつく。柱間の寸法は主軸方向が1.2･1.4m、直交軸が1.8mとプランの大きさに比べて狭い。床：中央を中心に堅緻な部分が確認され、酸化した鉄分が集積していた。埋没：粘土がブロック状に混じるレンズ状堆積を境に、おおよそ2層に分層された。上層、下層とも黒褐色の細粒砂を主とするが、下層には粘土ブロックがみられ、人為的な埋没の可能性が高い。遺物の出土状況：須恵器、土師器、鎌があり、廃棄の状況で注目できる住居址である。遺物はカマド周辺に多いが、床面からわずかに浮いて出土する例が多い。カマドの袖に使用されたと思われる礫が投棄された状況と合わせて考慮すると、本址が廃棄されて埋没し始めた段階で、一括投棄された遺物であることが分かる。かなり大きな破片で散乱していた須恵器の甕 (15) は2層下位で出土したが完形ではない。時期：5期に帰属する。

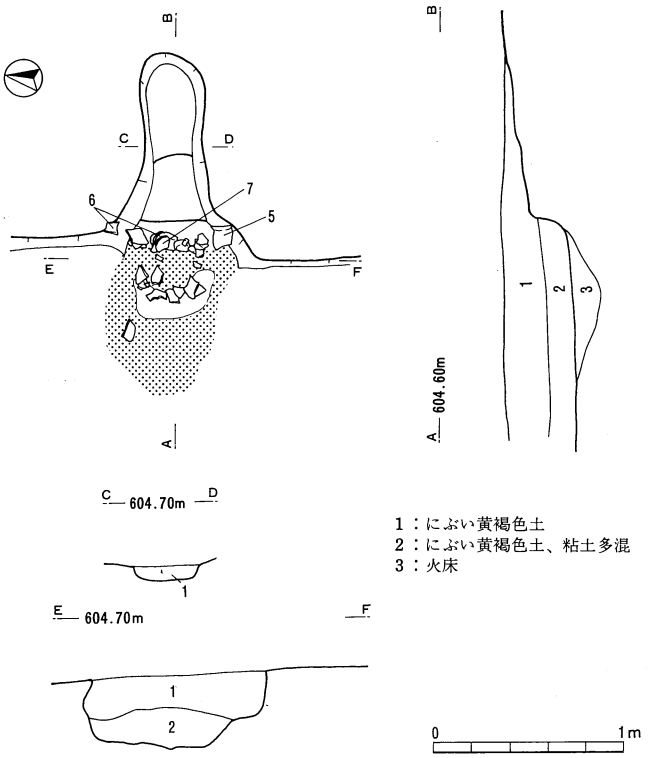
SB56　　位置：南部A区　　図版21

検出：SB55の東側に位置し、西側でSB55・SD5に切られる。主軸方向が50cm短い長方形プランである。カマド：東壁中央にあり、函形に掘り込む石組カマドである。袖は残存しないが、左右の袖石抜き取り痕が検出された。煙道の底面には凹凸があり、長さ1.1mを測る。火床は床面からわずかに掘り込まれ、奥壁と共に赤く焼けている。床：平坦な地山床であるが、中央が周囲に比して硬く締まっていた。埋没：細粒砂を基調とするにぶい黄褐色土層で、粘土ブロックの混入の有無で2層に分層した。下層は人為による埋没と思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器、砥石があり、全体量は少ない。図示した遺物は床面遺物で床全体に散在していた。砥石は北西隅付近の床面で出土した。時期：3期に帰属する。

SB57　　位置：南部A区　　図版24、第15図

検出：IIA_1層下位で検出する。北東隅でSB73と重複するが、覆土の質的な差は本址の方が旧いことを示

していた。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築する粘土カマドで、天井部と思われる焼土化した粘土がそのままの形状で火床の上に落ちていた。さらに、その上より数個体の土師器甕が出土した。床：地山を床としているが、中央に敲き締めの痕跡がある。埋没：細粒砂を主とし、下層に粘土粒や風化礫が多く混在していた。遺物の出土状況：須恵器、土師器、砥石があり、覆土中から床面にかけて出土した。カマド火床には土師器甕（5～8）が集中して出土したが、完形になるものは少なく、住居の廃棄時に投棄されたものと思われる。また、須恵器の甕(10)は西壁に接して出土した床面遺物である。時期：２期に帰属する。



第15図　SB57カマド実測図

SB58　位置：南部Ａ区

図版24、第16図、PL９

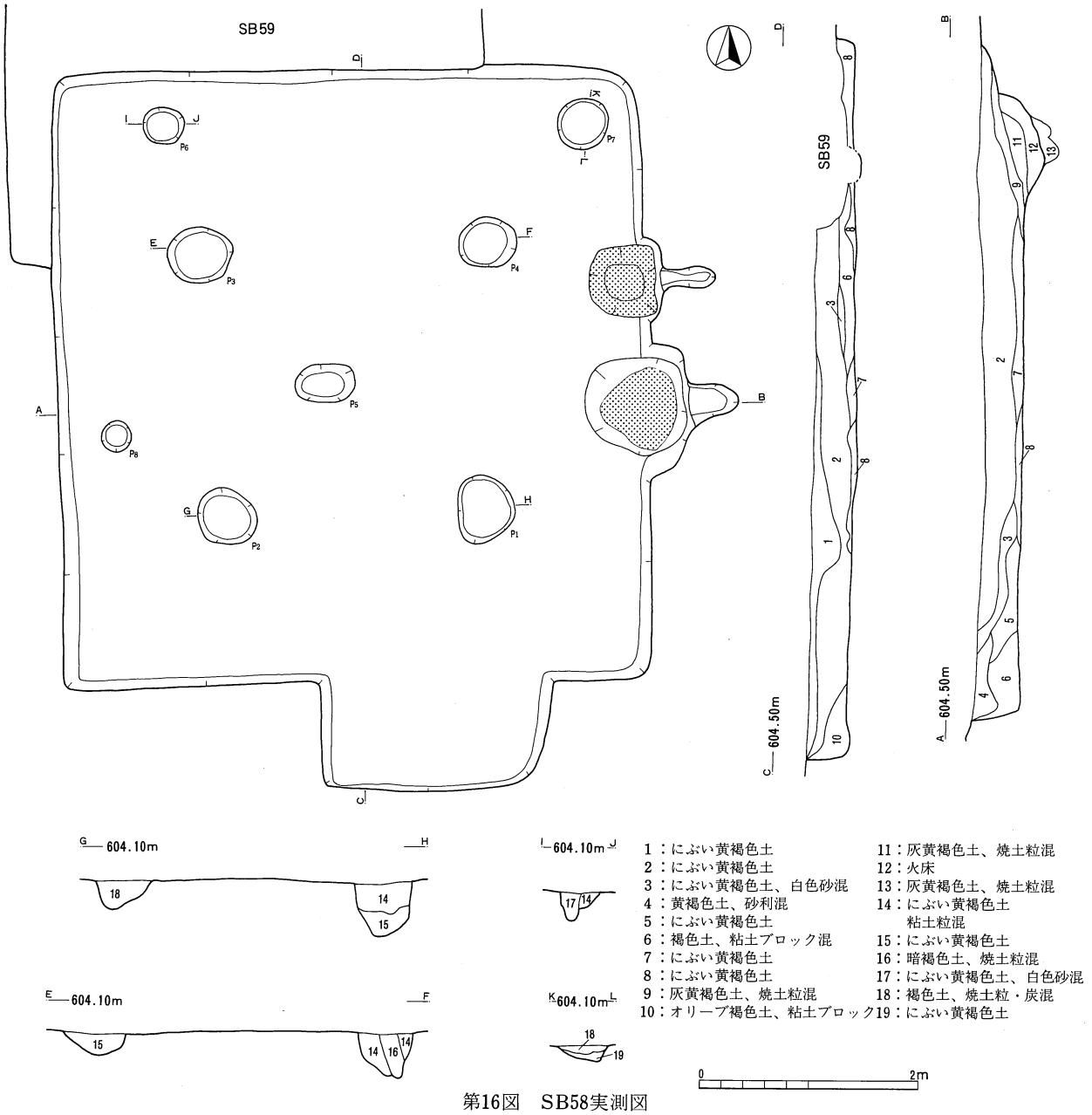
検出：ⅡＡ$_1$層下位で検出する。南側に大きな張り出し部があり、別遺構と考えたが、トレンチによる土層観察の結果、本址の一部と判断した。南側でSK193に、北側でSB59に切られる。カマド：東壁中央に２つのカマドがある。両方とも函形カマドで袖は残っていない。当初、カマドの作り替えの可能性も考えられたが、覆土の状況をみると同時に埋没しており、さらに、住居構造の点からも住居構築時から２つのカマドを使用していたと解釈する方が妥当と思われる。煙道の形状は同一で、長さも北側が45cm、南側が50cmと大差ない。柱穴：主柱穴４基がある。柱間の寸法は2.4ｍと一定で、規格的である。Ｐ４では柱痕跡が確認された。床：南側の張り出し部は２×１ｍで床面とのレベルは変わらない。床面、張り出し部とも貼り床が施され、小さな起伏が認められた。張り出し部は出入り口施設との関連が考えられるが、断定できない。埋没：２層に大別され、下層はⅡＡ$_1$・ⅡＡ$_2$層の粘土ブロックが堆積することから人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器があるが、大きな住居址では珍しく遺物が少ない。３は南側のカマド火床から、４・５は北側のカマド周辺から破片で出土した。時期：５期に帰属する。

SB59　位置：南部Ａ区　　図版24

検出：SB58の北側に位置し、SB58を切る。主軸方向が50cm長い、長方形プランである。カマド：北東隅に位置する。袖は遺存せず、火床は床面から10cm程下がったレベルで確認した。煙道は長さ50cmである。床：全面に白色砂とシルトが混在した土で整地しており、カマド付近が堅くなっていた。埋没：暗褐色の細粒砂を基調とする単一層で、白色砂、焼土粒、炭化物などを混在する。遺物の出土状況：軟質須恵器が出土した。遺物は覆土中から床面にかけてあるが、小片で本址に確実に帰属すると思われる遺物はなかった。時期：14期に帰属する。

SB60　位置：南部Ａ区　　図版24

検出：SB59の北側に隣接し、方形のプランを示す。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築する。袖は破壊されているが、袖石と支脚石の抜き取り痕が検出されたことから、石組カマドと思われる。火床は焼土化し、炭化物が散っていた。煙道は80cmを測る。床：掘り方にⅡＡ$_2$層質の粘土を入れて整地した後、敲き締めている。埋没：２層に分層される。にぶい黄褐色を呈する細粒砂を基調とするが、



第16図　SB58実測図

下層には粘土がブロック状に堆積することから、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器がある。床面遺物（1～5・77）は少なく、2・3はカマド火床から、4・5はカマド右側から出土した。また、1は北西隅のピットからほぼ完形で出土した。時期：5期に帰属する。

SB61　　位置：南部A区　　図版25

検出：IIA_2層で検出する。東側のSB62を切るが、当初、新旧関係が不明のため先行トレンチを入れたところ、本址のカマドの一部が断面で観察され、さらに、、カマドがSB62の覆土中に構築されることから新旧関係を決定した。カマド：東壁中央やや南寄りに位置する。函形カマドで袖石抜き取り痕が確認されたことから石組カマドと思われる。火床、壁の一部が焼けている。煙道は長さ1.9mで、火床から緩やかに立ち上がり、煙道口はトンネル状に遺存していた。諸施設：カマド右側には68×56×8cmの落ち込みがある。カマドに付属する施設であろう。床：IIA_2層質の粘土を掘り方に入れて整地し、敲き締めている。埋没：おおよそ2層に分層され、灰黄褐色の細粒砂を主とする状況に変化ないが、下層には粘土がブロック状に堆積する。遺物の出土状況：土師器、須恵器があるが、全体量は少ない。6～8は床面遺物で、8はカマ

ド左側の壁際から完形で出土した。時期：２期に帰属する

SB62　位置：南部Ａ区　図版25

検出：SB61の東側に位置し、SB61に切られる。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。火床は直径55cmの範囲で焼け、焚口には炭化物が広がる。煙道は遺存状態が良く、煙道口がトンネル状に残っていた。柱穴：主柱穴３基がある。北西にあると思われた柱穴はSB61に切られるため確認できなかった。柱穴の規模は径30～41cmで、深さは11～20cmである。柱間の寸法は2.4ｍと一定で整然とした配列である。床：床面は酸化した鉄分が集積し、硬化していた。それを剝ぐと、さらに、床のような状態の面が検出された。その面には遺物が無いことから、床を構築する際に二回に分けて粘土を入れて敲き締めたものと思われる。類例の少ない構造である。埋没：細粒砂を主とし、3層に分層された。２層以下は暗褐色の粘土がブロック状に堆積しており、人為的な埋没である。遺物の出土状況：土師器、須恵器があるが覆土中、床面とも出土量は少ない。図示した遺物は床面遺物で、6はカマド火床から出土した。時期：１期に帰属する。

SB63　位置：南部Ａ区　図版21

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。北東隅でSB64を切る。カマド：北東隅に位置する。袖は残存していないが、袖石の抜き取り痕が確認されたことから石組カマドと思われる。煙道は長さが62cmで、住居址の主軸方向から北へ約30度振れた方向へ延びる。諸施設：カマド右側に、180×90×26cmの大きな落ち込みがある。被熱した花崗岩が数個あり、住居址と同時に埋没していることから、カマドに付属する施設の可能性が強い。床：壁際を残し、ⅡＡ$_2$　層質の粘土を入れて敲き締めている。埋没：にぶい黄褐色を呈する覆土は、細粒砂を基調に炭化物を混入させた単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、黒色土器Ａ、刀子、鉄鏃がある。床面遺物(１～８)は床全体に散在するが、図示した遺物の多くは、カマド周辺から出土したもので、２は付属ピットから、１・５・６・８は焚口付近からの出土である。時期：14期に帰属する。

SB64　位置：南部Ａ区　図版21

検出：SB63の東側に隣接し、SB63に南西隅を、SK223に東壁を切られる。カマド：北東隅に位置する。壁をわずかに掘り込んで構築する。袖は遺存しないが、袖石の抜き取り痕が確認されたことから石組カマドであると考えられる。煙道はほぼ水平に延び、長さ1.35ｍを測る。煙道口、奥壁は、焼土化していた。カマド右側には小さな落ち込みがあるが、付属する施設になるか否かは不明である。床：全面に整地した痕跡が認められるが、特に中央が堅緻で、焼土粒と炭化物が確認された。埋没：ⅡＡ層に由来する暗褐色の細粒砂を主とし、粘土ブロック、炭化物、焼土粒が混入する。人為的埋没であろう。遺物の出土状況：須恵器、土師器、砥石があるが、覆土中、床面とも遺物は少ない。土師器甕の２はカマド火床から、床面南側からは砥石が出土した。時期：３期に帰属する。

SB65　位置：南部Ａ区東側　図版23

検出：ⅡＡ$_1$層下位で検出する。南側でSB68と重複するが、覆土の質的な差から本址の方が新しいことを確認した。北壁際にはSK112･113が接する。カマド：袖は原形を止めていない。火床は直径60cmの範囲で焼け、床面よりわずかに掘り込まれていた。煙道は掘り抜いて構築されており、煙出しまで1.6ｍの長さがある。諸施設：カマド右側に直径82cm、深さ８cmの大きな落ち込みがあり、カマドに付属する施設と思われる。床：中央は堅緻で、掘り方にⅡＡ層質の粘土を入れている。埋没：北側に薄い粘土層があり、それを境に分層した。にぶい黄褐色の粘土質のシルトを基調とし、炭化物が混在していた。短時間に埋没したと思われる。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器、土師器、羽口がある。上層から床面にかけて遺物が出土したが、カマド火床から出土した土師器の甕(16)がほぼ完形である他はいずれも細片である。３・５・７・11・12は床面遺物で、羽口は覆土中からの出土である。時期：４期に帰属する。

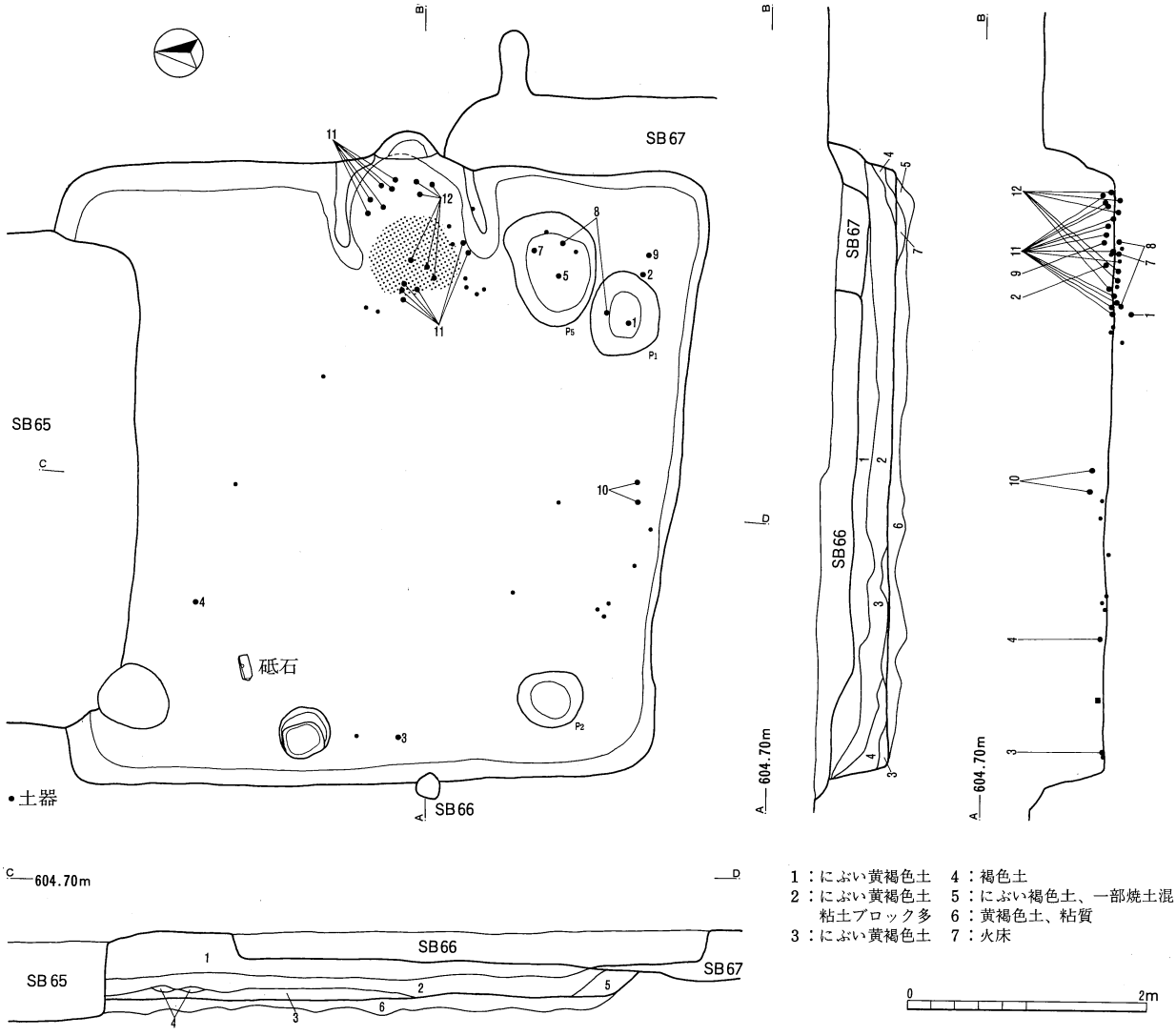
SB66　位置：南部Ａ区東側　図版23

検出：SB25～69にかけての遺構の重複関係が複雑な箇所にあたる。当初、カマドの煙道のみが検出されたが、本址のプランがSB68の覆土中に入っていたため、プランの確定は難しかった。SB67･68を切る。カマド：西壁中央に位置する。袖は遺存せず、火床も焼土粒と炭化物が散在する程度で明確でない。煙道は長さ1.0mで、底面は平坦になっていた。床：SB68の覆土中に構築されているため、面的にしっかり捉えられなっかったが、カマド焚口は堅緻である。埋没：細粒砂を基調に炭化物が混入する単一層である。遺物の出土状況：土師器、須恵器、鎌、鉄鏃が出土したが、その量は極めて少なく、本址に確実に帰属する遺物は明確でない。時期：新旧関係などから3～4期に帰属すると考えられる。

SB67　位置：南部A区東側　　図版23

検出：SB66と同様に検出は困難を極めたが東壁と西壁のプランは明確に確定できた。北側でSB66に、南側でSB69にそれぞれ切られる。SB66とは土層観察から、SB69とはSB69のカマドが本址にのることから新旧関係を決定した。カマド：北東隅に位置する粘土カマドである。左袖は壁に接しており、壁を利用して構築していたと思われる。火床にはわずかに焼土が認められた。床：中央を中心に堅緻な部分がある、平坦な床である。埋没：細粒砂に粘土粒が混入する単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器があるが、覆土中、床面とも遺物は少なく、いずれも細片である。時期：13期に帰属する。

SB68　位置：南部A区東側　　図版23、第17図、PL10



第17図　SB68実測図

検出：SB65～67に切られる。カマド：東壁中央に位置する。石組カマドで袖石は左右とも抜き取られた状態で、粘土だけが残存していた。火床は焼土化し、その中央には支脚石の抜き取り痕が確認された。諸施設：カマド右側に96×70×23cmの大きな落ち込みがあり、カマドに付随する施設である可能性が高い。柱穴：主柱穴4基がある。柱間の寸法は主軸方向が3.2ｍ、直交軸方向が4.2ｍと3.2ｍでカマド寄りの柱間の間隔の方が長い。床：掘り方にⅡA_2層質の粘土を入れて整地し、敲き締めており、特に、中央と南側が堅緻である。西壁中央には約30cmの平らな花崗岩が置かれていた。埋没：大きく２層に分層されるが、上層は細粒砂を主とする自然堆積であるが、下層はⅡ層質の大きな粘土ブロックが観察され、人為的な堆積状況を示す。遺物の出土状況：土師器、須恵器、砥石、土製紡錘車がある。特に、土師器の煮炊具が多い。遺物は上層から床面にかけて出土したが、床面から出土したものが多く、カマド周辺やその右側、Ｐ５付近に集中する。11の土師器甕はカマド火床内に一括投棄された遺物で、完形に近い状態で出土したものもある。時期：２期に帰属する。

SB69　位置：南部Ａ区東側　図版23

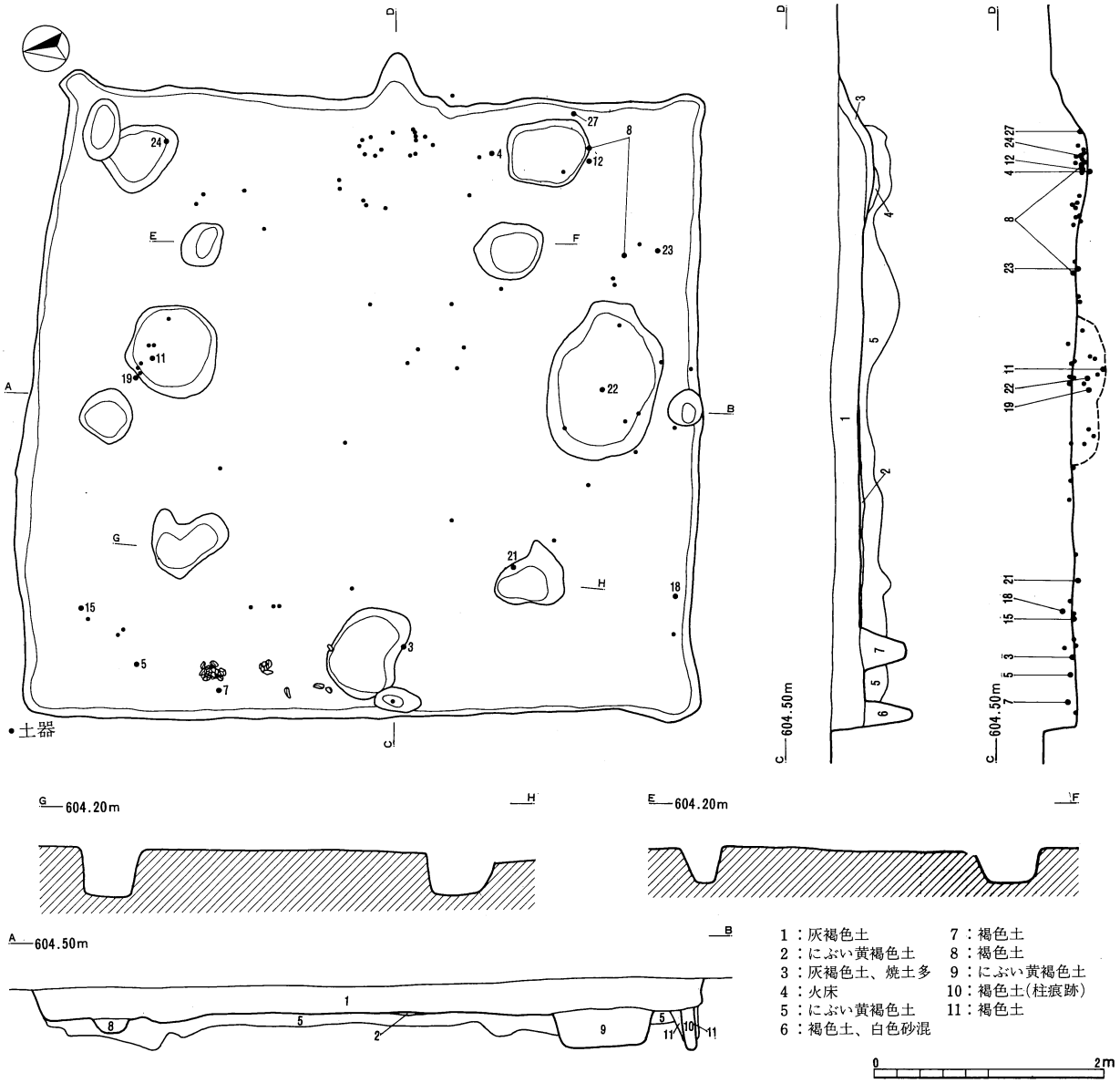
検出：SB24･42･67を切る。主軸方向が1.0ｍ長い長方形の住居址である。カマド火床の確認から住居と認定し、SB67のプランにのることから新旧関係を決定した。カマド：東壁中央にあり、火床のみ確認した。床：掘り方に米粒大の礫と粘土を混ぜて入れており、比較的堅緻であった。埋没：細粒砂を主とする単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが全体量は極めて少ない。１は床面から出土した。時期：新旧関係などから13期に帰属する

SB71　位置：南部Ａ区東側　図版23、第18図、PL10

検出：SB65の東側に隣接する。ⅡA_2層で検出し、南壁でSK206と重複するが、新旧関係は不明である。また、北壁の一部がSB27に切られる。プランの四隅がわずかに張り出す方形のプランである。カマド：東壁中央にあるが、袖は完全に破壊されていた。火床は床面から低く、焼土、骨片が認された。諸施設：火床の右側にはカマドに付属すると思われる72×60cmの落ち込みがある。柱穴：主柱穴４基があり、柱穴の規模は直径40～70cmで、深さは32～46cmとほぼ一定である。柱間の寸法は2.6～2.8ｍで規格性が高い。南壁中央、西壁中央、北東隅にあるピットは、一部柱痕跡が観察されたことや、深さが30cm前後であることから壁柱穴の可能性もある。床：荒掘した後、中央部を中心に整地しているがかなり凹凸がある。諸施設：南壁際に140×54×22cmの大きな落ち込みがある。出入り口に関連する施設であろう。埋没：ⅡＡ層質の粘土ブロックが主となる灰黄褐色土層で、人為的埋没と思われる。遺物の出土状況：遺物の全体量が多く、中でも須恵器の食器が目立つ。床面遺物はカマドから南東隅にかけて集中する傾向が認められるものの、床全体に散乱している。遺物は残存率の高いものが多く、本址に帰属する遺物が多いと判断される。時期：５期に帰属する。

SB72　位置：南部Ａ区東側　図版23、第19図、PL19

検出：SB71の北側にあり、SB71･SK167を切り、SK266に切られる。いずれも覆土の質的な差から新旧関係を決定した。カマド：東壁中央に位置し、残存状態が良好である。完全な函形カマドではなく、壁をわずかに掘り込んでいる。床面を掘り込んで立てた袖石は左右とも残り、縦に２個ずつ配置されていた。礫はすべて花崗岩である。火床、奥壁とも焼土化しており、火床には骨片や遺物が散乱している。柱穴：主柱穴４基がある。柱間の寸法は2.4～2.6ｍと一定で、柱穴の平面規模や深さもほぼ一定である。床：荒掘りの深さが均一でないが、細粒砂と粘土が混在した土を入れて固めている。床は壁際が低く、小さな起伏が認められる。埋没：覆土はⅡＡ層を基調とし、部分的に炭化物層を確認したことから分層したが、上･下層とも人為的埋没である。遺物の出土状況：須恵器、土師器があり、遺物は覆土から床面にかけて出土し、その全体量も多い。１・３・７～10･16は床面遺物で、カマド火床内（８～９）とその右側に多くみられ



第18図　SB71実測図

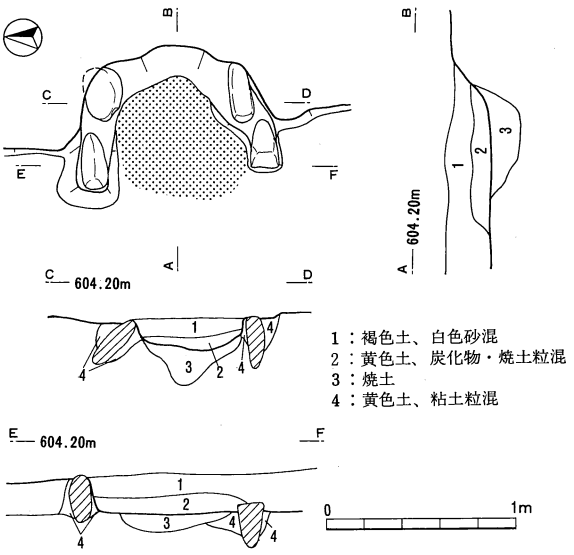
た。時期：４～５期に帰属する。

SB73　　位置　南部Ａ区　　図版25、第20図

検出：ⅡA$_1$層で検出した。煙道先には土師器の甕が潰れた状態で出土していた。SB57を南西で切る。カマド：東壁中央にあり、壁をわずかに掘り込んで構築されていた。袖は完全に破壊され、火床のみ確認された。煙道は長さは1.6ｍあり、煙出しは直径46㎝、深さ16㎝の円形で、皿状の断面形を呈す。煙道先の土師器の甕は煙突としての機能をはたしたものであろう。柱穴：主柱穴４基を確認した。柱間の寸法は2.4～2.5ｍとほぼ同じで、平面形の規模は直径40～64㎝、深さ36～50㎝を測る。柱の配置が他の住居址と異なり、全体的に西側へ寄っている。住居空間の利用の点で興味深い。床：西側を深く荒掘りし、厚いところで約20㎝の粘土を入れて整地している平坦な床である。埋没：にぶい黄褐色の細粒砂を主とし、下層に粘土粒が多い。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器、土師器、棒状鉄製品がある。床面遺物(２～10)はカマドの周囲とその右側に集中する。土師器の甕(８・９)は火床から、11は煙道煙出しから出土した遺物である。時期：５期に帰属する。

SB74　　位置：南部Ｂ区　　図版26

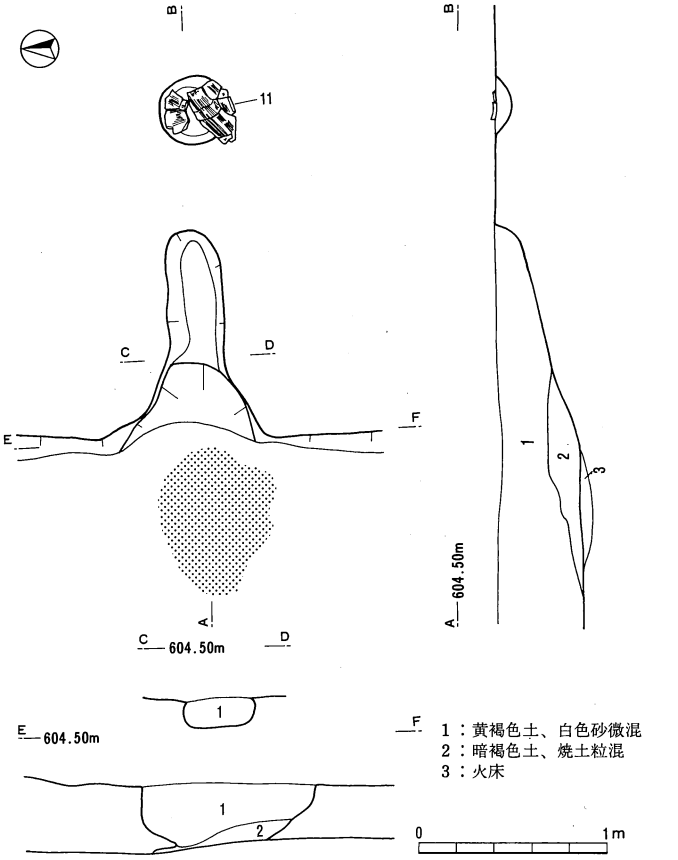
検出：ⅡA$_2$層で検出する、一辺5.9ｍの大型の住居である。西側にあるSB79と重複するが、本址がSB79のカマドを破壊することから新旧関係を決定した。周囲には規模の大きな住居があり、それらとの関連性が興味深い。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。袖に使用されたと思われる粘土がわずかに残存していた。また、支脚石が立った状態で検出された。柱穴：主柱穴３基がある。南西にあると思われる柱穴は床剝ぎの精査によっても検出できなかった。柱間の寸法は2.9～3.1ｍで一定である。柱穴の規模は径30～68㎝、深さ18～34㎝を測る。床：地山の礫層間にⅡA$_2$層質の粘土を入れている。埋没：にぶい黄褐色の単一層で、粗粒砂を基調に鶏卵大の礫、白色砂、粘土粒が混在する。遺物の出土状況：土師器、須恵器、砥石、鉄器類がある。須恵器の食器が多い。図示した遺物は（2・3・7・9・16）と砥石を除き、いずれも床面遺物で、カマド周辺から北東隅にかけて多く出土したが、1が完形に近い他は破片での出土がほとんどである。時期：４期に帰属する。



第19図　SB72カマド実測図

SB75　位置：南部Ｂ区　図版26

検出：他の住居址との重複が激しく、プランの確定は難航した。SB102に切られ、SB76・77を切る。SB76とは本址のカマドがSB76の壁を切る位置にあること、また、SB77・102との関係は覆土の質的な差から確定した。カマド：西壁中央に位置するが、袖は完全に破壊され、火床は明確でない。煙道は80㎝の長さを掘り抜いて構築し、煙道口は床上10㎝の位置にある。諸施設：カマド右側に102×78×26㎝の大きな落ち込みがあり、カマドに付随する施設と思われる。床：平坦な地山床である。東壁の南東隅寄りが幅1.7ｍ、奥行0.6ｍ張り出していた。埋没：粗粒砂を主とし鶏卵大の礫と粘土粒を多量に含む褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器があり、食器が多い。図示した遺物は、８・17・19・22を除き、床面遺物である。特に、４・６・７・９・10・16・19・21はカマド右側のピットからほぼ完形で出土し、さらに、１・２も完形品で床面遺物の残存率が高い。時期：12期に帰属する。



第20図　SB73カマド実測図

SB76　位置：南部Ｂ区　図版26

検出：プランの多くを他の住居址に切られるため、西壁の一部しか存在していなかった。SB77・79を切り、75・102に切られる。SB77・79とは覆土中の礫の含有量によって新旧関係を決定した。カマド：西壁中

央に位置し、煙道のみが残る。煙道口は床から10cm高い位置にあり、長さは70cmを測る。床：詳細は不明である。埋没：粗粒砂を主に、白色砂と粘土粒を混入する単一層である。遺物の出土状況：遺物の全体量は極めて少なく、図示し得なかった。時期：新旧関係から12期以前であるが、調査した範囲がわずかなため時期の限定は難しい。

SB77　位置：南部Ｂ区　図版26

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。北側でSB75に、中央をSD８に切られる。SD８はカマド煙道を破壊している。カマド：函形カマドが東壁中央に位置する。奥壁と火床の一部が赤色化しており、袖は完全に破壊されていた。床：荒掘りした後、ⅡＡ層質の土を入れて整地した平坦な床であるが、脆弱である。埋没：細粒砂を主とする暗褐色の単一層で、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器、棒状鉄製品があるが、全体量は少ない。図示した遺物は床面出土であるが、１・２・４はカマド火床内から破片で、鉄製品は住居の中央の覆土中からそれぞれ出土した。時期：４期に帰属する。

SB78　位置：南部Ｂ区　図版28

検出：SB79の調査中に別のカマドを確認し、再検出の結果、本址の存在を認めるに至った。SB79･80を切る。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。火床には焼土が散り、緩やかに煙道へ続く。左右の袖石1個ずつが原位置に残っていた。床：地山を床としており、わずかな起伏がある。埋没：ⅡＡ層由来の粗粒砂を主とし、３cm以下の礫を含むにぶい黄褐色の単一層で、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、緑釉陶器、鎌、刀子などが出土した。床面遺物(２～５)は北側に多いが、細片での出土がほとんどである。鎌も床面遺物である。時期：14期に帰属する。

SB79　位置：南部Ｂ区　図版26

検出：周辺の住居址との重複が多く、プランの確定は難航した。SB80を切り、SB74・78・102に切られる。SB74とは74が本址のカマドを壊し、78,102はカマドが本址覆土中に構築されることから新旧関係を決定した。カマド：東壁中央にあるが、撹乱を受けるため詳細は不明である。火床は50×44cmの規模で焼土化していた。床：砂利の混在したⅡＡ$_2$層の地山を床としており、平坦である。埋没：粗粒砂を主とし、多量の中礫と少量の粘土粒を含む単一層である。遺物の出土状況：須恵器、土師器があるが全体量が少なく、住居の大半が切られるため詳細は不明である。図示した遺物は床面遺物で、３は北東隅から完形で出土した。時期：２期に帰属する。

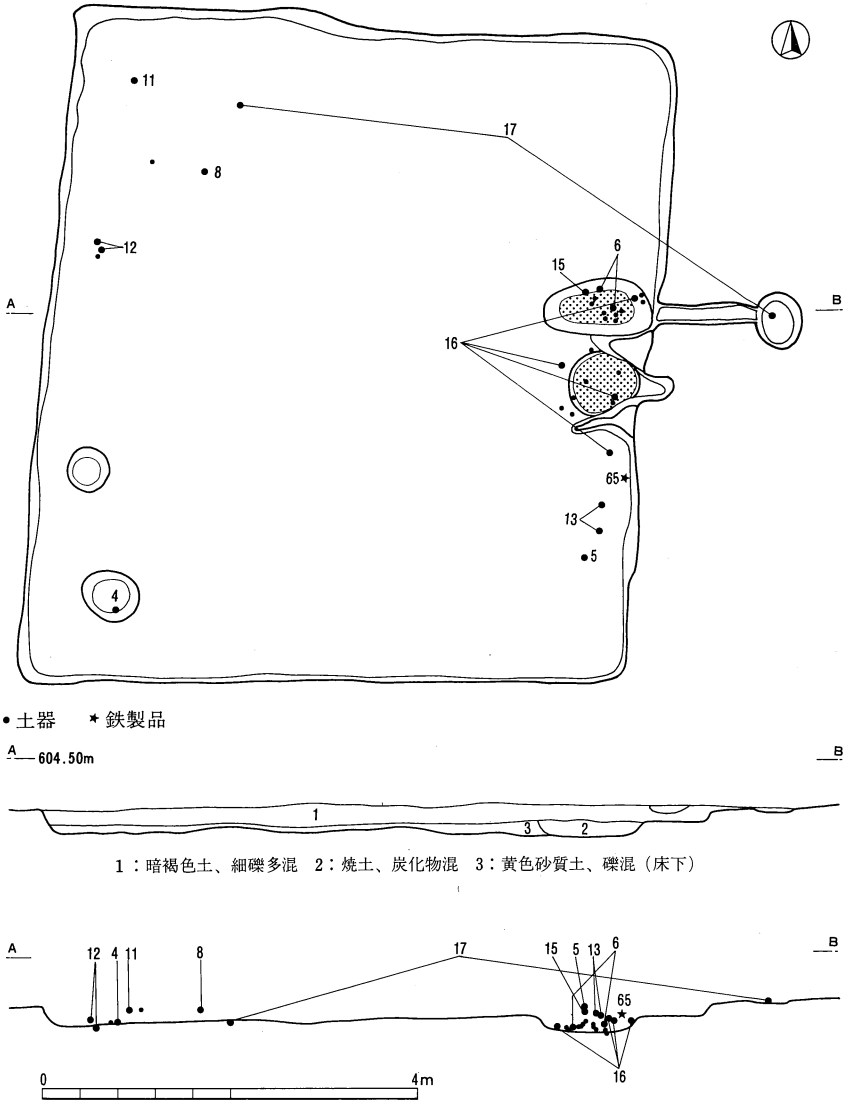
SB80　位置：南部Ｂ区　図版28、第21図、PL10

検出：南側でSB78･79と、北東隅でSB82と重複する、6.8×6.3ｍの大型の住居址である。当初、東壁にカマドが２つ存在したことから２軒の住居址の存在も考えられたが、プランや覆土の状況から１軒の住居址と判断した。新旧関係についてはSB79が本址覆土中に構築され、SB79･82の覆土とは質的に異なることから本址が古いことを確認した。カマド：２つのカマドが同時期のものか、覆土の状況からは判断できない。北側のカマドの袖は遺存せず、火床は82×70cmの規模で焼土化していた。煙道の底面は焼け、長さ1.5ｍと長く、煙出しも60×45×5cmと大きい。南側のカマドは粘土カマドで、火床が焼土化する。煙道は長さ55cmである。床：地山の礫層が一部露出する平坦な床であるが、ⅡＡ層質の土を入れて固めている。埋没：粗粒砂を基調に、細礫を含む暗い褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、須恵器、円面硯、鉄製品がある。遺物はカマド周辺と西壁際に多い。図示した遺物は１～３・７・10・11・円面硯を除き床面より出土した。貯蔵具がカマド焚口に集中し、２つのカマドから出土した遺物相互が接合する。また、煙道煙出しから出土した17は住居の床面遺物と接合しており興味深い。時期：４期に帰属する。

SB82　位置：南部Ｂ区　図版28

検出：北側でSB86に、煙道先ピットがSB85に、さらに、西壁がSK123に切られる。いずれも覆土の質的

な違いから新旧関係を決定した。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドで、袖は破壊されている。火床は140×100cmの広い掘り方を持ち、袖内側とともに焼けている。床：礫層の地山をそのまま床としており、西壁際がわずかに低くなる。埋没：粗粒砂を主にし、地山に由来すると思われる３cm以下の礫を多量に含む灰黄褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器の煮炊具があるが、全体量は少ない。図示した遺物は床面遺物で、カマド火床内(2)、南東付近でそれぞれ出土した。時期：２期に帰属する



第21図　SB80実測図(1:80)

SB84　位置：南部Ｂ区　図版28

検出：SB80の北側に隣接する。当初、東壁にカマドが２つあり、２軒の住居址とも考えられたが、調査の結果、カマドの作り替えであることが確認された。SB80・SK226・SD16を切る。カマド：東壁の中央と北東隅寄りに位置し、中央から隅へと作り替えている。古いカマドは、煙道を残すのみであるが、新しいカマドは火床が明瞭に、煙道も原形を止めている。煙道は両方とも掘り抜いて構築しており、長さも60cmで同じである。床：地山が礫層にあるために、そのまま床としているが、かなり凹凸がある。埋没：粗粒砂を基調に３cm以下の礫を多量に含むにぶい黄褐色土層で、部分的に粘土ブロックが観察された。人為的な埋没の様相を呈する。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器があり、カマド周辺に集中する傾向がみられる。３～８・11・12は床面遺物で、15～17の煮炊具は北側のカマド焚口から出土した。時期：12期に帰属する。

SB85　位置：南部Ｂ区　図版28

検出：礫層中で検出するが、東側は側道にかかるためにプランの検出のみで、西側半分を調査した。SB86・87に切られる。床：礫層の地山を床としており、平坦である。埋没：暗褐色の粗粒砂を基調に、地山に由来すると思われる鶏卵大の礫が大量に混入する。遺物の出土状況：出土量は極めて少ない。時期：遺物が少なく、時期の限定は難しいが、５期以前であろう。

SB86　位置：南部Ｂ区　図版28

検出：SB82・85と重複するが、粘土粒や礫の含有量から本址の方が新しいことを確認した。主軸方向が

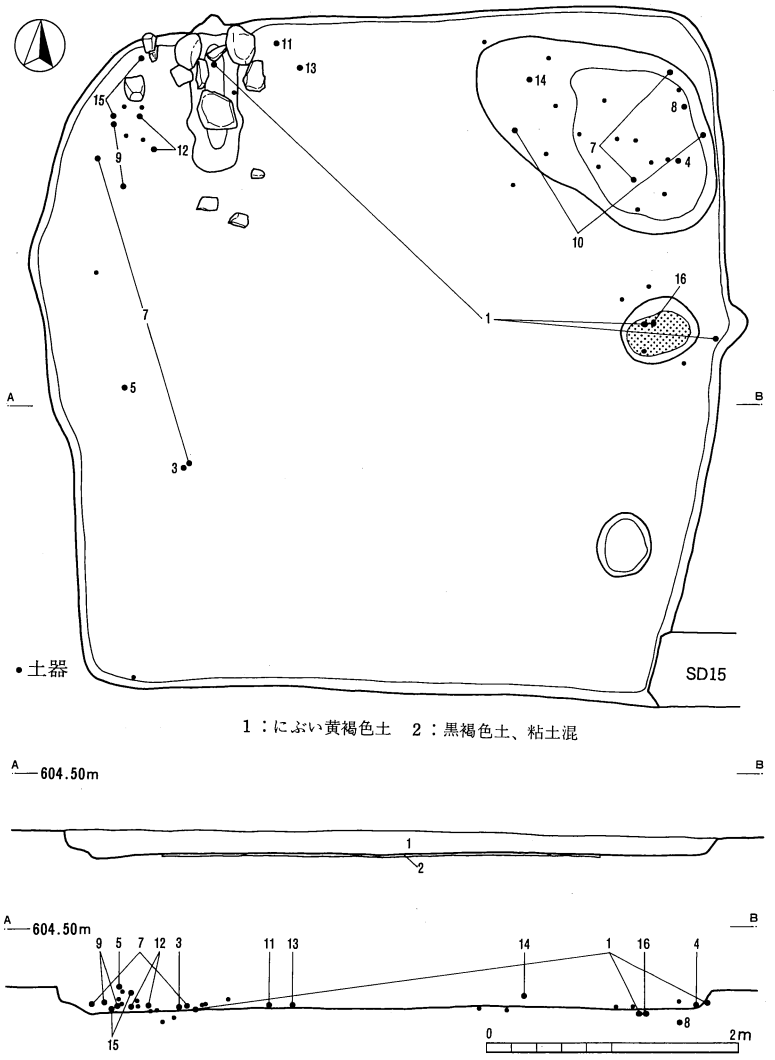
約70cm長い、長方形プランである。西壁の南西隅寄りが幅1.06m、奥行き0.4mにわたって張り出す。カマド：東壁中央に位置し、袖は破壊され残存していない。赤色化した火床は70×62cmの規模で、骨粉が観察された。柱穴：主柱穴3基を確認した。柱間の寸法は主軸方向が3.0m、直交軸が2.0mでプランの形状と関連するためか、主軸方向が長い。柱穴の規模は径42～52cmを測り、深さは8～14cmと浅い。床：地山の礫層中に粘土粒をわずかに入れる。中央部が高く、部分的に凹みがある。埋没：粗粒砂を主とする暗褐色の単一層で、鶏卵大の礫を大量に含んでいた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、円面硯などが、覆土中から床面にかけて破片で出土した。床面遺物（3・4・6・9・10）は全体に散在し、3・10・11は完形である。時期：5期に帰属する。

SB87～89　位置：南部B区　図版28

検出：調査区の東端に位置するが、側道にかかるため検出したに止まり、平面的な位置を記録して終了した。時期も不明である。

SB90　位置：南部B区　図版26、第22図

検出：東壁と北壁の2か所にカマドがあり、当初2軒の住居址が重複するものと考えたが、覆土の状況やプランの形状から、カマドの作り替えと判断した。西壁がわずかに張り出す不整な隅丸長方形である。南側でSD15に切られる。カマド：遺存状況から東壁中央にあるカマド（東カマド）を北壁北西隅寄り（北カマド）に移築したと思われる。東カマドは火床と煙道口の一部が残存するだけで、詳細は不明である。北カマドは石組カマドで袖石の一部が原位置を止め、その周囲には構築材と思われる礫が散乱していた。石材は花崗岩で、床面を掘り込んで固定されている。火床はかなり手前である。床：中央を中心に堅緻な床が認められた。西側では地山の礫層をそのまま床としており、平坦である。諸施設：北東隅に220×132×18の大きな落ち込みがあり、破砕した花崗岩や硬砂岩が10個ある他、遺物も出土しており、貯蔵穴の可能性が高い。埋没：細粒砂を主に粘土粒を均一に混入するにぶい黄褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器がある。遺物は北カマド周辺や北東隅の落ち込みに集中する傾向がみられる。図示した遺物は5・6を除き床面遺物で、完形に近い遺物（4・7・9・11～14）が多いのも本址の特徴である。広い範囲で接合する例も少なく、使用していた食器の一部



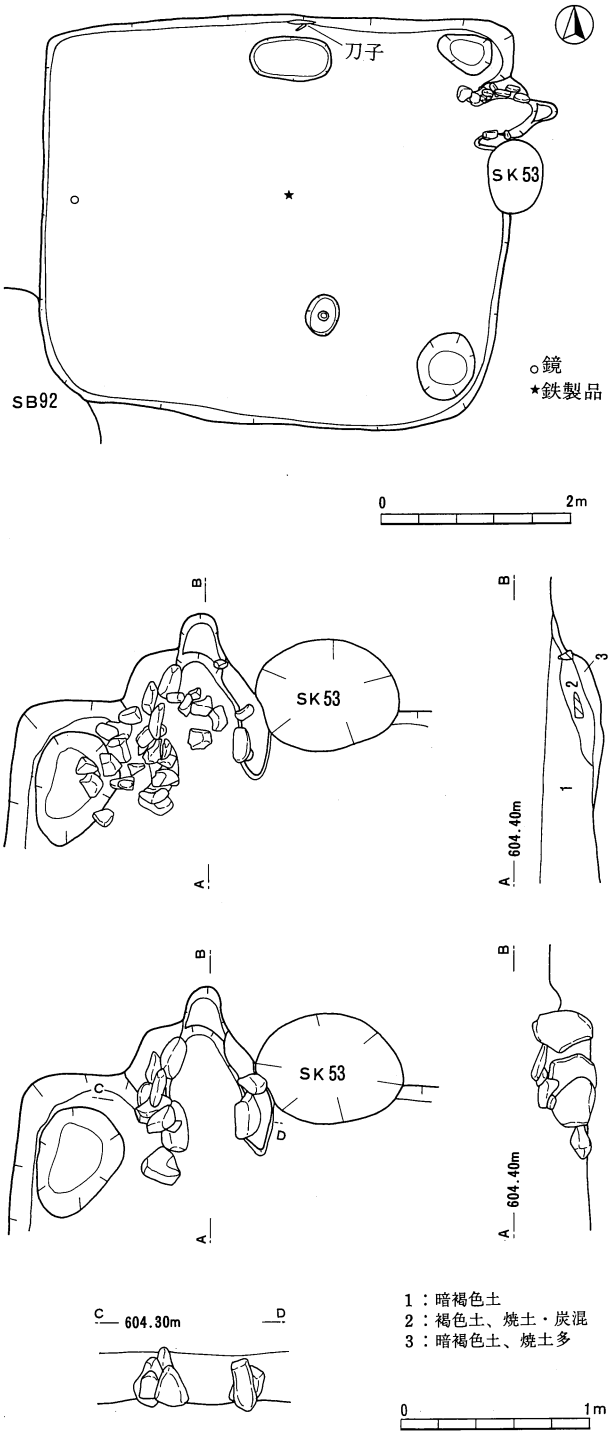
第22図　SB90実測図

がそのまま遺棄されたとも考えられる。時期：13期に帰属する。

SB91　位置：南部Ｂ区

図版28、第23図、PL11

検出：ⅡＡ$_1$層で検出する。南西隅でSB92を切るが、本址がSB92のカマドを破壊していた状況から、最終的に新旧関係を確認した。また、中世のSK51・53に切られる。カマド：東壁北東隅寄りに位置し、遺存状態は良好である。原形を止める袖は石組と言うよりは石を積み重ねたように構築する。火床は明瞭に焼けていない。袖左側には60×41×14cmの落ち込みがある。床：カマド右手前にⅡＡ$_2$層質の粘質な土を入れている他は地山を床としており、中央が堅緻である。諸施設：用途不明の落ち込みが３基ある。埋没：細粒砂を主とする暗褐色の単一層で米粒大の礫をわずかに含む。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、鎌、刀子、銅鏡がある。遺物の全体量は少なく、３～５はカマド周辺から出土した。刀子２点は北壁中央で壁に接して、また、鏡は西壁際の中央に、それぞれ置かれたような状態で出土した。時期：11期に帰属する。



第23図　SB91実測図・カマド実測図

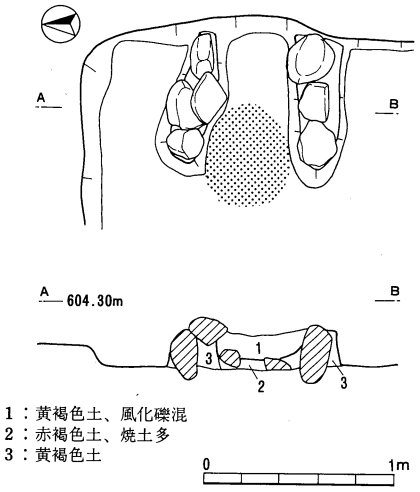
SB92　位置：南部Ｂ区　図版28

検出：北東隅のカマド付近をSB91に切られる。カマド：東壁北東隅にある。撹乱のため断定はできないが、火床の南側に５～６個の礫が散見されたことから、石組カマドと思われる。火床は鮮明に焼ける。床：深く荒掘した後、ⅡＡ層質の粘土を入れて敲き締める床で中央部が高い。諸施設：全部で5基の落ち込みを検出したが、東壁中央にある落ち込みは120×92×８cmと大きく、貯蔵穴の可能性が高い。埋没：細粒砂を基調に風化礫が混入する黒褐色土で、人為的な埋没を示す。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子がある。その全体量は多く、覆土から床面にかけて破片での出土がほとんどである。１・２・５・７・８・11・13・14・17・26は床面遺物で、カマド周辺の北東隅と西壁際に沿って集中する。時期：11期に帰属する。

SB93　位置：南部Ｂ区　図版29、第24図、PL11

検出：ⅡＡ$_1$層で検出する。SB94を北東で切る。本址のカマドがSB94のプランにのることから、新旧関係は明瞭である。カマド：東壁北東隅寄りに位置する石組カマドである。袖は原形を止め、左右に礫を３個ずつ、床面から10cm程掘り込んで固定させて構築している。袖石は内側が被熱し、直接火にあたってい

た様子がうかがわれる。火床は55×45cmの範囲で焼土化している。床：西壁南寄りから中央にかけて貼り床があり、小さな起伏がある。埋没：暗褐色の細粒砂を基調に白色砂、鶏卵大の礫などが混入する単一層で、人為的な埋没である。土師器、灰釉陶器、刀子がある。遺物の全体量は少なく、床面遺物（2・5）はカマド周辺と北東隅に集中する傾向がみられる。2はカマド左袖の外側から完形で出土した。時期：14期に帰属する。



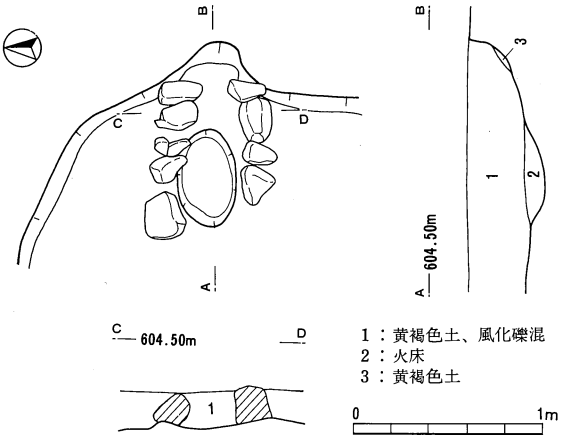
第24図　SB93カマド実測図

SB94　位置：南部Ｂ区　図版29

検出：SB93に切られる。カマド：東壁中央にある函形カマドで、右袖石が残っていた。火床は赤色化し、煙道は長さ50cmを測る。柱穴：主柱穴３基がある。南西に位置すると思われた柱穴はSB93と切り合うためか、検出できなかった。柱穴の規模は径34～42cm、深さは16～28cmでほぼ一定で、柱間の寸法も3.2ｍとほぼ同じ。床：荒掘りした後、整地し、敲き締めた平坦な床である。埋没：灰黄色の細粒砂を基調に、下層に多くの粘土粒が観察された。遺物の出土状況：土師器、須恵器があるが、全体量は少ない。床面遺物はカマド周辺と南東隅にある落ち込み付近に集中するが、破片での出土が多い。1はカマド火床からの出土である。時期：２期に帰属する。

SB95　位置：南部Ｂ区　図版29、第25図、PL11

検出：II A_1層で検出する。西壁がSD31と重複するが、覆土の質的な違いから本址が切られることを確認した。カマド：北東隅に位置する石組カマドである。袖石は原形を止め、左右に5～6個の礫を配置し、床面に置いた状態で構築している。火床は50×32cmの範囲で焼土化している。床：中央から西壁にかけて堅緻である。諸施設：用途不明の落ち込み９基がある。埋没：細粒砂を基調に白色砂を多量に含むにぶい黄褐色の単一層である。遺物の出土状況：灰釉陶器、土師器があり、その全体量は少ないが、カマド周辺に集中する傾向が見られた。時期：13期に帰属する。



第25図　SB95カマド実測図

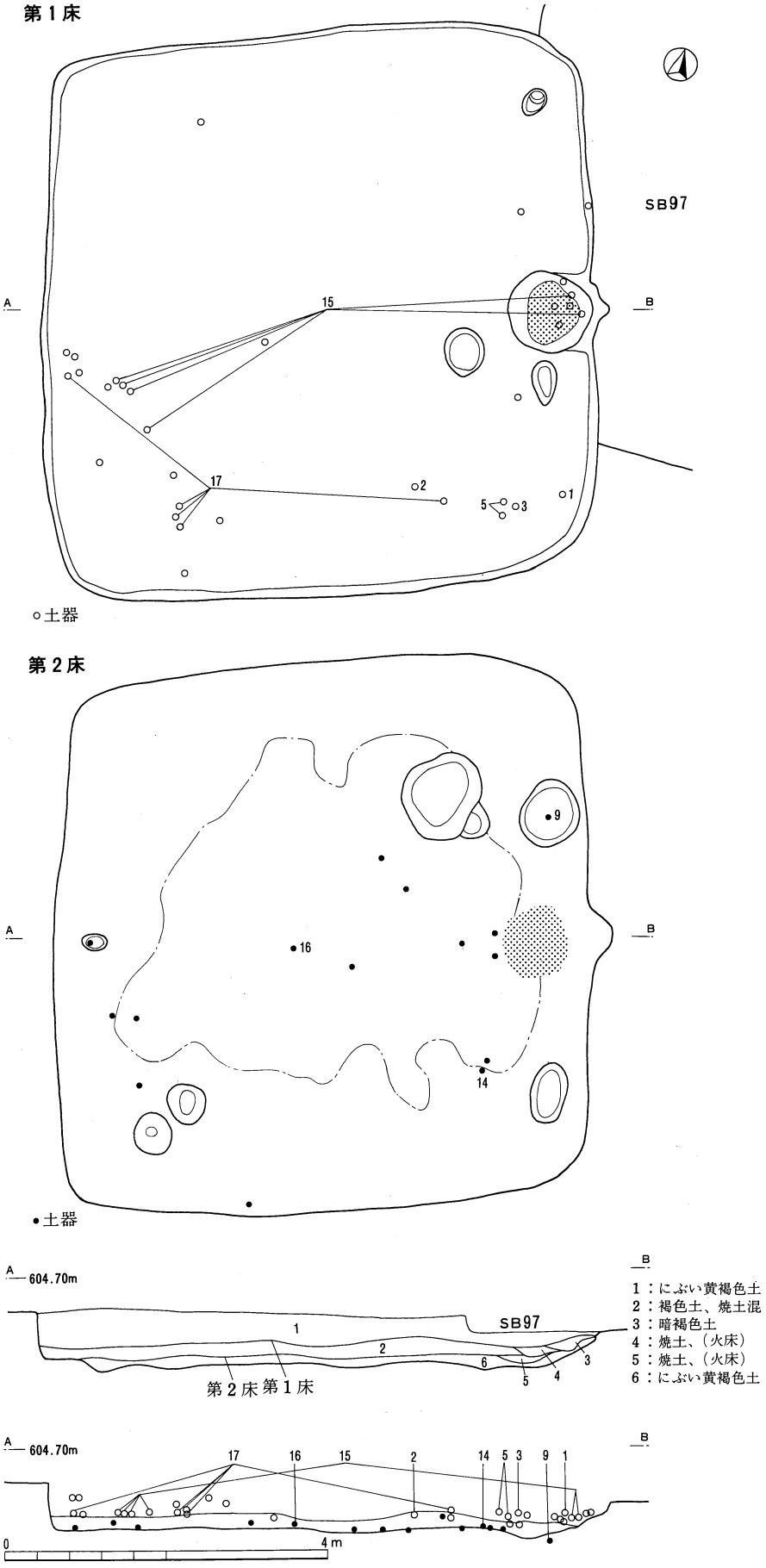
SB97　位置：南部Ｂ区　図版27、PL12

検出：II A_2層で検出する。西側でSB98、北側でSB99、カマド右側でSK230と重複する。SB98・99を切り、SK230に切られる。住居址とは覆土の色調と含有物の違いから、土坑とは含有物の違いを根拠に新旧関係を決定した。プランは北東隅がわずか内側に入る。カマド：東壁北東隅寄りに位置する粘土カマドである。右袖はSK230に破壊されるが、左袖が一部遺存していた。煙道はトンネル状に残り、長さ45cmを測る。カマド右側には施設があり、遺物を多量に出土した。床：地山をそのまま床とするが、中央のみ薄く貼り床が認められた。埋没：細粒砂を基調に少量の粘土粒を混入する暗褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器があり、図示した遺物は７・８・11を除き、床面とカマド右側にある、貯蔵穴と思われる落ち込みからの出土である。１～６は完形に近く、使用していた遺物を一括遺棄したものと考えられ、興味深い資料である。時期：13期に帰属する。

SB98　位置：南部Ｂ区　図版27、第26図

検出：東壁の一部をSB97に切られる。一辺6.7ｍの大型住居で、床面を作り替えるという他に類例の少な

い住居址である。カマド：東壁中央に位置するが、大部分をSB97が撹乱しているために、火床のみを確認する。火床が上下２段にあり、床面の作り替えと同時に、カマドも構築し直したと思われる。下の火床は上の火床よりも若干内側に入るが、規模はほとんど変わらない。床：上部の床面(第１床)は、敲き締めが不鮮明で軟弱である。下部の床面（第２床）は全面に荒掘りした後、II A_2層質の粘土を入れて整地していた。床相互のレベル差は15～20cmである。第２床からも遺物が出土したことから生活面と判断したが、カマドの火床が２つ存在する状況はそれを裏付ける。諸施設：第１床で３基、第２床で用途不明の落ち込みが６基あるが、第２床で検出したものの中には第１床で確認できなかった落ち込みも含むと思われる。埋没：暗褐色を呈する細粒砂を基調に１～５cmの礫を多量に含み、自然堆積と思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器がある。床面を作り替えたとする判断に立

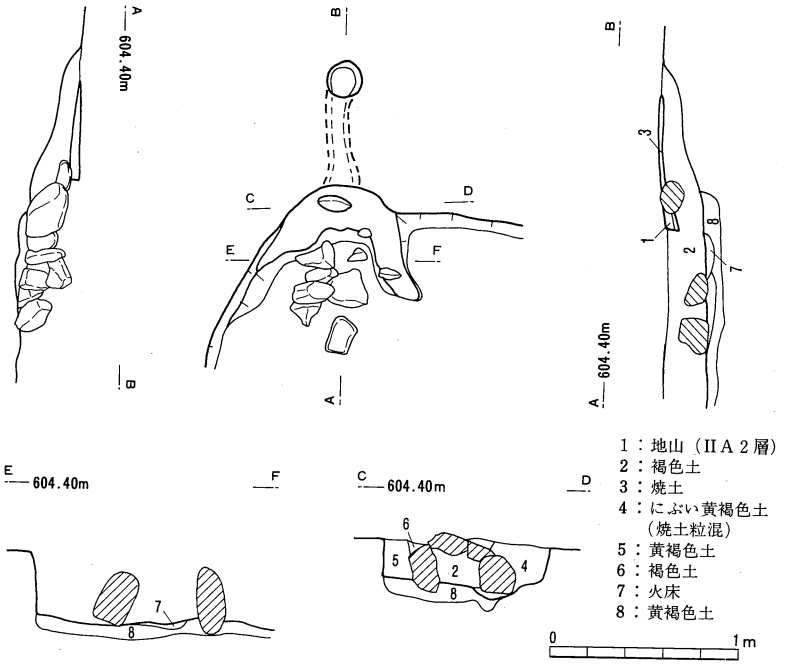


第26図　SB98実測図（1:80）

って、2つの床面から出土した遺物の出土地点を図示したのが第26図である。第2床面からは7～12･14･16が出土したが、北壁際にははほとんどみられず、カマドの主軸線上に集中する傾向を認めてよい。また、第1床からは1～3・5・15・17が出土し、南側に集中する傾向がみられた。2つの床面から出土した遺物が本址に帰属するとは必ずしも確定的でないが、遺物の散布状況から推定すると、床面の作り替えによって床面の利用空間の変更を行った可能性が考えられるかもしれない。時期：2期に帰属する。

SB99　位置：南部B区　図版28、第27図

検出：プランの南側半分をSB97に切られ、ST20を切る。カマド：北東隅に位置する石組カマドである。右袖は粘土と袖石が残り、左袖は石だけが残存していた。礫は花崗岩と硬砂岩を使用する。火床の上に平らに置かれた礫は天井石が落下したものと思われる。煙道はトンネル状に残り、煙道内から煙出しに向かって緩く傾斜し、80cmの長さである。床：カマド手前がわずかに低く、部分的に凹凸のある床面で、地山を床としている。埋没：ⅠD層質の褐色の粗粒砂を基調とし、粘土ブロックや細礫を含む単一層である。遺物の出土状況：土師器、白磁があるが、覆土中にはほとんど遺物がなく、カマド内からわずかに出土した。白磁の皿（2）は床面より若干浮いて出土したが残存率が低く、混入したものであろう。時期：11～13期に帰属すると考えられる。



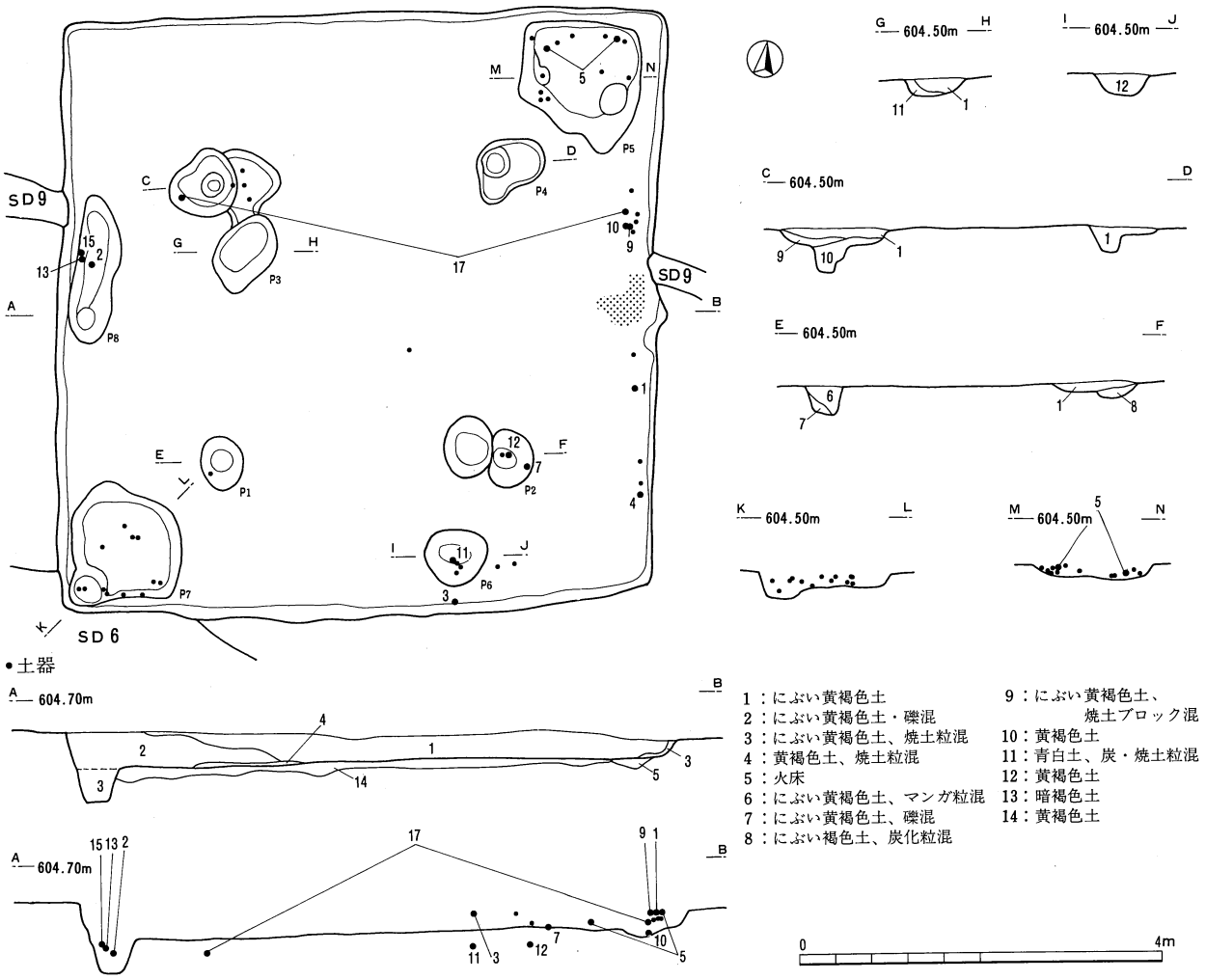
第27図　SB99カマド実測図

SB100　位置：南部B区　図版27、第28図、PL12

検出：ⅡA$_2$層上位で検出する。一辺6.4mの大型の方形プランを呈する。SD6に南西隅を、SD9に中央を切られる。カマド：東壁中央に位置する。袖は完全に破壊され、右袖の一部に粘土が確認された。火床は赤色化し、支脚石の抜き取り痕が観察された。柱穴：主柱穴4基がある。柱間の寸法は3.1～3.2mと一定で、その配置も規格性がみられる。柱穴の規模は径58～74cm、深さ20～30cmと大きい。床：カマド手前がわずかに高い。荒掘りした後、Ⅱ層質の土を入れて整地し、中央を敲き締めていた。諸施設：北東隅、南西隅に大きな落ち込みがある。深さはそれぞれ20cm、13cmで底は平坦である。また、西壁中央には長さ168cm、幅50cm、深さ8cmの溝状の落ち込みがあるが、入り口施設と関連するものであろう。埋没：礫の含有量の違いから2層に分層したが、上、下層とも粗粒砂を主とするにぶい黄褐色土層で、短時間に埋没したと思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器があるが、須恵器の食器が多い。遺物は上層から床面にかけて出土したが、施設から破片で出土する例が多い。土師器の甕（17）はカマド左側から出土した他は、須恵器の杯や蓋などはP5・7の遺物である。時期：4期に帰属する。

SB101　位置：南部B区　図版18

検出：プランの大部分が東側側道にかかり、また、住居址の中央を用水路が走るために、調査はわずかな部分に限られた。床：ⅡA層基質の粘質な土を15cm程入れて整地する。中央付近には堅緻な箇所があり、



第28図　SB100実測図（1:80）

焼土と炭化物が散在する。諸施設：北東隅に72×70×30cmの用途不明の落ち込みがあり、覆土中に焼土粒を含み、遺物も出土した。埋没：粗粒砂を基調とする褐色の単一層で、中礫と粘土粒が混入する。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、釘、棒状鉄製品があるが全体量は少ない。図示した遺物はいずれも床面遺物で１・３・５は北西隅の施設から出土した。時期：14期に帰属する。

SB102　位置：南部Ｂ区　図版26

検出：SB75の調査の際、先行トレンチを入れたところSB75とは別な床面を確認し、本址の存在に気がつく。再検出の結果、カマドを確認したことから住居址と認定した。本址はSB75・76・79を切る。カマド：北壁やや北東隅寄りに位置する。袖は完全に破壊しており、詳細は不明である。床：地山を床とし、粘土がわずかに貼られた平坦な床である。埋没：粗粒砂を主とし、ⅡA層質の粘土粒、白色砂や中礫が混在する単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子があるが、全体量は少ない。図示した遺物は３・４を除き床面遺物である。時期：12期に帰属する。

SB103　位置：南部Ａ区　図版25

検出：自然流路のNR１を除去したところ、方形の落ち込みを確認することができた。本址はSK222・SB109・ST23と重複し、SK222とは本址のカマドが切られることから本址が古いことを、また、SB109とは覆土の含有物の違いから本址が新しいことを確定した。ST23とは本址の床剝ぎの際に検出できたことを根拠に本址が切る。カマド：西壁中央に位置するが、撹乱を受けるために火床のみを確認した。諸施設：

カマド右側、北西隅には90×70×24cmのピットがあり、底面に焼土粒と炭化物を多量に含んでおり、カマドに付属する施設と推定される。床：中央を中心に深く荒掘りし、砂質な土で整地していた。カマドから中央にかけては堅緻である。埋没：NR１が上層の大部分を削平するために詳細は不明だが、下層はⅡA層質の暗褐色の粘土を主としており、人為による埋没状況を示す。遺物の出土状況：須恵器、土師器があり、細片が多い。図示した遺物は住居の中央で出土した床面遺物であるが、残存率はいずれも低い。時期：５期に帰属する。

SB104　　位置：南部A区　　図版25

検出：SB103と同様に、NR１の調査後検出する。カマド：東壁中央に位置し、右袖は完全に破壊される。左袖には礫が正立した状態で遺存しており、石組カマドである。。煙道は1.6mと長く、煙出しは径20cm、深さ10cmで、皿状のピットとして検出された。床：荒掘りした後、整地している。中央は堅緻であるが、壁際は軟弱である。埋没：黒褐色の細粒砂を基調とするが、下層には粘土ブロックが多量に含まれ、明らかに人為的な埋没状況を示していた。遺物の出土状況：須恵器、土師器があるが、覆土中、床面とも遺物は少ない。１・２はカマド右側のピットから破片で出土した。時期：５期に帰属する。

SB109　　位置：南部A区　　図版25

検出：検出状況はSB103･104と同じ。SB103に北側を切られ、NR１に東壁の一部を削られる。カマド：西壁中央に位置する函形カマドである。袖石と支脚石の抜き取り痕が確認されたことから石組カマドであると推察される。諸施設：カマド左側には150×92×27cmの大きな落ち込みがあり、遺物が多量に出土した。カマドに付属する施設であろう。柱穴：主柱穴３基を確認した。北東隅にあると思われた柱穴はNR１の撹乱にあうために確認できない。柱穴の規模は径26～62cm、深さ34～72cmとばらつく。床：中央に堅緻な部分がある。埋没：ⅡA層質の暗褐色の粘土を主とし、細礫と焼土粒が混入する単一層で、人為による埋没と思われる。遺物の出土状況：黒色土器A･須恵器･土師器が出土している。SB103に切られるために全容は知り得ないが、遺物は床面やカマド内の他、カマド左側の落ち込みに集中していた。土師器の甕(13)はカマド内から潰れた状態で、１～３・５・７・９は落ち込みから出土した。さらに、落ち込みの東側で10・11が完形で出土した。他の住居址と比較すると完形品が多く、住居の廃棄時に遺物を遺棄したとも考えられる。時期：５期に帰属する。

SB110　　位置：南部A区　　図版14

検出：ⅡA$_1$層で検出する。住居址の大半は西側の調査区域外にかかるため、東側の一部のみを調査した。カマド煙道部をSK210に切られる。カマド：北東隅に位置する石組カマドである。右袖に使用されたと思われる礫が散乱し、火床は明瞭に焼けていないが、焼土や炭化物が散見された。煙道は長さ90cmで、底は平坦である。床：地山をそのまま床とし敲き締めており、平坦である。テラス：東壁に幅22cm、長さ2.2mにわたってテラスがある。埋没：細粒砂を基調に、白色砂、粘土粒、中礫をわずかに混入する。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器などがあるが、３を除いて、カマド周辺の床面から出土している。時期：12期に帰属する。

SB111　　位置：南部A区

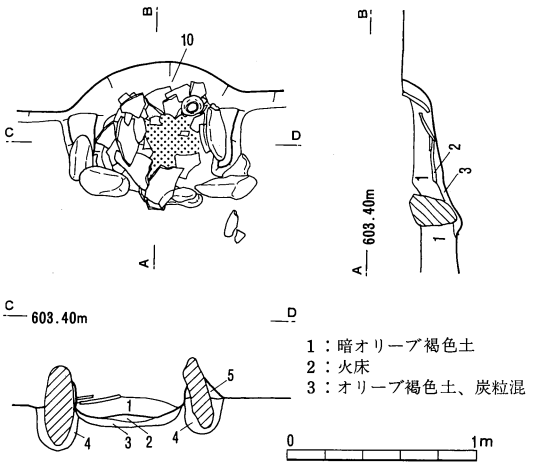
検出：発掘区の東端、工事用溝で断面のみ観察する。カマドの一部を確認したが、平面的な調査はしていない。

SB112　　位置：南部A区

検出：SD６の東端に断面観察のためにトレンチを入れた際、断面で観察する。大半は東側側道に入り、面的な調査はしていない。

SB113　　位置：南部C区　　図版39、PL12

検出：ⅡA$_1$層で検出する。主軸方向が約40cm短い、長方形のプランである。煙道の一部をSK332に切られる。カマド：東壁中央からやや南寄りに位置する粘土カマドである。左袖のみが残存し、火床は赤色化していた。床：壁際は地山を残すが、ⅡA層基質の土を入れて整地する。中央はさらに薄く貼り床をして敲き締める。硬度計値は中央を中心に高い数値を示し、床面が硬い状況が知れる。諸施設：用途不明の落ち込みが５基あるが、深さは５～10cmといずれも浅い。埋没：オリーブ褐色の細粒砂を主に、茶褐色の１cm以下の風化礫を上層から床面にかけて混入する特徴的な覆土で、SB134と共通する。遺物の出土状況：須恵器、土師器、棒状鉄製品がある。床面遺物はカマド火床内と西壁際の南西隅寄りに集中する。２・３・７はカマドから、９・11の甕は南西隅寄りからいずれも破片で出土した。時期：５期に帰属する。



第29図　ＳＢ114カマド実測図

SB114　位置：南部Ｃ区　図版39、第29図、PL12

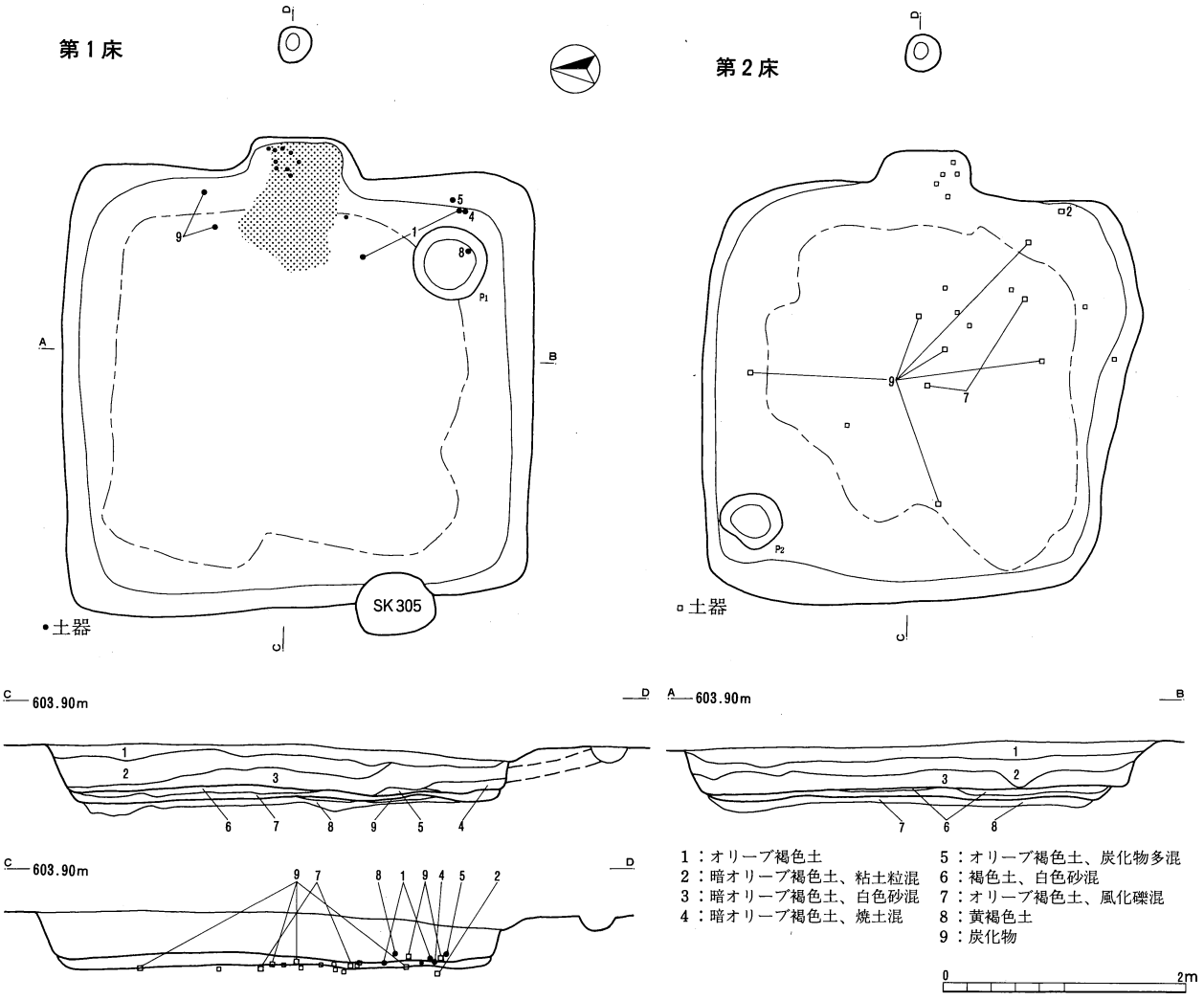
検出：北壁と西壁にカマドがあり、長方形のプランを呈することから、２軒の住居址の重複と考えたが、覆土や床面の状況から１軒の住居址と判断した。南壁でSK327を切る。カマド：北カマドから南カマドへ作り替えを行う。北カマドは北東隅寄りに位置し、煙道の立ち上がりだけを確認した。西カマドは壁の中央に位置する。袖はほぼ原形を止め、須恵器の大甕が掛け口に投棄されていた。天井石は落ちた状態のままで検出された。両袖石は床面から20cm程掘り込んで固定させ、礫の内側は焼けており、直接被熱したと思われる。火床は明瞭に赤色化していた。床：地山に礫を含むために地山をそのまま床としていた。埋没：暗灰黄色の粗粒砂を主とし、風化礫を均一に含む。下層には粘土粒が目立つ。遺物の出土状況：須恵器、土師器、砥石がある。遺物は床面に多く、カマド北壁際に集中する傾向がみられた。カマドには須恵器甕Ｄの他、須恵器の杯（5・10）を投棄していた。また、北壁際から１・２・４がほぼ完形で出土した。砥石は南壁中央付近で出土したが、覆土中の遺物である。時期：５期に帰属する。

SB115　位置：南部Ｃ区　図版42

検出：ⅡA$_1$層で検出するが、検出面が土壌化を受けているために、プランは南壁を除き、不鮮明である。ST29を切る。カマド：北東隅に位置するが袖は遺存せず、火床も炭化物がわずかに観察されただけである。諸施設：カマド右側には90×60×24cmの落ち込みがある。床：中央に堅緻な部分がある。埋没：細粒砂を基調とする黄褐色の単一層で、白色砂、粘土粒を混入する。遺物の出土状況：土師器があるが数片と少ない。時期：14期に帰属する。

SB116　位置：南部Ｃ区　図版42、第30図

検出：本址のプランは明瞭に捉えられた。西壁でSK305に切られ、南壁でST25を切る。カマド：東壁中央に位置する函形カマドで、70cmの幅で、外側へ30cm張り出す。火床、奥壁ははっきりせず、袖石などの抜き取り痕もみられない。煙道はトンネル状に遺存し、煙道口から煙出しへ緩やかに傾斜していた。諸施設：カマド右側には径62cm、深さ11cmの落ち込みがある。床：床は二面が確認され、床の作り替えをしている状況が認められた。上部の床面はⅡA層質の粘土を入れて貼り床をしており、中央が高い。下部の床面は中央を中心に堅緻で、遺物があることから生活面であることが再認できる。埋没：大きく２層に分層される。オリーブ褐色の細粒砂を主とし、下層には特徴的な風化礫が入る。上層は自然堆積であろう。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器、土師器、鎌、刀子がある。２つの床面から出土した遺物の分布状況



第30図　SB116実測図

を示したのが、第30図である。上部の床面から出土した遺物はカマド周辺やP1に集中する傾向がみられ、下部の床面の遺物は床面全体に散在する傾向があり、いずれも破片で出土する例が大半である。なお、両者の遺物の時期、器種構成などに明瞭な違いは認められない。時期：７期に帰属する。

SB117　　位置：南部Ｃ区　　図版42

検出：西側から南側にかけて壁が曲線を描き、２軒の住居址の重複と判断したが、平面的にプランを確定するのは難しく、最終的に床面の状況からプランを確定した。SB118を切るが、重複する部分が多く、建て替えの可能性が強い。カマド：東壁北東隅寄りに位置する。火床が薄く残る程度で、焚口には炭化物が集中していた。袖は完全に破壊しており、構築材に使用したと思われる焼痕のある花崗岩と硬砂岩が６個散乱していた。煙道は火床から急に立ち上がる。床：地山を床とするが、中央が高く、堅緻である。埋没：２層に分層された。上層は自然堆積で、下層はにぶい黄褐色の細粒砂を基調とし粘土をかなり含んでいた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、越州窯系青磁、棒状鉄製品がある。遺物はカマド周辺と東壁に沿って出土する傾向がみられた。１～３・６・９・15・16・17・18は床面遺物で、17の青磁碗は東壁に接して出土した。時期：13期に帰属する。

SB118　　位置：南部Ｃ区

検出：SB117に大半を切られるため、南壁から西壁にかけての一部を調査した。床：壁際しか残らない

が、地山を床としており、SB117との床面のレベル差はわずかである。カマド周辺には性格の限定できない落ち込みが４基認められた。埋没：黒褐色を呈する覆土はブロック状の堆積で、SB117を構築する際に埋め戻していると思われる。遺物の出土状況：遺物は出土していない。時期：遺物による時期の確定は難しいが、SB117は本址の建て替えの可能性が強く、12期か13期のいずれかに帰属しよう。

SB119　位置：南部Ｃ区　図版40

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。本址は検出面の同じ周囲の住居址と比較して、壁高は16cmとかなり浅い。規模は3.6×3.2ｍで正方形に近い。カマド：北東隅に炭化物が集中する箇所が観察され、カマドが存在した可能性を指摘するに止まり、詳細は不明である。床：全面を荒掘りし、整地した後に敲き締める平坦な床である。諸施設：用途不明な落ち込みが南東隅に集中するが、深さは20cm程である。埋没：粗粒砂を主に、粘土粒が混入する灰黄色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、破片での出土が多い。時期：11期に帰属する。

SB120　位置：南部Ｃ区　図版40

検出：SB119と同様に浅い住居址で、規模や形状も似る。SK309を切る。カマド：火床は赤色化せず、炭化物や焼土粒が100×70cmの範囲で北東隅に集中する。諸施設：カマド右側には92×80×10cmの落ち込みがあり、遺物が出土している。灰溜めまたは貯蔵穴になると考えられる。床：礫を含む地山を床としていた。埋没：粗粒砂を基調に、細礫と炭化物を混入するオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、鎌がある。図示した遺物は床面遺物で出土量はかなり少ない。鎌(13)は北壁中央の床面から出土した。時期：14期に帰属する。

SB121　位置：南部Ｃ区　図版40

検出：本址の東側は側道に入るため、西側の調査のみに限られた。北側でSB122に切られるが、その関係は覆土の色調の違いから確定した。カマド：SB122に切られるため、その大半は破壊されていた。北壁に位置し、左右の袖の一部が遺存する。諸施設：カマド左側に64×62×5cmの落ち込みがある。床：掘り方は浅く、壁際は地山をそのまま残し、軟らかい。中央を中心に敲き締めており、50×30cmの大きな礫が置かれていた。礫は使用されたものか、投棄されたものか判然としない。埋没：２層に分層されたが、下層にはⅡ層質の暗オリーブ褐色の粘土ブロックがあり、人為的な堆積状況を呈していた。遺物の出土状況：須恵器、土師器、鎌などがあるが、全体量は少ない。３・４は床面遺物で３は南壁際に接して潰れた状態で出土した。時期：４期に帰属する。

SB122　位置：南部Ｃ区　図版40

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。SB121･ST27を切る。本址の南東隅にあたる箇所は側道にかかり、調査はできなっかった。本址は主軸方向が30cm長い、隅丸長方形のプランである。カマド：東壁北東隅に位置し、袖は完全に破壊されている。袖石と支脚石の抜き取り痕が認められ、焚口には炭化物が集中する。床：中央を深く荒掘りし、整地した後に敲き締めた平坦な床である。用途の分からない落ち込みを４基確認した。硬度計の測定では中央から西壁にかけて高い数値を示した。テラス：西壁全体に床面から高さ12cm、幅26cmで地山を掘り残したテラスがある。埋没：オリーブ褐色を呈する細粒砂を主に、下層にはブロック状の堆積が観察され、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器などがあるが、破片での出土が多い。図示した遺物は、灰釉陶器の段皿(2)を除いて、覆土中から出土した。時期：13期に帰属する。

SB123　位置：南部Ｃ区　図版40

検出：耕作土の直下はⅡＡ$_2$層になり、本址の上層も削平される。また、西側は自然流路のNR3によって覆われていた。SB124を東側で切る。カマド：構造は全く不明であるが、東壁北東隅寄りに炭化物の集中箇

所が観察された。床：地山をそのまま床としていた。床面にはピットが2基認められた。埋没：粗粒砂を主とする単一層で、風化礫と炭化物がわずかに混入する。遺物の出土状況：土師器の食器、鎌があるが、全体量は少ない。鎌（11）だけが床面遺物である。時期：14期に帰属する。

SB124　位置：南部C区　図版40

検出：SB123の東側にある、一辺3.3～3.4mの方形プランである。カマド：北東隅寄りにあり、左右の袖とも花崗岩が1個ずつ原位置を保って、残っていた。火床は赤色化せず、床面からわずかに掘り込む。床：中央のみを荒掘りし、整地した後に敲き締めている。壁際は軟らかい。埋没：SB123に近似した覆土で、粗粒砂を基調とする黄褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器がある。覆土中、床面とも破片で出土する例が多く、図示した遺物は覆土中の遺物である。時期：13期に帰属する。

SB125　位置：南部C区　図版39

検出：5.9×4.1mの隅丸の不整形で、南側でST26を切る。新旧関係は覆土の質的な違いから容易に確定できた。カマド：東壁北東隅寄りに位置する。袖は完全に破壊されていたが、赤色化した火床と壁が若干張り出すことからカマドと判断した。火床付近には焼痕のある花崗岩が4個散乱していた。床：中央に堅緻な部分がある。南側は地山を残し、中央を中心に荒掘りの痕跡がある。硬度計値は中央から西側にかけて高い数値を示していた。諸施設：ピットが全部で5基あり、特に、北壁中央にあるピットは124×100cm、深さ25cmと大きい。埋没：白色砂を多量に含む単一層で、黒褐色の細粒砂を主としていた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、覆土、床面とも遺物は少ない。土師器の杯（2・3）はカマドから、灰釉陶器の椀（4）は北壁際から出土した。時期：13期に帰属する。

SB126　位置：南部C区　図版40

検出：IIA_2層で検出したが、プランは明瞭である。南側でSB133と重複するが、覆土の質的な違いから本址が切ることを確認した。カマド：北東隅に位置するが、火床は焼けた痕跡は不鮮明で、袖も完全に破壊されていた。諸施設：カマド右側に深さ10cmの用途不明の落ち込みがある。床：中央のみを荒掘りし、IIA_2層質の土を薄く貼る。硬度計の測定によれば南側が硬い。埋没：オリーブ褐色の粗粒砂を基調に白色砂、細礫や風化礫を混入する単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器があるが食器が多い。これ以外には砥石と凹石が1点ずつある。覆土中の遺物は少なく、床面遺物は北側に集中する傾向がみられる。灰釉陶器の輪花椀、段皿（5・7）は北東隅付近で完形で出土した。時期：13期に帰属する。

SB127　位置：南部C区　図版43

検出：工事の工程上、南側と北側の二回に分けて調査した。また、北西隅はプラント・オパールの土壌採取のため、撹乱を受ける。プランは不整形で、南側でSB128を切る。カマド：焼土粒と炭化物が東壁北東隅寄りに集中していた他、構造に関する詳細は不明である。床：中央の一部が堅緻である。埋没：黒褐色の細粒砂を主に、IIA層質の粘土粒を混在する単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、鉄鏃があるが全体量は少ない。床面遺物（2・3～5）は北東隅に集中し、3は底部に解読不明の墨書がある。時期：14期に帰属する。

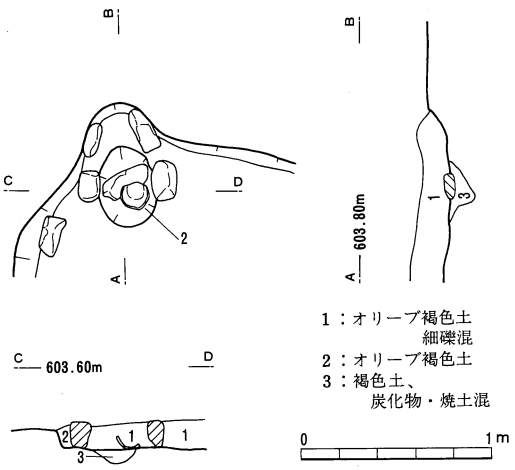
SB128　位置：南部C区　図版42、第31図、PL12

検出：北壁をSB127に切られる、長方形のプランである。カマド：北東隅に位置し、遺存状況は良好である。左右の袖には礫を2個ずつ配置し、奥壁は外へ張り出している。赤色化している火床の上には天井石が落ちており、火床には灰釉陶器がある。石材は硬砂岩が1個あるのを除いて、全てカコウ岩を使用していた。袖は住居の壁に接して構築する。諸施設：カマド右側には54×48×10cmの落ち込みがあり、カマドに付属する施設と考えられる。床：荒掘りした後に整地した痕跡があり、全体的に堅い床で中央がわずか

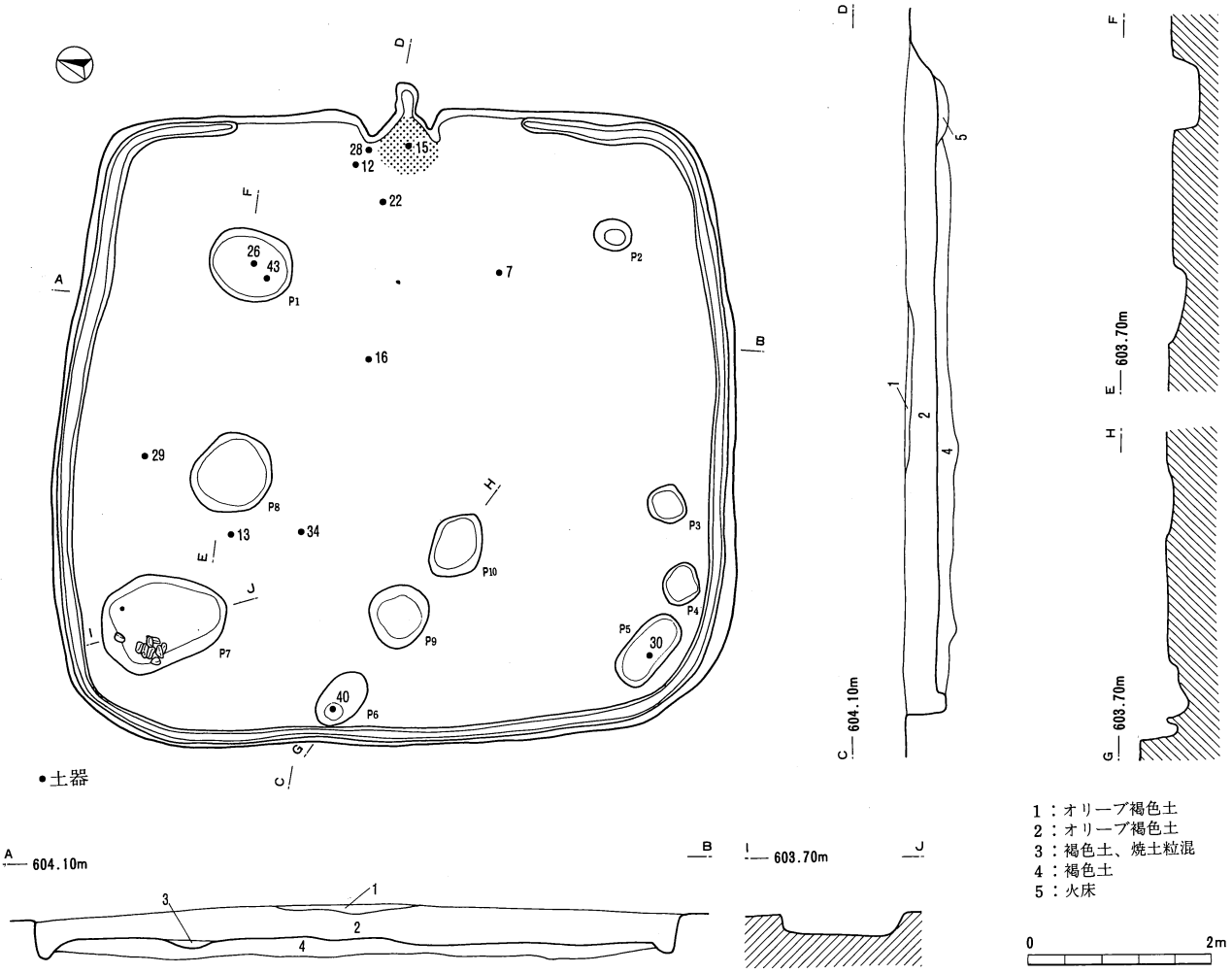
に高い。埋没：オリーブ褐色の粗粒砂を主とする単一層で、地山に由来する礫が均一に入る。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、全体量は極めて少ない。２はカマド火床の天井石の上に置かれていたが、廃棄時の儀礼的な状況を語る資料として重要である。時期：14期に帰属する。

SB129　位置：南部Ｃ区南端　図版41、第32図、PL13

検出：現地表面に大木があったことから、木根によって床面の一部が撹乱を受けていた。7.0×6.6ｍの大型の住居である。カマド：東壁中央に位置する。袖は左右とも一部が遺存していたが、地山を掘り残し、粘土で固めた袖である。煙道口は低く、緩やかな傾斜で煙道へ続く。床：全面に荒掘りした後、ⅡA$_2$層質の粘土を20cm程入れて固めていた。小さな起伏の認められる床面には部分的に炭化物が観察された。硬度計の測定では、カマドから西壁中央にかけての範囲と西壁際が硬い。諸施設：全部で10個の落ち込みがあり、Ｐ１・７からは多量の遺物が出土した。周溝：幅15cm、深さ５～10cmの周溝がカマドの両側を除き、全周していた。埋没：Ⅱ層の粘土を基調にする覆土で、ブロック状に堆積するこ



第31図　SB128カマド実測図



第32図　SB129実測図（1:80）

とから明らかに人為的な埋没状況を示していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、紡錘車、土錘、石錘、釘がある。遺物は床面、覆土とも出土しているが、床面に多く、南西を除いた全体に散布する。12・16・22は完形で、16の須恵器杯は底部に厚さ１cmほどの固形状の炭化物が付着し逆位で出土した。他の遺物は破片が多いが、図示したように、ピットからの出土例が多い。時期：１期に帰属する。

SB130　　位置：南部Ｂ区北側　　図版37

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出した。西側でSB131と重複するが、本址の覆土は白色砂を多量に混入することから、本址が新しいことを容易に確定できた。一辺4.6ｍの方形のプランである。カマド：東壁北東隅寄りに位置する。袖は完全に破壊されており、火床には焼土が散在する。床：中央部を敲き締めている。埋没：オリーブ褐色の粗粒砂を基調とし、地山の細礫を混在する単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、板状鉄製品がある。覆土中の遺物（2～4･11）は破片で出土する例が多い。床面遺物（1・5～10）は床全体に散在する。６のミニチュア壷は南東隅から出土した。また、完形の鋤頭が西壁際から出土したが、覆土中の遺物で投棄されたものと思われる。時期：12期に帰属する。

SB131　　位置：南部Ｂ区北側　　図版37

検出：SB130に切られる、6.0×5.8ｍの大型住居址である。カマド：西壁中央に位置する。袖の崩れと思われる粘土が観察された。火床は赤色化しており、煙道は長さ65cmを測り、底面は平坦に伸びる。諸施設：カマド左側には80×64×10cmの大きな落ち込みがあり、カマドに付属する施設と思われる。床：荒掘りはカマド周辺が深い。東側は地山を礫層になるために、そのまま床とし、西側のみ整地して敲き締めていた。埋没：覆土はⅡＡ層に由来する黄褐色の粘土を主とし、地山に含まれる細礫を均一に混入する単一層で人為的な埋没状況を示していた。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器、土師器、刀子などがある。図示した遺物は、１・９・10・13・14・18・23・29・30を除き床面遺物で、カマド周辺、特に、西側に集中する傾向がみられる。時期：５期に帰属する。

SB132　　位置：南部Ｂ区北側　　図版39

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。北側は排水溝、東側は側道にかかるために住居址の一部のみを調査した。SB133を西側で切るが、覆土中に混在する礫の含有量の違いを根拠に、新旧関係を面的に確定できた。床：地山をそのまま床とし、平坦である。埋没：粗粒砂を基調とし、ⅡＡ層質の粘土ブロックを混入する単一層である。床直上には黄色の粘土を含む土が観察された。遺物の出土状況：灰釉陶器があるが、遺物は極めて少ない。２は床面の出土である。時期：14期に帰属する。

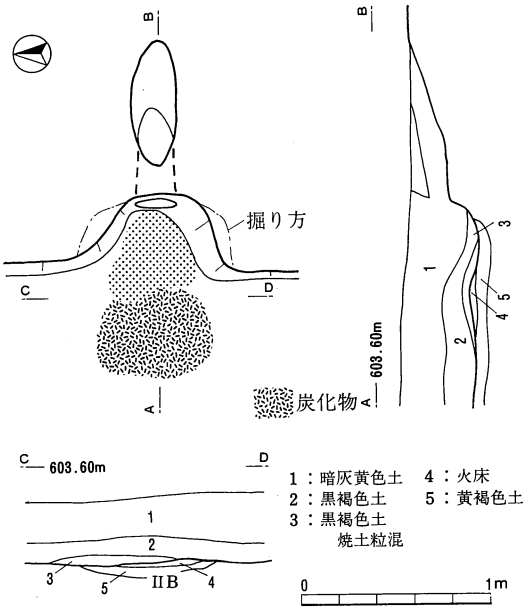
SB133　　位置：南部Ｂ区北側　　図版39

検出：SB132に東側を切られ、北側でSB126に切られる。住居址の半分のみを調査した。床：荒掘りした後に中央を中心に貼り床をしており、北側がわずかに高い。埋没：暗オリーブ褐色の粘土を主とし、細粒砂、細礫を混入する。壁際には壁の崩れと思われる堆積の一部が観察された。遺物の出土状況：遺物は少なく、土師器の甕（1）が床面から出土している。時期：遺物は少なく、時期の限定は難しいが、重複関係から14期以前になる。

SB134　　位置：南部Ｃ区　　図版41、第33図

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。本址の上には堰があったために北側は溶脱を受け、プランの確定は難しかった。本址はST25を切る。カマド：東壁中央からやや南寄りに位置する。カマドは完全な函形カマドではないが、奥壁は弧を描くように、曲線的に掘り込んでいた。構築の順番は、荒掘り→煙道掘り抜き→奥壁への粘土貼り付け→袖と天井の構築であることが観察できた。袖は地山の一部を利用した粘土カマドである。火床は径45cmの範囲で赤色化し、焚口には炭化物が集中していた。また、火床には遺物（6・8・11）が一括投棄される。煙道は長さ90cm、径15cmを測る。諸施設：カマド右側には48×42×11cmの落ち込みがあり、

カマドに付属する施設と考えられる。床：壁際を深く荒掘りした後整地し、中央部のみにⅡA_2層質の粘土を薄く貼る。床面には鉄分が集積していた。埋没：SB113と共通する覆土で風化礫が多量に混入する暗オリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：黒色土器A、須恵器、土師器などがある。覆土中からはほとんど遺物は出土せず、床面のカマド周辺や火床内に集中する傾向がみられた（1・2・4・6～11)。しかし、残存率は1を除き低い。時期：７期に帰属する。



第33図　SB134カマド実測図

SB135　位置：南部Ｃ区　図版40

検出：主軸がN-33°-Wと周囲の住居址と較べて大きく触れる、一辺2.8ｍの小型の方形プランである。南壁でSK336に切られる。カマド：西壁南西隅寄りに位置する。このようなカマドの位置の類例は少ない。袖は遺存せず、火床と煙道の一部のみが観察された。床：荒掘りした後に整地している。硬度計の測定では南壁、特に、南東付近が硬い。埋没：ⅡA_2層質の細粒砂を基調とする単一層で、風化礫を混在していた。遺物の出土状況：須恵器があるが全体量は少ない。図示した遺物は覆土中から出土した。時期：４期に帰属する。

SB136　位置：南部Ｃ区　図版44・PL13

検出：北側のSB141と重複するが、覆土の質的な違いから本址が切ることを確認した。同様に、SD25を切る。カマド：北東隅に位置する。袖は完全に破壊されるが、火床は赤色化し、袖の構築材と思われる15cmほどの礫が見られた。焚口部には炭化物が集中する。煙道は火床から緩やかに傾斜し、長さ1.1ｍを測る。カマド右側には径34cm、深さ12cmの落ち込みがある。床：中央から北側にかけて堅緻で、南側は地山をそのまま床面としていた。埋没：細粒砂を主とし、風化礫や炭化物が混入する黒褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、鉄製紡錘車、砥石がある。床面遺物（1・4・7・9～12・14・17～19）はカマド周辺と北側に集中する傾向あり、１・４・10・14は完形に近い。羽釜はカマド火床付近から破片で出土した。砥石は2点あるが、25は覆土中から、13は床面遺物で本址に帰属する可能性が強い。時期：15期に帰属する。

SB137　位置：南部Ａ区西端　図版29・第34図

検出：住居の西側は調査範囲外に入るために東側だけを調査した。SD21・SK351に切られる。カマド：東壁中央に位置する。袖石は原位置に残り、遺存状況は良好である(第34図)。袖石は床面に置いて固定させている。煙道は長さ1.5ｍあり、煙出しは作り替えの痕跡がみられる。床：地山を床としていた。埋没：オリーブ褐色の細粒砂を基調とし、ⅡＡ層質の粘土粒を含む単一層である。遺物の出土状況：土師器の甕がある。床面、覆土中とも遺物はほとんどない。図示した遺物は煙出しから潰れた状態で出土し、１は火床から出土した遺物と接合している。時期：２期に帰属する。

SB138　位置：南部Ａ区西端　図版42

検出：SB137と同様に東側のみ確認する。本址の規模は一辺6.9ｍと大きく、遺物の様相からみると２軒の住居址の重複も考えられるが、調査範囲が狭く断定できない。床：地山を床としており、平坦である。埋没：オリーブ褐色の細粒砂を基調に２層に分層された。下層はⅡ層質の粘土ブロックが堆積し、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、棒状鉄製品があるが、床面遺物は

少ない。４は床面から出土したが、小片である。時期：14期に帰属する。

SB141　　位置：南部Ｃ区
図版44、PL13

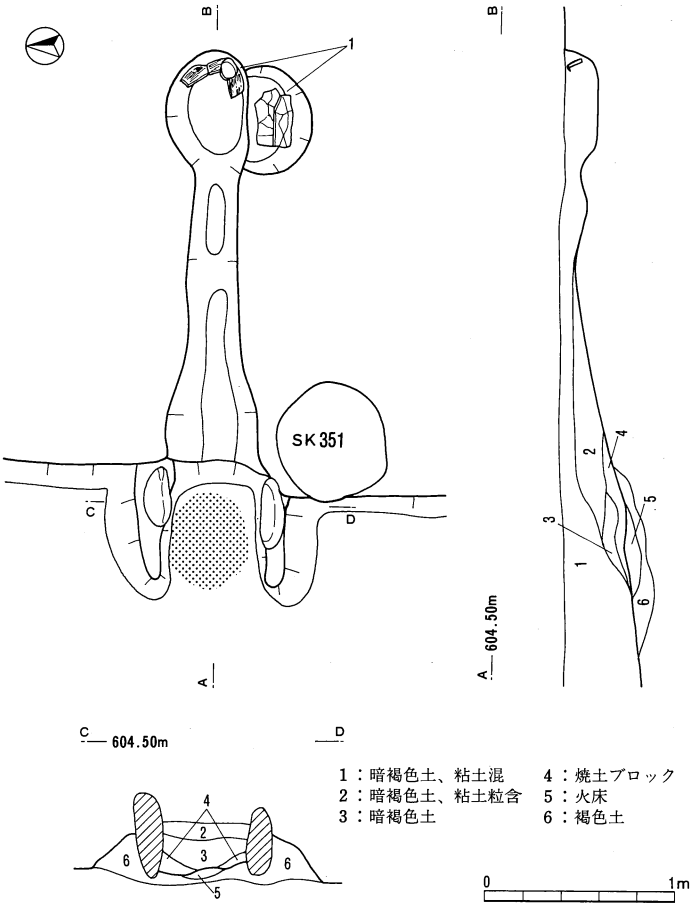
検出：SB136に切られ、北側のみを調査した。カマド：北東隅に位置する。火床付近には砂岩やカコウ岩10個が散乱し、焼痕が観察されたことから、構築材に使用したものと思われる。諸施設：カマド左側には36×27×14cmの落ち込みがあり、鎌が出土した。床：荒掘りした後にⅡA_2層質の粘土を5cm程入れて、整地している。埋没：ＩＤ層質の細粒砂を基調に粘土粒が混入する暗灰黄色土層で人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子などがあるが出土量は少ない。１・２はカマド内から出土したが、１は完形で左袖にのるように出土した。時期：13期に帰属する。

SB142　　位置：南部Ｃ区
図版43、第35図

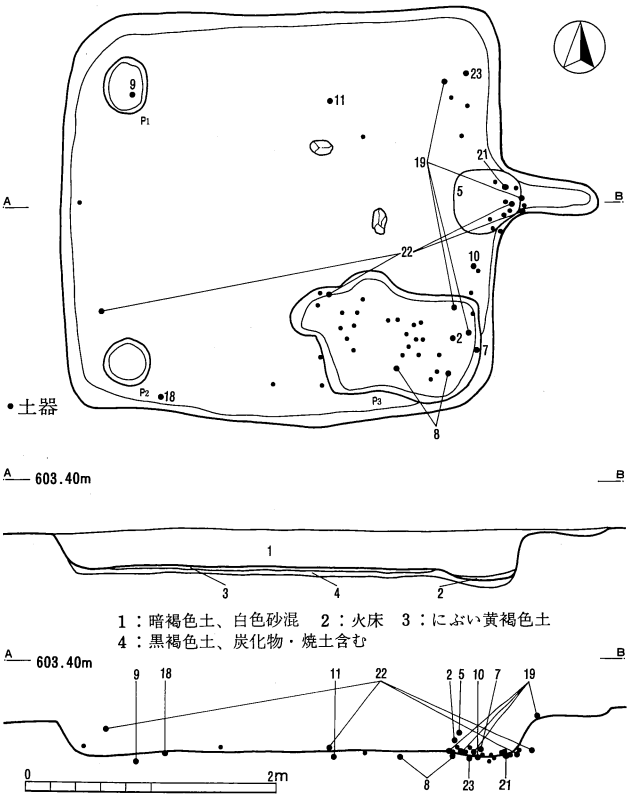
検出：北西隅でSB144に切られる。一辺3.5ｍの方形プランである。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築する。火床は床を掘り込み、径50cmの範囲で赤色化する。煙道は長さ90cmである。諸施設：カマド右側に大きな落ち込みがあり、多量の遺物が出土した。貯蔵穴と判断してよいだろう。ほかに西壁際に２基のピットがある。床：中央に貼り床の痕跡がある。埋没：細粒砂を基調に細礫が混在する暗灰黄色の単一層で、人為的な埋没状況を呈する。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、軟質須恵器、棒状鉄製品が出土した。遺物は上層から床面にかけて出土し、第35図に示したように床面から出土するものが多い。完形に近い土師器の甕(22)は、上層から潰れた状態で出土しているが、一部の破片は床面付近から出土した。食器の大部分は床面遺物でカマド周辺や右側にある施設に集中していた。時期：８期に帰属する。

SB143　　位置：南部Ｃ区　　図版43

検出：ⅡA_2層上位で検出するが、プランが方



第34図　SB137カマド実測図



第35図　SB142実測図

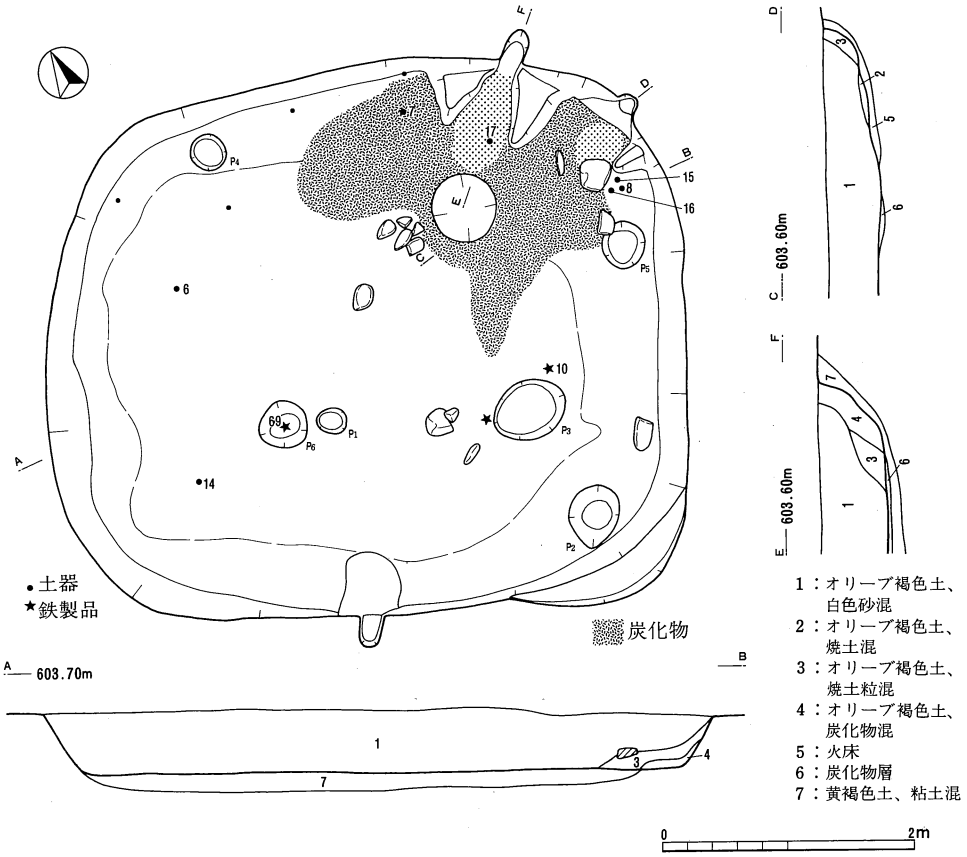
形にならないために２軒の重複と考えたが、最終的に１軒と判断した。東壁が張り出す不整形である。SK470･418に切られ、SD25を切る。カマド：北東隅に位置するが、火床が赤色化しているだけで、詳細な構造は不明である。諸施設：カマド右側に42×36cm、深さ17cmの落ち込みがあり、遺物を出土したことなどからカマドに付属する施設と思われる。床：荒掘りした後に整地する。硬度計の測定によれば南側が高い数値を示している。埋没：茶褐色の細粒砂を基調に炭化物や焼土粒を混入する単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器を主にし、他に越州窯系青磁、刀子、釘、砥石などがある。遺物は床面に多く、南西を除いた箇所に集中する傾向がみられた。１～３・４・11・17・18はカマド右側の落ち込み周辺から出土したもので、床面遺物である。越州窯系青磁は完形に近いが覆土中から出土した。砥石は２点の出土であるが、うち図示した９は住居の西壁際中央と、北壁の北東隅寄り付近から割れた状態で出土した、接合資料である。時期：13期に帰属する。

SB144　位置：南部Ｃ区　図版43

検出：一辺5.0ｍの方形プランで、SB150に住居址の半分を切られ、SB142･SD25を切る。カマド：北壁北東隅寄りに位置する。左袖は原形を止め、砂岩、安山岩、花崗岩を積み上げるように構築しており、火床付近には右袖に使用されたと思われる礫が散乱していた。火床は赤色化し、床面からわずかに掘り込む。床：カマド付近に貼り床が観察された。全体的に平坦である。諸施設：用途不明の落ち込み３基がある。埋没：細粒砂を基調に、白色砂が均一に混入するオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、鉄製品などがある。遺物はカマド周辺に集中する傾向がみられ、５・９・18を除き、覆土中から破片で出土している。時期：12期に帰属する。

SB145　位置：南部Ｃ区　図版44、第36図

検出：ⅡＡ$_1$層で検出する。4.6×4.0ｍの隅丸長方形のプランで、南東隅がわずかに張り出していた。西側でSD25を切る。カマド：北壁北東隅にカマドの作り替えの痕跡と南壁中央には煙道に似た焼痕がみられた。南壁にある遺構は焼土が観察された他はカマドに関連する様な施設はない。北壁にあるカマドは袖の遺存状況から北東隅にあるカマドを作り替えたと考えられる。２つのカマドは片方の袖を共有するような位置にある。火床は赤色化していた。床：壁際を残して整地した痕跡があり、中央部を中心に堅緻である。硬度計によれば中央から



第36図　SB145実測図

西側にかけてが硬い傾向を示した。テラス：南東隅に幅20cm、床面から35cmの高さに平坦なテラス状の遺構がある。諸施設：全部で8基の落ち込みを確認したが、いずれも規模は小さく、浅い。埋没：ＩＤ層質の細粒砂を基調に、風化礫、焼土粒、炭化物を含む黒褐色の単一層で、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、鉄製品がある。遺物は床面と床面から若干浮いたレベルに多く、カマド周辺に集中する。１・３・10・14は床面遺物で、８・15～17はカマド周辺から出土したが残存率は低い。鉄製品のうち、鎌 (10) は床面から、鑿 (69) はP8からの出土である。時期：13期に帰属する。

SB146　位置：南部Ｃ区　図版46

検出：IIA_1層で検出する。北側でSB147を切り、南西付近でSK412に切られる。また、西側でSK501を切るが、新旧関係には曖昧な点を残す。カマド：東壁北東隅に位置する。火床には焼土、炭化物がほとんどなく、袖などの構造も不明である。床：部分的に荒掘りして整地する平坦な床である。壁際は地山を床としている。諸施設：全部で7基の落ち込みがあるが、中央からやや南よりに146×126×80cmの大きな落ち込みがある。当初、その規模から別の遺構と考えていたが、出土した羽釜の破片が床面のものと接合することから、本址の施設と判断した。埋没：ＩＤ層質の細粒砂を主にし、細礫と風化礫が均一に混入するオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、遺物の多くは床面から出土した。１・２・５・６・８・９はカマド右側にある落ち込みから出土し、１・２・５は完形に近い。時期：15期に帰属する。

SB147　位置：南部Ｃ区　図版46、第37図

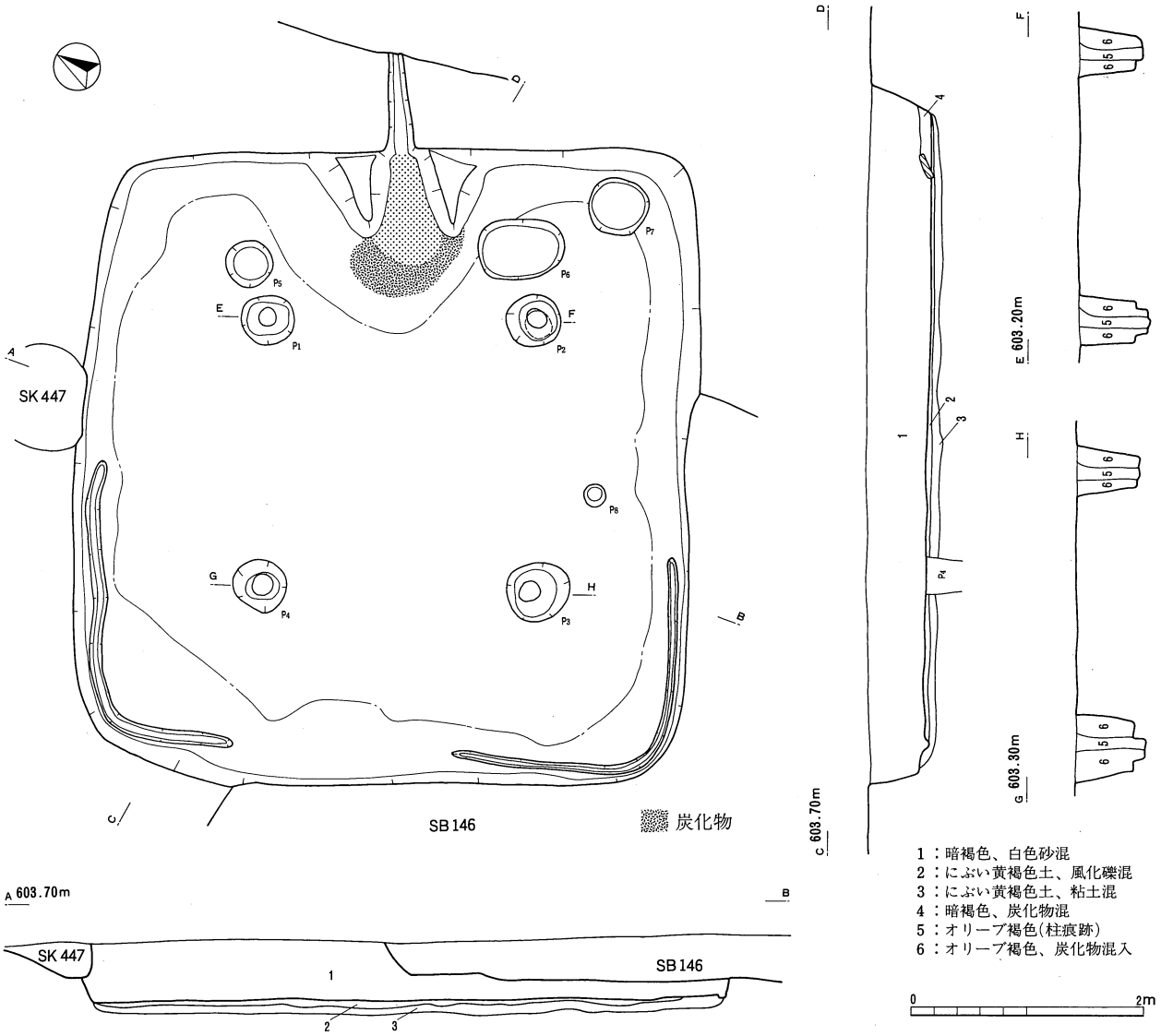
検出：南西隅をSB146に、煙道先をSB151に、北壁でSK447にそれぞれ切られる。一辺5.0ｍの隅丸方形のプランである。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。袖石は左右に2個ずつあると思われるが、左袖の一つだけが原形を止めていた。粘土はIIA_2層質の土に近似する。火床は赤色化し、床面から余り掘り込まない。柱穴：主柱穴が4基ある。柱間の寸法は2.3ｍ、柱穴の規模は径40～56cmの円形に近い掘り方で、深さは54～60cmである。柱穴の配置は規格性が高く、いずれも柱痕跡が確認された。諸施設：カマド右側に貯蔵穴と思われる、規模が72×50cm、深さ12cmの落ち込みを確認した。床：IIＡ層基質のシルトを床全体に入れて整地した後、さらに薄く粘土を貼る丁寧な構築である。硬度計の測定によれば、床の中心から南壁と北壁の中央が硬い。周溝：幅10cm、深さ5cmの溝が北西隅と南西隅にある。西壁中央には周溝がみられず、入口部の施設と関連する可能性が強い。埋没：黒褐色のIIＡ層質の粘土を主にし、ブロック状に堆積することから人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器、刀子などがあるが、カマド周辺に集中する傾向がみられた。５～８はカマド左側付近から出土している。時期：２期に帰属する。

SB148　位置：南部Ｃ区　図版43、PL14

検出：IIA_2層で検出する。カマド左側でSK410を切る。一辺3.5ｍの方形プランである。カマド：北壁中央に位置し、左右の袖が遺存していた。袖石には花崗岩を利用し、床面から浮いた位置に固定させていた。礫の内側は剝落し、直接火を受けていたと考えられる。天井石は花崗岩を使用し、落ちた状態で確認された。火床は赤色化していた。床：荒掘りした後に整地して敲き締める。南側がわずかに高い。埋没：細粒砂を主にし、白色砂と細礫が均一に含む暗灰黄色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子などがある。遺物の全体量は少なく、いずれも破片で出土する例が多く、図示した遺物は覆土中からの出土である。時期：14期に帰属する。

SB149　位置：南部Ｃ区　図版44、第38図

検出：SD27の南側に隣接する方形プランである。カマド：位置や構造に関する詳細は不明である。床：地山をそのまま床とするが、部分的に貼り床をする。壁高は10cmと浅い。埋没：粗粒砂を基調に、風化礫



第37図　SB147実測図

が混入するオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器を出土したが、遺物量は少ない。床面遺物は北西隅に集中する傾向がみられ（2～5）、１・６・７は南東の落ち込みから出土した。時期：14期に帰属する。

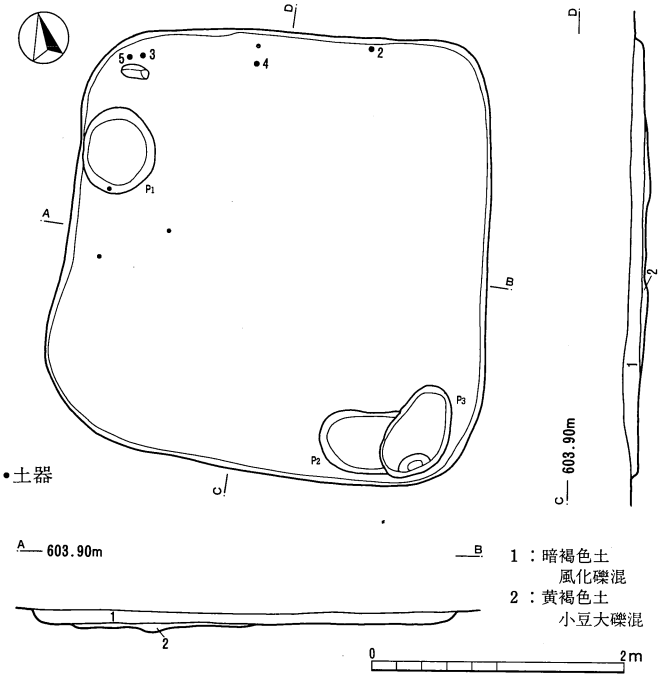
SB150　位置：南部Ｃ区　図版43

検出：当初、本址の存在に気が付かず、SB144の調査の際に先行トレンチを入れたところ、西側にプランが延び、さらに、本址のカマドの火床をSB144の床面で確認したことから本址を認定した。SB144・SD27を切る。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築する。赤色化した火床を確認した他、詳細は不明である。床：荒掘りした後でⅡＡ層質の粘土を入れて貼り床をする。埋没：ＩＤ層質の細粒砂を基調とする暗オリーブ褐色土層で、粘土粒を均一に含む。人為的な埋没状況を示していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器がある。遺物は北側に多く、５・６・８～11は床面から出土した。時期：11期に帰属する。

SB151　位置：南部Ｃ区　図版46

検出：SB147の東側に隣接する。東壁が張り出すことから別の住居址との重複があると予想されたが、平面的に切りわけることができず、最終的に床面の状況とカマドの位置から、南側でSB152を認定し、本址が

切ると判断した。本址はSB152の建て替えの可能性が強い。カマド：東壁中央に位置し、煙道は斜めの方向へ構築する。左袖だけが遺存し、袖石が確認された。煙道は長さ90cmで、煙出し部がわずかに凹んでいた。床：平坦に荒掘りし、全面に薄く貼り床をする。埋没：細粒砂を基調とし、ⅡA層質の粘土や焼土ブロックが混入する暗灰黄色の単一層で、人為的な埋没である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、鎌がある。床面遺物（1・4～6・8）は東側に多く、4・6は完形に近い。鎌は床面中央で出土した。時期：11期に帰属する。



第38図　SB149実測図

SB152　位置：南部C区　図版46

検出：北側でSB151に切られる。カマド：袖は遺存しないが、北東隅に120×80×12cmのピットがあり、焼土粒や炭化物が混入することからカマドの火床の可能性が強い。床：SB151の床と同様の構造で、床面のレベル差もほとんどない。埋没：ⅡA層質の土に白色砂が混入する暗灰黄色の単一層で、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：遺物は出土していない。時期：遺物による時期の決定は難しいが、SB151と本址の間での建て替えが類推されることからほぼ同じ11期頃と思われる。

SB153　位置：南部C区　図版46、第39図、PL14

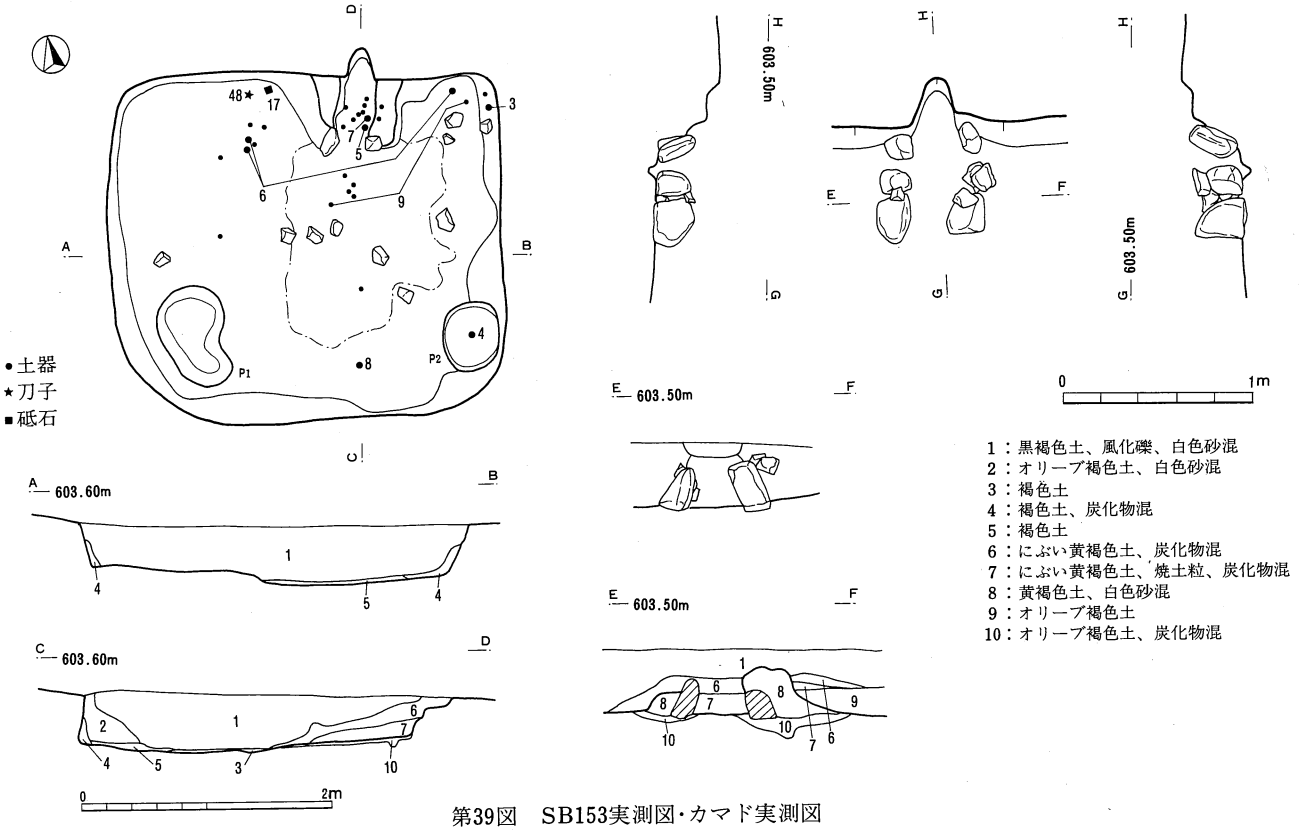
検出：ⅡA$_1$層で検出する。2.7×2.8mの小型の住居である。カマド：北壁中央やや北東隅寄りに位置し、袖は原形を止める好資料である。袖石は床面に置くように固定させ、硬砂岩やカコウ岩を積み重ねる様に配置していた。袖に使用された粘土はⅡA$_2$層質の土に近似する。石の内側は直接被熱する。諸施設：南東、南西隅に深さ10～20cmの用途不明の落ち込みがある。床：床面は凹凸があり、西側の床が5cm程高い。東側だけを整地した痕跡がみられた。壁は西側から南東隅にかけて緩やかに傾斜し、テラス状に近い状況を呈していた。硬度計の測定では南東隅付近が最も硬い。埋没：ⅠD層質の細粒砂を基調に、白色砂が均一に含まれるオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、鉄製品、砥石がある。第39図に示したように遺物はカマド周辺を中心に出土する傾向がみられる。1・5・7を除き残存率が高く、本址に帰属するものが多いと思われる。鉄鏃(84)は上層からの出土であるが、刀子(48)は床面付近の遺物である。時期：14期に帰属する。

SB154　位置：南部C区　図版46

検出：当初、本址の存在に気がつかず、SB168の中に含めて調査したが、床面の状況とプランの形状から本址を認定した。北側でSB168に切られるが、SB168は本址の建て替えと考えられる。床：地山をそのまま床とする。埋没：茶褐色の細粒砂を基調に白色砂が多量に含まれる、Ⅱ層質の粘土が混入する。人為的な埋没である。遺物の出土状況：遺物は出土していない。時期：時期の確定は難しいが、SB168との関係から13期もしくは12期に帰属しよう。

SB155　位置：南部C区　図版47、第40図、PL15

検出：ⅡA$_1$層で検出する。東側のSB156と重複関係にあったが、先行トレンチで本址のカマドがSB156

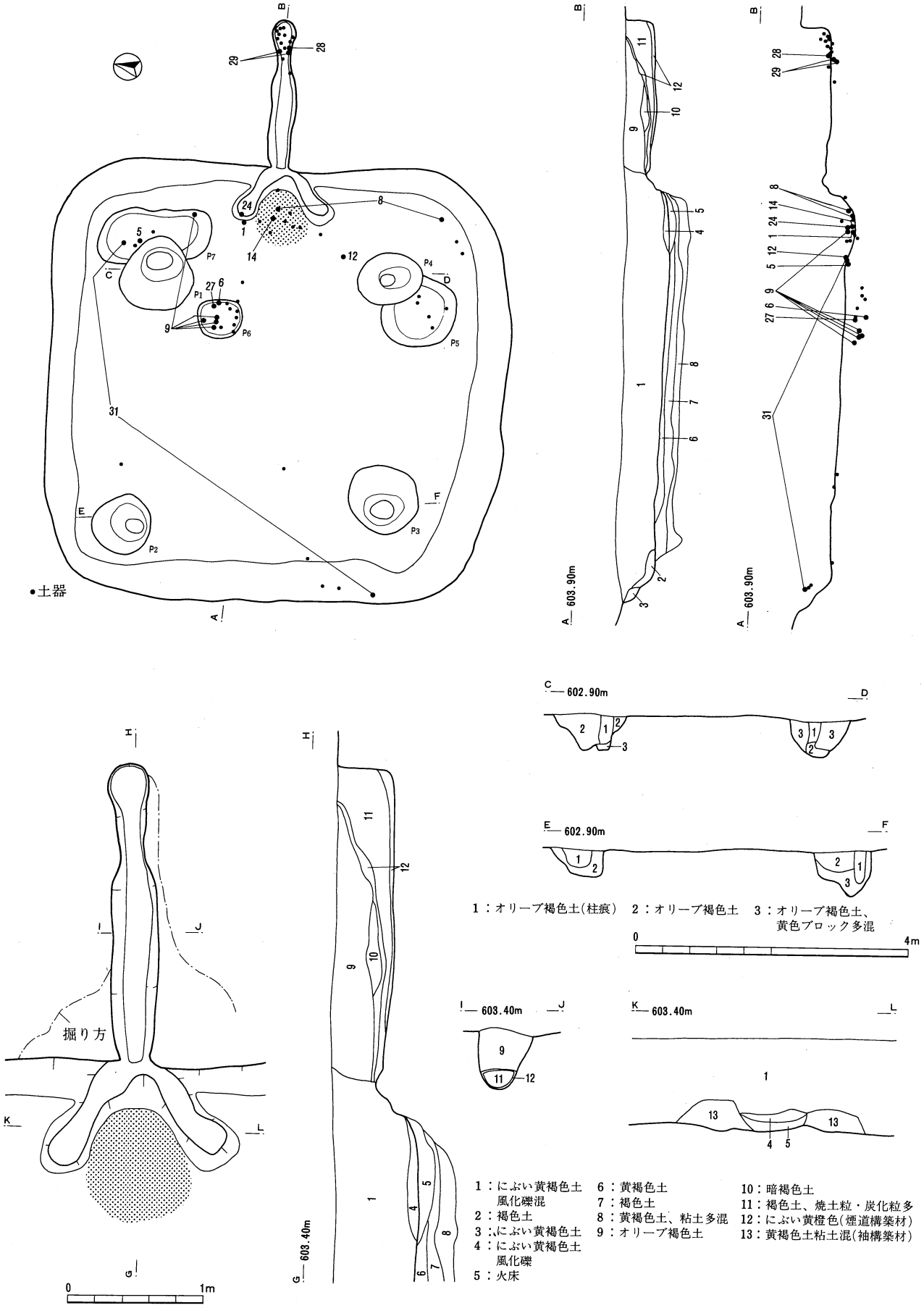


第39図　SB153実測図・カマド実測図

にのることから、本址が新しいことを決定した。本址は大型の隅丸方形の住居址である。カマド：東壁中央に位置する。袖は地山を掘り残して粘土で固めたカマドと思われる。煙道はトンネル状に遺存し、赤色化した火床から煙道口へ緩やかに傾斜し、そこから水平に延び、直角に曲り地表の煙出しへ続く。煙道は2.2ｍと長く、構築は荒掘り→煙道構築→埋め戻しの順で行われていた。柱穴：主柱穴が４基ある。北西隅にあるＰ２は他の柱穴配置とずれるが、意識的に隅に構築した可能性が強い。柱穴の規模は径90cm以上と大きく、深さも40～68cmと深い。柱痕跡は底面に達していた。柱間の寸法は3.4ｍである。床：全面に荒掘りした後でⅡA_1層質やⅡA_2層質の粘土を交互に入れて敲き締めており、他の住居と比して丁寧に作られている。諸施設：柱穴と切り合うように、Ｐ５・７がある。両者とも浅く、遺物が出土している。埋没：ⅡＡ層質の粘土を主とする暗オリーブ褐色の覆土で、下層には大きな粘土ブロックが観察され、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、棒状鉄製品、土錘があり、上層から床面にかけて出土した。床面からは１・５・６・８・９・12～14・20・24～29・31が出土したが、第40図で示したように、カマド周辺やその東側に集中する傾向がみられた。煙道先からは土師器の甕(28･29)が出土したが、28は煙道の補強に使用しており、別の１個体は煙出しに使用したものが落下したと考えられる。須恵器の鉢(31)は住居址が埋没する過程で投棄された状況を示すが、床面から出土した遺物のほとんどは本址に帰属する遺物と思われる。時期：１期に帰属する。

SB156　　位置：南部Ｃ区　　図版47

検出：西側でSB155に切られる。規模はSB115よりひと回り小さい。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。袖の一部が遺存し、火床は床面から若干掘り込まれる。径68cmの範囲で赤色化している。煙道は火床から緩やかに傾斜し、煙出しへ続く。長さは1.8ｍで、その先端には数片の遺物があったことから、ほぼ煙出しの位置にあたると推定できる。柱穴：主柱穴が４基ある。柱間の寸法は3.2～3.4ｍで、SB155



第40図　SB155実測図(1:80)・カマド実測図(1:40)

と共通である。柱穴の掘り方は円形で径58～70cm、深さは48～72cmと一定でないが、西側の柱穴はSB155の床剝ぎ後、確認しているため、本来は同じ深さの柱穴だったと思われる。床：荒掘りした後でⅡＡ層質の粘土が混在する土で整地し、敲き締めていた。埋没：ⅡＡ層の粘土を主とし、ブロック状に堆積するオリーブ褐色土層で、明らかに人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、土製紡錘車があるが、覆土中には遺物はほとんどなく床面にも少ない。１・２・６～８は床面遺物である。時期：１期に帰属する。

SB157　位置：南部Ｃ区　図版47

検出：SB155の西側に隣接する。主軸方向が約1.0ｍ短い長方形のプランである。本址はSB158を切る。カマド：東壁中央からやや南よりに位置する粘土カマドで、左右の袖の一部が遺存していた。袖の粘土はⅡA_2層質の黄褐色の粘土に似る。火床は赤色化し、焚口には炭化物が集中していた。柱穴：主柱穴４基は住居の四隅付近に配置する。柱穴の掘り方は円形で径34～42cm、深さは４～12cmと浅い。柱間の寸法は主軸方向が2.2～2.4ｍ、直交する柱間の寸法は2.8～3.6ｍと一定でない。床：荒掘りした後、ⅡA_1、$_2$層の粘土を混ぜて整地し、敲き締めていた。硬度計の測定では中央から南側にかけてが硬い。埋没：ⅡＡ層の暗褐色土を基調とする単一層で人為的な埋没状況である。土師器、須恵器があるが全体量は少ない。遺物は床面に多いが、いずれも細片で、２・５はカマド周辺から出土した。時期：１期に帰属する。

SB158　位置：南部Ｃ区　図版47

検出：SB157に北側の大半を切られる。形状と主軸などはSB157とほぼ同じで、本址との関連性は強い。床：地山をそのまま床としており、平坦である。埋没：ⅡA_1層質の粘土を基調に炭化物や焼土粒が部分的に混入するオリーブ褐色の単一層である。人為的な埋没状況を呈している。遺物の出土状況：遺物は少なく、確実に本址に帰属すると思われる遺物はない。時期：SB157との関係から１期に帰属する。

SB159　位置：南部Ｃ区　図版47

検出：SB157の北側に隣接する、隅丸方形のプランである。カマド：西壁中央に位置する。火床は赤色化し、粘土で構築した袖の一部が残存していた。煙道は長さ1.2ｍを測り、火床から煙出しに向かって緩やかに傾斜していた。床：北壁際が一部礫の混在した地山が露出する他は、Ⅱ層質の粘土を入れて整地し、さらに、中央には薄く貼り床をしていた。硬度計の測定によれば、南側全体が硬い。埋没：ⅡA_1層の粘土を基調とする暗灰色の単一層で風化礫と白色粘土粒を均一に含み、人為的な堆積状況を示す。遺物の出土状況：土師器、須恵器があるが、覆土中の遺物は少なく床面に多い。いずれも破片の出土する例が多く、３は床面から、５～７はカマド周辺からの出土した。時期：１期に帰属する。

SB160　位置：南部Ｃ区　図版45、PL15

検出：SB161を切るように西側に位置する。SB161とは主軸、形状、規模が近似し、SB161から本址への建て替えが推測される。カマド：東壁中央に位置するが、袖には構築材の粘土の一部が残存していた。煙道は1.70ｍと長く、形態的にはSB155の煙道と同じと思われる。床：全面に荒掘りし、ⅡA_2層質の土を入れている。硬度計の測定によれば北側と西側が軟らかい。柱穴：主柱穴が４基ある。柱穴の規模は径40～50cm、深さ54～64cmでほぼ同じ。柱間の寸法は2.3～2.4ｍで一定である。すべての柱穴で柱痕跡が確認できた。周溝：幅16～20cm、深さ３～４cmの周溝が北西、西側、南東隅にある。埋没：ⅡＡ層の粘質な暗オリーブ褐色土を基調とし、風化礫、焼土粒、炭化物が混入する。人為的な埋没である。遺物の出土状況：土師器、須恵器があるが全体量は少ない。図示した遺物は１・６・８・11が床面から出土したもので、他は覆土中の遺物である。南西隅からは石錘が固まって出土している。時期：１期に帰属する。

SB161　位置：南部Ｃ区　図版47

検出：SB160に西側を、またST35に煙道を切られる。さらに、中世の土坑とも重複する。カマド：東壁

中央に位置し、袖は遺存していない。煙道は一部撹乱を受け、1.75mと長い。床：床面はほぼ平坦で中央が堅緻である。荒掘りした後でⅡA層質の粘土を入れて敲き締めており、礫層が露出する箇所は地山をそのまま床としていた。埋没：ⅡA層を基調とする粘土がブロック状に堆積するオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：遺物は須恵器の杯があるが、極めて少ない。時期：1期に帰属する。

SB162　位置：南部C区　図版38

検出：当初、本址の存在に気がつかず、SB163の調査の際に先行トレンチを入れたところ、カマドが2つあることを確認し、再検出の結果、本址のプランを確定することができた。SB163・164を切る。なお、西側は調査区域外にかかる。カマド：東壁中央からやや北寄りに位置する。袖は遺存しないが、火床は赤色化し、天井部と思われる焼土粒が散在する。煙道は長さ55cmで底面は水平である。床：SB164の覆土中にのるため明瞭でないが、中央に薄く貼り床をし、比較的堅緻である。埋没：粗粒砂のなかに細礫が均一に混在する暗灰黄色の単一層である。遺物の出土状況：黒色土器A、須恵器があるが、重複関係があるためその帰属については判断が難しい。遺物は破片での出土が多く、カマド火床と南西隅に集中する傾向がみられた。1・2・5は床面遺物で5はカマド火床からの出土である。時期：7期に帰属する。

SB163　位置：南部C区　図版38

検出：SB162・164に切られる。西側は重複関係があるため詳細は不明だが、南北方向はの規模は6.05mを測り、大型の住居址であることが予想される。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。袖は一部しか残存していない。柱穴：主柱穴2基を確認した。柱穴の掘り方は径74～94cmと大きく、深さは30～36cmで、柱間の寸法は3.61mを測る。床：荒掘りした後で薄く貼り床をしていた。埋没：ⅡA層質の細粒砂を基調とする灰黄色の単一層で、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器、鎌があるが、土器は床面に多く、北東隅に集中する傾向がみられた。3・7～10・12・14～17が床面並びに施設から出土した遺物である。時期：1期に帰属する。

SB164　位置：南部C区　図版38

検出：SB162と同様に、SB163の調査中に本址の存在を確認する。本址は162に切られ、163を切る。西側は調査していないが、かなり大型の住居址になろう。カマド：袖を粘土で構築するカマドで、東壁中央に位置している。煙道はトレンチにより一部破壊している。火床は赤色化し、床面より若干掘り込む。煙道は1.85mと長く、煙道口から緩やかに傾斜して後、煙出しへ続いている。床：床はほぼ平坦で、整地した痕跡が確認された。埋没：上層には自然堆積が部分的に観察されたが、下層はかなり砂質な暗灰黄色土でⅡA層を基調としていた。遺物の出土状況：黒色土器A、須恵器、土師器、刀子がある。遺物は床面に多く、カマド周辺から南東隅にかけて集中する傾向がある（1～6・8・10～14・16）。刀子は覆土中の遺物である。時期：7期に帰属する。

SB165　位置：南部C区　図版38

検出：SB163の東側に隣接する。本址の西側は現地表面にあった木の撹乱でプランが確認できなかったが、SB163と重複していた可能性が強い。また、南側のSB166を切る。カマド：北壁西寄りに位置していたが、撹乱のため詳細は不明である。床：荒掘りした後で5～10cm粘土を入れて整地していた。南側が堅緻である。埋没：オリーブ褐色を呈する細粒砂を基調とし、風化礫や白色砂が混入する単一層である。遺物の出土状況：遺物は黒色土器A、土師器があり、床面から出土する例が多い。1が完形であるのを除くと破片で出土するものが多い。時期：7期に帰属する。

SB166　位置：南部C区　図版38

検出：SB163の床剝ぎの際、本址の存在を確認した。木による撹乱を受け、プランは明瞭でなかったが、床面の状況から住居址と認定した。直接、SB163との新旧関係は確定できていない。また、北側に位置する

SB165に切られる。床：一部貼り床が観察された。壁際は地山をそのまま床としている。埋没：細粒砂を主とし、風化礫が均一に混入する単一層である。遺物の出土状況：須恵器の食器があるが、本址に確実に帰属する遺物か否かは明確でない。時期：２期に帰属する。

SB167　位置：南部Ｃ区　図版38

検出：SB163の南側に隣接する。西側は調査区域外になり、東側の一部のみ調査された。カマド：東壁中央に位置するが、火床のみを確認した。床：ⅡＡ$_2$層質の粘土を中央に薄く貼り床をしており、小さな凹凸が認められる。埋没：細粒砂を主に、風化礫と粘土粒が均一に混入する単一層である。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、土師器があるが、床面から出土する例が大半を占め、いずれも破片で出土した。時期：６期に帰属する。

SB168　位置：南部Ｃ区　図版46

検出：南側でSB154を切り、北東隅でSB213を切る。また、中世の土坑と重複する。カマド：東壁北東隅に位置し、袖は完全に破壊されていた。火床は赤色化し、焼土粒が散在する。煙道は火床から緩やかに傾斜している。床：全面に荒掘りした後でⅡＡ層質の土を入れて整地している。東壁は他壁と較べると緩やかに立ち上がり、テラス状の遺構になる。カマド手前がわずかに高い。埋没：焼土粒の混入から２層に分層された。２層とも基本的には暗オリーブ褐色の細粒砂を基調とする同質の覆土で白色砂が多量に入る覆土である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、刀子、紡錘車などがある。床面遺物（1・4・8～11・13～16・19）は完形に近く、床面全体に分布していた。鉄製品は９点とほかの住居址と比較して多い。このうち、刀子２点と金具は床面遺物である。時期：13期に帰属する。

SB169　位置：南部Ｃ区　図版46

検出：ⅡＡ$_1$層で検出する。南東隅、北西隅から南東にかけて溝状の撹乱を受ける。本址はSB223・214を切るが、覆土の色調の違いから明瞭に区別された。カマド：東壁北東隅に位置する石組カマドである。左袖、右袖の一部の礫が原位置にあり、天井に使用されたと思われる礫が散乱していた。礫は20cm前後のものが多く、積み上げるように構築している。火床は赤色化していないが、焼土粒が集中する。諸施設：カマド右側には112×86×28cmの落ち込みがあり、カマドに付属する施設であろう。床：中央部からカマドにかけて堅緻である。埋没：黒褐色の細粒砂を主に、白色砂を均一に含み、風化礫が部分的に観察された。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、カマド周囲とその右側の落ち込みに多い。１～６・10・12～14・16は床面と施設の遺物で、２・３・６・10は完形品である。時期：14期に帰属する。

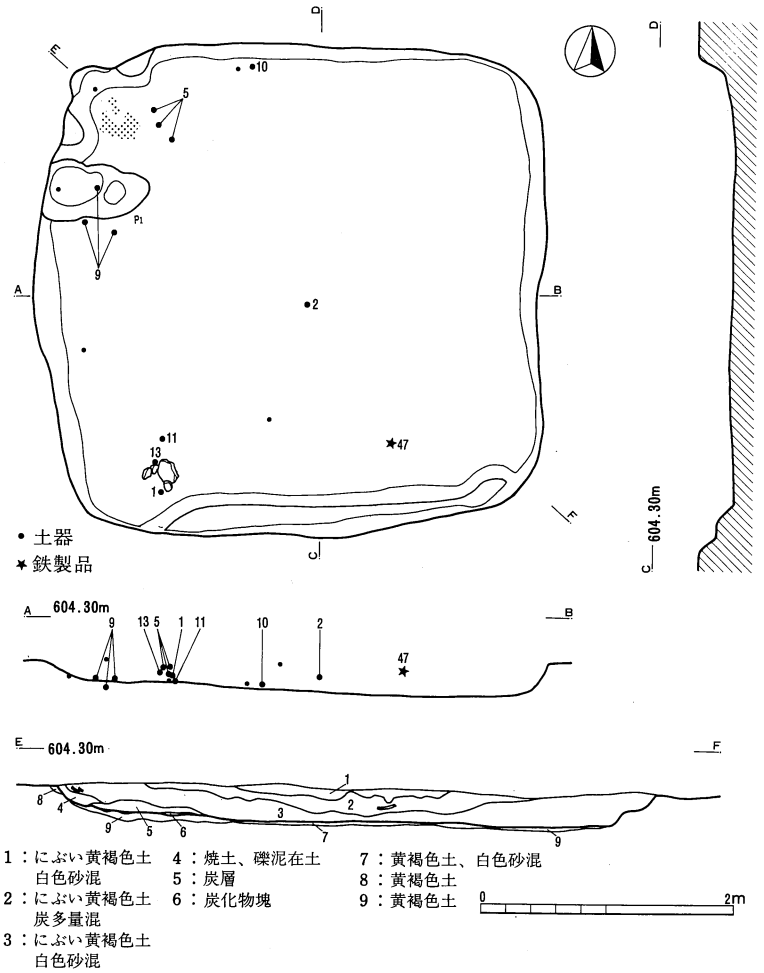
SB170　位置：南部Ｃ区　図版49

検出：当初、本址のカマドだけが検出され、西側と北側のプランが確定できなかった。最終的に先行トレンチを入れ、床面の状況からプランを確定した。北側でSB218を、東側でSB222を切る。カマド：北東隅に位置する。右袖の一部が遺存していたが、左袖は壁と接するように構築する。火床は不鮮明で、炭化物が集中し、その周囲には硬砂岩が散乱していた。煙道は主軸方向から25°北へ触れた斜めの方向に延びている。床：中央部が堅緻である。整地した後で敲き締めている。埋没：細粒砂を基調に、ⅡＡ層質の粘土粒が混入するにぶい黄褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、鋤頭が出土した。遺物は覆土中、床面とも少ないが、カマド周辺と東壁に沿って集中する傾向がみられる。２・５はカマド火床から出土した時期：15期に帰属する。

SB171　位置：南部Ｂ区　図版31、第41図

検出：ⅡＡ$_1$層下位で検出した、一辺3.65ｍの隅丸方形の住居址である。カマド：北西隅に位置する。煙道は残存せず、袖も完全に破壊されていたが、付近には焼痕のある花崗岩が散乱していた。諸施設：カマド左側には87×51cmの落ち込みがあり、カマドに付属する施設と思われる。床：壁際は地山をそのまま床

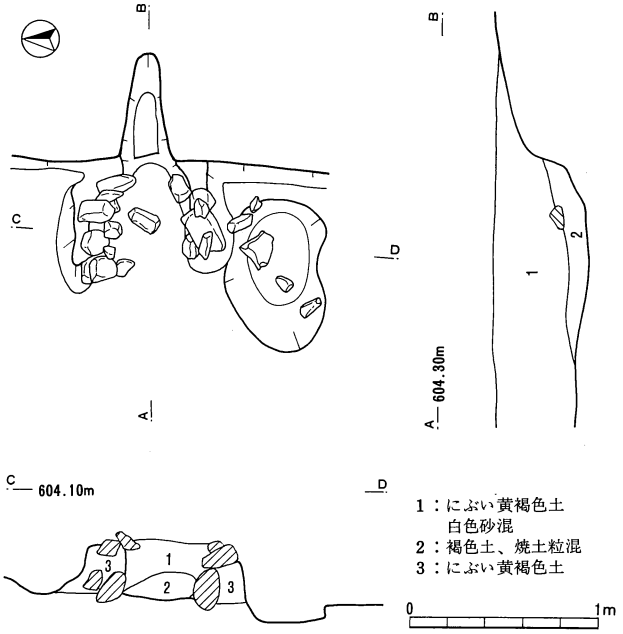
とするが、中央は整地した後で敲き締めていた。硬度計の測定ではカマド焚口から北壁際にかけてが硬い。テラス：床面から高さ6cmの位置に、幅20cmのテラスが南壁全体にみられた。埋没：覆土は3層に分層された。それぞれレンズ状の堆積状況を示し、2層中に多量の炭化物が混入することから明瞭に区別された。1・2層の境界は漸移的で短時間に埋没したと思われる。3層はオリーブ褐色の細粒砂を基調とし、白色砂が多量に混入する。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子などがある。2層を挟んで上層と下層に分けて器種構成の観察をしたが、時間差を示す所見は得られなかった。だが、全体的に下層には大きな破片が多い。床面遺物（1・2・5・9～11・13）はカマド周辺と西側に集中する傾向がみられた。また、9はカマド左側の施設から完形に近い状態で出土した。時期：14期に帰属する。



第41図　SB171実測図

SB172　位置：南部B区
図版31、第42図、PL15

検出：一辺4.20～4.25mの隅丸方形の住居址で、北東隅はわずかに張り出していた。カマド：東壁北東隅に位置する石組カマドである。左右の袖は一部原形を止めるが、崩落したと思われる礫が火床内に散乱していた。煙道は長さ55cmで、主軸から15°北の方向へ振れた方向に延びる。諸施設：カマド左側の張り出した箇所に50×40×10cmのピットがある。床：地山を床としており、中央が高い。埋没：黒褐色の細粒砂を基調に白色砂が均一に混入する。上層には焼土と炭化物粒が混在していた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子がある。遺物はカマド周辺と東側に集中する傾向がみられたが、9を除き破片での出土が多い。3～5・6・10・13はカマド周辺からの出土である。時期：13期に帰属する。



第42図　SB172カマド実測図

SB173　位置：南部B区　図版33

検出：IIA_1層上位で検出する。2.95×4.20mの隅丸長方形のプランである。カマド：東壁北東隅

に位置する。左袖石が原位置に遺存し、その左右に破壊されたと思われる礫が散乱していた。火床は赤色化せず、煙道は火床から急な角度で立ち上がり延びている。床：地山を床とするが、凹凸が目立つ。テラス：北壁西隅寄りの床面から15cm高い位置に、幅18cm、長さ1.04ｍのテラスがある。埋没：細粒砂を主にし、白色砂、粘土粒、マンガン粒をわずかに含むオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子などがある。床面遺物（3・4・7～9・13～15）はカマド周辺と南東隅付近に集中する傾向がみられるが、破片での出土が多い。13は灰釉陶器の丸皿で転用硯である。時期：12期に帰属する。

SB174　位置：南部Ｂ区　図版33

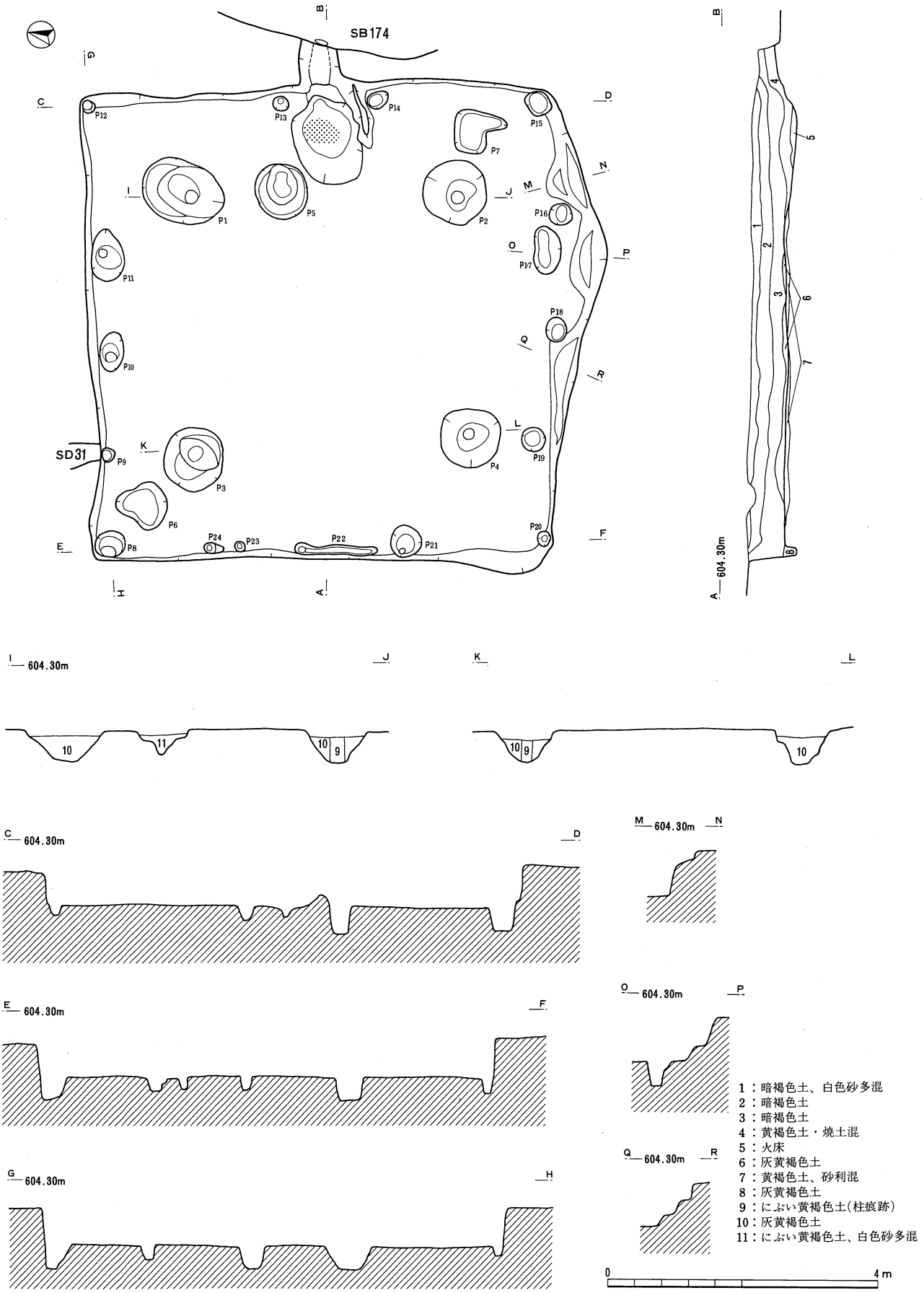
検出：SB175の東側に隣接する。本址は主軸方向が50cm長い長方形のプランである。SB175のカマド煙道を切り、SB180に本址のカマドがのることから、新旧関係は明瞭である。逆に、煙道先ではSK555に切られている。カマド：東壁北東隅に位置する。袖は原形を残し、20cm程の礫を10個積み上げるように構築していた。火床は焼土が散見される程度で、赤色化は観察されない。煙道口は火床から５cm高い位置から煙出しへ水平に延び、1.35ｍと長い。床：地山を床としており、全体的に軟らかな平坦な床である。埋没：覆土は灰オリーブ色の砂を主にし、白色砂が混入している。レンズ状の堆積で自然埋没に近い。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子など鉄製品３点、板状の青銅片などがあるが、その全体量は少なく、床面遺物（3～5・8）もわずかである。時期：15期に帰属する。

SB175　位置：南部Ｂ区　図版33、第43・44図、PL16

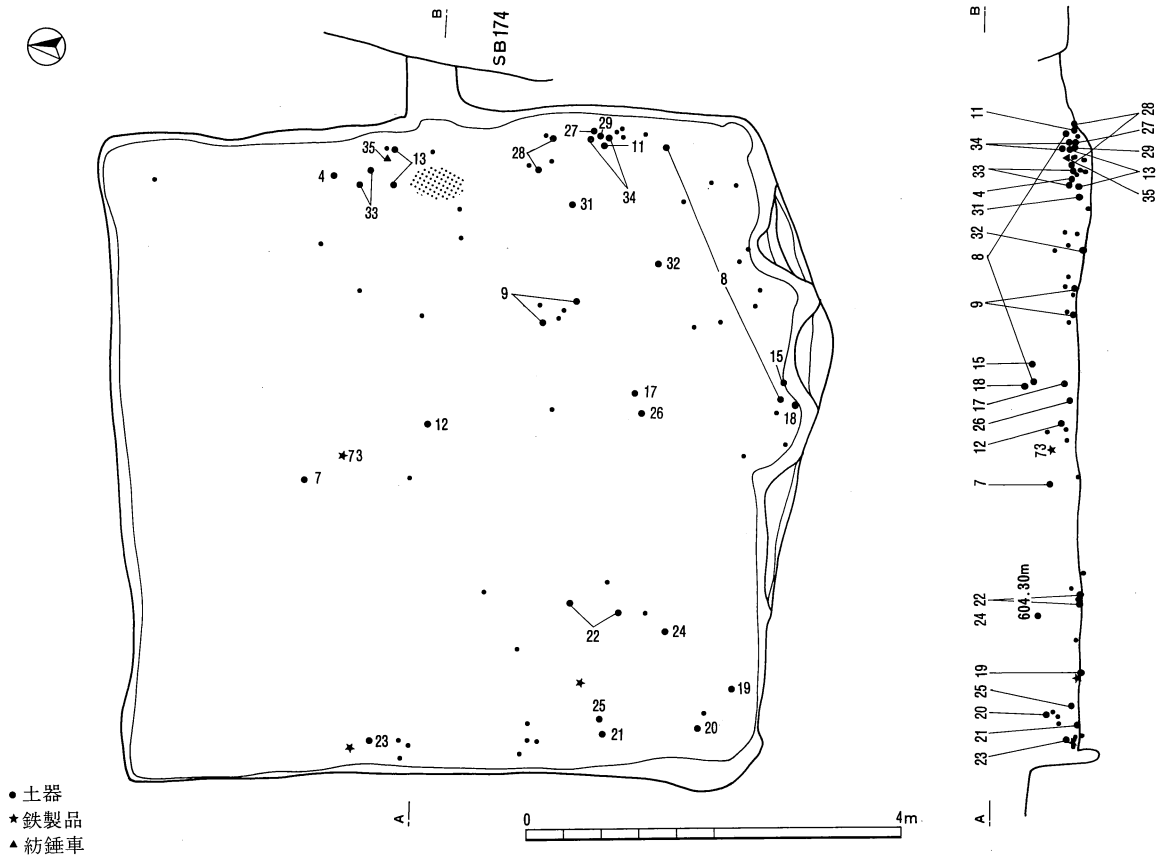
検出：ⅡＡ$_1$層上位で検出する。南側の壁が張り出す、6.85×6.70ｍの隅丸方形の大型住居址である。煙道先がSB174に、西側ではSD31に切られる。カマド：東壁中央に位置する大きなカマドである。袖は完全に破壊されていたが、袖石の抜き取り痕が観察された。火床は広い範囲に赤色化がみられた。煙道は火床から20cm高い位置に煙道口があり、緩やかに傾斜していた。柱穴：主柱穴４基と壁柱穴16基がある。主柱穴は図示したように、大きな掘り方で深さも一定であるが、柱間の間隔は主軸方向がわずかに短い。壁柱穴はひとつの壁に４～５個配置し、隅にくる柱穴は壁に食い込むように掘り込んでいた。床：荒掘りした後で地山の礫層に由来すると思われる砂利混じりの土で整地し、さらに、ⅡＡ$_2$　層質の粘土を全面に薄く貼っていた。周溝：西壁中央に幅12cm、深さ７cm、長さ1.20ｍの周溝がある。その他の施設：南壁の中央に張り出し部があり、壁が階段状になり、P16～18のにかけては出入り口部の可能性が強い。なお、壁は地山を掘り残していた。埋没：おおむね３層に分層したが、下層の埋め戻しが明瞭な堆積と、明瞭でない上層の２層に分層されよう。床面直上には粗粒砂や細礫が薄く堆積し、その上にⅡＡ層基質の粘土ブロックの堆積がみられ、さらに、白色砂が混入する細粒砂が覆っていた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、鉄鏃などが出土したが、須恵器の食器が多い。遺物は上層から床面にかけて出土しているが、床面から出土する例がほとんどで、特に南側に集中する傾向が認められた。床面遺物の28・31～33の煮炊具は本址に帰属する可能性が高いと考えられる。遺物の多くは残存率が高く、埋没する過程で投棄されたものと思われる。時期：４期に帰属する。

SB176　位置：南部Ｂ区　図版31、第45図、PL16

検出：西側でSB177に切られる。SB177のカマドが本址の住居址にのることから、新旧関係は明瞭である。カマド：東壁中央に位置し、袖は原形を止める。袖の先端には礫を１個ずつ配し、礫と壁の間には半分に割った土師器の甕を逆位に立てて芯材の補強に使用する。火床は赤色化が明瞭である。煙道はトンネル状に掘り抜く。煙道口から煙出しへ緩やかに傾斜しており、長さは1.65ｍ、径は最大30cmを測る。柱穴：主柱穴４基がある。北東にある柱穴は径10cmと他の柱穴と比して規模は小さい。柱間の間隔は2.22～2.45ｍを測る。床：全面に荒掘りし整地した後で数回に分けてⅡＡ層基質の粘土を貼る。埋没：ⅡＡ層由来の粘土ブロックが上層から下層にかけて堆積し、炭化物が混入するオリーブ褐色土である。人為的な埋没を



第43図　SB175実測図(1)(1:80)



第44図　SB175実測図(2)(１:80)

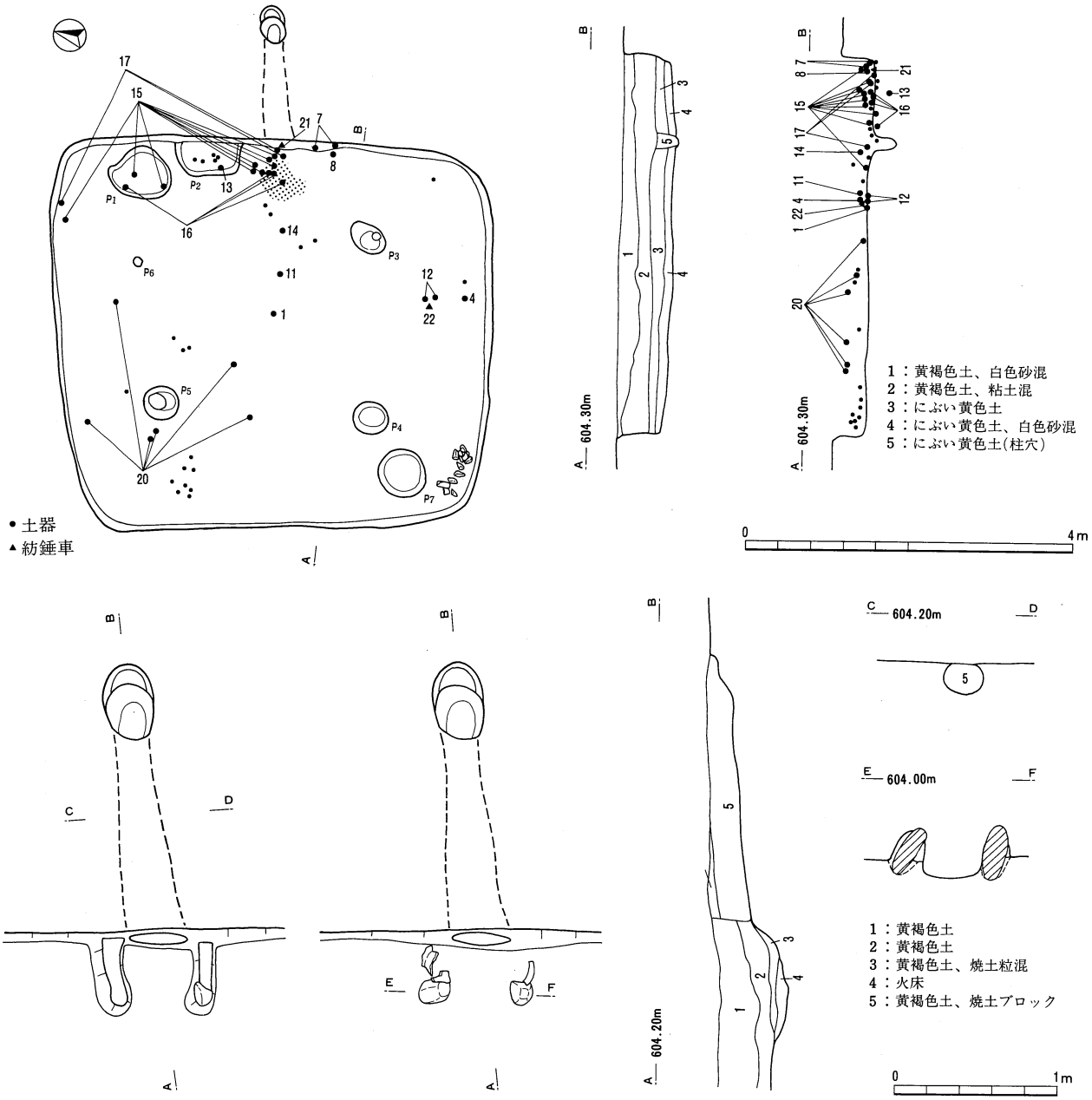
示している。遺物の出土状況：土師器、須恵器、鉄鏃などの鉄製品がある。遺物は上層から床面にかけて出土したが、第45図に示したように床面付近に多い。床面遺物の２・４・７～９・11～17・20はカマド火床とその左側に集中する。カマド袖の芯に使用した土師器の甕(15)は床面から出土した破片と接合し、底部を欠くが、完形に近い状態に復元された興味深い資料である。また、南西付近では石錘と考えられる礫が17点かたまって出土した。時期：１期に帰属する。

SB177　位置：南部Ｂ区　図版31

検出：IIA_2層で検出するが、床面のみを確認できた。なお、北東のプランは確定できず、詳細な状況については不明である。SB176と重複するが、本址のカマドがSB176のプランにのることから、その新旧関係は明瞭である。カマド：東壁北東隅にあるが、赤色化した火床だけ確認できた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、遺物は少なく、図示した遺物も本址に帰属するか不明である。時期：15期に帰属する。

SB178　位置：南部Ｂ区　図版30、第46図

検出：本遺跡では類例のない鍛治に関連した遺構である。当初、南側にあるSB195に含めて考えていたが、床面や覆土の状況を観察した結果、再検出してプランを確定した。なお、本址はSB195･SK554に切られ、SB183を切る。カマド：他の住居址にみられるようなカマドは検出できなかったが、東壁中央からやや北寄りには、126×72×16cmのレンズ状の掘り方があり、その中央は赤色化し、坩堝が検出された。坩堝の中や周囲には小さな銅滓が散乱しており、鍛治に関連する遺構であることは容易に判断できた。本来はカマドとして使用していた施設を転用した可能性が高い。床：平坦な床である。北東隅に焼土粒や炭化物が集中していた。埋没：覆土は暗褐色の単一層で、細粒砂を基調に細礫を含んでいた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、砥石があるが、床面遺物(3)は極めて少なく破片が多い。図示した土器は混入したものと思われる。また、砥石は床から10cm上での出土である。時期：15期に帰属する。



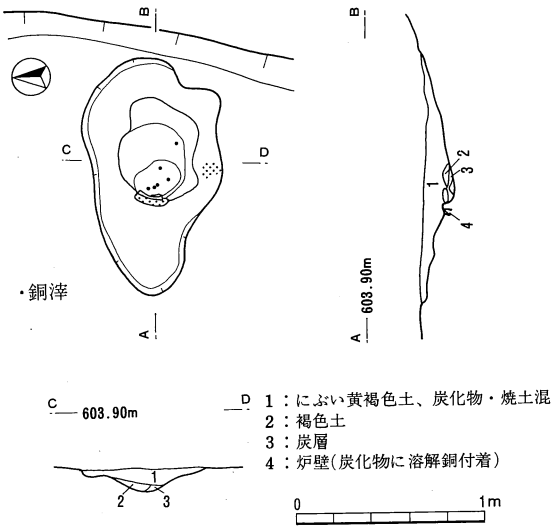
第45図　SB176実測図(1:80)・カマド実測図(1:40)

SB179　　位置：南部Ｂ区　　図版30・PL17

検出：SB178・195に北側で切られ、東側でSB182を切る。SB182は煙道のみが確認され、本址に含まれる可能性も考えたが、本址に含める根拠を欠くため、一応別の遺構とした。本址は5.60×5.55ｍの大型隅丸方形の住居址である。カマド：東壁北東隅に位置し、天井石、袖は原形を止めていた。袖石には花崗岩を使用し、積み上げるように配石しており、袖石の内側は被熱する。火床は赤色化していたが、その範囲は狭い。煙道は長さ1.45ｍで、主軸方向から北へ25°振れた斜めの方向に延びていた。諸施設：カマド右側には、80×54×20cmの落ち込みがあり、カマドに付属する施設と思われる。床：全面に薄く貼り床をする。硬度計の測定では南側が硬い。埋没：ＩＤ層基質の細粒砂を主に細礫、白色砂が混入するにぶい黄褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、白磁、刀子が出土したが、その全体量は少なく、破片での出土がほとんどである。4はカマド左の施設の遺物で、３・５は床面から出土した。白磁の碗は北西の覆土中の遺物で投棄されたと思われる。時期：15期に帰属する。

SB180　位置：南部Ｂ区　図版33

検出：ⅡＡ$_1$層で検出する。西側でSB174のカマドが本址にのり、本址が切られることは容易に確定できた。カマド：東壁中央やや南寄りに位置する粘土カマドである。左右の袖の一部が遺存し、袖の内側は奥壁とともに赤色化していた。煙道はトンネル状に残り、1.45ｍと長く、緩い傾斜で煙出しへ延びる。柱穴：主柱穴4基がある。柱穴は径42～70cm、深さ26～40cmで、柱間の間隔は2.0ｍ前後である。床：地山をそのまま床としている。硬度計の測定では南側が硬い傾向を示していた。周溝：北壁中央から北西隅にかけてと、南西隅に、幅10cm、深さ２～６cmの周溝がみられた。埋没：ⅡＡ層基質の粘土ブロックを混入するにぶい黄褐色の単一層で、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器があるが煮炊具が多く、大半が床面から出土した。図示した遺物はいずれも床面遺物でカマド周辺（２～５）と東壁際、北西隅に集中する傾向がみられた。時期：１期に帰属する。



第46図　SB178精練址実測図

SB181　位置：南部Ｂ区　図版35

検出：西壁の一部を現耕作によって削平されていたが、プランは明瞭である。4.25×3.05ｍの隅丸長方形の住居址である。カマド：北東隅に位置するが、火床と思われる付近で散在する焼土粒を確認した他、詳細は不明である。床：荒掘りした後で整地しているが、敲き締めの痕跡は認められない。全体的に軟弱な床であるが、硬度計の測定では西側が高い数値を示していた。埋没：ＩＤ層基質の細粒砂に粘土粒、白色砂、炭化物が混入する黄灰色の単一層である。遺物の出土状況：灰釉陶器、土師器があるが、覆土、床面とも遺物は少ない。図示した遺物は床面遺物で、灰釉陶器の皿（２）は南壁中央付近から完形で出土した。時期：14期に帰属する。

SB182　位置：南部Ｂ区　図版30

検出：SB179で詳述したように煙道のみを確認した。カマド：煙道は長さ1.05ｍを測り、底面は水平である。

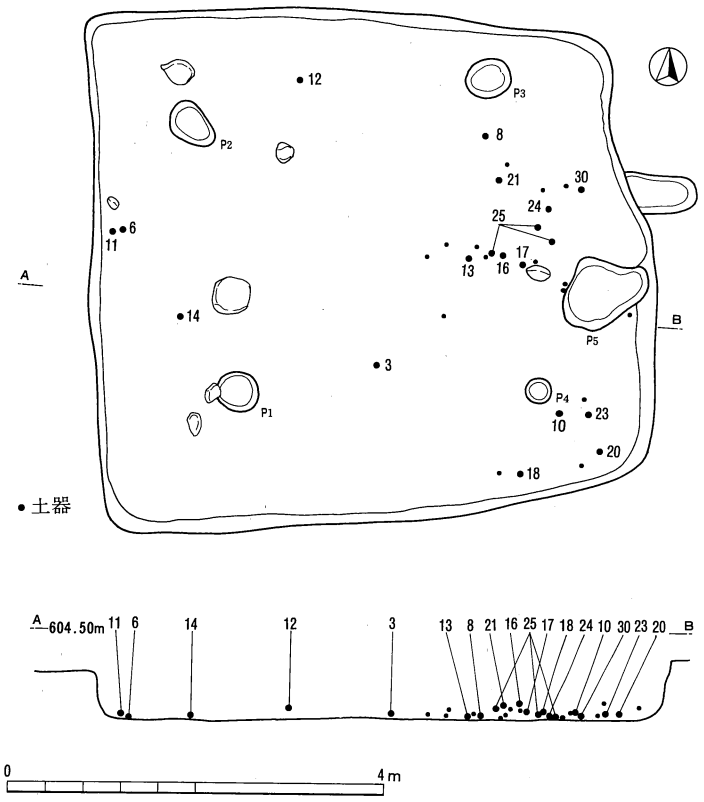
SB183　位置：南部Ｂ区　図版30、PL17

検出：ⅡＡ$_1$層で検出した。東側のプランは不鮮明であるが、カマドの位置からプランを想定して掘り下げた。最終的に床面から壁を確定した。4.25×3.85ｍの隅丸長方形の住居址である。南西隅でSB178に切られるが、覆土の質的な違いから平面的に切り分けることができた。カマド：東壁北東隅に位置し、袖と支脚石が残存していた。袖は礫を３～４個ずつ積み上げるように構築し、礫材には花崗岩と硬砂岩を使用していた。煙道口は火床から30cmの高い位置にあり、そこから水平に煙出しへ延び、長さは1.50ｍを測る。床：中央が堅緻で、西側は炭化物の集中がみられた。埋没：黄褐色の粗粒砂を基調に炭化物、焼土粒が混入する暗褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器があるが、図示した遺物は12を除き床面から出土した。床面遺物は南西を除いて散見され、４・６・９・10は完形に近い。このほか、紡錘車を含めた３点の鉄製品がある。時期：13期に帰属する。

SB184　位置：南部Ｂ区　図版32、第47図

検出：西側でSB185と接するように切り合う。検出段階ではその関係については確定できなかったが、遺物の様相は本址の方が古い。プランは5.85×5.25ｍの大型の隅丸長方形で、東壁は直線的でない。カマド：東壁中央やや北寄りに位置する。カマドの主軸線は柱穴を結んだ線の中間を通る。火床は赤色化し、焼土

や炭化物が10cmの厚さで堆積していた。煙道はトンネル状に残り、長さ0.75mを測る。柱穴：主柱穴4基がある。柱穴の規模は径24～54cm、深さ25cm前後と一定であり、いずれも覆土中には焼土粒や炭化物が混入していた。床：地山を床としていた。埋没：灰黄褐色の細粒砂を基調とする単一層で人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器を中心に出土した。遺物は覆土から床面にかけて認められるが、床面や床からわずかに浮いた位置から出土する例（4・6～8・10～14・18・20・22～24・29・30）が多く、カマド周辺に集中する傾向が見られた。4・6～8・10・11・13は完形に近い。時期：4期に帰属する。



第47図　SB184実測図(1:80)

SB185　位置：南部B区

図版32、PL17

検出：SB184で前述したように、東側でSB184と本址が重複する。また、西側で中世のST53に切られる。覆土の質的な違いからその関係は明瞭である。カマド：北東隅に位置し、煙道だけが残存する。煙道は長さ50cmで、住居址の主軸方向から北へ25度振れた方向へ延びる。床：地山を床とし、軟弱である。埋没：ＩＤ層基質の細粒砂に白色砂、細礫、風化礫が均一に混在する褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器があり、遺物は床面に多く、カマド周辺に集中する傾向がみられる。図示した遺物のうち、1～6・9～11・13・14は床面から出土し、1～6は完形に近い。時期：12期に帰属する。

SB186　位置：南部B区　　図版35

検出：IIA_2層上位で検出する。東壁でSK744と重複するが、土坑の存在に気付かずに住居址を掘り下げてしまい、その新旧関係については曖昧な点を残した。一辺3.50mの隅丸方形のプランである。カマド：北東隅に位置し、北壁がわずかに張り出す。石組カマドで左袖の一部が残り、右袖付近には焼痕のある礫3個が散乱していた。火床は不鮮明で、炭化物が集中していた。床：整地した痕跡がみられるが、比較的軟らかい。中央がやや高い。埋没：SB185の覆土に近似し、暗オリーブ褐色の細粒砂を主体とする単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器などがあるが、細片で全体量も少ない。図示した遺物はいずれも覆土中の遺物である。時期：14期に帰属する。

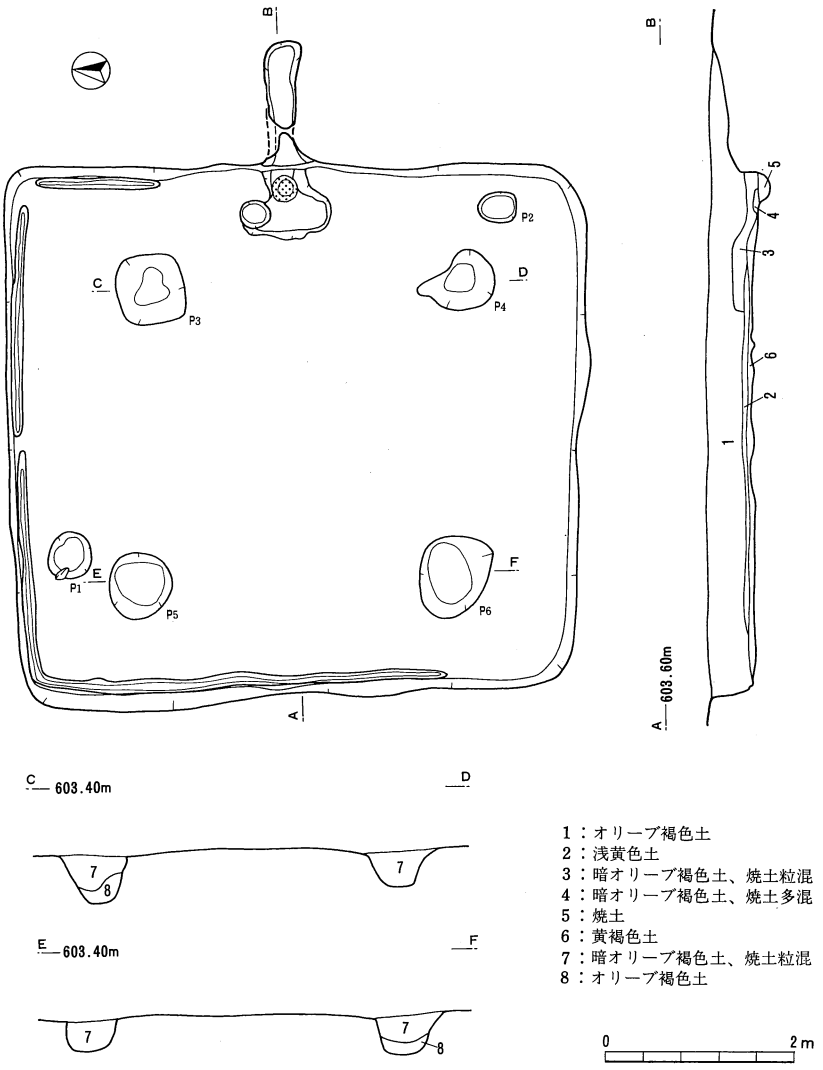
SB187　位置：南部B区　　図版29、第48図、PL17

検出：南壁を除き、プランは明瞭である。煙道がSB179とわずかに重複するが、切り合う部分がわずかなために、新旧関係は確認できなかった。なお、遺物の様相では本址の方が旧い。カマド：東壁中央に位置し、袖は完全に破壊される。左袖付近に、径25cm、深さ6cmの袖石抜き取り痕があることから石組カマドと思われる。煙道は1.35mと長い。柱穴：主柱穴4基がある。柱穴の規模は径60～80cm、深さ36～54cmである。柱間の間隔は3.27～3.25mと一定で規格性が認められる。床：平坦に荒掘りした後でIIA層基質の粘質な土を入れて整地していた。硬度計の測定では中央が硬い。周溝：幅10cmの周溝が北東隅から北壁、西壁にかけて検出された。埋没：床面直上に灰白色のシルト質の土が薄く堆積し、その上に白色砂が混入

する細粒砂が覆う。遺物の出土状況：須恵器の食器と土師器の煮炊具がある。遺物は上層から床面にかけて小片で出土する例が多い。床面遺物（1・4）も小片で確実に本址に帰属するか判然としない。時期：４期に帰属する。

SB188　位置：南部Ｂ区　図版29

検出：IIA_2層上位で検出する。東壁は直線的にならず、凹凸がみられる。ST50を切る。カマド：東壁中央からやや北寄りに位置する石組カマドである。袖の遺存状態は良くないが、左袖に硬砂岩１個と粘土がわずかに残っていた。床：カマド付近を深く荒掘りし、整地している。壁際は地山をそのまま床としており、敲き締めていた。硬度計の測定ではカマド右側から中央にかけてが硬い。埋没：IIＤ層質の細粒砂を主にし、II層基質の粘土ブロックが部分的に観察されるオリーブ褐色の単一層で、人為的な埋没状況を呈していた。



第48図　SB187実測図（1:80）

遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器があるが、遺物の量は少なく、小片での出土が多い。なお、１・３は床面遺物である。時期：14期に帰属する。

SB189　位置：南部Ｂ区　図版32

検出：本址の南西部はプラント・オパール調査のため撹乱を受け、その一部は調査できなかった。東壁にはカマド煙道が２本あり、住居址の重複があると考えていたが、床面や覆土の状況からカマドの作り替えと判断した。西壁でSB191を切る。カマド：東壁中央と北東隅寄りに位置するが、遺存状態から中央から北東隅への作り替えがなされたと判断した。中央にあるカマドは煙道だけが残る。新カマドは袖が完全に破壊されているが、礫が散乱することから石組カマドであろう。床：地山を床としており、西壁際がわずかに低い。テラス：カマド左側の北壁付近に、幅24cm、長さ２ｍのテラスがある。埋没：おおよそ２層に分層されるが、ＩＤ層基質でにぶい黄褐色の細粒砂を主とする。下層には粘土ブロックが多く観察され、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、灰釉陶器などがある。床面遺物（1・2）は南東隅に集中する傾向がみられる。５は覆土中の遺物であるが完形に近い。時期：14期に帰属する。

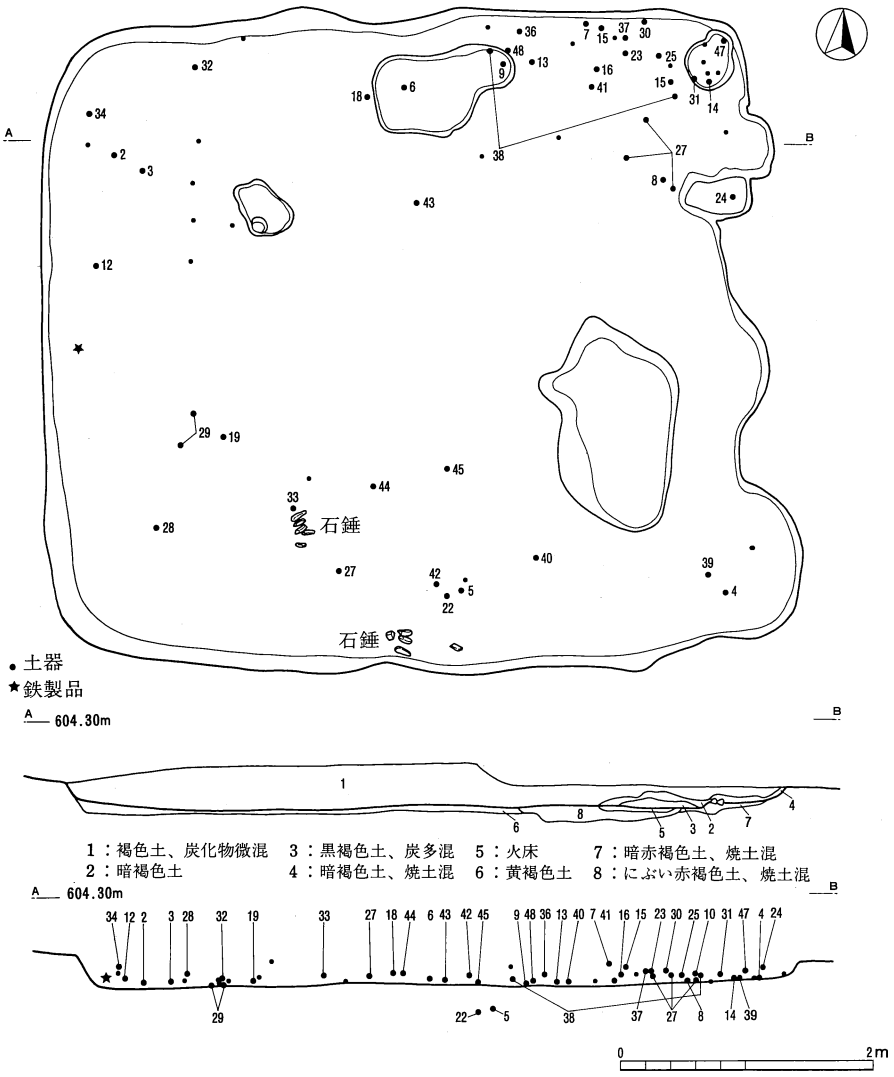
SB191　位置：南部Ｂ区　図版32

検出：SB189と同様、プラント・オパール調査のため調査は一部に限られた。残存する部分がわずかなために、形状、規模など詳細な構造は不明である。カマド：北壁西隅寄りに位置する石組カマドである。左

袖には礫と粘土が残るが、火床は赤色化がみられない。埋没：細粒砂を主とする単一層で白色砂、礫が多量に混入していた。遺物の出土状況：灰釉陶器の椀があるが、全体量は極めて少なく、本址に帰属する遺物は判然としない。時期：12期に帰属する。

SB192　位置：南部Ｂ区　　図版35、第49図、PL18

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。東壁に凹凸があるため土坑との重複があると予想したが、覆土の状況から本来の形状と判断した。5.65×4.95ｍの大型の隅丸長方形の住居である。西壁でST42を切り、SK558に切られる。カマド：東壁北東隅寄りに位置し、左右の袖の一部だけが遺存していた。火床は不明瞭で、その焚口には炭化物が集中していた。床：荒掘りした後、ⅡＡ$_2$層基質の粘土を薄く入れて整地している。硬度計の測定では南東付近が硬い。諸施設：カマド手前に、114×62×12cmのピットと、南東付近に174×96×18cmの大きな落ち込みがある。前者の覆土中には焼土粒と炭化物が混入し、多量の遺物も出土した。埋没：ＩＤ層基質の細粒砂を基調とし、焼土粒が混在する褐色の単一層である。炭化物が部分的に観察された。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子、石錘があるが、食器が多い。遺物は床面と床から若干浮いて出土する例が大半を占め、完形に近いものが16個体と他の住居と比較して多い。床面遺物はカマド周辺など部分的に集中する傾向はみられるものの床全体に分布する。石錘は南壁中央で二カ所に分かれて固まっていた。時期：12期に帰属する。



第49図　SB192実測図

SB193　位置：南部Ｂ区　　図版34

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出するが、南東付近は地山が礫層のためにプランは不明瞭である。規模は2.35×3.85ｍで主軸方向が1.50ｍ短い隅丸長方形の住居址になる。北壁でSK649を切る。カマド：東壁北寄りに位置するが、袖は完全に破壊されていた。奥壁の一部が赤色化していた他は火床は不鮮明で、焚口付近に焼痕のある花崗岩が数個散乱していた。床：ⅡＡ$_2$層質の粘質な土を入れて整地するが、カマド付近は地山の礫層をそのまま床としていた。テラス：床面から高さ５cmの位置に、最大幅34cmのテラスが北壁に沿って検出された。中央がわずかに張り出し、ⅡＡ層質の土を使用して構築していた。埋没：オリーブ褐色の細

粒砂を主とし、混入物の違いから２層に分層された。上層には風化礫や炭化物が観察され、人為的な埋没状況を示していた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器がある。遺物は全体的に少なく、床面遺物も微量で、５のみ出土した。時期：13期に帰属する。

SB194　位置：南部Ｂ区　図版36

検出：中世のSK561が本址の中央にあるが、覆土の質的な違いからその新旧関係は平面的に確認した。住居址の形状は隅丸方形を基本とするが、壁は直線的でなく規格が認められない。カマド：位置の断定は難しいが、北東隅付近に焼痕のあるカコウ岩や硬砂岩が数個散見され、炭化物も集中しており、北東隅に存在した可能性がある。焚口手前には74×64×24cmの落ち込みがあり、覆土には焼土粒と炭化粒が混入していた。床：北東部が周囲に比べて５cm程低く、硬度計の測定ではその箇所が高い数値を示していた。なお、床は荒掘りした後で整地し敲き締めている。埋没：ＩＤ層基質の細粒砂を主にし、２層に分層された。上層は自然堆積と思われるが、下層には炭化物などの混入物が観察され、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、鎌・刀子などの鉄製品がある。遺物は北東隅で覆土から床面にかけて集中して出土した。１・３・４・７・９は床面遺物であるが、３・５は完形で出土した。時期：15期に帰属する。

SB195　位置：南部Ｂ区　図版36

検出：SB178に北側で切られ、南側に位置するSB179を切る。当初、カマドの存在から住居址と判断したが、重複していたためにプランは確定が難しく、最終的に覆土と床面の状況からプランと新旧関係を確定した。カマド：東壁南東隅寄りに位置するが、煙道と火床のみが遺存する。煙道は長さ1.05ｍを測り、煙道口から緩やかに傾斜しながら煙出しへ延びていた。火床には炭化物と焼土粒が混在する。諸施設：カマド左側には64×60×30cmのピットがあり、カマドに付属する施設と思われる。床：床面の大半を失うので詳細は不明だが、カマド手前には貼り床が観察された。埋没：暗褐色の細粒砂を基調に白色砂が多量に混入していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器があるが、カマド左側にある施設から多量の遺物が出土した(5)。図示した遺物のうち、１～７は完形に近い状態で出土している。時期：15期に帰属する。

SB196　位置：南部Ｂ区　図版35、PL18

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。東壁の中央が大きく張り出すため、他の遺構との重複関係や壁の崩れを予想したが、覆土や床面の状況から本来の形状と判断した。北西隅付近で中世のSK552に切られる。カマド：北東隅に位置し、煙道は残存しないが、袖の主軸方向から煙道は北東方向へ延びていたと思われる。カマドは石組カマドで、芯材には花崗岩と硬砂岩を使用し、袖の中位から積み上げるように構築する。火床には焼土粒と炭化物が散見された。諸施設：カマド右側、東壁の張り出し部には82×60×９cmのピットがあり、焼痕のある花崗岩や炭などが確認され、カマドに付属する施設と思われる。床：床面は壁際がわずかに低い。荒掘した後に整地して敲き締めており、硬度計の測定では東側半分が硬い。埋没：ＩＤ層基質の細粒砂を主とし、白色砂、炭化物、焼土粒を包含するオリーブ褐色の単一層で、一時的な埋没であろう。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器の食器と羽釜がある。遺物は床面、特にカマド右側に集中する。５・６・８は床面出土の遺物で、８の羽釜は施設からの出土である。時期：14期に帰属する。

SB197　位置：南部Ｂ区　図版38

検出：SB196の北側に隣接する住居址である。規模は4.80×4.60ｍで規格的には方形を呈するが、壁は直線的でなく、整然とした形状でない。カマド：北東隅に位置し、袖は壊滅していた。火床は不鮮明で、焚口部には５～６個の礫が散乱していた。煙道は住居の主軸方向から北へ33度振れた方向へ延びていた。諸施設：カマド右側には80×60×18cmの落ち込みがある。床：中央に貼り床があり、硬度計の測定でもその

箇所が高い数値を示していた。埋没：細粒砂を主とする黄褐色の単一層で、白色砂が多量に混入する。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、黒色土器Aの食器と羽釜が出土した。図示した遺物は3・6・11を除き、カマド左側に集中して出土した。時期：13期に帰属する。

SB198　位置：南部B区　図版38

検出：SB197の北側に位置し、プランは4.60×4.50mの隅丸方形住居址になる。カマド：東壁北東隅に位置する。煙道はトンネル状に残り、煙道口から急な角度で傾斜している。左袖には礫が遺存し、その手前には崩落した礫が散乱していた。床：中央から南東隅にかけてが堅緻である。西壁際を深く荒掘りし、IIA層基質の砂質の土を入れて整地している。硬度計の測定によれば、中央から南東隅が硬く、床面の観察結果と同様の所見を得た。埋没：白色砂を均一に混入する細粒砂を基調とするオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、煮炊具は少ない。遺物は床面から出土する例(1～4・7・8・9・11)が大半で、カマド焚口とその右側に集中する傾向がみられた。時期：14期に帰属する。

SB199　位置：南部B区　図版36

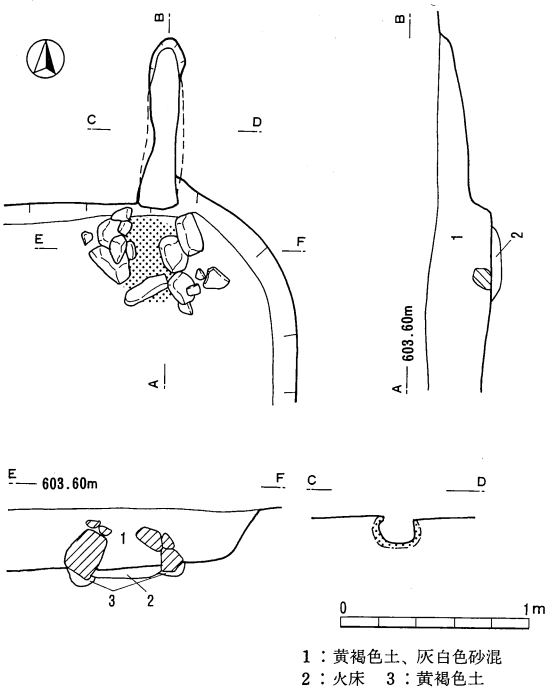
検出：IIA_1層で検出する、一辺4.35mの隅丸方形の住居址である。西壁でSK562に切られる。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築する。火床は55×42cmの範囲で赤色化し、その周囲には炭化物が広がる。袖は石組カマドで花崗岩2個ずつが成立した状態で確認された。焚口付近には焼痕のある花崗岩1,砂岩4個が散乱し、袖の芯材に使用していた可能性が強い。床：床面はほぼ平坦になり、床全体にIIA層基質の土を入れている。硬度計測定値によれば中央から南壁にかけてが硬い。埋没：覆土は単一層で、にぶい黄褐色の細粒砂を主とし、風化礫、炭化物、焼土粒が混在していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、砥石がある。遺物は覆土から床面にかけて出土したが、床面遺物(2～4・9・11・12・14・16～23)はカマドの火床内とその左右に集中する傾向がある。砥石は全部で3点出土しているが、いずれも床面付近からの出土である。時期：11期に帰属する。

SB200　位置：南部B区　図版32

検出：検出面が礫層であり、また、覆土にも礫が多量に混在するため、プランは不鮮明である。住居の東側は調査区域外にかかる。カマド：西壁南東隅にあり、壁をわずかに掘り込んで構築する石組カマドである。左袖には礫が原位置に遺存していた他は崩落していた。火床は赤色化している。床：地山の礫層をそのまま床としていた。埋没：地山に由来する細礫が多量に混入する単一層で、粗粒砂を基調としていた。遺物の出土状況：須恵器と土師器の煮炊具があるが、遺物はカマド火床内と焚口に集中していた(1・3・4)。時期：4期に帰属する。

SB201　位置：南部B区　図版36、第50図、PL19

検出：IIA_1層上位で検出する、3.40×4.15mの隅丸長方形の住居址である。北壁でSK685を、南壁でSK692をそれぞれ切る。カマド：北壁北東隅に位置する石組カマドである。東壁は右袖との関係か、外側へ張り出しており、緩やかに立ち上がっていた。袖の芯となる礫は内側へ傾斜させて、積み上げるように構築している。煙道は長さ0.90mで煙道口は火床から10cmの位置にある。床：IIA_1



第50図　SB201カマド実測図

層質の土を入れて整地しているが、東側は地山の礫層が露出している。諸施設：全部で５基の落ち込みがある。北西隅にあるピットは径100cmの円形で、深さ48cmを測る。覆土は焼土層を挟んで分層され、平坦な底面には花崗岩４個が確認された。石は焼けた痕跡はみられず、貯蔵穴として利用した可能性が強い。埋没：ⅡＡ層基質の細粒砂を主体に白色砂が混入するオリーブ褐色の単一層で、一時的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器があり、上層から床面にかけて出土した。遺物は床面に多く、カマド周辺、南東隅、北西隅に集中していた。２・３・９・10はカマド周辺から、７・８は北西隅の施設からそれぞれ出土した。時期：13期に帰属する。

SB202　位置：南部Ｂ区　図版38

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出するが、本址の上には大きな木があり、その根による撹乱を受けていたため、プランの確定は困難を窮めた。SD34･SK651に切られ、北東隅でST51を切る。カマド：木による撹乱でカマドの遺存状況が悪く、位置は確定できなかった。西壁中央の内側へ若干入った位置に焼土の集中箇所が観察されたが、その付近には花崗岩が２個あり、カマドのあった可能性を指摘できる。床：床面には凹凸がみられ、全体的に軟弱である。埋没：床付近のわずかな部分しか観察できなかった。覆土はＩＤ層を基調とする暗灰黄色の細粒砂を主体とし、一気に埋没している。遺物の出土状況：須恵器の杯、蓋、土錘がある。遺物は覆土中から床面にかけて小片で出土した。土錘は完形で南東隅付近の床面から浮いて出土した。時期：３期に帰属する。

SB204　位置：南部Ｂ区　図版38

検出：調査区を分けたＣ区にもかかり、先に調査した北側のＣ区に入る箇所は撹乱のため、その時点でプランの確認はできなかった。わずかに確認できたプランのなかにカマドは存在しないが、床の状況から住居址と判断した。南側でST51を切る。床：薄い貼り床があるが、全容は不明である。埋没：覆土は木による撹乱を受け、不明瞭であるが、黄褐色の細粒砂に粘土粒を混入する単一層である。遺物の出土状況：遺物は微量で本址に帰属する遺物は出土していない。時期：２～３期に帰属する。

SB205　位置：南部Ｂ区　図版35

検出：SB192の北側に隣接する隅丸長方形の住居址である。西側でSD31に、南壁でST42にそれぞれ切られる。カマド：西壁中央やや南寄りに位置する。袖は完全に破壊され、構造の詳細は不明である。床：カマド付近以外は地山をそのまま床としていた。硬度計の測定ではカマド手前から南側にかけてが硬い。埋没：粘質な黒褐色の細粒砂を主体とし、ⅡＡ層質の粘土がブロック状に堆積し、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器の杯、鉄製金具がある。図示した１は、覆土中の遺物で本址に確実に帰属する遺物はない。時期：１期に帰属する。

SB206　位置：南部Ｂ区　図版34

検出：ⅡＡ$_2$層中で検出する。北側でSK625を切るが、礫の含有量の差から平面的に新旧関係を決定した。また、南側のST52を切る。カマド：袖は遺存しないが、北東隅に煙道状の張り出しがあり、その手前に焼土粒が散っていたことからカマドの存在を窺わせた。床：礫層の地山をそのまま床としていた。埋没：粗粒砂を主体とし、地山に由来する小豆大の礫を多量に混入する褐色の単一層である。一時的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器、土製紡錘車があるが、覆土中、床面とも遺物の出土量は少ない。7は床面の遺物である。時期：15期に帰属する。

SB207　位置：南部Ｂ区　図版36

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。東壁のカマド右側は耕作による撹乱を受ける。北側でSB208を切るが、覆土が近似し、平面的に切り分けることができず、最終的には断面観察によった。また、中世のST49・SK590･591に切られる。カマド：東壁中央に位置し、壁を掘り込んで構築する。袖の遺存状況は悪く、奥

壁に炭化物の集中箇所が観察された。床：西側が低く中央は堅緻である。西壁の上部は緩い傾斜であるが、本来の形状なのか壁が崩れたのか判断できなかった。埋没：大きく３層に分層された。1,2層は同質の細粒砂を主体とするが、白色砂の含有量の違いで分層し、3層はII層基質の粘土がブロック状に堆積し人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：須恵器の食器と土師器の煮炊具があり、上層から床面にかけて出土した。床面遺物（２・３・５・７）は少ないものの、完形品が多い。時期：４期に帰属する。

SB208　位置：南部Ｂ区　図版36

検出：SB207の北側にあり南西部を切られる。また、中世のピット群に東側部分を切られる。カマド：西壁中央に位置する粘土カマドである。左袖はSB207の撹乱を受けるが、右袖は遺存状況が良く、II層基質の粘土を使用して構築していた。煙道は長さ1.45ｍを測り、その構築はいったん掘った土を埋め戻している状況が観察された。柱穴：主柱穴３基がある。北東隅の柱穴は他と比べて形状が異なり、深さも９cmと浅い。柱間寸法はほぼ一定で、整然と配置されていた。床：床面全面に焼土粒や炭化物が散布するが、火災住居のような状況でなく、点在するような分布である。テラス：北西隅に床面から高さ20cm、最大幅26cmのテラスがある。埋没：３層に分層された。床面にはIIＡ層基質の粘土が堆積し、その上には細粒砂を基調とし、風化礫や白色砂を混入していた黒褐色土が覆う。遺物の出土状況：土師器、須恵器があり、上層から床面にかけて出土した。床面遺物（７･10･11）は少なく、いずれも破片で出土した。時期：１期に帰属する。

SB209　位置：南部Ｂ区　図版36

検出：IIA_1層上位で検出する、隅丸長方形のプランである。北側でSB210を切るが、覆土中に含まれる粘土ブロックの有無によって平面的に新旧関係を確定できた。カマド：東壁北東隅に位置するが、袖は残存せず、その構造については明瞭でない。だが、左袖付近に花崗岩、砂岩５個が散乱し、袖の芯材に使用した可能性が高い。諸施設：カマド右側には68×58×20cmの落ち込みがあり、カマドに付属する施設と思われる。床：床全体にIIＡ層質の土を入れて整地していた。硬度計の測定によれば、南東隅が硬い傾向を示していた。埋没：覆土は２層に分層され、下層はIIＡ層基質の粘土がブロック状に堆積し、人為的な埋没状況を呈していた。上層は風化礫や白色砂を混入するにぶい黄褐色の細粒砂が堆積していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、須恵器があり、上層から床面にかけて出土したが、床面に近い方が破片が大きい。９・11～13・16・20は床面遺物でカマド右側に集中する傾向がみられ、11～13は完形で出土した。また、１・４・５・７・19はカマド右側の施設から出土した。時期：12期に帰属する。

SB210　位置：南部Ｂ区　図版36・37、PL19

検出：SB209に南西隅の一部を切られる、4.25×4.70の隅丸方形の住居址である。また、東側でSD33に、住居内で中世のピットにいずれも切られる。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道はトンネル状に遺存するが、袖は完全に破壊されており、詳細については不明である。煙道は1.70ｍで、火床から緩やかに煙出しへ延びており、荒掘りした後、粘質な土をいれて構築していた。煙道先には径41cmのピットがあり、レンズ状の断面形を呈していた。柱穴：主柱穴4基がある。掘り方の規模は径30～46cm、深さ８～18cmである。柱間の間隔は主軸方向が2.42ｍ、それと直交する方向は2.90ｍと同様でないが、比較的整然とした配置である。床：全面にIIＡ層質の粘土を貼る床でほぼ平坦である。硬度計の測定では中央から南東隅にかけて硬い。周溝：全ての壁に、幅12～18cm、深さ４～８cmの周溝が断続的に検出された。また、南東、南西隅にある２つの落ち込みは周溝と続くような位置にあり、特に、南東隅の落ち込みは102×38cmと大きい。埋没：３層に分層された。１，２層は灰黄褐色の細粒砂を主体とし白色砂を混入し、３層はIIＡ層基質の粘土が堆積し、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：須恵器があるが、全体に遺物は少なく、図示した遺物は床面から出土した。２はカマドの火床からの出土であるが残存率は低く、投棄さ

れたものと思われる。時期：５期に帰属する。

SB211　位置：南部Ｂ区　図版37

検出：西側に隣接するSB202と同様に、一部撹乱を受けたり、覆土と地山との区別が不明瞭でプランの確定は難しかった。SK621・722に切られ、さらに、SK626・627・638と重複するが、当初土坑の存在に気がつかないまま本址を掘り下げてしまい、新旧関係については確認できなかった。カマド：北壁西隅寄りに壁の張り出す部分があり、カマドの構造と関連性が考えられるが、位置や構造は不明瞭で、最初から無かった可能性も強い。床：軟弱な床で地山をそのまま床としていた。硬度計の測定によれば南東隅が硬い。埋没：ＩＤ層に近似する細粒砂を主体とするオリーブ褐色の単一層で一時的に埋没している。遺物の出土状況：灰釉陶器があるが、遺物の全体量は窮めて少なく、本址に帰属すると思われる遺物は出土していない。時期：11期以降と推定されるが、確定は難しい。

SB213　位置：南部Ｃ区　図版46・48、PL19

検出：$\mathrm{II A_1}$層上位で検出する。南西隅でSB168に切られ、北側でSB214,219を切る。SB168と214とは容易に新旧関係を確定できたが、SB219については当初本址の中に含めて考えていた。だが、カマドが2つ並んでいることに気がつき、再検出した結果、本址がSB219を切ることを確認した。カマド：東壁北東隅に位置するが、袖は壊滅していた。火床は焼土粒が散布する程度で、顕著な赤色化はみられなかった。煙道は主軸から15度北へ振れ延びており、長さ40cmを測る。諸施設：カマド右側には80×72×20cmの付属施設と思われる落ち込みがある。床：東壁際が低く、$\mathrm{II A_2}$層基質の土を入れて整地し固めていた。埋没：ＩＤ層質の細粒砂を基調とし、炭化物粒、白色砂、風化礫を混入する暗オリーブ褐色の単一層で人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器の食器が多い。遺物は上層から床面にかけて出土した。床面遺物（2・6～10・12～14）はカマド火床とその右側に集中する傾向がみられ、６・８・10、砥石はカマド右側の施設から出土した。時期：14期に帰属する。

SB214　位置：南部Ｃ区　図版48・PL19

検出：$\mathrm{II A_1}$層上位で検出する。SB213,219が本址の南西隅を切り、南東隅でSB169に切られる。いずれも覆土の質的な違いから平面的に確認できた。6.00×6.15ｍの大型の隅丸方形の住居址である。カマド：東壁中央に位置するが、煙道の先端は撹乱されていた。袖は遺存せず、火床も不明瞭である。煙道は長さ1.45ｍを測り、トンネル状に残存していた。煙道口は火床から低い位置にあり、径25cmの規模をもち緩やかに傾斜しながら煙出しへ延びていた。柱穴：主柱穴４基がある。柱穴の掘り方は径52～88cmの円形を基本とし、深さは36～61cmと一定でない。柱間の間隔は主軸方向が3.46ｍ、それと直交する方向は3.76ｍで整然とした配置である。床：床面はほぼ平坦で、二回に分けて整地した痕跡が認められた。最初に砂と中礫を混ぜた土を入れ、次に細礫を混入した細粒砂を入れて構築していた。埋没：覆土は３層に分層された。上層は砂質の薄い堆積で、自然堆積と思われるが、２層以下はＩＩＡ層基質の暗褐色の粘土を主体とするもので、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、砥石があるが、その全体量は窮めて少ない。床面遺物で図示できたものはほとんどなく、土師器の甕（6）がカマド火床から出土している程度である。時期：２期に帰属する。

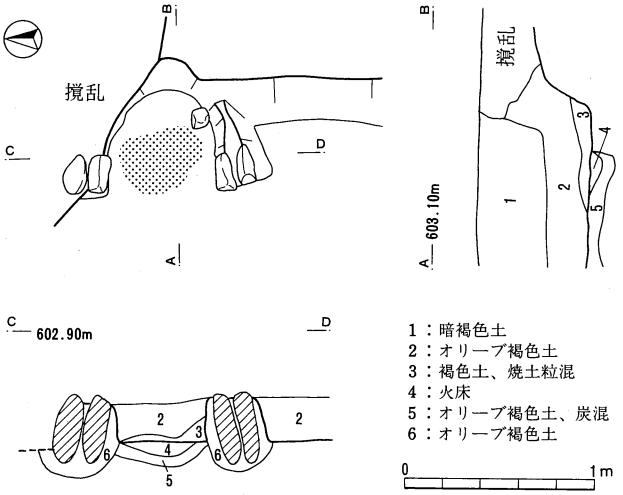
SB215　位置：南部Ｃ区　図版48

検出：$\mathrm{II A_2}$層上位で検出する、5.75×4.70ｍの隅丸長方形のプランである。壁が直線的にならず、凹凸がすべての壁でみられた。ST39・SK525・531を切る。カマド：東壁やや北寄りに位置し、壁をわずかに掘り込んで構築していた。袖は遺存しないが、火床は狭い範囲で赤色化が観察され、その周囲には焼土粒や炭化物が散っていた。床：中央を深く荒掘りし、ＩＤ層基質の土を入れて敲き締めていた。中央から東側にかけて堅緻である。埋没：ＩＤ層に由来する細粒砂を主体とする暗灰黄色の単一層で、多量の白色砂を

混入していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器の食器が多く、釘も出土した。遺物は上層から床面にかけて出土し、床面遺物（4・6・8・11・12）は全体に分布していた。時期：14期に帰属する。

SB216　　位置：南部C区　　図版48、第51図

検出：SB215の北側に隣接する一辺6.00m前後の大型の隅丸方形の住居址である。北東隅は現在の水路により撹乱を受けていた。南壁中央でSK518に切られるが、覆土の色調の違いから平面的に新旧関係を確定した。また、ST39とも重複するが、重複部分がわずかなため、その関係については確認できなかった。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。煙道は撹乱を受け残存しないが、花崗岩を使用して構築された袖は左袖の一部を除いて原形を止めていた。花崗岩は40×30cm程の規模で片方の袖に2個ずつ並べて配置し、内側へ傾斜させて固定していた。火床は42×33cmの範囲で赤色化していた。柱穴：主柱穴3基を検出した。掘り方の規模は径80～100cmと大きく、深さは60cmと共通でしっかりした掘り方である。柱間は3.15mと一定で規格性が高い。床：床全体にIIA_2層基質の粘質な土を入れて敲き締めていた。壁際を除いて堅緻で、西壁中央には平らな花崗岩が置かれていた。周溝：南西隅に幅14cm、深さ10cmの周溝がある。埋没：覆土は3層に分層された。上層にはID層に近似する自然堆積がみられ、2層以下にはIIA層基質の粘土を主体としていた。床面に近いほど粘土ブロックが多量に観察できたことから分層しているが、両方とも人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器、砥石があるが、その全体量は少ない。床面遺物は土師器の甕（3）がカマド焚口前で潰れた状態で出土した以外は特記すべきものはなかった。時期：3期に帰属する。



第51図　SB216カマド実測図

SB218　　位置：南部C区　　図版49

検出：SB170で前述したように、SB170に大部分を切られ、北、西壁のみ確認した。カマド：検出面で東壁北東隅に焼土粒が観察され、カマドのあった可能性を指摘できる以外、カマドについての詳細は不明である。床：遺存部分がわずかであるが、IIA_2層の地山をそのまま床としており、壁際がわずかに高い。埋没：暗灰黄色の単一層である。遺物の出土状況：土師器の皿があるが遺物は少なく、本址に帰属する遺物は出土していない。時期：15期に帰属する。

SB219　　位置：南部C区　　図版48

検出：SB213に南側の多くを切られ、カマドと北壁の一部のみ調査した。また、北東にあるSB214を切る。カマド：北東隅に位置する石組カマドである。火床は焼土粒が集中しており、容易に区別できた。袖は左袖付近に焼けた礫3個があり、芯材に使用されたと思われる。煙道は主軸方向から30度北の方向へ延び、長さ0.35mを測る。床：詳細は不明であるが、カマド付近は堅緻である。埋没：明瞭に2層に分層された。ID層に近似する黒褐色の細粒砂を主体とすることに変わりないが、下層には多量の白色砂を混入し分層の根拠とした。人為的な埋め戻しの状況を呈し、本址からSB213への建て替えの可能性が強い。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Aがある。図示した遺物は床面遺物で、2はカマド焚口から完形で出土した。時期：12期に帰属する。

SB220　　位置：南部C区　　図版48

検出：SB215の東側に隣接する単独の住居址で、4.65×4.15ｍの隅丸長方形のプランである。北壁でSK538を切る。カマド：東壁北東隅に位置する。袖、火床とも遺存状況は悪い。煙道は長さ0.95ｍで、緩やかな傾斜で延びていた。諸施設：カマド右側には90×86×28cmの落ち込みがある。床：西壁際を深く荒掘りし、全面にⅡＡ層基質の土を入れて整地していた。西側は軟弱であるが、東側は堅緻な床が認められた。埋没：SB215と近似する細粒砂を基調とし、多量に白色砂を混入するオリーブ褐色の単一層で、一時的な埋没である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器の食器、刀子のほか鉄製紡錘車がある。遺物は上層から床面にかけて出土した。床面、施設の遺物（3・5・7～10・14・15）はカマド周辺、南東隅の施設（9）、南西隅（8・14）から出土した。紡錘車（62）はカマド右側の施設の遺物である。時期：14期に帰属する。

SB221　位置：南部Ｃ区　図版46

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する、隅丸方形の住居址である。煙道の一部が撹乱を受けていた。カマド：北東隅に位置する石組カマドである。袖には左右に２つずつ人頭大の花崗岩があるが、原位置にあるのか判断できなかった。煙道は10cmしか残存しないが、カマドの主軸は住居址の主軸方向から北へ35度触れており、煙道もその方向へ延びていたと思われる。床：中央を中心に粘質な土を入れていた。埋没：覆土は３層に分層され、レンズ状の堆積が観察された。２層以下は粘性の強い土がブロック状に堆積し、人為的な埋没状況を呈していたが、１層は細粒砂を主体に白色砂を混入する覆土で２層とは明瞭に区別された。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器の食器が多い。遺物は上層から床面にかけて破片で出土する例がほとんどである。床面遺物（1・2・9・10）はカマド周辺に集中する傾向がみられたが、残存率はいずれも低い。時期：14期に帰属する。

SB222　位置：南部Ｃ区　図版49

検出：SB170,218の東側に位置し、プランの西側半分をSB170に切られる。カマド：東壁北東隅に位置する。火床は径32cmの範囲で赤色化していたが、袖は壊滅していた。煙道口は火床から25cmの高い位置にあり、緩やかな傾斜で延びていた。床：中央にかけて堅緻である。ⅡＡ$_2$層質の粘土を入れて整地していた。埋没：ＩＤ層基質の細粒砂を主体とし、粘土粒、白色砂を混入する黄褐色の単一層で、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器の食器と羽釜がある。遺物はカマド周辺に集中する傾向がみられ、１・２・３・５・６・９・11は床面から出土したが、残存率は低い。時期：13期に帰属する。

SB223　位置：南部Ｃ区　図版46

検出：北側をSB169に切られる。当初、カマドが検出できなかったことから大型の土坑と考えたが、床面の状態や遺物の出土状況から住居址と判断した。床：ⅡＡ$_2$層基質の粘質の強い土をいれて敲き締めていた。北側の一部が堅緻である。テラス：南東、南西隅に床面から４～10cmの位置に、最大幅30cm、24cmの地山掘り残しのテラスがある。埋没：淘汰の良い細粒砂を主体とし、ⅡＡ層基質の粘土粒、細礫を含む単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、羽釜があるが、遺物は床面に多く東壁に沿うように集中する傾向がみられた（2～4・6）。なお、１・２は完形に近い。時期：12期に帰属する。

SB224　位置：南部Ｃ区　図版49

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。住居址の北側を斜めに水路が走り、その箇所はすでに撹乱を受けていた。残存する部分から一辺3.0ｍ程の隅丸方形のプランになると予想される。カマド：東壁中央に位置し、袖は遺存せず、赤色化した火床のみ確認した。床：中央を中心に堅緻で、ⅡＡ層基質の土を入れて敲き締めていた。埋没：ⅡＡ$_1$層由来の覆土で人為的な埋没状況を示す単一層である。遺物の出土状況：土師器、須恵器、刀子などがあるが、遺物は床面から出土する例が多く。床全体に分布していた。時期：１期に帰属する。

SB501　位置：Ｅ区北端　図版73

検出：表土を除去するとIIA_2層中位となっており、その検出面から住居址の床面までわずかしか残存していない。覆土の大半は後世の削平により既に失なわれていた。北側のSB502を切るが、覆土中の粘土粒の含有量の差によって面的に確定できた。カマド：東壁中央に位置し、壁を丸く掘り込んだ函形カマドである。袖の遺存状況は悪いが、焼土粒が散布する火床を確認した。火床の中央には支脚石が立った状態で残存していた。床：明瞭な床は不明だが、地山を床としていたためその区別は難しかった。埋没：検出面から床面まで10cm程しか残存しないため埋没状況は不明である。覆土は灰黄色の粗粒砂を主体に、IIA層由来の粘土粒、風化礫、マンガン粒を混入していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、棒状鉄製品があるが、遺物は床面に多い。図示した遺物は床面遺物で、４～６はカマド周辺から出土した。時期：８期に帰属する。

SB502　　位置：E区北端　　図版73

検出：南側の大半を切られるため、北壁と西壁のプランのみ確認した。SB501と同様に、住居の上面は削平されていた。カマドと認定できる痕跡は認められなかったが、床面や形状から住居址と認定した。床：一部礫層となる地山を床としていたが、西側が低い。敲き締めた痕跡は明瞭でない。埋没：にぶい黄橙色の粗粒砂で中礫や粘土粒が観察された。遺物の出土状況：遺物は窮めて少ない。時期：新旧関係から８期以前と思われるが、時期の確定は難しい。

SB503　　位置：E区北端　　図版73

検出：SB501の東側に隣接する隅丸方形の住居址で、南壁は地山の礫層を切っており、地山との区別は容易に識別された。カマド：北東隅に位置する石組カマドで、袖石は原位置を保っていた。礫は人頭大のものを積み上げるように構築しており、火床には焼土が集中していた。煙道は残存しないが、袖の状況から、住居の主軸方向から約40度北へ振れた方向へに延びると思われる。床：堅緻な床で薄く貼り床をしていた。埋没：２層に分層されたが、基本的にIIA層基質の粘土がブロック状に堆積する人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、羽釜、砥石、石棒がある。検出面が床面に近いため出土した遺物はほとんどが床面付近のものである。遺物はカマドのある北東隅に集中する傾向をみせ、３・５・６・７・８が出土しており、６は完形である。また、石棒は南西隅の床面遺物である。時期：13期に帰属する。

SB504　　位置：E区北端　　図版73

検出：E区北端で耕作による撹乱が特に激しい地点で、調査も困難を窮めた。表土を除去するとすぐに床面に近似した堅緻な面が検出され、さらに、北側にはカマドの痕跡と推定される焼土の集中や焼けた石を確認したことから住居址と認定した。床面しか残存しないため、プランや埋没状況などの詳細は不明である。SB507･508を切る。カマド：明瞭な火床はなく、カマドの掘り方と思われる落ち込みが北壁中央にある。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Aがあるが確実に本址に帰属するかはっきりしない。時期：14期に帰属する。

SB505　　位置：E区北端　　図版73

検出：IIA_2層中位で検出するが、ほぼ床面に近い。西側はすでに壁が削平されており、南側も撹乱を受けていた。さらに、南北方向に２本の溝状の撹乱がある。カマド：東壁中央に位置するカマドで、壁から張り出した火床のみ確認した。おそらく函形カマドになろう。床：部分的に堅緻な床が認められる。埋没：床面からわずかしか残存しないため詳細は不明である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器があるが覆土中、床面で破片で出土した。床面遺物（１～３・５・７・８）はカマドとその右側に集中する傾向がみられたが、いずれも残存率は低い。時期：８期に帰属する。

SB506　　位置：E区北端　　図版73

検出：SB505の西側に隣接する住居址で南壁を撹乱で失うが、プランは隅丸長方形を呈すると思われる。北側でSD502に切られる。カマド：東壁に位置する、不整形の張り出しをもつ函形カマドである。袖は全壊し、焼土が堆積した火床のみ確認できた。床：カマド手前から西側中央にかけて細長い貼床がある。埋没：ⅡＡ層を主体とする覆土で、ブロック状に堆積することから３層に分層したが、基本的に一時的な埋没状況に近い。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、棒状鉄製品があるが、遺物は北側に多い傾向がみられる。図示した遺物のうち１・６のみ床面遺物で、ほかは床面から若干浮いて出土している。時期：13期に帰属する。

SB507　位置：北部Ｅ区　図版73

検出：SB504・508に切られるが、SB504で述べたとおり住居址の認定根拠が弱い。プランは4.90×4.15ｍの隅丸長方形を呈すが、南西隅では当初予想したプランの外側から遺物が出土するなど、撹乱によりかなり不安定な状況である。なお、カマドについてはその位置を限定できるような痕跡は認められなかった。床：ⅡＡ$_2$層基質の土で薄く床を貼っていた。埋没：他の住居址との重複のため詳細は不明だが、ⅡＡ層に近似する細粒砂を基調としていた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、灰釉陶器があるが、確実に本址に帰属する遺物は分からなかった。時期：８期に帰属する。

SB508　位置：北部Ｅ区　図版73

検出：SB504の調査後、本址の床面と思われる面を確認し、東壁の中央に張り出し部があったことから、それをカマドの掘り方と判断し住居址と認定した。調査の結果、カマドの痕跡は不鮮明で、床面もかなり不安定な状況を呈していた。本址はSB504に切られ、507を切るが、重複する住居址と同様、住居址の認定根拠は弱い。遺物の出土状況：土師器があるが、本址に確実に帰属する遺物はない。時期：13期に帰属する。

SB509　位置：北部Ｅ区　図版73

検出：SB507の西側に隣接する住居址で、検出面は耕作土直下のⅡＡ$_2$層で床面に近い。北壁は深く削平され残存していない。SB508に切られ、西壁でSK1005に切られる。カマドの痕跡はみられないが、北壁にあった可能性が強い。床：地山を床としていた。埋没：細粒砂を主体とし、炭化物をわずかに含む単一層である。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器、灰釉陶器があるが、上層は撹乱を受けるために遺物も混在していると思われる。遺物は上層から床面にかけて出土しているが、住居址全体に分布し偏在性は認められない。２・３・７・８・16・17・21・26・28は床面遺物である。時期：８期に帰属する。

SB521　位置：北部Ｄ区　図版64

検出：ⅡＡ$_2$層で検出する。Ｄ区北側のSB521～523の大型住居が並ぶ西側に位置する、6.50×5.90ｍの隅丸長方形の大型住居址である。西壁でSA501に切られる。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。左右の袖の一部が遺存し、ⅡＡ層基質の粘土を使用している。煙道は長さ1.20ｍを測り、底面は水平に煙出しへ続いていた。諸施設：カマド左側に106×72×10cmのピットがある。柱穴：主柱穴４基を確認した。柱穴は楕円形を呈し、長軸52～94cm、深さ33～77cmで北側列が浅い。柱間の間隔は4.00ｍ前後であるが、北側だけが3.35ｍと狭い。床：カマドから柱穴で囲まれた範囲が堅緻である。荒掘りは壁から40cm内側から深く掘り込んでいた。周溝：南西隅に幅16cm、深さ２～３cm、長さ1.20ｍの周溝がある。埋没：覆土は２層に分層された。上層は細粒砂を主体とし自然堆積に近いが、下層はⅡＡ層基質の粘土がブロック状に堆積し、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：須恵器、土師器があり、上層から床面にかけて破片で出土する例が多い。床面遺物（８・９・10・12）はカマド付近に集中する傾向がみられた。時期：１期に帰属する。

SB522　位置：北部Ｄ区　図版63、第52図、PL20

検出：SB521の東側に位置する6.50×6.30ｍの大型隅丸方形の住居址である。東壁でSK1709に切られる。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。袖は原形を止めていないが、床面に近い部分は粘土が集中していた。火床は赤色化せず、焼土粒と炭化物が広がっていた。柱穴：主柱穴４を検出した。柱穴の掘り方は円形で径44～60cm、深さ15～21cmを測る。柱間の間隔は主軸方向が3.00ｍ前後、それと直交する方向は3.30ｍ前後で整然とした配置である。また、南側中央の外側に２つのピットが壁と平行して配置され、入り口と関連する施設の可能性が強い。床：床全体にⅡA_2層基質の土を約８cm程入れて敲き締めている。床面には炭化物が数箇所分布していた。埋没：覆土は２層に分層された。上層は自然堆積と思われる細粒砂があり、下層にはⅡA_1層を基調とする土がみられ、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、金環がある。遺物は上層から床面にかけていずれも破片で出土した。金環は北西隅のピットから出土した。時期：１期に帰属する。

SB523　位置：北部Ｄ区　図版61、第52図

検出：SB522の東側にある6.40×6.75ｍの大型の隅丸方形の住居址である。東壁には煙道が２本みられたが、住居址のプランは明瞭であったためカマドの作り替えと判断した。カマド：東壁中央に位置し、最初中央にあったカマドをその南に移築している。古いカマドの火床は赤色化していたが、袖は完全に破壊されていた。煙道は長さ1.60ｍを測る。新しいカマドの袖は遺存しないが、袖石の抜き取り痕が左右の袖で観察された。煙道は古い煙道を避けるように10度南側に振った方向へのびていた。新旧の煙道でその構造の違いは認められなかった。柱穴：主柱穴３基を検出したが、南西隅にあると思われた柱穴は結局検出できなかった。柱穴の掘り方は楕円形で長軸方向の長さは48～64cm、深さ13～19cmと一定である。柱間間隔は主軸方向が4.40ｍで、直交する方向の柱間よりも約40cm程長い。床：荒掘りはⅡA_2　層の礫層に達し、そこに薄く粘土を入れて整地していた。周溝：西壁を除き、幅14cm、深さ12cmの周溝がある。埋没：SB521,522と同様に２層に分層され、自然堆積と人為的な埋没状況が観察された。遺物の出土状況：土師器、須恵器、鉄製紡錘車があるが、その構成は煮炊具が少なく、食器が多い。遺物は上層から床面にかけて8が完形で出土したのを除き、破片での出土がほとんどである。床面遺物（6・8・15～17・19～21）はカマド周辺とカマド右側のピット付近、南西隅に集中する傾向がみられた。時期：１～２期に帰属する。

SB524　位置：北部Ｄ区　図版61

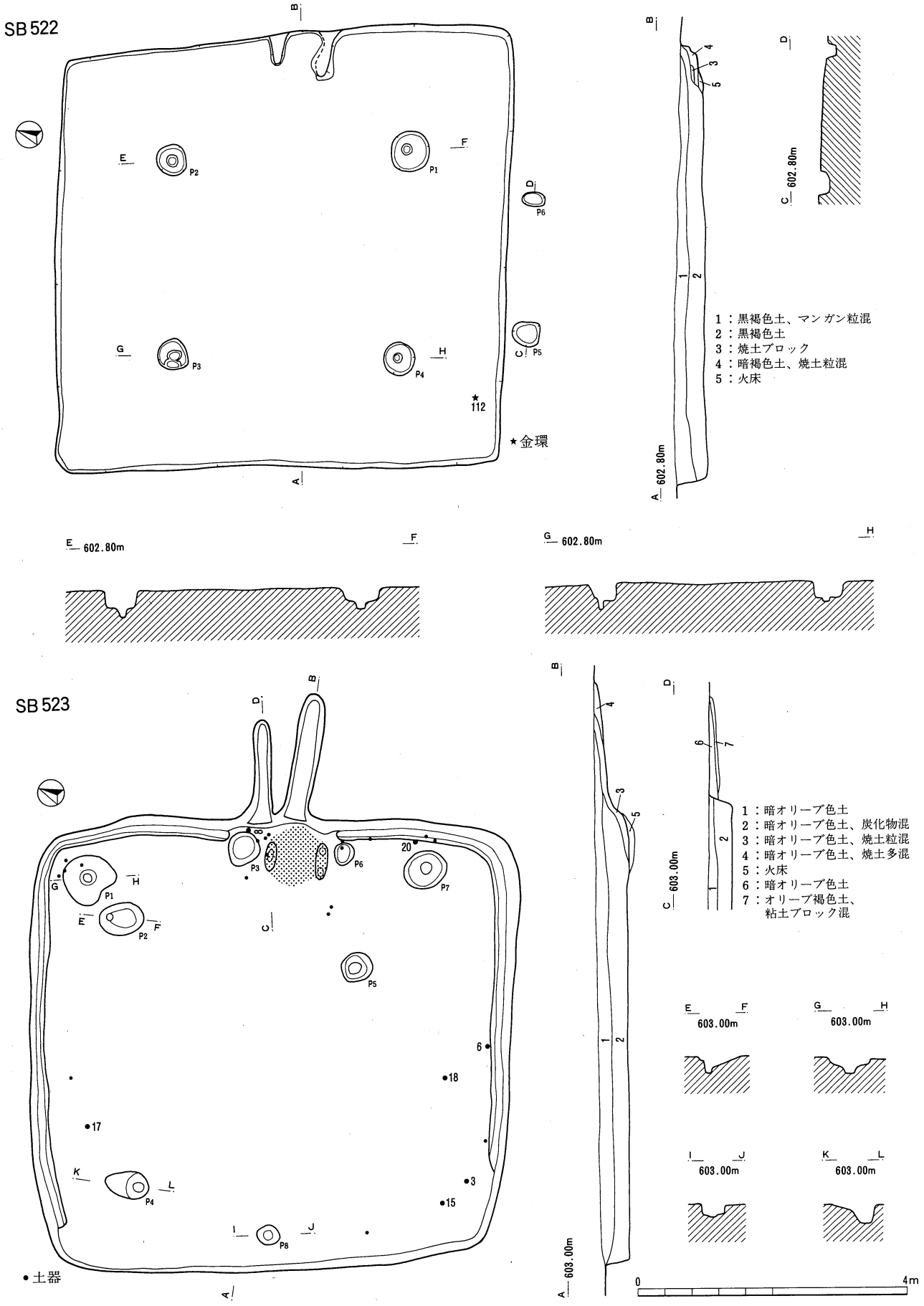
検出：SB523の東側に隣接する、主軸方向が1.20ｍ短い隅丸長方形のプランである。北西隅から中央にかけてSD521に、煙道はSD524にそれぞれ切られる。カマド：東壁中央に位置するが袖は遺存していない。火床は径54cmの範囲で赤色化していた。床：地山を床としていた。埋没：覆土は２層に分層された。上層は細粒砂を主体とする自然堆積層で、下層はⅡＡ層基質の粘土がブロック状に堆積し、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、土製紡錘車があるがその全体量は少ない。遺物は上層から床面にかけて破片で出土し、カマド周辺に集中する傾向がみられた。図示したうち床面の遺物は２のみで、他は覆土中の遺物である。時期：１期に帰属する。

SB525　位置：北部Ｄ区　図版65

検出：SB526・SK1064・1720に切られる不整形の住居址である。カマドは検出できなかったが、床面の状況や規模から住居址と認定した。しかし、北、東壁は直線的でなく、遺物もほとんど出土していないことから住居の構築途中に廃棄した可能性が強い。床：床は凹凸が激しく整地した痕跡もみられず、荒掘りのままである。埋没：細粒砂を主体とする単一層で、埋戻しの状況に似る。時期：新旧関係から５期以前と考えられるが、遺物が少ないため時期の限定は難しい。

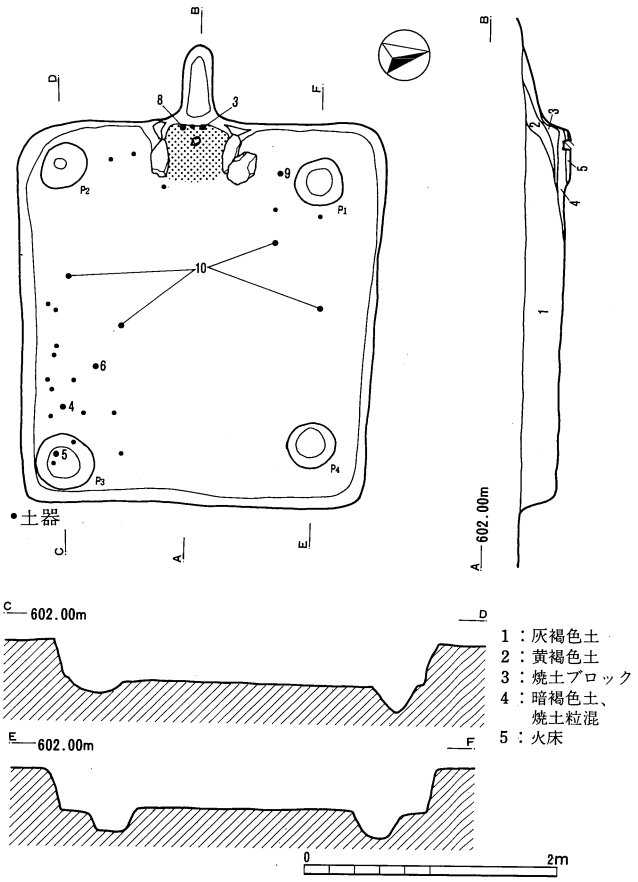
SB526　位置：北部Ｄ区　図版65、第53図、PL20

検出：ⅡA_2層上位で検出したが、プランが明瞭な2.95×2.65ｍの小型の住居址である。SB525,



第52図　SB522･523実測図（１：80）

SK10601063・1064を切る。カマド：西壁中央に位置し、袖は芯となる礫が左右に遺存していた。火床は赤色化がみられ、天井部の崩れと思われる焼土粒がのっていた。柱穴：四隅に主柱穴4基があるが、小型の住居のためだろう。柱穴の規模は径34～50cmの円形で深さ11～30cmを測る。柱間の寸法は主軸方向がわずかに短い。床：軟弱で平坦な床で地山をそのまま床としている。埋没：茶褐色の細粒砂を主体とする単一層である。遺物の出土状況：須恵器、土師器があり、上層から床面にかけて出土した。床面遺物（3～7・8・10）はカマド左側と南東隅に集中していた。土師器の甕（8）は火床から出土した、残存率は高い。時期：5期に帰属する。



第53図　SB526実測図

SB527　　位置：北部E区　　図版67

検出：IIA_2層上位で検出するが、南側半分は撹乱を受けていた。SD523と重複するが、撹乱を受けた部分で切り合うため、その新旧関係は確認できなかった。また、カマドの位置も不明である。床：壁際を残し、中央を中心に整地した痕跡がある。埋没：覆土は2層に分層された。床の上にはIIA層基質の粘土が薄く堆積し、その上に自然堆積と思われる細粒砂が覆う。遺物の出土状況：土師器の甕があるが、遺物の全体量は少なく本址に確実に帰属する遺物は認められなかった。時期：1期に帰属する。

SB528　　位置：北部E区　　図版67

検出：SB527の西側に位置する、5.05×5.10mの隅丸方形の住居址である。北西隅でSB529に切られる。調査時は1軒の住居址と判断したが、遺物の様相から別の住居址が入れ子状で存在した可能性が強い。しかし、その存在に気付かずに調査したため、ここでは1軒の住居址として報告しておく。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。左右の袖は一部が残存し、火床は赤色化が顕著である。長さ1.35mの煙道はトンネル状に遺存し、緩やかな傾斜で煙出しへ延びる。柱穴：主柱穴4があり、整然とした配置である。柱穴は円形を呈し、径40cm、深さ33～47cmとほぼ一定で、柱間の間隔も2.38～2.62mと大きく違わない。床：IIA_1、IIA_2層基質の土を互層状に、20cmの厚さに入れて整地していた。テラス：西壁に沿い、床面から高さ10cmの位置に最大幅1.10mのテラスがある。テラスは床と同じ材質で構築していた。埋没：2層に分層したが、基調となる土は黄褐色の細粒砂で変わらない。上層には多くの粘土ブロックを多量に含んでいたことから分層した。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、軟質須恵器、鉄鏃、鉄斧が出土した。遺物は上層と下層から出土し、それぞれ別に図示した。下層の遺物（1～5）はカマド付近に集中する傾向がみられる。墨書土器は上層からの出土である。時期：1期と8期の住居址があったと推測される。

SB529　　位置：北部E区　　図版67

検出：SB528と南東隅で重複し、SB528を切る隅丸方形の住居址である。西壁は不鮮明で、最終的には床面からプランを確定した。カマド：西壁中央に位置し、壁からかなり内側へ入った場所に構築していた。袖は原形を止めていないが、崩れた粘土の中には袖の芯に使用されたと思われる砂岩や花崗岩が4個観察

された。床：床の中央に狭い範囲で炭化物が集中していた。北東を除いて深く荒掘りし、ⅡＡ層基質の粘土をいれて整地していた。埋没：上層は土壌化を受けていたが、基本的には単一層で一時的な埋没状況である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、棒状鉄製品がある。遺物は上層から床面にかけて出土し、南側に多い傾向がある。床面遺物は３・４・13・14・20がカマド付近から、10・16・17が南東からそれぞれ出土している。時期：８期に帰属する。

SB530　位置：北部Ｅ区　図版67

検出：SB527の北側に隣接する、主軸方向が約1.0ｍ短い隅丸長方形の住居址である。西壁でSK1068を切る。カマド：西壁中央やや北寄りに位置する函形カマドである。袖の遺存状態は悪いが、火床は赤色化していた。床：地山を床としていた。西壁中央には120×60×12cmに大きなピットがあり、入り口と関連する施設の可能性が高い。埋没：覆土は３層に分層された。上層は細粒砂を主体とし自然堆積的であるが、２層以下はⅡＡ層基質の粘土をブロック状に堆積しており、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、鉄鏃、管玉があり、遺物は上層から床面にかけて破片で出土する物が多い。床面からは６・７・13～15が出土したが、東壁中央に集中する傾向がみられ、15の土師器甕はカマド火床前で潰れた状態で出土した。鉄鏃は床面中央から出土し、また、管玉は床剝ぎの際に南東付近の床面から20cm下で確認された。時期：１期に帰属する。

SB534　位置：北部Ｅ区　図版67

検出：SB534～536の３軒の住居址が東側へ重複して並ぶが、その西側に位置する住居址でSB535に北東を切られる。一辺3.65ｍの隅丸方形のプランである。なお、カマドの痕跡は認められず、SB535によって失ったと思われる。地山をそのまま床としており、東側がわずかに高い。南東隅には116×90×16cmのピットがある。埋没：覆土は２層に分層された。上層にはＩＤ層質の細粒砂が堆積し、下層はⅡＡ層基質の粘土を主体とし、人為的な埋没に近い。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、鎌があるが、覆土中の遺物が多く、床面遺物は少ない。南東隅のピットからは黒色土器Ａの椀や杯（3・6）が出土したが、灰釉陶器の皿（9）のように床面から10cm程浮いた遺物でも完形で出土したものもみられた。鎌はSB535の南壁付近で確認されたが、床面から５cm程高い位置で検出された。時期：８期に帰属する。

SB535　位置：北部Ｅ区　図版67

検出：SB534を切り、東壁をSB536に切られる。カマドは遺存せず、北東隅に位置した可能性が強い。床：ⅡＡ$_2$層の地山をそのまま床としていた。埋没：覆土と埋没状況はSB534に近似し、ＩＤ層基質の自然堆積が上層を覆い、下層はⅡＡ層質の粘土を主体する人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：遺物の出土量は極めて少ない。時期：８期に帰属する。

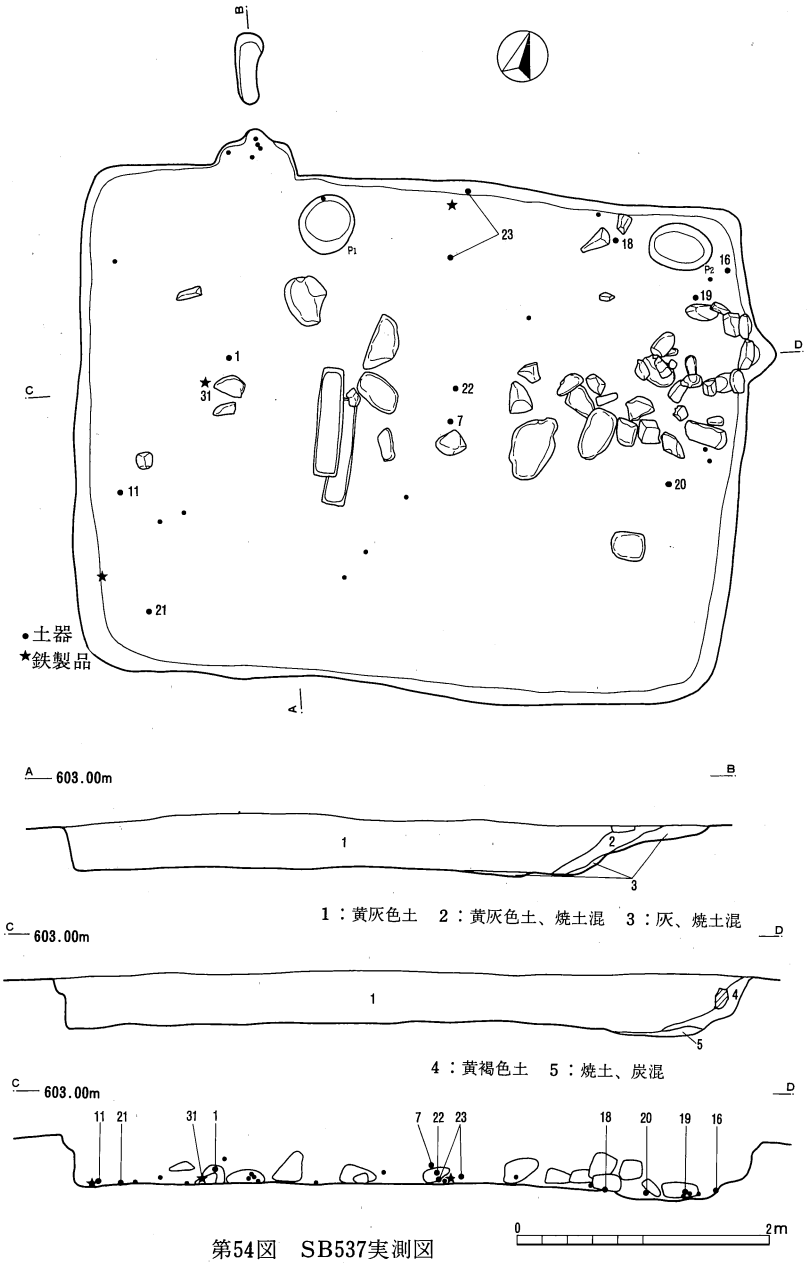
SB536　位置：北部Ｅ区　図版66、PL21

検出：主軸方向が短い2.55×3.20ｍの隅丸長方形の小型の住居址である。西側に位置するSB535、東側のSB559を切り、東壁でSK1071に切られる。カマド：東壁中央やや南寄りに位置する石組カマドである。左袖の一部は崩れるが、人頭大の礫を積み上げるように構築する右袖は原形を止めていた。火床は赤色化がみられず不鮮明である。床：地山をそのまま床としていた。埋没：覆土は２層に分層された。下層はⅡＡ層に由来する粘土を主体とし、その上をＩＤ層に近似する細粒砂が覆う。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、灰釉陶器があるが、覆土中・床面とも遺物は少ない。図示した遺物はカマド火床前から出土した。時期：８期に帰属する。

SB537　位置：北部Ｄ区　図版60、第54図、PL21

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。SB539・544・SK1118・1120を切るが、覆土の質的な違いから明瞭に区別された。当初、プランが長方形で、しかも煙道が北壁と東壁に存在したことから、２軒の重複と予想さ

れたが、床面や覆土の状況から1軒と判断した。しかし、カマドの形態が異なることからカマドだけが遺存した可能性も残る。カマド：北壁北東隅寄り（北カマド）と東壁北東隅寄り（東カマド）に位置する。北カマドは壁をわずかに掘り込むカマドで、煙道のみがトンネル状に残存していた。奥壁と煙道の一部が赤色化を受けていた。東カマドの遺存状況は良好である。袖は芯に使用された礫を積み上げるように構築し、天井部は礫を架設した状態で残存していた。礫材には花崗岩13、硬砂岩3個を使用している。遺存状況からみる限り、北カマドから東カマドへの移築と考えられる。床：地山を敲き締めた床で、中央が堅緻である。硬度計の測定でも同様な傾向を示していた。図示したように、巨礫が投棄され、住居廃絶をめぐる興味深い資料である。また、ほぼ中央に板が食い込んだような長方形の落ち込みが重なり合うように検出された。埋没：覆土は黄褐色の細粒砂を主体とし、IIA_2層質の粘土ブロックが多量に混在し、人為的な埋没状況と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、灰釉陶器、緑釉陶器、砥石、土錘がある。遺物は上層から床面にかけて出土しているが、床面付近に多く、土師器の甕片が1個体分出土した以外は食器が大半を占める。4・9・11・16は完形に近いが、本址に帰属する遺物なのか、投棄されたものか判断できない。なお、12～15は東カマド付近から出土し、緑釉陶器の椀は南東壁際の床下精査に出土した。時期：11期に帰属する。



第54図　SB537実測図

SB539　　位置：北部D区　　図版60

検出：住居の大半をSB537に切られ、カマド周辺のみが残存していた。床：遺存部がわずかなため、詳細は不明である。埋没：砂質の黄色土と灰色土が混在し、焼土粒を含む単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Aがあるが、その出土量は少ない。本址に確実に帰属すると思われる遺物はない。時期：新旧関係から11期以前と推定されるが、遺物が少ないため時期の限定は難しい。

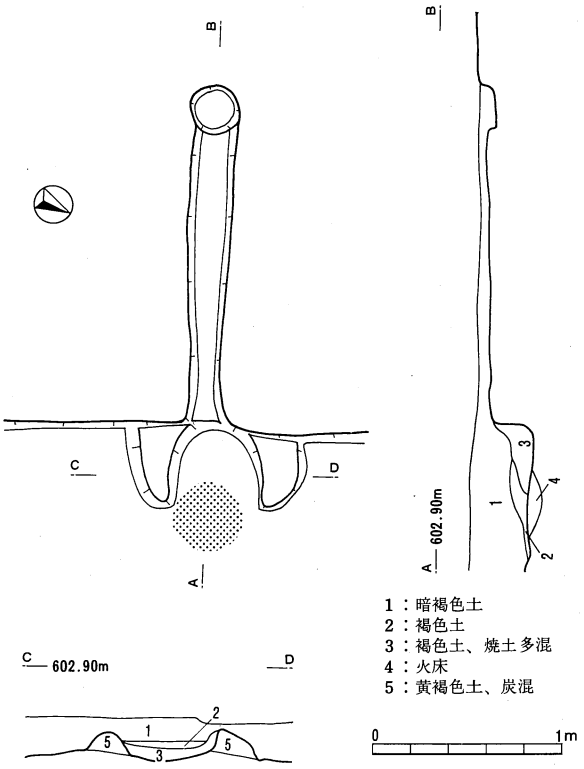
SB540　　位置：北部D区　　図版60、PL21

検出：IIA_2層上位で検出したが、プランは明瞭である。ST554・SK1125・1126を切るが、いずれも覆土

の質的な違いから面的に確定できた。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築していた。袖の多くを失うが、赤色化した火床が確認された。カマド左側には64×50×16cmのピットがあり、焼土粒を多量に含んでいた。柱穴：主柱穴４基あるが、全体的に西側に寄る配置である。柱穴の規模は径40～82cm、深さ26～40cmでいずれも底面に柱を据えた痕跡がみられた。柱間は主軸方向が約30cm程短い。床：IIA_2層基質のシルトを全面に入れて整地していた。硬度計の測定では北側と南東隅が硬い傾向を示していた。埋没：覆土はIIA_2層由来の粘土を主体とし、焼土粒、炭化粒を含む単一層である。遺物の出土状況：土師器、須恵器、、刀子、鎌、砥石があるが、遺物は上層から床面にかけて出土し、カマド右側に集中する傾向がみられた。１・８・11・13～21・24は床面遺物で、11はほぼ完形で出土した。時期：２期に帰属する。

SB541　位置：北部Ｄ区　図版60、第55図、PL22

検出：IIA_2層上位で検出した、3.75×3.85ｍの隅丸方形の住居址である。カマド：西壁中央に位置する粘土カマドである。袖の遺存状況は良好で、原形を止めていた。煙道は長さ2.40ｍと非常に長く、火床から25cm高い位置にある煙道口から煙出しへ水平に延びていた。煙出しは円形で、径25cmを測る。諸施設：カマド左手前に48×44×14cmのピットがある。柱穴：小型の住居址のため四隅に主柱穴を配置する。柱穴は円形状の掘り方で規模は径40～72cm、深さは６～27cmと一定でなく、柱間の寸法は主軸方向が40cm程短い。床：地山を敲き締めた床で、北壁中央には焼土粒が狭い範囲で集中していた。埋没：IIＡ層に由来する茶褐色の粘土を主体とし、焼土粒や炭化粒を混在する単一層で一時的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器、刀子が出土したが、カマド周辺に集中する傾向がみられる。１・２・４～７は床面や施設から出土した遺物で、完形に近い４はカマド左側のピットから一括で出土した。時期：１期に帰属する。



第55図　SB541カマド実測図

SB542　位置：北部Ｄ区　図版60

検出：SB541の南側に隣接し、北西隅から西壁にかけては調査区域外になる。プランは明瞭で5.95×6.65ｍの大型の住居址である。南壁はST526に切られていた。カマド：東壁中央に位置するが、袖は遺存せず、赤色化した火床が観察された。煙道は長さ1.85ｍと長く、ほぼ水平に煙出しへ延びていた。柱穴：東側に主柱穴になると思われる柱穴２基を検出したが、それに対応する西側の柱穴は検出できなかった。柱穴の規模は径60cm前後、深さ22～42cmで、柱間の間隔は3.32ｍを測る。床：IIA_2層質の粘土を全面に入れて整地していた。中央が堅緻で焼土、炭化粒が散布していた。埋没：覆土は単一層でIIＡ層に由来する細粒砂が人為的な埋没状況で堆積していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、紡錘車、土錘がある。遺物は上層から床面にかけて破片で出土した。２・３・９・19・23・26は床面遺物で、3・26はカマド右側のピットから出土である。時期：２期に帰属する。

SB543　位置：北部Ｄ区　図版60

検出：SB541の東側にある、Ｄ区の中では小型の住居址で2.50×2.75ｍの隅丸方形のプランである。カマ

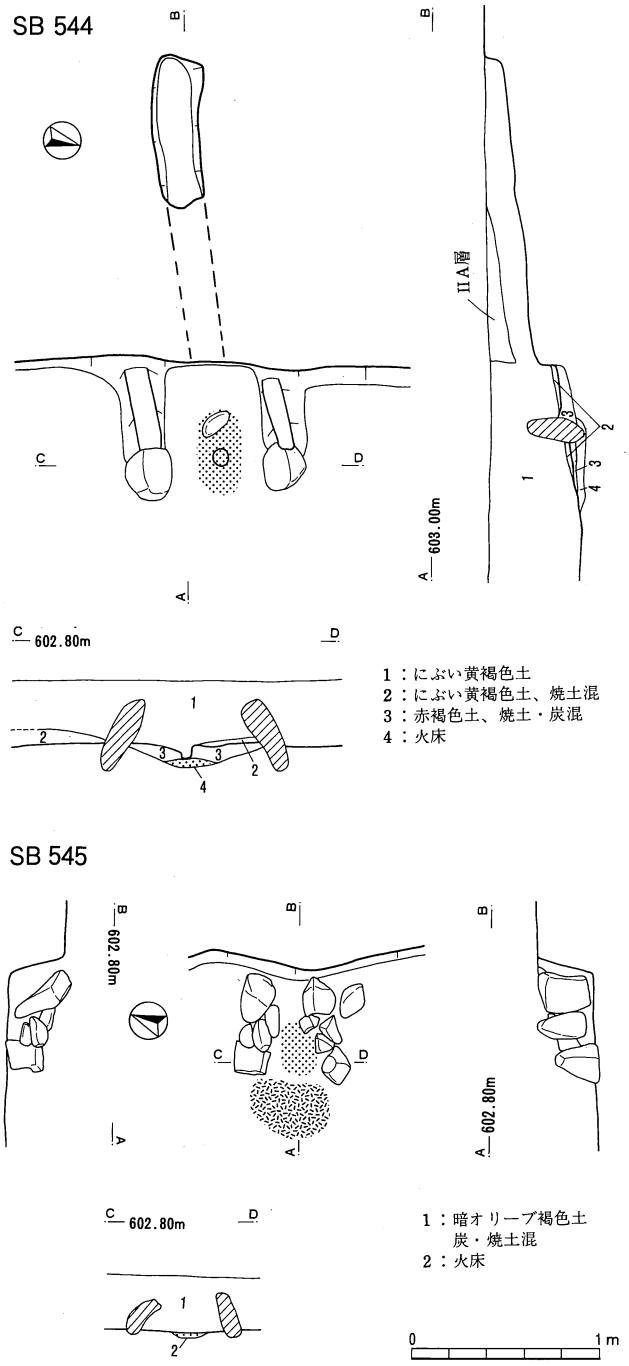
ド：西壁中央からやや南寄りに位置し、壁をわずかに掘り込んで構築していた。袖は全壊するが、火床は径50cmの範囲で焼土粒が厚く堆積し、その周囲には焼土粒や炭化粒が広がっていた。床：地山を床としており、軟弱な床である。埋没：ⅡA$_1$層基質の粘土を基調にⅡA$_2$層質の粘土粒が多量に混在する単一層で、人為的な埋没である。遺物の出土状況：須恵器があるが、遺物は覆土中、床面ともすべて破片でその量は少ない。唯一図示できた１はカマド火床からの出土である。時期：２期に帰属する。

SB544　　位置：北部Ｄ区　　図版58、第56図

検出：ⅡA$_2$層上位で検出した。プランは明瞭で一辺5.50ｍ前後の隅丸方形の住居址である。カマド：西壁中央に位置する石組カマドで、袖の遺存状況は良好である。袖先端に大きな花崗岩を１個ずつ、内側へ斜めに固定させ、その後粘土で固めていた。煙道は長さ0.85ｍを測り、掘り抜いて構築している。諸施設：カマド左側に径50cmの円形のピットがある。柱穴：整然とした配置の主柱穴4を検出した。柱穴の規模は径40cm前後、深さも30cm前後と規格性が高く、柱間は主軸方向がわずかに短い。ⅡA$_2$層質の粘土を入れて整地していた。硬度計の測定ではカマド手前から南側、南東隅が比較的硬い。埋没：覆土は単一層でⅡA層基質の粘土ブロックが不規則に混在し、一時的に埋め戻されたと思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器、銀環がある。床面遺物（6・7・9・11）はカマド付近に集中する傾向があり、７はカマド左袖前につぶれた状態で出土した。また、銀環も南壁際の床面遺物である。８・11は床面から20cm程浮いた位置で一緒に出土したが、埋没する際投棄された可能性が強い。時期：２期に帰属する。

SB545　　位置：北部Ｄ区
図版59、第56図、PL22

検出：SB544の東側に位置する単独の住居址で、3.15×2.95ｍの小型の住居址である。東壁の中央が突出するが、本来の形状である。カマド：袖の芯となる礫が積み上げられた状態で検出した。東壁中央やや南寄りに位置する石組カマドである。左右の袖には花崗岩５、砂岩６の11個を使用していた。火床には焼土が5cm程堆積し、焚口には炭化粒が散布していた。床：荒掘りは中央を中心に深く、ⅡA層の粘土を入れて敲き締めていた。埋没：ⅡA層由来の粘土を主体とする単一層で、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、羽釜があるが、遺物は全体的に少ないものの、カマド周辺に集中していた。図示した遺物は2,7を除き、カマド火床や焚口付近の遺物であ



第56図　SB544･545カマド実測図

る。時期：11期に帰属する。

SB546　位置：北部Ｄ区　図版59

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出した。東側の大半は調査範囲外に入るため、西側の一部のみ調査した。東側はSD524,ST547に切られる。カマド：カマドは周囲の遺構の状況から東側に位置したと予想される。南北方向は7.10ｍの規模で、Ｄ区のなかでもSB521に匹敵する大型の住居址と思われる。主柱穴になると思われるピットが西側に２基あり、柱間の寸法は約4.20ｍを測る。床：ⅡＡ層基質の土を入れて敲き締めていた。埋没：ⅡＡ層由来の粘土が人為的な埋没状況を呈し堆積していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、鉄製紡錘車がある。遺物は覆土中から床面にかけて出土し、その量は多い。時期：１期に帰属する。

SB547　位置：北部Ｄ区　図版57、PL22

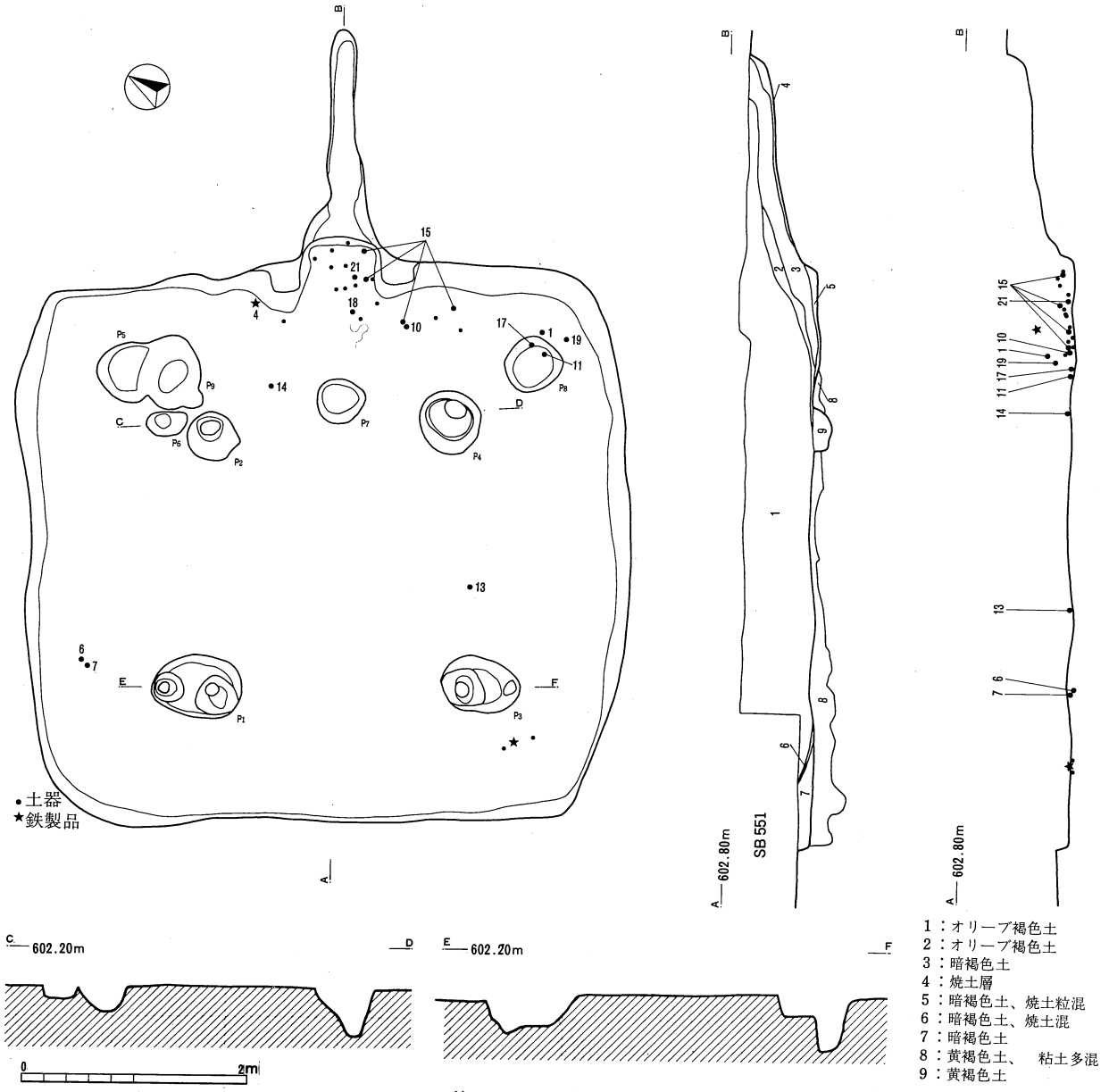
検出：SB545の南側に位置する隅丸方形の住居址である。ST538に切られるが、本址の覆土中に楕円形の落ち込みを面的に確認したことから新旧関係を確定した。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。袖の下部は地山を掘り残し、その上をⅡＡ$_2$層基質の粘質な土で覆い袖を構築していた。煙道は長さ1.85ｍ、径25cmで、煙道口から煙出しへ緩やかに傾斜して延びる。煙道の先端には土師器の甕が出土し、煙出しがあったことが予想された。柱穴：柱間の寸法が2.30ｍ前後とほぼ等間隔に配置された主柱穴４基を検出した。柱穴は円形を呈し、径38～72cm、深さ35～49cmを測る。床：床面には小さな起伏がみられ、藁状の炭化物がわずかに観察された。周溝：北壁中央から南東隅にかけてと南壁南東隅に幅20cmの周溝がある。南壁の中央で周溝はとぎれるが、入り口の施設との関連が予想される。埋没：覆土はⅡＡ層に由来する粘質なシルトを主体とする単一層で、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器があるが、遺物は上層から床面にかけて出土した。４･15はカマド火床の遺物である。このほか、完形の鋤･鍬先１点が床面から５cm浮いた位置で確認された。時期：１期に帰属する。

SB548　位置：北部Ｄ区　図版56

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出した、一辺3.60ｍ前後の隅丸方形の住居址である。ST530とSK1273に切られるが、本址の覆土中に柱痕が確認され、新旧関係は明瞭である。カマド：東壁中央に位置する函形カマドで袖は遺存していない。焼土粒が堆積する火床は赤色化し、焚口には炭化粒が広がる。煙道は長さ1.40ｍを測り、先端は円形状に膨らんでいた。床：地山を敲き締めた床である。周溝：幅６～20cm、深さ６cmの周溝が全周する。西壁と南壁の中央には円形のピットがあるが、周溝との関係は明瞭でない。埋没：覆土はⅡＡ層基質の粘土を主体とする単一層で、焼土粒と炭化物が点在していた。遺物の出土状況：土師器があるが、その全体量は窮めて少ない。覆土中には遺物はほとんどみられず、床面遺物（1･2）もカマド周辺にわずかに集中するのみである。時期：２期に帰属する。

SB549　位置：北部Ｄ区　図版53、PL23

検出：SB625の西側に隣接する、5.51×4.95ｍの隅丸方形の住居址である。ST550に切られ、ST551を切る。ST550とは覆土の違いから面的に、また、ST551とは本址の床面で検出できたことを根拠に決定した。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築する。袖は遺存しないため詳細は不明だが、火床には焼土が厚く堆積していた。柱穴：主柱穴４基があり、整然とした配置である。柱穴は楕円形を呈し、長軸70cm前後、短軸55cm程で、深さは37～52cmと大きく違わない。柱間の寸法は主軸方向がわずかに長い。また、カマド両脇にある円形の２つのピットは深さ10cmと浅いが補助的な柱穴になる可能性が強い。床：中央がわずかに高い。ⅡＡ層質の粘土を入れて整地しているが堅緻な床ではない。埋没：覆土はオリーブ褐色の細粒砂を主体とする単一層で、焼土粒、炭化粒を混入していた。一時的な埋没状況に近い。遺物の出土状況：土師器、須恵器、軟質須恵器、砥石がある。遺物は破片で出土する例が多く、床面遺物（1･2）も少ない。砥石はカマド火床内から出土した。時期：２期に帰属する。



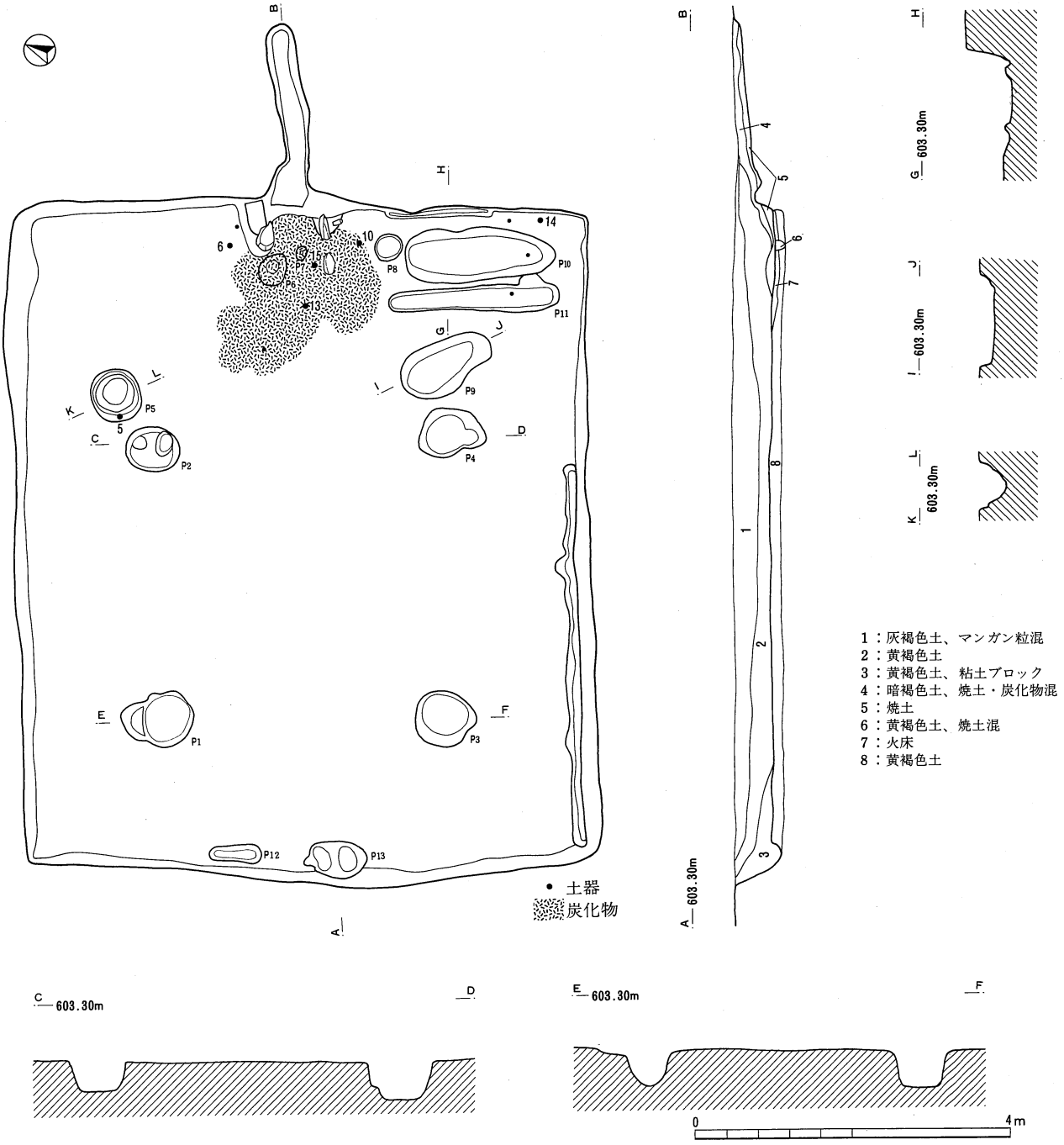
第57図　SB550実測図

SB550　　位置：北部D区　　図版54、第57図、PL23

検出：IIA_2層上位で検出した。SB551・ST575・576・SD536に切られる。SB551とSD536とは覆土の色調差から面的に切り分けたが、ST575・576の覆土と本址の覆土は近似していたが、断面観察によってその関係を決定した。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築していた。袖の下部は地山を掘り残していたが、残存部が少なく詳細は不明である。煙道は長さ1.75mと長く、緩やかな傾斜で煙出しへ延びる。柱穴：主柱穴4基がある。柱穴は楕円形を呈し、西側列の規模が大きい。南東隅のピットは柱を据えた痕跡が認められた。柱間寸法は西側列が2.65mと長い以外は、2.35m前後と一定である。床：全面に荒掘りし、IIA_2層質の粘土を薄く入れて整地する。床面には小さな起伏があり中央が堅緻である。埋没：IIA_1層を基調とする粘土が一時的に埋没する単一層である。遺物の出土状況：土師器、須恵器、土師器、鎌などが出土した。遺物は床面付近に集中するが（1・2・5～7・10・11・13～19・21）、残存率の高い遺物が多い。カマド火床付近には土師器の甕（15・18・21）が集中し、P8付近にも甕（17・19）があることから、使用した煮炊具をカマド付近に投棄した可能性が高い。時期：1期に帰属する。

SB551　　位置：北部Ｄ区　　図版54、第58図、PL23

検出：本遺跡で調査したなかでは最大規模の住居址で、プランは8.30×6.95ｍの隅丸長方形である。SD536に切られ、SB550･ST574を切る。ST574については本址の床剝ぎの際検出し、本址が新しいことを確認したが、他との重複関係については覆土と特徴から面的に確定した。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。袖は原形を止めていないが、袖の芯に使用されたと思われる礫と左袖には粘土もわずかながら残存していた。火床は焼土化し、炭化粒が薄く散布する。煙道は長さ2.35ｍで、ほぼ水平に延びていた。諸施設：カマド右側にあるピットは188×68cmの規模で、覆土中に多量の焼土粒を含んでいたことからカマドの付属施設と思われる。柱穴：主柱穴４基を確認した。柱穴の規模は大きく、深さは45cm前後と一定で、Ｐ２～Ｐ４の底面には柱を据えた痕跡が観察された。また、カマド右側にあるP8は径36cmの規模で



第58図　SB551実測図（１：80）

浅いピットであるが、柱穴の配置状況から補助柱穴になりうる可能性が高い。床：荒掘りした後、約10cmの厚さでⅡA_2層基質の土を入れて整地していた。床面はほぼ平坦で中央が堅緻である。西壁中央にはピットが2基があり、入り口と関連する施設と思われる。また、カマド右側の細長い溝は断定はできないが、古墳時代の住居址に時折観察される根太の痕跡を予想させる。埋没：覆土は2層に分層された。上層はⅠD層に近似する細粒砂の土で自然堆積であり、下層はⅡA層に由来する粘土で人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器、刀子がある。大型の住居址の割りには出土量は少ない。遺物の構成に注目すると、土師器の煮炊具が24個体と、食器と比較するとかなり多い。遺物は床面のカマド焚口やその右側に集中する傾向をみせ、特に、カマドからは土師器の甕(15)が潰れた状態で出土した。時期：2期に帰属する。

SB553　位置：北部E区　図版66、PL24

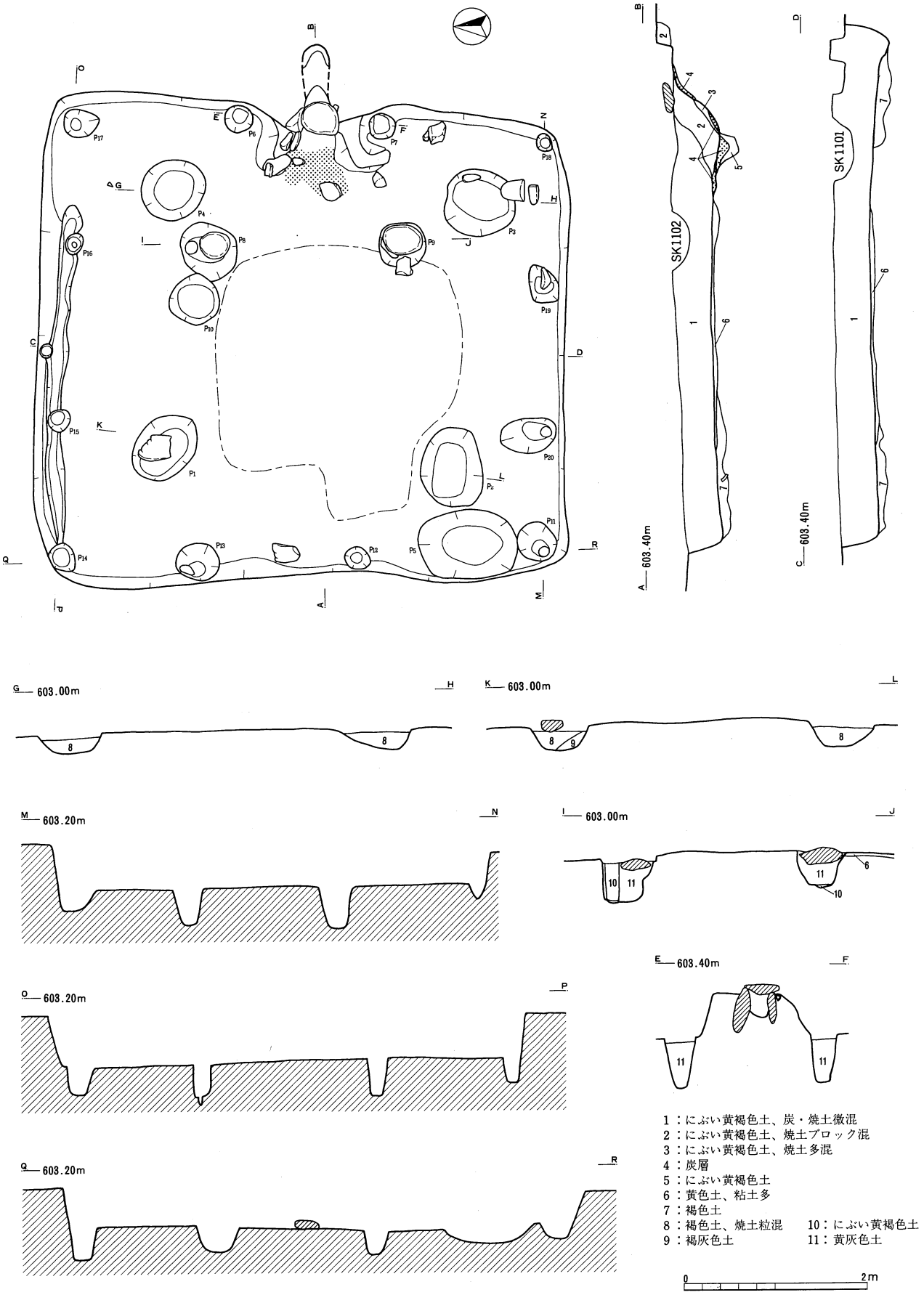
検出：ⅡA_2層で検出する。東、西側で他の住居址との重複関係があるため、特に、東側の壁の検出が困難だった。本址はSB560・561・564をいずれも切るが、覆土の特徴から面的に確定した。隅丸方形のプランを呈するが壁は直線的にならない。カマド：北壁北西隅に位置し、石組カマドの可能性が高い。左右の袖の先端には礫が1個ずつ遺存し、右袖の右側には礫が20個程が散乱していたが、投棄された礫なのか、袖に使用した構築材なのか明瞭でない。床：全面に薄く貼床をしていた。テラス：カマド右側から南壁中央にかけて、地山を掘り残したテラスがある。床面から15cm程高い位置に、幅30cmで構築するが北東隅付近では途切れていた。埋没：覆土は細粒砂を主体とし、含有物の違いから分層したが、下層にはⅡA層由来の粘土が埋没し、その後数度にわたる自然堆積によって埋没していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器がある。遺物は上層から床面にかけて破片での出土が多く、カマド周辺に集中する。1～3・5～7はカマド左側から出土し、1～3は完形に近く、使用していたものを遺棄あるいは、投棄した状況と思われる。時期：13期に帰属する。

SB554　位置：北部E区　図版66

検出：E区の南東隅に位置する。南西から北東にかけて自然流路があり、その流路を掘り込んで構築していた。SK1027に中央で切られるが、覆土の状況から明瞭に切り分けることができた。カマド：北壁中央に位置するが袖の遺存状況は悪い。袖付近には袖石の抜き取り痕があり、さらに、焼けてボロボロになった花崗岩1個が覆土中にあったことから石組カマドの可能性が高い。火床は不鮮明であるが、炭化物が散布していた。床：カマド手前から中央にかけて貼り床し、壁際は地山をそのまま床としていた。埋没：地山の自然流路由来の細粒砂とⅡA層質の粘土粒が混じる単一層で、一時的な埋没と思われる。遺物の出土状況：黒色土器A、土師器、灰釉陶器があるが、その全体量は少なく、上層から床面にかけて破片で出土している。なお、2・6・7は床面遺物である。時期：7期に帰属する。

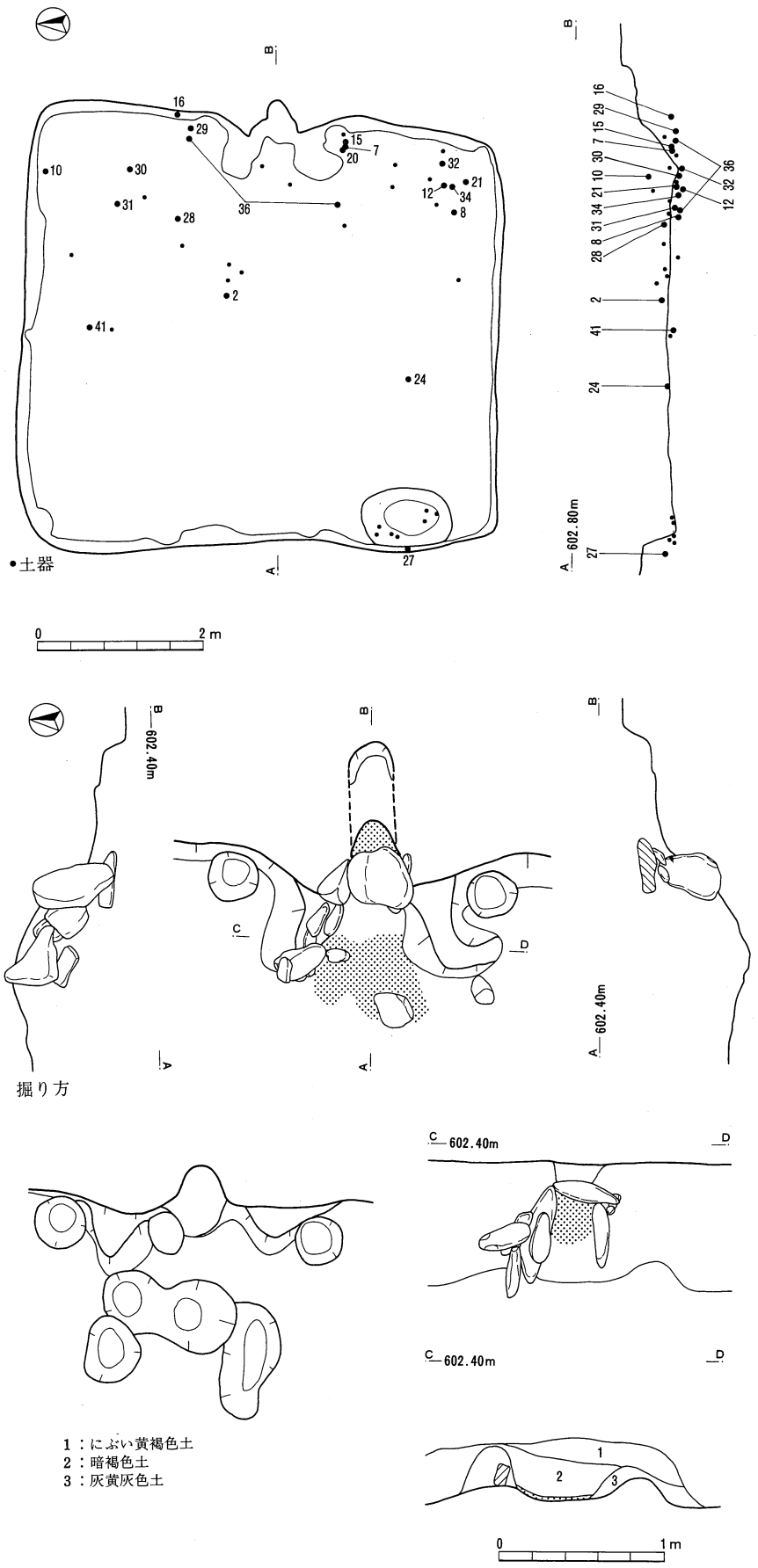
SB555　位置：北部E区　図版66、第59・60図、PL24

検出：SB554に北側に隣接し、SB600・615を切り、覆土中でSK1101～1103に切られる。SB600と土坑とは色調差から面的に区別されたが、SB615とは南北方向に入れたトレンチの断面観察によった。また、すぐ東側は調査区域外となるが、カマドの煙道先が延びていたため、わずかに拡張し煙道の状況を観察した。カマド：東壁中央に位置する石組カマドで遺存状況は良好である。袖は壁に近い部分で地山を掘り残し、芯となる花崗岩を積み上げて粘土で固めていた。天井部には砂岩の平坦な石を使用し、架設した状態で残存していた。天井石を支える2個の石は特に大きく、直立するように埋め込まれていた。火床と奥壁は焼土化し、かなり急な角度で立ち上がり、天井石の下でなだらかになり煙道先へ続く。柱穴：P1～P4の主柱穴4基と各壁に4基ずつの壁柱穴を検出した。主柱穴は整然とした配置で主軸方向の柱間寸法がわずかに短い。柱穴の規模は大きいが、深さは30cm前後と余り深くない。壁に並ぶ柱穴のうち、P6・7には頑丈



第59図　SB555実測図(1)

な柱痕があり、打ち込まれたような状態が観察された。P8・9には礎石らしい花崗岩の平石があり、その下には柱穴が検出され柱痕も確認された。P3・4への柱の据え直しの状況も考えられるが、確証は得られなかった。床：主柱穴に囲まれた範囲が堅緻で、中央からP5の方向へ柄鏡状に張り出すように貼り床をしていた。荒掘りは壁際に近い方が深く、軟弱な床である。南壁南西隅にあるP5は貼り床や西壁が張り出す状況から入り口の可能性が高い。周溝：北壁のP14～16の間に幅20cm、深さ10cmの周溝がある。埋没：覆土はＩＤ層に由来する砂質土が主体となり、粘土ブロックが均一に混じる。人為的な埋没状況に近い。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、棒状鉄製品、砥石がある。出土した遺物量は8期のなかでも最も多い住居址である。遺物は上層から床面にかけて出土したが、床面付近に集中し、遺存率はかなり高い。床面遺物は第60図に示したようにカマドを中心とする東側とP5付近に集中する傾向が認められ、中央の堅緻な部分には少ない。杯類の多くは完形品が多く、本址に帰属する遺物がかなりあると判断できる。また、本址からは10点の墨書土器と3点の転用硯が出土した。「ふ」と墨書さ



第60図　SB555実測図(1：80)(2)・同カマド実測図(1：40)

れた土器は周囲に位置するSB559・595からも出土しており本址との関連性が考えられる。本址は当該期でも卓越した遺物と墨書土器の出土量は注目できる。時期：８期に帰属する。

SB556　位置：北部Ｅ区西端　図版72、PL24

検出：住居址の西側は調査範囲外に入り、東側の一部のみ調査した。覆土中で南北方向にかけて溝状の撹乱を受ける。カマド：東壁北東隅に位置する石組カマドである。袖は崩れており、花崗岩が散乱しており、火床も不鮮明である。床：地山を床としているが、小さな起伏があり全体的に堅緻である。埋没：ＩＤ層基質の細粒砂を主体とし、焼土粒と炭化物が下層に多く認められたが、ほぼ単一層とみてよい。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、釘、羽釜がある。住居址は半分しか調査していないが、遺物の量は多い。２・６～11・15・16・18～20は床面遺物で２・８は完形に近い。時期：13期に帰属する。

SB557　位置：北部Ｅ区　図版69

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。主軸方向が約70cm短い隅丸長方形の住居址である。ST531と重複するが本址の覆土中にST531のピットが検出されなかったことを根拠に本址が新しいと判断した。カマド：東壁中央やや南寄りに位置する。袖は原形を止めず、粘土が崩れたような状態で検出された火床は焼土化がみられず、その周囲には炭化粒が広がっていた。諸施設：カマド左側には54×44cmの楕円形のピットがあり、深さ6cmと浅いが焼土粒を多量に含んでいた。床：地山をそのまま床とするが、小さな起伏があり西側が堅緻である。埋没：覆土は北側で焼土と炭化物を包含する層を挟んで２層に分層されたほかは単一層になる。全体的にⅡＡ層質の粘土を基調とする一時的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、灰釉陶器、刀子が出土した。遺物は上層から床面にかけて出土したが、床面のカマド焚口とその右側に集中する。遺物の構成は煮炊具が図示した20・21の２個体があるほかはいずれも食器で、特に黒色土器Ａが多い。時期：８期に帰属する。

SB558　位置：北部Ｅ区　図版64、第61図、PL25

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。覆土は粘性の強い黄色の土で地山との識別は容易である。南側で東西方向に走る溝状の撹乱がある。カマド：東壁中央やや南寄りに位置し、壁を丸く掘り込んだ函形カマドである。袖は掘り込んだ壁を利用すると思われるが、痕跡は認められない。カマドの焚口前に散乱する土器に混じって焼けた大型の礫があり、何等かの形で使用された可能性もある。煙道は長さ0.65ｍを測るが、煙道口から緩やかな傾斜で延びる。諸施設：カマド左側に48×34cmの楕円形のピットがあり、焼土ブロックを多量に混入しており、付属する施設と思われる。床：地山を床とするが、中央には薄く貼り床をする。南西隅の壁はなだらかな傾斜で、床方向へ張り出す部分もあり、入り口と関連する可能性がある。埋没：黄灰色の砂質土を主体とする単一層で小豆大の礫をわずかに含む。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、灰釉陶器が出土したが、特に、黒色土器Ａの出土量が目立つ。第61図で示したように、遺物はカマド焚口や前庭部に集中する傾向がみられる。いずれも床面からわずかに浮いて出土する例がほとんどである。カマドに集中する土師器甕（13・14・16）は本址に帰属する可能性が高い遺物であろう。時期：８期に帰属する。

SB559　位置：北部Ｅ区　図版66、第61図

検出：主軸方向がわずかに長い隅丸方形の住居址である。西側でSB536に、東壁の一部がSA506に切られ、さらに、南側でSB560を切る。SB536とは本址の覆土に536のカマドがのることから、また、SA506，SB560とは覆土の色調差から新旧関係を決定した。カマド：東壁中央に位置するが、袖は全壊していた。火床は床面からわずかに低く、焼土化が観察された。煙道は急な角度で延びていた。床：カマド手前から中央にかけて焼土粒と炭化粒が散布し、一部貼り床があるが全体的に敲き締めていた。埋没：覆土はⅡＡ層に由来する粘土がブロック状に堆積する単一層で、小豆大の礫、焼土粒、炭化物が多量に混じる、人為的

な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、軟質須恵器、灰釉陶器がある。遺物は床面からの出土が多く、図示したようにカマド焚口左側とP１付近に集中する。また、本址からは墨書土器が４点出土しており、完全に文字が判読できる資料はないが、SB555で出土した「ろ」と推定できることからSB555との関連性が注目できる。時期：８期に帰属する。

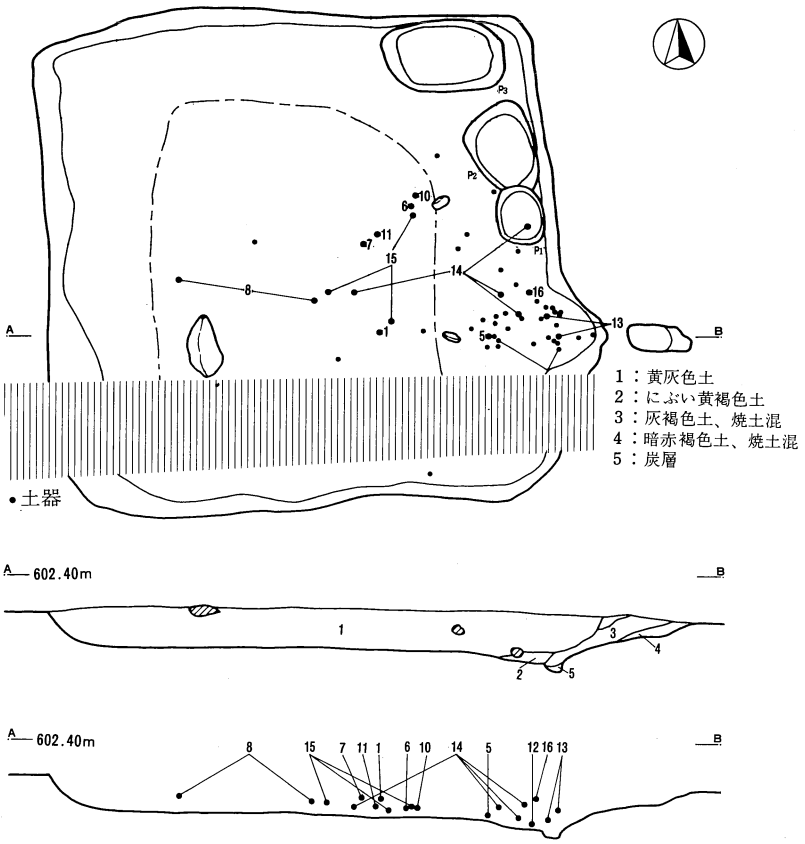
SB560　　位置：北部E区
図版66

検出：北側でSB559に、東側でSB553に切られる。覆土が近似するため、いずれも先行トレンチを入れて床の状況や断面観察によって確定した。カマド：東壁中央に位置するが、SB553によって撹乱を受けるため火床を確認したのみである。床：全面にIIA_2層基質の粘質な土を入れて整地した床で、ほぼ平坦である。埋没：IIA層を基調とする単一層で、小豆大の礫、炭化粒、風化礫が混じる。遺物の出土状況：土師器、砥石があるが、遺物は少なく破片での出土がほとんどである。１・３はカマド焚口からの出土である。時期：１期に帰属する。

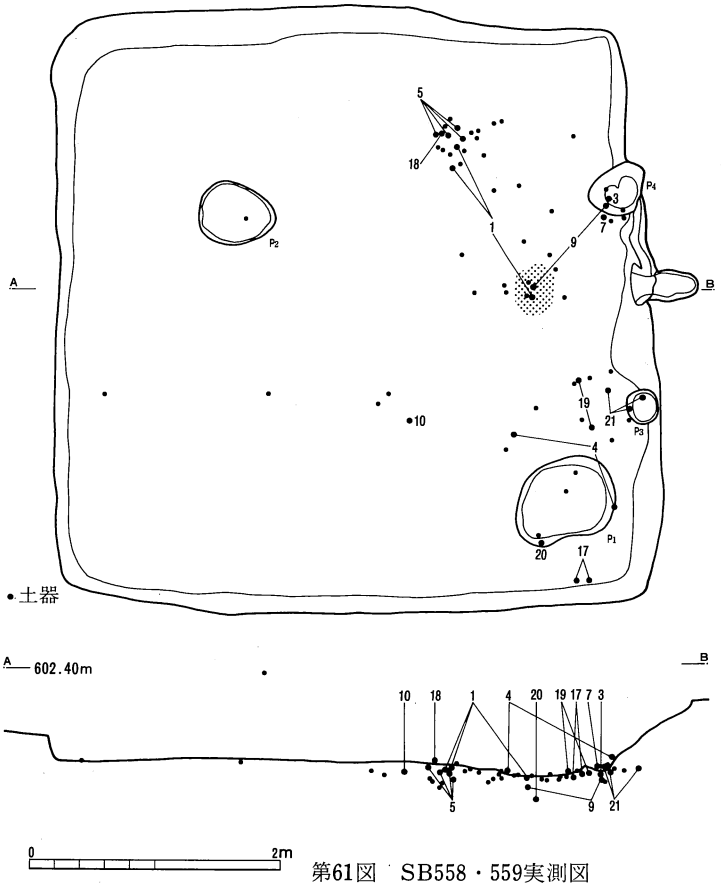
SB561　　位置：北部E区
図版66

検出：IIA_2層上位で検出する。規模は2.65×2.75ｍの小型の隅丸方形の住居址である。SB553に北壁の一部を切られ、SB562を切る。SB562とは本址のカマドが562の覆土にのることから、SB553とは覆土の質的な違いからその新旧関係は容易に確定した。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築する石

SB558



SB559



第61図　SB558・559実測図

組カマドである。左袖は遺存しないが、右袖には袖石が立った状態で検出された。左袖には袖石の抜き取り痕が観察され、石を１個ずつ使用していたと思われる。床：平坦な床で地山をそのまま床としていた。埋没：覆土はⅡＡ層を主体とする単一層で、炭化粒がわずかに観察された。遺物の出土状況：土師器があるが、覆土中や床面とも遺物はほとんどみられない。土師器甕（1）はカマド火床に集中し、住居を廃絶する際投棄あるいは遺棄されたものと思われる。時期：５期に帰属する。

SB562　位置：北部Ｅ区　図版69

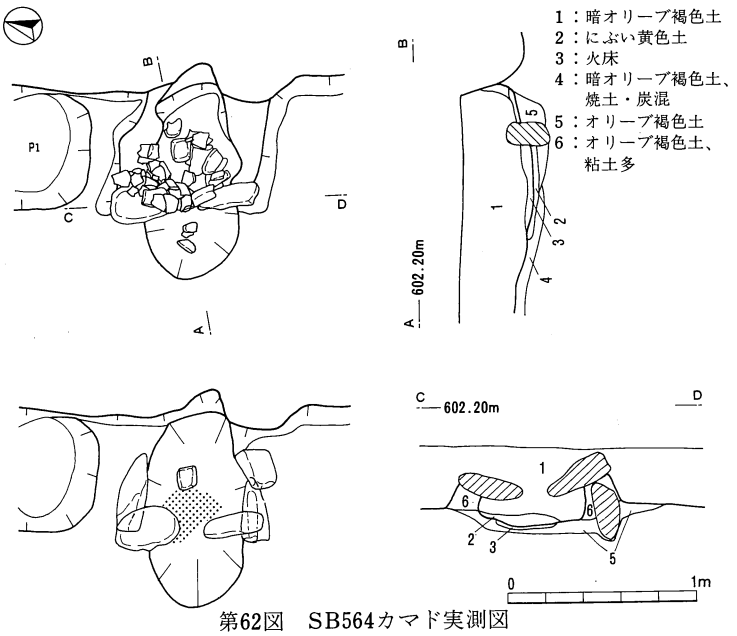
検出：SB561の東側に隣接し、住居の東側はSD524に切られるためその大半を失い、西側のみ調査した。プランはほかの住居址との重複関係と土壌化により不鮮明である。さらに、南壁でSD526に切られるが、覆土の特徴から本址が古いと判断した。カマドは検出できなかったが、東壁に位置した可能性が高い。床：地山を床とし、起伏はほとんどみられない。埋没：覆土は床面からわずかな部分しか残存しないため、その埋没状況は明瞭でないが、小豆大の礫を含んだⅡＡ層を基調とする粘土を主体としていた。遺物の出土状況：須恵器があるが、遺物の全体量は少なく破片で出土した。４のみ床面遺物である。時期：４期に帰属する。

SB563　位置：北部Ｅ区　図版69

検出：床面の状況から住居址と認定したが、SB562とSD524に大半を切られるため、北西隅しか残存しておらず詳細は不明である。床：軟弱な床であるが、整地した痕跡がみられる。埋没：SD524によって灰色化を受けるため不鮮明だが、覆土はⅡＡ層に近似する。遺物の出土状況：遺物は極めて少なく、北壁際から土師器高杯（1）が出土した。時期：１期に帰属する。

SB564　位置：北部Ｅ区　図版66、第62図、PL24

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。SB553と565と重複があり、さらに北側で撹乱を受けるためにプランの確定は難しかった。本址はSB553・565に切られる。前者とは先行トレンチを入れて床面や覆土の状況から決定した。カマド：西壁中央に位置する石組カマドである。カマドの奥壁の一部をSB553に切られて失うが、右袖石と天井石が架設さえた状態で残存していた。芯材には花崗岩を使用し、割れた石を使う袖石と天井石の間で接合関係がみられた。また、焼土化した火床の端で支脚石が立った状態で観察された。諸施設：カマド左側に70×62cmの円形の付属する施設と思われるピットがみられた。床：ⅡＡ$_2$層の粘土で整地した痕跡がみられ、敲き締められた中央が壁際よりわずかに高い。埋没：ⅡＡ$_1$層に由来する粘土を主体とする単一層で、一時的な埋没である。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器、土師器があるが、床面の遺物が多い。１・２・７・10～14のわずかな杯と４個体の煮炊具がカマド火床から出土し、３・４・６・８・９の杯類がカマド左側のピットやその周辺から出土した。時期：７期に帰属する。



第62図　SB564カマド実測図

SB565　位置：北部Ｅ区　図版69

検出：SB564の北側に位置する大型の住居址である。東壁にあたる部分をSD524に切られるが、カマドの

煙道と一対の袖石を溝址中に確認した。また、南壁でSB564を切るが、耕作による撹乱を受け、床面の一部を失っていた。さらに、北側でもSB566・600と重複するが覆土の色調差から面的に本址が新しいと確定した。主軸方向が残存しないため性格な規模は不明だが、一辺6.00m前後の隅丸方形の住居址となろう。カマド：東壁中央に位置するが、前述のように煙道と芯材のみ確認した。床：薄く粘土を貼った床は中央が低く、起伏が観察された。西壁付近には花崗岩や砂岩の平石3個が等間隔に並び、北側の中央や南側の撹乱を受けたなかにも1個ずつ平石が検出され礎石として使用された可能性が考えられる。周溝：北壁に幅18cmの周溝が長さ1.7mにわたって検出された。埋没：粗粒砂を主体とする単一層で、焼土粒や炭化粒が混じる。遺物の出土状況：黒色土器A、灰釉陶器、土師器、、棒状鉄製品、砥石があるが、覆土中から破片で出土したものが多く、床面にはほとんど遺物はみられない。なお、2・4・5と砥石はピットの遺物である。時期：8期に帰属する。

SB566　位置：北部E区　図版68

検出：SB565・600に大半を切られるため、北西隅しか残存しないが、床面の状況から住居址と認定した。規模、形状やカマドの位置などの詳細は不明である。床：明瞭な敲き締めの痕跡は認められないが、地山を利用した床面は容易に識別できた。埋没：黄灰色の粗粒砂を主体とする単一層で白色砂、マンガン粒、焼土粒などが混在していた。遺物の出土状況：遺物は極めて少なく、本址に確実に帰属する遺物は出土していない。時期：新旧関係から5期以前と推測されるが、その限定は難しい。

SB567　位置：北部E区　図版71

検出：住居址の東側半分が調査区域外に入る。南北方向は長さ2.40mを測るが、おそらく小型の竪穴住居址となろう。なお、カマドの位置については確認できなかった。床：地山を床としており南側が低い。埋没：覆土は黄褐色の粗粒砂を主体とし、IIA層基質の粘土粒、炭化物、焼土粒を混在する。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Aが出土し、図示した遺物はいずれも覆土中から出土した。時期：8期に帰属する。

SB568　位置：北部E区　図版70

検出：IIA_2層上位で検出する。規模は一辺2.90mの隅丸方形の住居址である。壁は小さな凹凸がみられる。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。袖は完全に破壊されていたが、芯材と思われる礫10個が南西隅にかけて散乱し、火床の位置には焼土粒がわずかに集中していた。床：地山をそのまま床とする平坦な床である。埋没：覆土は粗粒砂を主体に焼土粒や炭化物を含んでいた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、砥石があるが、床面遺物はほとんどない。時期：10期に帰属する。

SB569　位置：北部E区　図版72

検出：SB569～572の4軒の住居址が重複するなかの1軒で、SB570を切り、SB572に切られる。いずれも覆土の色調と質的な違いを根拠に決定した。プランは方形に近いと思われるが壁は直線的にならない。床：地山をそのまま床とし、小さな起伏がみられる。埋没：淘汰の良い粗粒砂を主体に粘土粒が混じる単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、須恵器が出土したが、遺物の全体量は少なく、破片での出土がほとんどである。図示した遺物のうち、3以外は床面遺物である。時期：7期に帰属する。

SB570　位置：北部E区　図版72

検出：北東隅でSB571に、東側でSB569・572に切られる。覆土の色調や粘土粒の含有量の差から新旧関係を決定した。なお、カマドの痕跡は認められなかった。床：地山のIIA_2層を床とした平坦な床である。埋没：覆土は単一層で、粗粒砂を主体とし、粘土粒を混入していた。遺物の出土状況：遺物は窮めて少なく、細片での出土がほとんどで図示しえなかった。時期：新旧関係から6期以前と考えらるが、時期の限定は難しい。

SB571　位置：北部Ｅ区　図版72

検出：一辺3.00ｍ前後の隅丸方形の住居址で、南東隅付近でSB570を切る。カマド：北壁中央やや北西隅寄りに位置する粘土カマドで、壁を丸く掘り込んで構築する。袖は粘土が崩れており、原形を止めていない。火床はわずかに凹んでいたが、焼土化はしていなかった。諸施設：カマド左側に50×48cmのピットがあり、覆土中に焼土粒を含んでいた。床：地山をそのまま床としていた。埋没：ＩＤ層の黄褐色細粒砂を基調とする単一層で、炭化粒、マンガン粒が混じる。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器、土師器があるが、床面遺物（１・４・５）はカマド火床とその左右に集中する傾向がみられ、煮炊具がほとんどである。時期：６期に帰属する。

SB572　位置：北部Ｅ区　図版72

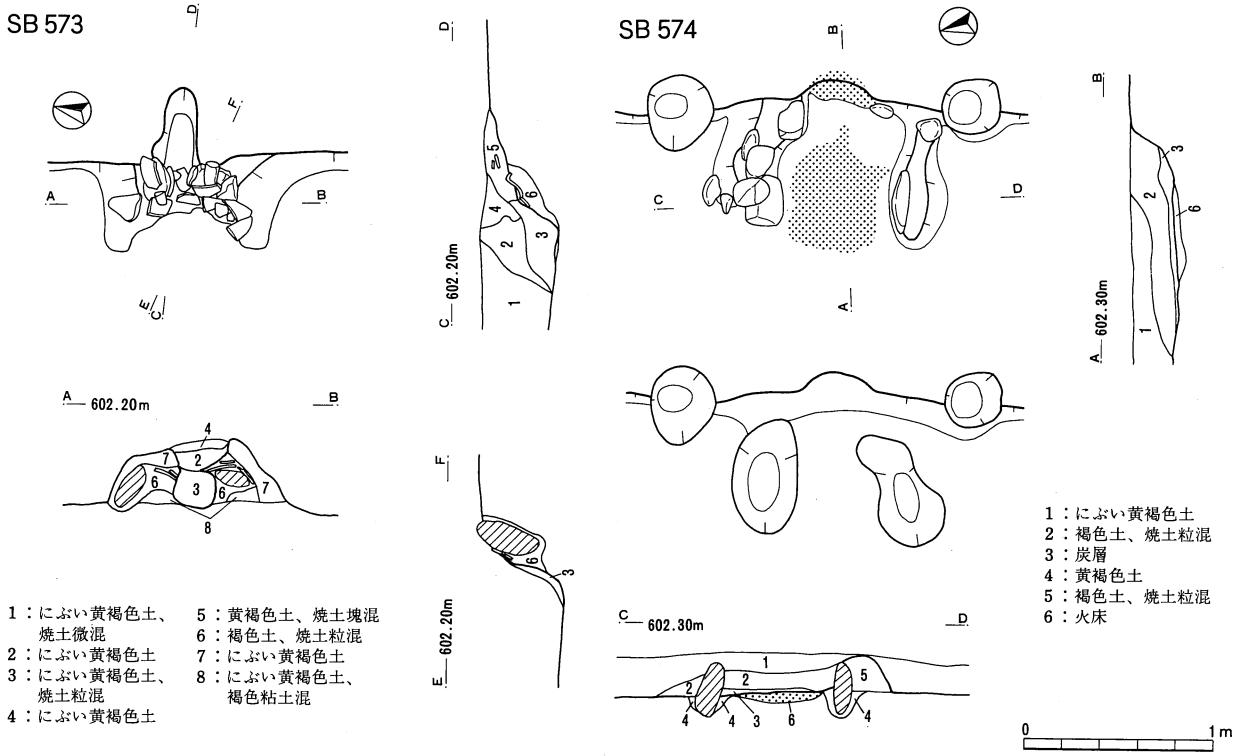
検出：西側でSB569･570を切る、一辺3.0ｍ前後の小型の隅丸方形の住居址である。北壁は部分的に張出しがみられる。カマド：東壁中央からやや北寄りに位置し、粘土カマドと思われる：右袖は全壊し、左袖付近には粘土が崩れていた。火床は焼土化が弱く、焼土塊が散布するのみであった。床：IIA_2層の地山を床とし、西側がわずかに高い。埋没：ＩＤ層に由来すると思われる細粒砂を主体に、白色砂、炭化粒が混在していた。遺物の出土状況：須恵器があるが、遺物の出土量は少ない。唯一図示できた１は西壁際の床面から出土した。時期：遺構に重複関係から７期以降と推定されるが、限定は難しい。

SB573　位置：北部Ｅ区　図版70、第63図、PL25

検出：IIA_1層下位からIIA_2層上位で検出する。検出面で東壁と北壁にカマドの痕跡が認められたが、プランの状況から１軒と判断した。最終的なプランの決定は、本址を切るSB574･583の完掘後である。SB574とは574のカマドが本址の南壁を壊して構築していたことを根拠に、また、SB583とは覆土の特徴から確定した。カマド：北壁中央（北カマド）と東壁中央（東カマド）に位置し、北カマドから東カマドへの作替えがなされていた。北カマドは火床と煙道の一部分が残存するのみである。東カマドの遺存状況は良好である。袖の芯材には大きな花崗岩を使用し、須恵器の甕の破片を礫に張付け、その上に粘土を貼って袖を構築する。煙道は奥壁の高い位置から緩やかな傾斜で外へ向かい、その後煙道口にはやはり須恵器甕の破片を当てていた。煙道の断面観察では煙道が一旦埋没し、煙道口を作り替えた痕跡が窺えた。諸施設：カマド右側、南東隅にカマドに付属すると思われる54×40cmの楕円形のピットがあり、焼けた割れ石や遺物が出土した。床：中央付近に堅緻な床がある。埋没：にぶい黄褐色の粗粒砂を主体とする単一層で、一気に埋め戻された状況に近い。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、須恵器、軟質須恵器、刀子がある。遺物は上層から床面にかけて出土しているが、その全体量は少ない。床面遺物は図示したようにカマド周辺に集中する。時期：８期に帰属する。

SB574　位置：北部Ｅ区　図版70、第63図

検出：主軸方向がわずかに短い隅丸方形の住居址である。重複関係があるためにプランは不明確である。東壁のカマドの両脇には壁に食い込むようにピット状の張り出しがあり、住居址の覆土と異質なことから別遺構の可能性も考えて調査した。本址はSB573・575・ST552を切る。本址のカマドはSB573を切り込んで構築され、さらに、SB575とST552とは覆土の質的な違いから容易に識別された。カマド：東壁中央に位置する石組カマドで、右袖の一部は破壊されていたが、左袖は原形を止める。大きな花崗岩を左右に１個ずつ床を掘り込んで固定させ、その上に小さな石を積み上げていた。火床は焼土化し明瞭である。柱穴：主柱穴は検出できなかったが、カマド両脇にあるピットは周囲の遺構との関連性がみられないことやその位置関係から本址の柱穴と判断した。形状は円形に近く、深さ50cm程と深い。床：カマド焚口付近に焼土粒や炭化粒が散布し、硬度計の測定ではその箇所が硬い傾向を示していた。埋没：にぶい黄褐色の砂質土を主体に、粘土ブロックを多量に混入する単一層で人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、



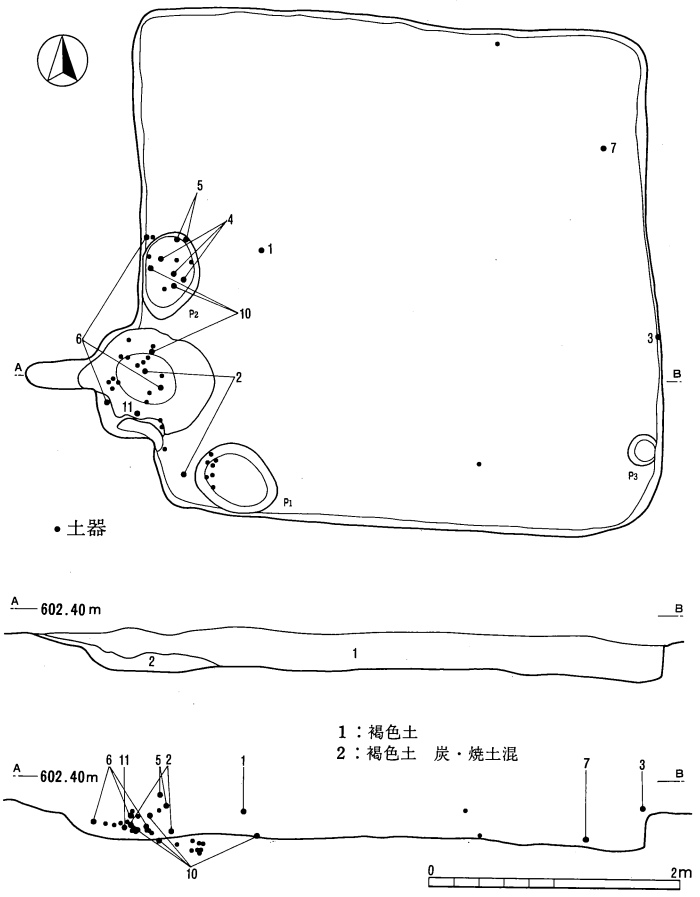
第63図　SB573･574カマド実測図

灰釉陶器、黒色土器A、刀子、棒状鉄製品がある。遺物は全体的に少なく、床面遺物（1･3）も余りみられない。5はカマド左側の柱穴から、また、2・6はカマド火床からそれぞれ出土した。時期：8期に帰属する。

SB575　位置：北部E区

図版69、第64図

検出：IIA_1層下位からIIA_2層上位で検出した、隅丸方形の住居址である。本址はST552と重複するが、覆土が異なることから本址が切ることを容易に確定できた。カマド：西壁南西隅寄りに位置する函形カマドである。袖は壁を利用すると思われるが、袖の遺存状況は悪く、右袖石と焼土化した火床の中央で支脚石の抜取り痕を検出した。抜き取り痕は両者とも深さ10cmを測る。諸施設：カマドの左右にはほぼ同じ規模の楕円形のピットが1個ずつあり、右側のピットからは遺物が出土した。床：地山を床とし、敲き締めの痕跡がみられた。硬度計の測定によれば西側半分が高い数値を示して



第64図　SB575実測図

いた。埋没：ＩＤ層に由来するにぶい黄褐色の砂質土でⅡＡ層質の粘土粒、白色砂、マンガン粒を混入した単一層である。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器、土師器が出土したが、その全体量は少ない。遺物は上層から床面にかけて出土したが、カマド周辺に集中する傾向がみられ、特に、カマド左右の落ち込みからの出土が顕著である。土師器の甕(10)は床面と覆土中位の遺物が接合し、覆土中の遺物についても住居址の廃棄時に近い遺物もかなり含んでいることを示唆する資料といえる。図示した遺物のうち、３・５・７を除いて一括投棄された遺物と判断したい。時期：５期に帰属する。

SB576　位置：北部Ｅ区　図版70、第65図

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出した。プランは一辺3.20ｍ前後の隅丸方形を呈するが、壁は直線的にならない。北西隅でSB557を切るが、覆土中の粘土の含有量の違いを根拠に決定した。カマド：東壁中央に位置する石組カマドで壁をわずかに掘り込んで構築していた。地山を一部掘り残した袖の遺存状況は悪いが、袖石の抜き取り痕が検出され、その付近には焼けた礫が散乱していた。床：ⅡＡ$_2$層の地山を床としていたが、中央に敲き締めた痕跡がある。埋没：ＩＤ層質の砂質土を基調とし、ⅡＡ層基質の粘土ブロック、焼土粒、炭化粒が混じる単一層で一気に埋没したと考えられる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、灰釉陶器、砥石がある。第65図で示したように遺物はカマド火床から南東隅にかけてと北東隅、さらに西側中央の３カ所に集中するが、このうち比較的床面に近い遺物はカマド焚口とその右側に多い傾向が認められる。時期：８期に帰属する。

SB577　位置：北部Ｅ区　図版70、第65図、PL25

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出したが、上層の多くが耕作により削平され、床面付近しか残存していなかった。検出面で中央に大きな礫が露出し、プランが不整形になることから住居址でないとも考えたが、最終

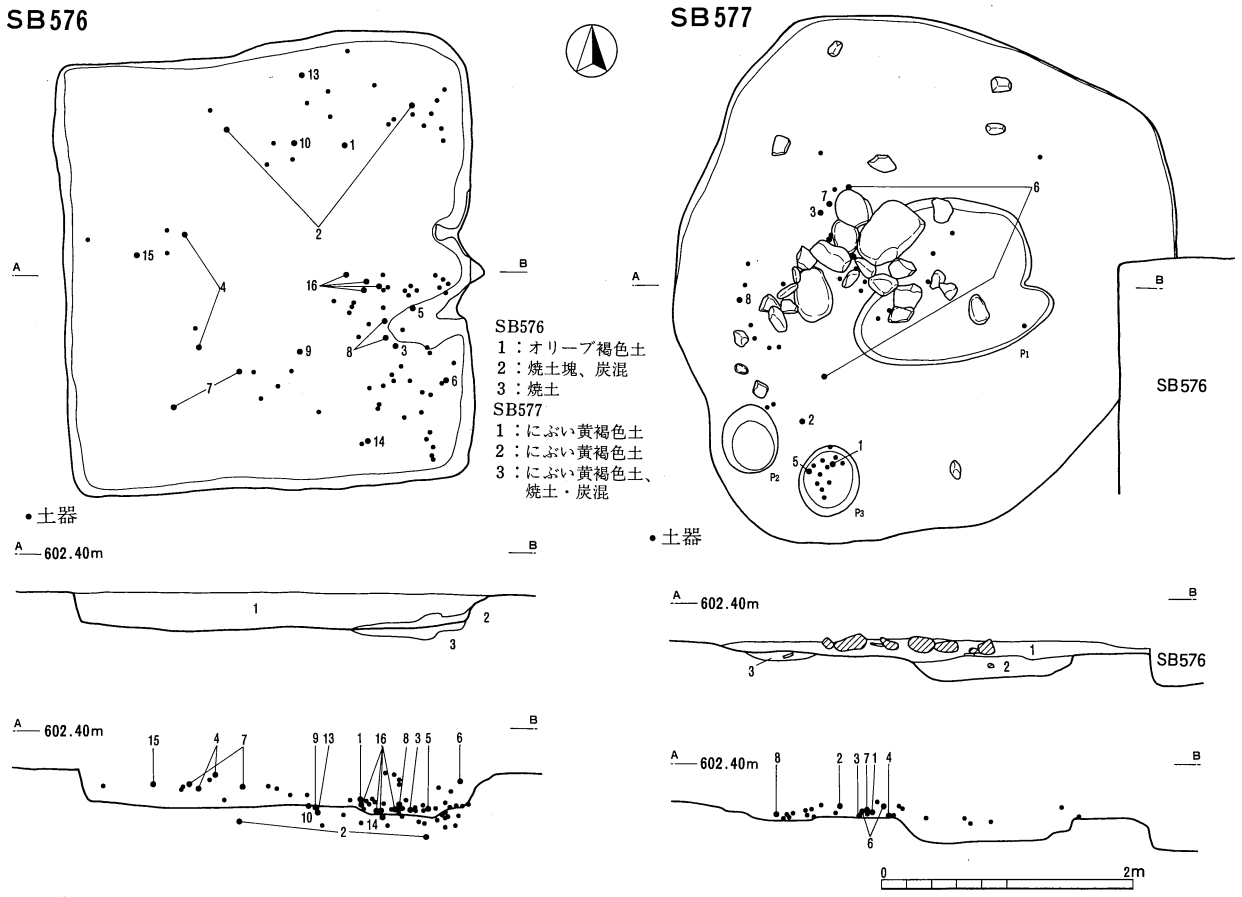


図65図　SB576・577実測図

的に遺物の構成から住居址と認定した。本址はSB576に切られ、SB578・602・ST553を切る。カマド：直接カマドと認定できる痕跡はみられないが、西側で焼土化した火床に似た箇所がある。床：小さな起伏のある地山を利用した床で中央のみ深く荒掘りしていた。床面にはカマドの袖の芯材に使用されるような大きな礫が中央から南西にかけてあり、住居址の廃絶の際に投棄された状況が窺えた。埋没：床面からわずかな部分しか残存しないため確定的でないが、IIA層に近似した粘土がブロック状に堆積しており、投棄された礫の状況などからも人為的な埋め戻しと思われる。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、黒色土器A、釘が出土したが、いずれも破片で出土する例が多い。その構成は食器が多く、煮炊具は非常に少ない。礫が投棄された状況と考え合わせ、遺物は一連の廃棄と関連して投棄されたものと推定できる。図示した遺物は床面から出土したものが多いが、西側に集中する傾向がみられる。時期：9期に帰属する。

SB578　位置：北部E区　図版70

検出：SB577の北側に位置する隅丸方形の住居址である。本址はSB577に切られ、SB602・ST553・554を切る。掘立柱建物址とは覆土が近似することから、その関係の決定は困難を窮めた。SB602とは本址のカマドが602の覆土中に切り込んで構築していたことを根拠にし、また、SB577とは覆土の質的な差や床面の状況から新旧関係を確定した。カマド：東壁中央に位置する石組カマドで、壁をわずかに掘り込んで構築していた。左右の袖には芯材が内側へ傾斜するように立てられた状態で残存していた。火床は狭い範囲で焼土化し、焚口付近には炭化粒が薄く広がっていた。床：IIA_2層の地山をそのまま床とするが、中央には敲き締めた痕跡がみらた。北東隅、南東隅、西壁中央寄りには炭化粒や焼土粒が薄く散布し、焼失住居址とは明らかに様相を異にするが、住居の廃絶の際何かを焼いたのか、あるいは焼けた痕跡として興味深い資料である。埋没：わずかな部分しか残存しないため詳細は不明だが、ＩＤ層質の細粒砂を基調にIIA_2層基質の粘土ブロックやマンガン粒を混入した単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、緑釉陶器、棒状鉄製品があるがその全体量はわずかである。床面遺物（1～3・5）はカマド右袖脇に集中する傾向がみられた。時期：10期に帰属する。

SB579　位置：北部E区　図版70

検出：重複関係が多い地点にあり、地山は南側のみが残存していた。一辺4.0m前後の隅丸方形の住居址である。西側でSB602に、南東隅でSB601に、東側ではSB580・609にそれぞれ切る。本址のカマドはSB580を掘り込んで構築しており、また、SB580を切る601や609とは覆土中の含有物の有無やその量を根拠に決定した。カマド：東壁中央に位置する。袖は全壊し、焼土粒や炭化粒が薄く広がる火床付近には割れた礫数個が散乱していた。床：地山を床としていたが敲き締めの痕跡があり、小さな起伏がみられる。埋没：覆土は2層に分層された。上層はＩＤ層類似の細粒砂を基調とし、粘土粒を混入していた。下層には焼土粒や炭化物が多量に混じり、人為的な埋没状況に近い。遺物の出土状況：土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄鏃、砥石がある。遺物は覆土、床面から出土しているが、床面遺物が多く、床面全体に分布する。投棄された礫が床面全体に散布する在り方と共通するもので、廃棄の一連の行為による遺物と推定できる。時期：10期に帰属する。

SB580　位置：北部E区　図版70

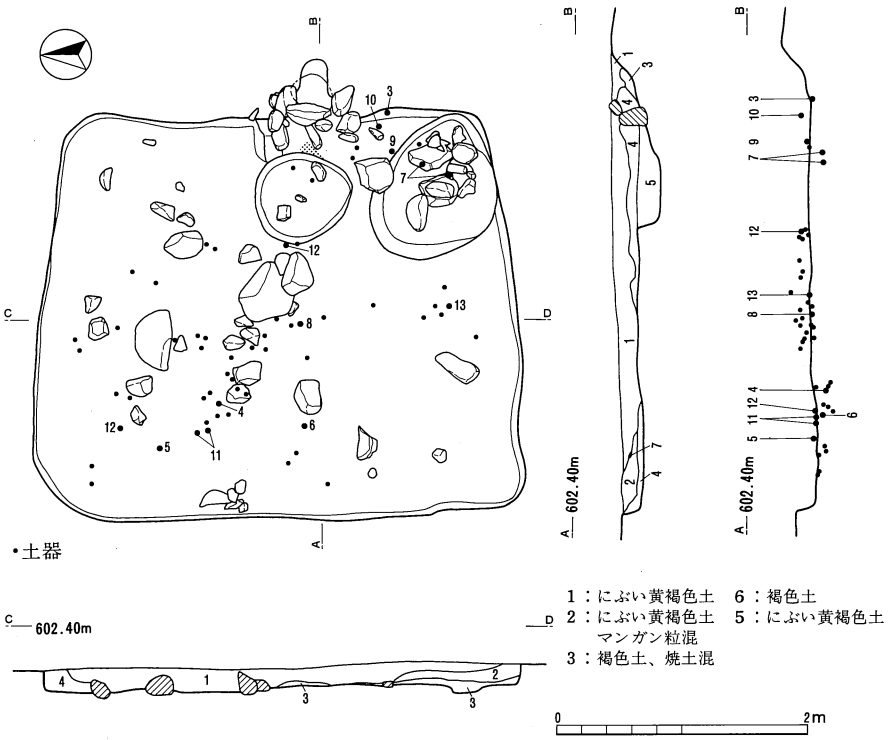
検出：SB579の東側に隣接し、SB579・601に切られ、SB581・609を切る。本址のカマドはSB581の覆土中に構築され、その関係については容易に確定した。カマド：東壁中央に位置するが、袖は遺存せず、火床は径25cmの範囲で炭化物や焼土粒が散布していた。煙道は長さ65cmを測り、側壁は焼土化していた。床：軟弱な床で南側が低い。埋没：にぶい黄褐色の砂質土で、炭化物や焼土粒を多量に含んでいた。遺物の出土状況：須恵器、土師器、刀子、鉄鏃があるがその全体量は少なく、図示した遺物のうち4・5は床面遺物である。時期：5期に帰属する。

SB581　位置：北部Ｅ区　図版70

検出：SB580の東側に位置する、一辺4.60ｍ前後の隅丸方形の住居址である。本址は西側でSB580に、北側で601に、また、SD530に南北方向に切られ、SB609を切る。SB601・SD530とは覆土の色調や質的な違いから新旧関係を決定した。カマド：東壁中央に位置し、壁を約40cm方形に掘り込んだ函形カマドである。袖の構造は不明だが、火床は焼土化していた。柱穴：主柱穴２基を検出した。柱穴は東列のみ確認したが、西列は検出できなかった。柱穴は長方形に近い掘り方で長軸50cm、短軸45cm程で、深さ37cmと一定で、柱間の寸法は1.46ｍを測る。床：平坦な床で地山を床としていた。周溝：東壁カマド右側に幅６cm、深さ４cmの周溝と南壁中央に幅10cm、深さ７cmの細い周溝である。埋没：オリーブ褐色土でⅡA_2層質の粘土粒、炭化物、焼土粒が混じる単一層である。遺物の出土状況：土師器、須恵器、刀子、棒状鉄製品がある。遺物は上層から床面にかけて出土したが、細片でその全体量は少ない。７はカマド火床から、１・６は南東隅のピットからの出土である。時期：３期に帰属する。

SB582　位置：北部Ｅ区　図版70、第66図、PL26

検出：ⅡA_2層上位で検出したが、プランは鮮明で容易に検出できた。本址は南西隅でSB573を、北西でSB601でそれぞれ切るが、覆土の色調や混入物の違いを根拠に確定した。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んだ石組カマドである。右袖は一部崩れるが、左袖は礫2個が原位置を保って遺存し、花崗岩を使用した天井石も架設した状態で残っていた。カマド右側、南東隅には120×95cmの不整形のピットがあり、10個程の礫が入っていた。床：ⅡA_2層の地山を床とし、小さな起伏がある。床面全体に花崗岩を中心に焼けた50個程の礫があり、割れた礫が70％を占めていた。埋没：ＩＤ層の細粒砂を基調とし、マンガン粒や細礫が混じる単一層で、礫を投棄した後、自然に埋没した可能性が強い。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、須恵器、土錘がある。遺物は上層から床面にかけて出土したが、床面に近い遺物が多く、住居址全体から出土している(３～13)。投棄された礫と同様に、遺物も投棄された可能性が強く、須恵器の甕Ｄ(13)の接合関係や煮炊具、貯蔵具が破片で住居址全体に散乱する状況はそれを物語る資料として興味深い。時期：９期に帰属する。



第66図　SB582実測図

SB583　位置：北部Ｅ区　図版71

検出：Ｅ区の住居址が密集した区域の北側に位置する単独の住居址で、南側から北側にかけて上層が削平されていた。プランは不整形であったために数軒の重複関係も考えたが、トレンチ精査で、覆土の状況を観察した結果、１軒の住居址と判断した。カマド：北壁北東隅寄りに位置し、煙出しが残る。袖の遺存

状況は悪いが、一部地山を掘り残して構築する様子が観察された。火床には焼土粒や炭化粒が薄く堆積していたが明瞭な火床ではない。床：地山を床とし、小さな凹凸がある。テラス：北西隅から南西隅にかけて二段のテラスがあり、地山を掘り残して構築していた。テラスの幅は南側が広いが、西側は10cmの段差があり狭い。埋没：覆土は２層に分層された。基調となる土はＩＤ層に由来する砂質土で、下層にはⅡＡ層の粘土ブロックが多量に混じることから明瞭に分かれた。上層の埋没状況については判断できなかったが、下層は人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、白磁、刀子などがある。遺物は上層から床面にかけて出土したが、床面遺物（1・3・14）はカマド周辺に集中する傾向はあるものの出土量は少ない。時期：10期に帰属する。

SB586　位置：北部Ｅ区　図版68

検出：SB607の検出の項でも述べるが、本址の認定は整理の段階で認定している。本址付近の上層の多くは耕作によって削平されており、床面までわずかしか残存しないため、SB607の調査時には本址の存在に気が付かずに掘り下げている。しかし、遺物の出土状況やカマドと思われる痕跡が追証されたことから本址を認定することとした。以上の理由により、本址の埋没状況や施設などの詳細は不明だが、プランはSB607の覆土中に構築され、床面のレベルも大きく違わないと予想される。カマド：北壁北東隅に位置していたと推定される。壁がわずかに張り出し、焼土粒が散在し、遺物が集中していた。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、軟質須恵器、土師器、刀子、棒状鉄製品があるが、土器は１を除いて北東隅に集中していた。時期：７期に帰属する。

SB587　位置：北部Ｅ区　図版67

検出：ⅡＡ$_2$層で検出するが、住居址の上層は耕作により削平されており、また、北西、南西隅の多くも失っていた。プラン全体は不鮮明で、残存する部分から推定すると一辺3.0ｍ前後の小型の隅丸方形の住居址となろう。カマド：西壁中央に位置するが、壁を掘り込んで構築する状況が観察できた以外、詳細は不明である。床：地山の礫層間を埋めるように粘土を薄く入れた床で、小さな起伏が認められた。埋没：床面付近しか残存しないため十分観察できなかった。遺物の出土状況：黒色土器Ａがあるが、その全体量は窮めて少ない。時期：８期に帰属する。

SB588　位置：北部Ｅ区　図版67

検出：SB587の東側に隣接する住居址で北東隅でSB589に切られる。当初、本址がSB589と重複することに気が付かず、本址を掘り下げた際SB589のプランが本址に向かって延びる状況から再検出して新旧関係を確定した。本址は小型の住居址のなかでも、一辺2.70ｍ前後とかなり小さい。カマド：原形を止めていないが、西壁中央に焼土粒が集中する箇所が観察され、遺物もそこに集中する状況からカマドのあった位置と推定される。床：堅緻な床は認められず、小さな起伏のあるⅡＡ$_2$層の地山を床としていた。埋没：にぶい黄褐色のＩＤ層基質の砂質土を主体とし、マンガン粒や酸化鉄分が混じる単一層で、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、軟質須恵器、灰釉陶器があるが、遺物の多くは床面のカマド周辺に集中して出土した（1～7）。住居を廃絶する際、一括投棄した可能性が高い。時期：８期に帰属する。

SB589　位置：北部Ｅ区　図版67、PL26）

検出：SB588で前述したように、方形に近いと考えたプランは南西にあるSB588と重複し、本址が切ると判断した。また、北東隅でもSB590をわずかに切っていた。東西の壁は直線的にならないが、壁の崩れもないことから本来の形状と思われる。カマド：西壁中央やや北寄りに位置する石組カマドで、袖や天井の一部が崩壊していたが、比較的遺存状況は良い。左右の袖の芯には、割って整形した花崗岩を４～５個、奥壁に近い方から大きな石を列状に並べて構築していた。火床は余り明瞭ではないが、大きな平石が焚口付近にみられ、天井石が崩落したものと推定された。床：地山をそのまま床とし、全体的に軟弱である。埋

没：覆土は黄褐色の細粒砂を主体とし、マンガン粒、炭化粒、焼土粒を含む単一層で、人為的な埋没状況を呈していた。また、上層から床面にかけてカマド付近を中心にカマドの芯材と思われる礫が投棄されていた。遺物の出土状況：土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製紡錘車がある。遺物は上層から床面にかけて出土したが、特に、カマド周辺に多い。１・３・11・12はカマド火床から、４・６・７・10は床面付近から出土した。時期：９期に帰属する。

SB590　位置：北部Ｅ区　図版69

検出：SB588からSB592にかけて５軒の住居址が斜めに重複しあう、そのほぼ中央に位置していた隅丸長方形の住居址である。南西隅でSB589を切り、SB591とSK1312に切られる。カマド：西壁中央に位置する函形カマドである。掘り込まれた側壁には粘土が数度にわたって補修した痕跡がみられ、奥壁とともに焼土化していた。火床には焼土が堆積し、焚口には焼土粒や炭化粒が散布していた。床：地山を床とするが、中央がわずかに高い。埋没：地山に由来すると思われる細礫を多量に含む砂質土を基調とする単一層で粘土粒を混入していた。遺物の出土状況：須恵器、土師器があるが、全体量は少ない。床面遺物(１～４)のうち、１は南西隅から完形で出土し、他はカマド周辺の遺物である。時期：５期に帰属する。

SB591　位置：北部Ｅ区　図版69

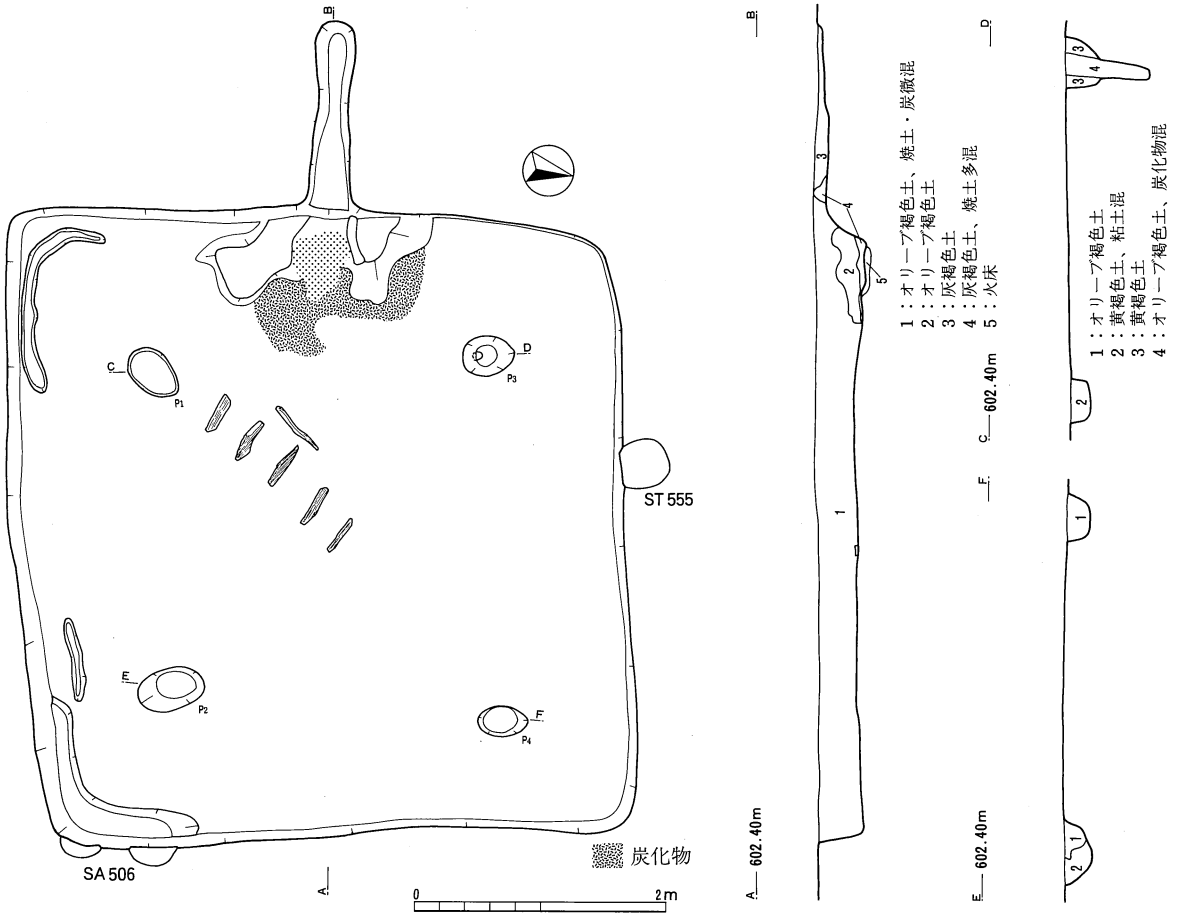
検出：IIA_2層で検出したが、住居址の上層はすでに削平されており、検出面から床面まで20cm程しか残存していない。本址は南側でSB590を、北側でSB592を切り、さらに、ST580・SK1306も切っていた。カマド：北壁中央やや北寄りに位置する石組カマドで、壁をわずかに掘り込んで構築していた。左袖は全壊しているが、右袖の芯材はほぼ原形を止め、袖石は人頭大の礫を３個並べていた。火床は２cmの厚さで焼土化し、その上には焼土塊が堆積していた。床：明瞭な敲き締めの痕跡は認められず、軟弱な地山床である。埋没：黄褐色の粗粒砂を主体に酸化した鉄分、炭化粒、焼土粒を含む単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、鎌などの鉄製品３点がある。遺物は上層から床面にかけて出土したが、床面に多い（１～４・６・７・８・10～14)。床面遺物はカマド周辺に集中する傾向はみられるが、全体に散乱していた。時期：９期に帰属する。

SB592　位置：北部Ｅ区　図版69

検出：SB591の北東に位置し、プランは明瞭に検出できた。本址はSB591に切られ、ST580を切る。ST580とは本址の床面を剥いだ際、柱穴が検出できたことを根拠に確定した。カマド：東壁中央に位置する函形カマドであるが、袖の構造を知るような残存状況でない。火床は壁を掘り込み、その中央の狭い範囲に焼土が厚く堆積していた。煙道は火床から緩やかな傾斜で延びていた。カマド右側にあるピットはカマドの付属施設と考えられる。床：地山をそのまま床としていたが、軟弱である。埋没：にぶい黄褐色の粗粒砂を主体とし、細礫が混じる単一層である。部分的にブロック状の粘土が観察されたことから人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：須恵器、土師器があるが、遺物は床面に多く（１・４～８)、カマド火床とその右側のピット（７）に集中する傾向がみられた。また、刀子が３点があるが、西側付近でいずれも床面から若干浮いて出土した。時期：１期に帰属する。

SB593　位置：北部Ｅ区　図版68、第67図、PL26

検出：IIA_2層上位で検出する。覆土と地山の区別は明瞭で検出は容易であった。本址はSB594,ST550,SK1107～1111に切られる。ST550とは本址の覆土中に柱穴が検出できたことから、また、土坑とは覆土の色調から面的に新旧関係を確定した。プランは隅丸方形ではあるが、南壁がわずかに長い。カマド：西壁中央に位置するが、右袖の一部を除いて破壊が進行しており、礫の使用などの状況は不明である。右袖付近で抜き取り痕が観察されたが、使用されたと思われる礫は住居址内には存在しない。火床は焼土化し、その周囲には炭化物が広がっていた。煙道口は火床から高さ25cmの位置にあり、ほぼ水平に延びていた。



第67図　SB593実測図

煙道の長さは1.50ｍとかなり長い。柱穴：主柱穴４基がある。北側列がわずかに長いが整然とした配置状況を呈していた。なお、北西の柱穴では径16㎝、深さ65㎝の柱痕が観察された。床：ほぼ水平な床で部分的に敲き締めた痕跡がある。中央から南西の柱穴方向にかけては、長さ35㎝、幅５～７㎝の板状炭化材が20～30㎝の間隔をもって平行に並んだ状態で検出された。屋根材の一部の可能性が強い。周溝：南東、南西隅に幅10～20㎝、深さ４～10㎝の周溝があり、南西隅にある周溝が細くて浅い状況を呈していた。埋没：オリーブ褐色のＩＤ層由来の細粒砂を主体に、ⅡＡ層の粘土ブロックが多量に観察された。人為的な埋没状況に近い。遺物の出土状況：遺物はきわめて少なく、図示し得なかった。時期：１期に帰属する。

SB594　　位置：北部Ｅ区　　図版68

検出：西側でSB593を切り、東側でSB595に切られる。プランは隅丸長方形で、比較的小型の住居址である。SB595とは本址のカマドの一部が破壊されていることを根拠として新旧関係を確定した。カマド：東壁中央やや南寄りに位置する。SB595によって半分以上撹乱を受けるために全体像は把握できない。ほぼ原形で遺存する左袖から判断すると、粘土を主体に補助的に石を使用した可能性が強い。床：全体的に軟弱であるが、ⅡＡ層基質の粘土を入れて整地していた。埋没：ＩＤ層質の細粒砂を主体とする褐色土で、ⅡＡ$_2$層質の粘土ブロックが多量に混じる単一層であり、人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：遺物の出土量は少なく、いずれも細片である。時期：８期に帰属する。

SB595　　位置：北部Ｅ区　　図版68

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。灰色の土がブロック状に入るため、プランは明瞭である。本址は西側のSB594を切り、北東付近でSB596を切る。SB596とは覆土中の粘土ブロックの違いから面的に確定した。カ

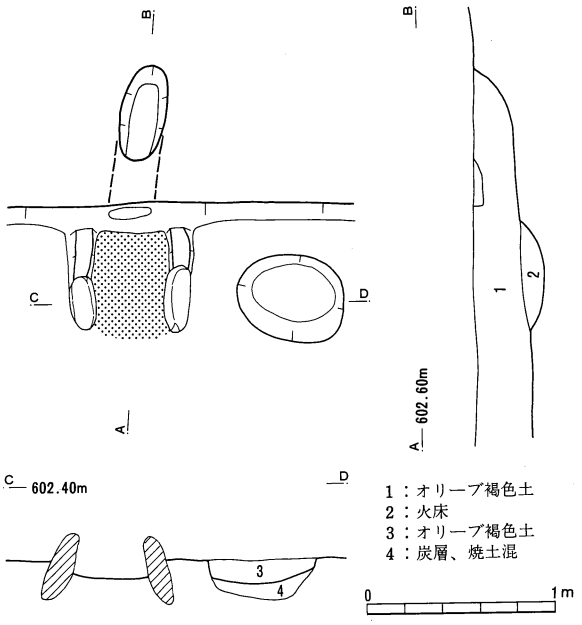
マド：東壁中央やや南寄りに位置するが袖は原形を止めない。わずかに焼土化した火床と構築材と思われる礫２個を確認できた。床：地山を床としていたが、カマドから中央にかけて薄く炭化物が広がり、中央付近がわずかに高い。西壁南西隅寄りの壁は階段状になり、根拠は弱いが入り口部の痕跡の可能性がある。埋没：西側で２層に分層されたが、基本的に単一層とみていいだろう。ＩＤ層質の褐色土層を基調とし、炭化粒、焼土粒を混在する。人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、土錘があり、遺物は上層から床面にかけて出土した。床面遺物（1～3・6～11・12・14・17）はカマド焚口と右側に集中する傾向がみられ、１・３・11は完形に近い。土錘は上層からの出土で混入品と思われる。時期：９期に帰属する。

SB596　位置：北部Ｅ区　図版68

検出：住居址の大半をSB595に切られるが、残存する部分から比較的小型の隅丸方形の住居址と推定できる。本址はST556を北側で切るが、556の覆土には焼土粒や炭化物を混入していたことから容易に確定できた。カマド：明確にその位置を確認することはできなっかった。東壁寄りに焼土ブロックが集中して堆積している箇所があるが、埋没する過程で混入したもので火床とは異なる。床：全体に軟弱で、特に、敲き締めたような痕跡はない。埋没：覆土は粗粒砂を基調とするにぶい黄褐色で、ⅡＡ$_2$層質の粘土ブロックが混入し、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：灰釉陶器があるが、図示できたのは1のみで遺物はきわめて少ない。時期：８期に帰属する。

SB597　位置：北部Ｅ区　図版69、第68図、PL26

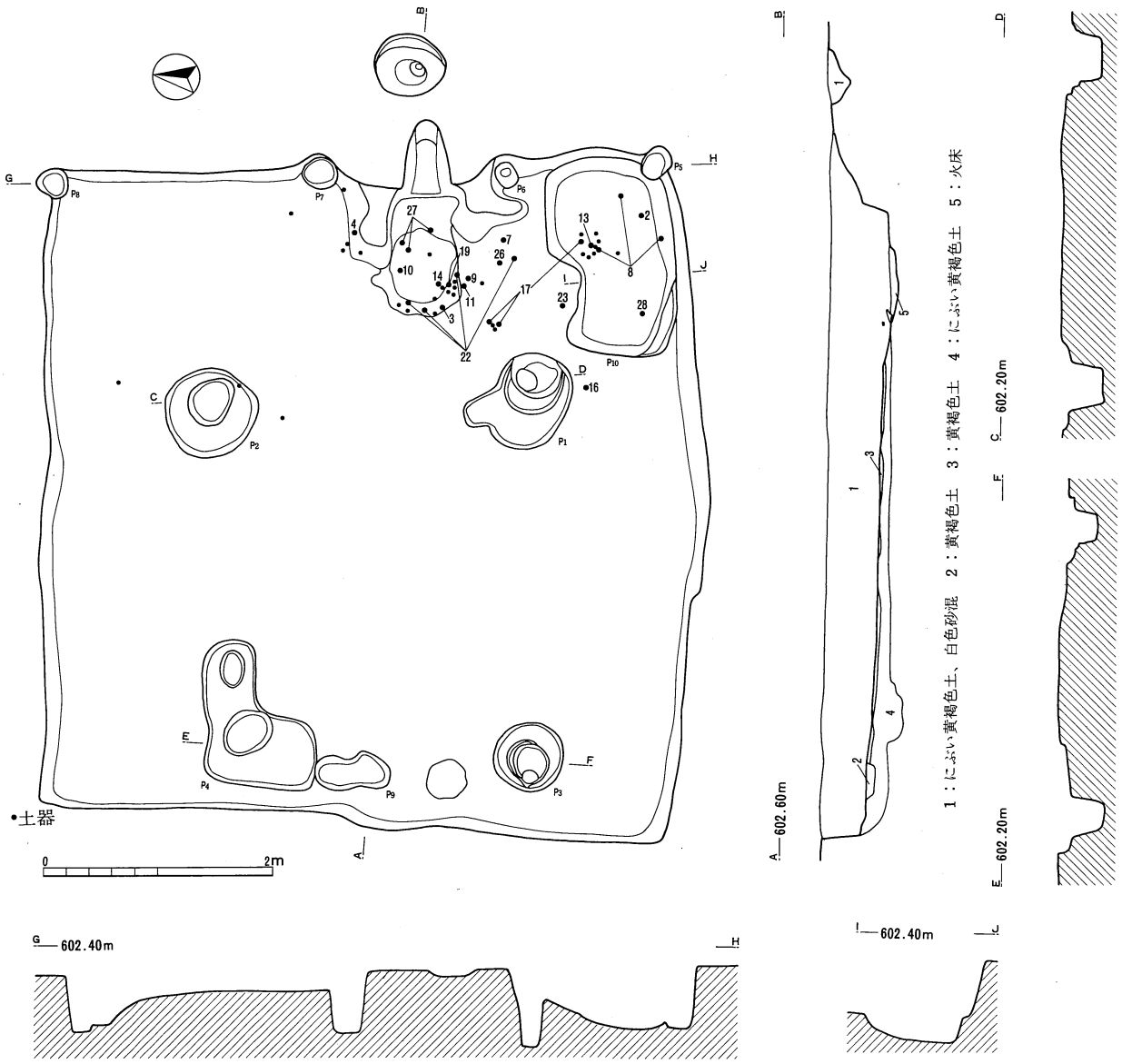
検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。本址はSB598・599を含めて３軒の住居址が重複する地点にあり、プランの確定は困難を窮めた。本址はSB598・599を切るが、598とは覆土中の砂の混入状況から、また、599とは本址が599のカマドの一部を破壊することを根拠に確定した。プランは主軸方向が35cm程長い隅丸長方形である。カマド：西壁中央に位置する石組カマドで遺存状況は良好である。袖の先端には花崗岩１個ずつを内側へ傾斜して固定させ、粘土で固めていた。火床には焼土粒が散布し、長さ70cmを測る煙道はトンネル状に掘り抜いて構築し、緩やかな傾斜で延びていた。カマド右側には60×45cmの楕円形のピットがあり、付属する施設と思われる。床：地山を床とし、敲き締めた痕跡が認められた。埋没：ＩＤ層基質の粗粒砂を主体とし、細礫、粘土粒が全体に散る単一層で、北壁のみⅡＡ層質の粘土がブロック状に堆積していた。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、須恵器、刀子があるが、床面遺物はわずかで東側の覆土中から破片で出土するものが多い。床面遺物の１はカマド火床から完形で、２はカマド右側のピットから出土しており本址に帰属する可能性が強い。時期：９期に帰属する。



第68図　SB597カマド実測図

SB598　位置：北部Ｅ区　図版69、第69図、PL27

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出したが、プランは容易に確定できた。本址はSB597に切られ、SB599を切る。SB599とは覆土中の黄色の粘土ブロックの含有量の違いから切り分けることができた。プランは一辺5.50ｍ前後の隅丸方形の住居址で、東壁は部分的に張り出していた。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドで、袖はすでに壊滅していた。煙道先には62×52cmの円形



第69図　SB598実測図

の大きな煙出しピットがあり、皿状に凹んでいる。また、カマド右側には170×110cmのピットがあり、焼土粒や炭化物を含むことからカマドに付属する施設と思われる。柱穴：主柱穴4基と東壁に壁に食い込むような補助柱穴を検出した。主柱穴は全体的に西側に寄って配置し、大きな掘り方で深さは24～36cmとほぼ一定である。柱間の寸法は主軸方向が50～75cmと長い。東壁にある４つの柱穴は径30cm程の円形の掘り方で、検出面から50～77cmの深さを測る。柱間はＰ７－Ｐ８の間隔が広い以外は一定の寸法である。床：全面にⅡＡ層質の土を入れて整地し、敲き締めていた。荒掘りは中央部を高く残し、壁際を幅50～100cm、深さ10cmで掘り込んでいた。埋没：ＩＤ層質の粗粒砂を主体とする単一層で、白色砂、炭化粒、焼土粒が少量混在する。遺物の出土状況：土師器、須恵器、黒色土器Ａ、刀子がある。図示した遺物は10を除きいずれも床面遺物である。遺物はカマド火床や南東隅のピットに集中する傾向が顕著で、１・８・９・17・22はほぼ完形に近い状態で出土したこともあり、住居の廃絶に際し、使用していたものを一括廃棄した可能性が強い。時期：７期に帰属する。

SB599　　位置：北部Ｅ区　　図版69

検出：SB597・598に住居址の大半を切られるため、北東隅のみが残存していた。カマド：西壁に位置するが、左袖をSB597に大きく切られていた。壁をわずかに掘り込んで構築していたが、遺存状況は悪く右袖

には袖石の抜き取り痕が観察された。火床は焼土粒が集中する程度である。床：地山をそのまま床としていた。埋没：ＩＤ層を基調とする粗粒砂を主体とし、粘土粒や焼土粒をわずかに含む単一層である。遺物の出土状況：土師器の煮炊具があるが、遺物は覆土中、床面とも少ない。２・３は床面遺物で3はカマド右側から出土し、残存率も高い。時期：５期に帰属する。

SB600　位置：北部Ｅ区　図版68、PL27

検出：住居址の中央を南北方向に走るSD524に切られる、7.00×6.50ｍの大型住居址である。周囲の住居との重複関係が特に激しく、地山はわずかにカマド付近にみられただけで検出は難しかった。SD524の東側でSB555・605・606・608に切られ、西側でSB565に切られ、SB566・ST556を切っていた。まず最初にSB605の覆土が特徴的であったことからそのプランは容易に確定でき、続いてSB606・608の床面の状況から本址との関係を決定した。また、ST566とは覆土の質的な違いを根拠とした。カマド：西壁中央に位置する粘土カマドである。袖は崩れていて原形を止めないが、火床は床面からわずかに掘り込んで構築し、焼土が堆積していた。また、火床の中央で30×20cm、深さ６cmの支脚石の痕跡が検出された。柱穴：主柱穴４基を確認した。柱穴の掘り方は不整形を呈し、その規模は64～116cmと一定でなく、深さも20～72cmと一様でない。西側列の柱穴では柱痕が観察された。柱間の寸法は住居址の規模と関連するためであろうか、主軸方向が約40cm長い。床：地山をそのまま床とし、ほぼ平坦である。東側には３つのピットが集中していた。埋没：ＩＩA_1層基質の粘土を主体とする単一層で、明らかに人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、須恵器がある。床面遺物（３～５・８・９）は西側に多い傾向がみられたが、カマド火床（５）や南東隅にかけても（４・８）出土したが、いずれも残存率は低い。時期：５期に帰属する。

SB601　位置：北部Ｅ区　図版70

検出：ＩＩA_2層上位で検出する。北側でSB579・580に切られ、SB581・582・SK1375・1377を切る。土坑との関係は本址の床面精査の際に検出できたことを根拠とした。なお、カマドは重複関係のためにその痕跡は認められない。床：壁際にＩＩA_2層基質の土を入れて整地していたが、全体的に軟弱な床である。埋没：褐色の粘土を主体とし、細粒砂が混じる単一層である。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、須恵器があるが、遺物の全体量は少ない。図示した遺物のうち４が床面から出土した以外はいずれも覆土中の遺物である。時期：８期に帰属する。

SB602　位置：北部Ｅ区　図版70

検出：当初から本址の覆土と北壁、南壁にある地山とは容易に識別され、住居址の存在が予想されたが、最終的にSB578と579の調査終了後にプランが確定できた。本址はSB578～579に切られる、隅丸方形の住居址である。カマド：西壁中央に位置し、壁を方形に掘り込む函形カマドである。袖付近には崩れた粘土と袖石の抜き取り痕を確認した以外は構造を把握できる状況でない。柱穴：住居址の規模が小さいためか、四隅に主柱穴４基がある。柱穴の掘り方は楕円形を基本とするが、深さは10～19cmとそれ程深くない。柱間の寸法も住居の規模と同様に、主軸方向が短い。床：全面にＩＩＡ層基質の土を入れて整地している。硬度計は東側中央付近が硬い傾向を示していた。埋没：ＩＩＡ層由来の粘土を基調とするにぶい黄褐色土で、焼土粒や炭化物をわずかに混入する単一層で、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、須恵器がある。床面遺物（２・４・５）は少なく、床全体から出土している。４・５はカマド火床から出土した遺物である。なお、３・４は完形に近い。時期：５期に帰属する。

SB604　位置：北部Ｅ区　図版67

検出：Ｅ区のほぼ中央に位置する住居址で、検出は容易にできた。ST555と重複するが、本址の覆土中にST555の柱穴を確認したことから本址が切られることを確定した。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドで、袖はすでに崩れていた。火床には焼土ブロックが堆積し、床からわずかに掘り込んでいた。煙道口

は低い位置にあり、そこからほぼ水平に延び、煙道の長さ1.05ｍを測る。床：全体的には地山を床としているが、部分的に貼り床がある。硬度計の測定ではカマド手前から南壁中央にかけてが、高い数値を示していた。埋没：ＩＤ層質の砂を主体とし、粘土ブロック、細礫、焼土粒、炭化物を含む単一層である。遺物の出土状況：遺物は極めて少なく、図示できなかった。時期：１期に帰属する。

SB605　　位置：北部Ｅ区　　図版68

検出：周囲には地山の残っている部分がなかったが、一連の重複する住居址の中で覆土が黒色を帯びていたことから、ほかとは明瞭に区別された。西側でSD524に切られ、SB600・606・607を切る。西壁を失うためプランの全容は不明だが、おそらく主軸方向がわずかに長い隅丸長方形になると予想される。カマド：西壁中央に位置するが、火床が厚く焼土化していた以外は構造を把握できる状態でなく、袖は壊滅していた。カマド右側には覆土中に焼土粒を含むピットがあり、カマドとの関連性が強い。床：全面軟弱な床で、地山をそのまま利用していた。周溝：北壁に幅30㎝、深さ9㎝の周溝が長さ2.4ｍにわたって検出された。埋没：灰褐色の粘質な覆土で、マンガン粒の集積が観察される単一層である。人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、灰釉陶器の食器が多い。遺物は上層から床面にかけて破片で出土した。床面遺物（１・２・６～８）は床全体にひろがり１・７・８は完形に近い。鉄製紡錘車１点がカマド火床から出土したが、住居の廃絶時に投棄された可能性が強い。時期：８期に帰属する。

SB606　　位置：北部Ｅ区　　図版68

検出：南側に隣接するSB555の覆土と近似しており、SB605の調査後にプランを確定した。煙道先が壁に食い込んでいたために、その箇所を拡張して調査した。本址はSB605に切られ、SB600・607・608を切る。SB607・608とはトレンチを入れて、覆土の堆積状況から判断した。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築していた。左袖の一部が残存していた以外は壊滅しているが、袖石の抜き取り痕や袖付近に散乱する焼けた花崗岩などから石組カマドであったと思われる。煙道口は火床から35㎝の位置にあり、30度の傾斜で煙出しへ向かって延びていたが、煙出しは少なくともＩＤＣ層上面では確認できた。カマド右側、南東隅にある62×56㎝の円形のピットは焼土ブロックを多量に含み、カマドに付属する施設と思われる。床：ⅡＡ$_2$層の土を入れて整地するが全体的に軟弱である。テラス：北東隅から北壁に沿って最大幅1.4ｍのテラスがある。ⅡＡ$_2$層の土を床面から10㎝程高く入れて構築していた。埋没：２層に分層されたが、カマドの破壊行為によって下層が東壁にのみ堆積し、その後、灰褐色の上層が覆う。上層は全体的に砂質を帯び、焼土粒、炭化粒を混在する人為的な埋没である。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、軟質須恵器、灰釉陶器、土師器、砥石がある。遺物は床面に多く（２・３・５・８・10～13・15～18）、特に東側に集中する様相がみられ、２・６・11・12・15はほぼ完形に近い。カマド付近には土師器の煮炊具（15・17・18）が破片で散乱していた。また、南東隅付近から大きな砥石が出土しているが、床面から約10㎝程浮いており、本址に帰属する遺物なのか明瞭でない。時期：８期に帰属する。

SB607　　位置：北部Ｅ区　　図版68

検出：北壁と東壁に地山が残るが、北東隅のプランが最後まで不鮮明だった。なお、整理の段階で北東隅付近の遺物の出土状況や北壁にカマドの痕跡と思われる箇所があることから、別の住居址が存在することが予想され、本址を切るSB640を認定した。だが、SB640のプランが明瞭でないことから本址との関係については十分な所見が得られていない。本址は西側でSD524に切られ、南側でSB605・606に切られる。カマド：東壁中央に位置し、壁をわずかに掘り込んで構築するが、袖の遺存状況は悪く、火床も焼土が散見できる程度である。床：地山を床としており小さな起伏が認められた。埋没：床面からわずかしか残存しないが、細粒砂とⅡＡ$_2$層基質の粘土の混合した覆土で米粒大の礫が混じっていた。遺物の出土状況：土師器があるが、遺物は少ない。図示した遺物のうち３が床面から出土した以外は覆土中の遺物であるが、５

は完形に近い状態で出土した。時期：１期に帰属する。

SB608　位置：北部Ｅ区　図版68

検出：北側にあるSB606によって住居址の大半を失うために、南壁付近しか残存していない。本址はSB606に切られ、SB600を切る。床：地山をそのまま床としているため、明瞭な堅緻な床でない。埋没：IIA_1層を基調とする単一層で人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：遺物の出土量は極めて少なく、細片のため図示できなかった。時期：５～７期の間と考えられる。

SB609　位置：北部Ｅ区　図版68、PL27

検出：IIA_2層上位で検出する。北東隅に地山が残っていた以外はほかの住居址との重複が激しく、最終的なプランの決定はSB580・581・610・611の調査終了後で確定した。一辺4.70ｍの隅丸方形のプランで、唯一SB613を切っていた。カマド：西壁中央に位置するが、その大半はSB580によって失うため右袖の一部のみが残存していた。火床は50×60cmの範囲で焼土化し、その周囲には焼土粒や炭化粒が散布していた。柱穴：主柱穴４基が整然とした配置で並ぶ。柱穴の掘り方は不整形で、深さ42～46cmを測る。すべての柱穴で柱痕が観察されたが、柱痕は径20cmの規模で、底面中央には建物の自重の沈下を示すものと考えられる凹みがみられた。柱間の寸法は主軸方向が2.40ｍ前後、それと直交する間隔は2.20ｍ前後と主軸方向がわずかに長い。床：平坦な床で地山を敲き締めていた。硬度計の測定では中央とカマド右側が比較的硬い傾向を示していた。周溝：カマド部分を除き断続的に幅14cm、深さ５～８cmの周溝がある。埋没：褐色の粘質な土でIIＡ層に由来する単一層で、ブロック状の堆積状況であることから人為的な埋没状況と判断できた。遺物の出土状況：土師器を中心として出土したが、その全体量は少ない。図示した遺物は床面から出土したもので、東壁中央に集中する傾向がみられるものの、床面全体に散布していた。時期：２期に帰属する。

SB610　位置：北部Ｅ区　図版70

検出：IIA_2層上位で検出したが、住居の北側と上層の一部が削平されていた。本址はSK1351・1352・1378に切られ、SB609・611を切る。当初、覆土が近似することから新旧関係を確定できずにいたが、トレンチを入れて本址の床面がSB609や611の覆土中に確認したことで切り分けた。カマド：東壁中央に位置するが原形を止めず、焼土が集中する火床のみ確認できた。火床の周辺には袖の芯材に使用したと思われる礫が散乱し、石を組んで袖を構築した可能性がある。床：中央がやや高い、小さな起伏のある床で地山をそのまま床としていた。埋没：IIＡ層質のにぶい黄褐色の粘土を主体に炭化物、焼土粒が混じる単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、須恵器がある。遺物は上層から床面にかけて出土しているが、床面遺物は多くない。４・６・10・11はカマド火床から、７はカマド右側にあるピットからそれぞれ出土したがいずれも破片である。時期：８期に帰属する。

SB611　位置：北部Ｅ区　図版70

検出：SB610に北側の大部分を切られるため、南壁付近のわずかな部分しか残存していない。本址はSB609・613を切る。重複関係が激しくプランの確定は困難を窮めたが、床面の状況や覆土の断面観察によって新旧関係を確定した。床：地山をそのまま床とする。南西、南東隅には大きな礫が数個集中しており、住居の廃棄に関連した礫と予想された。埋没：明茶褐色の砂質土を主体とする単一層である。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、刀子があるがその全体量は少なく、細片での出土がほとんどである。時期：９期に帰属する。

SB612　位置：北部Ｅ区　図版70

検出：IIA_2層上位で検出するが、北側は耕作により撹乱を受けていた。検出面から床面まで20cm程しか残存していない。本址はST553を切り、SK1304・1305に切られる。土坑とは検出面で容易に識別された

が、ST553は本址の床面で柱穴を検出できたことを根拠とした。カマド：西壁に位置し、壁を丸く掘り込んで構築する函形カマドである。左袖の一部のみ遺存するが、構造の詳細は不明である。火床には焼土粒と炭化物が堆積していた。床：IIA_2層の地山をそのまま床としていたが、軟弱な床である。埋没：IIA層基質の粘土がブロック状に堆積する、人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器A、軟質須恵器があるが、遺物はカマド火床内と南西隅の落ち込みに集中し(2～7)、いずれも床面から出土した。時期：8期に帰属する。

SB613　位置：北部E区　図版70

検出：IIA_2層上位の検出面で焼土が直線状に認められ、当初からカマドの奥壁に相当すると予想されていたが、周辺の住居址との重複が多くプランは確定できなかった。最終的にほかの住居址に切られ残ったカマドのみが確認された。本址はSB580・609・611・SK1100に切られる。カマド：土坑に切られることもあり、構造などの詳細は不明で焼土化した火床のみ確認した。埋没：基本的に単一層とみてよく、炭化物と焼土粒を含むにぶい黄褐色土層である。遺物の出土状況：遺物はカマド火床に骨片があったのみである。時期：遺構の重複関係やその配置から8期前後と思われる。

SB614　位置：北部E区　図版68

検出：IIA_2層上位で検出する。3.90×3.45mの規模で、東壁の中央がわずかに張り出す隅丸方形の住居址である。本址はST556を南壁付近で切る。カマド東壁の中央やや南寄りに構築されていたが、袖の芯材の礫2個と火床の一部が残存するほかは、後世の撹乱を受けることもあり詳細な構造は分からなかった。諸施設：カマド右側に64×46cmの不整形の落ち込みがあり、覆土中に焼土粒や炭化物を含んでいたことから灰溜めと思われる。床：全体的に軟弱で、地山をそのまま床としていた。埋没：カマド付近では分層できたが、基本的にオリーブ褐色土の単一層で焼土粒や炭化物の混入がみられた。住居址のほぼ中央には花崗岩8個が集中していたが、いずれも床面から浮いた状態であることから住居址の廃絶後に投棄されたものと推定される。これらの礫のなかには割れた石も含まれ、カマドの構築材の可能性もある。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器があるが、遺物は床面からほとんど出土せず、カマド火床（1・3・6）とその右側の施設からわずかに出土したのみである。時期：8期に帰属する。

SB615　位置：北部E区　図版66

検出：IIA_2層上位で検出した。当初、北側のSB555の一部と考えていたが、覆土の状況から本址の存在を確認し、SB555に切られる本址のプランを確定した。床：軟弱な床で、床全体に黄褐色砂を入れて整地していた。埋没：ID層基質の灰褐色砂質土の単一層で、地山に由来する黄褐色の粘土粒を混在することから人為的な埋没と判断できた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Aがあるが、遺物は床面からほとんど出土せず、図示した遺物は覆土中の遺物である。時期：8期に帰属する。

SB616　位置：北部E区　図版71

検出：IIA_2層上位で検出する。プランは鮮明で東側をSD524に切られるため、西側のにみ残存する。本址はSB617を切るが、覆土の色調差から面的に確定できた。床：壁際を深く荒掘りし整地するが、中央付近は地山をそのまま床としていた。全体的に軟弱である。埋没：白色砂、マンガン粒を混入する、IIA_1層を基調とする単一層で人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、灰釉陶器、棒状鉄製品があるが、食器が多い。遺物は上層から床面にかけて出土し、床面遺物（1～4・6・11・14）は住居内全体に分布し、いずれも残存率が高い。時期：9期に帰属する。

SB617　位置：北部E区　図版71

検出：西壁中央でSB616に切られ、住居の中央でも南北方向に走るSD524によって切られていた。また、北東隅で撹乱を受けている。本址は主軸方向が55cm程短い、隅丸長方形の大型の住居址である。カマド：

東壁中央に位置する粘土カマドである。袖は原形を止めないが、粘土がわずかに残存する。火床は径50cmの範囲で焼土化し、明瞭に識別された。煙道は長さ85cmを測るが、先端は煙出しと思われることから本来の煙道の長さとみてよい。柱穴：主柱穴４基があるが、西側列の柱穴はSD524の底面で検出できた。柱穴は楕円形の掘り方で規模は大きく、深さは48～54cmとほぼ一定である。柱間の寸法もほぼ等間隔で整然とした配置である。床：IIA_2層質の粘土を全面に入れて整地するが、軟弱な床である。埋没：暗オリーブ褐色のIIA層基質の細粒砂を基調とする単一層で一時的な埋没である。遺物の出土状況：土師器、須恵器がある。遺物は上層から床面にかけて出土したが、床面や床施設の遺物（４・６・７～13）はカマド周辺に多い。カマド火床からは土師器の高杯（８）や甕（13）が出土し、投棄された遺物と思われる。また、４・６・７が南東の柱穴から、11・12がカマド右側の落ち込みからそれぞれ出土している。時期：１期に帰属する。

SB618　位置：北部Ｅ区　図版71

検出：IIA_2層上位で検出したが、南西部にのみ覆土と認められる土が残存し、そのプランから住居址と認定した。北側の覆土はすでに削平され、掘り方の広がりから地山との区別をした。プランは主軸方向が短い、大型の隅丸長方形になろう。なお、本址はSK1353を切る。カマド：東壁のほぼ中央に焼土が散布する箇所があり、火床と認められた。柱穴：主柱穴４基がある。柱穴の掘り方は長方形を呈し、深さは54～80cmと深い。柱間の間隔は住居址の規模と同様、主軸方向がわずかに短いものの整然とした配置である。柱穴の覆土は２層に分層され、上層の底面の中央が柱を据えたように凹んでおり、柱が掘り方の底面に達しない状況が観察された。床：残存する南西部の観察ではかなりしっかり敲き締めていた。埋没：淘汰の良い砂質の単一層で、炭化物や焼土粒が混在していた。遺物の出土状況：黒色土器Ａ、須恵器の食器と土師器の煮炊具がある。検出状況で述べたように、出土した遺物も床面のものが多く、１～５・７～10・12～14は床下の調査の際出土した遺物である。時期：４期に帰属する。

SB619　位置：北部Ｅ区　図版71

検出：SD524が本址の西側を南北方向に切り、さらに、溝による灰色化によって部分的に撹乱を受けていた。本址はSB620・621を切る。カマド：東壁中央に位置するが、袖は遺存せず、焼土の集中する火床のみ確認できた。長さ20cmを測る煙道は主軸方向からわずかに南へ振った方向へ延びていた。床：西側の床がわずかに高く、整地した痕跡がみられた。埋没：淘汰の良い砂を基調に、IIA_1層の粘土がブロック状に混入することから人為的な埋め戻しの状況を呈していた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、灰釉陶器があるが、遺物は上層から床面にかけて出土した。床面遺物（３・８・11～13）は、カマド右側に集中し、3は完形で出土した。灰釉陶器の小瓶（13）はカマド北側の東壁際に付くように状態で出土した。時期：８期に帰属する

SB620　位置：北部Ｅ区　図版71

検出：IIA_2層上位で検出する。住居址の中央を南北方向にSD524が走り、また、東側ではSB619・621に切られ、部分的に撹乱も受けたために東壁の多くを失っていた。プランは南北方向が6.75ｍと大きく、主軸方向の正確な規模は分からないが、かなり大型の隅丸長方形の住居址になると推定される。なお、カマドの痕跡は認められないが、撹乱を受けた東壁に位置していたと思われる。床：炭化物が集中する箇所が４か所ある。床面は小さな起伏があり、敲き締めの痕跡が明瞭である。埋没：IIA層由来の粘土を主体とする単一層である。遺物の出土状況：須恵器、石錘がある。遺物の出土量はきわめて少なく、床面遺物（１・２・４）は住居址全体に分布する。石錘は全部で45点を数え、北西隅に２か所、南西隅に１か所それぞれ集中して床面から出土した。時期：２期に帰属する。

SB621　位置：北部Ｅ区　図版71

検出：住居址の南側半分をSB619に切られ、さらに、西側も部分的に撹乱を受けているために住居址の北

東部のみ調査できた。カマド：東壁のSB619に接する位置にある。袖や煙道は遺存していないが、遺物が集中し、壁をわずかに掘り込んでいる状況からカマドの痕跡と予想された。床：地山をそのまま床としていた。埋没：床面からわずかしか残存しないため詳細は不明であるが、粘質な土を主体とする単一層である。遺物の出土状況：黒色土器A、須恵器、土師器がある。図示した遺物はいずれもカマド周辺に集中するが、破片での出土である。時期：6期に帰属する。

SB623　位置：北部D区　図版53、PL28

検出：IIA_2層上位で検出する。黒色を帯びた覆土は地山と明瞭に区別できた。本址はSK1321～1323に切られるが、覆土の色調の相違から容易に確定できた。プランは整然とした長方形にはならず、カマド付近が張り出しており、壁が崩れた可能性もある。カマド：西壁中央に位置し、袖は原形を保っていないが、石組カマドであったと思われる。袖の壁際は地山をわずかに掘り残し、左袖外側には30×20cm程の大きな礫が重なり合うように置かれていた。火床は床面からほとんど掘り込まず、煙道口へかけて焼土化していた。煙道は長さ75cmを測る。床：かなり深く荒掘し、IIA_2層由来の粘質な土を入れて整地していた。全体的に軟弱である。埋没：IIA層基質の暗赤褐色の粘土を主体とし、マンガン粒、炭化物が散布する単一層で人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器、棒状鉄製品があるが遺物は床面に多い(1・4・5)。特に、カマド火床付近に集中する傾向がみられるが（1・5・6)、その量は少ない。時期：3期に帰属する。

SB624　位置：北部D区　図版53

検出：IIA_2層上位で検出する。SB631と重複する南西部を除き、黒色を帯びた覆土は明瞭に検出できた。本址はSB631・632に切られるが、いずれも覆土の色調の違いから確定できた。カマド：東壁中央に位置し、袖はすでに壊滅していた。焼土化していた火床は床面を5cm程掘り込んでいた。煙道は長さ1.95mと長く、水平に延びた先端が円形を呈することから煙出しがあったと推定される。諸施設：カマド右袖脇に、52×48cm、深さ8cmの楕円形の灰溜めがある。また、カマド手前と北東隅にしっかりとした落ち込みが検出された。柱穴：主柱穴4基があるが、南西隅の柱穴はSB631の調査終了後、その床面で検出できた。柱穴は円形に近い掘り方で、深さ52～74cmと深い。柱間の寸法は住居の規模と同様に、主軸方向がわずかに短く、その配置は整然としていた。周溝：北壁と南壁に幅14～16cm、深さ4～6cmの周溝が断続的にある。床：地山をそのまま床とするが、全体的に軟らかい。埋没：IIA層に由来する暗オリーブ褐色粘質土を基調とし、マンガン粒を混入する単一層で、一時的に埋没したと思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器、、棒状鉄製品、羽口がある。遺物は覆土下層に多く、床面遺物（1・2・5・6・8・13・17）はカマド周辺に集中する。カマド火床には5・6・17が、また、その周辺の施設からは2が出土した。時期：3期に帰属する。

SB625　位置：北部D区　図版54、第70図、PL28

検出：IIA_2層中位で検出する。最初にSB626のプランを確定したが、西壁が直線的にならず、さらに、住居址の中央で大きな平石が並ぶことから別の住居址と重複すると推定された。先行トレンチを入れたところ、SB626の覆土中にカマドが存在することから本址を認定した。しかし、覆土が近似し、床面のレベルがほとんど変わらないために北壁からカマドにかけてのプランは明瞭に確定できなかった。カマド：東壁中央に位置する石組カマドでその遺存状況は良好である。袖から煙道煙出しにかけて花崗岩7、砂岩9、不明2の18個の礫を配し、天井部には大きな花崗岩の平石2個を使用していた。礫は袖の先端に割って整形した花崗岩を置き、煙出しに近いほど小さめの砂岩を組んで構築していた。芯材を固める粘土はかなり砂質の土である。火床は10cm程焼土が堆積し、かなり硬化していた。カマド焚口付近にはカマドの芯材に使用するような花崗岩の平石が4個あるが、本址のカマドの袖が完存することや床面から若干浮く状況か

ら投棄された礫の可能性が強い。諸施設：カマド右側外側に規模が径50cmの円形で、深さ35cmの灰溜めがある。また、性格不明の落ち込みが７基検出された。床：全面にⅡＡ層基質の土を5cm程入れて整地した堅緻な床で、カマド手前が若干高い。埋没：黄灰色の細粒砂の単一層で、焼土粒、炭化物が混在していた。遺物の出土状況：須恵器、土師器、羽口、刀子があるが床面よりも覆土中から出土する例が多い。床面遺物の多くはカマドの火床内から破片で出土したが、いずれも残存率は低い（3～6・8～10）。時期：３期に帰属する。

SB626　位置：北部Ｄ区　図版54、第70図、PL28

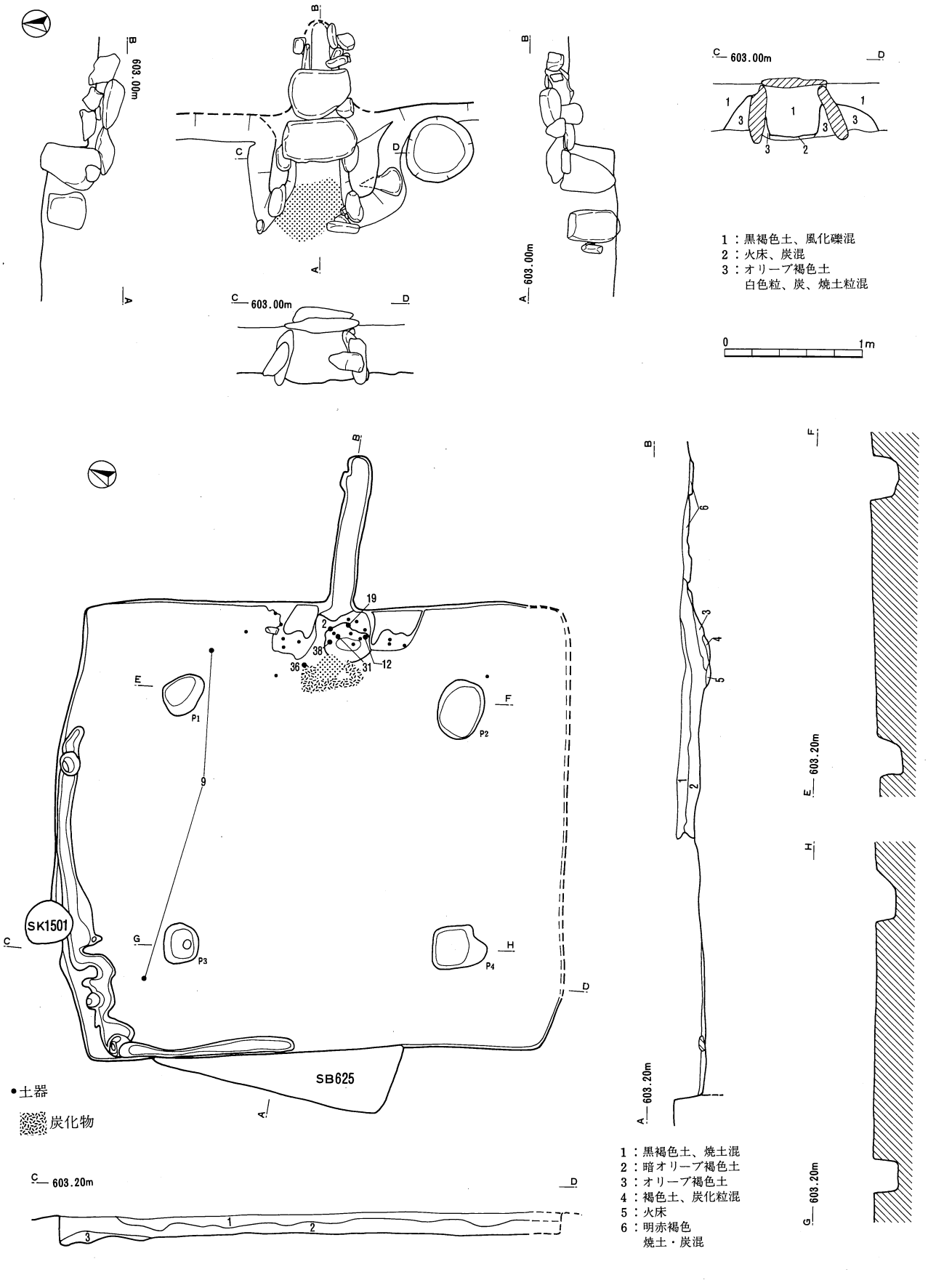
検出：SB625に西壁から中央にかけて切られる。主軸方向が6.45ｍ、それと直交する方向が7.20ｍの大型の住居址である。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。袖は一部崩壊しているが、ⅡＡ$_2$層基質の粘土をブロック状に積み上げて構築し、その内側は火床とともに焼土化していた。煙道は2.25ｍとかなり長く、底面には小さな起伏が観察され、掘り抜いて煙道を作る際平坦に掘り切れなかった状況が推定される。柱穴：主柱穴４基あり、整然とした配置である。柱穴の掘り方は不整形で規模も50～86cmと一定でないが、深さは32～42cmとほぼ同じ。北西隅にある柱穴の底面は灰色化し、柱の位置が確認できた。周溝：北壁に幅20cm、深さ10cmの周溝がある。周溝の底面には柱を据えたような落ち込みが３か所認められた。床：ⅡＡ層基質の土を全面に約10cm程入れて整地する床で中央が硬い。埋没：基本的には２層に分層できた。上層は細粒砂を基調に炭化粒、焼土粒を含み、下層はⅡＡ層基質の粘土がブロック状に堆積し、人為的な埋め戻しと思われる。遺物の出土状況：土師器、須恵器、刀子があるが、上層から床面にかけて多量の遺物が出土した。床面遺物は少なく、カマド火床に集中する傾向がみられ（2・9・19・31・36・38）、２は完形である。須恵器杯蓋Ｂの『美濃国』刻印土器は覆土中の遺物で、埋没する際投棄された遺物である。時期：２期に帰属する。

SB627　位置：北部Ｄ区　図版52、PL28・29

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。プランは明瞭に識別され、主軸方向が70cm程短い隅丸長方形の住居址である。本址はST562・SK1327・1525に切られ、ST560を切る。ST560とは本址の床面の精査の際、その柱穴を検出できたことを根拠とした。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドで、左袖の一部をST562に切られていた。床面から平坦に続く火床は焼土が厚く堆積していた。諸施設：南東隅に74×52cm、深さ17cmの楕円形の貯蔵穴があり、遺物が出土した。柱穴：主柱穴４基がある。柱穴は円形に近い掘り方で径52～74cm、深さは南東の柱穴を除いて60cm程と深く、柱痕も確認された。柱痕は径14cmを測り、柱を据えた底面はわずかに凹んでいた。柱間の寸法は2.50ｍ前後でほぼ一定である。床：中央を中心に薄く貼り床があり、小さく起伏がある。埋没：基本的に３層に分層された。２層以下は人為的な埋没と思われる、ⅡＡ層由来の粘土がブロック状に堆積し、その上に灰褐色の砂質土が覆う。遺物の出土状況：土師器、須恵器、紡錘車がある。遺物は覆土下層と床面に多い。床面からはカマド左袖のあった付近（8・9）と南東隅のピット（2・4）に多いが、２が完形で出土した以外はいずれも破片での出土である。土製の紡錘車は北西の床面から出土した。時期：２期に帰属する。

SB628　位置：北部Ｄ区　図版50

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出したが、覆土は地山と明瞭に識別された。南西部や南東部が張り出すことから２～３軒の住居址が重複すると考えたが、覆土の状況から２軒の重複と判断し、南西部は本来の形状であることを確認した。本址はSB633に切られる。主軸方向が長い隅丸長方形のプランである。カマド：西壁中央に位置するカマドで、袖はすでに崩れていた。火床は床面と同じレベルにあり、焼土が広く分布していた。柱穴：四隅に主柱穴４基がある。柱穴は円形に近い掘り方で68～92cmと規模は大きく、深さは25cm前後とほぼ一定である。北西隅の柱穴を除いて柱を据えた痕跡が底面で観察された。床：ⅡＡ$_2$層の地山を床



第70図　SB625カマド（1：40）・626実測図（1：80）

とし、平坦である。埋没：２層に分層された。下層はⅡA_1層基質の粘質なシルトで、その上に青灰色の粗粒砂が覆う。下層は明らかに人為的な埋没状況を呈していた。遺物の出土状況：須恵器、土師器、軟質須恵器があるが、その全体量は少ない。土師器の煮炊具(６～８)はカマド火床からの出土であるが、床面から若干浮いて出土した。このほか図示した遺物は１を除いていずれも覆土中の遺物である。時期：２期に帰属する。

SB629　位置：北部Ｄ区　図版50

検出：ⅡA_2層上位で検出する。一辺3.75ｍを測る隅丸方形のプランは明瞭に確認できた。本址は南西でSB636を、北壁でSD533を切る。カマド：東壁中央に位置する函形カマドで、袖は全壊していた。火床は広い範囲で焼土の散布がみられた。床：地山面を床とし、全体的に軟弱である。埋没：西側で一時的な埋没が観察されたが、基本的に粗粒砂を基調とするレンズ状の堆積である。遺物の出土状況：須恵器があるが、出土量はきわめて少ない。図示した遺物はいずれも覆土中の遺物である。時期：２期に帰属する。

SB633　位置：北部Ｄ区　図版50

検出：SB628を切る隅丸方形の小型の住居址である。カマド：南西隅に焼土の集中が観察されたほかは、カマドの痕跡は認められなかった。諸施設：西壁中央に70×62cmの落ち込みがあるが、性格は不明である。床：中央がわずかに高い地山床である。埋没：ＩＤ層質の青灰色の砂質土の単一層である。遺物の出土状況：須恵器、土師器があるがその量はきわめて少ない。土師器の甕(２・３)は床面遺物であるが、小破片である。時期：２期に帰属する。

SB634　位置：北部Ｄ区　図版51

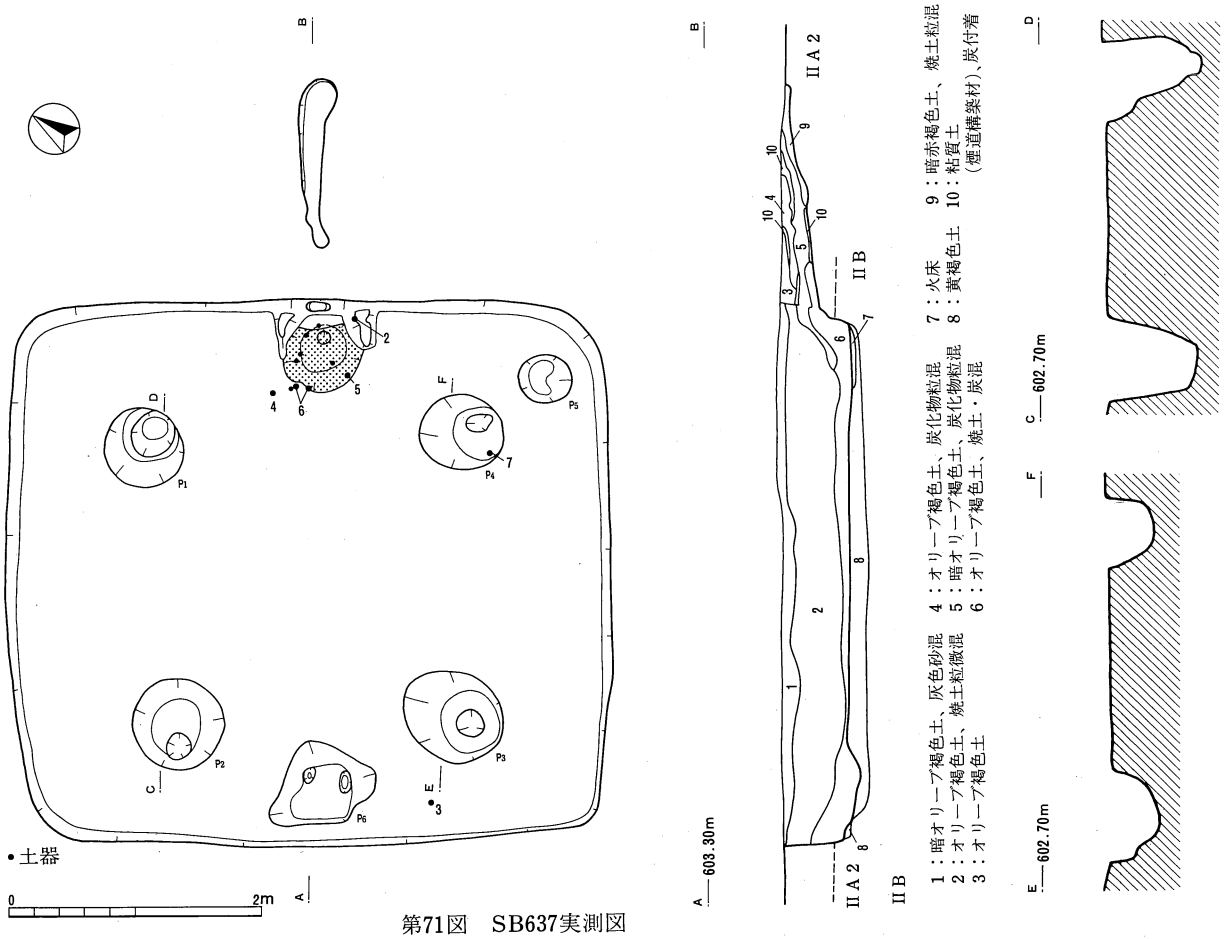
検出：ⅡA_2層上位で検出したが、南側の多くを水路によって撹乱を受けていた。残存する部分から一辺3.00ｍ前後の隅丸方形の住居址になると予想される。本址はSD533に切られ、SD588･ST579を切るが、いずれも覆土の色調の違いから面的に確定できた。カマド：東壁中央に位置する。袖にはⅡＡ層質の粘土で構築され、火床は焼土化していた。煙道はSD533に先端を削平されていた。柱穴：主柱穴２基を確認したが、北側列のみ確認できた。柱穴の掘り方は円形を呈し、その規模は径60cmと大きく、深さも50cm前後でしっかりしていた。周溝：北壁から西壁にかけて幅10～13cm、深さ25cmの周溝がある。床：小さな凹凸のある床でⅡＡ層質の粘土を部分的に薄く貼っていた。埋没：３層に分層された。２層以下はⅡＡ層に由来する粘質な黄褐色土が堆積し、その上に自然堆積と思われるＩＤ層質の灰褐色粘質土が覆う。遺物の出土状況：土師器、須恵器、釘があるが、遺物は特に少ない。図示した遺物は北西隅の落ち込みから須恵器の杯（２）が出土したほかは覆土中の遺物である。時期：２期に帰属する。

SB635　位置：北部Ｄ区南東隅　図版48

検出：ⅡA_2層中位で検出した。住居址が集中するなかで、本址だけ離れた地点にある住居址である。住居址の北側は耕作によって撹乱を受けていた。残存する部分から推定すると一辺3.0ｍ程の隅丸方形の住居址になろう。カマド：東壁に位置する函形カマドで、壁を大きく掘り込んで構築していた。火床は不鮮明だが、掘り込んだ壁の先端に焼土の集中が観察された。床：ⅡA_2層の地山を床とし、全体的に軟弱である。埋没：床面からわずかな部分しか残存しないため詳細は不明だが、ⅡＡ層の粘質な土と近似する。遺物の出土状況：灰釉陶器があるが、覆土の上半が削平されていることもあり遺物の出土量は少ない。唯一図示できた灰釉陶器の椀（１）は覆土中の遺物で確実に本址に帰属する遺物はみられない。時期：遺物が少ないため時期の限定は難しい。

SB636　位置：北部Ｄ区　図版50

検出：SB629のプランを確定した際、SB629に切られる本址の存在に気が付き、その調査終了後に隅丸長方形のプランを確定した。本址は形状から住居址と認定したが、規模が小さく、カマドの痕跡もみられな



第71図　SB637実測図

いことから住居址とする根拠は弱い。床：軟弱で平坦な地山床である。埋没：ⅡA層の由来する粘質な細粒砂で、ブロック状に堆積することから人為的な埋没と思われる。遺物の出土状況：須恵器と土師器がある。その構成は一般的な住居址と変わらないが、出土した遺物のほとんどは覆土中の遺物である。時期：2期に帰属する。

SB637　　位置：北部D区　　図版52、第71図、PL29

検出：ⅡA$_2$層上位で検出した。主軸方向が約40cm短い住居址で、プランは明瞭に確定できた。本址はSK1158・ST570を切る。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドで袖は壁際のみ残存していた。火床は焼土化し、その中央には支脚石の抜き取り痕が観察された。長さ1.80mを測る煙道はトンネル状に遺存していた。諸施設：西壁中央に入り口と関連する施設と思われる不整形の落ち込みがあり、深さ14cmの平坦な底面には小さな凹みが2つ並んでいた。また、南東隅にも径40cmの円形の落ち込みがある。柱穴：主柱穴4を検出した。柱穴は整然とした配置で、柱間の間隔は2.50m前後で一定である。掘り方は円形で径66～82cm、深さ44～76cmと大きく、底面には建物の自重による柱の沈下痕跡を示す凹みがある。床：ほぼ全面にⅡA層の粘質な土を10～14cmの厚さで入れ整地していた。埋没：4層に分層された。住居址の廃絶後に自然堆積の4層が床全面に薄く堆積し、その後で人為的な埋没と思われるⅡA層基質の粘土が不規則に覆っていた。遺物の出土状況：土師器、須恵器と鉄製紡錘車がある。覆土中の遺物は少なく、床面遺物(1～7)はカマド周辺に集中する傾向があるが、7は南東の柱穴から出土している。時期：2期に帰属する。

SB640　　位置：北部D区　　図版57、PL29

検出：SB546の西側に隣接する、5.50×4.60mの隅丸長方形の住居址である。本址の煙出しはSB546の西

壁に切り込んで構築しており、その関係は明瞭である。カマド：東壁北東隅に位置する石組カマドで、袖の遺存状況は良好である。袖石は袖先端に大きな花崗岩を固定させ、さらに、人頭大の砂岩を積み上げるように組んでいる。火床には焼土が厚く堆積し、炭化粒も広い範囲で分布していた。煙道はトンネル状に残り、火床から緩やかに延びた後、急な角度で立ち上がっていた。諸施設：カマド右側に70×60cmの円形に近い落ち込みがあり、完形に近い杯などが出土したことからカマドに関連した何等かの施設と思われる。床：地山を敲き締めた床で、カマド手前から中央にかけて比較的硬い。硬度計の測定でも同様の傾向を示していた。埋没：大きく２層に分層された。床面に堆積する覆土はⅡＡ層由来の粘土で、明らかに人為的な埋没状況を示し、その上を自然堆積と思われるＩＤ層質の砂質土が覆っていた。遺物の出土状況：土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、白磁、砥石があるが、遺物は上層から床面にかけて多量に出土した。床面遺物（１～９・11・16～18・21・28）はカマド周辺に集中するが、煮炊具はほとんどみられない。なお、１～７は完形に近く、住居の廃絶の際一括遺棄した可能性が高い。白磁の椀(30)は覆土中の遺物である。時期：14期に帰属する。

２　掘立柱建物址

ST１　　位置：南部Ａ区　　図版21、PL32

検出：ⅡＡ$_1$層上位で検出する。主軸方向をほぼ南北方向にとる、３間×２間の南北棟である。柱穴：柱穴は整然とした配置がされる。東列は北東隅の柱穴を除き、断面観察の際、径14cmほどの柱痕跡が観察された。柱間の寸法はいずれも1.70ｍ前後で規格性が高い。覆土はⅡＡ層を基調とするが、下層に粘質な土を入れている。掘り方は方形を呈し、平坦な底面へ直に掘り込んでいた。遺物の出土状況：北東隅の柱穴の掘り方から土師器の杯の破片１片が出土している。時期：周囲の住居址の配置と遺物の様相から２期に帰属する。

ST２　　位置：南部Ａ区　　図版17

検出：ⅡＡ$_1$層からⅡＡ$_2$層上位にかけて検出する。本址は３間×２間の東西棟で、東側でSB２・４に切られる。その関係については、いずれも覆土の質的な差から確実に捉えられた。柱穴：柱筋の通った配置である。柱間の寸法は梁方向が桁方向に比べて40cm程長いが、各方向の間隔は一定である。南列を除いて、径15～20cmの円形を呈する柱痕跡が確認されたが、掘り方の中央に位置し、底面まで達している。掘り方の規模は一部を除いて約80cm前後の大きな方形である。覆土は単一層で、ⅡＡ層由来の粘土がブロック状に堆積していた。遺物の出土状況：北側列西から二番目の柱穴から須恵器の蓋、土師器の甕の破片が、また、北東隅の柱穴から土師器の甕の破片がそれぞれ掘り方から出土したが、いずれも生活面からの混入と思われる。時期：SB33の主軸方向と共通することから４期と考えられ、遺物もその時期の様相である。

ST３　　位置：南部Ａ区　　図版17、PL32

検出：本址の上には焼土と炭化物が広がる面が確認され、当初、SK177～179と認定して調査した。だが、その遺構の性格については不明瞭で、これを除去した後で本址が検出できた。SK177～179と本址との関連性も十分考えられるが、明確でない。本址はSB４・33に切られ、SK187・188を切る。また、SB38とも重複していたが、その関係は確定できなかった。柱穴：柱穴は整然とした配置で、柱間の寸法は梁方向がほぼ一定な間隔であるのに対し、桁方向の間隔は一様でない。方形を基本形とする掘り方は約50cm掘り込まれ、底面は平坦である。柱痕跡は南西隅の３基の柱穴で確認した。覆土はⅡＡ層を基調とし、単一層になる柱穴が多いが、粘土ブロックの堆積が明らかなため分層できた柱穴もある。遺物の出土状況：西列の一部を除いた柱穴から須恵器の杯、甕、土師器の甕が出土している。しかし、住居址との重複関係もあり、本址に帰属すると思われる遺物は認められない。時期：３期に帰属するSB38に切られ、該期のSB７と

関連性が考えられることから2期と考えたい。

ST 5　位置：南部A区　図版22

検出：IIA_1層上位で検出する。本址は3間×2間の南北棟で、SB15・16・18を切る。南東隅の柱穴はほかに比べて規模が小さいが、検出面との関係で本来の形状ではない。また、南西隅の柱穴は検出できなかった。柱穴：柱穴は方形の掘り方を基本形とし、その規模は大きい。柱間の寸法は柱痕跡が検出できなかったため正確には分からないが、桁方向が1.60m前後とほぼ一定である。覆土はIIA層に由来し、地山の礫を多量に含んでいた。遺物の出土状況：住居址と重複する柱穴から土師器の甕、須恵器の蓋、甕類が出土したが、住居址から取り込んでいる可能性が高い。時期：SB15,16を切ることと周囲の住居址の配置から3期と考えられる。

ST 6　位置：南部A区　図版17

検出：IIA_2層上位で検出する。北側には用水路があるために、全体の構造は捉えられず、全部で3基の柱穴が確認できた。なお、遺物は出土していない。柱穴：円形に近い掘り方の規模は径53～98cmを測る。底面は平坦で、東側の柱穴には建物の自重によって柱の当たる箇所が窪んだ痕跡がある。柱痕跡は南西の柱穴で確認し、径18cmと大きくしっかりしていた。覆土はIIA層由来の粘質土がブロック状に堆積していた。時期：主軸方向がSB37，38と共通することから3期と考えたい。

ST10　位置：南部A区　図版20

検出：IIA_2層上位を検出面とする。2間×2間の建物址で、プランはほぼ方形である。なお、本址はSB27に北東を切られるため総柱の建物になる可能性もある。柱穴：柱穴は方形を基本とする掘り方で、その規模は比較的小さい。整然とした配置状況を呈し、柱間の間隔はほぼ一定である。柱痕跡はSB27の床面で検出した北西隅の柱穴で確認できた。覆土はIIA層由来の単一層である。遺物の出土状況：土師器の高杯の小破片が掘り方から出土した。時期：遺物から時期の確定はできないが、南側に隣接するST11と軒が揃うことから同一時期と判断でき、2期と思われる。

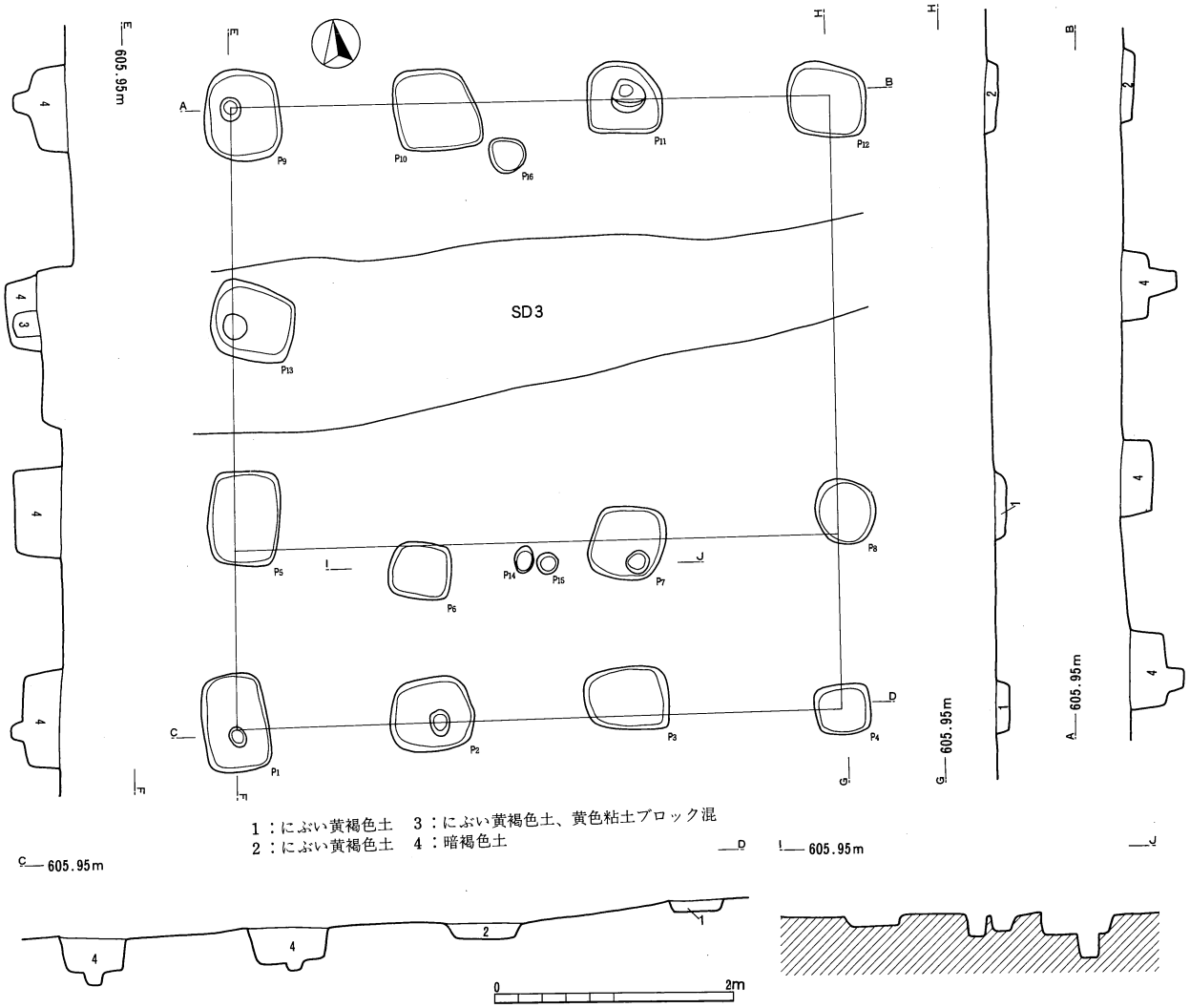
ST11　位置：南部A区　図版20、第72図、PL32

検出：ST10の南側に隣接し、主軸方向もそれとほぼ共通する。本址は東西方向に走るSD3に切られる、南面庇付きの3間×3間の東西棟である。本址の北、南列中央にはそれぞれ小さな落ち込みがあり、直接本址との関連性は指摘できないが、一応本址に含めた。柱穴：身舎の南列中央にあるP6がわずかに外側へ位置するのを除いて柱穴の柱筋は通る。掘り方は方形を基本とするが、形状が崩れて円形に近いものも多い。平坦になる底面の標高はほぼ共通で、建物の自重によって柱が食い込んだ痕跡が観察された柱穴もある。柱間の寸法ほぼ等間隔になる。覆土はIIA層基質の粘質土を主体とする暗褐色土である。遺物の出土状況：P1・4・7・10・11から土師器甕5片、須恵器の杯1片が出土した。総じて2期の遺物である。時期：遺物の様相から2期に帰属する。

ST12　位置：南部A区　図版24

検出：SB51の東側に位置する。柱穴は南北方向に並んだ3基を検出できたが、すぐ北側にはSK672が位置し、本址との関連も考えたが、断面観察の結果、本址の覆土の特徴と異なることから別遺構と判断した。身舎は西側に延びると予想し、一応掘立柱建物址と認定しているが、柵址になる可能性も残る。柱穴：柱穴は整然とした配置状況を呈し、柱間の間隔は1.80m前後と一定になる。掘り方は方形で、底面は平坦になる。柱痕跡は径20cmの円形で、南西隅の柱穴を除いて観察された。覆土はIIA層基質の粘質土を主体に、下層には粘性の強い、黄褐色のIIA_2層質の粘土を入れていた。遺物の出土状況：北端に位置する柱穴を除いた柱穴から土師器の甕、須恵器の杯が掘り方から出土している。時期：遺物の様相から5期と判断した。

ST13　位置：南部A区　図版25、第73図、PL32



第72図　ST11実測図

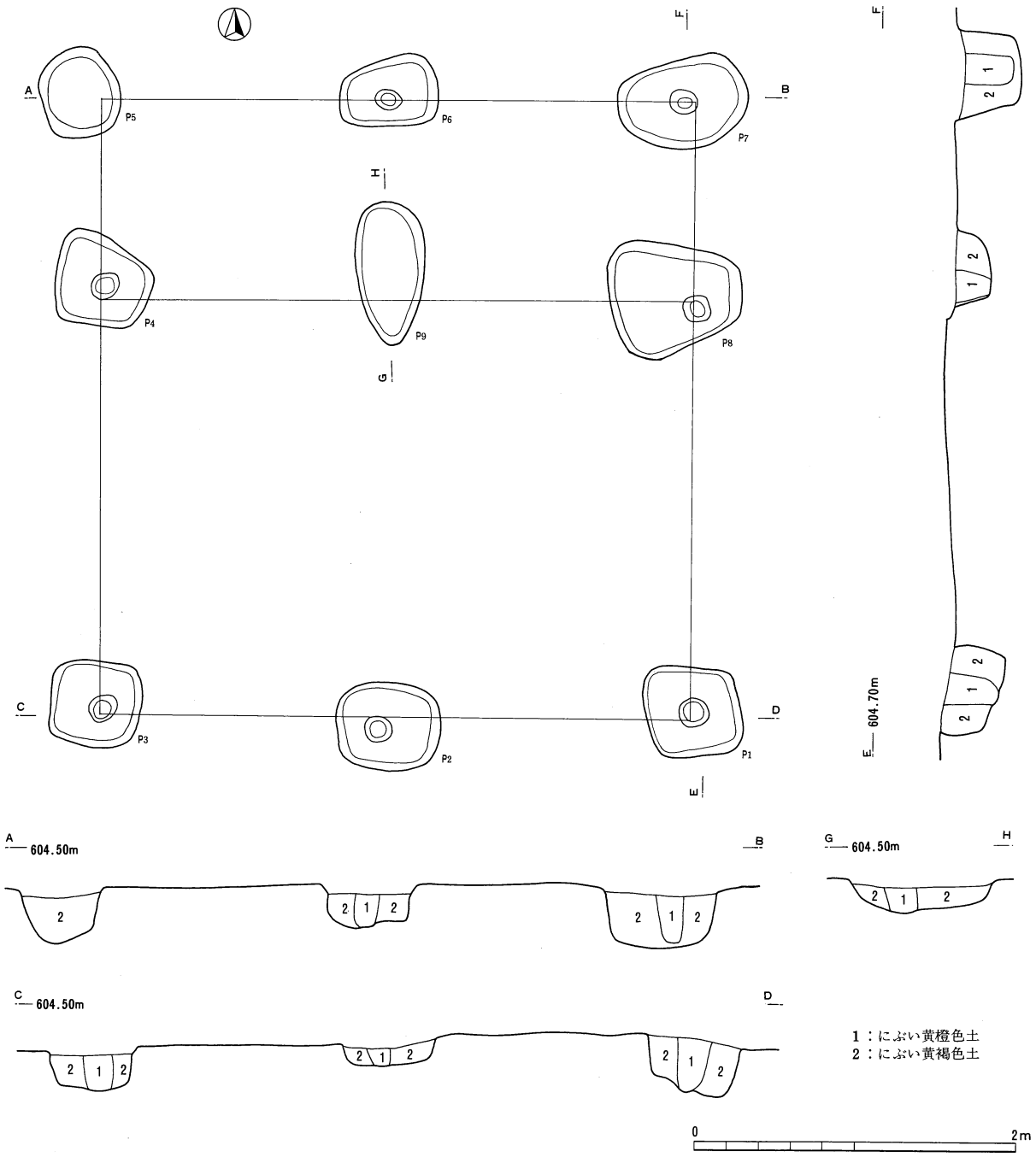
検出：ⅡA$_2$層上位で検出する。北面に庇が付く２間×２間の東西棟で本遺跡では類例の少ない形態のひとつである。主軸方向はほぼ東西方向にとる。柱穴：柱穴は整然とした配置である。掘り方の形状は南列が方形に近くなるほかは円形や不整形を呈し、一様でない。柱穴の深さは庇部も含めて30～40cmと共通である。柱痕跡はＰ５・９を除いて観察され、径16～20cmを測る。覆土はⅡＡ層由来の粘質土がブロック状に堆積していた。時期：遺物が出土していないため時期の確定は難しいが、主軸や周囲の遺構の位置関係から３～５期の幅のなかで考えたい。

ST14　位置：南部Ａ区　図版18、第74図

検出：本址の南側には用水路があるために北側の一部を含めて撹乱を受けていた。本址はST16に切られる、３間×２間の南北棟になると推定される。ST16は本址の建て替えと判断した。柱穴：柱穴は方形の掘り方を基本形とし、柱筋の通った配置である。柱間の寸法は梁方向は分からないが、桁方向は1.70ｍ前後とほぼ共通である。掘り方の深さはST16と比べて20cm程浅い。柱痕跡は確認することができなかった。覆土はⅡＡ層に由来する粘質土がブロック状に堆積する状況が明瞭である時期：本址の建て替えと判断したST16から出土した遺物の様相から３～４期にかけての建物址と判断したい。

ST15　位置：南部Ａ区　図版18

検出：ST14の西側に隣接する。南側を用水路によって失うために、本址の全体像については捉えること



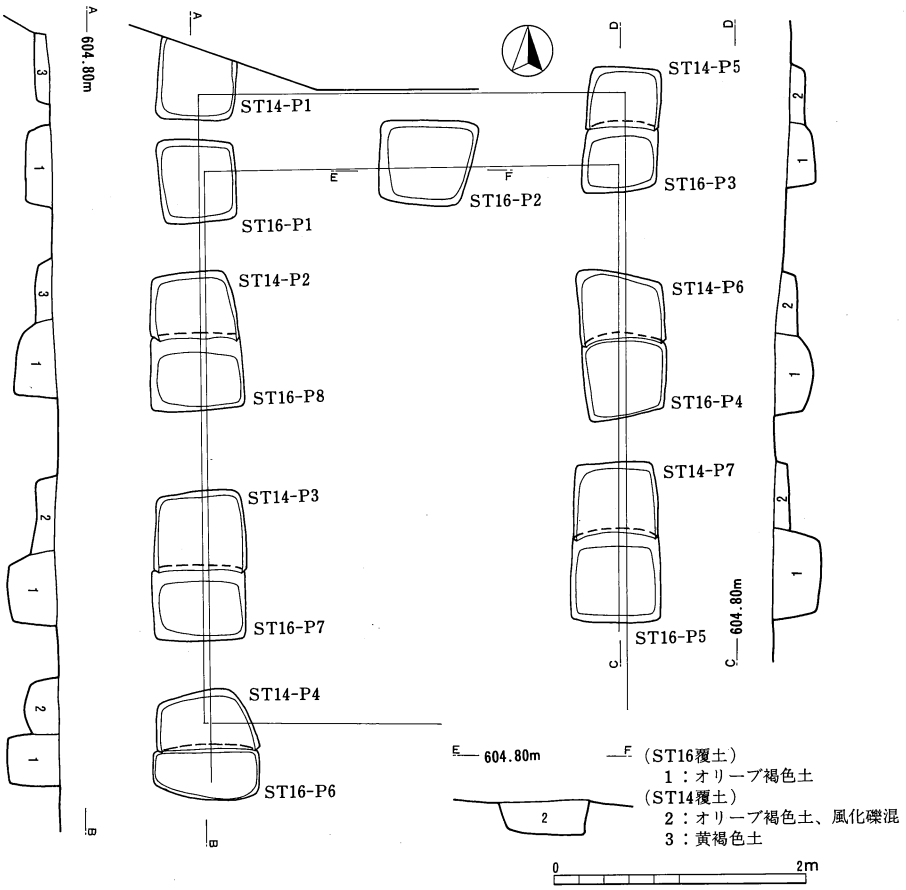
第73図　ST13実測図（1：40）

ができない。しかし、柱間の間隔などから3間×2間の東西棟になると推定される。柱穴：柱穴は一辺60cm前後の規模をもつ方形の掘り方で、列の揃った配置である。柱間の寸法は桁方向が梁方向に比べて40cm程短いが、その間隔は一定で規格性が高い。柱穴の底面は平坦なものが多いが、西列と東列の中央の柱穴で建物の自重による落ち込みが底面で認められた。覆土はⅡA層を基調とするオリーブ褐色土である。遺物の出土状況：北西隅の柱穴の掘り方から須恵器の杯1点が掘り方から出土している。時期：遺物の様相と主軸から3期と考えたい。

ST16　位置：南部A区　図版18、第74図

検出：当初、本址の存在に気が付かなかったが、ST14の調査の際、その断面観察の状況から本址を確定することができた。本址はST14がほぼ同じ場所で建て替えた建物址で、主軸方向はまったく同じである

が、桁方向の規模が約1.0ｍ程短い。なお、南側の梁行は用水路の撹乱によって失っている。柱穴：掘り方の形状や規模はST14と大きく違わないが、本址の方が深く掘り込んでいた。柱痕跡は検出できなかったため正確な柱間の間隔は不明だが、これもST14と大差ない状況である。覆土はⅡＡ層を基調とするが、地山に由来する小豆大の礫が均一に混在していた。遺物の出土状況：Ｐ３・５～７から土師器の甕類、須恵器の蓋、鉢、甕などが出土しているが、その量は少なく、ほとんどが破片で出土した。時期：遺物から４期に帰属する。



第74図　ST14･16実測図

ST17　位置：南部Ａ区　図版16

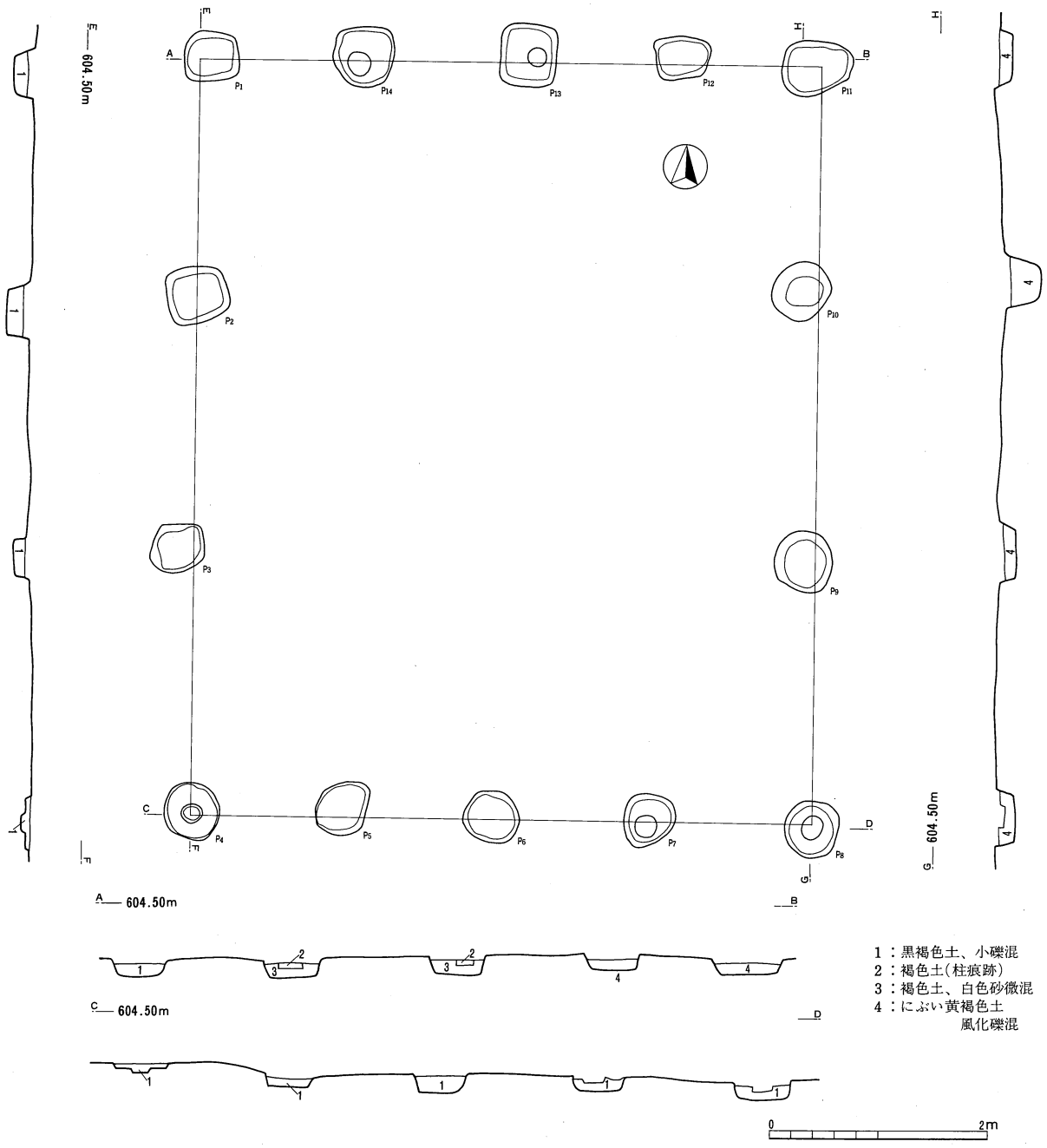
検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。3基の柱穴だけが検出されたが、その配置の状況から掘立柱建物址と認定した。規模や形態の詳細については分からず、遺物も出土していない。柱穴：柱間の寸法は東西方向が1.44ｍ、南北方向が1.72ｍを測る。掘り方は径60㎝程の方形を呈し、深さは25～30㎝で平坦な底面である。覆土はⅡＡ層を基調としていた。時期：時期の確定はかなり難しい。SA１・８との位置関係や主軸方向が異なる状況からそれらとは同一時期にはならない。本址の主軸方向に注目し、４～５期の建物址としておきたい。

ST19　位置：南部Ｂ区　図版28、第75図、PL33

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とし、地山との識別は容易である。本址は３間×４間の南北棟である。床面積は40㎡と大きく、南部に位置する掘立柱建物址では最大規模の建物址である。主軸方向はほぼ南北方向で、東側に隣接する大型住居址のSB80と共通する。ST20とは柱穴相互の重複はみられないが、実質的には重複関係にある。柱穴：柱穴は整然とした配置である。柱間の寸法は梁方向が1.40ｍ前後であるのに対し、桁方向は2.40ｍ前後と大きく、その間隔も一様でない。しかし、桁方向の相対する柱間の間隔はほぼ共通することから規格性を認めてよい。柱穴の掘り方は北側の梁方向が方形に近いほかは円形を呈する。柱痕跡は明瞭に観察できなかったが、５基の柱穴の底面で、建物の自重による柱の食い込んだ円形の落ち込みが確認できた。覆土はⅡＡ層を主体とする単一層である。遺物の出土状況：Ｐ１・４・13の掘り方から須恵器の杯、土師器の高杯、甕の破片が出土したが、その出土量は少ない。時期：遺物の様相と東側に隣接するSB80と主軸方向が共通することから４期に帰属する。

ST20　位置：南部Ｂ区　図版28、第76図、PL33

検出：本址はST19の西側で重複する、東面に庇がある３間×２間の南北棟である。本址はSB99に切られる。柱穴：庇部の柱穴は径30㎝の円形を呈するが、その規模は身舎の柱穴に比べては小さく、底面も20～30

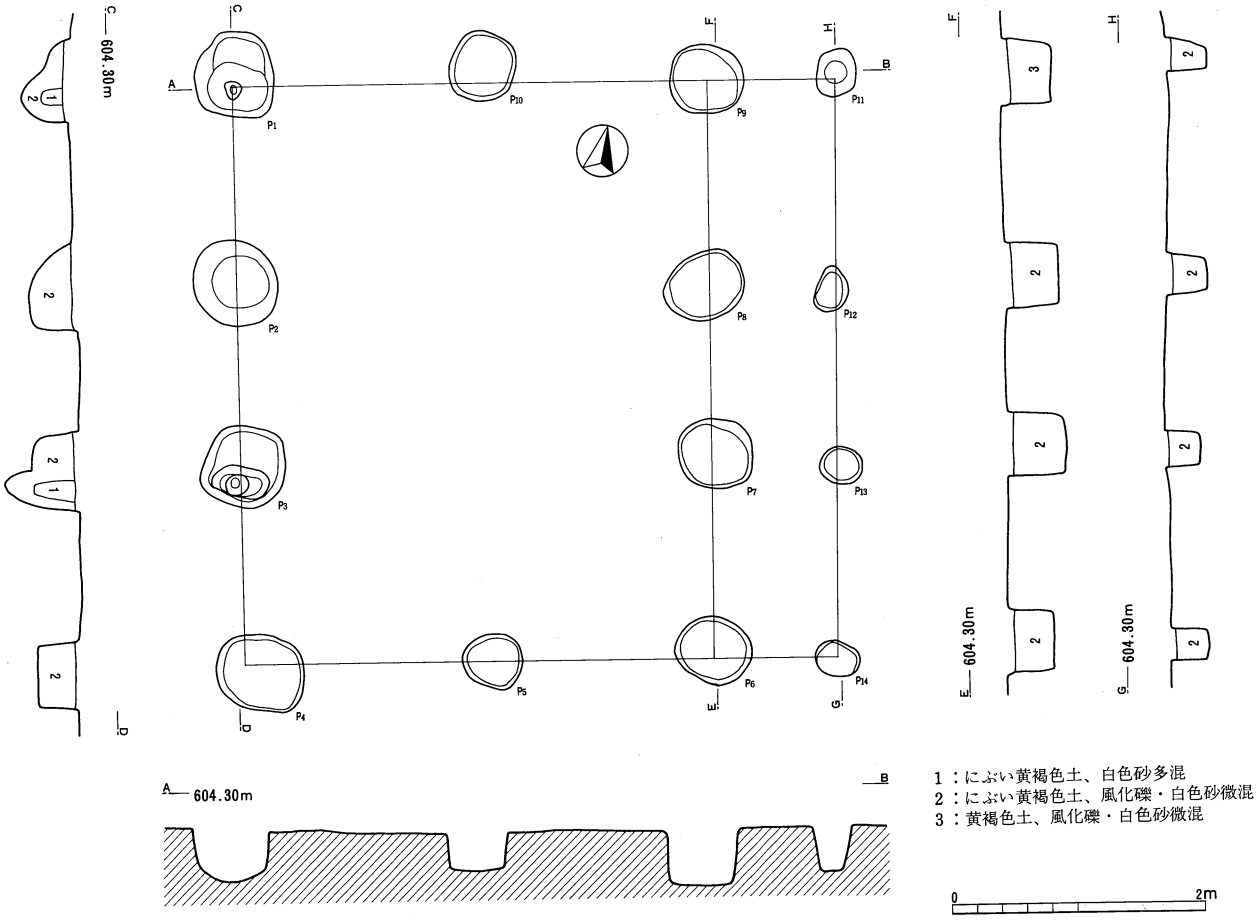


第75図　ST19実測図

cm程浅く掘り込んでいる。このうち棟木を支える柱穴は比較的浅い掘り方である。柱筋の通った身舎の柱穴の掘り方は円形を呈する。柱痕跡はP１・３で確認したが、底面には達しない。柱間の寸法は桁方向が1.50ｍの等間隔になるのに対し、梁方向はそれより30cm程長い寸法である。また、身舎と庇とは約1.0ｍの間隔になる。覆土はⅡＡ層を基調とする細粒砂で白色砂がわずかに混入していた。時期：遺物は出土していないが、本址の主軸が西側に隣接するSB98に近いことと４期の住居址の分布状況から２期の建物址と考えたい

ST21　　位置：南部Ａ区　　図版26、PL33

検出：SD６と自然流路の調査終了後にその下から円形の落ち込みが並んで検出された。検出面はⅡA_2層中位である。本址は２間×２間の総柱式建物址で、東西方向が50cm程長い。北東隅の柱穴はすでに自然流路によって失い、南列の柱穴も底面付近しか残存していなかった。なお、遺物は出土していない。柱穴：



第76図　ST20実測図

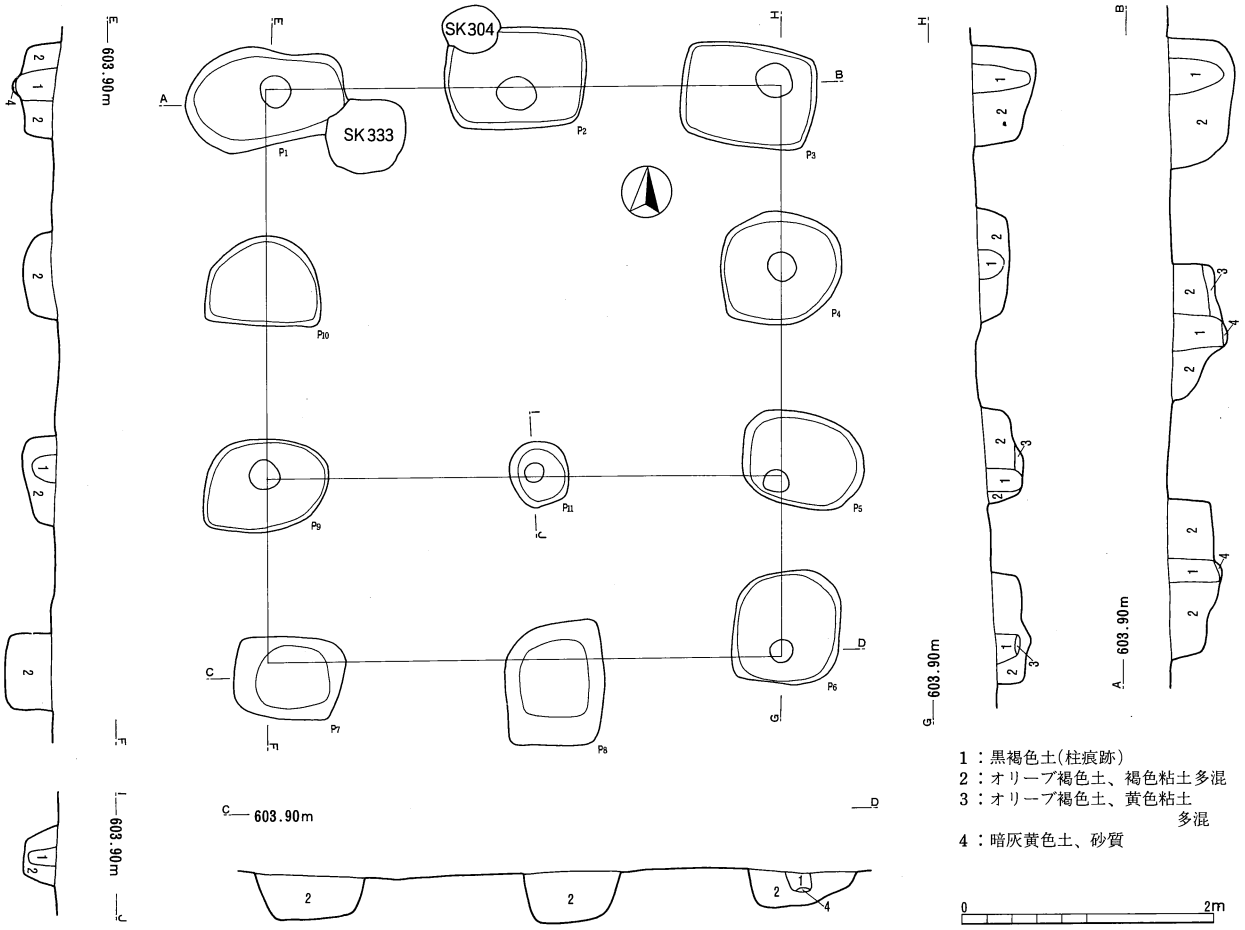
掘り方は円形を基本形にすると思われ、その規模は50～68cmを測るが、底面付近の規模であるために本来の形状はさらに大きいと推定できる。柱痕跡は東西方向の中央列でのみ確認できた。柱間の間隔はそれぞれの方向ともほぼ等間隔になる。覆土はⅡA層基質の粘質土で埋め戻しているが、柱痕跡には砂が多量に混在することから明瞭に区別できた。時期：本址の主軸が北側に位置するST20と共通することから２期に帰属すると考えられる。

ST23　位置：南部A区　図版25

検出：ST13の北側に隣接する、３間×２間の南北棟である。本址の北側でSB103・109・SD16に切られるが、北側の柱穴がこれらの住居址の床面で検出できたことからその関係は明瞭である。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は整然とした配置である。掘り方は方形を呈するものが多く、その規模は42～82cmと幅がある。柱痕跡は南西隅と桁方向の北から二番目の柱穴を除いて観察することができた。柱間の寸法は梁方向がほぼ一定であるのに対し、桁方向は最大と最小の柱間では40cmの差が認められる。覆土は下層ににぶい黄褐色のⅡA_2層質の粘土を多量に入れ、その上にⅡA_1層質の土を入れて構築していた。時期：本址の主軸が10度東側へ大きく触れることから、そのような主軸をとる遺構が比較的多い２～３期を当てたいが、明確には限定できない。

ST24　位置：南部C区　図版42

検出：ⅡA_2層上位で検出する。柱穴は２基検出したのみであるが、その形状や規模から調査区域外の西側へさらに延びることを予想して掘立柱建物址と認定した。柱穴：円形を呈する柱穴の中央には柱痕跡が観察され、底面の柱の当たる箇所は灰色化していた。また、底面は平坦にならず、小さな凹凸がある。覆



第77図　ST25実測図

土はⅡA層に由来する粘質土を主体としていた。遺物の出土状況：南側の柱穴の掘り方から須恵器の甕1片、土師器の甕2片が出土した。総じて1期から2期にかけて遺物である。時期：遺物の様相と遺構の分布状況から1～2期に帰属すると考えられる。

ST25　位置：南部C区　図版41、第77図

検出：ⅡA$_2$層上位を検出面とするが、地山とは容易に識別された。本址は3間×2間の南北棟で、SB116・134・SK304・333に切られる。柱穴：柱穴は直線上に列の揃った配置である。P11の規模は側柱と比べてかなり小さいが、柱筋が通ることから本址に加えた。当初、南面に庇が付く形態と想定したが、その規模から建物内の間を仕切るための柱穴と判断した。柱間の寸法は桁、梁方向とも一定の間隔にならない。掘り方の形状は方形を意識しているものの、不整形や円形もみられ統一性に欠ける。しかし、その規模は大きく、側柱のうち四隅にくる柱穴を深く掘り込む傾向が認められる。柱痕跡はP1～6・9・11で観察されたが、径20cmの円形を呈していた。柱痕跡の多くは掘り方の底面やその付近に達しており、P1・2・6の底面では灰色化した箇所が認められた。覆土はⅡA層に由来する粘質なオリーブ褐色土が使用され、柱痕跡には多量の砂が混在していた。遺物の出土状況：P1・3から土師器の杯片、甕、須恵器の高杯片がある。いずれも細片で掘り方からの出土がほとんどである。時期：遺物の様相と周囲の遺構との関係から1期に帰属する。

ST26　位置：南部C区　図版39、PL33

検出：ⅡA$_2$層上位で検出した。本址は南北方向が約20cm程長い、2間×2間の建物址である。東側でSB125に切られ、北東隅の柱穴は撹乱によって失われていた。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴の

掘り方はいずれも径50cmの円形を呈し、ほかと比較して余り大きくない。柱間の寸法は2.0ｍ前後と一定になり、規格性が高い。柱痕跡は西列、北列中央で確認したが、径15cmの円形を呈し、その多くが底面まで達していたが、北西隅の柱穴は掘り方の中位で止まっていた。底面は平坦になるものが少なく、二段状の不整形やＵ字形になる例が多く見受けられる。覆土はⅡＡ層を基調とする単一層である。時期：遺物による時期の確定はできないが、遺構の位置関係から４期と考えられる。

ST27　位置：南部Ｃ区　図版40

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出したが、プランは明瞭である。本址は東側でSB121･122に切られる、３間×２間の南北棟である。西列中央の柱穴では、その北側に小さな張り出し状の落ち込みがみられたが、柱の抜き取りに関連した掘り方と判断し、本址に加えた。柱穴：柱穴は柱筋の通った配置である。掘り方は円形を呈し、その規模は60cm以下で大きくない。柱間の寸法は梁方向が2.20ｍ、桁方向が1.90ｍ前後の等間隔になる。覆土はⅡＡ層を主体とする単一層である。遺物の出土状況：北列中央の柱穴の掘り方から須恵器の杯、土師器の甕２片が出土した。時期：本址の主軸が２～３期に帰属する建物址と共通することや４期のSB121に切られる状況から２～３期に帰属する。

ST28　位置：南部Ｃ区　図版42

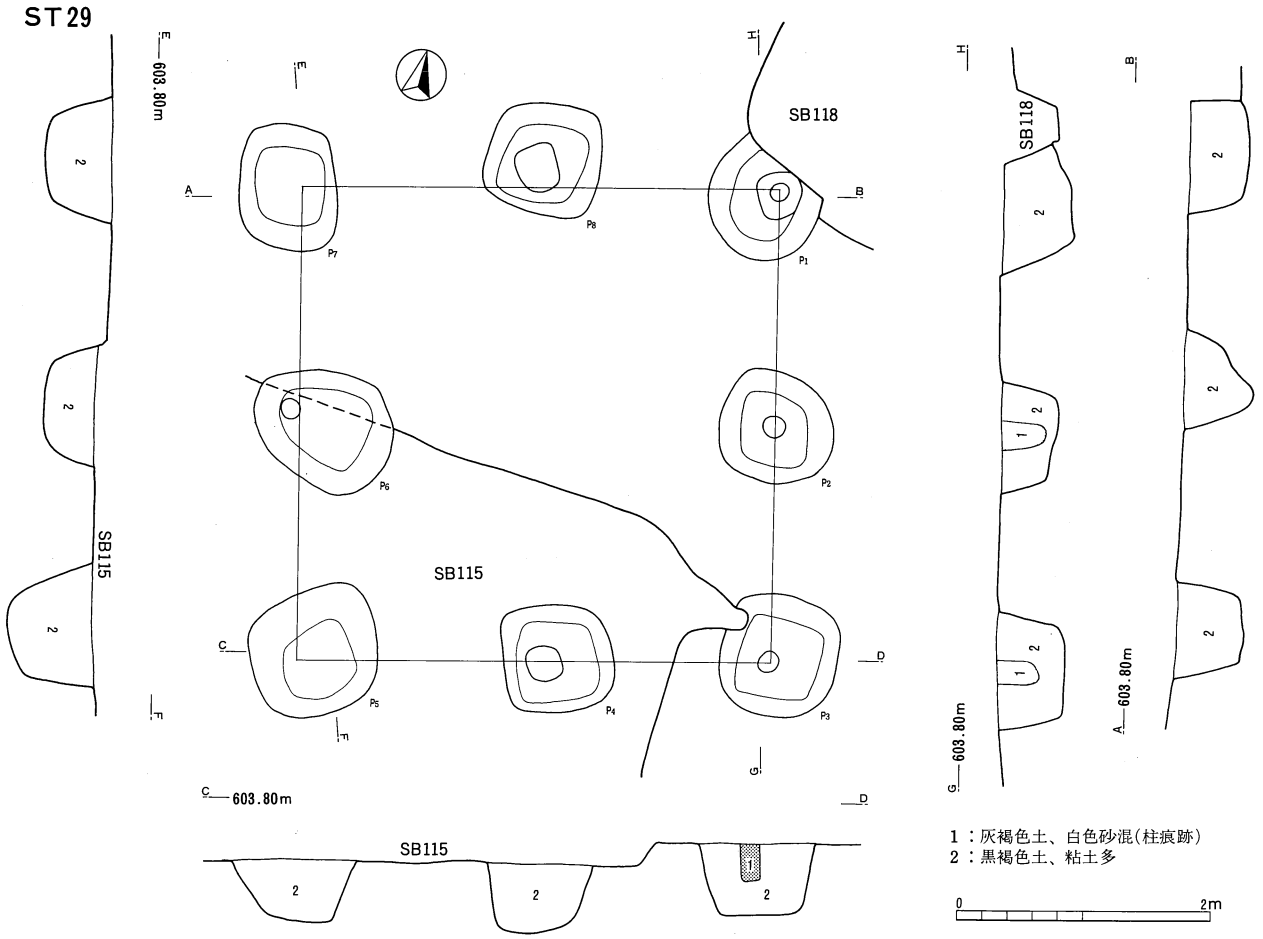
検出：SB115の西側に位置する。プランは不鮮明で、東列の検出は困難を極めた。本址は東西方向が30cm程長い、２間×２間の建物址になる。北列中央でSK314に切られ、建物址の中央では別の土坑が位置するため、総柱式の建物址になる可能性も残る。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は整然とした配置で、掘り方は比較的小さな円形を呈していた。約40cm程掘り込まれた底面は平坦なものとＵ字状になるものがあるが、その深さはほぼ共通する。柱間の寸法は東西方向が揃わないものの、南北方向は1.80ｍ前後の等間隔になる。覆土はかなり砂質を帯びていたが、地山のⅡＡ層に近い細粒砂の単一層である。時期：周囲の建物址の変遷や主軸方向から２期と思われる。

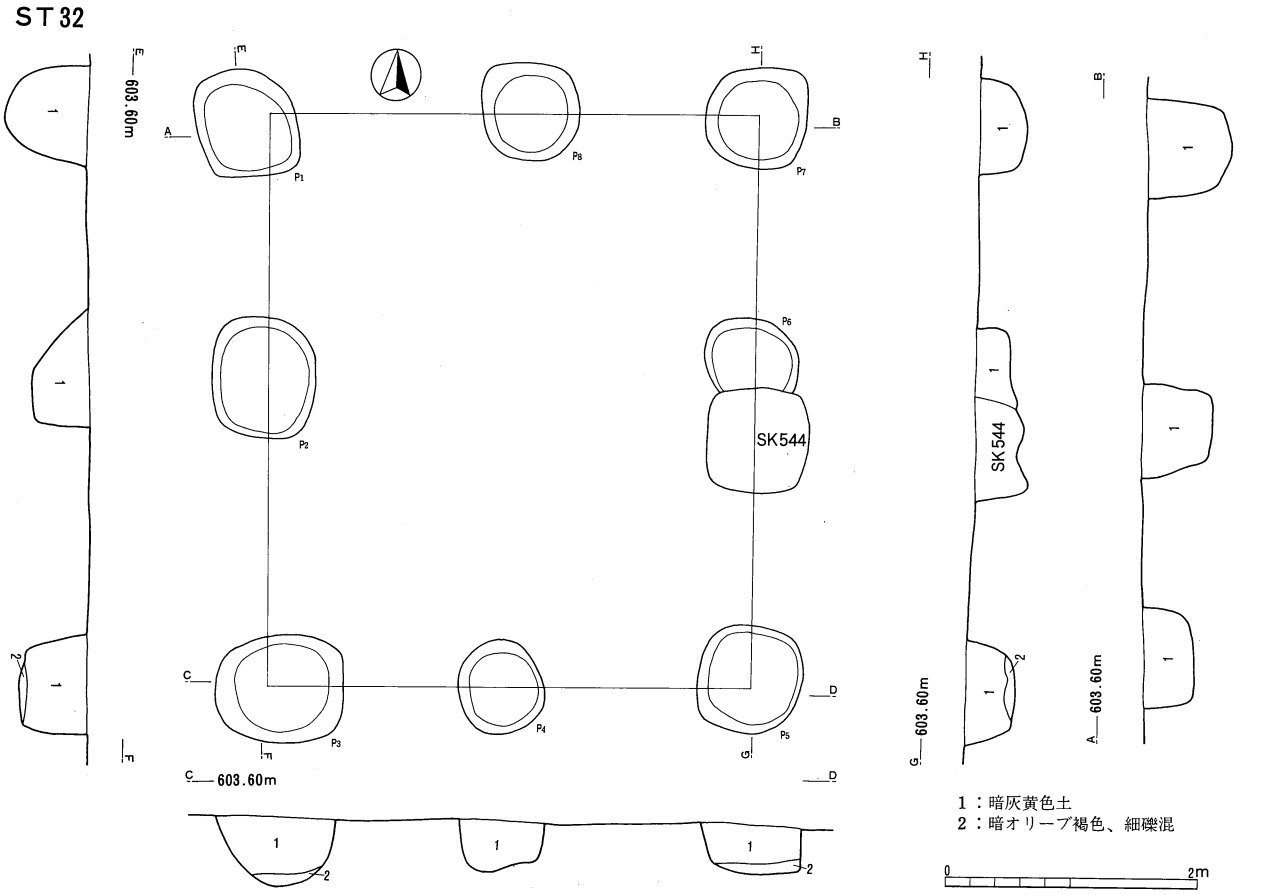
ST29　位置：南部Ｃ区　図版42、第78図、PL34

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。当初、SB115の煙道先にある柱穴１基を検出できたが、SB115の床面を調査した際、その柱穴に関係すると思われる柱穴３基を確認したことから本址を認定した。本址は２間×２間の建物址で、方形のプランになる。なお、北東隅の柱穴の一部がSB118に切られていた。柱穴：掘り方は方形を基本形とするが、一部不整形になるものもある。その規模は一辺約1.0ｍを測り、周囲の建物址と比べるとかなり大きく、深さはいずれも平均50cmと共通している。底面は平坦になるものが多いが、Ｐ１・８では凹凸がある。柱痕跡はＰ２・３で観察され、掘り方の中央に位置する。また、Ｐ１・６では底面に灰色化した箇所が認められたことから柱の位置が推定できる。柱痕跡の多くは底面に達し、その径は15cmを測る。覆土はⅡＡ層に由来する粘土がブロック状に堆積し、下部にはⅡＡ$_2$層基質の粘性の強い黒褐色土を意図的に多量に入れていた。遺物の出土状況：掘り方から須恵器の甕の細片が出土している。時期：遺物による時期の判断は難しいが、主軸方向から１～２期にかけての建物址と考えられる。

ST31　位置：南部Ｂ区　図版30

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。柱穴は地山と容易に識別できたが、最終的に５基の柱穴を検出するに止まり、全体像は把握できなかった。なお、本址は中世のST31に切られていたが、その関係は覆土の色調の違いから面的に確定できた。柱穴：掘り方は径60～80cmの円形を呈し、その深さは一様でないが比較的しっかり掘り込まれた南西隅と東列の柱穴は50cmを測る。柱痕跡は観察できなかったが、底面の状況から柱の位置を確認できたものがあり、いずれも柱を固定するためか、壁際に接するように位置していた。覆土はⅡＡ層基質の細粒砂に炭化物が混在した単一層である。遺物の出土状況：北西隅の柱穴の掘り方から土師器の甕２片が出土している。時期：遺物による時期の確定は難しい。周囲の遺構の位置関係から２～４





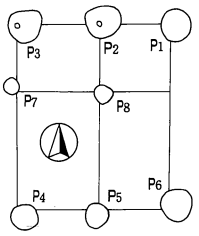
第78図　ST29・32実測図

期の建物址と考えたい。

ST32　位置：南部Ｃ区　図版45、第78図、PL34

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。本址はSB157の南側に隣接する２間×２間の建物址で、南北方向がわずかに長い。東列のP6はSK544・545と重複しておりSK544に切られ、545を切る。当初、その位置から本址との関連性も予想したが、覆土の状況から別な遺構と判断した。柱穴：柱穴は柱筋の通った配置である。掘り方の規模は平面、断面とも大きく、深い。柱痕跡は確認できなかったために正確な柱間の寸法は分からないが、Ｐ２とＰ６列、Ｐ３とＰ５列の間隔が2.53ｍと飛び抜けて広い以外はいずれも1.90ｍ前後の間隔になっていた。底面はＰ２・５・７のように平坦になるものとＰ４のように不整形を呈する二種類がみられたが、四隅に位置する柱穴を比較的深く掘り込む傾向が認められた。覆土はⅡＡ層に由来する粘質土で細礫が均一に含まれていた。遺物の出土状況：Ｐ３・Ｐ８の掘り方から土師器の甕の破片が出土している。時期：周囲の住居址との位置関係と遺物の様相から１期に帰属する。

ST34　位置：南部Ｃ区　図版45



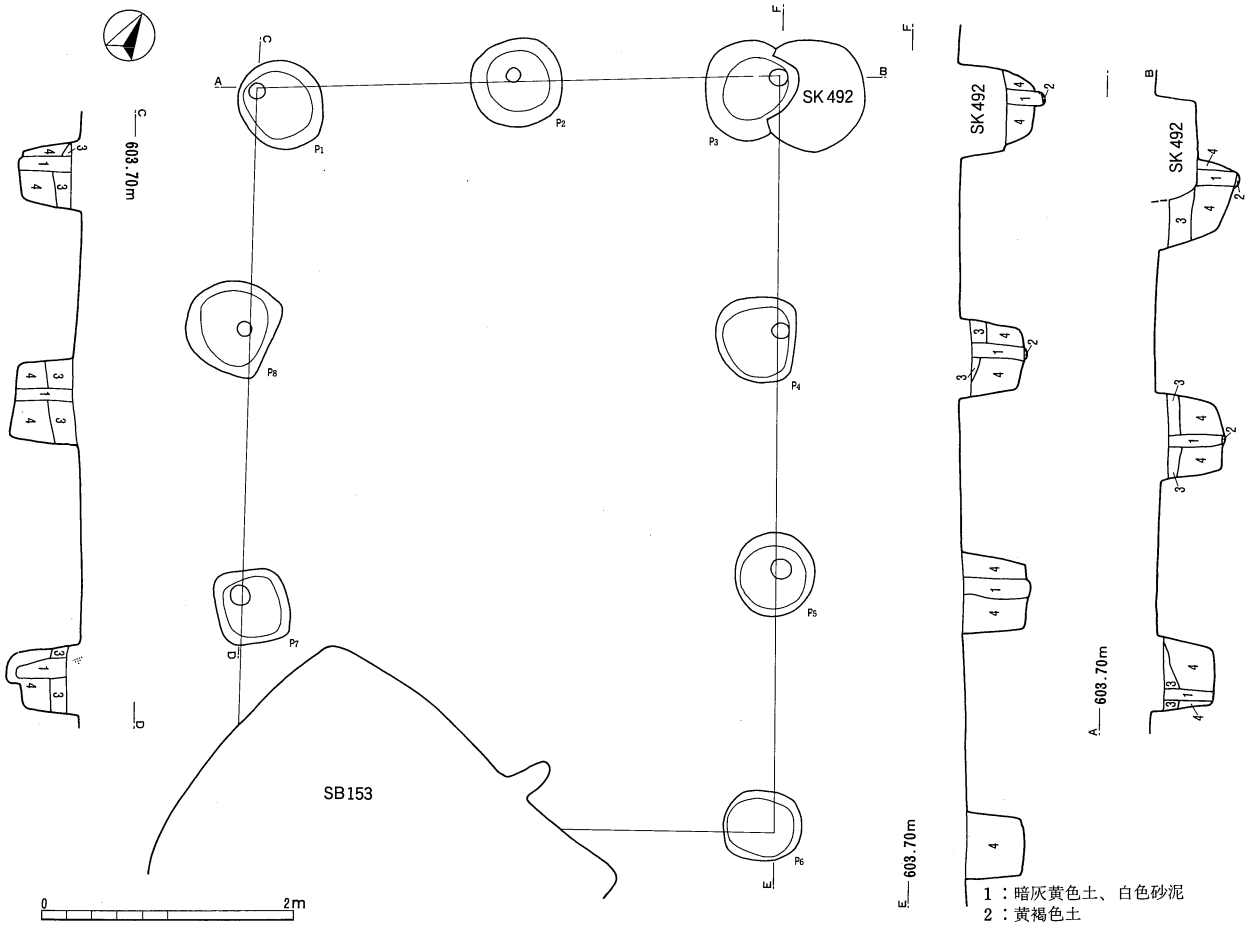
検出：ST32の南側に隣接する位置にある。本址は南北方向が約60㎝程長い、２間×２間の総柱式建物址である。本址の形態や主軸方向がST32と共通することから，ST32との間で建て替えがされたと推定できる。当初の検出段階では北側、南側の柱穴が検出でき、たが、中央の柱穴は確認できなかった。そのため、柱が建つと予想される位置を再検出した結果、西側では柱筋がわずかに外れる小さな円形の落ち込みを確認した。さらに、東柱の位置にも小さな落ち込みが認められた。その規模は北側や南側の柱穴と比較するとかなり小さくなることから別遺構の可能性も考えたが、配置の状況から本址に加えることとした。なお、東列中央の柱穴は検出できなかった。柱穴：北列と南列の柱穴の規模は径1.0ｍ程の円形を呈していた。約60㎝程掘り込まれた底面は凹凸のみられるものが多い。柱間の寸法はＰ４-７とＰ５-８の間隔が3.20ｍと広い以外は1.90ｍ前後と一定の間隔である。これはST32と共通する特徴で興味深い。柱痕跡はＰ２，３で確認したが、比較的不鮮明である。覆土はⅡＡ層に由来する粘土がブロック状に堆積する単一層である。遺物の出土状況：Ｐ１・５・６から須恵器の杯、甕、土師器のナデ甕片がそれぞれの掘り方から出土している。時期：主軸方向がST32と共通することや遺物の様相から１期に帰属する。

ST35　位置：南部Ｃ区　図版46、第79図、PL34

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。本址は３間×２間の南北棟で、南側でSB153に、北東隅で中世のSK492に切られ、北西隅の柱穴がSB160の煙道を切る。柱穴：柱穴は整然と配置される。柱間の寸法は桁、梁方向とも2.0ｍ前後のほぼ一定の間隔になり、規格性が高い。掘り方は円形を呈し、60㎝程掘り込んだ底面は平坦になるものが多いが、Ｐ７は二段の不整形になり、予め柱の位置を決めていたと推定できる。柱痕跡はＰ６を除いたすべての柱穴で認められた。径20㎝を測る柱痕跡はいずれも底面に達しており、Ｐ２・３では柱の当たる箇所が灰色化していた。覆土はⅡＡ層を基調とするが、下層ににぶい黄褐色のⅡＡ$_2$層質の土が多量に観察された。遺物の出土状況：Ｐの掘り方から土師器の高杯の破片が出土している。時期：１期に帰属するSB161を切ることと周囲の住居址の主軸などから３期に帰属する。

ST36　位置：南部Ｃ区　図版49

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。西側は調査用地外にかかるため、全部で７基の柱穴を確認した。そのため、正確な規模は不明だが、３間×２間の南北棟になると予想される。柱穴：円形を呈する柱穴の規模は大きく、深さは平均約50㎝を測る。また、断面形はＵ字形になるものが多いなかで、南列中央の柱穴のみ不整形を呈していた。柱痕跡は東列のみで確認できたが、径20㎝の円形に近い形状を呈し、掘り方の底面



第79図　ST35実測図

に達する例が覆い。覆土はⅡA層に由来し、下部にⅡA_2層基質の黄褐色土が多量に入れられていた。遺物の出土状況：北東隅と南列の柱穴の掘り方から土師器甕の破片が6片出土した。時期：遺物の様相と該期の住居址と主軸が共通することから2期に帰属する。

ST39　位置：南部C区　図版48

検出：ⅡA_2層上位を検出面とする。本址は3間×2間の南北棟で、北側でSB216に、南側でSB215に、また、SK444・518・525にそれぞれ切られる。柱穴は比較的明瞭に検出できたが、SK518と重複する北側列中央の柱穴は結局確認できなかった。本址の南西方向に位置するST35とは、主軸方向、形態、規模がほぼ共通することから本址との関連性が強いと推定できる。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は整然とした配置状況を呈する。桁方向の柱間の寸法は2.10m前後で等間隔になる。円形の掘り方は径82～98cmとかなり大きく、深さも60cm程掘り込んでおり、特に、東側列では隅に位置する柱穴を深く掘り込む傾向が認められた。底面は平坦になるものがほとんどであるが、南東、北西隅の柱穴は二段状の不整形である。覆土はST35と共通し、ⅡA層質の粘質な土を埋め戻している状況が観察された。時期：SB216に切られることと主軸方向から2期に帰属する。

ST41　位置：南部B区　図版33

検出：SB175の西側に位置する2間×2間の建物址である。南西付近で撹乱を受けるために、柱穴の一部が確認できなかった。本址のプランは一辺3.87mの方形になり、棟方向ははっきりしない。柱穴：柱穴は柱筋の通った配置である。柱間の寸法は東西、南北方向とも等間隔になり、規格性が高い。柱痕跡は北西隅と東列中央の柱穴を除いて確認することができたが、いずれも掘り方の中央に位置する。掘り方は径55

cmの円形を呈し、30cm程掘り込まれた底面は平坦である。覆土はⅡＡ層基質の褐色土で埋め戻していた。また、柱痕跡の一部には炭化物が観察された。時期：遺物は出土していないが、周囲の遺構の位置関係や主軸方向から４期の建物址と考えたい。

ST42　位置：南部Ｂ区　図版35、第80図、PL35

検出：ST41の北側に隣接する建物址で柱穴は地山と明瞭に区別できた。本址は西側に庇部が付属する３間×４間の建物址になる。南北方向が約20cm程長いが、方形のプランを意図して構築した可能性が強い。東側でSB192に切られ、北側ではSB205を切っていたが、いずれも覆土の色調差からその関係は明確である。当初、庇の柱穴が身舎の柱穴の配列と多少ずれていたために、柵址などの別遺構になることも予想したが、周囲にこれと繋がる遺構が検出されなかったことを根拠に本址の庇部と断定した。柱穴：身舎の柱穴は直線状に配置される。庇と身舎との間隔は約1.30ｍを測る。身舎の柱間の寸法は東西方向が1.85ｍ前後と等間隔になるのに対し、南北方向はＰ６とＰ７の間隔がその両側の柱間より40cm短い。柱痕跡はＰ２・９・10・12・13で確認したが、いずれも底面には達していなかった。また、P13では底面中央に灰色化した箇所が観察されたことから柱の位置が推定できた。円形の掘り方の規模はほぼ共通し、底面は平坦な柱穴が多い。覆土はかなり砂質を帯びたⅡＡ層基質の細粒砂であるが、色調から２層に分層された。遺物の出土状況：Ｐ７・８から須恵器の甕の破片が１片ずつ出土している。時期：１期に帰属するSB205を切り、周囲の遺構の位置関係から４期と思われる。

ST43　位置：南部Ｂ区　図版36、PL35

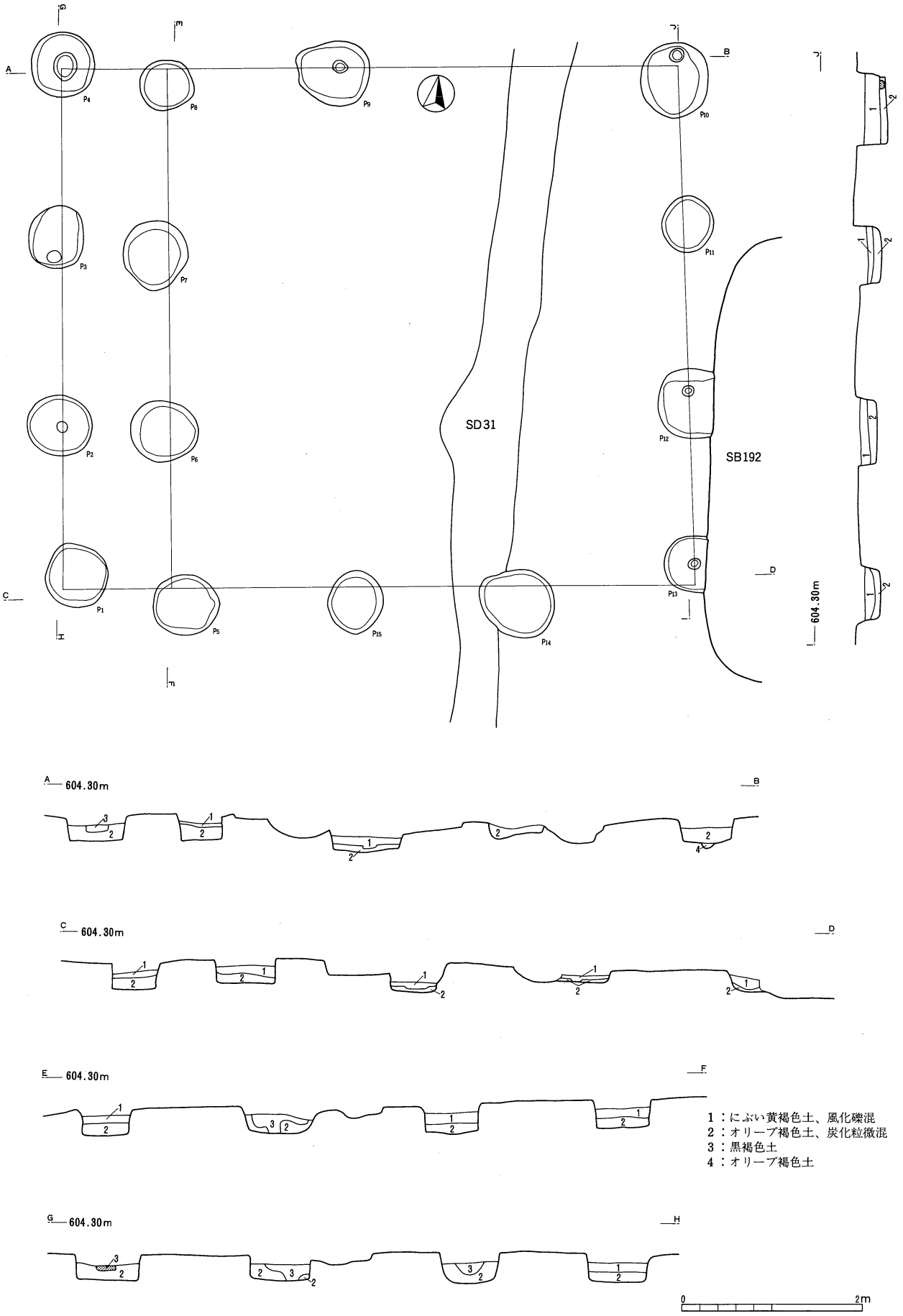
検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出面とする。本址は南北方向が90cm程長い、２間×２間の南北棟である。柱穴：桁、梁方向の柱間の寸法はそれぞれ2.0ｍと1.60ｍ前後と一定の間隔になり、規格性が認められる。掘り方は円形を基本とするが、北東隅の柱穴だけが方形を呈していた。底面は平坦で、建物の自重によって柱が地山に食い込んだと推測される円形の小さな落ち込みが観察された柱穴もある。覆土は淘汰の良い細粒砂を基調とする単一層である。時期：遺物が出土していないため時期の確定はかなり難しい。周囲の住居址との主軸や配置などから４期と考えたい。

ST44　位置：南部Ｂ区　図版31

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とし、地山との識別は容易である。北側でSB172に切られるため、全体像は把握できなかったが、調査した箇所から推定すると、３間×２間の南北棟になると思われる。なお、遺物は出土しなかった。柱穴：柱穴は列の揃った配置である。柱間の寸法は桁方向が1.80ｍ、梁方向が2.10ｍ前後の等間隔になる。掘り方は円形を呈し、その規模はほぼ共通するが、西列の南から二番目の柱穴は規模がかなり小さく、ほかの柱穴とは形態が異なる。柱痕跡は北西隅の柱穴を除いて観察されたが、径15cmほどの円形で、20～30cm掘り込まれた底面に達していた。覆土はⅡＡ層を基調とする単一層で、柱痕跡には白色砂が多量に混入し、明瞭である。時期：13期に帰属するSB172に切られること、住居址の分布状況から２～４期の幅のなかで考えたい。

ST45　位置：南部Ｂ区　図版45

検出：SB196の西側に位置する建物址で、プランは明瞭である。本址は２間×１間の建物址であるが、プランはほぼ方形になる。主軸は北から40度近く振れており、周囲の建物址にはみられない特徴で、機能面を考える上で興味深い資料である。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は規格性がみられる、整然とした配置である。柱間の寸法は南北方向が等間隔になり、長さ1.50ｍを測る。掘り方は規格の揃った円形を基本形とするが、北西隅の柱穴だけが方形である。掘り方の底面には小さな起伏が認められ、西列では柱が地山に食い込んだ痕跡が認められた。覆土はⅡＡ層に由来する褐色土である。時期：本址の北側に位置するST51と規模、形態が共通し、周囲に本址と主軸を同じにする遺構がみられないことから１期に帰



第80図　ST42実測図

属すると考えたい。

ST46　位置：南部Ｂ区　図版32、PL35

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。地山には礫が多量に混在しており、柱穴の覆土は黒色を帯びることから明瞭に区別された。本址は３間×３間の建物址で、ほぼ方形のプランになり、床面積は約30㎡と大きい。柱穴：柱穴は柱筋の通る整然とした配置である。柱痕跡は確認できなったために正確な柱間の寸法は不明だが、桁、梁方向とも一定の間隔にはならない。掘り方は一部不整形になるが、円形を呈するものが多く、その規模はばらつく。隅にくる柱穴は深く掘り込まれ、断面は逆台形状になる柱穴がほとんどである。覆土は単一層で、地山の礫が多量に混在する細粒砂を主体としていた。時期：主軸方向から２～４期の建物址と考えたい。

ST47　位置：南部Ｂ区　図版30

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とする。本址は南北方向が約10cm長くなるが、プランは一辺3.70ｍ前後の方形に近い、２間×２間の建物址になる。西列中央の柱穴は検出できなかったが、検出面が低かったこともあり、本来は存在したと思われる。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は列の揃った整然とした配置である。柱間の寸法は南北方向の一部を除いて、1.80ｍ前後の等間隔になる。円形の掘り方は規模が揃い、底面は平坦になる。覆土は地山のⅡＡ層に由来する粗粒砂の単一層である。時期：周囲の遺構の位置関係から２～４期に帰属する。

ST48　位置：南部Ｂ区　図版34、PL36

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出したが、地山との識別は容易である。本址は南北方向が約40cm程長い、２間×２間の建物址である。北西隅の柱穴がSK619に切られていたが、平面的に確定できた。柱穴：柱痕跡は比較的鮮明で、南列中央の柱穴を除いて確認した。円形を呈する柱痕跡は径10cmを測り、掘り方の壁際による例が多い。柱筋の通った柱間の寸法は桁方向の北側が2.41ｍと広い以外は梁、桁方向とも2.0ｍ程の等間隔になり、規格性が高い。方形の掘り方は規模が揃い、20cm程掘り込まれた底面は平坦になる例が多い。覆土はⅡＡ層を基調とし、柱痕跡には粗粒砂が多量に混在する。時期：住居址の分布状況や４期と判断したST43と軒先が揃うことから本址も同時期の所産であろう。

ST50　位置：南部Ｂ区　図版29、PL36

検出：ST44の南側に隣接する、３間×３間の建物址である。一辺5.0ｍ程の方形のプランになる。本址は西側でSB188に切られるが、西列の柱穴は住居址の床面で検出することができた。柱穴：柱穴は柱筋が通った整然とした配置である。柱間の寸法は柱痕跡が確認できなったため、桁、梁方向とも微妙に異なる。掘り方は円形を呈し、その規模はばらつく。垂直に掘り込まれた底面はほぼ同じ深さで、平均25～30cmを測る。覆土はⅡＡ層基質の単一層で、灰色の砂がブロック状に混在していた。遺物の出土状況：Ｐ６・８・９より土師器の甕４片、須恵器の蓋１片などが出土している。いずれも掘り方から出土した遺物で細片である。時期：東側に隣接するSB187と主軸方向が共通することから４期と判断したい。

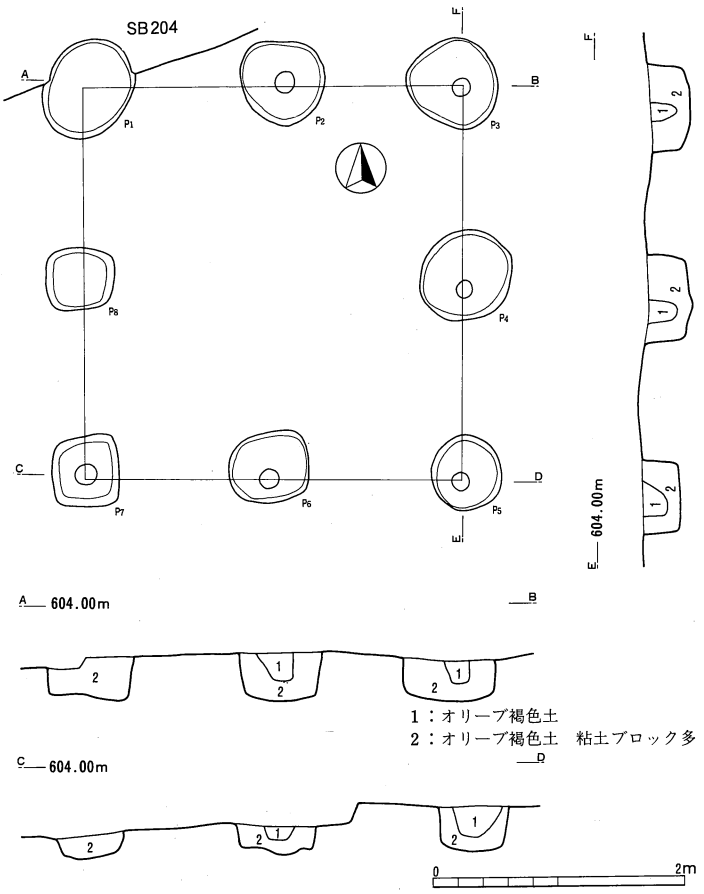
ST51　位置：南部Ｂ区　図版38、第81図、PL36

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。本址はSB202・204に切られるが、南西の柱穴はSB202の床面で検出した。本址は２間×２間の建物址になり、南北方向が約10cm程長いが、ほぼ方形のプランと判断してよい。柱穴：方形と円形を呈する柱穴は整然とした配置で、西列を除いて不鮮明ではあるが柱痕跡が観察された。柱痕跡は掘り方の中央に位置し、いずれも掘り方の中位で止まっていた。Ｐ５では平面では明確に確認できた柱痕跡は断面では形状が不鮮明で、柱の抜き取りとの関連性が推測される。柱間の寸法は1.55ｍ前後の等間隔になる。覆土はⅡＡ層を主体とするオリーブ褐色の単一層で、ブロック状に堆積する。遺物の出土状況：北西隅の柱穴から土師器の甕類、須恵器の杯片が、その東隣の柱穴からは須恵器壷１片、土師器甕

3片がそれぞれ掘り方から出土している。だが、北西隅の柱穴は住居址と重複しているため住居址から取り込んでいる可能性も強い。時期：3期に帰属するSB202に切られることと、住居址の分布状況から1期に帰属する。

ST52　位置：南部B区
図版34

検出：IIA_2層の検出面は礫が多量に含まれており、検出は難しい。本址は2間×2間の南北棟で、主軸方向はほぼ南北にとる。北列はSB206に切られていたが、住居址の床面で検出することができた。なお、遺物は出土していない。柱穴：円形を呈する小規模な掘り方で、柱痕跡は観察できなかった。柱間の寸法は桁、梁方向とも一定の間隔にはならず、2.10～2.40mを測る。掘り方の規模は揃うが、その断面形は皿状とU字形の二種類がみられ、深さは35～40cmと共通する。覆土は地山のIIA層を主体とする単一層で、小豆大から拳大の礫が均一に混在していた。時期：北側に隣接するSA6や南側のST46と主軸方向が共通することからこれらとは同一時期と考えられるが、時期を限定する根拠に弱いため、一応2～4期のなかで捉えておきたい。



第81図　ST51実測図

ST54　位置：南部B区　　図版36

検出：ST43の北東に位置する、2間×2間の建物址である。一辺4.0mの方形のプランで、南東隅の柱穴はSB209に切られていた。なお、遺物は出土していない。柱穴：掘り方は径30cm前後の円形で深さも一定である。柱間の寸法は梁、桁方向とも等間隔にならないものの、相対する柱間の寸法はいずれも一定になり、規格性が認められる。覆土は粘土ブロックが明瞭に観察され、IIA層質の褐色土で埋め戻していた。時期：東側に隣接するSB210と主軸が共通することから5期と考えられる。

ST55　位置：南部B区　　図版34

検出：ST48の北側に隣接し、主軸方向もほぼ同じである。柱穴はIIA_2層の地山とは明瞭に識別された。本址は1間×1間の東西棟である。柱穴：柱穴は整然とした配置状況で、プランは長方形である。円形を呈する掘り方の規模は最大90cmと大きく、深さ35cm程掘り込んでいた。また、断面形はU字状と鍋底状になるものがある。径20cmを測る柱痕跡は北西隅の柱穴で観察されたが、掘り方の壁際に位置していた。覆土はIIA層基質の粘質なオリーブ褐色土である。時期：南側に位置するST48と本址も同一時期と判断できるが、時期を限定する根拠に弱いため2～4期の幅のなかで考えたい。

ST60　位置：南部B区　　図版32

検出：IIA_2層上位で検出する。ST55と同様に1間×1間の建物址で主軸は南北方向である。プランはきちんとした長方形にならず、規格性に乏しい。南部の建物址のなかでは最小の床面積である。柱穴：掘り

方は円形を呈し、検出面から底面まで20cmを測る。断面形は鍋底状になる。覆土はⅡＡ層を基調とする単一層で、炭化物をわずかに含んでいた。時期：遺物が出土しておらず、また、周囲の遺構との関係が不明なため、時期の確定は難しい。

ST521　位置：北部Ｄ区　図版62、PL37

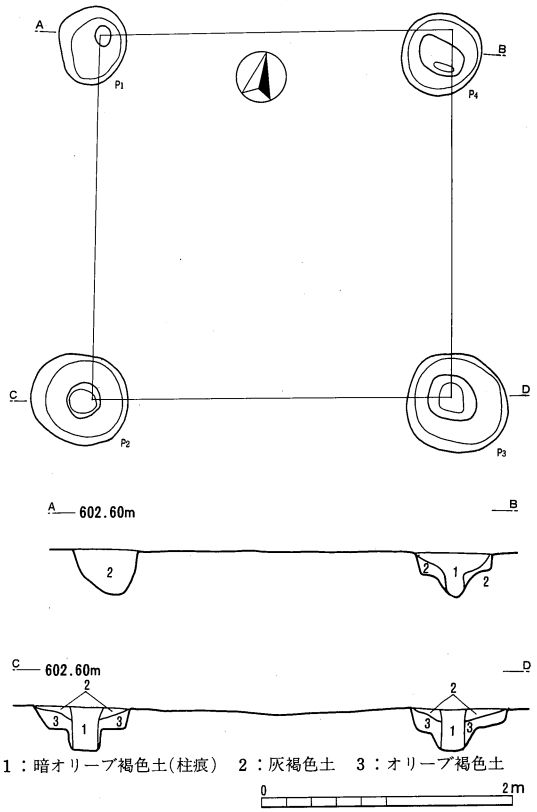
検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出するが、柱穴は明瞭に区別できた。本址は２間×２間の南北棟である。南西隅の柱穴がST522とわずかに重複するが、本址が切られる。柱穴：柱穴は整然と配置される。柱間の寸法は梁方向が1.90ｍ前後とほぼ一定であるのに対し、桁方向は南側が広くなっている。柱痕跡は確認できなかったが、北、東列の一部の柱穴で建物の自重による柱の落ち込みを掘り方の壁際に確認することができた。掘り方は円形に近いがその規模はばらつく。底面までは平均20cm程掘り込んでいた。覆土は地山のⅡＡ層基質の粘土を主体とし、ブロック状に堆積する。遺物の出土状況：北西隅の柱穴の掘り方から土師器の甕２片が出土した。時期：主軸や住居址の配置から１～２期に帰属する。

ST522　位置：北部Ｄ区　図版62

検出：ST521の南側に隣接する、２間×２間の南北棟である。北側でST521を切っていたが、本址はST521と形態が同じことや位置も近い状況から、ST521から本址への建て替えがなされたものと推測される。床面積は本址の方が５㎡程広くなっていた。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は列の揃った配置で、プランも形状が整う。柱間の寸法は桁方向が梁方向より20cm程長く、それぞれわずかずつ間隔は異なる。円形を呈する掘り方は規模が揃い、底面に向かって垂直に掘り込んでいた。柱痕跡は観察できなかったが、西列中央と東列両端の柱穴を除いて、掘り方の底面で径20cm程の円形状の落ち込みがあり、柱の位置を推定することができた。柱は掘り方の中央に据えるものと壁際に寄せる二通りが認められる。覆土はⅡＡ層に由来する粘質な土で埋め戻された単一層である。時期：ST521との関連性が強いことから本址も１～２期に帰属する。

ST523　位置：北部Ｄ区　図版62、第82図

検出：ST521の北東に位置し、西側へ12度振れた主軸はST521・522と共通している。本址は南北方向が約50cm長い１間×１間の建物址で、プランは地山と明瞭に識別された。床面積は7.09㎡と北部でもかなり小型の建物址の類である。柱穴：北西隅を除いた柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は掘り方の中央に位置し、径20cmの円形を呈していた。また、柱痕跡は底面の二段状に落ち込んだ箇所に食い込んでおり、柱を固定するために当初から掘り込んだのか、あるいは建物の自重によって柱が沈んだのか、判断することはできなかった。覆土は２層に分層されたが、基調となる土はⅡＡ層に由来する粘質な細粒砂である。下層にⅡＡ$_2$層質が多量に観察されたことを根拠に分層したが、基本的には一時的に埋め戻したと判断してよい。遺物の出土状況：南東隅の柱穴の掘り方から須恵器の杯、土師器の甕１片などが掘り方から出土したが、いずれも細片である。時期：遺物の様相から１期に帰属する。



第82図　ST523実測図

ST524　位置：北部Ｄ区　図版63、PL37

検出：本址はSB523の北東に隣接する、2間×2間の南北棟である、主軸は東へ45度と大きく振れ、周囲にある掘立柱建物址にはみられない特徴である。柱穴：柱穴は円形を基本形とするが、北列の2つの柱穴は長軸80cmの楕円形を呈していた。柱痕跡は確認できなかったが、北列中央の柱穴では建物の自重によって柱が沈んだ痕跡が認められた。柱間の寸法は梁方向が2.42m、桁方向が2.93mの等間隔になっていた。覆土はⅡA層を主体とする単一層である。遺物の出土状況：南列中央の柱穴から土師器の杯2片、甕4片が掘り方から出土した。時期：遺物の様相から1期に帰属する。

ST525　位置：北部D区　図版64、第83図

検出：ⅡA$_2$層を検出面とする。本址は2間×2間の南北棟である。梁方向中央の柱穴は柱痕跡状の落ち込みしか認められないが、柱筋が通ることから本址に加えた。おそらく掘り方を持たない形態であろう。柱穴：柱穴は整然と配置される。柱痕跡は一部撹乱を受けたP5を除いた柱穴で観察されたが、径15cm程の円形を呈していた。柱間の寸法は梁、桁方向とも等間隔にならないが、相対する柱間の間隔はほぼ共通している。円形を基本形とする掘り方はP3・6のように不整形になる柱穴も含んでいるが、深さはいずれも30～40cm程掘り込んでいた。底面は平坦であるが、P6・12では柱が沈んだ痕跡が観察され、それらは灰色化していた。覆土はにぶい黄褐色土でⅡA層を基調とする。遺物の出土状況：P1の掘り方から土師器の甕数片、須恵器の杯1片が掘り方から出土している。時期：1期に帰属するST524と規模、形態、柱間の間隔が共通することから1期に帰属すると考えたい。

ST526　位置：北部D区　図版58、第83図、PL37

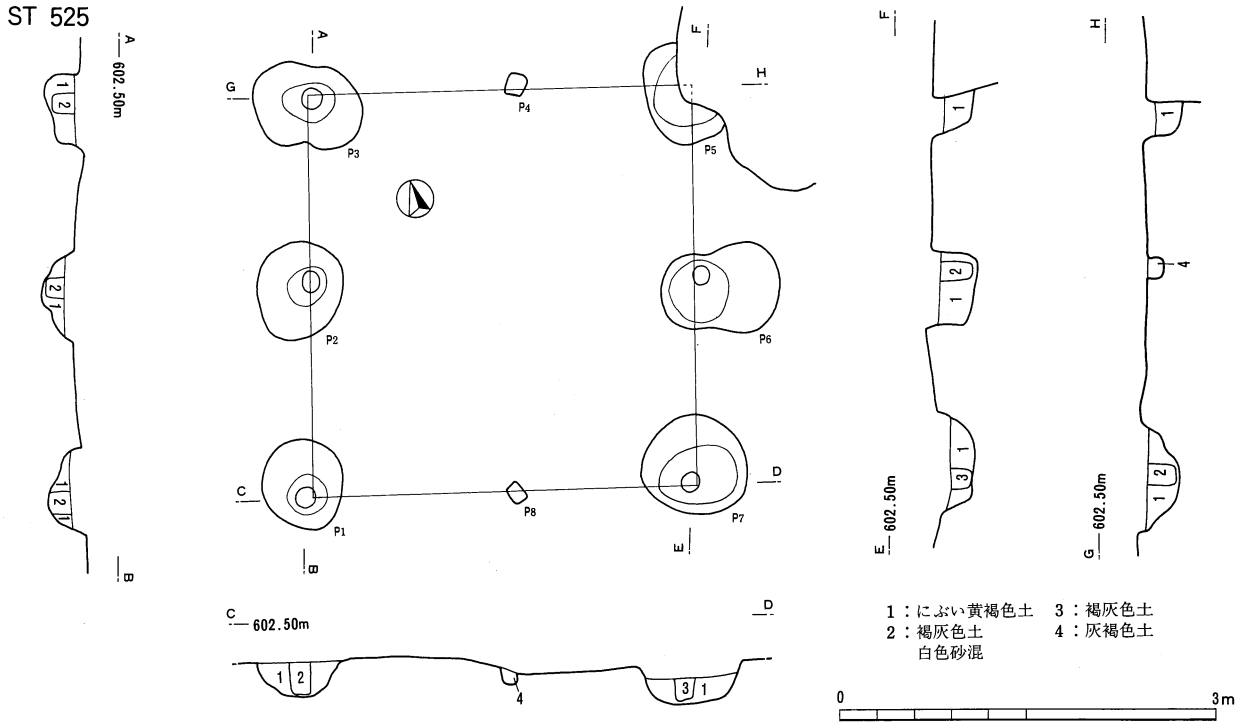
検出：ⅡA$_2$層上位で検出し、北側でSB542を、南側でST527を切る。本址の覆土は黒色を帯びることからSB542とは容易に判別できたが、ST527とは覆土の特徴が近似しており、最終的に混入する黄褐色の粘土ブロックと炭化物の多寡によって決定した。本址は3間×2間の東西棟である。柱穴：掘り方は長方形を基本形とするが、四隅にくる柱穴は内側を向くように掘り込まれており、掘立柱建物址の多い本遺跡でも本址だけでみられる特徴として興味深い資料である。柱痕跡はP4・5を除いて確認されたが、P4・5では底面で灰色化している箇所が観察され柱の位置が推定できる。柱痕跡の芯々間をみると、P2－3が2.06mを測るほかは桁、梁方向とも2.25m前後の等間隔になっていた。垂直に掘り込まれた掘り方の断面形は不整形になる例が多いが、P1は袋状になる。覆土はⅡA層を基調とし、一時的に埋め戻されていたが、下層にオリーブ褐色のⅡA$_2$層基質の土が多い傾向が認められた。遺物の出土状況：P6・7を除く各柱穴から土師器の甕片や須恵器の破片などが1～8片出土しており、ほかと比較すると量的には多い。だが、P1～3はSB542を切る状況や、P5は単独であるものの出土した須恵器の杯がSB524出土の遺物と接合しており、本址に確実に帰属するかは不明である。なお、遺物の時期は総じて2期と思われる。時期：2期に帰属するSB542を切ることから2～3期の建物址になろう。

ST527　位置：北部D区　図版58、PL37

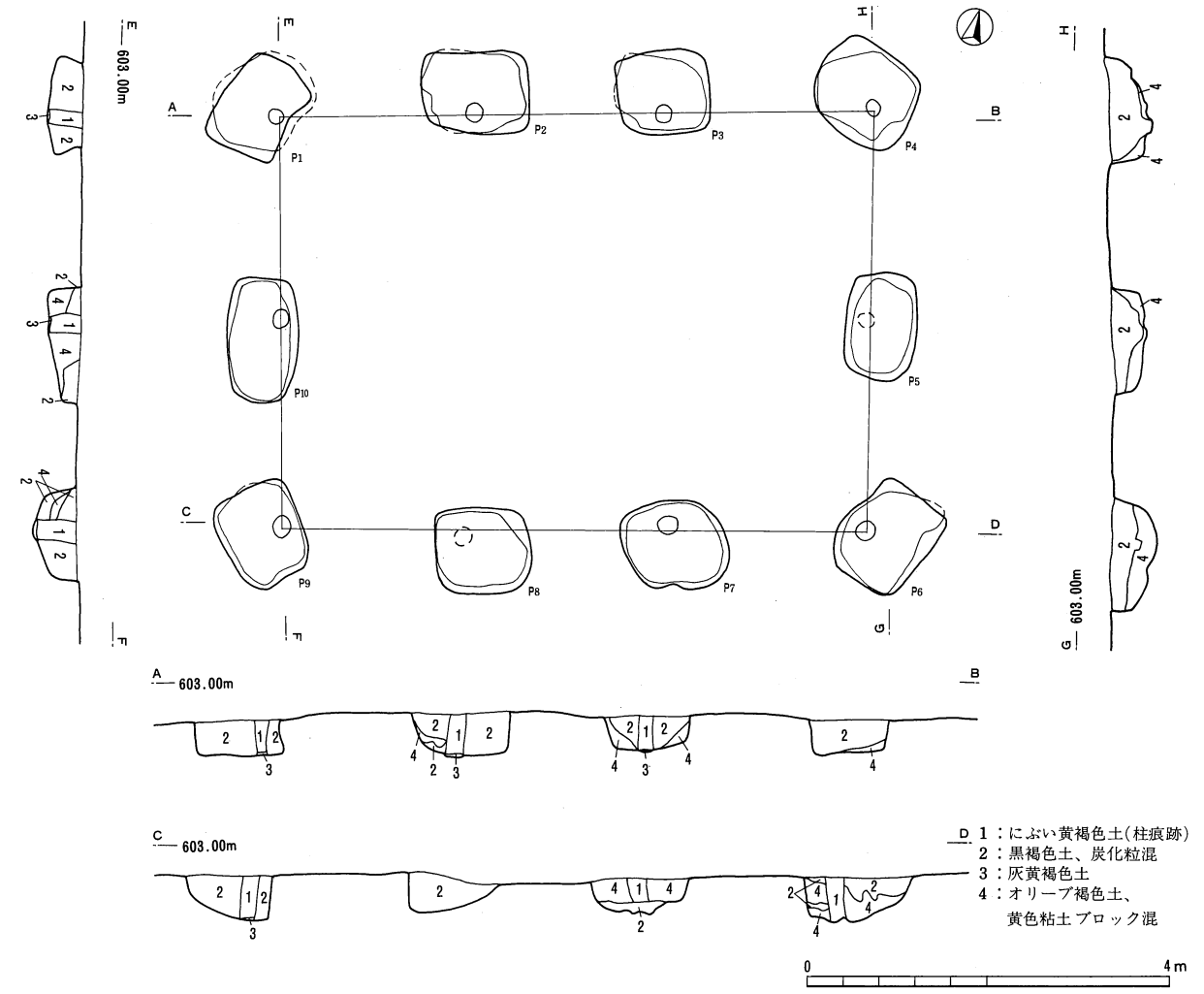
検出：本址は北側でST526に切られる、3間×2間の東西棟である。本址の主軸方向はST526と比較すると北へ15度程振れるが、同じ形態の建物址がほぼ同じ位置にあることから本址からST526への建て替えと推測できる。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は整然と配置される。掘り方の平面は長方形を基本形とし、ほぼ垂直に掘り込まれた底面は平坦になるものが多い。このうち柱の当たる箇所が凹んでいる柱穴も観察された。柱間の寸法は梁、桁方向とも1.70～1.90mを測り、等間隔に近い。柱痕跡は北西隅の柱穴を除いて確認できたが、柱を固定させるためか、掘り方の壁際に寄る例が多く、径20cmの円形を呈していた。覆土はⅡA層を基調とし、ブロック状の堆積状況が明らかなために分層できた柱穴もある。時期：ST526に切られることから2期に帰属する。

ST528　位置：北部D区　図版64、PL38

ST 525



ST 526



第83図　ST525(１：60)・526(１：80)実測図

検出：SB541の西側に位置する本址は地山との識別は容易である。プランの一部は西側の調査用地外に延びるために全体の構造は捉えていないが、調査した箇所から2間×2間の総柱式建物址になると推定できる。なお、遺物は出土していない。柱穴：円形を呈する柱穴は柱筋の通った配置で、すべての柱穴で柱痕跡を確認することができた。柱痕跡は掘り方の中央に位置し、底面に達する例が多い。また、柱と地山の当たる箇所は建物の自重のために底面からわずかに落ち込み、灰色化する状況が観察された。柱痕跡の芯々間は1.80m前後を測り、ほぼ等間隔とみてよい。覆土はⅡA層に由来する粘質な細粒砂を埋め戻す単一層である。時期：主軸方向から2～3期に帰属すると考えられる。

ST529　位置：北部D区　図版62、PL38

検出：ST528の南側に隣接する本址は主軸を南北にとる建物址で、プランは明瞭に検出できた。身舎は西側の調査区域外に延びるために全体像は把握できなかったが、調査した部分から3間×2間の南北棟と予想される。なお、本址の東側にあるSA501は本址と平行するように配置することから本址との関連性が高いと思われる。柱穴：掘り方は長方形に近く、その規模はばらつきがみられるが、隅に位置する柱穴が大きくなる傾向がみられた。整然と配列された柱穴では東側列の1基の柱穴を除いて柱痕跡を確認できた。柱痕跡は径20～24cmの円形で、底面と接する箇所は灰色化が明瞭である。柱痕跡の芯々間は梁、桁方向とも2.20m前後の等間隔で規格性が認められる。覆土はⅡA層に由来する粘質な細粒砂を基調とする単一層で、柱痕跡はかなり砂質を帯びることから明瞭に区別できた。遺物の出土状況：東列南側の2つの柱穴から、土師器の甕3片、須恵器の杯1片などがいずれも細片で出土した。時期：南側に展開する掘立柱建物址とは主軸方向が異なり、遺物からも時期の限定は難しいが、4期に帰属する可能性が高い。

ST530　位置：北部D区　図版56、第84図、PL38

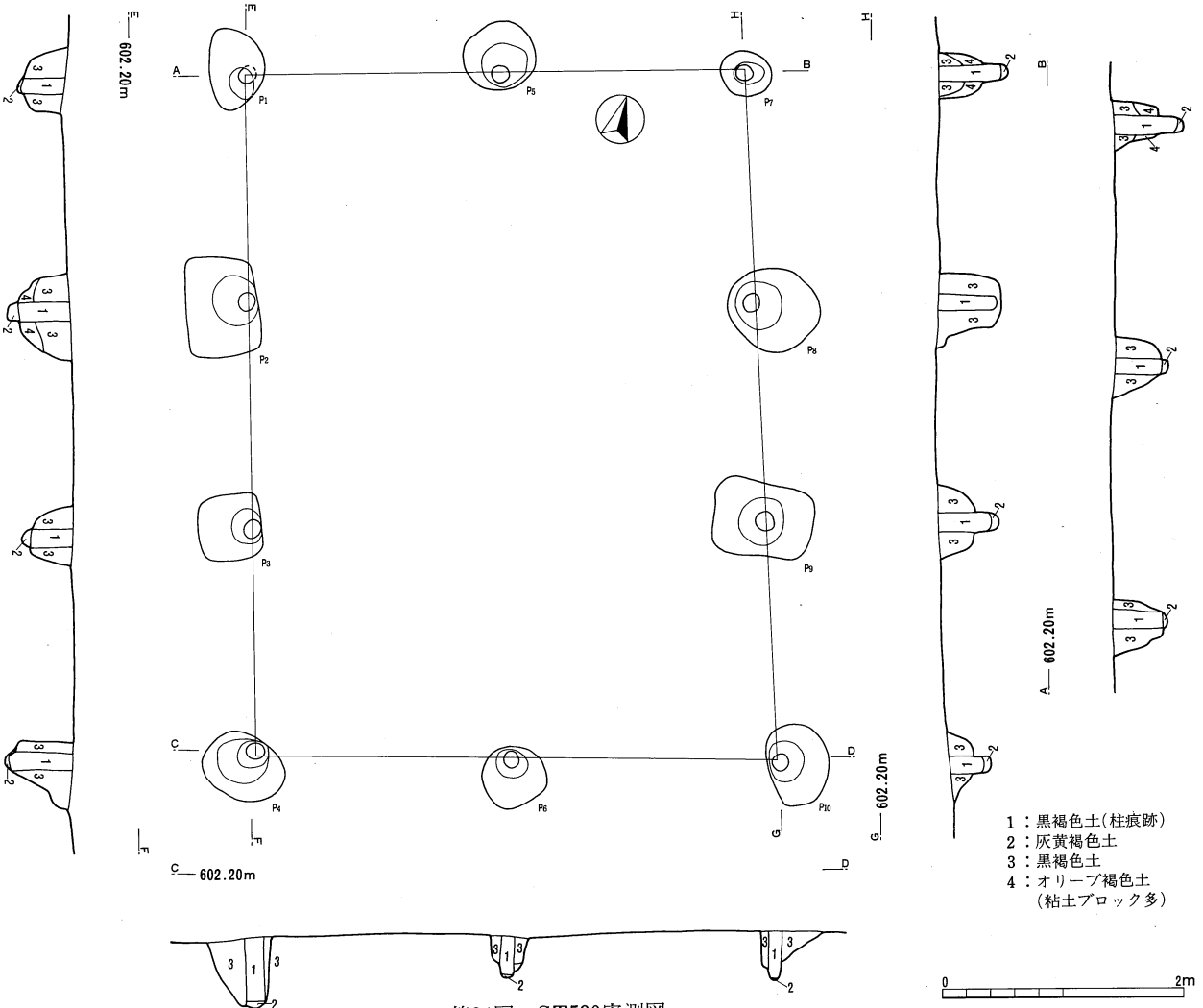
検出：ⅡA$_2$層上位を検出面とする。本址は3間×2間の南北棟で、東列がSB548を切っていた。本址の柱痕跡が住居址の覆土中に検出できたことから、その関係は容易に確定できた。柱穴：すべての柱穴で柱痕跡が確認され、柱筋の通る配置状況を確認することができた。柱間の寸法は、梁方向がP6とP10間が広いのを除いて、2.0m前後の一定な間隔になり、桁方向も1.90m前後の等間隔になっていた。柱痕跡は掘り方の壁際による傾向が認められ、P6・7・10のように地山に食い込んでいたものもある。また、すべての柱穴の底面では柱の当たる箇所が灰色化していた。掘り方は円形、長方形や方形など一様でなく、断面形はU字状を呈する。このうち棟木を支えるP5・6は浅い掘り方である。覆土は単一層で、ⅡA$_1$層基質の粘土が主体となり、下層にオリーブ褐色土は明瞭に観察される。柱痕跡もⅡA層を基調とする覆土であったが、所々間隙が観察された。遺物の出土状況：P1・3・4・6・8・9の掘り方からから須恵器の杯片、土師器の甕片、黒色土器Aの杯などが細片で出土している。P8・9はSB548と重複するが接合する遺物はみられない。だが、出土量が多いことから住居址の遺物を取り込んでいる可能性が高い。時期：遺物の様相と主軸方向から3期に帰属する。

ST531　位置：北部E区　図版69

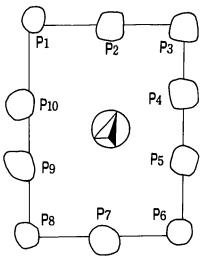
検出：SB557に切られる建物址で、柱穴の配列状況や柱痕跡が観察できたことから掘立柱建物址と認定しているが、その全体像は十分捉えられなかった。調査した箇所から推定すると北側に庇が付属する2間×3間、もしくは梁行が3間以上の建物址になると思われる。なお、遺物は出土しなかった。柱穴：柱痕跡は14～17cmの円形を呈し、すべての柱穴で観察された。掘り方は円形を基本形とするが、その規模はばらつく。覆土はⅡA層を基調とする単一層である。時期：8期に帰属するSB557に切られることからそれ以前の建物址となるが、主軸方向から2～5期の幅のなかで捉えておきたい。

ST533　位置：北部D区　図版58

検出：ⅡA$_2$層上位で検出する。本址は3間×2間の南北棟で、南西に位置するST539と主軸、形態が共



第84図　ST530実測図



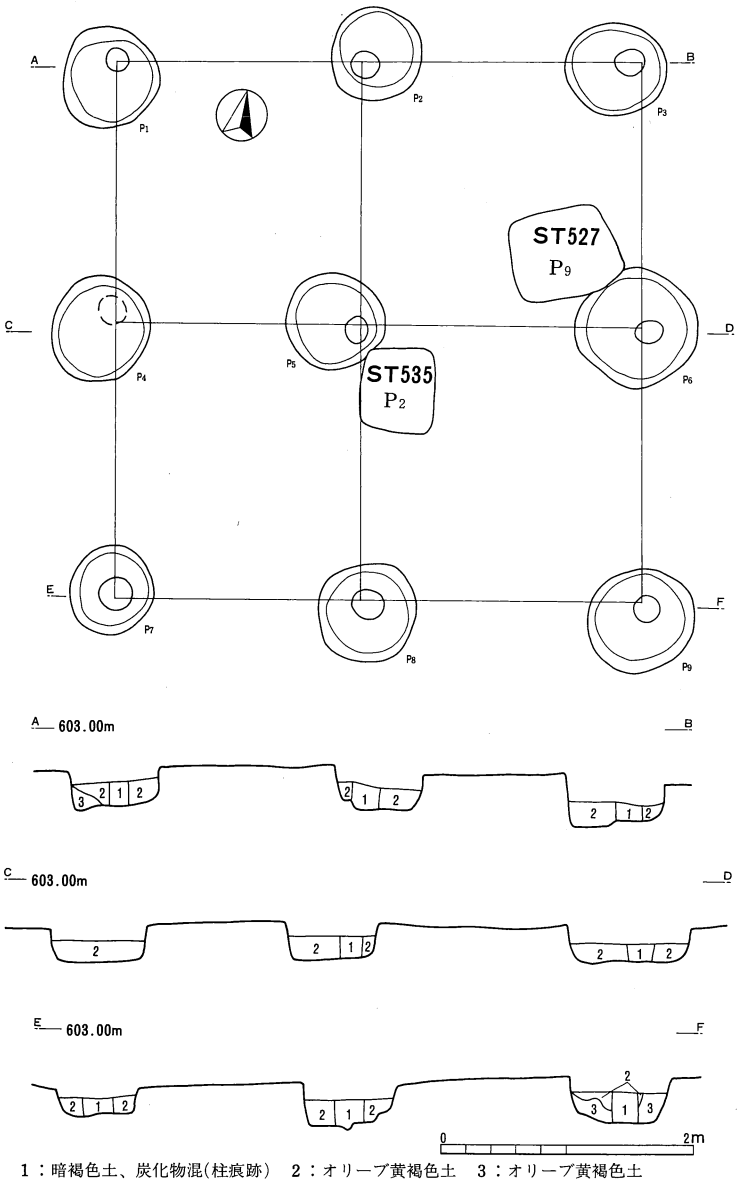
通し、さらに、本址がST539を切ることから、ST539が建て替えられた建物址と思われる。柱穴：西列の柱穴の配置は直線的でなく、中央がわずかに張り出す。掘り方は円形になる例が多いが、Ｐ３は方形を呈していた。平均40cm程掘り込まれた底面は平坦になる柱穴がほとんどである。なかには柱が沈んだために小さな落ち込みができ、その箇所が灰色化していることから柱の位置を推定できた柱穴がある。覆土は下層にIIA_2層基質の粘質土が明瞭に観察できたことから分層できる柱穴が多いが、基本的には一時的な埋め戻しである。遺物の出土状況：Ｐ２，３，６，７の掘り方から土師器の甕、須恵器の杯、長頸壷などの破片が全部で13点出土した。総じて２期の遺物である。時期：ST539を切ることや、３期と判断したST526と軒が揃うことから３期と考えたい。

ST534　　位置：北部Ｄ区　　図版56、第85図

検出：IIA_2層上位を検出面とする。本址は２間×２間の総柱式建物址で、一辺4.20ｍの方形プランである。ST527･535と重複するが、覆土の色調が近似することからその確定は困難を極めたが、含有物の違いを根拠に本址が切られると判断した。なお、遺物は出土していない。柱穴：P4を除いて柱痕跡が観察された。柱痕跡は柱筋の通る直線的な配置状況を示し、径20cm程の円形を呈していた。掘り方は規模が揃い、平坦な底面まで平均40cm程掘り込まれている。柱間の寸法は2.0ｍ前後の等間隔とみてよい。覆土はIIＡ層を主体とする単一層になる柱穴がほとんどである。時期：ST527との関係から１～２期に帰属する。

ST535　位置：北部D区
図版56、PL38

検出：ST534の南側に位置し、本址が切られる。本址は2間×2間の総柱式建物址になるが、東列中央の柱が検出できなかった。柱穴はいずれも平均30cm程掘り込まれ、検出できなかった柱穴は極端に浅かったか、あるいは当初から無かった可能性も強い。なお、遺物は出土しなかった。柱穴：掘り方は円形と方形の2種類があり、その規模は60cm程と周囲の掘立柱建物址と比較して余り大きくない。柱間の寸法は1.60m程の等間隔になる。柱痕跡は四隅の柱穴と北列中央の柱で確認できた。柱痕跡は径10cmの円形を呈し、掘り方の底面に達するが、北東、南西隅の柱穴では柱の当たる箇所が底面よりもさらに深く地山に落ち込んでいた。覆土はⅡA層を基調とする単一層である。時期：本址とST534との間で建て替えが推定できることから1～2期に帰属する。



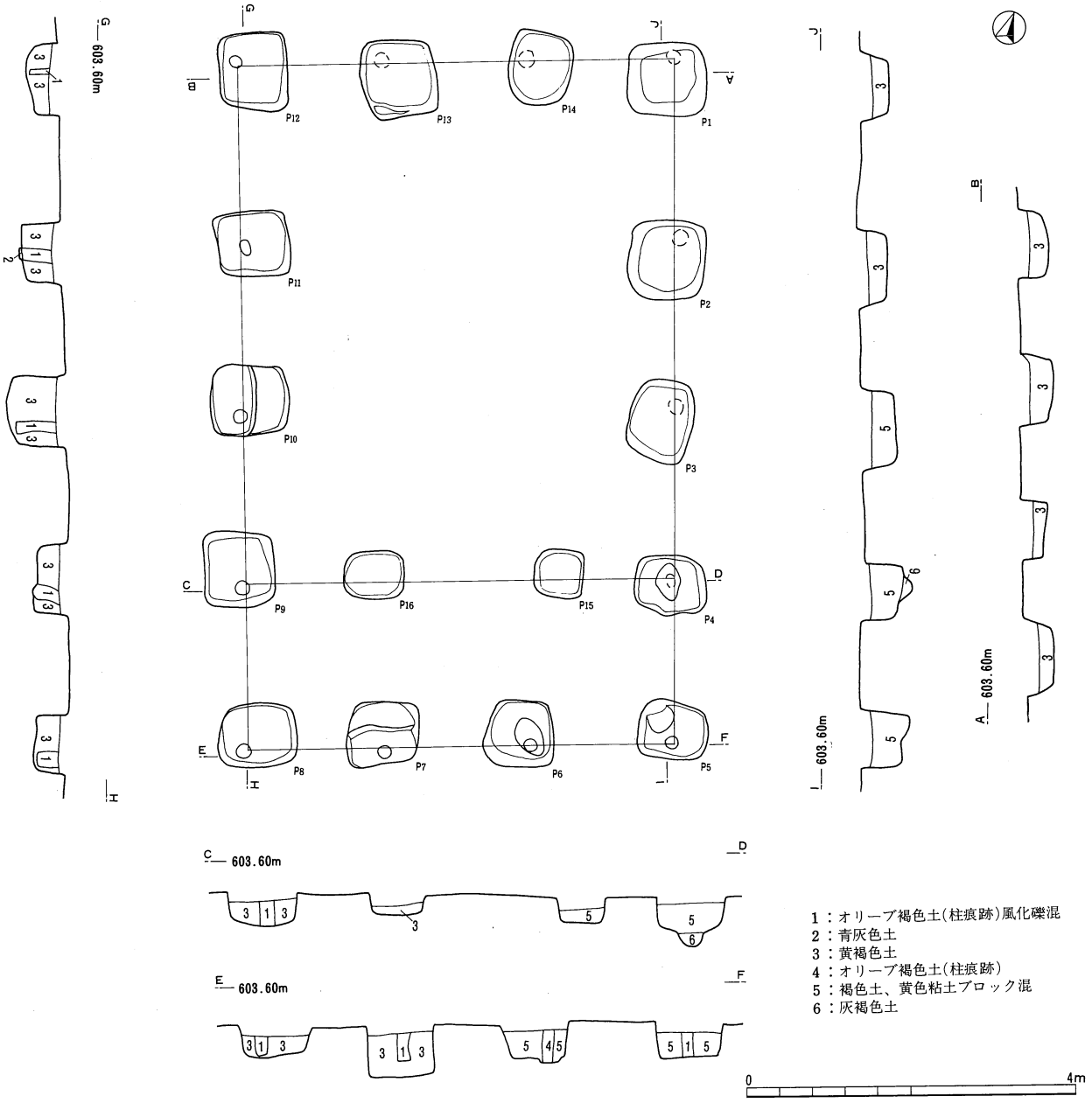
第85図　ST534実測図

ST536　位置：北部D区
図版56

検出：ⅡA$_2$層上位で検出する。本址はST541を切る、2間×2間の建物址で一辺4.50mほどの方形プランである。なお、遺物は出土していない。柱穴：北列の柱穴が揃わないほかは柱筋の通った配置である。掘り方の規模は径50cm程の円形になる例がほとんどで、60cm前後掘り込んでいる。このうち東列中央の柱がかなり深い。柱間の寸法は梁、桁方向とも微妙に異なる。柱痕跡は確認できなかったが、掘り方の底面が灰色化している柱穴がみられ、柱の位置を推定できた柱穴もある。覆土は周囲の掘立柱建物址と比べてかなり砂質を帯びる。基調となる土はⅡA層に由来するオリーブ褐色土の単一層である。時期：2期に帰属するST539とST541の軒が揃い、そのST541と本址との間で建て替えが考えられることから1～2期の建物址と思われる。

ST537　位置：北部D区　図版60

検出：ST529の南側に隣接する。3基の柱穴を検出したが、規模と位置関係から掘立柱建物址と認定した。だが、身舎の主体部が延びると予想される西側は調査用地外であるために、構造に関する詳細な状況は分からなかった。柱穴：柱穴の配置は揃わず、プランはわずかに歪む。掘り方は径40cm程と小規模であるが、柱間の寸法は2.65～3.13mと大きい。覆土は細粒砂を主体とする単一層で、細礫が均一に混在していた。遺物の出土状況：東列の柱穴の掘り方から、土師器の杯など3片が出土したが、いずれも細片であ



第86図　ST538実測図（１：80）

る。時期：主軸が周囲の建物址と一致しないことから、主軸が比較的ばらつく１期に帰属すると考えたい。

ST538　　位置：北部Ｄ区　　図版57、第86図、PL39

検出：ⅡA$_2$層上位を検出面とする。褐色を帯びる落ち込みは地山と明瞭に識別された。プランの南東付近でSB547と重複するが、本址の覆土には炭化物が多量に混在することから本址が新しいことを面的に確定できた。本址は南側に庇が付属する、４間×３間の南北棟で、本遺跡でも類例の少ない形態のひとつである。南面に庇が付くと判断した根拠は平面的な形態を重視したことに拠るが、P15・16の規模が小さく、それが桁方向の柱筋と逸れることもあり、P15・16が建物の間を仕切った柱穴となる可能性も捨象し難い。

柱穴：柱穴は列の揃った配置で規格性が高い。柱痕跡は西、南列で確認できたが、北、東列でも掘り方の底面に灰色化した箇所が観察されたことから柱の位置を推定できた。柱痕跡は径18cmの円形を呈し、掘り方の壁際に寄る例が多い。柱間の寸法は梁方向が1.80ｍ程の等間隔になるのに対し、桁方向は庇を含めて2.10ｍ前後が多いが、Ｐ１とＰ２間が若干広い。掘り方はいずれも方形で、深さは最大90cmを掘り込んでい

たが、P15・16の規模は小さく浅い。覆土はⅡA層に由来する粘質土を埋め戻した単一層である。遺物の出土状況：P３～６・15がSB547と重複するために遺物の出土量も多いが、重複関係のない柱穴からも10片以上の遺物が出土しており、ほかの掘立柱建物址と比較しても多い。遺物は土師器の杯、高杯、甕片、須恵器の蓋、杯類があるが、なかでも、P7では柱痕跡から器種の不明な土師器、須恵器の破片2点が出土した。総じて２期の遺物である。時期：１期のSB547を切ることと、遺物の様相から２～３期に帰属すると考えられる。

ST539　位置：北部D区　図版58、PL39

検出：本址は３間×２間の南北棟で、覆土は暗褐色であることから検出は容易である。ST533で前述したように、本址からST533への建て替えが予想される。また、北東隅ではSK1197に切られていた。柱穴：柱痕跡は北東隅の3基の柱穴と、南西隅の柱穴で確認できた。ほかの柱穴も掘り方の底面で灰色化した箇所が観察されたことから柱の位置が推定できた。柱痕跡の規模は径12～24cmの円形を呈し、底面に達していたが、建物の重さで柱が地山に落ち込んでいた柱穴も観察された。柱間の寸法は梁、桁方向とも一定の間隔にならず、特に、桁方向の中央の柱間の間隔が広い傾向を示した。掘り方は円形を呈し、深さは平均60cm程で、規模はほぼ揃っていた。覆土はブロック状に堆積する状況がみられ、特に粘性の強いⅡA２　基質の黄褐色土が明瞭なことから分層できた柱穴もあるが、基本的にはⅡA層を基調とする褐色土を埋め戻していた。遺物の出土状況：P１～５・７・９の掘り方から土師器の杯、甕片、須恵器の杯数片が出土した。総じて２期の様相である。時期：遺物の様相とST526との位置関係から３期と判断した。

ST540　位置：北部D区　図版56

検出：ⅡA$_2$層上位を検出面とするが、覆土と地山の識別は明瞭である。本址は３間×３間の建物址で、南北方向が約25cm長いが、ほぼ方形のプランとみてよい。柱穴：掘り方は円形を基本形とするが、なかには不整形の柱穴もみられる。底面までは40cm程掘り込まれ、断面形は逆台形とU字状になるものがみられる。柱痕跡は確認できなかった。柱間の寸法は梁、桁方向とも一定の間隔にならず、その最大の寸法と最小では40cmの差があり、規格性も認められない。覆土はⅡA層を基調とする暗赤褐色土の単一層である。遺物の出土状況：東列中央の２基の柱穴を除いた各柱穴の掘り方から出土している。遺物のほとんどは土師器の甕で、いずれも細片である。時期：本址との関連が高いと推定できるSA503がST533と軒が揃うことから３期と考えたい。

ST541　位置：北部D区　図版56

検出：SB140の西側に隣接する、１間×２間の南北棟である。柱穴の検出は明瞭であるが、北西隅の柱穴は結局検出できなかった。本址は北東隅の柱穴がST536に切られ、柱穴相互の切り合いはみられないが、実質的な重複関係にある。柱穴：柱穴はほぼ直線上に配置される。だが、柱間の寸法はすべて異なり、特に西列の柱間の間隔は2.65ｍと極端に広い。掘り方はいずれも円形を呈し、その規模は径36～52cmと比較的小さい。平均45cm程掘り込まれた底面には10cmの円形状の落ち込みが観察され、また、その箇所が灰色化していたことから建物の自重によって柱が沈んだ際にできた落ち込みと推定された。覆土はⅡA層に由来する粘質の褐色土である。遺物の出土状況：北東隅の柱穴から器種の不明な土師器の細片１点が出土した。時期：ST536に切られ、北側のST539と軒先が揃うことから２期と判断したい。

ST543　位置：北部D区　図版60

検出：ⅡA$_2$層上位で検出した。本址はSB537に切られ、ST544を切る、３間×２間の南北棟である。柱穴：北列の柱穴の並びが東、西列と直交せず、形状の整った長方形にならない。柱間の寸法は梁方向が2.0ｍ前後の等間隔になるものの、桁方向はSB537に切られるためにその正確な寸法は計測できない。柱痕跡は確認できなかったが、四隅の柱穴で底面に灰色化した箇所が認められた状況から柱の位置を推定すること

ができた。掘り方は方形を基本形とするが、形が崩れるために長方形や円形に近い形状を呈するものがある。底面はいずれも平坦である。覆土は周囲の掘立柱建物址と同様に、ⅡＡ層を基調とする粘質土がブロック状に堆積している。遺物の出土状況：南列西寄りの２基を除いた各柱穴の掘り方から土師器の甕、須恵器の平瓶が出土した。時期：遺物の様相から２～３期と思われる。

ST544　位置：北部Ｄ区　図版60

検出：ST543の東側に隣接する、２間×２間の総柱式建物址で南北方向が1.30ｍ程長い、長方形のプランである。本址はSB537・540に切られるが、いずれも覆土の色調や含有物の違いから面的に確定できた。柱穴：柱穴は直線的に並び、整然とした配置である。円形の掘り方は規模が揃い、25cm程掘り込む。底面は平坦なものが多いが、柱を据えた箇所が円形状に落ちこむ柱穴が５基確認できた。柱痕跡はＰ２・６を除いて確認したが、径５～12cmの円形を呈していた。柱間の寸法は南北方向が2.50ｍ以上の広い間隔で、東西方向も含めて等間隔にはならない。覆土は単一層になる柱穴が多く、ⅡＡ層を基調としていた。遺物の出土状況：東列の２基の柱穴の掘り方から土師器の杯１片、甕２片などが出土している。時期：２期のSB540に切られることと周囲の遺構配置から１期に帰属する。

ST545　位置：北部Ｄ区　図版61

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とするが、柱穴と地山との識別とは明瞭である。本址はSB540に切られるために全体の構造は捉えられなかったが、西側へプランが延びないことから２間×３間の東西棟になると判断した。柱穴：柱穴は整然とした配置状況を呈する。円形の掘り方の規模は48～82cmと揃わない。柱間の寸法は梁方向が等間隔になるものの、桁方向は一定にならない。特に、南列東寄りの柱間の間隔は1.55ｍと最も狭い。柱痕跡は東列の柱穴と南列西端を除いた柱穴で確認できた。円形を呈する痕跡は径12～20cmを測り、いずれも底面に達していた。底面は二段の不整形状で、柱を据えた箇所が深く掘り込まれていた。覆土は分層できた柱穴もあるが、基本的にはⅡＡ層基質の粘質土で一気に埋め戻す。遺物の出土状況：北東隅、南東隅の柱穴の掘り方から土師器の甕６片が出土したが、いずれも細片である。時期：２期のSB540に切られることから１期と判断したい。

ST546　位置：北部Ｄ区　図版59

検出：SB540の東側に隣接する建物址で、東西方向が約70cm長い２間×２間の総柱式建物址である。プランは完全な長方形にならず、北列の２基の柱穴では柱痕跡状の落ち込みだけが検出できた。柱穴：掘り方は円形に近い不整形が多いが、その規模や深さはばらつく。柱間の寸法は南北方向が2.0ｍ前後の等間隔になるが、東西方向は南列西寄りの柱間の間隔が2.14ｍとほかと比べて極端に狭い。柱痕跡は観察できなかったが、北列の柱穴の底面に灰色化した箇所が認められ、柱の位置が推定できた。掘り方の底面には平坦になる例が多く、掘り込まれたレベルも共通するが、東柱のみ若干浅い掘り込みである。覆土はⅡＡ層の由来する黒褐色の単一層である。遺物の出土状況：北西隅と南列中央の柱穴の掘り方から土師器の杯、甕３片、須恵器杯１片が出土している。時期：ST544との間で建て替えが予想できることから１期の建物址と考えたい。

ST547　位置：北部Ｄ区　図版59、第87図

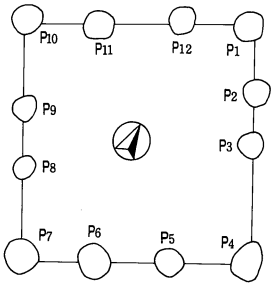
検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出するが、規模の大きな落ち込みは地山と容易に識別できた。SB540と重複するが、本址の柱穴には黄褐色の粘土ブロックが混じることから本址がSB540を切ることを面的に確定できた。プランは東側の調査用地外に延びるためにその全体像は不明だが、梁行３間、桁行５間以上の東西棟になると推定され、かなり大型の建物址になることから注目される。柱穴：柱穴は規格性の高い整然とした配置である。柱間の寸法は梁方向が1.60ｍ、桁方向は1.85ｍ前後の等間隔になる。柱痕跡は確認できなかったが、Ｐ３・４・９の底面で灰色化した箇所が認められたことから柱の位置が推定できる。掘り方は方形を

呈する柱穴が多く、規模も周囲の建物址と比較して大きい。断面形は逆台形状になる柱穴がほとんどだが、P3・4・9は二段状の不整形を呈していた。底面は平均40cm程掘り込むが、P6はかなり浅く、隅にくる柱穴ほど深く掘り込む傾向がみられる。覆土はⅡA層基調の粘質土に黄褐色の粘土粒が多量に混在する単一層で、炭化物粒もわずかに観察された。遺物の出土状況：各柱穴の掘り方から遺物は出土しているが、P10・11はSB546と重複するするため住居址の遺物を取り込んでいよう。時期：1期に帰属するSB546を切ることと遺物の様相から3期と考えられる。

ST548　位置：北部D区　　図版57、第87図、PL39

検出：本址は3間×3間の南北棟である。本址の南側には、主軸方向が共通する同じ形態の建物址が軒を揃えるように位置している。柱穴：方形を呈する柱穴は列を揃えて配置される。柱間の寸法は1.6～1.8mの間に集中するが、P1－2が2.45m、P7－8が2.22mと広い間隔になっていた。柱痕跡はP6～11で確認できたが、径20cmの円形でいずれも掘り方の中央に位置していた。また、P6・7では掘り方の底面よりもさらに落ち込んでいた。覆土は単一層になるものと2層に分層できた柱穴があるが、後者は下層にⅡA_2層基質の黄色の粘土が多量に観察されたことを根拠としている。基本的には一時的に埋め戻した状況と考えられる。遺物の出土状況：P1～4・7～14の各柱穴の掘り方から4,5片の遺物が出土した。遺物は土師器の甕、須恵器の杯、蓋、甕片などがある。4はP4と9の接合資料である。時期：遺物の様相は総じて2期と思われるが、住居址との重複関係や南側に隣接するST575・576などと軒が揃うことからこれらと同一時期と考えれ、3期に帰属すると考えたい。

ST549　位置：北部D区　　図版57、PL39

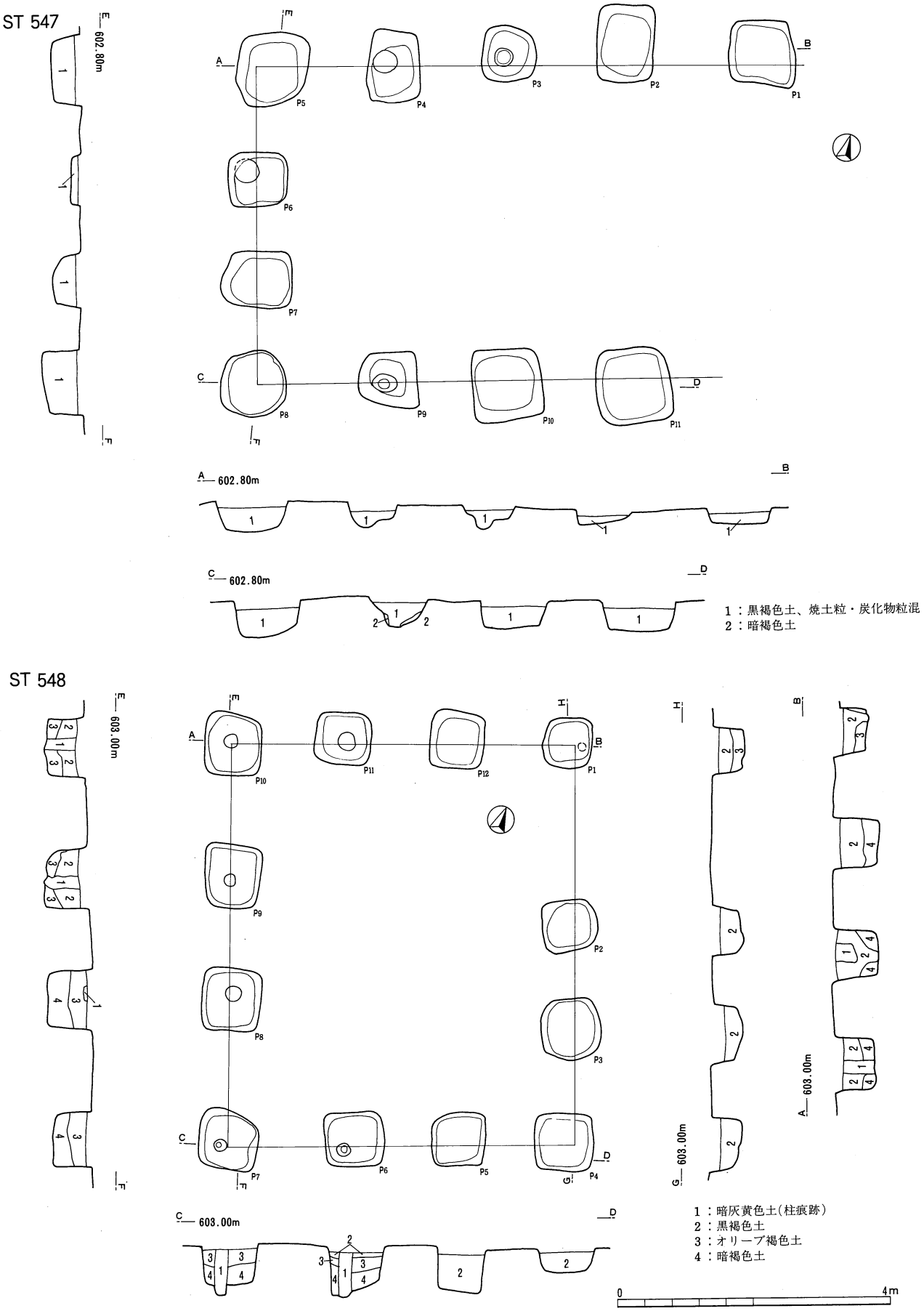


検出：ⅡA_2層上位を検出面とするが、プランは明瞭である。本址は南北方向がわずかに長い、3間×3間の建物址で、本址の西側には同じ形態のST540が隣接する。なお、西列の中央の柱穴はSK1221を切る。柱穴：直線的に配置された柱穴は円形を呈し、深さは平均20cm程である。柱痕跡は確認できなかった。柱間の寸法は東西方向が2.0mで一定になるのに対し、南北方向の間隔は一定にならない。但し、西列はP8－9の柱間の寸法が1.62mと狭いものの、それを挟んだ両端の柱間の寸法は2.36mの同規模になり、規格性が認められる。だが、東列は北側から1.80,1.38.3.16mといずれも異なった間隔である。覆土はⅡA層に由来する粘質土で、なかには粘土ブロックの堆積状況から分層できた柱穴もある。遺物の出土状況：P4の掘り方から土師器の高杯、甕片が出土した。時期：ST540との関係、周囲の建物址の主軸、さらにSB549,551などとの関係から2期と考えたい。

ST550　位置：北部D区　　図版53

検出：ⅡA_2層上位で検出した。本址は3間×2間の南北棟で、西側に位置するSB549を切っていた。新旧関係は覆土の色調や黄褐色を帯びる粘土の含有量の多寡を根拠に面的に確定したが、住居址の覆土中にあると予想された西列中央の柱穴は結局検出できなかった。柱穴：掘り方の平面形は方形を基本形にすると思われるが、かなり形状が崩れており、不整形に近い柱穴もみられる。柱間の寸法は等間隔でなく、規格性も認められない。底面までは30cm程掘り込まれ、平坦なものが多いが、小さな落ち込みがあり二段状の不整形になる例がわずかにみられた。覆土は二層に分層できた柱穴がほとんどで、下層にはⅡA_2層を基調とする黄褐色土が堆積し、その上にⅡA_1層基質の粘質土が覆う。遺物の出土状況：北西隅の柱穴を除いた、北、西列の各柱穴の掘り方から土師器や須恵器の甕片が出土している。図示した2は北東隅の柱穴の遺物である。時期：2期のSB549を切ることから、2～3期と考えられる。

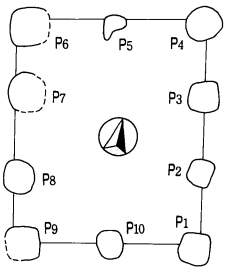
ST551　位置：北部D区　　図版53



第87図　ST547･548実測図(１：80)

検出：ST550の西側に隣接する建物址で、プランは明瞭に検出できた。本址は東側でSB549に切られる、3間×2間の南北棟である。新旧関係は住居址の覆土中に本址の柱穴を検出できなかったことを根拠とした。柱穴：柱穴の配置は直線的になるが、プランは形の整った長方形にならない。北列の各柱穴の南側には重複するように小さな円形の落ち込みがあり、いずれも本址を切ることから柱の抜き取りに関連した遺構と判断した。柱間の寸法は桁方向の中央の柱間の間隔が広く、梁方向についても規則的な間隔は認められない。掘り方は円形を呈し、底面まで40cm程掘り込んでいた。その底面は平坦になる例と柱を据えた痕跡を推定できるような二段状の二種類がある。覆土はⅡA層を基調とする褐色土でブロック状に堆積する状況を呈している。遺物の出土状況：北西隅を除いた西列、北東隅の各柱穴の掘り方から土師器の高杯、甕、須恵器の杯、蓋など14片が出土した。遺物は南西隅の柱穴からの出土が多く、2はこの柱穴から出土した。また、1はSB549と重複していた柱穴からの出土で、住居址に帰属する可能性も高い。なお、北列中央の柱穴からは縄文時代後期の遺物が出土したが混入である。時期：2期のSB549に切られることからこれに先行した建物址と判断できる。

ST552　位置：北部E区　図版69



検出：ⅡA$_2$層上位で検出する。本址はSB574･575に切られる、3間×2間の南北棟である。柱穴：柱穴は柱筋の通った配置である。柱間の寸法は梁方向、桁方向とも等間隔に近い。柱痕跡はP1・2・4で確認されたが、底面で灰色化した箇所のみられる柱穴が多いことから、P9を除いて柱の位置を推定することができた。掘り方の規模は80cm程の方形で揃い、約55cm掘り込んだ底面は柱を据える部分だけさらに掘り窪める構造になっていた。覆土はⅡA層を基調とする単一層である。遺物の出土状況：P1・3・4・6～9の掘り方から土師器の甕、高杯、須恵器の杯、蓋などの破片が出土した。時期：住居址との重複関係、ST553の位置、遺物から2期と考えられる。

ST553　位置：北部E区　図版70

検出：ST522の北側に隣接する建物址で、主軸、形態は共通であるが、規模は本址の方が小さい。本址はSB577･578･579に切られる、3間×2間の南北棟である。柱穴：柱穴は列が揃い、整然と配置される。規格性の高い長方形のプランである。柱間の寸法は梁方向が1.80m、桁方向が2.10m程の等間隔である。柱痕跡は観察されなかったが、掘り方の底面で灰色化した箇所が観察され柱の位置を推定できた。いずれも柱を固定させるためか、掘り方の隅による傾向がみられる。掘り方の平面は円形、方形、不整形があり、一様でない。深さは40～45cmを測るが、南西隅の柱穴では柱を据えた箇所が落ち込んでいた。覆土はⅡA層由来のオリーブ褐色土を主体とする単一層で、ブロック状に堆積する状況が観察された。遺物の出土状況：3基の柱穴の掘り方から遺物が出土しているが、住居址と重複しない東列中央の柱穴から須恵器の杯、鉢の破片が出土している。時期：遺物の様相などから2期と考えられる。

ST554　位置：北部E区　図版70

検出：ST553の西側に位置する建物址でプランは容易に確定できた。本址は北側のSB612に切られ、ST553を切る。本址の西列の柱穴が北方向へ延びる状況がみられないことから、2間×2間の建物址になる可能性が強い。なお、遺物は出土しなかった。柱穴：方形の掘り方は一辺45cmと規模は小さく、底面も20cm程しか掘り込んでいない。柱痕跡は南列で確認できたが、掘り方の中央に位置している。柱間の寸法は東西方向は2.16m、南北方向は1.76mの等間隔になり規格性が高い。掘り方の底面では小さな凹凸のある柱穴が多い。覆土は粘質土を主体とし、灰色の粘土ブロックが混在していた。時期：ST552,553と主軸方向が共通し、これらとの間で建て替えが推定できることから2～3期に帰属する。

ST555　位置：北部E区　図版67、PL40

検出：ⅡA$_2$層上位を検出面とする。本址は東側でSB593を、西側でSB604を切る、３間×２間の東西棟で主軸はほぼ東西方向にとる。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は直線上に配置されており、プランは長方形になる。円形の掘り方は規模が揃い、径22～45cmとかなり小さい。柱間の間隔は梁、桁方向とも等間隔にならないが、桁方向については相対する柱間の間隔はほぼ共通している。底面までは平均15cm程掘り込んでおり、いずれも平坦である。覆土は灰赤色の粘質土を基調とする単一層である。時期：掘り方の規模が１～４期の建物址よりもかなり小さく、５期以降の住居址と主軸が揃うことから５期以降の建物址と判断したい。

ST556　位置：北部Ｅ区　図版68、PL40

検出：住居址が激しく重複するなかで大きな円形の落ち込みが確認され、その位置関係から掘立柱建物址と認定した。北側でSB614に、南側でSB595・596・600に切られる。本址の全体像は住居址との重複のため捉え難いが、SB600の西側で切られる柱穴の位置から南北方向が80cm程長くなる、２間×２間、または３間×２間の建物址になると推定できる。遺物は出土していない。柱穴：掘り方の規模、形状はばらつく。柱間の寸法は梁方向が1.80ｍ前後の等間隔であるのに対し、桁方向は規格性が認められない。掘り方の底面は35～40cm掘り込まれ、その断面形はすり鉢状を呈していた。覆土はⅡA層を基調とし、２層に分層された。下層にはⅡA$_2$層基質の暗オリーブ褐色が堆積し、上層の暗赤褐色土と明瞭に識別された。柱を固定させるために粘質な土を下部に入れ、後に上層の土を掘り方内に充填したと推定できる。時期：住居址との重複関係やST552～554と共通することから２～３期に帰属する。

ST557　位置：北部Ｄ区　図版61

検出：調査区を分けた関係から二年次にわたり調査した。本址はSB540に切られる、３間×２間の南北棟である。柱穴：円形を呈する柱穴は整然と配置される。柱間の寸法は梁、桁方向とも等間隔にならず、桁方向が広くなる傾向がみられた。覆土はⅡA層に由来する単一層である。遺物の出土状況：北列の各柱穴の掘り方から土師器の甕３片、須恵器の甕２片が出土した。時期：SB540に切られることから１期に帰属する。

ST558　位置：北部Ｄ区　図版51

検出：ⅡA$_2$層上位で検出する。オリーブ褐色を呈する柱穴は地山と明瞭に区別された。本址は２間×１間の建物址で東西方向が25cm程長い。本址は形態が共通するST559を切ることから、ST559から本址への建て替えが予想される。柱穴：直線状に配置された柱穴の多くは方形を呈するが、P2・3のように円形に近い形状もみられる。柱間の寸法は東西方向が1.08～1.38ｍと狭い。柱痕跡は観察されなかったが、南西隅の柱穴は底面に灰色化した箇所があり、柱の位置を確認することができた。掘り方は平均30cm程掘り込まれ、底面は平坦なものが多いなかで、南西隅の柱穴では柱を据える部分だけ掘り凹めていた。覆土はオリーブ褐色の粘質土で、灰色の粘土粒を混在する単一層である。遺物の出土状況：北西隅、南東隅の柱穴の掘り方から須恵器の長頸壷１片、杯の細片が出土した。時期：遺物による時期の確定は難しい。SB623・624との関連性が考えられることから３期と考えたい。

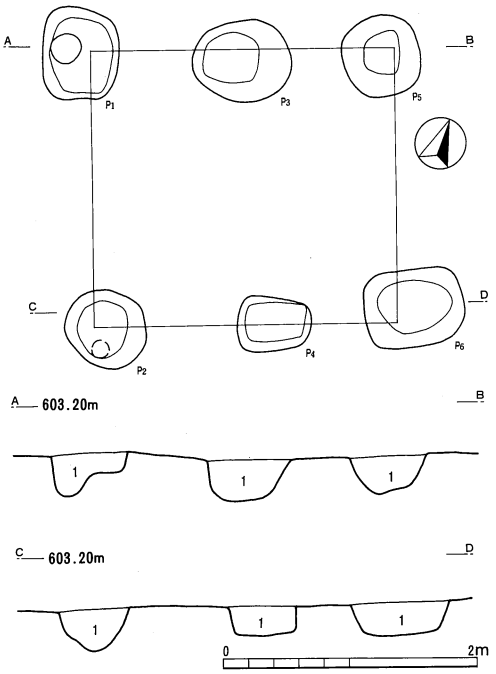
ST559　位置：北部Ｄ区　図版51、第88図

検出：本址は２間×１間の建物址でほぼ方形のプランである。北西でST558に切られていたが、柱穴の配置状況、形態、規模などは本址とほぼ共通である。柱穴：柱間の寸法は南北方向で一定の間隔にならず、北側が0.96ｍと狭い。掘り方の形状は方形と円形の二種類があるが、規模はばらつく。平均40cm程掘り込まれる底面は平坦になるものとＵ字形の二者があるが、南東隅の柱穴では柱を据えた落ち込みが観察された。覆土はⅡA層基質のオリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：西列中央、南東隅の柱穴の掘り方から須恵器の甕３片、土師器の甕２片が細片で出土した。時期：ST558に先行することから３期のなかで

捉えておきたい。

ST560　位置：北部D区　図版52、第89図

検出：IIA_2層上位を検出面とする。本址は西側に庇が付属する、5間×3間の南北棟で床面積は50.3m²と広い。南東でSB627に、北東でST561に切られるが、SB627とは住居址の覆土中に本址の柱穴を検出できなかったことを根拠とした。なお、本址の北側に隣接するST574とは主軸がほぼ共通する。遺物は出土していない。柱穴：柱穴は列の揃った配置である。庇は身舎から2.70m程張り出し、身舎の梁方向と庇は身舎がわずかに長い、類例の少ない形態である。身舎の柱間の寸法は桁方向が1.70m前後が多いなかで、P1とP2間は2.44mと広く、庇のP12とP13間も同様に2.06mと広い傾向を示した。また、梁方向は1.60mの等間隔である。柱痕跡はP10,13～15で確認されたが、いずれも掘り方の中央に位置し、径20cmの円形を呈していた。また、P1～3・5・7・9・12・16では掘り方の底面で灰色化した箇所が観察された柱穴が多く、柱の位置を推定することができた。覆土はブロック状の堆積をする状況が明瞭で、分層できた柱穴が多いが、いずれもIIA層を基調としており、一時的に埋め戻されている。時期：2期に帰属するSB627に切られることから1～2期にかけての建物址と考えたい。



1：オリーブ褐色土、灰色粘土粒混

第88図　ST559実測図

ST561　位置：北部D区　図版52、第90図、PL41

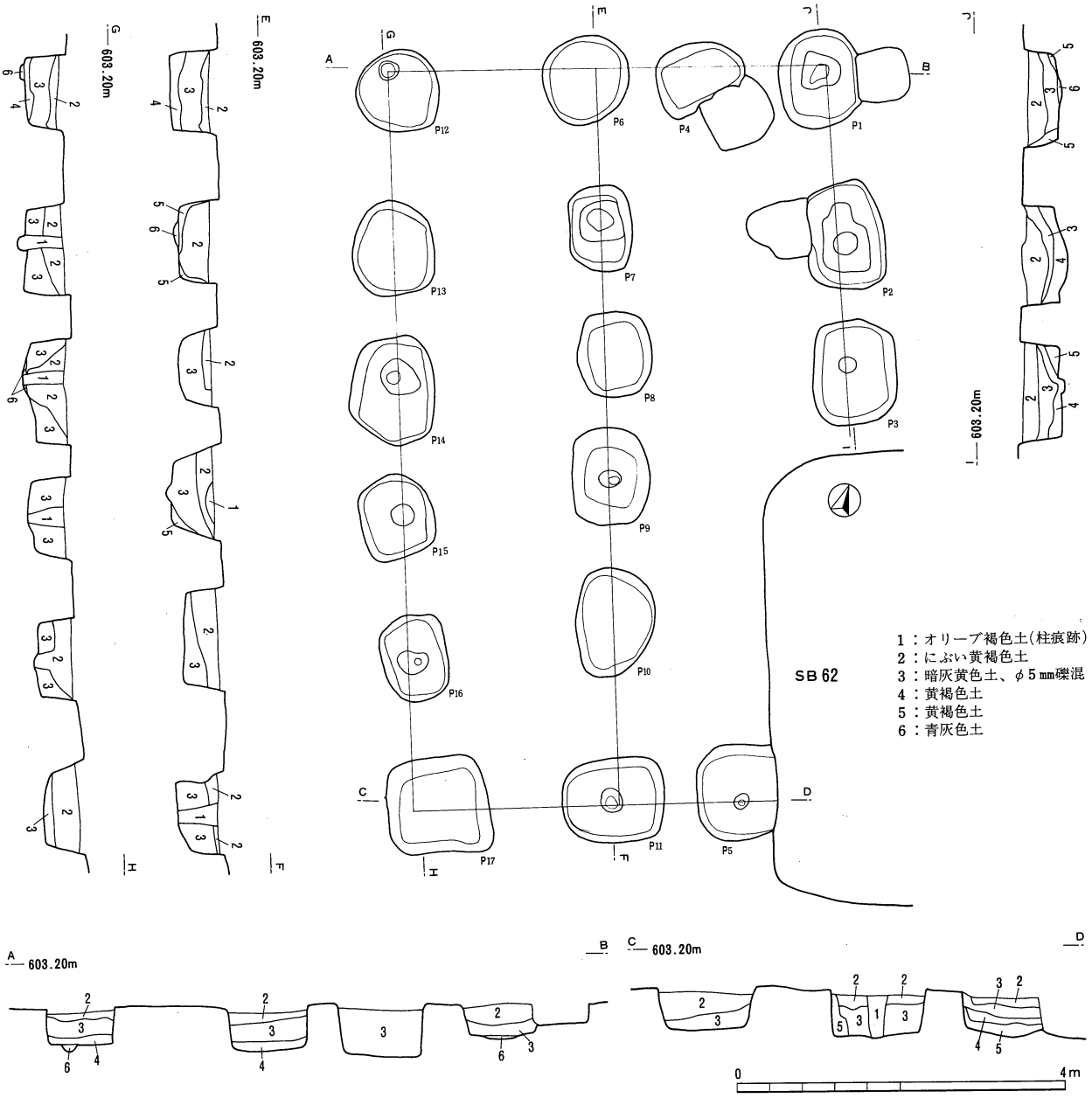
検出：ST560の北東に位置し、ST560を切っていた。本址は2間×2間の総柱式建物址で、一辺3.24mの方形プランである。柱穴：整然と配置された柱穴は方形、または長方形のを呈するものが多く、深さは束柱を除いて40cmを測る。柱痕跡は束柱で確認したが、このほかにP5を除いて、掘り方の底面で灰色化した落ち込みが認められ、柱の位置を推定できた。柱間の寸法はすべて1.60mの等間隔で規格性が高い。掘り方の断面形は中央が凹んだ二段状の不整形になる例がほとんどである。覆土はIIA層に由来する黄褐色土の単一層である。遺物の出土状況：P4,7の2基の柱穴の掘り方から土師器の甕など6片が出土した。時期：ST562との関係から2～3期に帰属すると思われる。

ST562　位置：北部D区　図版52、第90図、PL41

検出：ST561の南東に隣接する総柱式建物址で、南北方向が30cm程長い2間×2間の規模である。本址はSB627を切るが、覆土の質的な違いから明瞭に識別された。ST561とは形態や主軸が共通することから本址との間で建て替えが行われたと予想される。柱穴：P8を除いて、柱穴は直線上に配置される。柱痕跡はP1だけで確認できた。柱間の寸法は南北方向が1.60m、東西方向が1.40m前後の等間隔になりST561と共通する。掘り方は方形で、深さは平均約70cmとかなり深い。断面は逆台形になる例が多いが、柱が据えられていたと思われる小さな落ち込みのある柱穴もわずかに確認できた。覆土はIIA層基質のオリーブ褐色土の単一層である。遺物の出土状況：すべての柱穴の掘り方から数片の遺物が出土したが、東列を除いてSB627と重複するために柱穴から出土した遺物も住居址出土の遺物と接合しており、本址に帰属する可能性は少ない。時期：2期に帰属するSB627との関係から2～3期に帰属すると考えられる。

ST563　位置：北部D区　図版51

検出：IIA_2層上位を検出面とする。柱穴は2基しか検出していないが、形状、規模、位置関係から掘立柱建物址と認定した。本址はD区の南端に位置し、プランの多くは南側の水路と西側のSB634によって失う

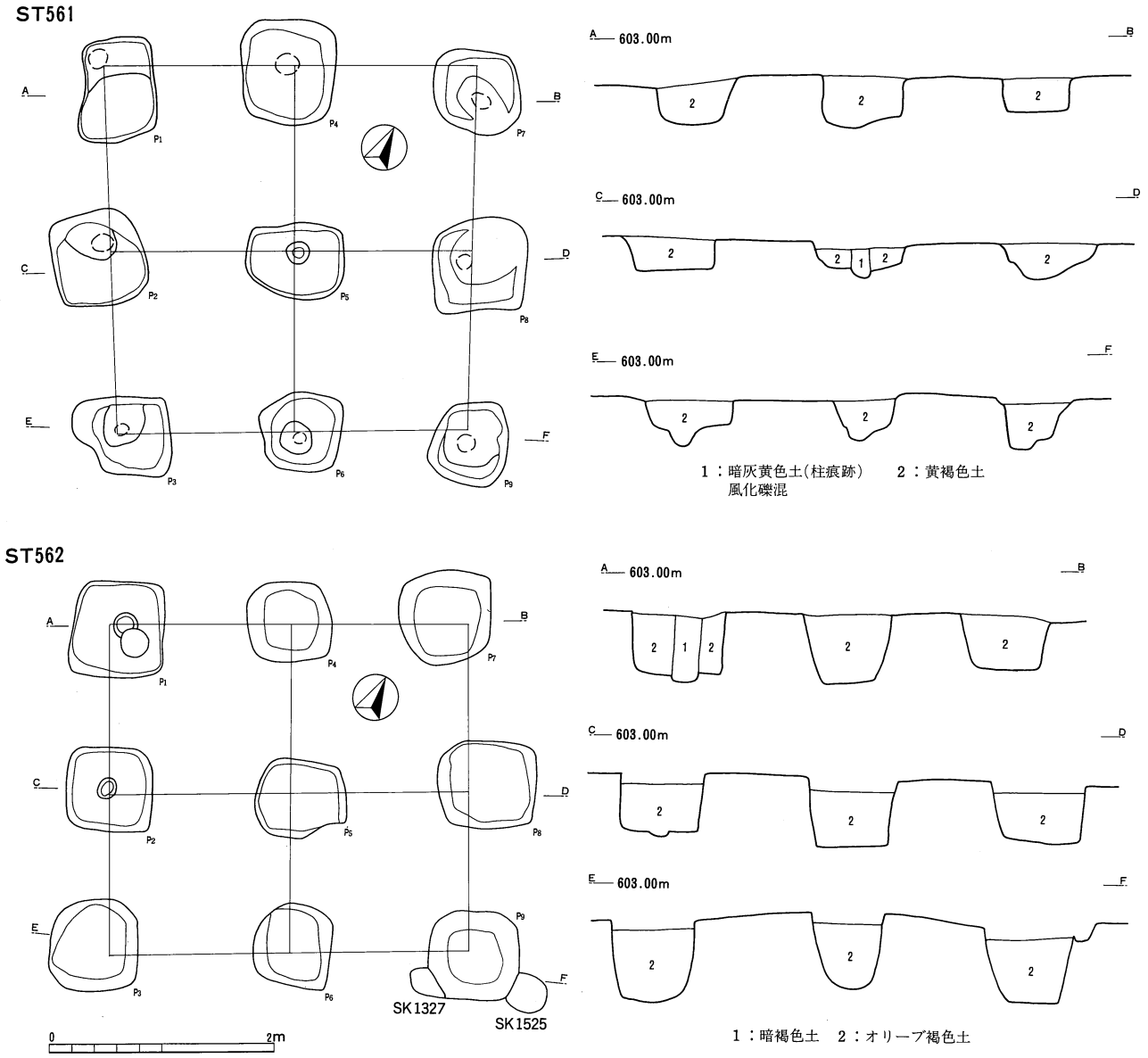


第89図　ST560実測図(１：80)

ためその全体像は捉えられなかった。なお、遺物は出土していない。柱穴：掘り方は円形で径65cm前後の規模で、覆土はⅡＡ層に由来する単一層である。時期：SB634に切られると推定できるので２期以前の建物址になる。

ST564　　位置：北部Ｄ区　　図版55

検出：ⅡA_2層上位で検出する。直線上に配置された落ち込みを４基確認したが、地山との識別は明瞭である。すぐ東側は調査用地外になるため全体の構造は把握できなかった。しかし、南北方向が３間になる建物址で、掘り方の規模が大きくない状況から推察して、大型の建物址にはならないと思われる。柱穴：柱間の寸法は北側が1.84ｍ、南側が1.54ｍで北側が広い。掘り方は円形を呈し、約30cm程掘り込まれた底面はいずれも平坦である。覆土はⅡＡ層を基調とする単一層である。遺物の出土状況：北端の柱穴の掘り方から、土師器の高杯、甕、須恵器の蓋、甕の破片が１片ずつが出土している。時期：遺物から２～４期に帰属する。



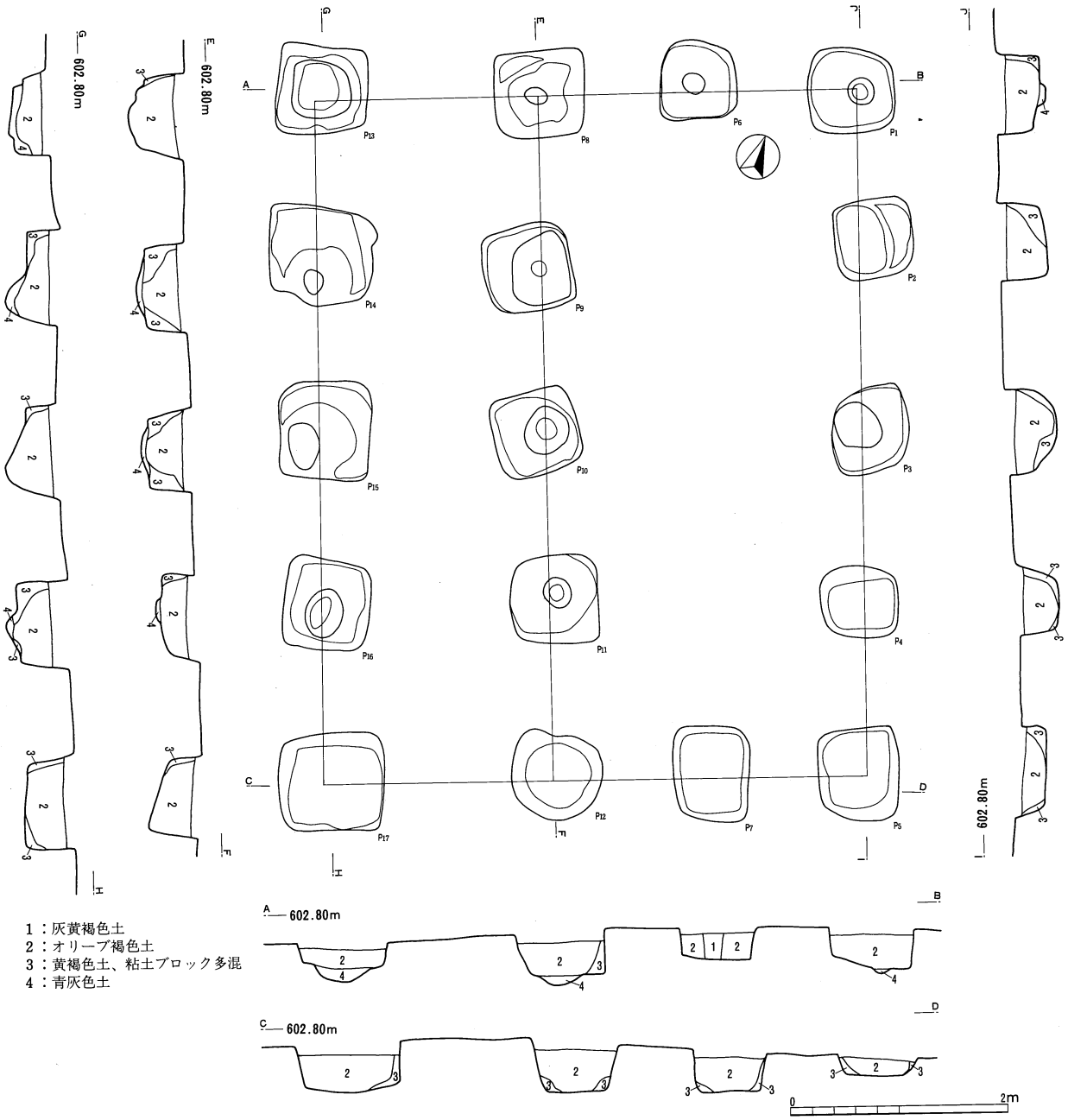
第90図　ST561・562実測図

ST565　位置：北部D区南端　図版50

検出：本址の南側は水路によって撹乱を受けており、全体像は捉えていない。柱穴は桁方向と考えられる二列のみ確認した。南北方向に走行する中世のSD533・534に切られるが、覆土の色調差からその関係は明瞭である。構造は調査した範囲からでは的確に予想しえないが、桁方向が4間の東西棟になると推定でき、調査した部分が庇にあたるとすると、かなり大型の建物址となろう。なお、遺物は出土しなかった。柱穴：掘り方は方形と円形の二種類がある。柱間の寸法は東西方向で最大の間隔と最小のものでは1.0mの差が認められ、ばらつきのある傾向は南北方向も同様である。覆土はⅡA層に由来する単一層である。時期：周囲の建物址の主軸方向から2～3期に帰属する。

ST566　位置：北部D区　図版52、第91図、PL41

検出：ⅡA$_2$層上位を検出面とするが、直線上に並んだ方形の落ち込みは地山と明瞭に識別できた。本址は西面に庇が付属する4間×3間の南北棟で、その形態は本址の西側に隣接するST560と近似する。柱穴：柱穴は柱筋の通る、整然とした配置である。柱間の寸法は梁方向が1.50m前後の等間隔で、桁方向もわずかずつ差はあるが1.60m前後の一定の間隔とみてよく、規格性のある建物址である。また、身舎と庇との

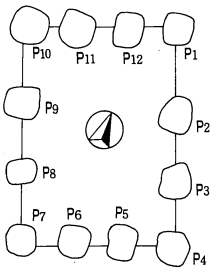


第91図　ST566実測図

間隔は2.14ｍを測り、身舎の梁方向の総長が2.98ｍになるのとわずかな差しか認められず、この点はST560と共通の特徴である。柱痕跡はＰ６で確認したが、このほかＰ１・８～11・14・16では底面に灰色化した箇所が観察されたことから柱の位置を推定できた。掘り方は規模の揃った方形で、平均50cm程掘り込む。底面は柱が据えられたために二段状になる柱穴と平坦になるものとがある。覆土はブロック状の堆積が顕著なことから、いずれも２層に分層された。基調となる土はⅡＡ層に由来するが、下層にⅡA_2層基質の黄褐色のシルトが多量に観察されたことを分層の根拠としている。遺物の出土状況：Ｐ３・６～８・11～17の掘り方から、土師器の甕、須恵器の甕杯などが１～４片出土した。１はP7から出土した遺物である。時期：遺物の様相と北側に隣接する建物址と柱筋が揃うことから３期と考えたい。

ST567　　位置：北部Ｄ区　　図版55

検出：ⅡA_2層上位で検出したが、プランは明瞭である。本址はST566の北側に隣接する、３間×３間の



南北棟である。北東隅でSK1602を切っていたが、本址の柱穴には黄色の粘土ブロックが多量に混在することから面的に確定した。柱穴：柱穴は柱筋の通る、整然とした配置である。柱間の寸法は桁、梁方向とも等間隔にはならないが、中央の柱間の間隔が狭くなる傾向が認められた。また、梁方向の場合、相対した柱間の寸法はほぼ共通の間隔で、Ｐ５とＰ６、P11とP12間の寸法を狭くする構造は意図的である。柱痕跡は確認できなかったが、P11･12を除いた柱穴の底面で柱を据えたと考えられる落ち込みが確認された。掘り方は規模の揃った方形で、掘り込む深さも45cm程で共通する。覆土は分層できた柱穴もあるが、ⅡＡ層を基調とする単一層である。遺物の出土状況：Ｐ１～３・５・７～12の掘り方から土師器の高杯、甕、須恵器の甕、長頸壷、杯などの破片が２～９片ずつ出土している。甕類のなかには別の柱穴から出土したもので同一個体と思われる破片がある。時期：南北に隣接する建物址や遺物の様相から３期に帰属する。

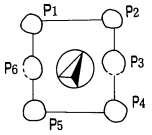
ST570　位置：北部Ｄ区　図版52

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。円形を呈する落ち込み３基が直線上に揃うことから掘立柱建物址と認定したが、北側にはSB637があり、全体の構造は詳細に把握できなかった。だが、確認した状況やプランが北方向へ延びないことから２間×２間の建物址になる可能性が高い。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は南列が直線上に配置される。柱間の寸法は南列が等間隔にならず、そのほかの柱穴でも規格性は認められない。柱痕跡は南西隅と東列の２基の柱穴で確認されたが、径16cmの円形を呈する。掘り方は径50cm程と規模は小さく、南西隅が50cmと最も深く掘り込んでいた。底面は平坦になる柱穴が多い。覆土はかなり砂質を帯びた褐色土である。時期：主軸方向、住居址との位置から２～３期に帰属すると思われる。

ST571　位置：北部Ｄ区　図版57

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とするが、方形を呈する５基の柱穴は明瞭に検出できた。東側は調査区域外にかかるために全体の構造は把握し難いが、柱間の状況、柱穴の規模が大きくないことから桁方向を南北方向にとる２間×２間の建物址になると予想される。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱穴は列を揃えて配置される。柱間の寸法は南北方向が2.10ｍ程の等間隔になるのに対し、東西方向は一定の間隔にならない。柱痕跡は確認できなかったが、柱穴の底面で柱が地山に食い込んだ小さな落ち込みがあり、柱の位置を確認できた。柱痕跡はいずれも掘り方の壁際に寄る例がほとんどである。掘り方の深さ40cm程で、断面は二段状の不整形が多い。覆土はⅡＡ層に由来する、オリーブ褐色土の単一層である。時期：西側に隣接する住居址と主軸方向か共通することから１～３期に考えたい。

ST572　位置：北部Ｄ区　図版51



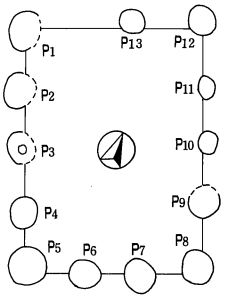
検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出するが、ほぼ同じ規模の円形の落ち込みが重複して確認され、掘立柱建物址になることは容易に推定できた。柱穴の位置関係から２棟の建物址の重複と判断し、本址のプランを確定した。ST573を切る、１間×２間の建物址で方形のプランとなる。ST573とは形態、規模が共通することから本址はST573の建て替えと考えられる。柱穴：柱穴は列の揃った配置である。柱間の寸法は南北方向が等間隔にならないが、Ｐ２とＰ３の間隔がＰ５とＰ６と、また、Ｐ３とＰ４の間隔がＰ１とＰ６の間隔と一致していた。柱痕跡は確認できなかったが、Ｐ１・４・５は掘り方の底面で酸化した鉄分が集積する箇所が観察されたことから柱の位置を確定できた。Ｐ１・５では柱を掘り方の壁に沿うように配置する。平均50cm程掘り込まれた底面は平坦となる柱穴が多いが、Ｐ１・２・５は柱の当たる部分を掘り窪めた二段状の底面となる。覆土はⅡＡ層基質の暗オリーブ褐色土を基調とする単一層が多いが、南列の柱穴は上層に薄く自然堆積層が観察された。遺物の出土状況：Ｐ１・３・６の掘り方から土師器の杯、甕、須恵器の甕など全部で４片が出土した。１は

Ｐ３の遺物である。時期：主軸方向から２～３期に帰属する。

ST573　位置：北部Ｄ区　図版51

検出：本址はST572に切られる、２間×１間の東西棟である。ST572よりわずかに北側に位置し、主軸が90度振れている。柱穴：柱穴は柱筋が通り、整然と配置される。柱間の寸法は桁方向は一定にならないが、相対する柱間の間隔が共通するといった規則性がある。柱痕跡は観察できなかった。掘り方は規模の揃った円形で、底面は平坦な柱穴が多い。覆土はST572と同様に、オリーブ褐色の単一層である。遺物の出土状況：南西隅の柱穴の掘り方から須恵器の長頸壷１片が出土した。時期：重複関係と住居址との位置から２～３期に帰属する。

ST574　位置：北部Ｄ区　図版54



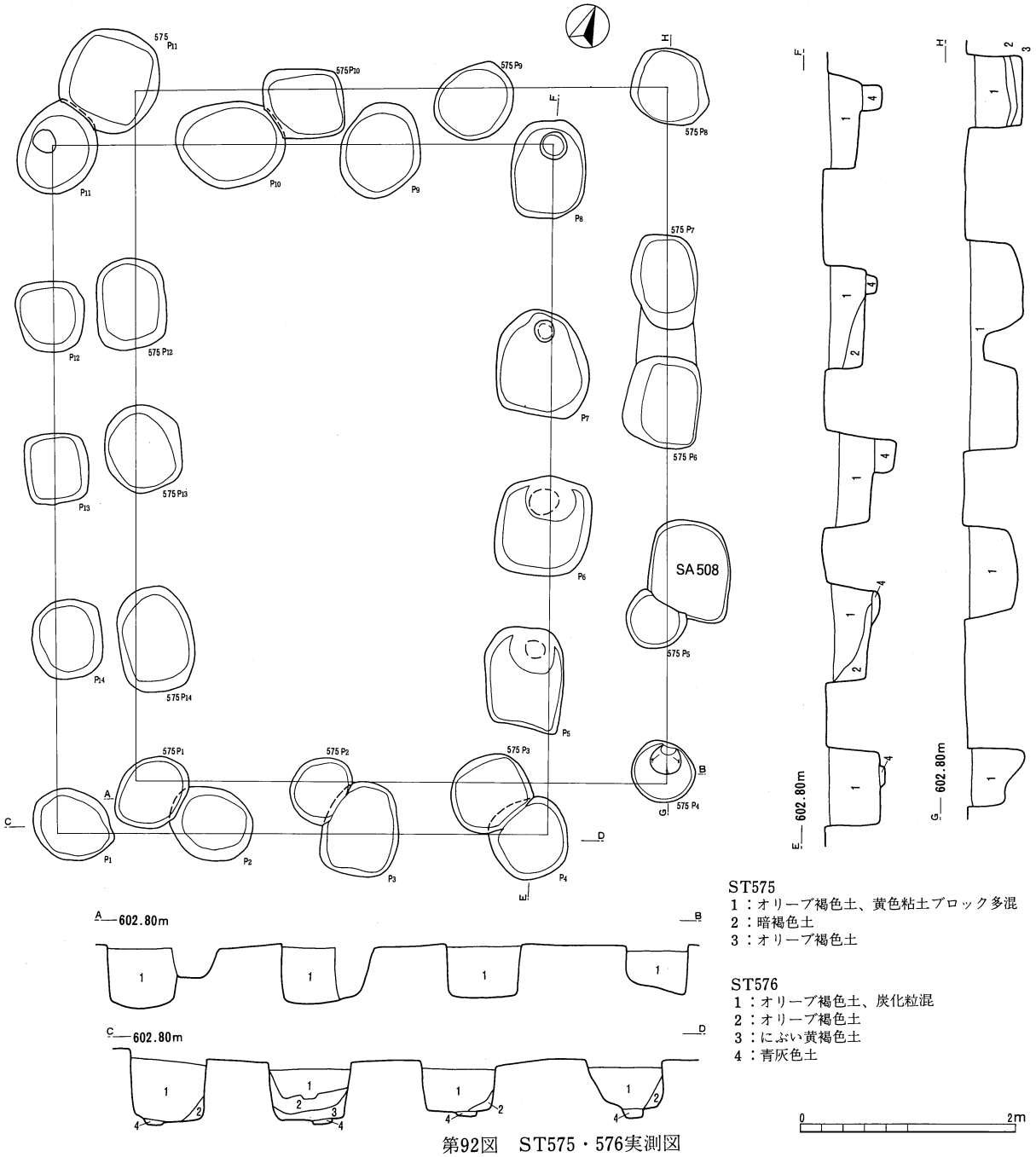
検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。ST560の北側に隣接する本址は４間×３間の南北棟になり、北部でも大型の建物址である。北側のSB551に切られるが、住居址の覆土中に本址の柱穴を検出できなかったことを根拠に確定した。なお、住居址の床面で桁方向の柱穴は確認できたが、梁方向の柱穴は検出できなかった。柱穴：柱間の寸法は桁方向でＰ８とＰ９の間隔が1.84ｍで広い以外は1.60ｍ程の等間隔になる。また、梁方向もＰ６とＰ７の柱間が1.42ｍと狭いものの、1.60ｍを意識した柱間間隔になり規格性が強い。断面観察の際、Ｐ３で径16㎝の柱痕跡が底面まで達する状況が観察された。掘り方は規模の大きな円形で、なかでも四隅の柱穴の規模は特に大きい。断面は逆台形が多いが、P13では柱を据えたと思われる小さな落ち込みがある。覆土はⅡＡ層に由来する褐色土を主体とするが、下部にⅡＡ$_2$層基質の土が多量に認められたことから２層に分層できた柱穴もある。遺物の出土状況：Ｐ１の掘り方から土師器の甕１片が出土した。時期：２期のSB551に切られ、ST560との同時期存在の可能性が高いことから１～２期にかけての建物址であろう。

ST575　位置：北部Ｄ区　図版55、第92図

検出：SB551の東側で重複する柱穴がそれぞれ直線上に並ぶ状況から、２棟の掘立柱建物址があることを確認し、その配置状況から４間×３間の南北棟になる本址を認定した。本址は同規模のST576とSA508に切られ、西側に位置するSB550を切っていた。なお、本址の北側に隣接するST548や南側にあるST567とは東列の柱筋が通る配置状況である。柱穴：柱穴は規格性の高い、整然とした配置である。柱間の寸法は梁方向が1.60ｍ程の等間隔になるのに対し、桁方向は規格性は認められない。Ｐ６とＰ７間の寸法は1.20ｍで最も狭く、溝状の掘り方のなることも異質である。柱痕跡は確認できなかったが、Ｐ４では柱を据えたと思われる落ち込みが観察された。掘り方は円形を呈するものが多いが、その規模はばらつく。50㎝程垂直に掘り込まれた底面は平坦に近い。覆土はⅡＡ層基質のオリーブ褐色土がブロック状に堆積する。遺物の出土状況：Ｐ４の掘り方から土師器の甕４片が出土している。時期：住居址との重複関係や隣接する建物址との位置から３期に考えたい。

ST576　位置：北部Ｄ区　図版55、第92図

検出：本址は４間×３間の南北棟である。ST575とは、形態、規模が共通する建物址でST575を切ることから、本址はST575を西側へわずかに移動して建て替えた建物址と考えられる。柱穴：柱穴は規格の揃った、柱筋の通る配置である。柱間の寸法はＰ５とＰ６間が1.40ｍと狭いのを除いて、1.65ｍ程の一定の間隔になり、梁方向のＰ２とＰ３・Ｐ９とP10の柱間の寸法が1.30ｍと狭いものの、その両端の寸法は1.50ｍで共通でする。梁方向の中央の柱間の間隔が狭くなる傾向はST575と同じ特徴であり、さらに、梁方向が３間を数える建物址に時折みられる傾向として興味深い。Ｐ１～８の底面では灰色化した箇所がいずれも観察され、柱の位置を推定することができる。それによれば、東列では柱を固定するためか、掘り方の北壁に接



第92図　ST575・576実測図

するような位置にある。掘り方は方形と楕円形がみられたが、方形を意識した形状である。垂直に掘り込まれた底面は平坦になる例が多い。覆土はⅡA層を基調とする粘質なオリーブ褐色土でブロック状に堆積する状況が明瞭に観察された。遺物の出土状況：P2～4・7・8掘り方から土師器の甕、杯、須恵器の長頸壷などが出土したが、P3から6片出土したほかは1片ずつと少ない。1はP3の遺物である。時期：ST575と同一時期と考えられることから3期と考えたい。

ST577　　位置：北部D区　　図版51

検出：ⅡA$_2$層上位で検出するが、落ち込みは地山と明瞭に区別された。本址は東西方向が約50cm長い、2間×2間の建物址である。なお、東列でSK1607に切られる。柱穴：柱間の寸法は梁方向が1.30m前後の等間隔になるが、桁方向は北列のみ1.60mの一定な間隔である。南列の柱間の寸法は西から2.10,1.08mと西側が広い。柱痕跡は3基の柱穴で確認したが、径14～18cmを測る。掘り方の形状は長方形と方形がある

が、その規模は一様でなく、底面は斜めになる柱穴が多い。覆土はⅡＡ層に由来する赤褐色土を主体とする。遺物の出土状況：南東隅を除いた南列の柱穴の掘り方から土師器の甕、須恵器杯、甕など２～４片出土した。時期：遺物の様相や周囲の遺構の分布から１～２期に帰属する。

ST578　位置：北部Ｄ区南端　図版51

検出：本址は梁方向が２間の南北棟になるが、すべての柱穴は検出できなったため、全体の構造は捉えていない。なお、本址は中世のSD533・538に切られる。柱穴：掘り方は方形を呈する柱穴が多いが、その規模はばらつき、深さも最も深い柱穴で80cmを測る一方、浅いものは40cm程で、北東と北西隅の柱穴が深い傾向を示したほかは規格性が認められない。底面は北東、北西隅の柱穴が二段状の不整形を呈するが、平坦になる例が多い。覆土はⅡＡ層基質の単一層で酸化したマンガン粒が均一に混在し、ブロック状の堆積状況を示す。遺物の出土状況：東列の柱穴の掘り方から須恵器の甕、土師器の甕が数片ずつ出土している。SB634に切られることから１～２期に帰属する。

ST579　位置：北部Ｄ区南端　図版51

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。全部で５基の柱穴を検出したが、それらは北列の桁方向になると推定され、身舎が延びると思われる南側は水路によって撹乱を受けるため、すでに失なわれていた。そのため、正確な規模は不明だが、梁間が２間以上、桁行が４間の東西棟になる可能性が高い。なお、ST578とは柱穴相互の重複はみられないが、実質的な重複関係にある。中世のSB639、SD533に切られていた。柱穴：柱穴は直線状に整然と配置される。桁方向の柱間の寸法は1.60ｍ前後になると思われるが、一定にならない。掘り方は方形を呈し、桁方向の隅に位置する柱穴を除いて比較的小さい。また、深さはほぼ共通し、底面はいずれも平坦になる。柱痕跡は確認していないが、桁方向の隅の掘り方の底面で円形状に灰色化した箇所が観察され、柱の位置を確定することができた。覆土はⅡＡ層を基調とする単一層である。遺物の出土状況：東列の柱穴の掘り方から土師器の甕３片が出土した。時期：SB634に切られることから１～２期に帰属する。

ST580　位置：北部Ｅ区　図版69

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とする。１間×１間の建物址で、南北方向の方が20cm程長い。当初、４基の柱穴はそれぞれ別遺構と考えたが、その配置状況から建物址と判断した。本址はSB591・592に切られ、ST552を切っていた。なお、遺物は出土していない。柱穴：円形を呈する掘り方は規模が揃い、深さもほぼ共通する。柱痕跡は南東隅の柱穴を除いた柱穴で確認した。径16～18cmを測る痕跡は掘り方の中央に位置し、底面に達していた。断面形はＵ字状で、柱を固定するために部分的に掘り窪めた柱穴もみられた。覆土はにぶい黄褐色土を主体とする単一層である。時期：１期のSB592に切られることから１期に帰属する。

ST581　位置：北部Ｄ区北端　図版64

検出：SB558の検出の際、住居址の北壁と重複する柱穴が検出され、直線上に並ぶことから掘立柱建物址と判断した。だが、最終的に柱穴は３基しか確認できなかったために全体の構造は不明である。柱穴：掘り方は平面、断面とも、その規模はばらつく。柱痕跡は西端の柱穴で認められ、径15cm程の円形を呈していた。また、東端の柱穴の底面では柱を据えた痕跡が観察され、柱の位置を確定できた。掘り方は最も深い東端の柱穴で30cm程掘り込み、底面は平坦になる。覆土はⅡＡ層に由来するにぶい赤褐色土を主体とする単一層でマンガン粒をわずかに含んでいた。時期：８期のSB558に切られるので、それ以前の建物址となるが、時期の限定は難しい。

ST582　位置：北部Ｄ区　図版64

検出：SB558の南側に位置する建物址で、柱穴は２基しか検出できなかったが、掘り方の規模や柱痕跡が観察されたことから掘立柱建物址と認定した。遺物は出土していない。柱穴：円形を呈する柱穴は径70cm

で大きな規模を有する。柱痕跡は掘り方のほぼ中央に位置し、径15cmを測る。底面は約30cm掘り込まれ、U字状の断面形で、柱が据えられた部分だけ落ち込む。覆土はⅡA層を基調とするにぶい黄褐色土の単一層で、マンガンの集積が観察された。柱痕部は灰褐色で明瞭に識別される。時期：主軸も不明であり、時期の確定は難しい。

ST583　位置：北部D区　図版64

検出：検出面はⅡA_2層上位である。ST528の北側に隣接する本址は柱穴が3基しか検出できなかったが、その配列状況から掘立柱建物址と認定した。身舎が延びると予想される西側は調査区域外にかかるため詳細な構造は分からないが、南北方向に柱穴が検出できなかったことから2間×2間程の規模が推定される。なお、遺物は出土していない。柱穴：柱間の寸法は1.60,1.94mと一定の間隔にならない。掘り方は規模の小さい方形で、深さは40～50cmである。底面は平坦になり、柱を据えたような痕跡もみられない。覆土はⅡA層を基調とする粘質土の単一層で、炭化物を少量混在していた。時期：ST529と主軸方向が共通するので同一時期に考えられるが、限定は難しいが、4期に帰属する可能性が最も高い。

ST584　位置：北部D区　図版60

検出：ⅡA_2層中位で検出する。柱穴は全部で6基を確認した。東列が直線上に配置される状況から掘立柱建物址と認定した。調査した箇所から3間×2間の南北棟になると推定できる。柱穴：円形を呈する掘り方の規模はばらつく。柱間の寸法は桁方向をみる限り、等間隔でない。覆土はⅡA層を基調とする、にぶい黄褐色土の単一層である。時期：遺物は出土していないが、主軸方向から1～2期に帰属する。

ST585　位置：北部D区　図版60

検出：ST584の西側に位置する建物址で、南側に庇部の付属する2間×3間の東西棟になる。なお、遺物は出土していない。柱穴：掘り方の規模は北列・南列を除いて、比較的小さい。身舎と庇の間隔は1.84mを測る。柱間の寸法は梁方向が1.50m程の等間隔になるが、桁方向は一定の間隔にならなかった。覆土はⅡA層由来の単一層である。時期：主軸方向から1～2期に帰属する。

3　溝　　址

古代の溝址は南部を中心に8本確認された。すべての遺構から遺物が出土していないため、時期については不安定な要素も残り、なかには中世に降るものもあると推測される。

SD 3　位置：南部A区東側　図版20

検出：ⅡA_2層上位で検出する。ST11を切るが、覆土の色調差から明瞭である。形状：東西方向に直線的に延びる溝で、全長10.3m、最大幅73cm、深さ15cmを測る。溝幅は中央ほど広い傾向がみられる。層位：覆土は細粒砂を主体とする単一層で、礫をほとんど含まない。時期：遺物は多時期のものが含まれるが、最も新しい遺物には土師器の羽釜がある。このような点から本址の時期は13期以降と考えられるが断定はできず、中世に降る可能性も残る。

SD19　位置：南部B区東側　図版28

検出：ⅡA_2層上位で検出する。南端でSB74に切られると判断したが、住居址付近で溝はかなり浅くなるため、切り合いが逆になる可能性も残る。形状：南北方向に直線的に延びる溝で、全長約4m、溝幅は最大30cm、深さは10cmと浅く、底面はほぼ平坦になる。層位：白色砂を均一に混入する単一層で、流水などの痕跡は不明である。時期：遺物は出土していないが、SB74との重複関係から4期以前と判断した。

SD20　位置：南部B区　図版22

検出：ⅠD層下位で検出する。調査区西端付近でSD5に切られる。形状：南北方向に主軸をとるが、本来

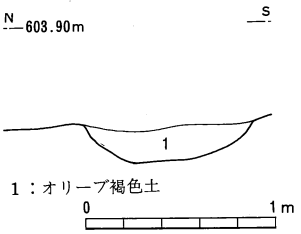
はさらに延びると思われる。全長約８ｍ、幅60cm、深さ15cm程で、浅い弓状の断面形を呈している。層位：細礫をわずかに含む単一層で、流水などの痕跡は認められない。時期：覆土の特徴から古代の溝としたが、遺物が出土していないため時期の限定は難しい。

SD25　位置：南部Ｃ区　図版43・44・46、PL48

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。調査区の西側から東側へ延びる溝である。本址はSB141・143・144・145・221に切られるが、覆土の質的な違いからその関係は明瞭である。形状：東西方向に延びる溝で、途中で北東方向に折れる。溝幅は比較的一定で60～80cmを測り、深さは15～20cmで鍋底状の断面形である。底面はほぼ平坦で西から東に向かって傾斜している。覆土：砂質な褐色土の単一層で、恒常的な流水があった可能性が高い。時期：本址に帰属すると判断できる遺物は少ないが、本址の南側に位置するSD27と併走する関係から２～３期に帰属し、北側に位置する住居址群を区画する溝である。

SD27　位置：南部Ｃ区　図版43・44・46、第93図

検出：SD25の南側に位置する溝で、SD25と併走する。調査区のほぼ中央でSB136,144,150に切られ、東側でSB221に切られていた。本来はさらに東へ延びていたと推定される。形状：東西方向に延びるが、すぐ南側が浅い谷地形になるため等高線に沿って、途中で北東方向へ折れる。溝幅は60～80cm、深さ20～30cmで東に向かって緩やかに傾斜する。底面は凹凸が観察され、弓状の断面形を呈する。層位：オリーブ褐色の単一層であるが、下層には粒子の細かい砂が堆積し、底面には酸化鉄の集積が認められる。恒常的に水が流れていたと判断できる。遺物は土師器甕、高杯、須恵器杯など約60個体が出土したが、いずれも破片での出土で、底面付近に多い。北側に位置する住居址群から投棄された遺物と推定できる。時期：遺物から１～２期に帰属する溝で、住居址群を区画していた重要な溝である。



第93図SD27実測図（１：40）

SD32　位置：南部Ｂ区　図版31

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。東側は撹乱を受けるために失い、その限界は不明である。形状：全長5.5ｍ、溝幅60～70cm、深さ15cmを測り、弓状の断面形である。底面はほぼ平坦になる。層位：細粒砂を主体とする単一層で、混入物はほとんど観察されない。自然埋没であろう。時期：遺物が出土しなかったため明確に確定できないが、覆土の特徴から11期以降と考えたい。

SD521　位置：北部Ｄ区東側　図版63

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とする。南端でSD542に切られ、SB524を切る。なお、北端は水道管の埋設による撹乱を受けていた。形状：南西から北東に直線的に走る溝で、この方向に走行する溝址は本址のみである。全長18ｍ、幅32～75cm、深さ20～30cmを測る。弓状の断面形を呈し、底面の標高は中央が最も高い。層位：流水の痕跡は認められず、覆土は灰褐色の細粒砂を主体とする単一層で、下層ほど淘汰がよい。遺物は土師器の高杯、杯、須恵器杯などが出土したが、その全体量は少なく、周囲の遺構からの投棄、あるいは流れ込みと考えられる。時期：重複関係や遺物から２期以降の溝址である。

SD523　位置：北部Ｅ区南側　図版65

検出：検出面はⅡＡ$_2$層上位とする。西端でSB527と重複するが、撹乱を受けるために新旧関係の確認はできなかった。形状：全長3.9ｍ、幅40～90cmと一定でない。深さは15cmとかなり浅い。層位：にぶい黄褐色の単一層である。流水などの痕跡は認められない。時期：遺物は土師器の鉢、灰釉陶器の椀があるが、本址に帰属するものではない。遺物の様相から９期以降の溝と考えれるが、時期の限定は難しい。

4 柵　　址

古代の柵址は11基確認した。遺物を出土する柵址はほとんどみられないため、時期の確定は柵址の周囲にある遺構との配置や主軸などから決定した。

SA 1　位置：南部A区　図版14

検出：IIA_2層上位で検出する。柱穴5基で構成され、主軸はN3°Eある。構造：全長7.54mを測り、柱穴は柱筋の通った配置である。柱間の寸法は1.64～2.16mと一定の間隔にならない。柱穴の掘り方は円形を呈するものが多く、南端の掘り方の規模がわずかに小さいものを除き、径45cm、深さは12cmと共通である。柱痕跡は確認できなかった。覆土はIIA層を基調とする単一層である。時期：遺物は出土しなかったたが、本址の東側にある遺構の分布状況や覆土の特徴からSB37・38と関連した柵址と考えられ、3期の所産であろう。

SA 2　位置：南部A区　図版15・16

検出：IIA_2層上位で検出する。SA1の北東側に隣接し、覆土も近似していた。本址は柱穴4基で構成され、主軸はN77°Wである。構造：柱穴は整然と配置され、全長7.28mを測る。柱間の寸法は中央の間隔が2.62mと両端の柱間より約60cm程長い。掘り方は円形を基本形とし、径34～52cmの規模で深さは12cmでいずれも同じである。覆土はIIA層基質のシルトを主体とし、黄褐色の粘質なブロックが混入する単一層である。柱痕跡は観察されなかった。時期：本址に帰属する遺物は出土しなかったが、隣接するSA1との位置関係や覆土の状況などからSA1と同じ3期と考えたい。

SA 3　位置：南部B区　図版24・PL48

検出：IIA_2層上位で検出し、SB58の西側に隣接する。本址と近似した覆土の掘立柱建物址よりは掘り方の規模が小さいことや、周囲に掘立柱建物址を構成する柱穴が検出されなかったことから柵址と判断した。主軸はN2°Eでほぼ真北を向く。構造：柱穴4基から構成される本址は全長7.58mを測り、柱筋の通った配置である。柱間の寸法は中央の間隔が2.38mと狭いが、両端は2.70m前後の等間隔になる。掘り方は円形を呈し、坑底面には北から二番目の柱穴を除いて円形の凹みがあり、柱の位置を推定することができた。覆土はIIA層基質のオリーブ褐色の粘質土を主体とする単一層である。時期：本址に帰属する遺物は出土しなかったが、覆土の特徴や主軸方向、遺構の配置状況から東側に隣接するSB58に付随する柵址と考えられ、5期に帰属すると思われる。

SA 5　位置：南部B区　図版33

検出：IIA_2層上位で検出する。SB176とSB180に挟まれるように位置し、柱穴4基で構成される。さらに北へ延びるかは明瞭でない。主軸はN8°Wで、付近の掘立柱建物址と大きく違わない。構造：全長6.74mを測り、柱間の寸法は北端が2.50mと広いのを除いて、2.0m前後の等間隔になる。掘り方の形状は円形と方形の二者がみられるが、基本的には径45～62cmの円形に近く、その深さは25cm程である。坑底面は平坦なものと柱を据えたと思われる凹みの観察されるものがある。覆土はシルト質の土を主体とし、白色砂を混入する単一層である。時期：周囲の遺構の分布状況からSB175との関連性を考えたが、遺物が出土しなかったこともあり、明確な時期は確定できなかった。

SA 6　位置：南部B区　図版36

検出：IIA_2層に比定される礫層中で検出した。円形を呈する柱穴は明瞭で、当初その規模から掘立柱建物址になると思われたが西側には展開せず、また東側は調査用地外になるため柵址の範疇で捉えた。しかし、柱穴が3基しか確認できなかったことから掘立柱建物址の可能性も十分残る。主軸はN5°Wである。構

造：全長は5.07ｍで、柱筋の通った配置である。柱間の寸法は2.48～2.61ｍとほぼ等間隔になる。掘り方の規模は径50㎝程で深さは25㎝と一定である。覆土はⅡＡ層基質の細粒砂を主体とし、地山に由来する中礫が均一に混在した単一層である。時期：覆土の状況や遺構の周囲の配置状況から４期に帰属すると考えられるが、付随すると予想される遺構が不明のため明確な時期は確定し難い

SA７　位置：南部Ｂ区　図版31

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。掘り方の規模や形状は周囲の掘立柱建物址と変わらないが、その配置状況から柵址と認定した。南端の柱穴は柱穴相互の重複関係がみられたが、建て替えや柱の抜き取りに関連したと推定できることから本址に加えた。主軸はN13°Wである。構造：本址は全長3.32ｍで、ほかの柵址と比較すると短い。柱穴の掘り方は径55㎝程の円形で、深さは25㎝前後で共通である。坑底面には不鮮明ながら柱を据えた痕跡が認められた。覆土はⅡＡ$_1$層のシルトを基調とする単一層である。時期：遺物は出土していないが、覆土の特徴や遺構の配置状況から２～４期に帰属すると思われるが、限定はできなかった。

SA８　位置：南部Ａ区　図版16

検出：ⅡＡ$_2$層中位を検出面とする。柱穴６基で構成される本址は、当初主軸がほぼ同じSA１に含めて考えていたが、柱筋が直線上に通らないことから別な柵址と認定した。SB8･11に切られるが、それぞれの床面で２基の柱穴を検出した。なお、本址の主軸はN7°Eである。構造：全長は11.72ｍと長く、柱間の寸法は両端が狭い傾向がみられるが、ほぼ3.0ｍ程の等間隔になる。掘り方の形状は方形を基本形とするが、形が崩れて円形に近いものもみられる。坑底面は平坦な柱穴がほとんどだが、Ｐ２では円形の凹みが観察された。覆土はⅡＡ$_1$層基質の土を主体とする単一層で、Ｐ６は下部に黄色の粘土が堆積していたことから２層に分層できた。時期：SA１や周囲の遺構の分布状況から３期の遺構と思われる。

SA501　位置：北部Ｄ区　図版62

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。柱穴は９基が検出されたが、主軸がN3°Wでほぼ真北方向へ延びる。本址はSB521を切るが、覆土の色調から容易に確定できた。構造：本址の全長は13.48ｍと長く、柱間の寸法は1.54～1.88ｍと幅があるが、1.6ｍ前後の間隔が多いことから規格性を認めてよい。円形を呈する掘り方は径30㎝、深さは30㎝程でほぼ一定である。柱痕跡は南側から４番目の柱穴で確認したが、底面は灰色化している箇所が認められた。覆土はかなり砂質で粘土粒が混入した単一層が多い。時期：遺物は出土しなかったが、本址の西側に位置するST529に付随する柵址と推定できることから３期以降に帰属する。

SA502　位置：北部Ｄ区　図版56、PL48

検出：Ｄ区中央の掘立柱建物址が集中する地点にあり、ST540と重複するように位置する。本址は柱穴４基で構成され、その主軸はN18°Wである。構造：全長6.72ｍを測り、柱間の寸法は北側は2.70ｍと広いほかは等間隔になる。掘り方は円形を呈していた。覆土はⅡＡを基調とする暗オリーブ褐色土で、少量の焼土粒や炭化物を混在していた。時期：南から二番目の柱穴より土師器の甕２片が出土したが、細片のため時期の確定は難しい。しかし、周囲に分布する掘立柱建物址の主軸と共通し、ST549に付随する可能性が高いことから２～３期の所産と考えられる。

SA503　位置：北部Ｄ区　図版56、第94図、PL48

検出：ST540の西側の柱穴列と平行するように位置し、プランは明瞭である。本址はST536,541と重複する位置にあるが、柱穴相互の切り合いはみられない。柱穴６基で構成され、その主軸はSA502と共通する。構造：柱穴は柱筋の通る整然とした配置である。全長8.8ｍを測り、柱間の寸法は1.70ｍ前後の等間隔になる。円形の掘り方の規模は径32～43㎝、深さ25㎝前後になる柱穴が多いが、南端の柱穴は深さ50㎝と深い。坑底面はＵ字状で柱を据えた痕跡は認められない。覆土はⅡＡ$_1$層基質のオリーブ褐色土で炭化物と焼土粒

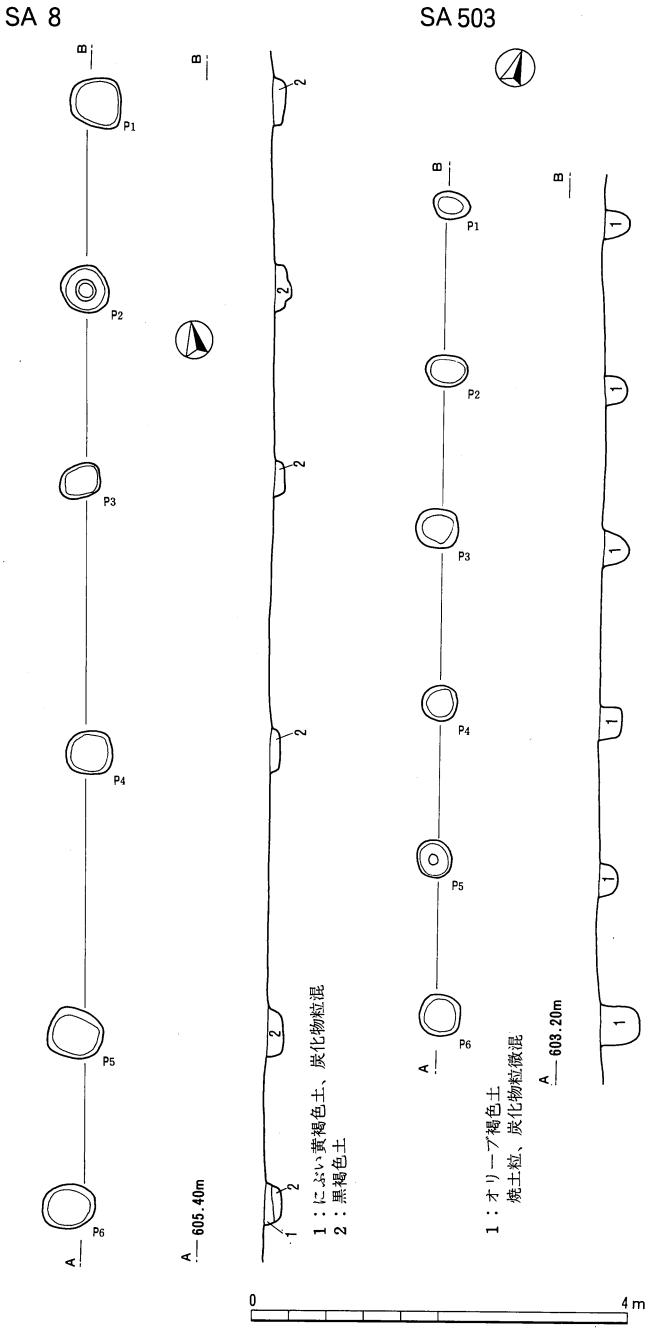
を混入していた。時期：遺物は土師器甕２片が出土した。細片のため詳細な時期の確定はできないが、本址の主軸方向がST540と共通し、その配置からもST540に付随した柵址の可能性の高いことから３期に帰属すると思われる

SA504　位置：北部Ｄ区　図版53

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とする。SB626の西側に位置し、配置状況から掘立柱建物址の可能性を考慮したが、周囲には柱穴が検出できなかったことから柵址と認定した。主軸はN17°Wで、４基の柱穴から構成される。構造：柱穴は整然とした配置で、全長5.52ｍを測る。柱間の寸法は1.80ｍ程の等間隔になる。掘り方は径20～30cm前後の円形を呈し、深さは約20cmでほぼ共通する。坑底面は平坦になる柱穴が多い。覆土はⅡＡ$_1$層を基調とする単一層で白色砂がわずかに観察された。時期：本址と直接関連する遺構は限定できないが、ST550やSB626の主軸方向と一致し、覆土も近似する状況から２～３期と考えたい。

SA506　位置：北部Ｅ区　図版66

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。当初、SB559・593を切る落ち込みを２基ずつ確認したが、最終的には柱穴８基から構成される柵址を認定した。主軸はほぼ真北である。構造：本址は全長5.76ｍを測り、直線上に配置される。掘り方の規模はＰ１・２・７・８が径50cmと大きいが、ほかは径30cmの規模である。柱間の寸法は、Ｐ６とＰ７間が1.81ｍと広い以外は54～80cmと狭い間隔である。覆土はⅡＡ層を基調とする単一層で黄色の粘土粒が均一に混在していた。時期：遺物は出土しなかったが、重複関係からSB555または565に付随する柵址と考えられることから８期に帰属する。



第94図　ＳＡ8･503実測図（１：80）

SA508　位置：北部Ｄ区　図版55・第95図

検出：ST567の東側に位置し、その東列と平行する配置状況からST567の庇になると推定したが、北側へさらに延びる状況から柵址と認定した。柱穴は６基から構成され、主軸はST567と共通のN22°Wである。構造：全長は12.60ｍとかなり大型の柵址である。柱間の間隔はＰ１とＰ２間の寸法が4.24ｍと広いが、ほかは1.80ｍ前後の等間隔になる。掘り方は周囲の掘立柱建物址と共通する方形のかなり大きな規模である。坑底面は平坦になる例と凹凸のあるもの、Ｐ３・４のように柱を据えた痕跡の観察される柱穴など一様でない。覆土はⅡＡ層の粘土を基調とするが、下部にⅡＡ$_2$層の粘土ブロックが多量に観察された。柱痕跡はＰ２で確認したが、径18cmの円形を呈していた。時期：西側に隣接するST548･575などに付随すると考えられることから３期の柵址と思われる。

SA510　位置：北部Ｄ区　図版52

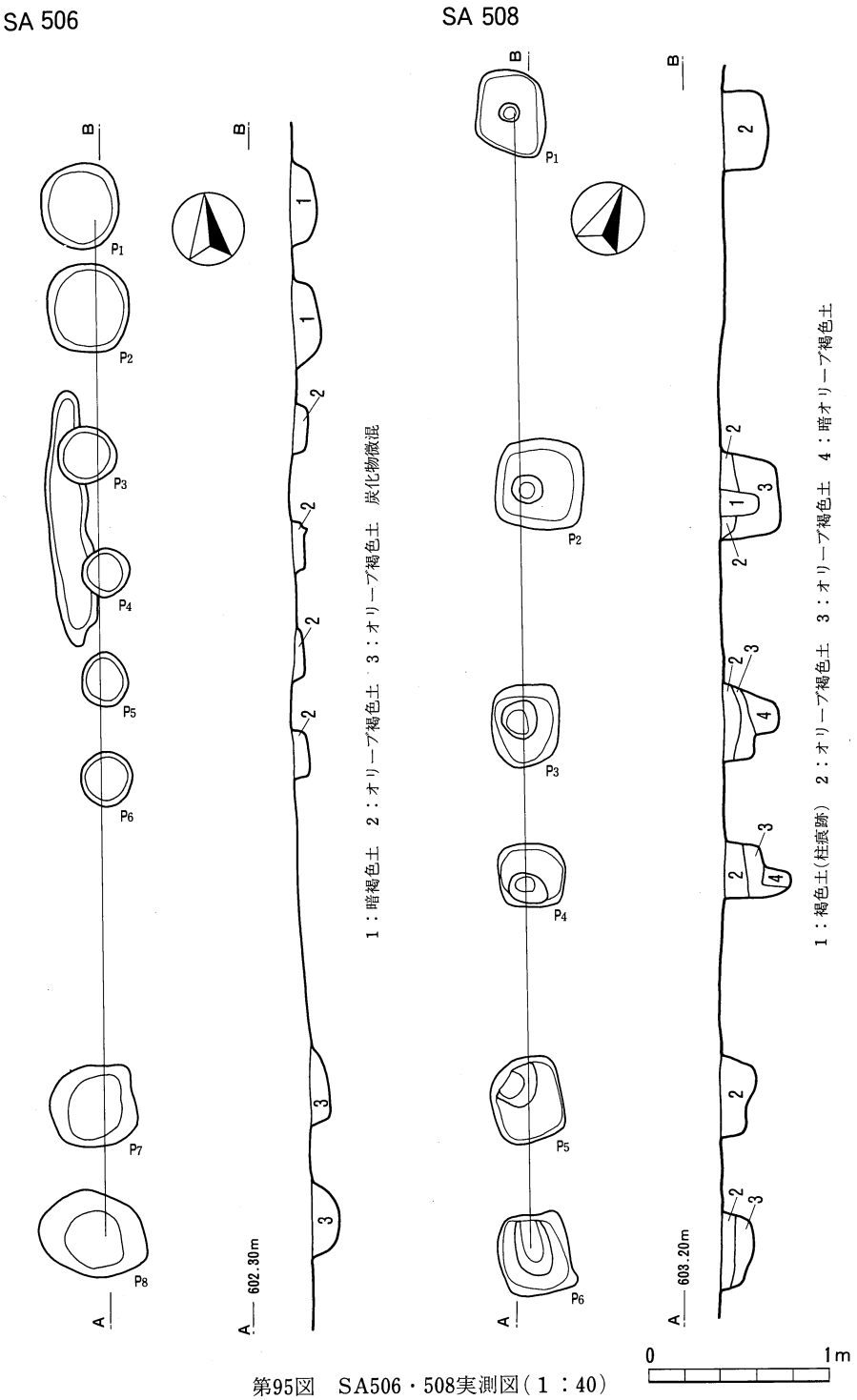
検出：ST566の南側に位置し、その南列と平行するように柱穴３基が並ぶ。当初、ST566の庇と考えていたが、掘り方の規模などから柵址とした。構造：本址は全長4.46ｍを測り、柱間の間隔は2.13,2.42ｍである。円形の掘り方は径21～38cm、深さ15cm前後で中央の柱穴が浅い。覆土はⅡＡ層を基調とする単一層である。時期：遺物は出土しなかったが、ST566に付随する柵址と考えられることから３期に帰属する。

５　墓　　址

墓址と認定した遺構は人骨の出土したものや特殊な遺物を出土した７基がある。時期別構成は13期に帰属するものが４基、14期の墓が１基のほか、時期を限定できなかったもの２基がある。

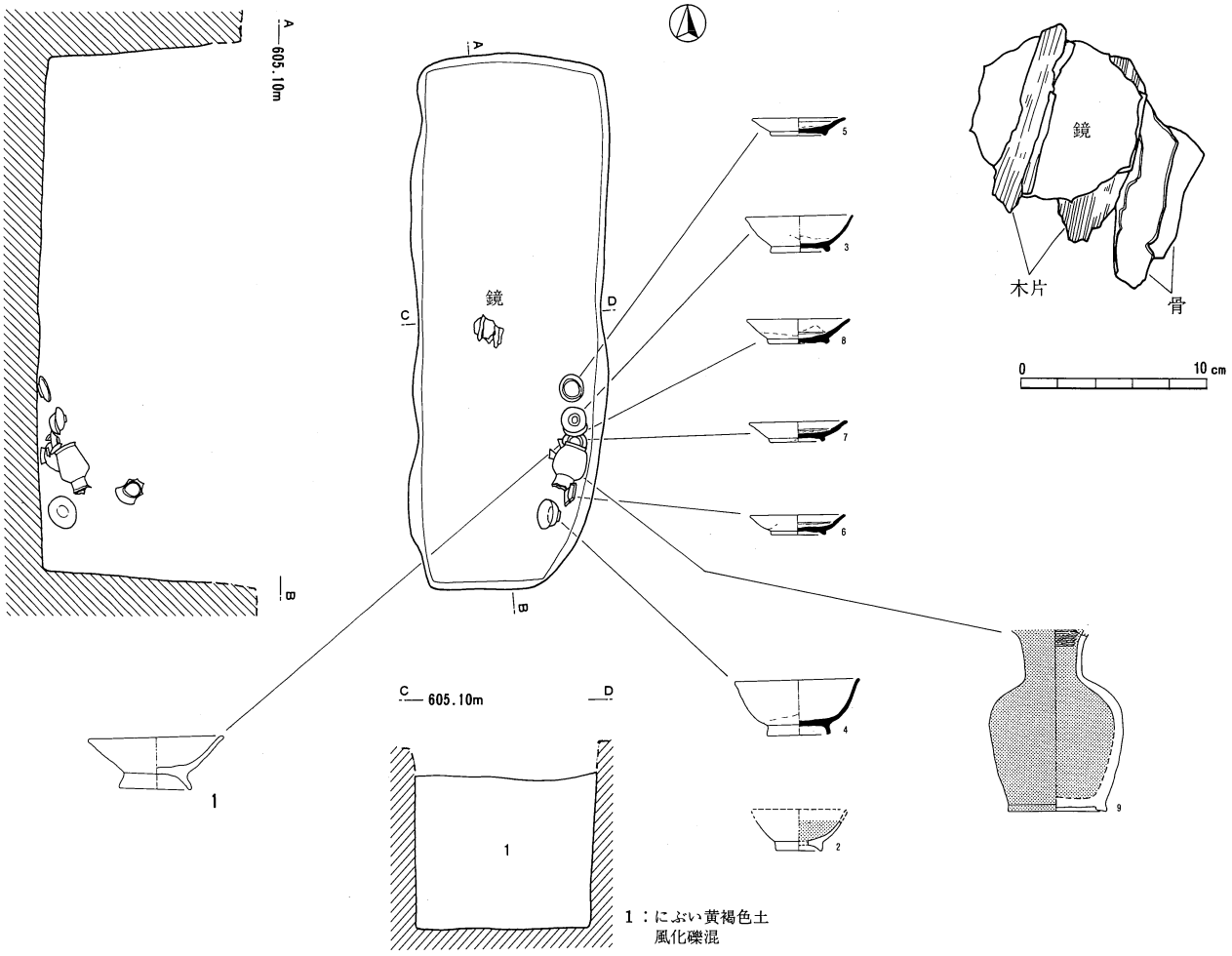
SK176　位置：南部Ａ区　図版17、第96図、PL42

検出：ⅡＡ層上位で検出する。SB33と北側で重複するが、覆土の色調の違いから本址が切ると確定した。形状・規模：本址は真北に主軸をとる長方形で、規模は2.20×0.75ｍ、深さは90cmと深い。平坦な底面から壁は垂直に立ち上がる。構造：埋葬は土葬によったと思われ、人骨の遺存状況は窮めて悪い。頭骨と歯の一部が坑底面の北側から出土したことから、頭位方向は北であると判断できる。歯は列状に残存するが軟質で溶解が進んでいる。木棺を使用したか否かは明瞭でないが、掘り方が極端に深い状況や壁が垂直に掘り込まれることから木棺による埋葬の可能性がかなり高い。覆土は細粒砂を基調とし、一時的に埋め戻されていた。遺物の出土状況：遺物は銅鏡１面が中央から、土師器の杯１、黒色土器Ａの小椀１、灰釉陶器の椀２、皿４、さらに内外面が黒色処理された黒色土器Ｂの長頸壷１点が南東隅に集中して出土した。銅鏡は瑞花双鳥八

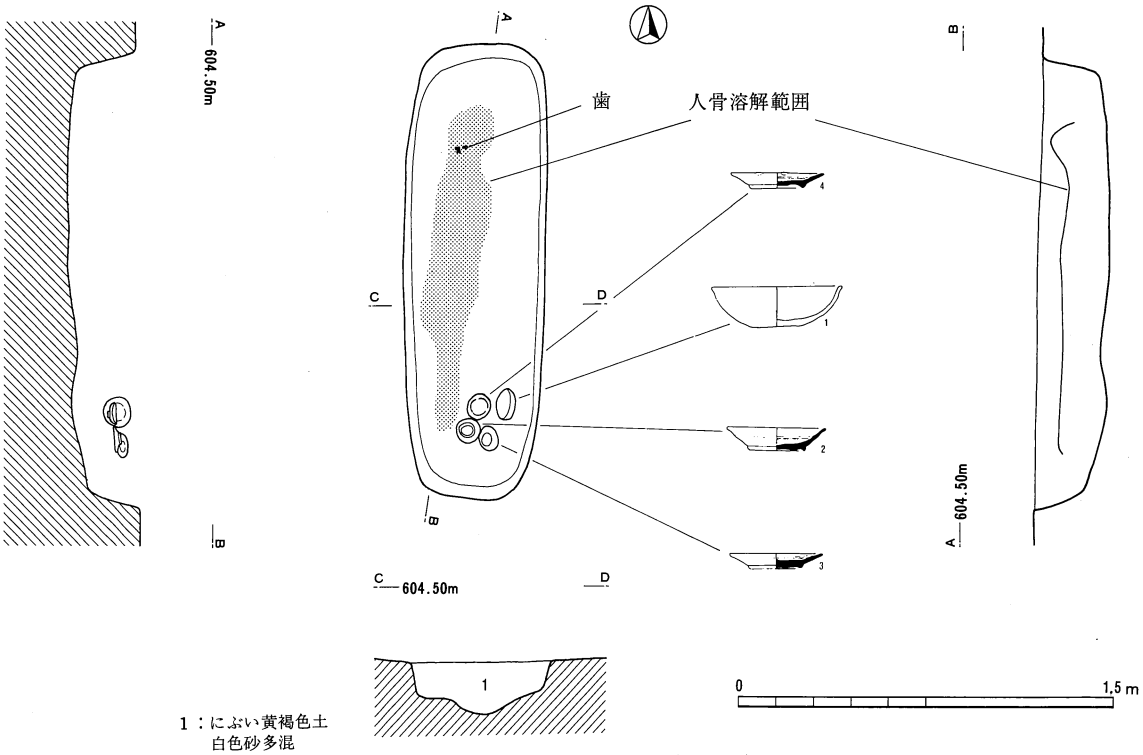


第95図　SA506・508実測図（１：40）

SK176



SK193



第96図　SK176・193実測図（1：30）

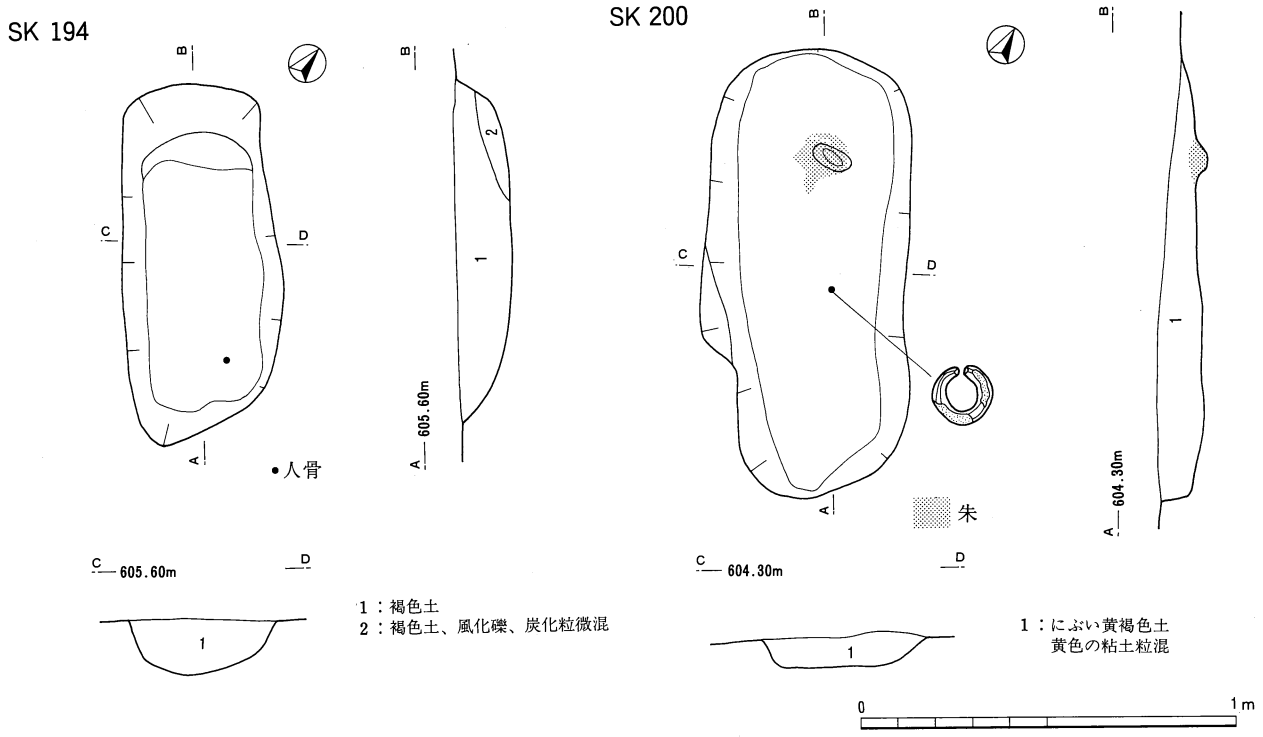
稜鏡の完形品で遺存状況は良好である。小さな木片が銅鏡を挟むように遺存しており、木製の鏡奩に鏡を納めて副葬したことが推定できる。木片の下には人骨がわずかに観察された。溶解が激しいため部位の同定はできないが、埋葬した遺体の上に鏡を置いた状況は間違いない。土器類は灰釉陶器の皿１点（7）を除いて底面から出土したが、平置、倒位、逆位などがみられ、あたかも木棺の脇にまとめて副葬したかのようである。なお、長頸壷の口縁部は残存せず、当初から破損していたと思われるが、当該期には類例の少ない遺物である。時期：遺物から13期に帰属する。

SK193　位置：南部Ａ区　図版24、第96図、PL43

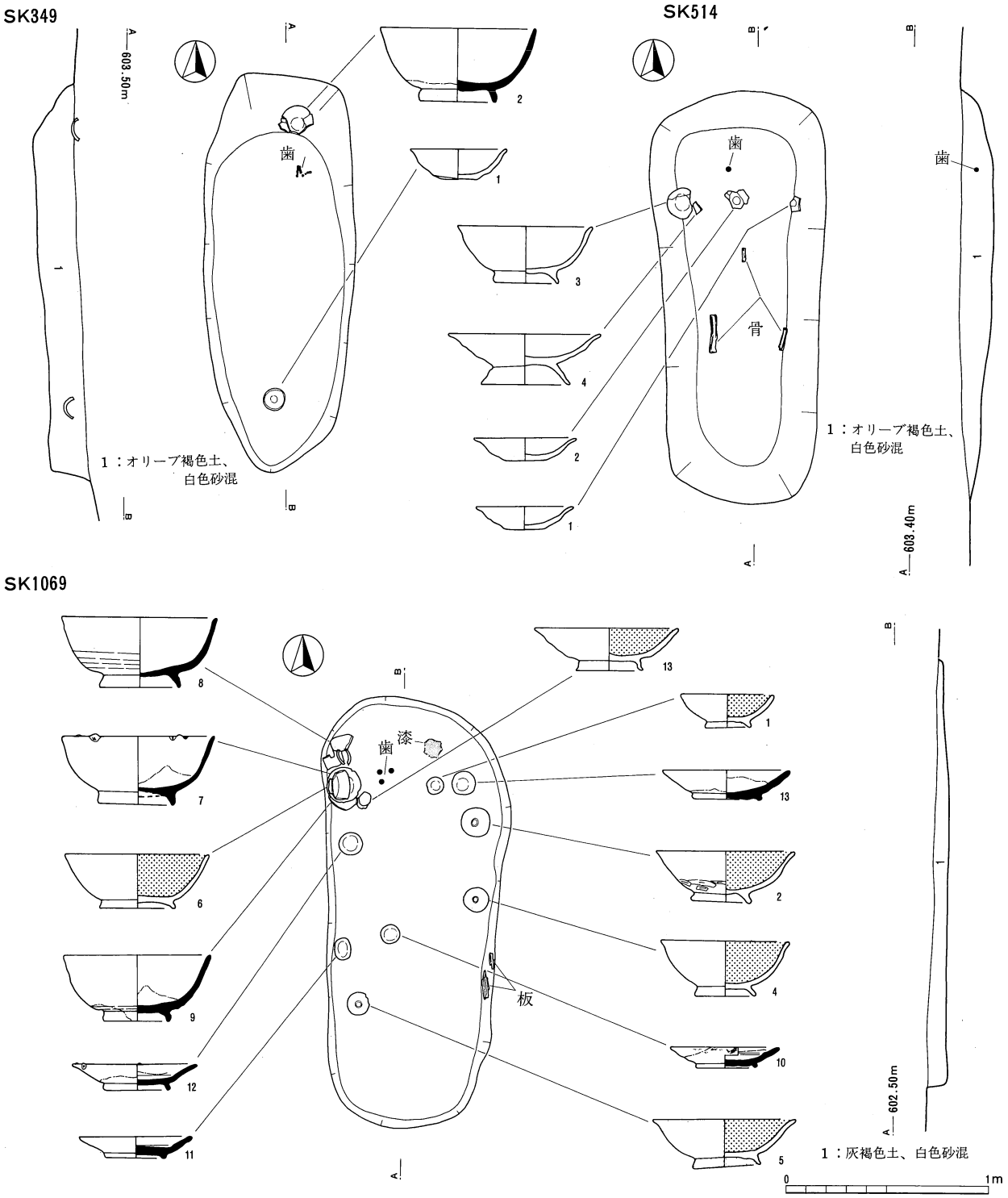
検出：SB58の覆土中に白色砂を含んだ楕円形の落ち込みが検出された。規模・形状：主軸を南北方向にとり楕円形を呈す。長軸1.82ｍ、短軸0.57ｍ、深さ22cmを測る。壁は直線的に立ち上がり、底面は南側がわずかに浅い。構造：骨の遺存状況は悪く、坑底面の北側で歯の一部が確認されたのみである。その歯も溶解が進んでおりかなりもろい。また、掘り下げを進めるなかで覆土の締まりの悪い箇所があり、色調も白味を帯びた範囲が認められ(図破線)、おそらく人骨が溶解したものと推定された。木棺を使用した痕跡は明瞭でないが、遺物の一部が倒位で出土しており、木棺の使用の可能性もある。埋葬は伸展した状態で土葬されたと考えられる。覆土はSB58の覆土を基調とするにぶい黄褐色の細粒砂で白色砂を多量に混入する単一層である。遺物の出土状況：遺物は土師器の杯１点、灰釉陶器の皿３点が南端に集中して埋置され、床面からわずかに浮く。杯は倒位で出土したが、皿は平置と伏せた状態のものとがある。時期：遺物の状況から13期に帰属する。

SK194　位置：南部Ａ区　図版21、第97図、PL43

検出：SB63の南東に隣接し、プランは明瞭である。ⅡＡ$_2$層を検出面とする。規模・形状：楕円形を呈し、規模は1.80×0.86ｍ、深さ28cmを測る。壁は緩く傾斜し、断面は弓状になる。南東隅に人骨の細片が確認されたが、溶解が進んでおり、部位の鑑定はできなかった。覆土は２層に分層されるが、基調となる土は褐色の粗粒砂である。２層には粘土粒がブロック状に堆積していた。遺物の出土状況：土師器、須恵



第97図　SK194・200実測図（１：20）



第98図　SK349・514・1069実測図(1：30)

器の杯、甕が破片で出土したが、いずれも混入品と考えられ、副葬品と思われる遺物の出土はない。時期：遺物は出土していないので断定はできないが、混入した遺物は5期の様相である。

SK200　位置：南部A区　図版28、第97図、PL43

検出：SB81の西側に黒褐色の落ち込みがあり、プランは明瞭である。人骨は出土しないが、遺物の出土状況や形状から墓址と認定した。構造：主軸をN35°Wとる、長軸2.40m、短軸1.10m、深さ23cmの楕円形のプランである。壁は東、西壁が緩く傾斜し、西壁が部分的に張り出す。底面はほぼ平坦になり、北側によった落ち込みには朱が集中している。覆土はオリーブ褐色の粘質な土を主体とする単一層である。遺物

の出土状況：底面中央から副葬品と考えられる完形の金環１点が出土した。時期：遺物や遺構の分布状況から１～２期の所産と考えられる。

SK349　位置：南部Ｃ区　図版39、第98図、PL44

検出：IIA_2層で検出する。白色砂を多量に含むプランは明瞭に検出することができた。形状・規模：楕円形を呈し、長軸1.96ｍ、短軸0.56ｍで、深さ18cmと浅い。主軸はN11°Eある。底面は平坦で北側の壁のみ緩やかに立ち上がる。構造：埋葬は土葬によったと考えられ、一部遺存していた骨や歯の位置から頭位を北に向けていたと判断できる。歯は歯列を保って残存し、上顎は第１～３大臼歯、切歯、犬歯があり、下顎には小臼歯が残る。歯は咬耗が進んでいたが、歯型による鑑定によれば、年齢は成年以降で、性別は女性的であるとの所見を得た。覆土は細粒砂を主体とする単一層で白色砂を多量に混在し、底面付近では微量の焼土粒が観察された。遺物の出土状況：副葬品として灰釉陶器の椀１点と土師器の杯が１点がある。椀は底面から若干浮いて頭位付近から、杯は足元にあたる位置から出土した。時期：遺物の状況から13期に帰属する。

SK514　位置：南部Ｃ区　図版47、第98図、PL44

検出：IIA_2層上位を検出面とする。確定したプランは北側が広くなるが南側の方が検出面がわずかに低いためである。形状・規模：主軸を南北方向にとる長楕円形を呈し、長軸2.00ｍ、短軸0.78ｍを測り、深さは17cmと浅い。底面は平坦になり、壁は残存部は少ないが、緩やかに傾斜する。構造：埋葬は伸展で、土葬によったと考えられる。また、歯の一部が北側から出土したことから頭位を北に向けていたと推定できる。人骨は頭骨、歯、大腿骨と思われる一部が残存してたが、いずれも溶解がかなり進んでおり鑑定はできなかった。覆土は白色砂を多量に含む単一層で細粒砂を主体としていた。遺物の出土状況：土師器の杯２点、盤１点、灰釉陶器の椀１点が副葬品として頭位と左側に集中して出土した。いずれも原位置を保っていると考えられ、土師器の杯は被葬者の上に置かれていた可能性が高い。時期：遺物の状況から14期に帰属する。

SK1069　位置：北部Ｅ区　図版67、第98図、PL45

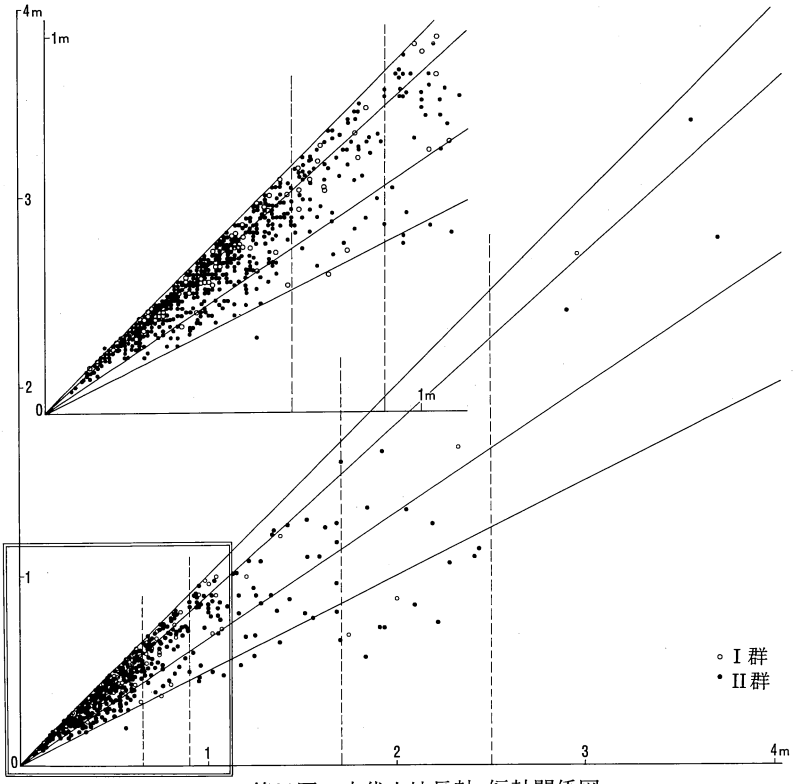
検出：IIA_2層上位で検出する。褐色を帯びたプランは明瞭に検出できた。規模・形状：長軸2.10ｍ、短軸0.85ｍ、深さは10cmを測る。形状は長楕円形を呈するが、北側がわずかに広がる。壁は残存部がわずかなため断定はできないが、緩やかに傾斜している。坑底面は平坦である。構造：東壁中央で約10cmの木片が２点出土したことから埋葬は木棺によったと推定される。頭位方向は歯が３点、歯列を保って出土し、北を向けて埋葬されたことが確認できた。だが、そのほかの骨は遺存していなかった。覆土はＩＤ層質の灰褐色の細粒砂を基調とする単一層である。遺物の出土状況：副葬品として黒色土器Ａの椀６点、灰釉陶器の椀３点、皿４点の13点が図示した位置からそれぞれ出土した。北西隅に灰釉陶器の椀が集中する以外は10の皿を除き、被葬者を取り囲むように埋置され、３・８が倒位、逆位で出土したほかは平置されている。また、北端からは10×７cmの紙状の漆が確認された。色調はにぶい朱色で鮮明である。時期：遺物の出土状況から13期に帰属する。

６　土　　坑

概観

分類：松本平の統一分類基準によると、本遺跡で検出された古代の土坑は以下のように分類される。

この分類によれば、総計1183基の内、その７割以上が円形や楕円形のII群であることは注目できる。これらのうち１・２種は掘立柱建物址などの柱穴になる例もあり、その分布は北部Ｄ区の南西隅に集中する傾向をみせる。なお、これらのなかには中世に降るものも含まれると予想されるが、根拠が弱いため一応



第99図　古代土坑長軸・短軸関係図

I群：方形を基本形とする土坑
II群：円形を基本形とする土坑
III群：不整形な土坑

A類：長短軸比
　　1：1～10：9
B類：長短軸比
　　10：9～3：2
C類：長短軸比
　　3：2～2：1
D類：長短軸比
　　2：1～

1種：長軸　65cm未満
2種：長軸　65～90cm
3種：長軸　90～170cm
4種：長軸 170～250cm
5種：長軸 250cm以上

	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	合計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
I	51	11	4	0	1	67	43	10	8	0	1	62	8	2	2	2	0	14	0	2	1	4	1	8	151
II	350	26	10	1	1	388	262	36	28	2	1	329	35	7	10	1	0	53	0	0	6	7	0	13	783
III	10	3	2	2	1	18	14	8	15	3	3	43	4	0	4	3	0	11	0	2	1	3	3	9	81

不明	総計
168	1183

第2表　古代土坑の形態分類

古代に加えて処理した。3種以上の規模の土坑はかなり少ないが、これらは後述する竪穴住居址に変わる機能を有するものとして特筆される。

土坑から出土する遺物は少なく、時期や機能の限定は極めて難しいが、本遺跡の場合11期前後を境として覆土の特徴が異なる。それを基準にしながら他遺構との重複関係から時期を予測した土坑もある。以下、各群別に注目できる土坑を取り上げる。

(1)　I群の土坑

SK56　　位置：南部A区　　図版19、第100図、PL46

検出：IIA_2層で検出する。当初、規模から住居址と判断したが、カマドが存在しないことや床面の状況などから土坑とした。規模・形状：長軸3.2m、短軸2.48m、深さ68cmを測り、方形に近い形状である。壁は北側を除き、直線的に立ち上がる。底面は平坦で、敲き締めた痕跡などはみられない。坑内中央には25cm程の礫が70～80個程集中して出土した。礫は雑然と投棄されたと思われ、硬砂岩の河原石が使用される。なお、被熱の痕跡はみられない。覆土は黄褐色の粗粒砂を主体とする単一層である。遺物の出土状況：覆土中から把手の付いた鍋状の土器が細片で出土したが、本址に帰属するものか判然としない。時期：遺物

の様相から12期以降になるが、時期の限定は難しく、中世に降る可能性も残る。
時期：覆土の特徴から11期以降に帰属すると判断した。

SK332　位置：南部Ｃ区南側　図版39、第100図

検出：SB113にトレンチを入れた際、その断面観察で本址の存在に気が付く。本址はSB113を切り、入れ子状になる。規模・形状：主軸を南北方向にとる小判形を呈し、長軸140cm、短軸92cm、深さ30cmを測る。平坦になる坑底面には炭化した種子が広がり、その下には薄く焼土層が観察された。覆土は白色砂を多量に含む細粒砂の単一層である。坑底面には焼土層が全面に広がり、坑内で火を焚いたと考えられる。遺物の出土状況：炭化した種子のほか、土器などは出土していない。種子は紡錘形を呈し、形のしっかり遺存しているものは約100個程で、ほかは形状が崩れ炭化粒状になる。種子は一種類だけで、坑底面中央に集中する傾向がみられる。中島豊志氏の鑑定によれば、種子は「ホドイモ」ではないかという結果を得た。時期：覆土の特徴から11期以降であろう。

SK518　位置：南部Ｃ区北側　図版48、第100図

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とする。SB216・ST39を切るが、本址の覆土には白色砂を含むことから容易に確定できた。規模・形状：一辺2.9ｍの方形に近い形状である。深さは18cmと浅く、平坦な底面は貼り床など、整地の痕跡は観察されない。覆土は白色砂を多量に混入する細粒砂で自然埋没と思われる。カマドが存在せず、底面も軟弱なことから土坑の範疇に含めたが、上屋をもつ建物になることも想定される。一方、竪穴住居を構築する途中で廃棄したとも考えられ、その性格の限定はかなり難しい。遺物の出土状況：遺物の出土量は窮めて少ない。土師器の杯、椀や須恵器が破片で出土したが、本址には帰属しないと思われる。時期：遺物や覆土の特徴から11期以降の所産と判断したい。

SK625　位置：南部Ｂ区東側　図版34、第100図

検出：ⅡＡ$_2$層に対応する礫層中で検出した。規模が大きなプランであることから竪穴住居址になると予想したが、カマドが存在せず、遺物の出土状況も住居址のそれと異なる状況から土坑と判断した。本址は南側のSB206に切られる。規模・形状：2.8×2.6ｍの隅丸方形を呈し、深さは10cmと浅い。坑底面はわずかに凹凸が認められるが、地山の礫層がそのまま露出していた。覆土は地山に由来する小豆大から拳大の礫を含んだ粗粒砂を基調とする単一層である。規模や平面形から上屋根構造をもつ遺構と推定できるが柱穴も存在せず、限定することはできない。なお、遺物は出土しなかった。時期：５期前後に帰属するSB206に切られることから５期以前の遺構である。

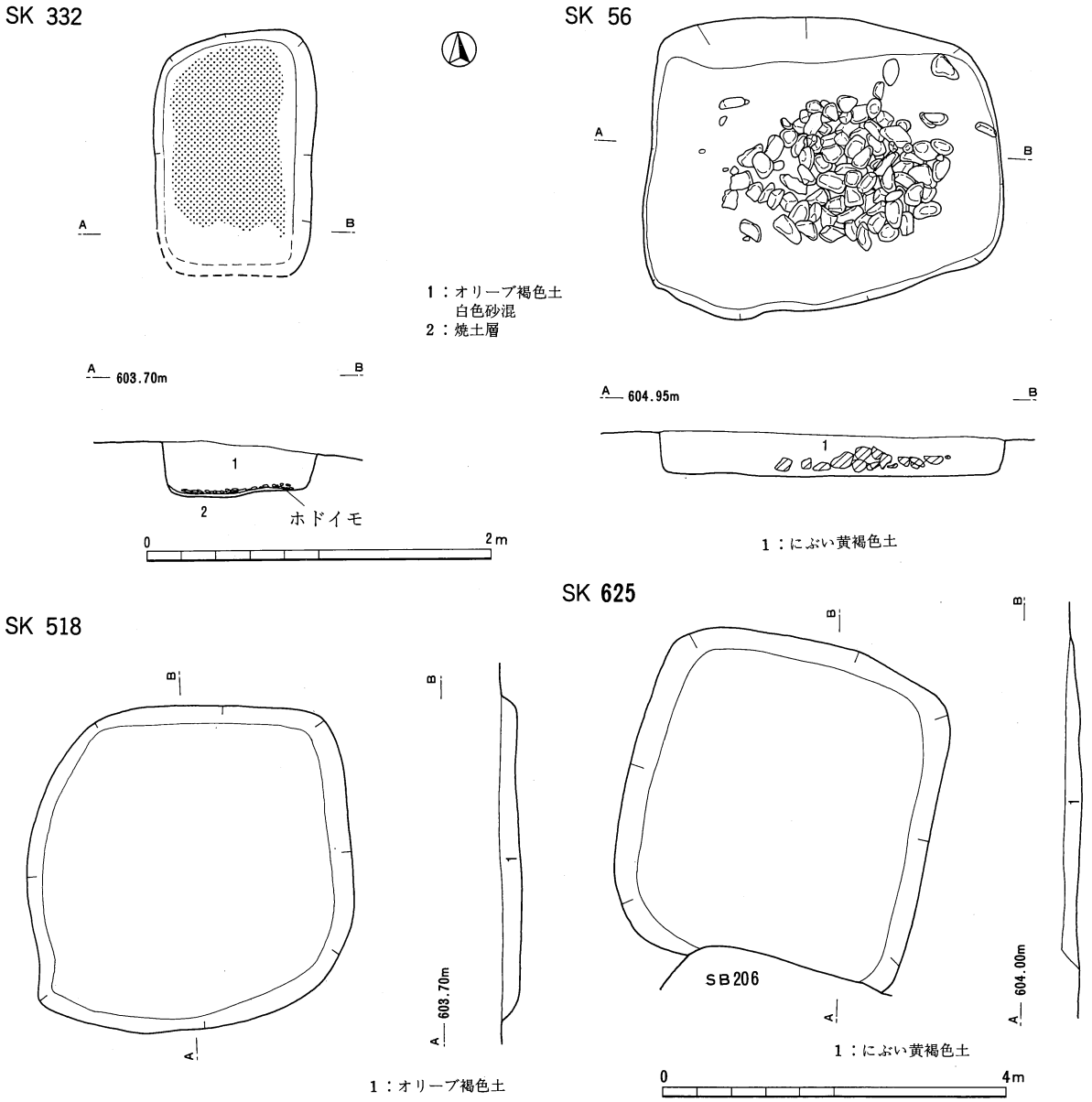
(2)　Ⅱ群の土坑

SK11　位置：南部Ａ区　図版19、PL46

検出：ⅡＡ$_1$層上位で検出した。規模・形状：長軸84cm、短軸70cmを測り、主軸をほぼ南北にとる。北辺がわずかに張り出す楕円形である。坑底面はわずかに凹凸があり、中央が最も深く、16cm程である。覆土はＩＤ層基質の黄褐色土で炭化粒を少量含む。遺物の出土状況：土師器に杯や黒色土器Ａの椀などが比較的大きな破片で北側を中心に出土した。人骨などは出土していないが、墓址である可能性が十分考えられる。時期：遺物の様相から13～14期である。

SK339　位置：南部Ｃ区　図版40、第101図

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。須恵器の大きな破片が露出し、坑底面付近でプランの確定をすることができた。規模・形状：主軸はN37°Wにとり、長軸125cm、短軸58cmの楕円形である。坑底面は平坦になり、深さは14cmを測る。覆土は褐色の細粒砂を基調とする単一層になる。遺物の出土状況：完形に近い横瓶１点が潰れた状態で出土した。横瓶は底面からわずかに浮いて出土したことから、土を埋め戻す過程で納め



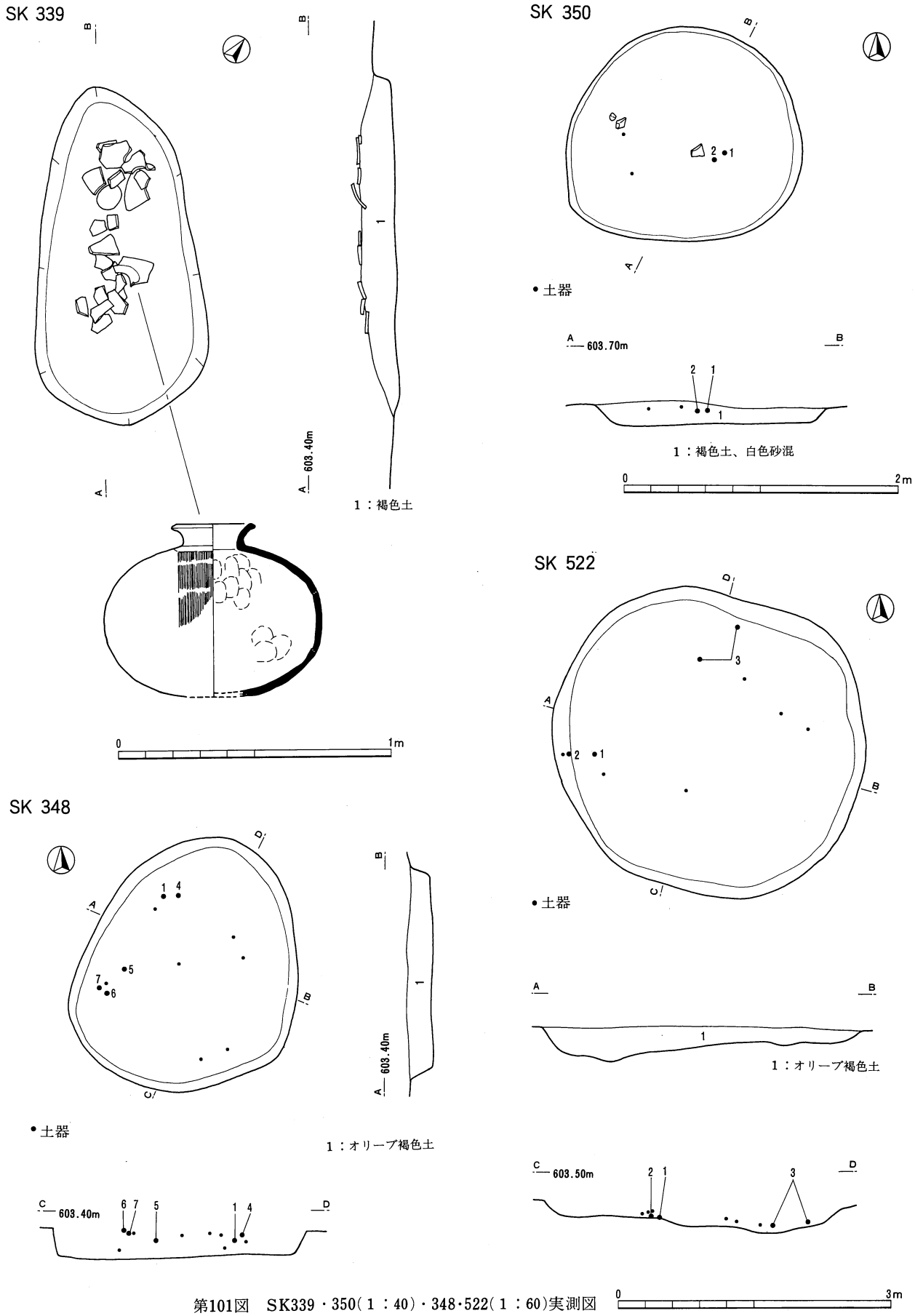
第100図　SK332(1：40)・56・518・625(1：80)実測図

られたと判断できる。人骨などの出土はみられないが墓址である可能性も十分考えられる。時期：遺物から3期から5期に帰属する遺構である。

SK348　位置：南部C区東側　図版39、第101図、PL46

検出：IIA_2層上位で検出する。規模・形状：長軸2.8m、短軸2.4mの南北方向に長い、円形に近い形状になる。深さは36cmを測り、平坦な坑底面はIIA_2層の地山をそのまま床としていた。カマドや柱穴は存在しないが、規模から上屋構造をもつことも推定される。覆土はオリーブ褐色のシルトを主体とする単一層で、3cm前後の礫や焼土粒を含んでいた。遺物の出土状況：須恵器の食器を中心に土師器の甕などが出土しており、出土量は比較的多く、残存率も高い。遺物は破片での出土がほとんどで埋没する過程で投棄されたとものと考えられる。時期：遺物の様相から5期に帰属する。本址の西側に隣接するSB114とは同一時期に帰属し、住居址との間での遺物の接合関係はみられなかったが、住居址に付随する施設と判断してよいだろう。

SK350　位置：南部C区東側　図版39、第101図



第101図　SK339・350(1：40)・348・522(1：60)実測図

検出：SK348の東側に位置し、形態が共通することから同様の機能を備えた遺構と判断できる。IIA_2層上位を検出面とする。形状・規模：直径1.7mの円形を呈する。坑底面は平坦で整地した痕跡は認められない。覆土はIIA層基質のシルトを主体とする褐色土の単一層で、人為的な埋没状況と思われる。遺物の出土状況：土師器杯、黒色土器Aの椀、灰釉陶器椀などが出土した。破片での出土がほとんどで、混入したものと考えたい。時期：遺物の様相から13期の所産と判断でき、北側に隣接する同一時期のSB125・126と、関連性の強い遺構と考えられる。

SK522　　位置：南部C区北側　　図版48、第101図、PL47

検出：IIA_2層上位を検出面とする。SB216の西側で大型の円形の落ち込みを確認した。形状・規模：直径3.4m前後の円形を呈し、最深40cmを測る。壁は緩やかに傾斜し、床面には凹凸がある。床は敲き締められたり、火床など、諸施設と関連する痕跡は認められない。覆土はIIA層基質のオリーブ褐色土を主体とする単一層で、黄色い粘土ブロックを均一に混入する。人為的な埋没と判断できる。規模から、住居址に準じた上屋をもつ構造が推察されるが、柱穴は確認できなかった。遺物の出土状況：土師器の杯、須恵器の蓋、　が破片で出土したが、その全体量は少ない。遺物は坑底面から出土したものの、、本址に帰属するとは考えられない。時期：遺物の様相から1期に帰属する。西側に隣接するSB155と同一時期になり、周囲の住居址群に付随する施設であろう。

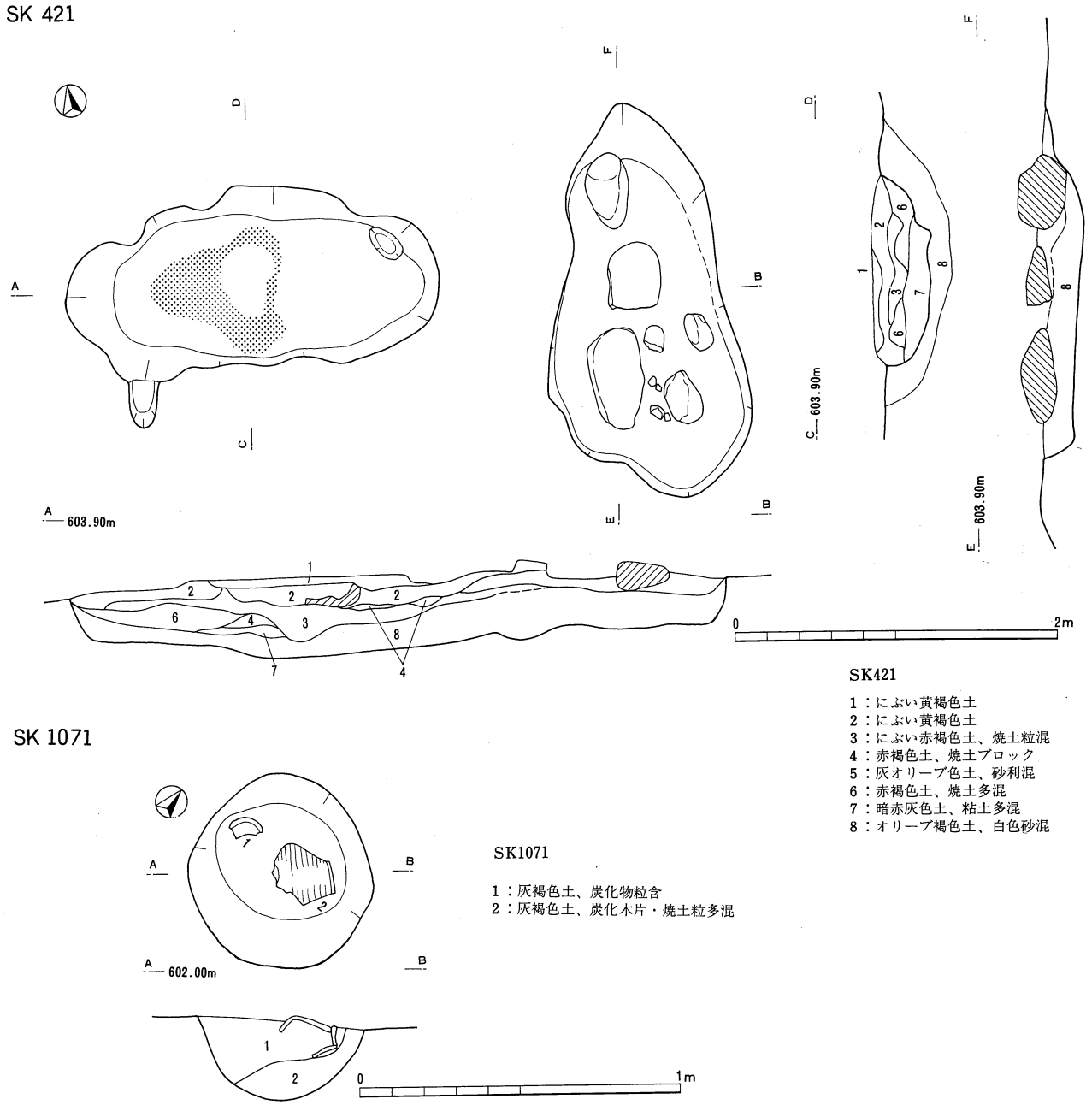
SK1071　　位置：北部E区　　図版66、第102図、PL48

検出：SB536のカマド右側を切る位置に、覆土中に炭化物、酸化鉄を混入した落ち込みを検出した。形状・規模：径60cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。断面はU字形になる。覆土は2層に分層される。覆土の基調となる土は同質だが、2層には焼土粒を多量に含み、炭化した大きな木片を混在する。坑底内で火を焚いたことは明瞭で、その後で1層が覆ったと考えられる。遺物の出土状況：灰釉陶器の皿、長頸壺の2点が1層から出土した。遺物は完形品ではないが、本址に帰属すると思われる。時期：遺物の様相から11～12期の遺構と思われる。

(3)　III群の土坑

SK421　　位置：南部C区　　図版43、第102図、PL47

検出：IIA_2層上位で検出する。大きな花崗岩が平置された状態で露出していた。その西側では焼土を多量に含んだ楕円形の落ち込みを確認した。礫のある箇所は浅い掘り方で、西側を含むひとつの遺構と思われるが、その中間の構造については分からなかった。形状・規模：西側にある楕円形の落ち込みは長軸2.2m、短軸1.0mで、主軸方向は東西にとる。断面形はレンズ状を呈するが、中央下部には黒色の粘土の塊が支柱のように立ち、天井を付設する構造物を推定できる。南壁には煙道状の張り出しがみられる。東側にある3つの礫は平坦に据えられるが、火を受けたような痕跡は認められない。覆土はID層質の細粒砂を基調とすることに変わらないが、焼土の混入量やブロック状に堆積する状況を根拠に分層した。西側の落ち込みは、天井部の崩れと思われる焼土ブロックが層状に重なる。東側は掘り方の底がIIA_1層中位でとまるが、その構築状況については不明である。掘り方は西から東側にかけて連続しており、ひとつの構造物であると判断できる。西側の掘り方には白い粘土を貼付するように入れ、被熱のためにかなり硬化している。遺物の出土状況：土師器の甕、須恵器の甕の破片が出土した。鍛冶に関連する遺構との予測のもとに鉄滓の出土に注意を払ったが、皆無である。遺物の出土状況からは遺構の性格を判断できず、火を焚いた痕跡が明瞭な屋外施設とする以外、性格の不明の遺構と言わざるを得ない。時期：遺物の様相から2期に帰属すると判断できる。



第102図　SK421(１：40)・1071(１：20)実測図

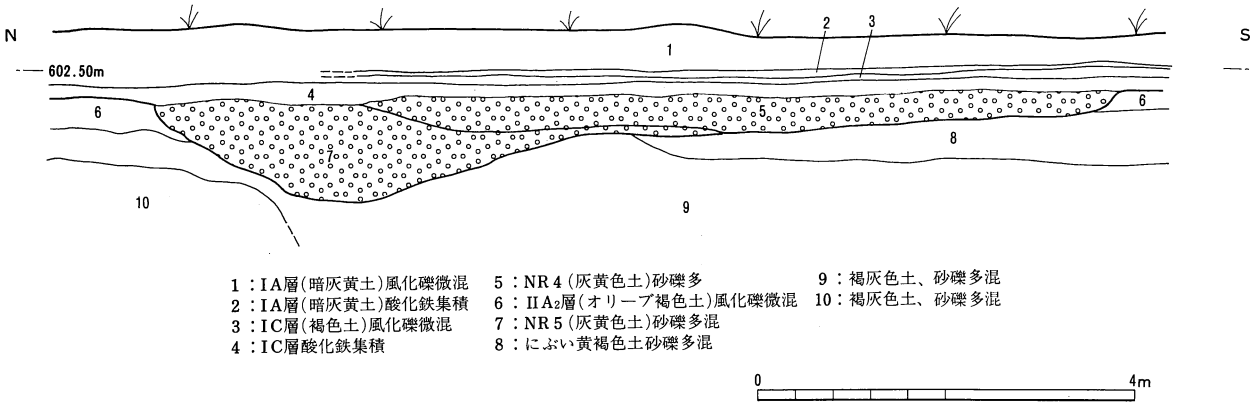
7　自然流路

NR 3　　位置：北・南部境　　図版９

検出：IIA_2層上位で検出する。本遺跡の現地形の大きな変換点にある重要な流路である。形状・層位：流路は東西方向に走行し、東へ向かって流れていたと推定される。幅は最大８～９ｍを測る。断面観察によれば、本址の下部にも数本の自然流路が認められ、限定はできないが、本遺跡が形成される以前から存在した可能性が高く、その両側に自然堤防上の地形を形成したと思われる。覆土は灰褐色の淘汰の良い細粒砂で、恒常的な流水と判断できる。時期：遺物を確認していないため時期の限定は難しいが、中世以前には恒常的な流水はないと推定される。

NR 4　　位置：北部Ｄ・Ｅ区境　　図版10、第103図

検出：IIA_2層を検出面とする。調査区の西から東へ流れる流路で、長期間にわたって自然流の河道になっており、一時期の河成層とは異なる。本址は東側でSD524を切る。形状・層位：流路の幅は東側で約７ｍ



第103図　ＮＲ４・５実測図(１：80)

を測り、かなり大きな流路と考えられる。深さは40cmで底面は地点によって深・浅の違いがあり、凹凸が激しい。覆土は淘汰の悪い河成中粒砂や粗粒砂を主体とし、部分的に細礫を含み、流力の強弱を示している。遺物の出土状況：遺物は２～８期にかけてみられるが、総じて２～３期の遺物が多い。また、カマドに使用されたと推定される礫が確認され、周囲の遺構から投棄された状況が窺われる。時期：遺物の様相から２期から８期前後の流路と考えられる。

NR５　位置：北部Ｄ・Ｅ区境　図版10、第103図

検出：NR４の北側に広がる砂礫層を確認し、断面観察によって自然流路であることを確認した。本址はNR４に切られるが、長期間にわたり存在した流路の１本である。形状・層位：流路の幅は約６ｍ、深さ60cmを測る。覆土は灰黄色の砂礫を多量に含む、淘汰の悪い粗粒砂を主体としていた。礫は径10～50mmの細礫を中心とし、一時的な流水と推定できる。本址の下部にも砂礫層(８～９層)が堆積し、本遺跡が形成する以前から河道が存在したと思われる。時期：遺物を確認していないが、NR４との重複関係から２期以前の流路である。

第３節　　中世の遺構

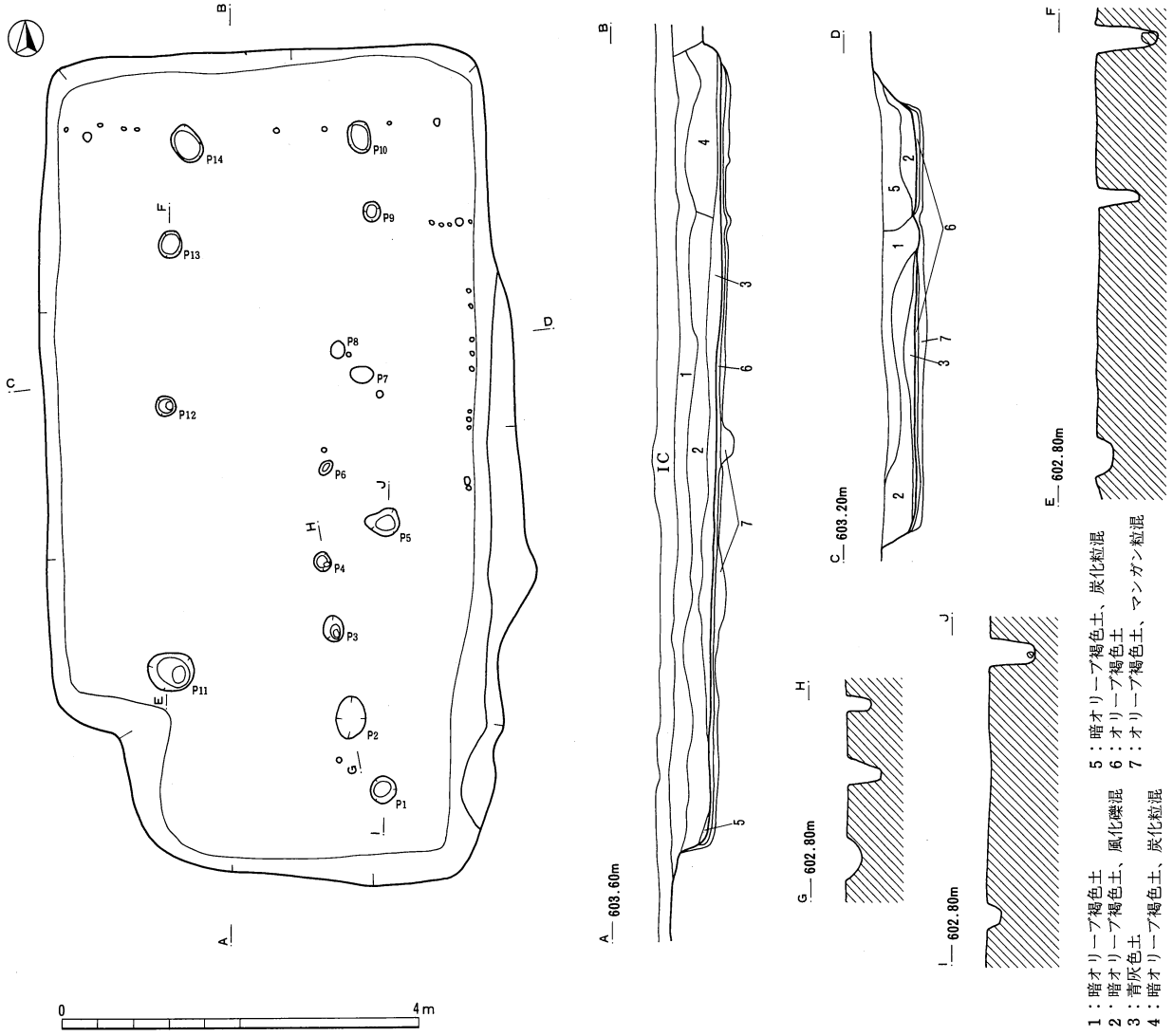
１　竪穴住居址

SB630　　位置：北部Ｄ区南東　　図版52、PL49

検出：ⅡＡ$_2$層上位で長方形の落ち込みを確認する。形状は隅丸長方形を呈し、3.55×2.55ｍの規模を有す。カマドに相当する遺構は存在しないが、上屋構造をもつと推定できることから竪穴住居址の範疇で捉えることとした。床：ⅡＡ$_2$層の地山をそのまま床とし、敲き締めなどの痕跡はみられない。壁は直に立ち上がる。床の中央付近には礫が投棄されていた。礫は割れ石を含めて15個あり、大きさも一様でない。埋没：自然埋没と思われる単一層である。遺物の出土状況：中世土師器の皿１点、青磁、土師器、須恵器の破片が出土したが、いずれも破片での出土で本址に確実に帰属する遺物は認められない。時期：遺物の様相から中世１期に帰属する。

SB631　　位置：北部Ｄ区南西　　図版51、第104図、PL49

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とする。北側に位置するSB632を含めてオリーブ褐色土の落ち込みが確認さ

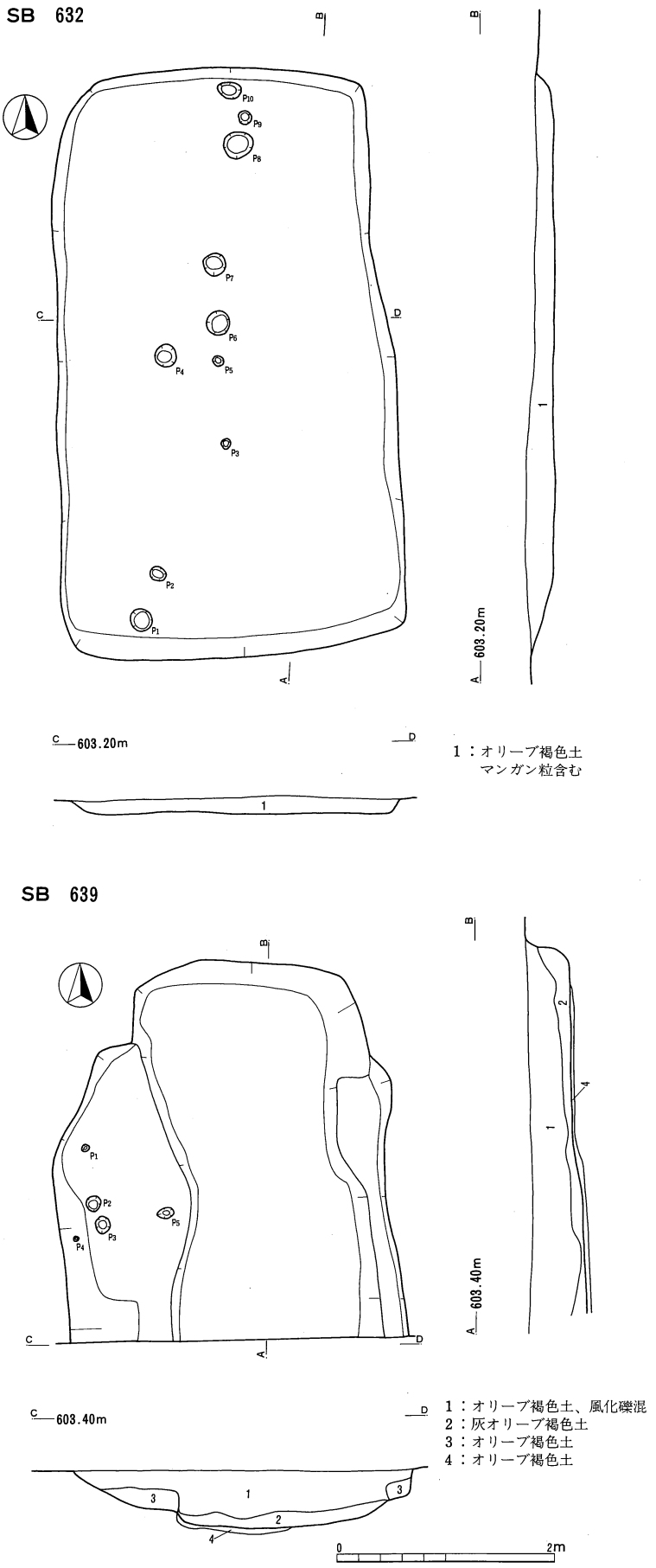


第104図　SB631実測図（１：80）

れた。当初、数軒の住居址が重複していると予想したが、覆土の状況を観察したところ、まず本址がSB624を切ることを確認し、続いて本址と似た構造をもつSB632に切られることを確定した。本址は西側に張り出し部をもつ長方形を基本形とするプランで、規模は南北方向9.94m、東西方向5.66mを測り、本遺跡でも最大級の遺構となった。柱穴：主柱穴と思われる落ち込みを、東列に5、西列に4基それぞれ確認した。掘り方の形状、深さ、柱間の寸法など一様でなく、柱筋も整然と配置されない。これとは別に、径5㎜前後の落ち込みが列状に確認された。これらは細い杭を打ち込んだような痕跡と考えられ、斜めに打ち込むものもわずかにあるが、ほとんどが垂直に打ち込まれ、全部で36基確認できた。床：全面に粘土をいれて整地された床で、かなり堅緻である。鉄分の集積が明瞭で、何等かの要因によって水がたまった状態があったと推定される。但し、本址が埋没する前なのか、埋没する過程でそうなったのかは不明である。埋没：部分的にブロック状の堆積が観察されたが、基本的に3層に分層される。1層はⅠC層基質の砂質の覆土で自然堆積と思われる。3層はⅡA層由来の粘土を主体とし、人為的な埋没状況に近い。遺物の出土状況：青磁、皇宋通宝などの貨幣、鉄製品が出土し、その出土量は比較的多い。いずれも破片で遺構内全体に散布しているが、特に下層からの出土が目立つ。しかし、直接本址に帰属すると思われる遺物はみられない。時期：遺物の様相から中世1期に帰属する。

SB632　　位置：北部D区南西
図版53、第105図、PL49

検出；本址はSB631の北側に隣接し、SB624,631を切る。プランは5.48×3.12mの長方形を呈する。重複する箇所を除いて地山とは明瞭に識別された。柱穴：南北方向に柱穴と思われる落ち込み10基を検出した。すべての落ち込みが上屋構造と関連するとは考え



第105図　SB632・639実測図

られないが、P8では柱痕跡が観察され、掘り方は大きく、深いP1・2・4・6～10などは柱穴になると思われる。柱穴は整然と配置されないが、本址の周辺には小ピット群があることから、本址の柱穴が竪穴の外側に位置していた可能性も高い。床：平坦な地山床で、敲き締めの痕跡はみられず、全体的に軟弱である。壁は緩やかに立ち上がる。埋没：ＩＤ層基質の暗オリーブ褐色砂質土で、風化礫やマンガン粒を混在する単一層である。人為的な埋没状況に近い。遺物の出土状況：土師器、須恵器などが出土したが、その全体量は窮めて少ない。床面遺物も数片観察されるがいずれも本址に帰属するものではない。時期：中世のSB631を切ることから中世１期に帰属する。

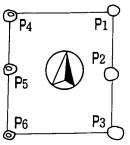
SB639　位置：北部Ｄ区南側　図版51、第105図、PL49

検出：ⅡＡ$_2$層上位を検出面とするが、青灰色の落ち込みは地山と明瞭に区別された。本址の南側は用水路によって撹乱を受けているために全体の規模は不明であるが、本址と形態が近似するSB632と同様に本址もかなり大型の遺構となろう。床：西側にⅡＡ層基質の粘土を入れて整地している。床面には酸化した鉄分やマンガン粒が集積するため褐色に変色し、かなり硬化していた。一部貼り床が認められる。テラス：東、西壁に地山を掘り残したテラスがある。テラスは床面から約20cm程高く、西壁のテラスは緩やかに立ち上がる。埋没：３層に分層された。いずれも細粒砂を主体とするが、ⅡＡ層に由来する粘土粒や混入量の違い、さらに溶脱の差を根拠に分層した。灰オリーブ褐色の２層が自然堆積した後、何等かの要因によって水が溜まり、２層から鉄分が溶脱されると共に床面に鉄分を集積させたと考えられる。遺物の出土状況：１層を中心に土師器や中世の遺物が出土した。床面にはほとんど遺物はみられない。時期：遺物の様相や遺構の形態から中世１期に帰属する。

２　掘立柱建物址

ST30　位置：南部Ｂ区東側　図版30

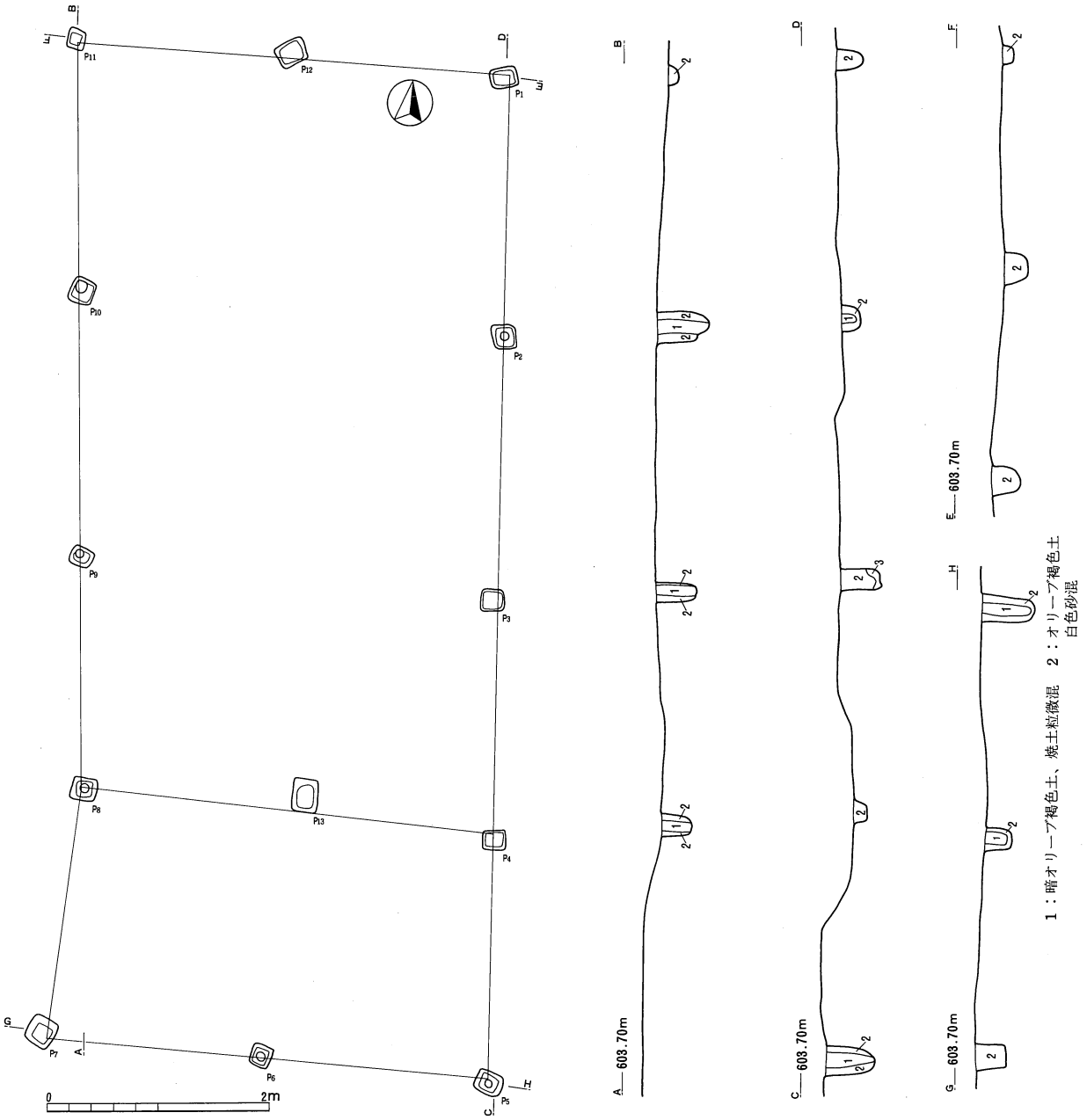
検出：ⅡＡ$_2$層上面を検出面とする。本址は２間×１間の南北棟で、ST31・SK366・369を切る。柱穴：柱穴は列の揃った配置である。柱間の寸法は桁方向が1.60～1.65ｍと推測されるが、西列は等間隔にならず、特にＰ５とＰ６間が広くなる。柱痕跡はＰ４～６で確認できたが、いずれも掘り方の中央に位置し、径10cm程の円形を呈していた。掘り方は最も深く掘り込むもので40cm程あり、断面はＵ字形のものが多い。埋没：覆土はⅡＡ層基質の褐色土と白色砂が混在する単一層である。柱痕跡は白色砂の含有量が多く、明瞭である。時期：遺構の形態や覆土の特徴から中世２期に帰属する。



ST33　位置：南部Ｃ区中央　図版45、第106図、PL50

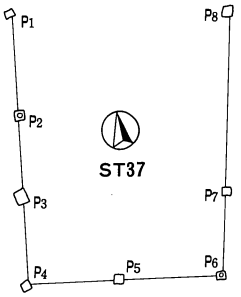
検出：ⅡＡ$_1$層からⅡＡ$_2$層にかけて検出した。方形を呈する掘り方は地山と明瞭に区別され、４間×２間の南北棟になる。柱穴：梁方向の柱穴は直線的に配置されるが、桁方向のP7が多少ずれて配置されるため、プランは形の整った長方形にならない。桁方向の総長は9.14ｍ、梁方向は4.12ｍを測り、確認された中世の掘立柱建物址のなかではST53とともに大型の建物址である。P13は間仕切りのための柱穴と考えられるが、Ｐ４～８の梁を結ぶ線上にのらない。そのためＰ４～13～６を、またはＰ８～13～６の範囲を仕切る柱穴になるのか断定できない。柱間の寸法は桁方向が2.20ｍ、梁方向が2.00ｍ前後の等間隔になり、規格性が認められる。柱痕跡はＰ２・５・６・８・10で観察され、径10cm程の円形を呈する。掘り方は一辺20cmの方形で規模は揃うものの、深さは20～50cmとばらつく。埋没：細粒砂に白色砂が混在する単一層で、柱痕跡は茶褐色を帯びる。Ｐ２・３・５・６では焼土粒がわずかに混入していた。遺物の出土状況：P10の柱痕跡から内耳鍋片が１点出土した。時期：遺物の状況から中世２期に帰属する。

ST37　位置：南部Ｃ区中央　図版45



第106図　ST33実測図

検出：IIA_2層上位で検出する。当初、柱穴は3基確認したのみであったが、その後の検出によって全部で7基の柱穴を確認し、本址を認定した。本址は3間×2間または桁行が3間以上の南北棟になると思われる。北東でSB160を切り、ST33とも実質的な重複関係にある。柱穴：柱穴は整然とした配置状況を呈する。柱間の寸法は梁方向がほぼ等間隔になるものの、桁方向はP2～P3が1.78m、P1～P2が2.64mになり、一定の間隔でない。掘り方は最大径32cmの方形で、U字形の断面形である。柱痕跡はP2,6で確認したが、径10cmの円形を呈する。埋没：覆土は白色砂を多量に混入する褐色土の単一層で、柱痕跡には焼土粒がわずかに観察された。時期：中世に帰属するST33と形態や覆土が近似することから中世2期に帰属する。

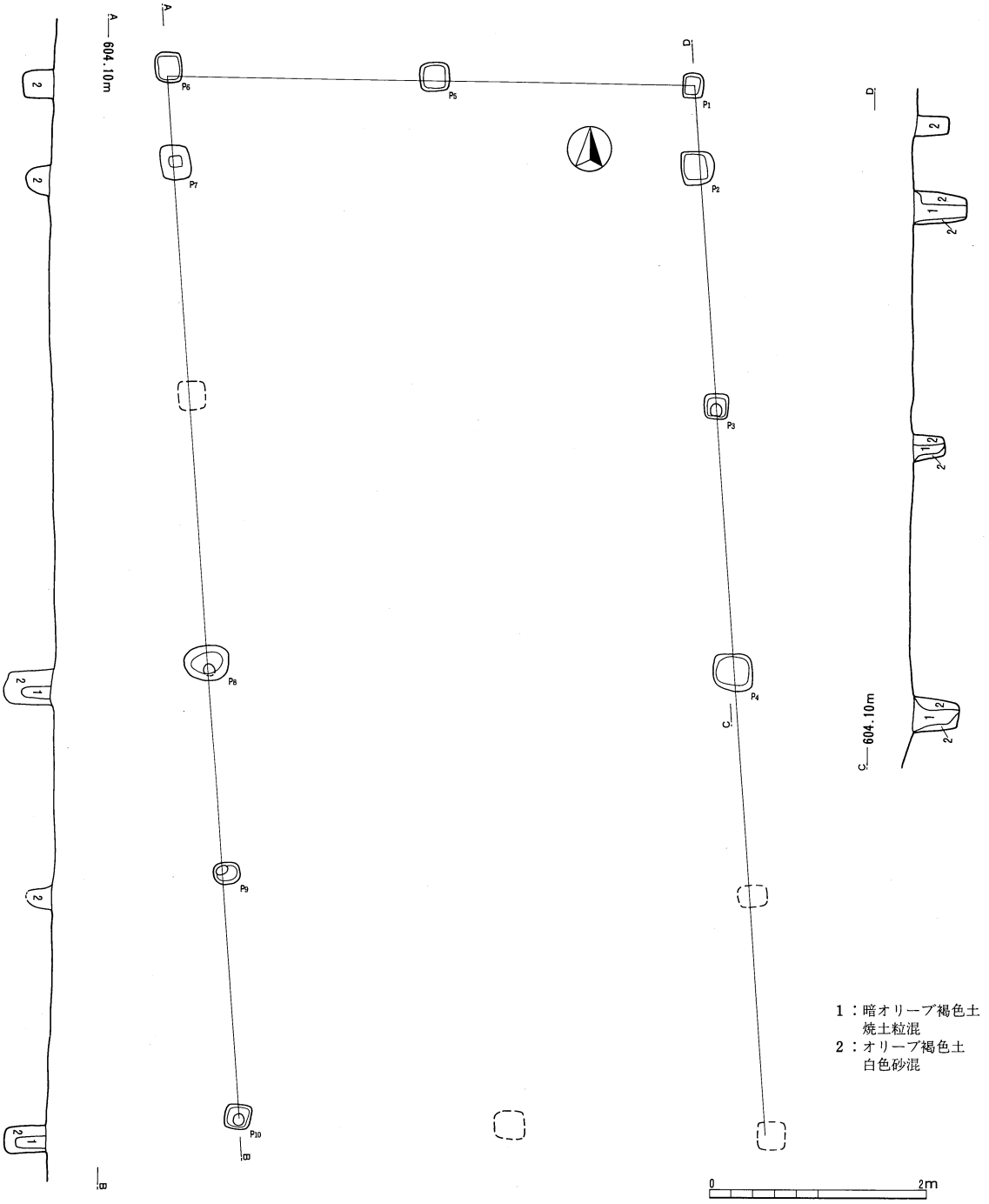


ST38　　位置：南部C区西側　　図版45・47

検出：ⅡＡ$_1$層下位を検出面とする。白色砂を含んだ方形の落ち込みが認められ、その配置状況から掘立柱建物址であることは容易に判断できた。本址の西側列は調査区域外になるため確認していないが、桁行が３間、梁間２間の建物址になると推定される。柱穴：方形を呈する掘り方は柱筋の揃わない配置で、規模もばらつく。深さは東列中央の柱穴が50cmと深い以外は比較的浅い。柱間の寸法は桁方向が2.42ｍ、梁方向が1.74ｍを測るが、その間隔は揃わない。柱痕跡は南東隅の柱穴で確認したが、径10cmほどの円形を呈し、底面には達していない。埋没：覆土はＩＤ層基質の白色砂が均一に混在する単一層である。時期：遺物は出土しなかったが、ST33と覆土が共通することから中世２期に帰属する。

ST49　位置：南部Ｂ区　図版36

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。褐色を呈する方形の落ち込みは地山と明瞭に識別され、東側に位置する



第107図　ST53実測図

SB207を切る。2間×1間の南北棟である。柱穴：柱穴は柱筋の通る整然とした配置である。掘り方は規格の揃った径20cm程の方形で、深さは最大35cmを測る。柱間の寸法は桁方向が2.50m前後、梁方向が2.40mでほぼ共通の間隔をもつ。柱痕跡は北東隅の柱穴で確認したが、径10cmの円形を呈し、底面では灰色化が観察された。埋没：覆土は白色砂を多量に混入する単一層で、ＩＤ層基質の細粒砂を主体としていた。時期：建物址の形態や覆土の特徴から中世2期に帰属する。

ST53　位置：南部Ｂ区中央　図版32、第107図

検出：IIA_2層上位で検出する。白色砂を多量に含む方形の落ち込みが整然と並び、掘立柱建物址と認定した。本址はSB185を切るが、南側はプラント・オパール調査によって失うため、全体像は不明確だが、北側に半間が張り出す、5間×2間の南北棟になると推定できる。柱穴：柱穴は直線的に配置され、北側に半間が出る形態である。柱間の寸法は桁方向が1.88～2.27m、梁方向が2.34～2.40mと一定でない。掘り方は方形を呈するものが多く、Ｐ4・8がほかと比較して大きい。柱痕跡はP2～4、8～10で確認したが、いずれも円形を呈し、底面に達していた。埋没：覆土はＩＤ層基質のオリーブ褐色の細粒砂を主体とする単一層である。柱痕跡は掘り方の土より褐色を帯び、焼土粒がわずかに混入する。時期：遺物はＰ7の掘り方から内耳鍋が出土しており、中世2期に帰属する。

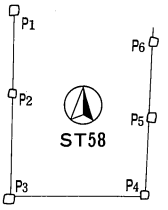
ST56　位置：南部Ｄ区西側　図版49、PL50

検出：IIA_1層下位で検出する。ST36の北側に隣接する本址は柱穴を4基しか確認できなかったが、西側の調査区域外に身舎があると判断し、建物址と認定している。しかし、柵址になる可能性もわずかに残る。柱穴：径20cmの方形を呈する掘り方は直線的に配置される。底面は30～40cm程垂直に掘り込み、U字形の断面形を呈する。柱間の寸法は2.50m程の等間隔になり、規格性が認められる。埋没：覆土には白色砂を多量に含み、ＩＤ層由来の細粒砂を主体としていた。時期：中世のST33の形態や覆土の特徴が近似することから中世2期に帰属する。

ST57　位置：南部Ｂ区北側　図版37

検出：IIA_2層上位を検出面とする。方形のピットが集中するなかで、白色砂を含んだ覆土を持つ円形の落ち込みを確認した。このうち、柱痕跡が観察された2基の柱穴とその周囲で検出した1基の柱穴を含め、掘立柱建物址と認定した。しかし、その全体像については不明である。柱穴：円形を呈する柱穴は中世の中でも比較的大きく、径32～39cmを測る。柱痕跡は掘り方の壁に接し、西列の柱穴は柱を固定させるために、柱の当たる箇所を掘り凹めていた。断面形は二段の不整形になる。柱間の寸法は南北方向が2.24mを測り、東西方向より25cm程長い。埋没：覆土はIIＡ層基質の細粒砂を主体にし、柱痕跡には焼土粒や炭化物粒、白色砂を混入していた。時期：覆土の特徴から中世2期の建物址と考えられる。

ST58　位置：南部Ｂ区北側　図版37



検出：検出はIIA_2層上位である。方形の柱穴5基を確認するが、その配置状況から本址は梁行が1間または2間、桁行が3間以上の南北棟になると考えられる。ST59とは柱穴相互の重複は見られないが、実質的な重複関係にある。柱穴：径20cmの方形を呈する柱穴は規格が揃い、整然と配置されるが、Ｐ2～Ｐ3の間隔が広いことから本来はその間に柱穴が存在した可能性が強い。柱間の寸法は桁方向が2.0m前後の等間隔になるが、西列では2.50mとわずかに広い。掘り方は20～40cmほど掘り込み、底面は平坦になる。埋没：覆土はＩＤ層に由来する砂質土で、白色砂を均一に混入する。時期：覆土の特徴や建物址の形態から中世2期の建物址と考る。

ST59　位置：南部Ｂ区北側　図版37

検出：ST58の西側に位置する。柱穴は全部で5基を確認したが、地山とは明瞭に識別された。本址は桁

行３間以上で、梁行が１間の南北棟になると推定される。なお、南東隅でSK727を切っていた。柱穴：柱穴は直線上に配置される。規格の揃った掘り方は一辺20cmの方形を呈し、深さは10～20cmと浅い。柱痕跡は西列中央の柱穴で確認したが、径６cmの円形でかなり細い。柱間の寸法は桁方向が2.30ｍ前後が多いが、西列には本来もうひとつ柱穴が存在したと推定される。また、西列の北側の柱間寸法は1.21ｍで半間になる。埋没：ST58と共通する覆土で、ＩＤ層を基調とする暗褐色の細粒砂である。柱痕跡にはわずかに焼土粒が観察された。時期：遺物は出土しなかったが、覆土の特徴から中世２期と思われる。

ST61　位置：南部Ｂ区北側　図版33

検出：IIA_2層上位で検出する。本址はST53の北側に隣接する２間×１間の東西棟である。柱穴：掘り方は径20cmの方形を呈し、整然と配置される。柱間の寸法は桁方向が2.40ｍ前後の等間隔になる。柱痕跡は東側列を除いて確認したが、いずれも掘り方の中央に位置している。掘り方は平均30cm程掘り込まれ、断面形はＵ字形になる。埋没：ＩＤ層に由来する黄褐色の単一層である。時期：覆土の特徴がST53と共通することから中世２期に帰属する。

３　溝址

中世の溝と認定した遺構は25条ある。一部の溝を除いていずれも南北、東西方向に延びる溝が多い。このうち、南部Ａ・Ｂ区境に位置するSD６～９・12・13・15・16などは現条里景観との関連が指摘される重要な溝と思われる。

SD２　位置：南部Ａ区　図版18・21

検出：IIA_1層を検出面とする。南端は現在の用水路によって撹乱を受ける。中世のSK18・19・20などに切られる。形状：ほぼ南北方向に直線的に延びた溝で、途中で一旦とぎれるが、一本の溝と思われる。全長48.2ｍ、溝幅約20cm、深さは10cmと浅い。底面は南から北にかけて傾斜し、断面は弓状になる。層位：オリーブ褐色の細粒砂を主体とする単一層で、白色砂を多量に含む。底面付近には淘汰のよい粘質なシルトがわずかに観察され、自然埋没と思われる。なお、恒常的な滞水などの痕跡は認められなかった。時期：遺物は出土しなかったが、重複関係から中世に帰属すると判断した。

SD４　位置：南部Ａ区中央　図版19

検出：IIA_1層上位で検出する。調査区を分けた関係から南側に継続すると予想される箇所を確認することができなかった。形状：全長2.2ｍ、最大幅30cm、深さ20cmを測る溝で、直線的に南北に延びる。底面は平坦で、北へ向かって緩やかに傾斜する。断面はＵ字形である。層位：淘汰のよい細粒砂を主体とする単一層で混入物はほとんどみられず、自然埋没と思われる。時期：遺物は古代に属する土器11点を出土したが、いずれも混入と考えられる。覆土の特徴などから中世の所産と判断した。

SD５　位置：南部Ａ区　図版21・22、PL57

検出：検出面はIIA_1層上位である。本址は西側でSB48,49,56を切るが、SB56付近で浅くなり、さらに東へ続く部分は確認できなった。形状：東西方向に直線的に延びる溝で、全長約28ｍ、幅40cm、深さ15cmを測る。断面はＵ字形を呈し、底面は凹凸がある。なお、西から東へ向かって緩やかに傾斜する。層位：褐色の細粒砂を主体とする単一層で、マンガン粒をわずかに含む。恒常的な流水などの痕跡は認められない。時期：遺物は古代13期以降の土器が混在するが、いずれも本址に帰属するものではない。重複関係や遺物の状況から中世１期に帰属すると判断した。

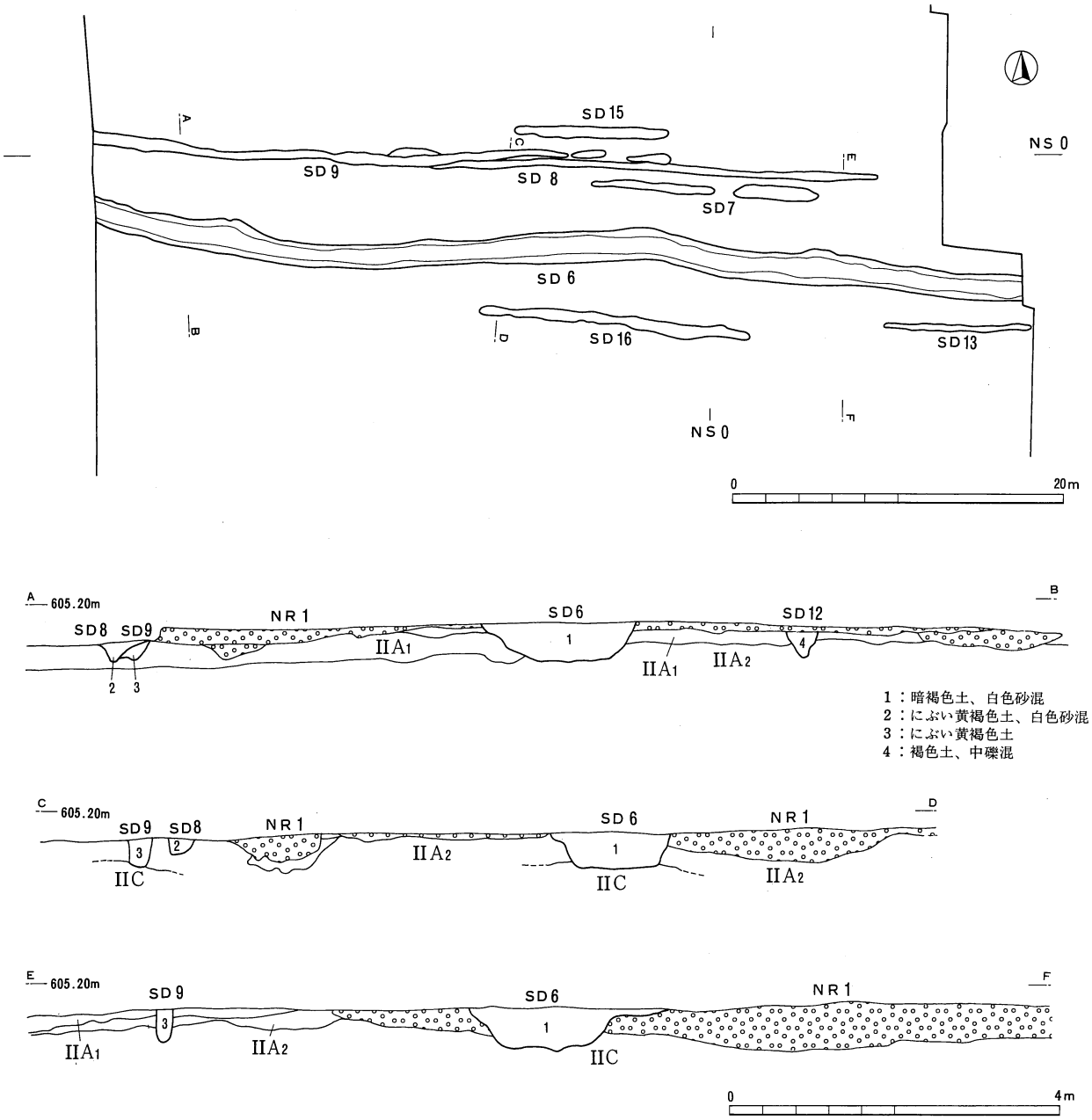
SD６　位置：南部Ａ、Ｂ区境　図版26・27、第108図、PL57

検出：ＩＣ層からＩＤ層にかけて検出する。一過性の氾濫と考えられるNR１を切っていた。南側に位置

するSD13,16などとは走行する方向が同じであることや土層の状況から位置を変えながら溝を構築したと推定でき、周囲の溝址のなかで最も新しい溝である。また、北側にわずかな距離を隔てて位置するSD6～9、15とは位置関係から道を想定させる。形状：東西方向に直線的に走行する溝址で、幅、1.5～2.0m、最深30cmを測る。底面は部分的に凹凸が観察されるが、ほぼ平坦で緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形である。層位：下層には径5～30cmの礫を含んだ土が堆積し、上層には細粒砂が覆い、除々に堆積した様子が観察された。図示した土層図は西側壁のものであるが、溝の浚渫と推定される埋没状況を呈していた。時期：本址に確実に帰属する遺物は出土していない。土層の堆積や古代の遺構の分布状況から中世2期に帰属すると判断した。なお、本址の位置は栗林神社と集落を結ぶ道路と一致し、現条里景観と関連性の強い溝址として注目できる。

SD7　　位置：南部B区　　図版26、第108図、PL57

検出：IIA_1層上位で検出する。本址の上にはSD6が切るNR1がのり、それを除去した後で検出するこ



第108図　SD6～9・12·13·15·16実測図

とができた。北側にはSD8,9が平行し、本址もそれらと同様、本来はさらに延びていた溝と思われる。形状：溝幅は最大40cm、最深30cm程で、底面にはわずかに凹凸が観察される。断面形は不整形である。層位：覆土はSD６と近似し、中粒砂を主体とする褐色土に15～30mmの礫が混在する。底面付近には酸化した鉄分が集積するが、自然流路の影響とも推定され、本址の恒常的な流水などの痕跡と認め難い。時期：遺物は須恵器や土師器羽釜などが出土しているが、住居址との重複による混入と思われ、確実に本址の開口時に帰属する遺物は出土していない。周囲の溝との関係から中世と考えられる。

SD８　位置：南部Ｂ区　図版26・27、第108図、PL57

検出：SD７の北側に隣接する。本址の上には一過性の氾濫と思われる流路がある。東側でSB77を切り、中央付近で本址と平行して走るSD９に切られる。形状：東西方向にわずかに曲線を描きながら延びる溝で、本来はさらに延びていたと予想される。確認した範囲では全長約30m、幅は20cm以下とかなり狭く、深さも10～15cmと浅い。底面は西から東へ向かって緩やかに傾斜する。層位：覆土は径５mm程の礫、砂、風化礫を含んだ細粒砂を主体とする単一層で、流水の痕跡が明瞭である。時期：遺物の出土量は古代を中心とするが極めて少なく、混入と思われる。周囲の溝との位置関係や土層から中世に帰属する。

SD９　位置：南部Ｂ区　図版26・27、第108図、PL57

検出：SD８と交差するように重複する溝址で、本址の方が新しい。おそらく本址はSD８を掘り直した溝であろう。また、西側でSB100を切っていた。形状：全長約36ｍ、幅20～45cm、深さは平均30cmを測る。底面には凹凸が認められ、断面はＵ字形である。層位：覆土は砂と粘土とが混在する単一層で白色砂が多量に混入し、部分的に色調差が観察された。底面は東に向かって傾斜し、流水の可能性は高いものの、明瞭な痕跡は確認できなかった。時期：周囲の溝との位置関係などから中世の所産と判断した。

SD12　位置：南部Ａ区西側　図版27、第108図

検出：調査区西側の土層観察の際確認した溝で、面的には捉えていない。形状：幅40cm、深さ32cmで逆台形の断面形である。層位：SD６が切る自然流路が本址の上にのる。覆土は褐色の細粒砂を主体とする単一層で、細礫、風化礫が多量に混在する。時期：SD６との関連が考えられることから中世と判断した。

SD13　位置：南部Ａ区東側　図版23、１108図、PL57

検出：ⅡＡ$_1$層上位で検出する。北側に位置するSD６と平行する溝で、SB72を切る。本址の西側には主軸方向が同じSD16があり、本来は同一の溝であった可能性も高い。形状：ほぼ東西方向に直線的に延びた溝で全長約８ｍ、最大幅25cm、深さは10cmを測る。底面は平坦になり、東へ向かって傾斜する。層位：覆土は細粒砂を基調に酸化マンガン粒を含む単一層である。時期：遺物は極めて少なく、本址に帰属するものではない。SD６との関係が強いと考えられることから中世に帰属する。

SD15　位置：南部Ｂ区　図版26

検出：SB96の南壁を切るように位置する溝で南側に隣接するSD8,9と平行する。形状：東西方向に直線的に延び、全長約10ｍを測るが、本来はさらに延びていたと推定される。幅は平均50cm、深さは10cmとかなり浅い。断面形は皿状を呈する。層位：覆土は褐色の細粒砂を基調とする単一層で、流水の有無などについては確認できなかった。時期：中世に帰属するが、SD8・9と近い時期にある溝と推定できる。

SD16　位置：南部Ａ区　図版25

検出：一過性の氾濫のＮＲ１を除去した後、検出した。ⅡＡ$_2$層上位を検出面とする。溝の東端でSB109と重複するが、住居址と重複する箇所がわずかなため明確には確定できなっかった。形状：東西方向に直線的に延びた溝で、全長約16ｍ、幅25～30cm、深さは20cmを測る。底面は東に向かって緩やかに傾斜し、東側に位置するSD13へ続く。層位：覆土は中粒砂を主体とする単一層で、酸化したマンガン粒を含んでいた。恒常的な流水の可能性は高いが、明瞭な痕跡は観察されなかった。時期：遺物は古代の土器の細片２

点が出土したが、本址に帰属するものではない。SD６との関連性から中世の所産と判断した。

SD18・22　位置：南部Ｂ区東側　図版28・32

検出：ⅡA$_2$層上位を検出面とする。南側でSB84を切るが、覆土中の礫の含有量の違いから確定した。また、SD18はSK355に切られる。形状：溝はＬ字状に曲り、区画をつくる。これに区画される遺構は不明である。溝幅は最大60cm、深さ30cmを測り、底面には部分的に凹凸がある。層位：覆土は細粒砂を主体とする単一層で、底面には酸化した鉄分が集積しており、恒常的な滞水があったと推定できる。時期：遺物は白磁破片が１点出土している。時期：遺物から中世１期に帰属する。

SD21　位置：南部Ｂ区西端　図版29

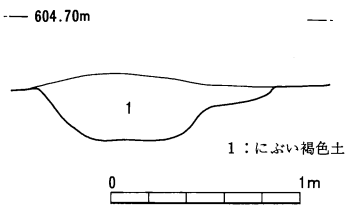
検出：ⅡA$_1$層で検出する。SD31と平行するように位置した溝で、さらに南北方向へ延びていたと推定される。SB137を切るが、覆土の色調から明瞭に確定できた。形状：溝は南北方向に直線的に走行し、全長24ｍを測る。溝幅は北側が広くなり、最大50cmである。深さは20cm、断面形は不整形になる。層位：覆土は粗粒砂を主体とする単一層で、酸化したマンガン粒を含んでいた。時期：出土した遺物は古代13期以降の土器が多いが、いずれも本址に帰属しない。しかし、東側のSD31と同一時期と考えられるため、中世の所産と判断したい。

SD24　位置：南部Ｃ区北端　図版49

検出：ⅡA$_1$層下位を検出面とする。形状：東西方向にほぼ直線的に延びた溝で、途中とぎれるが、本来は一本の溝と推定でき、さらに東へと延びていたと思われる。全長約24ｍ、幅30cm前、深さ５cmを測り、皿状の断面形を呈する。底面は東へ向かって傾斜する。層位、暗褐色の単一層で、白色砂を多量に混入する。時期：遺物は出土しなかったが、周囲の中世の建物址と覆土が共通することから中世に帰属すると考えられる。

SD31　位置：南部Ｂ区西側　図版29・31・33・35、第109図

検出：ⅡA$_2$層上位で検出する。北端はNR2に切られるためとぎれるが、本来はさらに北へ延びていたと推定される。南側でSB95を、中央でSB175・205をそれぞれ切る。形状：南北方向に直線的に延び、北へ向かって緩やかに傾斜する。全長67.4ｍ、幅は最大1.25ｍ、深さ44cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面はＵ字形になる。層位：覆土はにぶい黄褐色の粗粒砂を主体とする単一層で、多量の白色砂を混入する自然埋没である。流水の痕跡は明確に観察されなかったが、その可能性は高い。時期：遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器など多岐にわたる遺物が出土したが、その量は少ない。SB95を切ることから、遡っても古代末から中世にかけての時期が当てられるが、周囲の中世の遺構の覆土が近似することから中世の所産と判断した。



第109図　SD31断面実測図（1：40）

SD33　位置：南部Ｂ区北側　図版37

検出：SB210の覆土中に白色砂を混入する特徴的な土を確認した。北端は調査区を分けたためにプランを確認していないが、本来はさらに延びていたと思われる。形状：南北方向に直線的に延びた溝である。全長6.5ｍ、幅0.6～1.0ｍ、深さ15cmを測り、弓状の断面形になる。層位：覆土は細粒砂を主体に、白色砂、マンガン粒を含む単一層である。時期：遺物は出土しなかったが、覆土が中世に帰属する建物址と共通することから中世の溝と判断した。

SD34　位置：南部Ｂ区北側　図版38

検出：ⅡA$_2$層上位を検出面とする。付近一帯は立ち木があったために撹乱が激しく、検出は困難を窮めた。本址はSB202・SK759を切っていた。主軸を南北方向にとり、直線的に延びる溝である。全長6.6ｍ、

幅32～38cm、深さ32cmを測り、断面はＵ字形を呈する。層位：覆土はにぶい黄褐色の細粒砂を主体に、細礫、炭化物を含む単一層である。自然埋没であろう。時期：遺物は須恵器甕と時期不詳の瓦片が出土したが、いずれも本址に帰属する出土状況ではない。しかし、中世の建物址と覆土が近似することから中世の溝址と思われる。

SD501　位置：北部Ｅ区北東　図版74

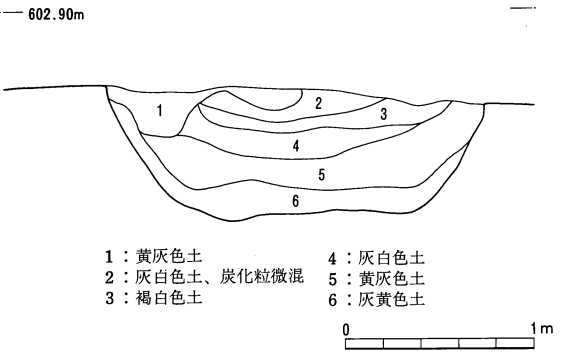
検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。形状：南北方向に主軸をとる溝で、直線的に延びる。全長8.7ｍ、幅25～35cm、深さは25～33cmを測る。断面はＵ字形を呈し、北へ向かって緩やかに傾斜していた。底面にはわずかに凹凸がある。層位：覆土は細粒砂を主体にし、２層に分層された。下層には粘質な褐色土が堆積し、その上を粘土ブロックが混在した１層が覆う。恒常的な滞水などの痕跡は観察できなかったが、流水の可能性は高い。時期：遺物は出土しなかったが、覆土の特徴から中世と判断した。

SD502　位置：北部Ｅ区北側　図版73

検出：本址の付近一帯は上層を撹乱されており、検出は困難を極めた。本址はSB506･508を切る。形状：東西方向は主軸をとり、直線的に延びた溝である。両端は浅くなり、本来はさらに延びていたと思われる。全長6.3ｍ、最大幅26cm、深さ18cmを測る。断面は鍋底状を呈し、底面の標高は東側に向かって傾斜する。層位：覆土は粒子の粗い茶褐色の単一層で、酸化鉄分を含む。流水の痕跡は明確に観察されなかったが、その可能性は高い。時期：遺物は出土しなかったが、重複関係や覆土から中世に帰属する。

SD524　位置：北部Ｄ・Ｅ区東側　図版66・68・71、第110図、PL57

検出：ＩＣ層上面から掘り込んだ溝で、北部南端からＥ区中央にかけて明瞭に検出できた。形状：南北に直線的に延びた溝で、古代のすべての遺構を切っていた。北端は削平によりとぎれるが、堀川に流れ込んでいたと推定でき、確認できた箇所で全長171ｍを測る。最大幅は2.2ｍでほぼ一定である。深さは60～80cm、底面は平坦で北へ向かって緩く傾斜し、壁は直線的に立ち上がる。層位：覆土は粒子の違いから５層に分層された。主体となるのは灰色の粗粒砂で、流水の速さの差違により、堆積状況が異なるものと思われる。下層は溶脱を受けるために底面には鉄分が集積している。また。部分的にではあるが、浚渫の痕跡も観察された。時期：遺物は上層から下層にかけて土師器、須恵器、灰釉陶器などが中心に出土した。層位による器種構成などの顕著な違いはみられず、住居址からの混入と考えられる。しかし、下層から内耳鍋１片、近世の陶器片があり、本址が中世２期以降に帰属するものと判断できた。



第110図　SD524断面図（１：40）

SD525　位置：北部Ｅ区西壁　図版72

検出：西壁のセクション観察の際確認した溝で、面的には捉えられなかった。ＩＣ層上面から掘り込まれる。形状：溝幅1.2ｍ、深さ30cmを測る。層位：覆土は粗粒砂を主体に、鉄分やマンガン粒を含んでいた。水が流れていた可能性が高いが、方向は不明である。時期：覆土や掘り込み面から中世の溝址と考えられる。

SD531　位置：北部Ｅ区東側　図版71

検出：SB619の東側に位置する溝で底面付近のみを確認することができた。東西方向に延びる溝と推定され、土層観察ではＩＣ層上面から掘り込んでいた。形状：溝幅は40cm、深さ18cmで弓状の断面形になる。層位：覆土は灰色の粗粒砂を主体とする単一層である。底面にはマンガン粒の集積が観察され、流水の可

能性が強い。時期：遺物は出土しなかったが、覆土の特徴や掘り込み面から中世に帰属する。

SD533　　位置：北部D区南端　　図版50・51

検出：IIA_2層上位で検出する。本址はSB629・634・ST565を切り、中世のSB639に切られると判断したが、SB639との重複関係は不安定な要素も含み微妙である。形状：東西方向に直線的に延びる溝で、全長約40mを確認したが、本来はさらに延びていたと推定できる。溝は一定の幅で30～35cm、深さ5cmと浅く、断面は弓状になる。底面は東に向かって緩やかに傾斜する。層位：灰褐色を呈する単一層で、淘汰の良い細粒砂である。時期：遺物は住居址と重複するために、土師器、須恵器、灰釉陶器などが数片出土したが、いずれも混入と考えられる。重複関係や覆土の特徴から中世1期に帰属する。

SD534　　位置：北部D区南端　　図版50

検出：SD533の南側に位置し、平行するように延びる。本址はSB636・ST565を切る。西端は用水路によって撹乱を受けるが、本来はさらに延びていたと推定できる。形状：溝は東西方向に直線的に延びる。全長30m、幅は1.0m程でSD533より広い。皿状の断面形を呈し、東側に向かって傾斜する。層位：灰褐色の単一層である。時期：本址はSD533との関連性が強く、同一時期あるいは比較的近い時期に存在したと考えられることから、中世に帰属する。SD533と同一時期の場合は道を想定してもよいだろう。

4　柵址

SA 4　　位置：南部C区西側　　図版47

検出：IIA_1層下位で検出した。本址はSB158・159を切る。柱穴：柱穴5基で構成され、主軸をN7°Wにとる。掘り方は一辺30～40cmの方形を呈する。柱間の間隔は等間隔でない。覆土は白色砂を多量に含む砂質の単一層で、付近のST33などと共通する覆土である。時期：遺物は出土していないが、周囲の中世の建物址の覆土や柱穴の形態が共通することから本址も中世2期の遺構であろう。

5　墓址

中世に帰属する墓址は火葬墓と判断した5基と人骨を出土した1基がある。火葬墓のうち、3基は南部A区南端に位置し、中世の墓域であった可能性が強い。また、北部E区の堀川に接するSK1015は1基しか存在しないが、南部の火葬墓と同様、川に近接した地域に墓域を形成する傾向を示唆する貴重な資料である。

このほかにも墓址と考えられる土坑はあるが、根拠が弱いため土坑のなかで扱うこととした。

(1)　火葬墓

SK173　　位置：南部A区南端　　図版13

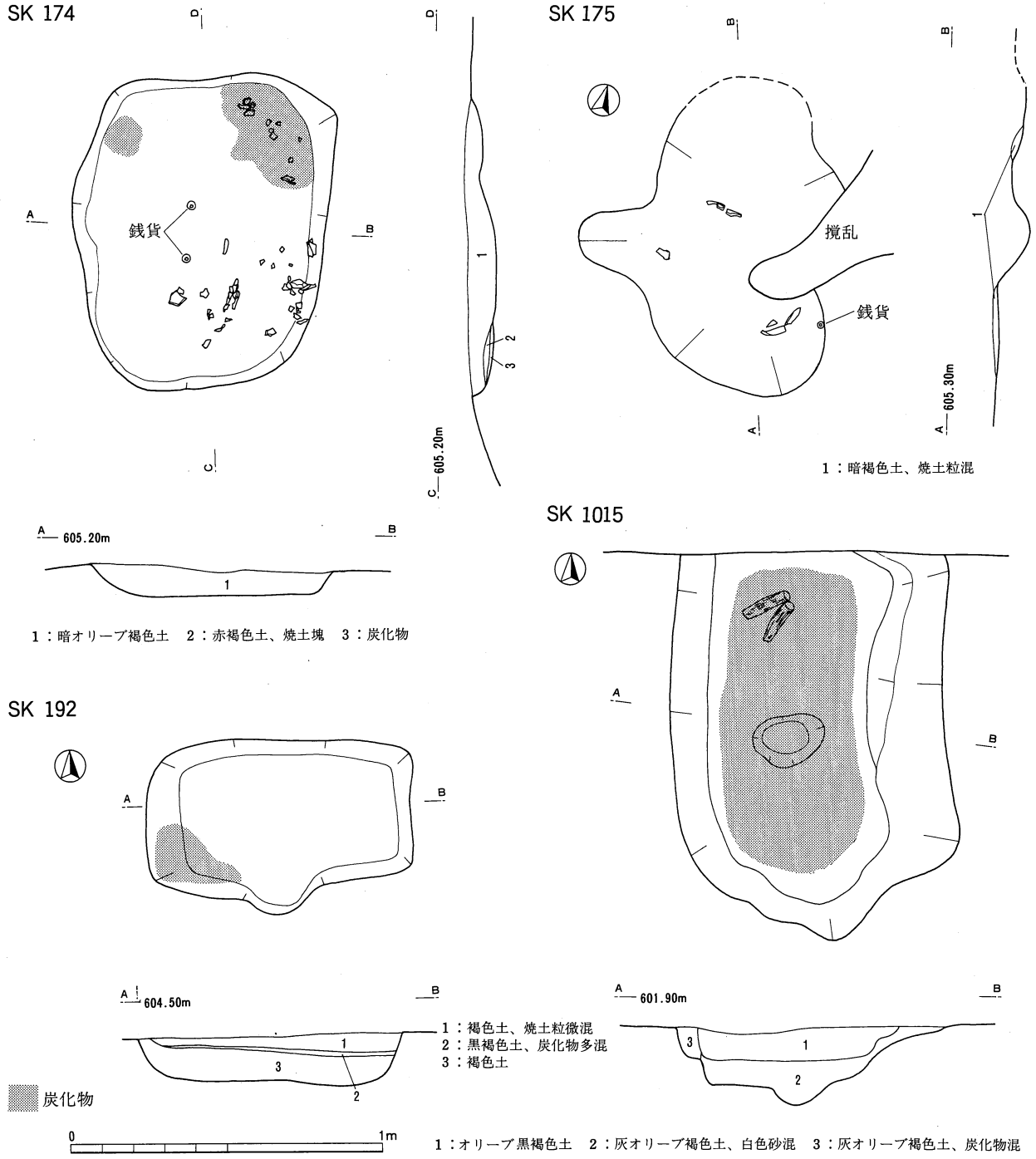
検出：調査の最初の段階で設定したトレンチの断面観察で確認した。皿状の落ち込みには焼土粒が多量に観察され、火葬墓になることが推定された。本址は東側から西側にかけて溝状の撹乱があるため、主軸方向は不明である。構造：規模は南北方向が94cmを測るが、西側を失うため形状は分からない。底面には凹凸があるが、中央が深くなり、わずかに赤色化している。覆土はIDa層由来の泥質な粗粒砂を主体とし、炭化物粒や焼土粒、骨粉が多量に観察された。坑内で火葬したのか、別な場所で火葬した後でここへ埋葬したのかは不明である。なお、遺物は出土しなかった。時期：本址と同じ形態のSK147が中世に帰属することから本址も中世2期に帰属する。

SK174　　位置：南部A区南端　　図版13、第111図、PL50）

検出：SB35を検出した際、焼土が輪郭を描く長方形のプランを確認し、火葬墓であることは容易に判断

できた。主軸はN25°Wある。構造：長軸1.0ｍ、短軸80cmの規模で、深さは９cmと浅い。西側中央がわずかに突出する隅丸の長方形を呈する。底面は北側で一段高くなり、断面はレンズ状になる。骨は全体に散布するが、南東隅に集中する。骨は焼けた痕跡が明瞭で、頭骨の一部と思われる細片があった以外は骨粉に近い状態である。壁が赤色化していることから坑内で火葬した可能性が強い。覆土は白色砂を混入する暗オリーブ褐色土で、炭化物粒・焼土粒・骨粉が上層から坑底面にかけて多量に含まれる。遺物は皇宋通宝の銭貨２枚が坑底面から出土したが、副葬品として埋納されたものだろう。時期：銭貨から中世２期に帰属する。

SK175　　位置：南部Ａ区南端　　図版13、第111図、PL50



第111図　SK174･175･192･1015実測図（１：20）

検出：ＩＤ層中で確認するが、プランは不鮮明で最終的にIIA_2層上面で検出した。東側の中央が撹乱されていた。構造：形状は楕円形を呈するが、西側の中央が突出し、SK174と同一形態の火葬墓である。規模は1.2×0.85ｍで底面には凹凸がみられ、焼土粒、炭化物粒、骨片が全体に散布していた。覆土は残存する部分がわずかであり、しかも乾燥が激しいため詳細に観察できなかった。遺物は永楽通宝が１枚出土した。時期：遺物と火葬墓の形態から中世２期に帰属する。

SK192　位置：南部Ａ区北西　図版24、第111図、PL50

検出：SB50の南側に位置し、IIA_2層上位を検出面とする。プランは鮮明で、東壁は被熱のために赤色化し、火葬墓であることが予想された。骨は出土しなかったが、骨が溶解した可能性もあり、突出部をもつ土坑の形態から火葬墓の範疇で捉えることとした。構造：平面は隅丸長方形で南壁の中央が丸く突出する。規模は86×54㎝、深さ15㎝で底面は平坦になり、焼けた痕跡は見られない。壁は緩やかに立ち上がり、東壁の上部だけが被熱のため赤色化していた。覆土は炭化物層を境に分層できた。基調となる土は砂質のオリーブ褐色土で、上層には焼土粒を含んでいる。このような状況から判断して、穴を掘った後、掘った土を半分ほど埋め戻し、そこで火を焚いたと考えられる。時期：ほかの火葬墓の時期が中世に帰属することから中世と判断した。

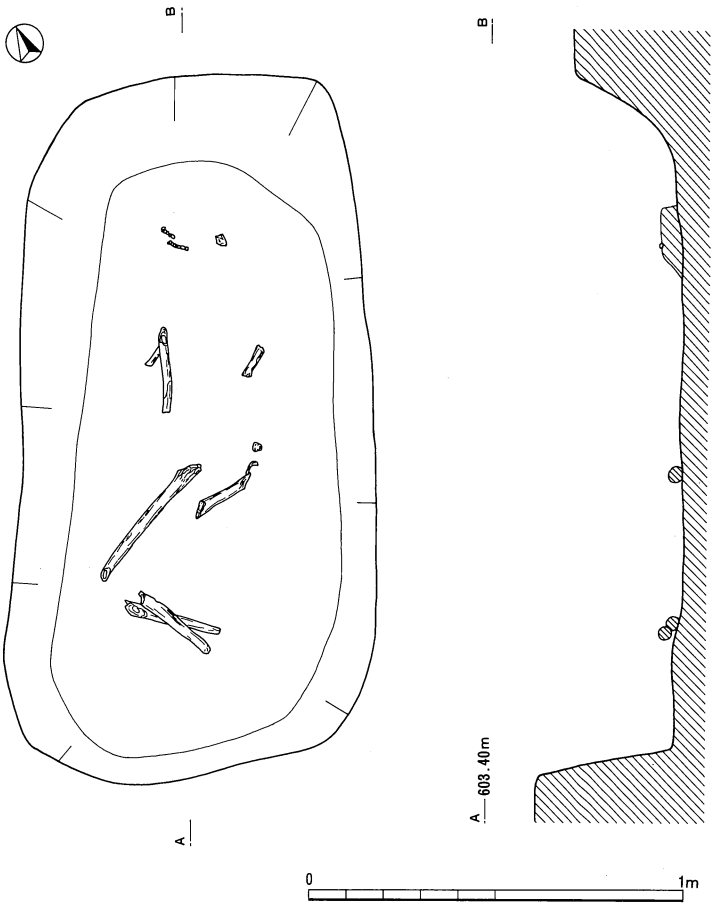
SK1015　位置：北Ｅ区北端　図版74、第111図

検出：調査区の最北端に東西方向のトレンチを入れた際、炭化物や骨粉が集中する落ち込みを確認した。壁の一部が焼けており、火葬墓であることが予想された。北側は堀川に接しているため調査できなかった。構造：主軸を南北方向にとると推定され、確認した箇所で62㎝を測る。形状は部分的に突出する楕円形で、壁は緩やかに立ち上がる。坑底面には凹凸がみられるが、焼けた痕跡は認められない。覆土はオリーブ黒褐色の細粒砂で、２層に分層された。上層は炭化物と骨で形成され、下層は粘土ブロックに炭化物が混在し、埋め戻されたことが観察され、２層上面で火葬したと推定できる。この状況はSK192と共通する特徴で火葬の方法を知る上で興味深い資料である。時期：遺物は出土しなかったが、土坑の形態から中世と判断した。

(2)　土葬墓

SK486　位置：南部Ｃ区　図版46、第112図、PL51

検出：SB168の西側に位置する土坑で、検出面のIIA_2層と色調が近似していた。構造：平面は隅丸長方形で長軸1.88ｍ、短軸0.96ｍと大きく、深さは34㎝を測る。主軸はN-28°-Eである。底面には人骨が頭位を北に向け埋葬されていた。埋葬は土葬によったと考えられ、木棺を使用したか否かは不明である。人骨の遺存状況が良く、歯、上腕骨、大腿骨、脛骨が残存し、膝を折り曲



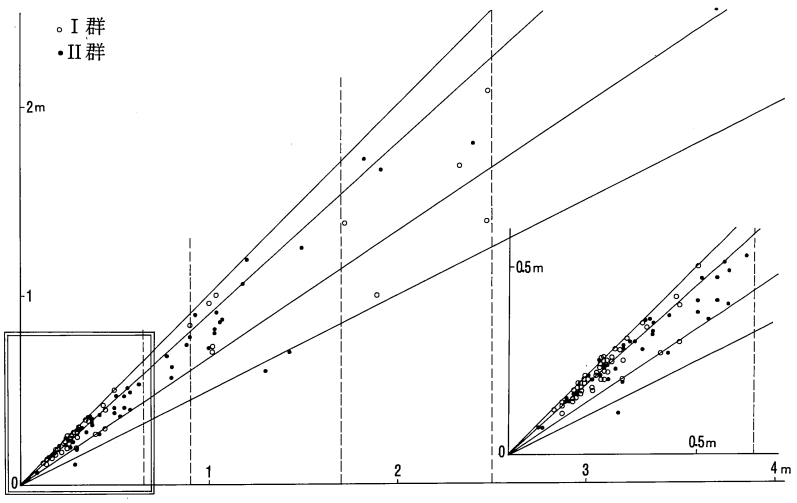
第112図　ＳＫ486実測図（１：20）

げて埋葬されていた。歯列は整然と残るが、上顎と下顎の位置が逆転している。鑑定によれば、歯の形態は男性的で、40歳以降の年齢が推定できるとの結果を得た。また、歯の出土状況については頭部の組織溶解に伴い歯列が変化し、さらに土圧により上顎と下顎が逆転したのではないかとの指摘を受けた。覆土はSK371・372と共通するもので、黄褐色細粒砂の単一層である。時期：人骨のほかに遺物は出土しなかったが、古代の13期にみられる墓址がいずれも主軸を真北に向ける特徴と本址は一致しないことや骨の遺存状態、覆土の特徴から中世以降の所産と判断した。

6　土坑

概観

分類：松本平の統一分類基準によると、本遺跡で確認された中世土坑は以下のように分類される。



第113図　中世土坑長軸・短軸関係図

Ⅰ群：方形を基本形とする土坑
Ⅱ群：円形を基本形とする土坑
Ⅲ群：不整形の土坑
A類：長短軸比　1:1～10:9
B類：長短軸比　10:9～3:2
C類：長短軸比　3:2～2:1
D類：長短軸比　2:1～
1種：長軸　65cm未満
2種：長軸　65～90cm
3種：長軸　90～170cm
4種：長軸　170～250cm
5種：長軸　250cm以上

	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	合計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
Ⅰ	29	0	3	0	0	32	17	0	2	3	0	22	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	56
Ⅱ	19	0	5	1	0	25	20	4	8	2	0	34	1	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	3	63
Ⅲ	0	0	1	0	0	1	2	0	7	0	1	10	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	1	1	14

不明	総計
2	135

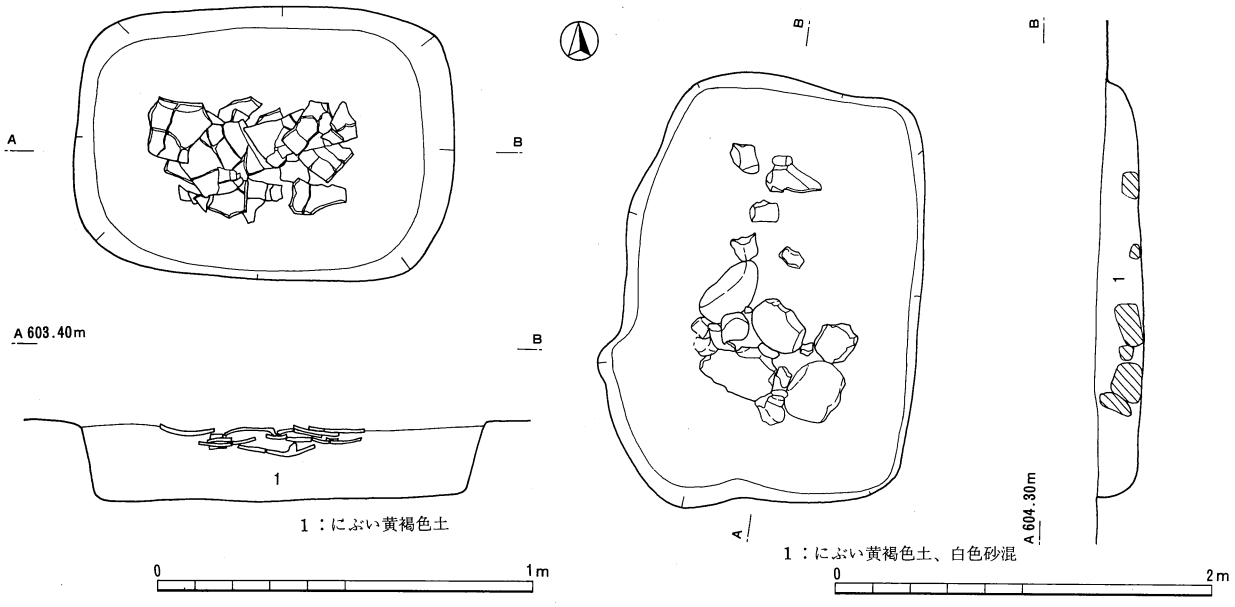
第３表　中世土坑の形態分類

本遺跡の中世土坑は総数135基を数える。このうち、Ⅰ・Ⅱ群がほぼ同数で多い。土坑は集石を伴うもの、焼土や焼痕を伴うものなどが特に注目される。Ⅰ・Ⅱ群の１種の径30cmほどの土坑の大半は掘立柱建物址や柵址などの柱穴と特徴が近似しており、ピットになる可能性が高い。土坑の分布は掘立柱建物址の周辺に集中し、南部全体にわたって分布している。

時期は遺物によって断定できる土坑が少なく、覆土の特徴や時期の確定できた土坑との位置関係などから決定した。それによれば、中世２期に帰属するものが多く、確実に中世１期に含まれる土坑はわずかである。

以下、注目される土坑について記述する。

(1)　Ⅰ群の土坑



第114図　SK347(1：20)・559(1：40)実測図

SK347　　位置：南部C区　　図版39、第114図

検出：IIA_2層上位を検出面とするが、本址が位置する箇所には水路が存在していたため地山と覆土の識別は難しいが、内耳鍋が一部散見されたことから本址を認定できた。規模・形状：平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.02m、短軸0.73m、深さは18cmを測る。底面は平坦になり、壁はわずかに傾斜して直線的に立ち上がる。構造：覆土は黄褐色の細粒砂を主体とする単一層で、人為的に埋め戻された状況を呈する。遺物の出土状況：内耳鍋2個体が潰れた状態で、上層にかたまって出土した。所見：一旦土を入れた後に土器を据えており、完形に近い状態であることなどから墓址の可能性を指摘できる。但し、人骨は出土していない。時期：遺物の様相から中世2期に帰属する。

SK357　　位置：南部A区　　図版19

検出：西側側道を調査した際、初年度に調査したSB14の覆土中に色調の異なる方形の落ち込みを確認した。東側へさらに延びていたと推定されるが、調査区を分けた地点にあたるため東壁は確認していない。規模・形状：残存する南北方向は2.08mを測り、平面は隅丸方形になると予想される。深さは16cmと比較的浅く、底面は小さな起伏が認められる。構造：底面付近には人頭大の礫が投棄され、円礫や破砕礫が多い。覆土は黄色細粒砂を主体としていた。時期：遺物は出土していないが、覆土の特徴から中世以降の所産と考えられる。

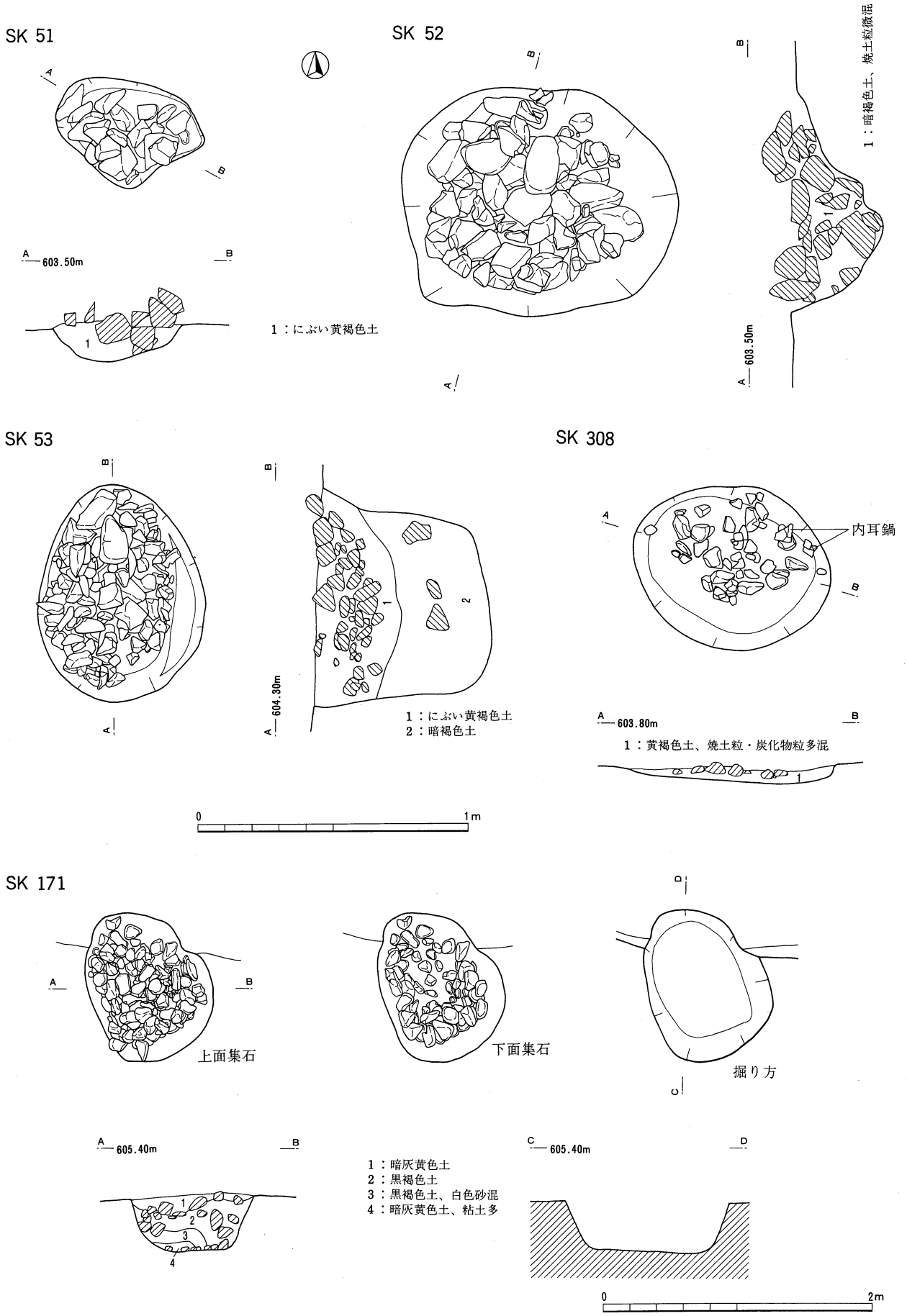
SK559　　位置：南部B区　　図版33、第114図

検出：SB175の南側に位置し、IIA_2層上位で検出する。規模・形状：主軸はほぼ南北方向でやや東へ傾く。西壁の中央がわずかに張り出すが、平面は長方形とみてよいだろう。長軸2.33m、短軸1.68mと大きな土坑で、深さは33cmを測る。底面は平坦であるが中央付近がわずかに凹んでいる。構造：底面に花崗岩が2個あり、それ以外は覆土中に浮いて破砕礫が認められる。覆土は黄褐色土で細礫を含んだ単一層である。時期：形態や覆土の特徴から中世の以降と思われる。

(2)　II群の土坑

集石をもつ小型の土坑

SK51～53　　位置：南部B区　　図版28、第115図、PL51・52



第115図　SK51～53(１：20)･171･308(１：40)実測図

検出：IIA_1層下位で検出する。SB91の検出中、礫が集中する箇所があり、SB91を切るSK51～53を認定した。いずれも集石を有するといった共通した特徴をもち、隣接して分布する。規模・形状：SK51は長軸55cm、短軸38cmを測り、深さは14cmと浅い。平面は円形に近く、坑底面には凹凸が認められる。断面形はレンズ状を呈する。SK52の平面は円形に近い形状を呈する。長軸1.02m、短軸0.83m、深さ33cmで東西方向に長い。断面はすり鉢状になり、やはり底面には凹凸が観察される。SK53は形の整った楕円形である。80×61cmの規模を有し、南北方向に長い。深さは64cmを測り、同一形態のSK51・52と比較するとかなり深い。構造：いずれも礫が多量に観察されたたが、破砕した硬砂岩が多く、拳大から人頭大の礫を密に投げ込んでいる。礫には焼けた痕跡は認められない。SK52では上層から下層にかけて礫が認められるが、SK53は上層に集中する傾向がみられ、礫はレンズ状に落ち込む。下部には比較的大きな礫が4個あり、意図的に配置する。その下には微量の焼土粒も観察された。覆土はSK51・52がＩＤ層に由来する細粒砂を主体とし、黄褐色の粘土ブロックを均一に混在する単一層であるのに対し、SK53は2層に分層された。下層には粘土粒が多量に含まれ、その層理面には薄い炭化した木片がある。本址の性格は限定できないが、礫の堆積状況や木片が出土したことから墓址になる可能性も考えられる。遺物の出土状況：SK53から内耳鍋1片が出土した。所見：SK53の状況から墓址などが考えられるが、人骨が出土していないため断定はできない。時期：中世2期に帰属する。

SK171　位置：南部Ａ区　図版15、第115図、PL52

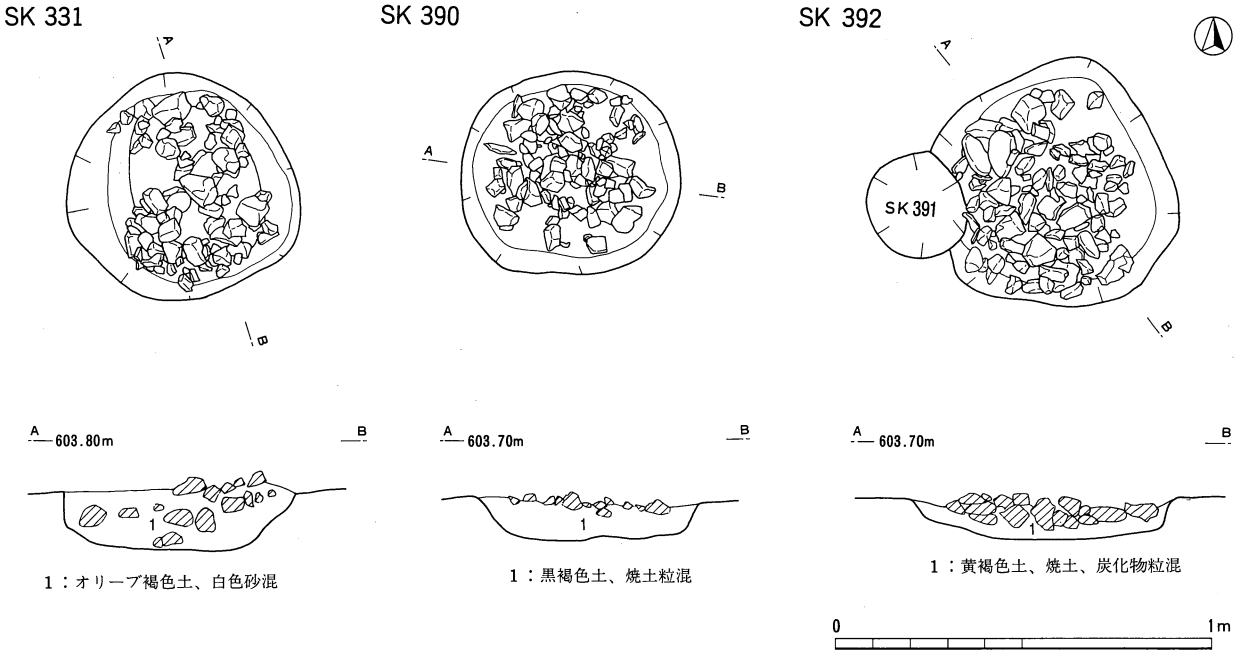
検出：北側でSB10と重複し、本址が切る。規模・形状：長軸1.16m、短軸0.9mの不整形で、深さ45cmを測る。主軸はN-22°-Eある。底面は平坦になり、壁は直線的に立ち上がる。構造：礫が上層から底面にかけて確認された。礫は5～20cmの拳大の礫がほとんどで約160個使用される。礫は上層に集中するとともに底面に敷き詰めるように配置する。覆土は底面付近にブロック状の堆積が明瞭であることから底面に礫を敷いた後、一旦土を埋め戻し、さらに礫を配したと推定される。所見：礫の配石状況や覆土の状況から墓址とも考えられるが、人骨が出土しないため確証に欠く。時期：遺物は出土していないが覆土の特徴や集石をもつ形態から中世の所産と判断した。

SK308　位置：南部Ｃ区南西　図版42

検出：IIA_2層上位で検出する。規模・形状：主軸を東西方向にとり、長軸1.49m、短軸1.25mの楕円形を呈する。深さは8cmと浅いが、本来はかなり深い土坑と推定される。構造：礫が平坦な底面からわずかに浮いて出土したが、拳大から人頭大の割れた硬砂岩を40個程使用する。覆土は黄褐色砂を主体とし、焼土粒や炭化粒が多量に含まれる単一層である。遺物の出土状況：内耳鍋が破片で出土したが、本址に帰属するか否かははっきりしない。時期：遺物から中世2期に帰属する。類例：本址の南側に隣接するSK330は規模、構造とも近似した特徴をもつ。

SK331・390・392　位置：南部Ｃ区西側　図版43、第116図、PL53

検出：IIA_2層上位で検出する。3基の土坑は規模や形状が近似し、その分布も近接している。SK392は391に切られるが、覆土の質的な違いからその関係は明瞭である。規模・形状：SK331の平面形は径77cmの円形で、深さは18cmを測る。底面には凹凸がある。390は長軸1.18m、短軸1.06mの楕円形で、深さ19cmを測る。392も同様に、円形に近い形状を呈し、径1.33m、深さ18cmの規模である。構造：いずれも集石を有する。390は硬砂岩と花崗岩の二種類で、8：2の割合で硬砂岩が多い。大きさは拳大から人頭大がみられ、一部焼痕が観察される。392は上層に拳大から人頭大の礫40個程が集中する。礫の種類は花崗岩、砂岩とそれ以外の礫が5：4：1の比率で構成されている。礫のなかにはやはり焼痕が認められるものが多い。覆土はSK308と近似する黄褐色の単一層で、焼土粒や炭化粒を均一に含んでいた。骨などは観察されないが、破砕礫があるこや覆土の状況から坑内で火を焚いたと判断できる。遺物の出土状況：SK390では礫のな



第116図　SK331･390･392実測図（１：20）

かに混ざって破砕した石臼が出土し、392でも内耳鍋の破片13片と石臼が出土した。時期：遺物の様相から中世２期と判断した。

SK459・460　位置：南部Ｃ区中央　図版47、第117図、PL54

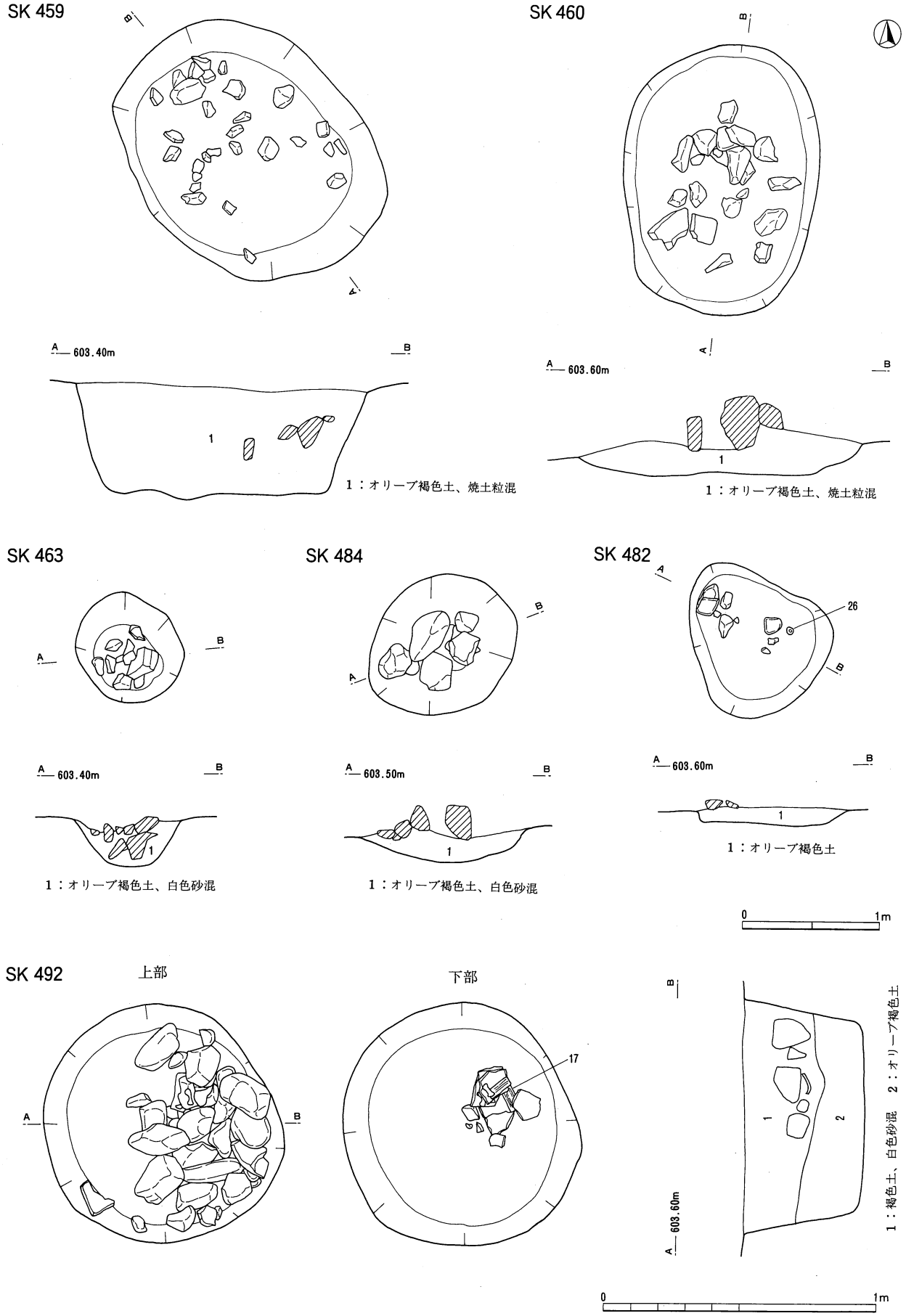
検出：ⅡＡ$_1$層下位で検出する。周囲には本址らと同様に集石をもつ土坑が存在するが、２つの土坑はそのなかでも礫の含有量が少なく、規模の比較的大きな土坑である。規模･形状：SK459は長軸1.04ｍ、短軸0.82ｍの楕円形で、深さ42cmを測る。坑底面には凹凸があり、壁は直に立ち上がる。SK460は主軸を東西方向から東側へわずかに振り、長軸1.0ｍ、短軸72cm、深さ28cmの楕円形を呈する。断面はレンズ状になる。構造：礫は拳大の硬砂岩が多く、上層から中位にかけて集中する。礫には焼痕が認められ、破砕しているものもある。覆土は黒褐色の細粒砂の単一層で、焼土粒を含んでいた。時期：遺物は出土しなかったが、周囲の遺構との関係から中世と判断した。

SK463・484　位置：南部Ｃ区中央　図版47、第117図、PL54

検出：ⅡＡ$_1$層下位を検出面とする。３つの土坑は近接し、特徴はきわめて近似する。規模･形状：SK463は43×36cmの小型の楕円形で、深さ18cmのすり鉢状の断面形を呈する。また、SK484は58×50cmの楕円形で皿状の断面形を呈し、深さは12cmと浅い。構造：土坑の中央に拳大から小児頭大の硬砂岩を配置することを特徴とし、焼痕が明らかに認められ、破砕している例がほとんどである。SK463には10個程の礫が、また、SK484では６個の礫が確認された。覆土はいずれも黄褐色土の単一層で焼土粒、白色砂が均一に混入していた。時期：中世１期に帰属する。類例：２つの土坑に近接してSK483がある。規模や形状が近似し、５個の礫が確認された。

SK482　位置：南部Ｃ区中央　図版47、第117図、PL54

検出：ⅡＡ$_1$層下位で検出する。SK463らと近接し、集石をもつ形態は同じであるが、本址の規模はそれらと比較するとわずかに大きい。規模・形状：長軸1.17ｍ、短軸1.05ｍで北東側が部分的に張り出す円形に近い形状である。深さは12cmと浅い。平坦な底面は南東側がわずかに低い。構造：底面から浮いて礫が８個程ある。礫は被熱による破砕が認められ、集中することなく散点する。覆土はＩＤ層由来のオリーブ褐色砂の単一層である。時期：遺物は出土しなかったが、周囲の土坑と同一時期と考えられることから中



第117図　SK459・460・463・484・492(1：20)・482(1：40)実測図

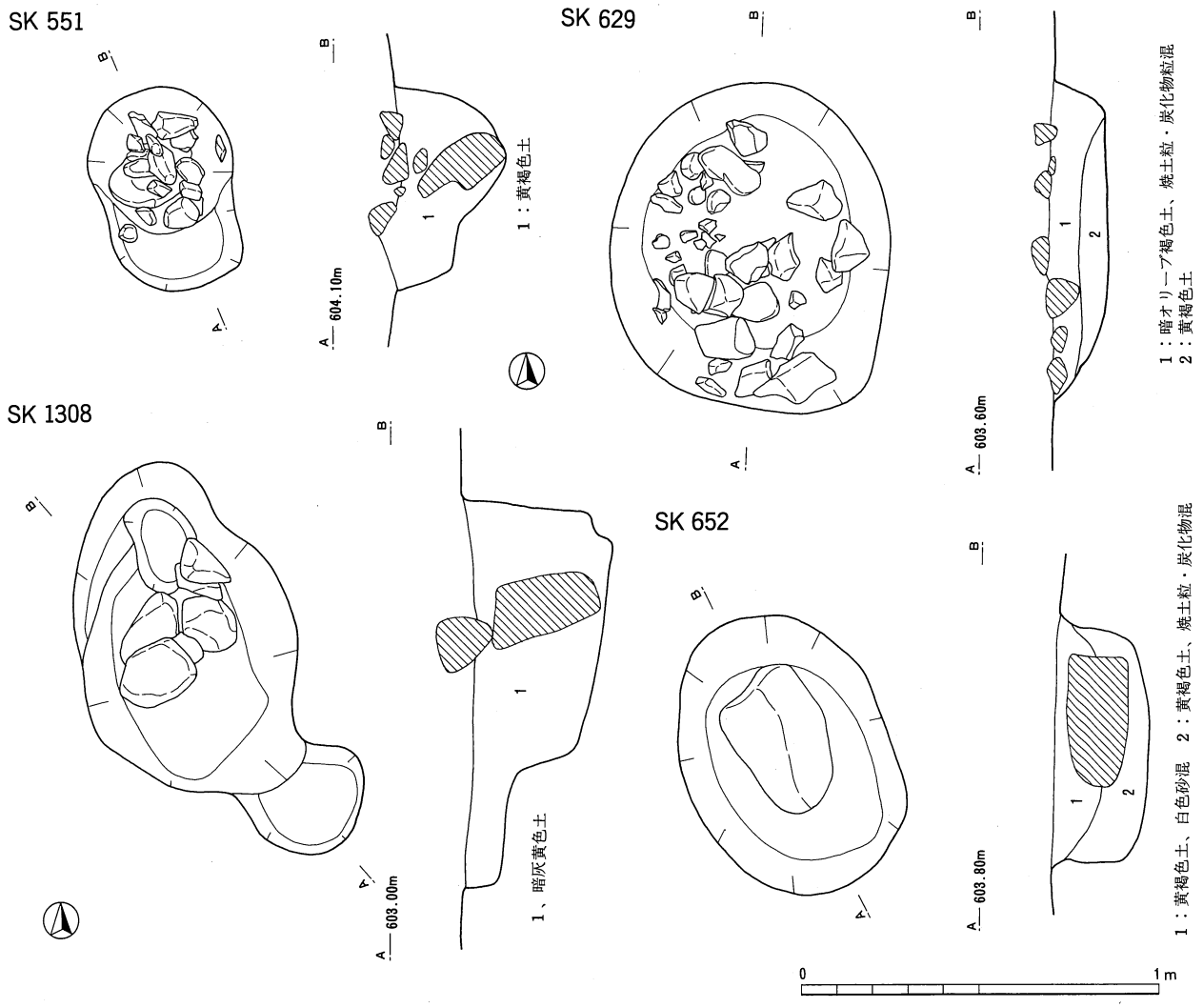
世の所産であろう。

SK492　位置：南部Ｃ区中央　図版46、第117図、PL54

集石をもつSK459,460など一群の東端に位置する土坑である。検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。ST35の北東隅の柱穴を切るが、覆土の色調差からその関係は明瞭である。規模・形状：径90cmの円形を呈する。底面は平坦になり、深さ45cmを測る。壁は斜めに立ち上がり、鍋底状の断面形である。構造：東側に礫が集中する。礫は２層上面に置かれ、安山岩、チャートが１個ずつあるほかは硬砂岩である。このうち破砕礫が半数を占め、全部で34個使用される。覆土は褐色の細粒砂を主体とし、上層にはⅡＡ層基質の粘土ブロックが混在する。荒掘した後いったん土を入れ、そこに礫を配してから１層で覆う。坑内で火を焚いた痕跡は認められない。遺物の出土状況：礫の間から内耳鍋の大きな破片が出土した。完形品ではないが、残存率は高く、本址に帰属する遺物とみてよいだろう。所見：集石を有する一群のなかでも集石の状態や遺物の出土状況はほかの土坑と比較すると異質である。骨は出土しなかったが、墓址などが考えられる。時期：遺物から中世２期に帰属する。

SK551　位置：南部Ｂ区　図版38、第118図

検出：表土を除去したⅡＡ$_2$層上面で礫が露出しており、検出は容易であった。規模・形状：部分的に凹凸があるが、平面は楕円形を呈する。長軸58cm、短軸40cmの規模を有し、深さは30cmの二段状の不整形に



第118図　SK551・629・652・1308実測図（１：20）

なる。構造：礫は中央に集中する傾向が認められ、最下部には大きな礫を配置する。上層の礫は土を埋め戻す過程で投棄された可能性が高い。また、焼痕は観察されない。覆土は粗粒砂の単一層である。時期：遺物は出土しなかったが、覆土の特徴から中世と判断した。

SK629　位置：南部Ｂ区　図版36、第118図、PL55

検出：SB201の西側に位置する土坑で、ⅡＡ$_2$層上位の検出面ですでに礫が散見され、プランも明確である。規模・形状：南北方向に長い楕円形で、長軸91cm、短軸78cm、深さは16cmを測る。底面は平坦である。構造：礫は硬砂岩が多く、拳大から人頭大のものが上層の坑内全体に分布する。覆土は２層に分層される。基調となる土はオリーブ褐色の細粒砂を主体とし、焼土粒を均一に混入する。２層上面には薄く炭化物層が観察されることから、２層が堆積した後で火を焚き、礫を入れて１層で覆ったと考えられる。時期：遺物は出土しなかったが、覆土の特徴から中世の遺構と判断した。

SK652　位置：南部Ｂ区　図版37、第118図、PL55

検出：SB211の南側に位置する。ⅡＡ$_2$層上位を検出面とし、南壁は被熱を受けたために帯状に赤色化しており、地山との区別は容易である。規模・形状：長軸1.03ｍ、短軸0.80ｍの楕円形を呈し、深さは26cmを測る。構造：掘り方の中央に大きな花崗岩が１個ある。花崗岩は底面からわずかに浮き、全体に被熱の痕跡が観察された。特に、南側が強く焼ける。壁面も北壁がわずかな焼痕を止めるのに対し、南側は明瞭である。覆土は２層に分層される。上層は白色砂を多量に混入する砂質土で、下層がやや褐色を帯び、焼土粒、炭化物を含むことからその差は歴然としている。礫を入れて火を焚いた後、１層で覆ったと考えられる。時期：遺物は出土していないが、覆土の特徴から中世と判断した。

SK1308　位置：北部Ｅ区　図版70、第118図

検出：SB578の北側に位置し、集石を有する土坑は周辺には確認されず、本址のみである。規模・形状：南東部に一部張り出しをもつが楕円形に近い平面形である。長軸98cm、短軸62cmを測り、断面は二段の不整形になる。底面は北側が最も低く、深さ43cmを測る。構造：検出面から底面にかけて50個程の礫を確認した。礫は最大25×15cmの大きな礫が底面から立つように出土した。覆土は黄灰色の粗粒砂を基調とする単一層で焼土などはみられない。時期：遺物は出土しなかったが、覆土の特徴から中世以降と判断した。

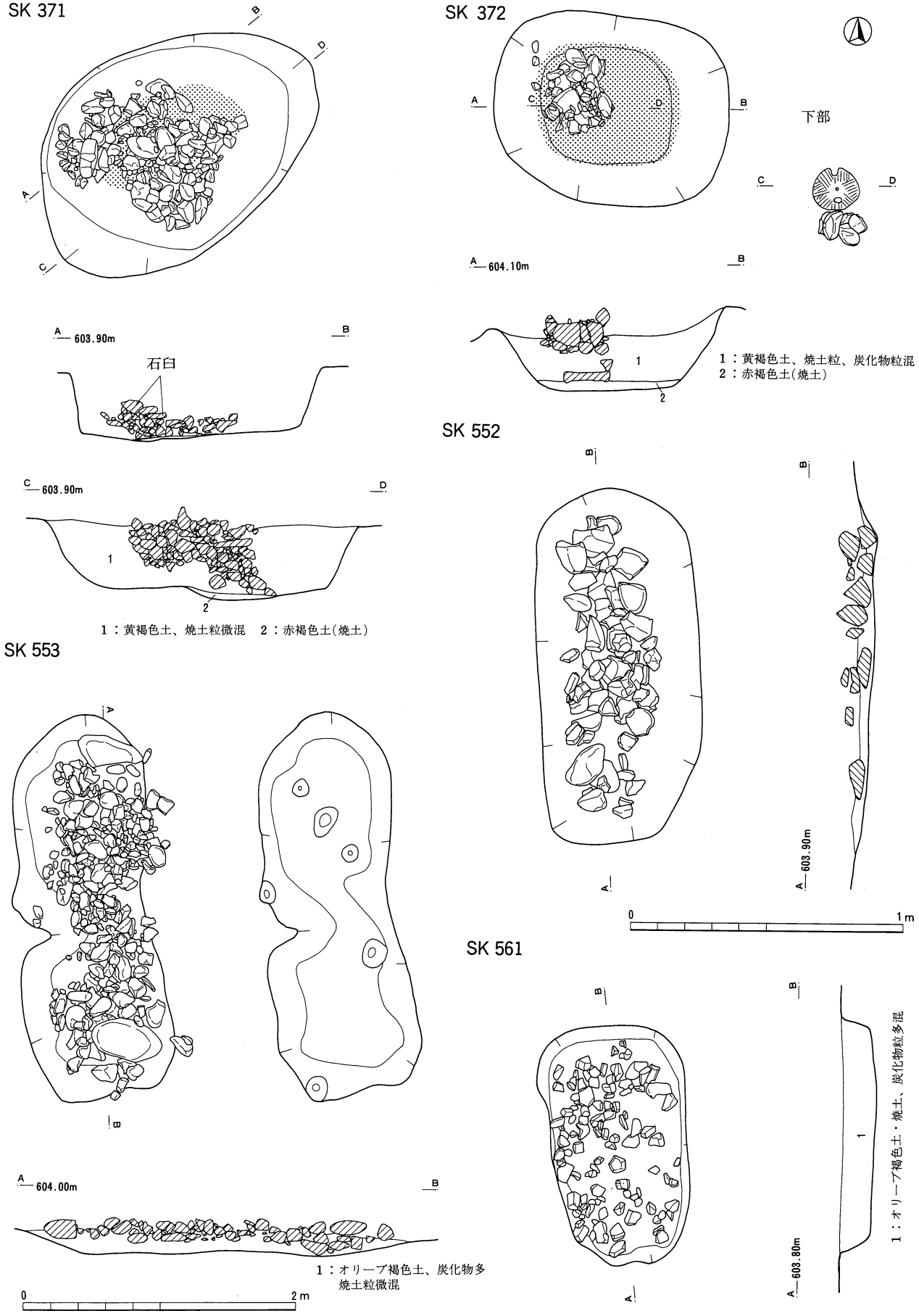
集石をもつ大型の土坑

SK371・372　位置：南部Ｃ区南西隅　図版41、第119図、PL53

検出：ⅡＡ$_2$層上位で検出する。表土を除去すると礫が露出する箇所が２か所認められた。礫を含む落ち込みは地山と色調差が認められないため、検出はかなり難しく、最終的にプランは断面観察によって確定した。規模・形状：SK371は長軸2.28ｍ、短軸1.56ｍの大型の楕円形を呈し、深さ58cmを測る。底面にはわずかな凹凸が観察され、中央付近には焼土と炭化物粒が集中し、火を焚いた痕跡が容易に判断できる。礫はチャートがあるほかは硬砂岩や花崗岩を使用し、破砕しているものが多い。SK372は長軸1.74ｍ、短軸1.37ｍとSK371より一回り小さい。深さは60cmで、平坦な底面ではやはり火を焚いた痕跡がある。礫の種類は硬砂岩と花崗岩がほとんどである。覆土は黄褐色の砂質土を主体とし、焼土粒を多量に含む。両者とも火を焚いた後、礫を入れながら埋め戻している。遺物の出土状況：SK371で礫の上層に割れた石臼が出土し、SK372でも２層上面に完形の石臼を平坦に置いていた。両者から出土した臼は組み合わせて使用したと考えられ、上臼と下臼がそれぞれ別に納められることから同時期性が高い。時期：遺物から中世以降と思われる。

SK552　位置：南部Ｂ区　図版35、第119図、PL55

検出：SB196の覆土中で礫が集中する箇所があり、本址の存在が確認された。規模・形状：主軸を南北にとる楕円形で、長軸1.30ｍ、短軸58cm、深さ58cmを測る。底面には小さな凹凸が認められる。構造：河成



第119図　SK371･372･553･561(１：40)･552(１：20)実測図

礫をそのまま坑内全体に入れる。覆土は底面付近しか残存しないため詳細は不明である。遺物は内耳鍋1片が出土している。時期：遺物から中世2期に帰属する。

SK553　位置：南部B区　図版35、第119図、PL55

検出：IIA_2層上位を検出面とするが、すでに礫が散見された。覆土と地山との識別が難しく、プランが中央部でくびれ、さらに集石も2か所にかたまる傾向がみられることから2つの土坑の重複を推定したが、覆土の観察でひとつの土坑と判断できた。規模・形状：主軸を南北にとる長楕円形を呈する。長軸2.72m、短軸1.05m、深さ16cmを測る。構造：礫は底面からわずかに浮いて集中する。南・北端には40～50cmの大きな礫を平坦に据え、その間に拳大から人頭大の河成礫や破砕礫を数多く入れる。覆土は細粒砂を主体とする単一層で、南側には炭化米に似た形状の種子と焼土粒が混在していた。しかし、坑内で火を焚いた痕跡は認められない。遺物は内耳鍋8片、土師質土器1片が出土した。時期：遺物から中世2期の遺構と判断した。

SK561　位置：南部B区　図版36、第119図

検出：SB194の掘り下げの際、礫が集中する箇所を確認し、再検出によって本址を認定した。規模・形状：南北に主軸をとる、楕円形である。長軸1.76m、短軸1.09m、深さは12cmを測り、平坦な底面は中央がわずかに低い。構造：礫は坑内全体に分布する。硬砂岩がほとんどで破砕しているものが多く、上層に集中する傾向が認められる。覆土は住居址内に構築するため明瞭でないが、　D層基質の細粒砂を基調とする単一層で、炭化物、焼土粒が多量に混入する。礫の破砕状況から坑内で火を焚いたとも考えられるが、断定はできない。遺物の出土状況：礫に混じって内耳鍋12片が出土している。時期：遺物の様相から中世2期に帰属する。

SK636　位置：南部B区　図版32、第120図、PL55

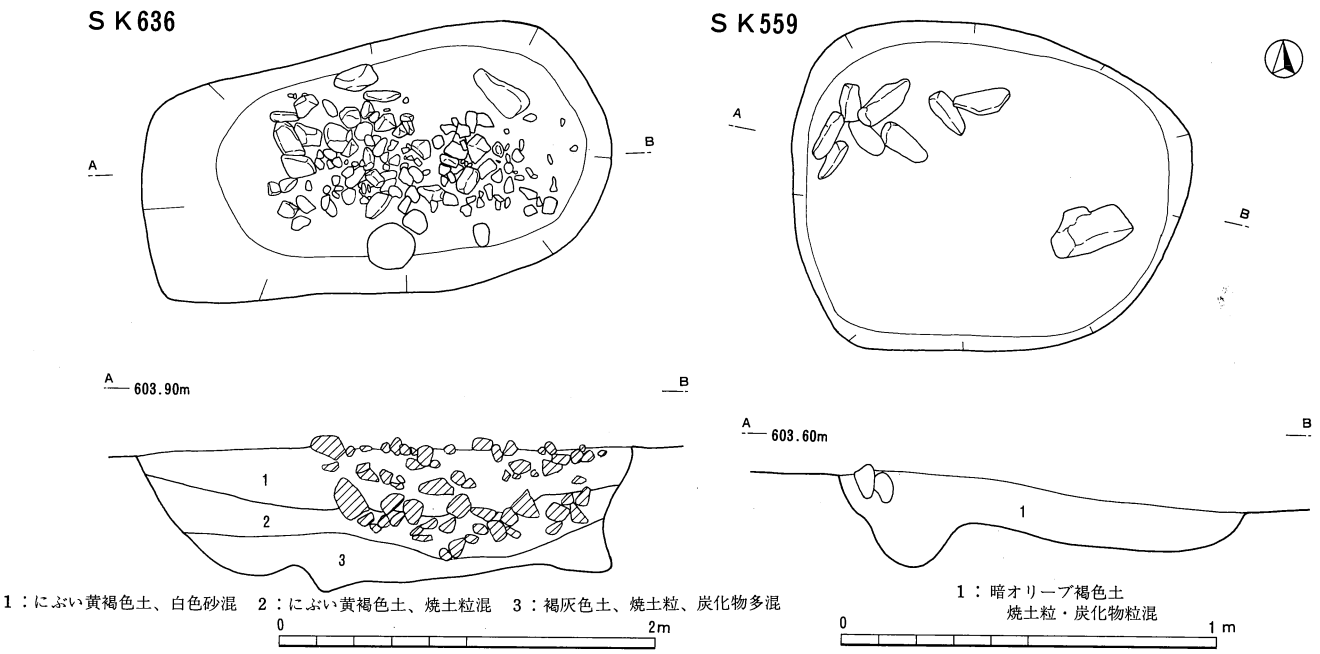
検出：IIA_2層上位で検出面する。土坑は礫層中に構築されるため西側のプランは不鮮明で、最終的な断面観察でもやはり西壁の立ち上がりは明確でなかった。規模・形状：主軸を東西方向にとる、大型の楕円形である。長軸2.47m、短軸1.39mで、深さは72cmと深い。底面には凹凸があり、火を焚いた痕跡が認められる。構造：坑内に入れられる礫は硬砂岩が多く、上層から2層下位にかけてみられる。礫の大きさは人頭大から拳大にかけてのものを使用し、破砕している例が多い。覆土は3層に分層された。基調とする土はにぶい黄褐色土の粗粒砂であるが、礫の堆積状況や焼土粒の量的な差を根拠に分層し、火を焚いた後、礫と土で覆ったものと判断できる。遺物の出土状況：底面付近には木片が完全に炭化せずに遺存し、さらに炭化した「アワ」も固まって出土した。また、内耳鍋12片、中世土師器の皿5片がそれぞれ細片で覆土中から出土した。これらは直接本址に帰属するかは明確でない。所見：遺物の状況から本址の性格を限定するには難しいが、炭化種子が出土したことや規模から墓址の可能性を指摘できる。時期：遺物の様相から中世2期に帰属する。

石錘を出土した土坑

SK599　位置：南部B区　図版36、第120図、PL56

検出：SB209の調査中、住居址の南東隅付近に数個の礫が集中し、その周囲に焼土粒が散布することから本址を認定した。規模・形状：長軸1.06m、短軸0.87mを測り、主軸を東西方向にとる楕円形である。西側が低い底面は二段になり、深さ26cmである。構造：北西隅には底面から浮いて石錘に似た、細長い礫8本がかたまって出土した。東側の底面には炭化材と人頭大の礫1個がある。火を焚いた痕跡は不鮮明だが、ＩＤ層基質の細粒砂を主体とする覆土中には焼土粒や炭化粒が均一に混入していた。所見：本址のような類例は認められず、その性格も不明である。時期：覆土の特徴から中世の遺構と考えられる。

大型の土坑



第120図　SK559(１：20)･636(１：40)実測図

SK1072　位置：北部Ｅ区　図版66

検出：SB554の覆土中に灰褐色の落ち込みを確認した。住居址の覆土とは色調差が明瞭なこともあり、検出は容易であった。規模・形状：主軸は東西方向にとる楕円形で、長軸2.38ｍ、短軸1.82深さ16cmを測る。壁は緩やかに傾斜し、平坦な底面には酸化した鉄分が集積していた。構造：覆土は灰色味の強い砂質土の単一層である。所見：遺物が出土しなかったため本址の性格を限定することは難しく、本遺跡にも本址のに類似した大型の土坑は存在しない。時期：覆土の特徴から中世以降の土坑と考えられる。

(3)Ⅲ群の土坑

SK622　位置：南部Ｂ区　図版36

検出：SB209の調査中、白色砂を含んだ落ち込みを確認した。規模･形状：長軸1.26ｍ、短軸0.75ｍの不整形である。底面には小さな落ち込みが認められ、深さは74cmと比較的深い。構造：覆土は灰黄褐色の単一層で、白色砂を多量に含む。遺物の出土状況：覆土中から内耳鍋の大きな破片が４片出土したが、本址に帰属するか否かは明確でない。時期：遺物の様相から中世２期に帰属する。

7　自然流路

NR１　位置；南部Ａ・Ｂ区境　図版108

検出；ⅡＡ$_1$層上位で検出する。SD６付近には中世の溝址が東西方向に走行し、それと方向を同じくして3本の自然流路が認められた。いずれもSD６～9・13・15・16などの一時的な氾濫と考えられることから、ここでは一括して扱った。本址はSD６に切られ、SD８・９・12を切る。形状・層位；溝幅、深さは地点によって異なり、SD６が切る自然流路は最大10ｍ、最深60cmを測る。流路の方向は西から東へ向かう。覆土は淘汰の悪い砂礫層で径10～50mmの礫を多量に含み、一時的な氾濫であることは容易に観察される。遺物は古代の土器が出土しているが、住居址との重複によって混入したものである。時期；溝址との重複関係から中世に帰属すると判断した。

NR２　位置；南部Ｂ・Ｃ区境　図版40・41・46

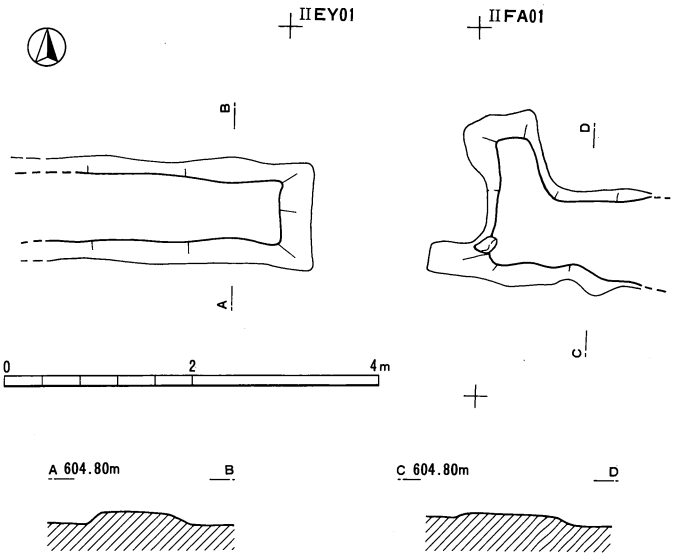
検出；IIA_2層を検出面とする。N250からN310付近で南西から北東方向にかけて走行する砂礫を多量に含んだ自然流路が認められた。本址はSD31・SB123を切る。形状・層位；溝幅は平均約５ｍ前後を測り、断面はレンズ状になる。覆土は一時的な氾濫を示す砂礫層で、粗粒砂を主体とし、径10～100㎜程の礫を多量に含む。地形から北東方向に流水したと考えられる。時期；中世のSD31を切ることから本址も中世以降の所産と考えられるが、近世に至る間、恒常的に流水したとは思われない。中世でも一時的に存在した自然流路である。また、本址のある位置は、古代には遺構が形成されない谷地形にあたり、小規模な流水が一時的に存在した可能性は否定できない。

第４節　　近世以降の遺構

１　水田址

SL１　　位置：南部Ｂ区北側　　第121図

検出：土層観察の際、ＩＡ下部層上面を上限とする水田土壌とアゼ断面を確認した。本址の位置は調査域南縁の自然堤防の最高地点より後背湿地側の緩斜面上に立地する。古代から中世にかけて南部北側を北東流したNR３が、ほとんど位置を変えずに現耕作土直下でも検出されることから、地形環境が全体に変化した中で、小規模かつ条件的に難しい特質をもつ（後背湿地側にあった中小流路中、最も高い地点に位置する）にもかかわらず、長期間存続したことを物語っている。この南東に本址がある。水田土壌は炭化物粒を散点させる溶脱層で、その下には斑鉄がとぶ灰色土、マンガンの集積層がある。検出は斑鉄がとぶ灰色土を指標とし、立体的な検出に努めた。水田土壌とアゼの存在で水田址認定の必要条件は満たされたが、合わせて、プラント・オパール分析を宮崎大学農学部藤原宏志教授に依頼した。その結果、ＩＡ下部層より、4,000～11,600個／ccと多量のイネのプラント・オパールが検出され、かつ現水田下では唯一のピークを示している。著しい撹乱と上位層の削剝のために調査は困難を極め、結局Ｔ字型に交差するアゼ２本が認められ、田面は都合３枚が想定された。構造所見：西側のアゼは下底約110㎝、上位60～70㎝、高さ８～15㎝の台形断面をもち、走行はＥ－Ｗである。なかほどで途切れるが、この部分には木根痕と思われる粘土柱が密に入り込み、アゼの検出ができなかったためである。東側のアゼは下底約40～90㎝、上位50～60㎝、高さ３～５㎝の台形断面で、Ｔ字型に交差して走行はＮ－Ｓ方向にとる。木根痕により、西側の一部と北側の大半が検出不能だったが、多分東西のアゼは同規模・形態を持つものと想像される。田面は検出できた範囲が狭小であったため、面積と形状を数化することは危険である。田面の推定標高は604.36±３㎝内で、北西側へ若干高い傾向がある。諸施設：性格が明らかで、本址に係わると予想できる施設は検出されていない。ただ、付近で自然には存在しない人頭大の礫が一つ、Ｔ字型交点でアゼ内に埋め込まれたような状態で出土している。性格については水口（尻）を補強する『置石』、田の範囲を示す『境石』などが考えられる



第121図　SL1実測図(1：80)

が、いずれも位置・大きさに問題が残る。遺物の出土状況：上位のＩＡ上部層より、近世陶器片が、ＩＡ上・下部層境界より中世～近世陶器片が出土し、下位のIIＡ層上面には古代13期の竪穴住居址が掘り込まれている。ＩＡ下部層中からIIＡ層にかけては土師器・須恵器の破片などが包含されるが、ＩＡ上部層中にも同様に含まれており、IIＡ層上面に広域に散布していたこれらの遺物が流体に捕獲されたと解釈したい。時期：遺物の状況から近世かそれ以降と推定される。

第3章　遺　　物

第1節　縄文・弥生時代の遺物

1　縄文時代の土器　　図版75―1～10、PL58

中期から晩期の土器が総数112点出土している。中期では初頭の五領ヶ台式期かと思われる土器片2点があり、もっとも古い。勝坂式期の終末から曽利Ⅰ式期(5～7)の土器が6点みられるほかは、中期末葉の土器25点が確認され、量的にはこの時期が多い。但し、ほとんどは摩滅して遺存状態が良くない。

後期では、焼土址周辺より土器が確認されている。1はSF501、2～4はSF502の周縁から検出されたもので、前者は堀之内Ⅰ式土器、後者は加曽利BⅠ式土器である。ほかにSF503･504から後期と思われる土器片がある。後期の土器も摩滅が著しく、時期細分は難しい。おそらく称名寺式段階から加曽利B式段階が存在していそうで、合せて28点を数えている。

晩期の土器も49点確認されている。このうち44点は同一個体の破片で、従って個体数は多くない。これら(PL-11)は、SB503に混在していたもので、つくりが粗雑で、両面に条痕文を施して器面を調整している。口縁部は平縁である。また8～10は、同一個体で、晩期中葉の佐野Ⅱ式土器に比定できよう。

出土地点は、中期初頭の土器片がB区の南端、中葉のものがA区中程、末葉から後期にかけてのものがE区南半、晩期の土器はE区に多い。

2　縄文時代の石器　　図版75―1～3

石器11点、剥片23点、石核6点が出土している。総数40点のうち約半分は古代の遺構に混入していた。遺構外からの出土はⅡ層中に多い。出土地点は主にE区南半とA区の中央に集中しており、土器の分布と矛盾しない。石器の内訳をみると石鏃4点、ピエス・エスキーユ1点、スクレーパー2点、敲石1点、打製石斧2点、磨製石斧1点がある。小形石器は黒曜石が多く、剥片・石核を含めて28点あり、チャートは8点である。大形石器は硬砂岩・頁岩・凝灰岩が使用されている。石鏃は黒曜石製の有茎鏃3点、ヒコーキ鏃といわれるチャート製のもの1点がみられる。石鏃はE区南半に分布している。1･2は打製石斧で、1はローリングを受けて丸みをもっている。3の磨製石斧は凝灰岩製で、E区から出土している。弥生時代の石器の可能性もある。このほかに石棒がSB503より出土している。石棒は住居址の床面から出土したことより、古代の石製品の項で触れることにした。

3　弥生時代の土器　　図版75―1～5、PL58

わずかに22点、10個体が抽出できる。3・4は同一個体で、中期の栗林Ⅰ式土器に比定できる、地文に縄文を残す一群である。5は先の細い工具で器面をなでて、その工具で2個を1対にして刺突を行なっているものである。類例は求め難く、時期的には栗林式期より古い時期から栗林Ⅱ式併行期の幅で考えられよう。1は後期の箱清水式土器で、残存部の全面に櫛描波状文を施している。2は、底部の厚い無文の土器で、口縁部内面は細かく横にヘラ磨きをし、外面は口縁部をヨコナデ、体部上半はナデ、下半は削りま

たはナデを行なっている。２は１と重なって包含層より出土しており、同じ時期と考えられる。このほかには庄ノ畑式土器が１点あるほかは、１と同様な櫛描波状文をもつ破片が３点ある。１～５はＡ区の中程から出土し、そのほかはＣ区以南に点在して検出された。

４　弥生時代の石器　　図版75―１・２

明らかに弥生時代の石器と捉えられるものは図示した２点にとどまる。１はSB534（Ｅ区南半）から出土した石斧で、石鍬として器種分類される。最大長15.2㎝、最大幅12.1㎝、最大厚0.9㎝を測る。２は磨製石鏃で、SB557（Ｅ区南半）から出土している。１・２とも頁岩製である。

第２節　　古代の遺物

１　古代の土器

(1)　古代の土器の概観

ア、土器の事実記載

南栗遺跡では竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑などの古代の遺構をはじめとして、遺構外の包含層などから出土した古代の土器は膨大な量にのぼる。

本報告書ではこの膨大な量の土器の事実提示を、限られた紙幅のなかで行うために、文章記載と実測図・遺構別古代土器一覧表の三者で出土土器の提示を行うこととした。実測図では図示可能な土器について法量・調整などを示し、文章記載では実測図に示せなかった情報を中心に必要最小限の記述をおこなった。また、主要な遺構の土器については出土土器の構成表を加え補足した。構成表では土器分類の細別に従って、器種それぞれの推定個体数と重量、個体数の構成比率、実測図番号を示してある。さらに巻末の遺構別古代土器一覧表(付表４)では遺構出土の土器を推定個体数で表わし、遺構出土の土器がすべて網羅できるようにした。

イ、南栗遺跡の古代の土器

南栗遺跡では、古代1期から古代15期まで古代各期を通じて、それぞれの時期の遺構の多寡に応じ多量の土器が出土した。総論編でそれぞれの器種の分類の詳細や型式変化・時期区分について述べるので、ここでは南栗遺跡の古代各期の土器様相についてその概要を述べる。

１期　SB129･155･176･550などに好資料がある。食器･煮炊具･貯蔵具の割合は、２期以降の時期に比べ煮炊具が多く、食器・貯蔵具の割合が低い。食器は非ロクロ調整の土師器と須恵器の二者で構成されており、須恵器が土師器をやや上回る。土師器杯は口径12㎝前後の丸底の杯Ｄと口径15㎝前後の杯Ｅ、体部に稜を持つ丸底の杯Ｆのほか、高杯、形態が不安定で多様な器形をもつ鉢などがある。一方須恵器は主体となるのは杯Ａで、他に杯Ｂ・杯Ｄ・高杯・鉢Ａ・鉢Ｂ等がある。杯Ａは内面に返りを有する杯蓋Ａとセットになるもので、このセットが１期のメルクマールとなる。口径10㎝･器高3.5㎝前後の小型のものが主体で体部の開きが弱い箱形に近い器形である。底部は回転ヘラ切り未調整のものと回転ヘラ切り後回転ヘラ削りを施すものの両者が共存している。SB155では、杯Ａ・杯Ｂ（杯蓋Ｂ）・杯Ｄが共伴している。煮炊具は土師器甕Ａを主体に、甕Ｂ・甕Ｆ・甕Ｇ・小型甕Ａ・小型甕Ｂ・甑Ａで構成されている。このうち甕Ｆ・甕Ｇは甕Ａ・甕Ｂが烏帽子型の長胴甕であるのに対し、球形に近い器形で器壁も厚く、甕Ｆでは器表をヘラ磨きすることを考えれば、煮炊具としての用途よりも貯蔵具としての機能を考えるべきかもしれない。このことは、１期に須恵器の壺甕類の貯蔵形態が少ないことからも土師器の甕類が担った用途が煮炊具の

みでなく貯蔵の役割を果たしていたことがわかる。食器・煮炊具・貯蔵具ともに、同一器種内での個体差が目立つのがこの1期から次の2期にかけての特徴である。

2期　基本的な器種の構成は1期と変わらない。食器類は須恵器の割合が次第に増加し、それにともなって土師器が減少する。有稜の土師器杯Fは1期までで消滅している。須恵器では杯蓋Aとそれに対応する口径10cm前後の小型の杯Aも消滅し、杯Bが増加する傾向がある。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕C・甕D・甕F・甕G・小型甕A・小型甕B・甑Aなど多様であるが、主体は甕A・甕B・小型甕A・小型甕Bの長胴甕と小型甕の組み合わせである。甕F・甕Gはほぼこの期を最後に消滅する。この時期須恵器は美濃須衛窯産の搬入品が最も多い時期にあたり、「美濃国」刻印須恵器を出土した、SB626では須恵器のうち食器で40%・貯蔵具で26%・須恵器全体では37%を美濃須衛窯産製品が占めている。

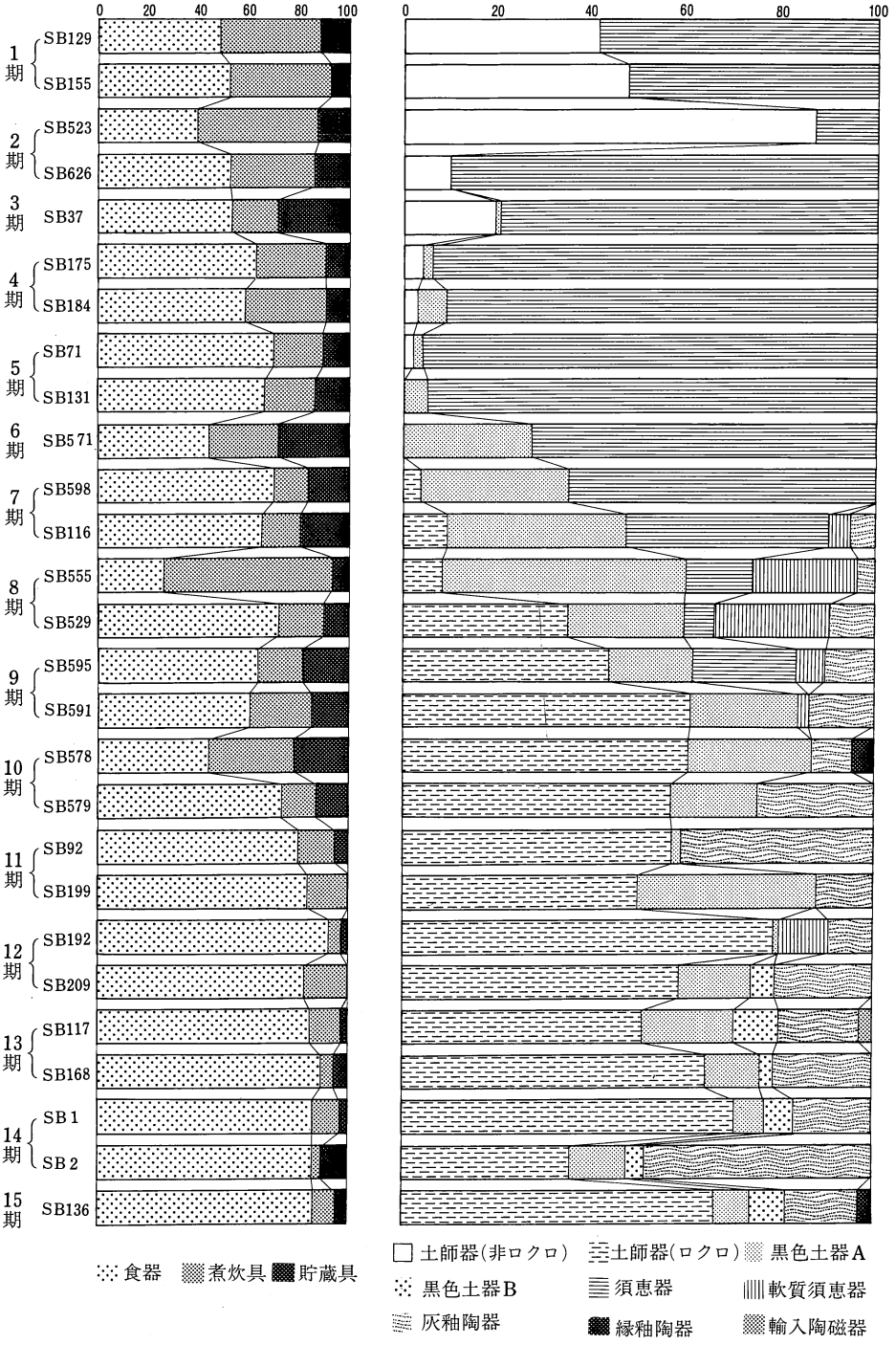
3期　食器の占める割合が徐々に増加しており、SB37では個体数比で50%を越える。食器では須恵器の占める割合がさらに増加している。この時期須恵器杯Aに底部回転糸切り未調整のものが出現し、従来からある回転ヘラ切りのものと共存するが、この段階ではいまだ回転ヘラ切りのものが回転糸切りより多い構成である。煮炊具は、土師器甕A・甕B・甕C・小型甕B・小型甕Cがある。貯蔵具は須恵器であるが、長頸壺A・長頸壺B・短頸壺・甕A・甕E・横瓶など多様な器種が表われてくる。須恵器は2期に続き美濃須衛窯産製品の搬入が多い時期で、SB37では食器で30%・貯蔵具で46%・須恵器全体では37%が美濃須衛窯産製品で占められている。

4期　土器全体のなかに占める食器の割合がさらに増加している。また、食器のなかで須恵器の占める割合が最も高くなる時期で、SB175では須恵器が94%を占めている。食器は少量の非ロクロ調整の土師器杯E、「甲斐型杯」と呼ばれる杯C、ロクロ調整の黒色土器A杯Aと、須恵器で構成されている。須恵器は杯Aでは3期から引き続き回転ヘラ切りと回転糸切りが共存しているが、この時期では3期に出現した回転糸切り未調整のものが回転ヘラ切りを上回る。また杯BはII（口径15～17cm・器高4～5cm）・III（口径14.5～17cm・器高5.5～8cm）・IV（口径12～13.5cm・器高3～4cm）・V（口径11～12cm・器高4～5cm）などの法量の分化が明瞭となる。また、土師器では非ロクロの杯Eに変わって、ロクロ調整の黒色土器Aがこの時期に出現しているが、量が少なくなおその実態は明らかでない。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕B・小型甕C・小型甕Dによる構成である。主体は甕Bと小型甕Bの大小の組み合わせで、ロクロ調整の小型甕Dは3期あるいはこの4期に出現し一定の量を占めている。貯蔵具の状況は3期と基本的に変わらない。須恵器のみによる構成で、小形の長頸壺・短頸壺、中形の甕D・甕E・横瓶、大形の甕Aなどによる組み合わせとなっている。美濃須衛窯産須恵器の割合は減少し須恵器全体のなかで10%に満たない割合となる。「浄濱」の同一墨書を出したSB175・184に、この期の土器様相を示す好資料がある。

5期　食器では、須恵器主体の構成が4期に引き続き見られるが、黒色土器A杯Aが量は少ないが安定的に見られるようになる。食器の主体となっている須恵器杯Aは底部回転糸切りのみである。杯Bの法量分化は4期を引き継いでいる。黒色土器Aは口径15～19cm・器高4.5～7cmの杯AI、口径12.5～13.5cm・器高3.5～4.5cmの杯AIIの二者がある。これも量は少ないが土師器杯Cも普遍的に存在している。煮炊具は土師器甕B・小型甕Dの組み合わせに少量の甕Cが加わるのが、5期の一般的な煮炊具のあり方である。貯蔵具は須恵器のみで構成され4期のそれと差はない。美濃須衛窯産製品は、この時期にはまれに甕類が伴うに過ぎなくなっている。この時期の土器様相を示す代表的な遺構はSB71・SB131などである。

6期　の時期の土器様相を示す遺構は南栗遺跡では少ない。食器の基本的な構成は5期の状況と何等変わらないが、量の面で食器のなかに占める黒色土器Aの量が増え、須恵器が減少するという変化が5期との違いである。煮炊具はこの時期に、土師器甕Bと小型甕Dによる組み合わせを完成させ、土師器甕類の規格化が最も明瞭に見られる時期である。SB571にこの期の好資料がある。

７期　６期の状況を受け継ぎつつ、食器にまったく新しい要素が加わる時期である。食器に見られる新しい変化とは、高台をもつ椀・皿の登場である。椀・皿の出現は、黒色土器Ａが次第に量を増し、同一の形態を有する杯Ａで比較すれば黒色土器Ａが須恵器を凌駕しはじめる段階を前後して確認できる。この時期隣接する下神遺跡・北栗遺跡などでは灰釉陶器の椀・皿が登場しているが、南栗遺跡ではこの段階では、椀・皿は黒色土器Ａに限られている。黒色土器Ａはこの時期杯ＡⅠ・杯ＡⅡ・椀・皿Ｂ・鉢Ａの器種が揃う。須恵器は食器のなかに占める割合を減少させるが、杯Ａ・杯Ｂともに食器の主要な一部を尚担っていることに変わりはない。しかし、杯Ｂは４～６期に見られたⅡ～Ⅵの法量分化を確認できなくなっている。また、杯Ａも自然な型式変化の結果、口径に比して器高が低く、底径の小さな体部の開きの強い形態となっている。さらに、７期の後半に至って、須恵器杯Ａに限って軟質の焼成で、内・外面に黒斑をもつものが表われる。法量は須恵器杯Ａとほぼ同様で、口径12～14cm・器高3.5～4.5cmを測るが、焼成が軟質であることのほかに、内面の調整が須恵器の杯Ａと異なることから、本報告ではこの土器を軟質須恵器と呼称して須恵器と区別することにした。煮炊具・貯蔵具は５・６期の様相を引き継ぎ、自然な型式変化のあとがたどれる。煮炊具は土師器甕Ｂと小型甕Ｄの組み合わせを主体に甕Ｃが加わるもので前期と変わらない。貯蔵具も同様須恵器による構成である。SB116･598にこの期の好資料がある。



第122図　竪穴住居址出土土器の構成

８期　８期は７期で表われた食器の変化がより鮮明になる段階で、椀・皿への指向がより明確になる。また、この時期、ロクロ調整で内面をヘラ磨き・黒色処理しない土師器の杯Ａ・椀、灰釉陶器の椀・皿などが表われ一定量を占めるようになる。したがって、食器は土師器・黒色土器Ａ・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器で構成されることとなる。土師器は杯ＡⅡ・椀・盤Ａ、黒色土器Ａは杯ＡⅠ・杯ＡⅡ・椀・皿Ｂ・

鉢A、軟質須恵器は杯A、灰釉陶器は椀・皿の各器種がある。したがって、同一形態の食器が異なった種類の土器で作られる。杯Aは土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器で、椀は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で作られるなどである。またSB559では緑釉陶器椀が共伴している。また黒色土器Aは黒色処理に伴う内面のヘラ磨きが粗く雑になる傾向が見られ、6期の黒色土器Aがヘラ磨きの調整痕が見えないほど丁寧に磨き上げられるのに対し8期のそれはヘラ磨きが雑で磨き以前のロクロ調整痕がヘラ磨きの間隙から観察できるほどである。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの二者のみによる組み合わせとなり、もはや甕Cはない。貯蔵具は須恵器主体であることは変りはないが、小形の貯蔵具である長頸壺・短頸壺・小瓶などに灰釉陶器が入り始める。この期には光ケ丘1号窯式の灰釉陶器が伴う。この期の土器様相を示す遺構としてはSB529・555などがある。

9期　南栗遺跡では当該9期と次の10期は遺構が少なく土器様相も不明な点が多い。8期から9期への変化は、食器における黒色土器Aの占める割合が急激に減少し、かわって土師器が増加することにみられる。黒色土器Aは食器の主体である杯Aから撤退し椀に残るのみとなる。杯Aでは8期まで見られた須恵器・軟質須恵器も消滅しているので食器の主体である杯Aは土師器のみとなる。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせで構成されている。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器で構成されているがその実態はかならずしも明らかではない。食器からの須恵器の撤退からやや遅れて貯蔵の部門からも須恵器が撤退しているものと思われる。この期に伴う灰釉陶器は光ケ丘1号窯式が主体で、大原2号窯式もある。SB591・595にこの期の好資料がある。

10期　10期は、食器の主体が、土師器によって占められる9期の様相を引き継いでいる。煮炊具は土師器小型甕Dは確認できるが、長胴の甕Bは確認できない。また、羽釜も確認できない。貯蔵具も不明な部分が多い。食器は土師器杯AII・椀、黒色土器A椀、灰釉陶器椀・皿によって基本的な構成はなされている。土師器杯AIIは法量の小型化が始まり平均で口径11.5cm・器高3cmとなる。灰釉陶器は光ケ丘1号窯式・大原2号窯式が伴う。この期の土器群を出土する遺構としてSB578・579がある。

11期　土師器と灰釉陶器が食器における主体を占める状況は10期と変わらないが、土師器杯AIIの小型化がさらに進み、平均で口径11cm・器高3cmとなる。煮炊具では羽釜Aが普遍的となり、ロクロ調整の小型甕Dとの組み合わせが一般的となる。貯蔵具は出土量が少なく実態は明らかでないが、灰釉陶器陶器の短頸壺・広口瓶があるものと思われる。SB92・199にのこの期の好資料がある。

12期　土器全体のなかで食器の占める割合が高く、煮炊具・貯蔵具の占める割合が低い状況は11期からますます強まっている。食器においては土師器が半数以上を占め、残りを灰釉陶器と黒色土器Aが分ける構成である。土師器は杯AIIが9期から法量の縮小を続けてきたが、この12期にも平均口径10cm・器高3cmとさらに小型化を続けている。ただし、この時期には杯AIIと同一の形態を有するが、杯AIIより大型の杯AIII（平均口径13cm・器高3.5cm）が現われる。またこの時期盤Bも出現し、大小の2法量を有する。黒色土器Aは椀に限られ、灰釉陶器は椀・小椀・皿・段皿等がある。灰釉陶器は虎溪山1号窯式が主体である。煮炊具は羽釜Aと小型甕Dの組み合わせである。貯蔵具の実態は不明である。SB192・209にこの期の好資料がある。

13期　土器全体の構成は前期を引き継いでいる。食器では土師器が主体を占める。土師器杯AIIはさらに小型化を続け平均で口径10cm・器高2.7cmである。灰釉陶器は丸石2号窯式を主体に虎溪山1号窯式もある。SB117・168にこの期の資料がある。

14期　土器の構成は前期を引き継いでいる。土師器杯AIIはさらに小型化を進め、平均で口径10cm・器高2.2cmとなる。また、口縁端部を折り返す無台の土師器皿AII、口径16～17cm・器高3.5～4cmの土師器皿AIもあらわれる。焼失住居と考えられるSB2では、食器では土師器杯AII・杯AIII・盤A・鉢A、黒色

土器Ａ椀・小椀、黒色土器Ｂ小椀、灰釉陶器椀・稜皿があり、煮炊具では足釜が、貯蔵具では広口瓶がある。灰釉陶器は丸石２号窯式・大原10号窯段階をともなう。SB1･2にこの期の好資料がある。

15期　土師器杯ＡⅡは小型化が極限まで進み平均口径9.5cm・器高1.7cmとほとんど皿と区別が付かなくなっている。杯ＡⅢは平均口径13.5cm・器高４cmとやや大型化の傾向が見えるが、回転糸切りの底部は底径が大きくやや形態も不安定である。この期にあたるSB136では食器では土師器杯ＡⅡ･杯ＡⅢ･椀･小椀･皿ＡⅠ・盤ＢⅠ・盤ＢⅡ・盤Ａ・鉢Ａ、黒色土器Ａ椀、黒色土器Ｂ椀・小椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀・小椀・段皿、山茶碗があり、煮炊具は羽釜Ａ、貯蔵具では灰釉陶器広口瓶がある。食器に中国産白磁を伴う可能性もあるが遺構での安定した共伴は確認できなかった。この期の土器様相を示す資料としてSB136がある。

(2)　遺構出土の土器

ア　竪穴住居址出土土器

SB１　　図版76、PL59、第４表

土師器杯ＡはⅡ（１・７～10）とⅢ（2～６）の２法量があり杯ＡⅡでは器高が2cm前後のものが多い。土師器皿ＡもⅠ（16～18）とⅡ（11～15）に分かれる。皿ＡⅡでは口縁端部を折り曲げる11～12と、丸味をもって立ち上がる13～15の二つのタイプがある。灰釉陶器は大原10号窯段階（22）と丸石２号窯式（23･24）のものがある。26は土師器盤Ａ、28は器表をナデ調整した土師器の甕である。土師器杯Ａの形態は14期の様相である。

SB２　　図版76・77、PL59･60、第123図、第５表

土師器杯ＡはⅡとⅢの２法量でⅡはSB１と同様器高２cm前後である。７・８は黒色処理はしていないが内面に丁寧なヘラ磨き調整を施している。灰釉陶器（10～20、23・24）は丸石２号窯式で、椀は14・16を除いて底部に糸切り痕を残しているが、いずれも焼成が悪く肌色味を帯びた軟質に焼き上っている。22は足釜の脚部と考えられ指頭圧痕が残る。土師器杯Ａの形態より14期と考えられる。

SB３　　図版77

土器の量は比較的少ない。８は土師器鉢Ａであろう。灰釉陶器は３が虎溪山１号窯式、４～７が丸石２号窯式である。器高2.5cmを測る土師器杯Ａの形態から13期に属する。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比		実測図No.
土師器	杯ＡⅡ	7	315	22 71%	31 83%	1・7～10
	杯ＡⅢ	5	420			2～6
	椀	1	105			19
	皿ＡⅠ	2	190			16～18
	皿ＡⅡ	5	345			11～15
	盤Ａ	2	1200			26
	不明		630			
黒色土器Ａ	椀	1	155	2 6%		21
	小椀	1	30			
黒色土器Ｂ	小椀	1	50	2 6%		20
	小壺	1	50			25
灰釉陶器	椀	3	305	5 17%		22・23
	段皿	2	40			24
	不明		70			

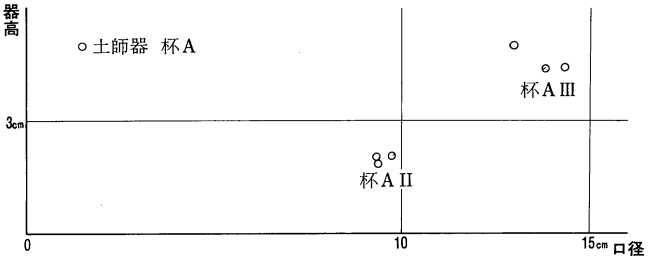
煮炊具

土師器	甕　Ｂ	1	305	5 14%	
	羽釜Ａ	1	540		
	羽釜Ｂ	2	2395		27
	他	1	480		28
	不明		480		

貯蔵具

灰釉陶器	広口瓶	1	120	1/100% 1/3%	

第４表　ＳＢ１出土土器の構成



第123図　ＳＢ２出土土器法量分布図

SB４　　図版77

土師器は杯ＡがⅠ・Ⅱに法量分化しこれに皿Ａが加わる。灰釉陶器（９～12）は丸石２号窯式である。羽釜はＡ（13）・Ｂ（14）の２器種があり大小の関係となっている。15も羽釜の底部と考えられる。14期に属する。

SB 5　　図版77

5期に属するが、遺物が少なく図示できたのは4点のみである。3は小型甕Bで内面にもハケ目調整を施している。4は小型甕Dで底部に糸切り痕を残す。

SB 6　　図版78

1は土師器杯AIIで灯火器として使用されている。7の椀は内面を不定方向にヘラ磨きしているが黒色処理はされていない。9～13の灰釉陶器は丸石2号窯式である。14は底部にヘラ切り痕を残す須恵器杯Aで4期以前の土器の混入であろう。14期の土器である。

SB 7　　図版78

6点が図示できた。12は美濃須衛窯産の須恵器である。3・5は内面に横方向のハケ目を施す土師器甕B。4は内外面をヘラ磨き調整する甕F。6は軟質に焼き上った須恵器甕Eである。2期に属する。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比		実測図No.
土師器	杯C	1	10	9 33%	27 85%	
	杯AII	3	170			4～6
	杯AIII	3	565			1～3
	盤A	1	20			
	鉢A	1	460			21
	不明		75			
黒色土器A	椀	1	265	3 11%		7
	小椀	2	55			8
黒色土器B	小椀	1	95	1 4%		9
須恵器	杯BIV	1	10	1 4%		
軟質須恵器	杯A	1	30	1 12%		
灰釉陶器	椀	11	2415	44%		11～20
	稜皿	1	95			10

煮炊具

土師器	甕B	1	410		2 6%	
	足釜	1	35			22
	不明		640			

貯蔵具

灰釉陶器	広口瓶	3	1295	39%	23・24

第5表　SB2出土土器の構成

SB 8　　図版78

土師器杯AはIII（4）とII（1～3）がある。灰釉陶器は5・8の底部に糸切り痕が残るほかはヘラ削り調整している。図示したものはすべて丸石2号窯式である。10は口縁端部、鍔の部分の端部を面取りして平坦な面に仕上げている。12～13期の様相である。

SB 9

1は須恵器杯Aで、残存が少なく口径の計測にやや不安はあるが口径16.8cmを測る大形である。底部の切離し方法は不明。美濃須衛窯産の須恵器と思われる。3期の土器と考えられる。

SB10　　図版79

1～4は土師器杯Aである。黒色土器A椀は椀（6）と小椀（5）の2法量がある。灰釉陶器（7～12）は虎溪山1号窯式。13は口縁部が厚手で断面三角形状となる土師器の甕、14は羽釜Bである。11期の様相である。

SB11　　図版79

図示できた遺物は7点である。土師器杯AII（1・2）は器高2.8～3cmを計る。灰釉陶器（4～6）は丸石2号窯式に属す。7の羽釜Aは鍔の部分が長く張り出す。土師器杯Aの形態から12～13期の土器と考えられる。

SB12　　図版79

須恵器杯Aの底部切り離し技法に、ヘラ切りと糸切りが混在する4期の土器群である。1は底部に回転糸切り痕が残る。7・8は内面にもハケ目を施す土師器甕Bで、8は体部上半に横方向のハケ目を施し、底部周辺を手持ちヘラ削りする。

SB13　　図版80

土師器杯Aは器高3cmの1と、2cmの2がある。4・5の黒色土器A椀は内面上半は横方向に、下半は縦方向に磨くが磨きは粗い。灰釉陶器は図示した3点(6～8)とも丸石2号窯式である。9は須恵器杯Aで

底部全面を回転ヘラ削りする。古い時期の遺物の混入である。14期の土器様相である。

SB14　　図版80

土師器杯Ａは、杯ＡII（2・3）と杯ＡIII（1）がある。７は黒色土器Ｂの椀で、内面に漆が付着している。図示した灰釉陶器（8～11）はすべて丸石２号窯式である。12は緑釉陶器の椀で口径12.5cm・器高4.6cmを測る。灰色の硬質の胎土で、体部外面下半を回転ヘラ削りする。ヘラ磨きは施されず内面にはロクロ目が観察できる。釉は濃淡まだらの光沢のない釉が全面に施されるが、外面はほとんど剝落している。トチンの目跡が底部内外面に３点ずつ残る。土器様相は13期である。

SB15　　図版80

１・２は須恵器杯Ａで底部回転ヘラ切り、１は美濃須衛窯産の須恵器である。３は土師器甕Ａである。２期の土器様相を示す。

SB16　　図版80

須恵器杯Ａ（2・3）は底部回転ヘラ切り未調整である。４の須恵器杯蓋Ｂは美濃須衛窯産の須恵器である。７は瓶の口縁部であろう、これも美濃須衛窯産の可能性がある。２期の土器様相である。

SB18　　図版80

５は盤ＢＩと思われる。７～９の灰釉陶器は、いずれも底面に回転糸切り痕を残し、丸石２号窯式である。13期の様相である。

SB19

土器は小片で図示できない。５期の様相である。

SB20　　図版81

１は土師器杯Ｃである。須恵器杯Ａ（2～4）はいずれも回転糸切り未調整である。９は土師器小型甕Ｃ、10は甕Ｃで、頸部直下から底面まで手持ちヘラ削りで薄く仕上げている。11は土師器小型甕Ｄ、12は須恵器横瓶である。５期の土器様相である。

SB23　　図版81

１は土師器杯ＡIIで口径9.6cm、器高2.8cmを測る。２も法量は１と同じであるが、内面を「十」字の方向にヘラ磨きし黒色処理を施している。類例は少ない。灰釉陶器（4・5）は丸石２号窯式である。６は足釜の脚部である。内側を凹めた断面形でやや開き気味で、脚の先端には接地面を作る。13期の土器様相である。

SB24　　図版81

須恵器が食器のほとんどを占める４期の様相である。１は杯Ａで底部回転糸切りであるが、杯Ａにはこのほかに回転ヘラ切りのものもある。土師器甕Ｂ（3・4）は口縁部が強く短く外反する４期の特徴を示している。

SB25　　図版81

須恵器杯Ａでは底部回転ヘラ切り（1）、回転糸切り（3・4）、切離しは不明だが底部周辺を手持ちヘラ削りするもの（2）の三者がある。３は黒色土器Ａ杯ＡIIで底部回転糸切りである。煮炊具は土師器甕Ｂ（11）と小型甕Ｂ（10）の２点が図示できたが、いずれも内外両面にハケ目を施している。12は須恵器甕Ｅ、軟質の甘い焼き上りである。４期の土器様相である。

SB26　　図版82

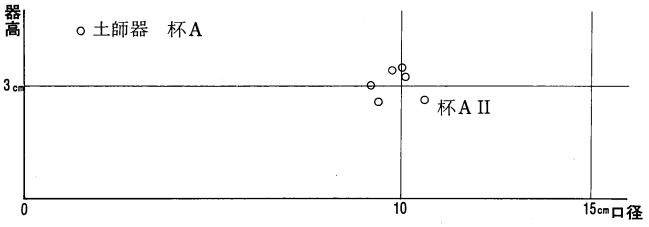
土師器杯Ａは１の杯ＡIIIが図示できただけであるが、破片で小型の杯ＡIIもある。灰釉陶器は段皿（3・4）と椀（5）があり丸石２号窯式である。13期の土器様相と判断した。

SB27　　図版81

土師器杯AII(1～3)は小型化して器高2cmを切り、口径も9cm台で皿といえるような法量である。皿Aは小型のII(4)と大型のI(5)の二者がある。4は口縁部を面取りし、5も口縁端部の面取りを意識したような形態に仕上げている。灰釉陶器は9が断面三角形の高台をもつ大原10号窯段階、10・11が丸石2号窯式である。14～15期の土器様相である。

SB28　　図版82、第124図

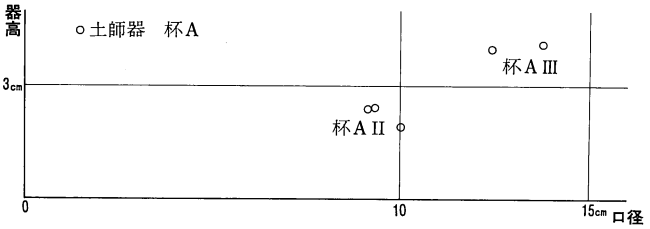
土師器杯Aは口径9.2～10.6cm、器高3.5～2.7cmと口径の割に深めの印象を受ける。灰釉陶器は虎溪山1号窯式(9)と丸石2号窯式(8)の両者がある。12・13は羽釜Aで13は鍔の部分に貼り付けのためのヘラによる刻みが残る。須恵器は古い時期の遺物の混入である。14は足釜の脚部であろう。11期の土器様相である。



第124図　SB28出土土器法量分布図

SB31　　図版82、第125図

土師器杯AはII(1～3)とIII(4・5)の2法量が認められる。7・8は皿AIであるが口縁端部内面に沈線をめぐらしている。灰釉陶器12・13は丸石2号窯式。14はロクロ成形の小型甕D。15は土師器の鍋か。16は足釜の脚部と思われる。13期の様相である。



第125図　SB31出土土器法量分布図

SB32　　図版82

須恵器杯Aは底部回転糸切り(1)と回転ヘラ切りの両者がある。3は甕B、4は小型甕Aである。4期の土器様相である。

SB33　　図版83

1～3は須恵器杯Aで底部回転糸切りである。6は内外両面にハケ目調整を施す土師器甕B、8は底部内面の自然釉の範囲から須恵器短頸壺Aと考えられる。7は須恵器鉢Aである。須恵器のうち1と7は酸化焔焼成となっている。4期の土器様相である。

SB34　　図版83

土師器杯Aは杯AII(1～3)と図示してないが杯AIIIがある。灰釉陶器椀(7・8)は丸石2号窯式。13～14期の様相である。

SB35　　図版83

土師器杯Aは口径10.4cm、器高2.8cmを測る。2の盤BIIは体部で湾曲する。灰釉陶器(4・5)は虎溪山1号窯式である。12～13期の土器様相である。

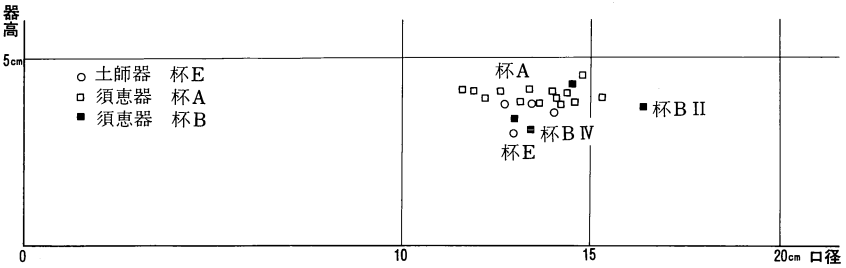
SB36　　図版83

食器は土師器と須恵器で構成されているが、土師器の量は非常に少ない。土師器は杯D(1)で、内面に横方向のヘラ磨きを施し、黒色処理を行なっている。須恵器杯A(2～4)はいずれも底部回転ヘラ切りで口径12cmの2と、口径14.4cm・16cmの3・4の大小がある。7は須恵器鉢Aで灰白色・軟質の焼成である。煮炊具は甕A(10)・甕B(11)・小型甕A(8)・小型甕B(9)で構成されている。12は須恵器の小型の壺で体部にタタキ目を残す。2期の土器様相である。

SB37　　図版84・85、PL61・62、第126図、第6表

3期の土器様相を示す良好な土器群である。食器は土師器と須恵器で構成されているが、主体は須恵器

である。土師器は器高の浅い杯Ｅが主体で、ほかに杯Ｄ（1）と杯Ｃ（9）が１点ずつある。杯Ｄ（1）は口縁部のみの破片であるが内外両面をヘラ磨きし黒色処理を施している。杯Ｅ（2～8）は口径12.5cm～14cmの法量のものが多く８のみ19.5cmを測る。いずれも底部の狭い範囲を手持ちヘラ削りし、２と８では内面を黒色処理している。須恵器の食器類は66個体を数える。杯Ａは底部回転ヘラ切り(10～22)と回転糸切り(23～26)が共存し、その個体数比は回転ヘラ切り26個体に対し回転糸切り12個体と、ヘラ切りが糸切りを上回っている。法量の面では、器高は４cm前後とかわらないが、口径では11.5cm～15.3cmと差が大きく、13cm前後を境に大小に分けて捉えられる可能性もある。杯ＢはⅡ(40～42)とⅣ(35～39)があり、器高の知れるもののなかでは、杯ＢⅢになる体部の深いものはない。蓋では佐波理鋺を模倣したと思われる椀蓋(34)がある。煮炊具は土師器甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｃ・小型甕Ａ・小型甕Ｂ・小型甕Ｃ・小型甕Ｄのように多様な種類がある。それらの甕の底部39片中３片に木葉痕が認められた。貯蔵具も長頸壺Ａ・長頸壺Ｂ・短頸壺Ａ・壺蓋Ａ・甕Ａ・甕Ｅ・横瓶などがある。49の須恵器鉢は直線的に開く形態で片口が付く。須恵器のうち美濃須衛窯産と思われるものは、図示できないものを含めれば食器で30%、貯蔵具で46%、須恵器全体では37%が美濃須衛窯産の須恵器で占められている。



第126図　SB37出土土器法量分布図

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比		実測図No.
土師器	杯C	1	15	17 20%	83 53%	9
	杯D	1	10			1
	杯E	15	520			2～8
	不明		75			
須恵器	杯A	38	2400	66 80%		10～26
	杯BⅡ	3	410			40～42
	杯BⅣ	5	140			35～39
	杯蓋B	17	1280			27～33
	椀蓋	1				34
	高杯	1	30			43
	鉢	1	30			49

煮炊具

土師器	甕　A	10	5360	29 19%	
	甕　B	13	5600		44・48
	甕　C	3	270		45・46
	小型甕C	1	210		
	小型甕D	2	50		47
	不明		2610		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	9	250	43 28%	52
	長頸壺B	1	90		53
	短頸壺A	1	330		54
	壺　蓋A	3	30		50・51
	甕　E	5	1470		56・57
	甕	23	4440		55
	横　瓶	1	30		

第６表　SB37出土土器の構成

SB38　　図版85

SB37同様、須恵器杯Ａに底部回転糸切りと回転ヘラ切りが共存する段階で、図示できないものを含めると、量的には回転ヘラ切りが回転糸切りを上回っている。１は回転ヘラ切り、２は回転糸切りである。１と４は美濃須衛窯産の須恵器である。６の土師器甕Ｂは肩の部分に横方向のハケ目を入れるもので、３～４期に特徴的にみられる。

SB39　　図版85

遺物は少なく、土師器杯ＡⅢが１点図示できただけである。図示出来なかったがこのほかにある土師器杯ＡⅡは器高が低いもので14期のものと考えられる。

SB40　　図版85

須恵器杯Ａ（1～5）はいずれも底部回転糸切りで、底径が６cmから7.4cmと大きく腰の張る、体部の外傾

の弱い形態である。杯蓋Ｂも口縁部がくちばし状に折れ曲がる形態で５期の様相を示している。

SB43　　図版85

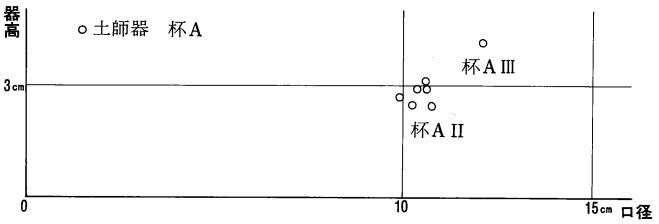
土師器杯ＡはII（1～6）とIII（7）がある。杯ＡIIはさらに法量に差があり2では口径11cm、器高2.5cmであるのに、６は口径９cm、器高1.8cmと小形扁平である。灰釉陶器(12～15)は丸石２号窯式である。14期の土器様相である。

SB44　　図版85

土器は小片で図示できない。土師器杯ＡはIIとIIIがある。椀も同様に大小二法量がある。12期以降の土器様相である。

SB46　　図版86、第127図

食器がほとんどで、煮炊具・貯蔵具は非常に少ない。土師器杯ＡはIII（7）とII（1～6）の二法量がある。９の黒色土器Ａ椀は内面の磨きが粗く「十」字の暗文状になる。10～13の灰釉陶器は虎溪山１号窯式である。土師器杯Ａの形態より13期の土器群と考えられる。



第127図　SB46出土土器法量分布図

SB47　　図版86

５点が図示できたのみである。土師器杯ＡIIは口径10.8、器高2.5cm。３は口縁端部を面取りする土師器皿ＡIIである。４・５の灰釉陶器は丸石２号窯式。13期の土器様相である。

SB48　　図版86

須恵器杯蓋Ｂ（1)、土師器甕Ａ（3)・甕Ｂ（4)・小型甕Ａ（2）が図示できた。２～４期の土器様相である。

SB49　　図版86

食器は須恵器主体である。須恵器杯Ａのうち２は底部回転糸切りである。杯蓋Ｂには口縁端部をくちばし状に仕上げるもの(3)と、直線的に折り曲げるもの(4)の二種がある。６の土師器甕は体部上半をハケ状の工具で横方向に調整している。７の甕Ｂは内外面にハケ目を施す。４期の土器様相である。

SB50　　図版87

３点が図示できた。１は土師器杯ＡIIで口径９cm、器高2.3cmの小型で直線的にのびる体部をもつ。2は強く外反する高台をもつ土師器椀。３の灰釉陶器は丸石２号窯式の椀である。14期の土器群と考えられる。

SB51　　図版87

須恵器杯Ａはいずれも底部回転ヘラ切りである(1・2)。そのうち１は美濃須衛窯産である。３は杯蓋Ａで、器肉の厚い軟質の焼成である。２期に属する。

SB52　　図版87

羽釜Ａ(11)が１点あるのみでほかはすべて食器類である。土師器杯ＡはIII（5)、II（1～4）の二法量があり、杯ＡIIは器高３～2.7cm・口径10.3～11cmの法量である。灰釉陶器は８・10が虎溪山１号窯式、９は丸石２号窯式である。13期の土器様相である。

SB53　　図版87

土師器杯ＡIII（1)・羽釜Ａ、黒色土器Ａ椀（2)、灰釉陶器椀（3)・広口瓶がある。黒色土器Ａ椀の内面の磨きは「十」字状の暗文風に省略されたものである。13期頃の土器様相か。

SB54　　図版87

土師器杯ＡにはII（1）とIII（2）がある。１は口径9.4cm、器高1.4cmと非常に小形である。３は白磁椀IV

類の底部破片である。削り出しが浅く底部の器肉も厚い。内面は全面施釉、外面もかなり低い位置まで施釉が及んでいる。４は羽釜Ａ、体部に縦方向のハケ目調整を行なった後、鍔を貼付する。口縁端部・鍔の端面などに面取りを行なっている。15期の土器様相である。

SB55　　図版87･88、PL62、第７表

食器では須恵器が主体で黒色土器Ａが少量はいる構成である。土師器杯Ａがあるが、後世の遺物の混入であろう。須恵器杯Ａの底部切り離しは、14点中１点が回転ヘラ切りであるが、他は回転糸切り（1～4）で底径の大きな外傾の弱い形態である。回転ヘラ切りのものは重複するSB56からの混入の可能性もある。７は鉢Ｂ、８は鉢Ａであり、7は美濃須衛窯産である。９は高杯の脚部である。13は把手付の平瓶で、肩の部分が強い稜をなす形態となる最大径22cmを測る大形品である。把手は板状に面取りされていたことが接合痕からわかる。15は須恵器甕Ａで頸部には３段の櫛描波状文を施す。体部内面には一部に同心円文が残るが大部分はナデ消されている。美濃須衛窯産の須恵器は図示した７のほかに、須恵器杯蓋Ｂ・甕Ａがあるが量は多くない。煮炊具の主体は土師器甕Ｂ(11)と小型甕Ｄ(10)である。４～５期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比		実測図No.
土師器	杯ＡⅡ	2	140	2 6%		
黒色土器Ａ	杯ＡⅡ	4	150	4 11%		
須恵器	杯Ａ	14	770	28 80%	35 49%	1～4
	杯ＢⅢ	4	55			6
	杯ＢⅣ	3	80			
	杯蓋Ｂ	4	275			5
	鉢Ａ	1	54			8
	鉢Ｂ	1	25			7
	高杯	1	100			9
灰釉陶器	椀	1	9	13%		

煮炊具

土師器	甕　Ａ	8	565	21 30%	
	甕　Ｂ	7	1170		11
	甕　Ｃ	1	13		
	小型甕Ｄ	5	305		10

貯蔵具

須恵器	長頸壺Ａ	2	380	15 21%	14
	甕　Ａ	1	14100		15
	甕	11	4480		
	平　瓶	1	355		12・13

第７表　SB55出土土器の構成

SB56　　図版88

１は須恵器杯Ａで底部回転ヘラ切り、板状圧痕が残る。２・３は須恵器杯蓋Ｂで３は美濃須衛窯産である。４は須恵器鉢Ａ、５は甕Ｅで軟質の焼成である。３期の土器様相である。

SB57　　図版88･89

須恵器杯Ａ（1～3）はすべて底部回転ヘラ切りで、うち２・３は美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕Ａ（9）・甕Ｂ（5）・小型甕Ａ（8）・小型甕Ｂ（6・7）などがある。８には底部に木葉痕が残る。10は須恵器甕Ａで内面は当て具痕の上を板状工具で縦方向にナデを施す。２期の土器様相である。

SB58　　図版89

食器では須恵器が主体となる。１は杯蓋Ｂ。杯Ｂは２がⅣ、３がⅡの法量である。土師器甕Ｂ（5）は口縁部が短く強く外反する形態で、５期の特徴を示している。食器の構成も５期の様相である。

SB59

遺物は少ない。軟質須恵器が１点図示できたのみである。８期の土器である。

SB60　　図版89

食器の主体を須恵器が占める。杯Ａ（1～3）はすべて底部回転糸切りで、2は回転糸切りののち底部外周を手持ちヘラ削りしている。７・８は土師器甕Ｃで口縁部は「く」の字に屈曲して直線的に開く形態である。６は須恵器の貯蔵具であるが器種は不明、美濃須衛窯産の可能性がある。５期の土器様相である。

SB61　　図版89

食器は土師器と須恵器がある。土師器は非ロクロ成形の杯Ｄ（1）と杯Ｅ（2）で、２は内面に黒色処理を施している。須恵器杯Ａ（3）は底部回転ヘラ切りである。５は口縁端部外面に段をもつ。土師器甕類は３

点を図示した。6はヘラ磨き調整の甕F、7はハケ目を施す甕G、8は小型甕Aである。7・8には底部に木葉痕が残る。2期の土器様相である。

SB62　　図版90

1は土師器杯D、2は杯Eでともに内面に黒色処理を施している。3は須恵器杯蓋B、4は土師器高杯である。土師器甕はナデ調整のものが多く、5は小型甕A、6は甕Aである。1期の土器様相である。

SB63　　図版90

食器は土師器・黒色土器Aと灰釉陶器で構成される。土師器杯AはII（1～4）とIII（5）がある。6は土師器小椀、7は黒色土器A小椀である。8の灰釉陶器椀は丸石2号窯式。9は口縁端部を面取りする羽釜Bである。土師器杯Aの形態から14期の土器様相と考える。

SB64　　図版90

遺物は少なく3点が図示できたのみである。1は須恵器杯Aで底部糸切り、底部内面を平坦に広く挽きだすため、底部外面に段状の凹みができる。土師器甕はナデ調整する甕A（2・3）が多い。3の底部には木葉痕が残る。須恵器杯Aの形態、土師器甕の様相から3期の土器群と考える。

SB65　　図版90

食器は須恵器を主体に少量の黒色土器Aを含めて構成される。1は黒色土器A杯AIで底部糸切り未調整。2・3は須恵器杯Aで2は回転ヘラ切り、3は回転糸切りである。杯Bは3ないし4法量が観察できる。8は杯BVIで底部にヘラ記号がある。9は杯BIV、12・13は杯BIII、10・11は杯BIIまたはIIIである。杯蓋Bも杯Bの法量に対応して、Vに対応する4、IVに対応する5・6、II・IIIに対応する7がある。土師器甕は甕B（16）が主体で、小型甕D（14）、小型甕B（15）が図示できた。4期の土器様相である。

SB66　　図版90

1はヘラ磨きを施す土師器杯である。ロクロで調整され底部は回転ヘラ削り、体部はロクロナデによる。明褐色の色調を呈する緻密な胎土色調は土師器杯Cに類似している。2は須恵器杯Aで底部回転糸切り。3は短頸壺Dである。3期の土器様相である。

SB67　　図版91

食器は土師器、黒色土器A、灰釉陶器で構成されている。土師器杯AはII（1・2）とIII（3）がある。3はIIIAIの可能性もある。4・5は黒色土器Aである。5は内面はヘラ磨きのみで黒色処理はなされないが黒色土器Aのなかで考えたい。灰釉陶器（6～10）は丸石2号窯式である。13期の土器様相である。

SB68　　図版91、PL63、第8表

食器は土師器と須恵器で構成されるが、土師器はごく少量に過ぎない。1は土師器杯である。ロクロ調整で明褐色の緻密な胎土である。底部は回転糸切りの後回転ヘラ削りを行ない、さらに渦巻き状の暗文風ヘラ磨きを施している。底面中央には糸切り痕が観察できる。土師器はもう1個体が観察できるがこれも1と類似した杯で、SB66の1に胎土色調が類似している。非ロクロ成形の杯D・杯Eなどはない。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比		実測図No.
土師器	杯	2	145	2 25%		1
須恵器	杯A	3	355	6 75%	8 22%	2・3
	杯BII	1	130			
	杯BIV	1	5			4
	鉢B	1	55			5
	不明		15			

煮炊具

土師器	甕　A	4	2270	22 61%	9
	甕　B	4	2160		10・11
	甕　C	2	250		12
	甕　F	2	95		
	小型甕A	7	1185		7・8
	小型甕B	3	900		6
	不明		500		

貯蔵具

須恵器	長頸壺B	2	840	6 17%	13
	甕	4	940		

第8表　SB68出土土器の構成

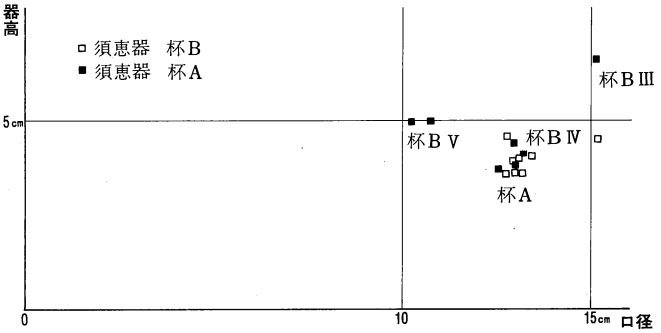
２・３は須恵器杯Ａである。両者ともに底部を回転ヘラ切りで切り離しているが、形状は違う。２は平坦な底部から垂直に近く立ち上がるが、３は比較的小さめの底部から外傾して開く形状である。4は杯ＢⅣで美濃須衛窯産である。５も同じく美濃須衛窯産の鉢Ｂである。煮炊具は土師器甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｃ・小型甕Ａ・小型甕Ｂ・甕Ｆなど多様な器種があるが、ロクロ調整の小型甕Ｄはない。また、土師器甕22個体中５個体（６・８・９）に木葉痕が観察できた。２期の様相である。

SB69　　図版92

土師器杯ＡⅢ（１）と灰釉陶器椀（２）が図示できた。13期前後の様相であろう。

SB71　　図版92、第128図

食器は須恵器を主体に極少量の土師器・黒色土器Ａで構成される土師器は１の杯Ｅと２の杯Ｃ、さらに黒色土器Ａ杯Ａが１点ある。須恵器杯Ａはすべて底部回転糸切りで、底径の大きな体部の外傾の弱い形態である。10・11では底部にヘラ描きがある。杯ＢにはＶ(18)、Ⅳ(19～22)、Ⅲ(23)の各法量がある。土師器甕Ｂ(25・26)は口縁部が短く外反する形態である。24は甕Ａである。貯蔵具は須恵器長頸壺、短頸壺、甕Ａがあるが図示できない。須恵器甕のなかには美濃須衛窯産が１点ある。５期の土器様相である。



第128図　SB71出土土器法量分布図

SB72　　図版92

須恵器杯Ａ（１～６）はいずれも回転糸切りで底径が大きく、底部外周に段の付くもの（５・６）がある。３は底部外周をヘラ削りしている。14は須恵器鉢Ｃ。16は土師器小型甕Ｄで底部に糸切り痕が残る。５期の土器様相である。

SB73　　図版93

須恵器主体の食器構成に、黒色土器Ａ杯ＡⅡが１点入る（１）。須恵器は杯Ａが１点（２）、杯ＢはＶ（４）・Ⅳ（５・６）・Ⅲ（７）の各法量がある。４は美濃須衛窯産である。煮炊具はハケ目調整のものが多く、甕Ｂ(11)、小型甕Ｂ（８～10）がある。11は口縁部が破損した後再調整して使用している。５期の土器様相である。

SB74　　図版93

１・２は土師器杯Ｃで底部回転糸切りの後、底部外周を手持ちヘラ削りする。器表の荒れがはげしく磨きなどの調整は観察できない。１は杯内面の見込の部分に沈線を巡らし、底部には「×」のヘラ記号がある。また、内面には漆が付着している。須恵器杯Ａは体部回転糸切りのもののみ図示したが、回転ヘラ切りのものも１点認められた。３は糸切りの後底面を手持ちヘラ削りしている。杯Ｂでは８の杯ＢⅣが美濃須衛窯産である。15は高杯の脚部。煮炊具では16が土師器甕Ｃ、17・18が小型甕Ｂ、19～21が小型甕Ｄである。貯蔵具は22の須恵器短頸壺Ｄを図示した。４期の土器様相である。

SB75　　図版94

食器は土師器、黒色土器Ａ・Ｂ、灰釉陶器で構成されている。土師器杯ＡはⅡ（１～３）とⅢ（４～６）の二法量がある。７は盤ＢⅠ。11～20は灰釉陶器で19を除いて残りすべての底部には糸切り痕が観察できる。丸石２号窯式に当たる。21は土師器小型甕Ｄで底部に糸切り痕が残る。煮炊具にはこの他に羽釜があるが体部をタタキ調整している。22は須恵器鉢Ｃ、８期以前の古い時期の遺物の混入であろう。12～13期の様相である。

SB76

遺物少なく図示できない。土師器杯AはIIとIIIの二法量に分化しており、12期以降の様相である。

SB77　　図版94

1の須恵器杯Aは底部回転糸切り、4の土師器小型甕Dは静止糸切りである。4期の土器様相である。

SB78　　図版94

1の土師器杯AIIは口径10.5cm、器高2cmを測る。2は盤BI。3は黒色土器A椀である。4は緑釉陶器小椀で軟質の白い胎土で内外面ともに磨きはなく、釉は濃緑色で濃淡のムラがところどころにある。5は幅広の三角高台を付す灰釉陶器椀で、底部には爪状圧痕が残り、西坂1号窯式に当たる。14期の土器様相である。

SB79　　図版94、PL63、第9表

須恵器杯Aは回転ヘラ切り(1)、3は美濃須衛窯産の瑳である。土師器甕はA・B合せて10個体識別できた。そのうち底部破片は4個体分あり、その中で木葉痕が観察できるものは2個体であった。2期の土器様相である。

SB80　　図版94・95、第10表

1は土師器杯C。3は黒色土器A杯AIIである。須恵器杯Aは14個体識別できたがそのうち3個体が回転ヘラ切り、残りは糸切りであった。図示した4～7はすべて静止糸切りである。底部内面を広く挽く形状をとっている。13は小型甕Dでロクロ調整で底部回転糸切りである。貯蔵具の量は多い。特に須恵器甕Aは11個体が識別できた。17は須恵器甕Eであるが高台の付く形態で美濃須衛窯産である。このほかに美濃須衛窯産は杯蓋Bが1点がある。4期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比		実測図No.
土師器	杯DorE	2	30	3 30%	10 42%	
	杯AII	1	5			
須恵器	杯A	2	225	6 60%		1
	杯BIV	2	5			
	杯蓋B	2	55			
灰釉陶器	皿	1	15	1 10%		

煮炊具

土師器	甕　A	7	1300	10 42%		2
	甕　B	3	335			
	不明		325			

貯蔵具

須恵器	壺	2	225	4 16%		
	甕	1	50			
	瑳	1	905			3

第9表　SB79出土土器の構成

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比		実測図No.
土師器	杯C	1	15	4 13%	32 44%	1
	杯AII	2	15			
	高杯	1	95			2
黒色土器A	杯AII	1	15	1 3%		3
須恵器	杯A	14	875	27 84%		4～7
	杯BIII	2	400			12
	杯BIV	2	75			10・11
	杯蓋B	9	345			8・9

煮炊具

土師器	甕　A	5	550	18 25%		
	甕　B	8	1300			
	甕　C	1	20			
	小型甕D	4	870			13
	不明		460			

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	3	170	22 31%		14
	壺	5	95			
	甕　E	2	685			16・17
	甕	11	1395			
	横瓶	1	520			15

第10表　SB80出土土器の構成

SB82　　図版95

食器は少なく土師器杯Dが1点、須恵器杯Aが1点あるに過ぎない。1は内外面を磨く小型の甕。2はナデ調整する甕A、3はロクロを用いて調整する長胴の甕Dである。2期の様相である。

SB84　　図版95・96

土師器杯Aは1～3の杯AIIと杯AIII(4)の二法量がある。5～7は黒色土器Aの椀と小椀である。灰釉陶器のうち8～11はいわゆる椀Aのタイプで、11・12が虎溪山1号窯式、他は丸石2号窯式に属する。煮炊具は小型甕D(14)、羽釜A(15・16)、甑D(17)がある。羽釜Aは大小の二者があり、小型の15は体部をタタキ調整している。12～13期の土器様相である。

SB86　　図版96